立命館大学大学院文学研究科

博士論文

中日古代墳丘墓の比較研究

劉　　振　東

目　　次

はじめに・・1

第Ⅰ章　中国古代墳丘墓の起源と発展－東周時代－　・・・・・・・・5

第１節　中国古代墳丘墓の起源－春秋時代－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

1　黄河中・下流域地区の伝統的墓制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
（1）新石器時代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
（2）夏・商・西周の時代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
2　周辺地区の地上標識のある墓葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
（1）新石器時代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
（2）夏・商・周時代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
3　墳丘墓の出現・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
（1）墳丘墓出現時期に関する研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
（2）墓上建築の出現と発展　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
（3）墳丘墓出現の代表的研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
（4）前期墳丘墓とその特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
4　墳丘墓出現の要因とその意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第２節　中国古代墳丘墓の発展－戦国時代－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

1　各諸侯国における墳丘墓の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
2　戦国時代の墳丘墓の主要な特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
（1）地上部分　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
（2）地下部分　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
3　墓葬の等級制度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
（1）棺槨制度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
（2）用鼎制度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
4　新しい墓葬形態の出現・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

（1）洞室墓〔横穴式墓室〕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
（2）中空塼墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

第３節　西周・東周の墓制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

第Ⅱ章　中国古代墳丘墓の繁栄－秦漢時代－ ・・・・・・・・・・・・・・35

第１節　秦代の墓葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

1　秦始皇帝陵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
（1）始皇帝陵の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
（2）始皇帝陵の特徴 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
2　秦代の中型・小型墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

第２節　漢代の墓葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

1　漢代の皇帝陵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
（1）前漢皇帝陵 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
（2）後漢皇帝陵 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
2　漢代の王墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
（1）前漢王墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
（2）後漢王墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
3　漢代の諸侯墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
（1）前漢の諸侯墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
（2）後漢の諸侯墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
4　漢代二千石官吏墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
（1）二千石官吏墓の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
（2）二千石官吏墓の特徴 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
5　漢代の中・小型墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
（1）西安地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
（2）洛陽地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
（3）長沙地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
（4）広州地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
（5）その他の地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
6　漢代の壁画墓、画像石墓、画像塼墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

（1）壁画墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
（2）画像石墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
（3）画像塼墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

第３節　秦漢墓制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

第Ⅲ章　中国古代墳丘墓の衰退－魏晋時期－ ・・・・・・・・・・・・・・89

第１節　曹魏の墓葬 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89

1　墓葬の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
2　葬制総論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
（1）地面施設 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
（2）墓葬形態 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
（3）副葬品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
（4）小　結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94

第２節　西晋墓葬 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97

1　墓葬概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
（1）皇帝陵 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
（2）そのほかの墓葬 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
2　葬制総論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
（1）地面施設 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
（2）墓葬形態 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
（3）副葬品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
（4）小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104

第３節　魏晋墓制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106

第Ⅳ章　中国古代墳丘墓の復興－東晋十六国・南北朝時代－ ・・・ 113

第１節　十六国・北朝墳丘墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113

1　十六国墓葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
（1）墓葬概況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
（2）葬制概論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
2　北朝の北魏墓葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
（1）墓葬概況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
（2）葬制総論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
3　北朝の東魏北斉墓葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
（1）墓葬概況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
（2）葬制総論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
4　北朝の西魏北周墓葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133
（1）墓葬概況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133
（2）葬制総論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135

第2節　東晋・南朝墳丘墓　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138

1　東晋墓葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
（1）墓葬概況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
（2）葬制総論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144
2　南朝墓葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
（1）墓葬概況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
（2）葬制総論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・152

第3節　南北朝墓制　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・156

第Ⅴ章　中日古代墳丘墓の比較研究　・・・・・・・・・・・・・・169

第1節　東周～秦漢時代と弥生時代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
1　弥生墳丘墓の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
（1）墳丘墓の源流　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
（2）早期の墳丘墓の概況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・170
（3）晩期の墳丘墓の概況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171
2　中日両国の墳丘墓の比較研究の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・173
3　中日両国の墳丘墓の比較分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・175
（1）地上部分－墳丘を中心に－　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・175
（2）地下部分－副葬品と棺槨を中心に－　・・・・・・・・・・・・・・・・176

（3）墓葬の建造手順 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176
（4）小　結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176
4　小　結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177

第2節　魏晋・南北朝時代と古墳時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 179

1　日本の古墳の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 180
（1）前期古墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181
（2）中期古墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 182
（3）後期古墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
2　中日両国の墓制の比較研究の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 184
3　中日両国の墓制の対比分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 186

第3節　小　結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 188

終　章 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193

1　中国古代の墓葬と研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193
2　中国古代の墓制および墓葬等級制度の変遷・・・・・・・・・・・・・・ 194
3　中国古代墓葬の棺槨形態と合葬習俗 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 195
4　中国古代人の冥界観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 195
（1）　中国の古代人による冥界観の最初の認識・・・・・・・・・・・・・ 196
（2）　中国古代人の冥界観の論綱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197

はじめに

人類の祖先が残した足跡は、大きく遺跡と墓とに分けることができる。前者は人々の生産や生活などの現実世界に関連したものであり、後者は人の死に関する世界観の問題で、通常この二者は別のものであるけれども、時としてこの二者は重なり合っていることがある。例えば中国新石器時代の房屋葬と日本縄文時代の廃屋葬は、使用中か或いは廃棄した建物内を墓に利用したものである。また、中国の商・周時代以来の墓上建築、つまり墓室の上または墓室の脇に祭祀に供するための享堂や寝殿を建てるのもその一例である。このように墓葬はそれぞれの時代に普遍的に存在する歴史的産物で、多くは地下に埋蔵されているため、考古学上の発掘調査と研究対象として大きな意義を持っている。

墳丘墓は、文字どおり墳丘をもつ墓葬のことを指し、中国学会では封土墓とか、塚墓と呼んでいる。日本では弥生時代に墳丘をもつ墓を墳丘墓と呼び、古墳時代の墳丘墓を古墳と呼んでいる。

中国で現在分かっている最も早い時期の墓葬は旧石器時代に遡り、新石器時代を経て夏・商・西周時代に至るまで、中原地区の墓葬には墳丘はなかった。墓坑を埋め戻した時にわずかながらの残土の盛り上がりがあったとしても、そのままの状態で留まることはなかったのである。墓葬上に版築による高大な墳丘を築くようになるのは、春秋戦国の交あたりから始まったと一般的に考えられている。そこで本論では、東周からはじめて秦・漢、魏・晋、十六国、南北朝に至る、長期間にわたって墳丘墓の発生、発展、変遷の状況を歴史的に検討するつもりである。

中国における古代墓葬の研究は、墓葬の考古学的表面調査と発掘調査から始まった。新中国成立以後、大規模に考古学的調査が展開され、たくさんの各時代にまたがる墓葬が発見、発掘された。その墓葬の資料を基に、基礎的な時期区分、編年研究が着手された。中でも、かの有名な『長沙発掘報告』（科学出版社　1957 年）や『洛陽焼溝漢墓』（科学出版社　1959 年）、『広州漢墓』（文物出版社　1981 年）などの発掘調査報告書では、それぞれに長沙地区、洛陽地区、広州地区における中小型漢墓の資料を整理、研究し、つぎの総合研究に向けた基礎を打ち立てたのである。中国社会科学院考古研究所編著『新中国的考古発現和研究』（文物出版社　1984 年）〔日本語版『新中国の考古学』平凡社　1988 年〕は、はじめて中国国内の各時代の墓葬を総合的に研究した本である。それ以降、特定の研究や時代ごとの研究は絶え間なく行われている。特定の研究としては、東周から明・清までの皇帝陵寝制度を深く探求した楊寛の『中国古代陵寝制度史研究』（上海古籍出版社　1985 年：日本語版『中国皇帝陵の起源と変遷』学生社　1981 年）をはじめとして、信立祥の『漢代画像石綜合研究』（文物出版社　2000 年：日本語版『中国漢代画像石の研究』同成社　1996 年）、黄佩賢の『漢代墓室壁画研究』（文物出版社　2008 年）などがある。時代ごとの研究における専門

書には、李玉潔の『先秦喪葬制度研究』（中州古籍出版社　1991 年）、印群の『黄河中下游地区的東周墓葬制度』（社会科学文献出版社　2001 年）、黄暁芬の『漢墓的考古学研究』（岳麓書社　2003 年：日本語版『中国古代葬制の伝統と変革』勉誠社　2000 年）、韓国河の『秦漢魏晋喪葬制度研究』（陝西人民出版社　1999 年）、李蔚然の『南京六朝墓葬的発現与研究』（四川大学出版社　1998 年）、韋正の『六朝墓葬的考古学研究』（北京大学出版社　2011 年）などがある。2003 年からは中国社会科学院考古学研究所編集による続巻『中国考古学』（新石器時代、夏商、両周、秦漢の４巻が刊行済み）が順次出版され、各時代の墓葬について総合的に論じている。その他に出版時期が異なるが、各大学テキストに各時代の墓葬の総論がある。また、研究者による墓葬に関する研究論文も少なくない。

中国古代墓葬の研究に関しては多大な成果を挙げてはいるものの、そのほとんどは時代を限った研究と特定のテーマについての研究である。その中でも魏・晋と十六国時期および北朝の墓制研究がやや薄弱である。さらに、歴史上区切られた長い時期の墓葬制度、特に墓葬の等級制度の変遷を研究したものが少なく、また各時代の墓葬の地上施設に対する関心も欠如している。このような研究の現状に鑑みて、中国東周から南北朝までの長期間にわたって墓葬制度や墓葬等級制度および中国古代の冥界観などについて、墓葬全体つまり墓葬の地上施設と地下施設の両方の部分から、総合的に広く研究するつもりである。そこから中国古代の墓葬制度の発展と変遷の軌跡をたどることができればと願っている。最後に、中日両国の墳丘墓制についての比較研究も進めたいと思う。

中国の近隣国である日本では、旧石器時代の墓はまだ見つかっていない。縄文時代の墓には墳丘のないのが普通である。縄文時代晩期末にある地域で盛土らしきものが見つかっていると言うが、それは封土をもつ墳丘墓とは言えない。日本の墳丘墓は縄文時代の後の弥生時代に始まり、古墳時代に盛行することが分かっている。よって、弥生時代の墳丘墓の出現から古墳時代にかけて、日本の墳丘墓の発生と発展の概要を簡単に触れておく。

日本の弥生時代は紀元前３世紀から紀元後３世紀に考えられてきており、おおむね中国の戦国時代、秦・漢時代に相当する。また日本の古墳時代（３～６世紀）は、中国の魏・晋、十六国、南北朝時代にほぼ相当しており、この二時期の中日墳丘墓（古墳）を比較研究することは可能である。

中国の領土は広く、古代各地の社会発展は不均衡であった。本論では主に中原地域とその周辺を中心に、各時期の典型的な大・中型墓を取り上げ、各時期の墓葬制度、特に墓葬等級制度について分析し、論述する。

日本の弥生時代の墳丘墓と古墳時代の古墳は、主に畿内の典型的な資料を中心にまとめる。

本論は中日古代墳丘墓の比較研究を目指すものではあるが、研究の重心を中国に置きたい。というのは、中国古代墳丘墓の発生、発展の変遷状況を順序立ててはっきりさせることが、中日墳丘墓の比較研究にとってよい基礎を築けるからである。

本論の中国古代墓葬の研究は、墓葬全体に着目してはいるものの、墳丘などの墓上施設と墓葬形態、葬具などを主に考察の対象とし、種類の多い副葬品については大分類で括って概述し、中国古代の墓葬制度と冥界観の研究に寄与しようとするものである。

日本の墳丘墓（古墳）についても、同様に墓上施設と墓葬形態、葬具を主な対象として概要をまとめている。

要するに、本論の目的は中日古代墳丘墓の比較研究を通して、両国の古代墳丘墓の同異と関連を明らかにすることにある。

本論〔中日古代墳丘墓の比較研究〕の理解を深めるために、中国古代墓葬で一般的に使われている、いくつかの常用語を以下に挙げておく。

墳　丘　封土または墓塚という。

墳丘墓　封土墓または塚墓という。

墓　制　墓葬制度、埋葬制度、喪葬制度、喪葬礼制を指す。

陵園、墓園　墳丘の周囲を囲った垣や壁（版築塀、石壁）や周濠で囲まれた空間。普通帝王陵では陵園、それ以外は墓園という。

陵寝建築　墳丘上や墳丘脇に建てられたいろんな祭礼建物の総称。

陪葬坑　墓域内や墓域外に設けられた各種器物埋葬坑で、叢葬坑という。

墓　坑　墓壙や墓穴とも言い、よくあるのは竪穴土坑で、竪穴石坑（岩坑）もある。

墓　道　墓壙につながり、墓室にはいる通路である。主に傾斜式と〔井戸状〕竪穴式の二種類がある。ある傾斜墓道には階段がつく。他に床が平らなものもある。

甬　道　墓道と墓室、墓室と墓室をつなぐ通路。

墓　室　棺と副葬品を置く空間で、木槨室や塼室、石室などがある。

前室、中室、後室　墓室が２、３室ある場合、入口から順に呼ぶ部屋の名。

側室、耳室　墓室の側面に付設した小さな墓室を側室といい、墓道や甬道の両側に付設した小さな墓室を耳室という。

回　廊　墓室の三面を囲む廊下状の空間。

槨　墓坑内につくられた棺を置く空間で、木槨や塼槨（塼室）、石槨（石室）などがある。木槨は原木や角材や板材を組み合わせて造り、底板と側板、蓋板に分かれる。塼室と石室は塼槨と石槨と見なすことができる。

棺　遺体を納める葬具で、その多くは板を釘付けしてつくるが、一本の丸太をくり貫いてつくった独木舟棺もある。

棺と槨の区別は、棺が先につくられ、遺体を納めて墓内に運び込まれたもので、槨は墓内で各種材料を組み合わせて造られたものである。

第Ⅰ章　中国古代墳丘墓の起源と発展－東周時代－

東周は、西周平王が鎬京から洛邑に遷都した紀元前 770 年から始まり、春秋（B.C.770 ～ B.C.476）と戦国（B.C.475 ～ B.C.221）の二時期に分けられる。

第１節　中国古代墳丘墓の起源１－春秋時代

１　黄河中・下流域地区の伝統的墓制

人類を他の動物と区別する重要な要素の一つに、遺体を処理する行為がある。なにがしかの儀式を行って遺体を地下に埋めることは、人類が遺体を処理する最も一般的な方法である。現在、旧石器時代後期の北京周口店山頂洞遺跡（地質年代は更新世末、約３万年前）には専用の墓葬区の存在が分かっているが、さらに古い時代の状況ははっきりしていない。その当時の人々は、すでに遺体とその周りに赤色顔料（赤鉄鉱粉）を使用していた[1]。このようにして遺体を保護する方法は、後世にも引き継がれ、日本の弥生時代と古墳時代の墓葬にもよく見られるところである。

（１）新石器時代

新石器時代の墓葬は非常に多く発見されている。その形式は、陝西省、河南省、山西省、山東省、河北省などの新石器時代の遺跡に必ずといってよいほどに、ほとんど例外なく長方形竪穴土坑である。新石器時代前期（先裴李崗時代、約 8500 年前）の墓葬には棺槨の使用は認められないが、新石器時代中期（裴李崗時代、約 8000 年～ 7000 年前）には陶器（甕棺）や石材（石槨または石棺）を用いた葬具が出現していた。甕棺を使う地域は広い範囲におよんでおり、それは主に未成年者の埋葬に用いられた。石槨（または石棺）は、主に東北地方の興隆窪文化、紅山文化、小河沿文化などで盛行し、山東地区の北辛文化、龍山文化でも見つかっている。葬具に陶器と石材の利用はかなり早い段階から出現するが、それらは社会が複雑化する発展過程で生み出される、階層分化の問題を全面的に反映させることができない。そのため、新石器時代およびそれ以後の葬具は、遅くに出現した木材利用の棺槨が主流となり、発展していったのである。

考古学調査によると、木材を使った葬具の出現は、新石器時代後期（仰韶時代、約 7000 ～ 5000 年前）の中葉（約 6000 年前）の山東大汶口文化前期の墓葬にあり、江南松沢文化の墓葬（浙江省嘉興市南河浜遺跡）からは丸木舟形木棺が出土している。新石器時代後期後葉になると、木棺だけでなく、木槨も出現し、江南良渚文化の浙江省桐郷県普安橋遺跡や余杭県瑶山墓地などから多く発見されている。この時期の木材使用の葬具は原始的で木槨の多くは丸太を「井」字形または長方形

に積み上げただけである。木棺は長方形の箱形につくられていたと思われるが、時間が経って保存状態が悪く、その立体形状を知るすべは失われている。

銅石併用時代（龍山時代、約 5000 ～ 4000 年前）に入ると、木質の残った葬具の出土例が増加し、かつ棺槨の整った例も一層数を増し、山東省鄒県野店遺跡からは大汶口文化後期の大型棺槨墓（一槨一棺）が検出されている（図１－１）。龍山時代後期（約 4600 ～ 4000 年前）には二槨一棺の出土例があり（図１－２）、しかも同一墓地内における墓葬の規模や木材使用の葬具の格差が、二槨一棺、一槨一棺、単棺、無棺といった四段階の等級差（山東省泗水県尹家城龍山文化墓地）のように顕著になり、秩序化が見られる。これにより、墓葬の木棺木槨の研究を通して、龍山時代に社会秩序を維持する礼制が整っており、その後の夏・商・周三代の礼制へ発展する基礎ができあがっていた、とする研究者もいる[2]。

早い段階の木製葬具としての棺槨は、棺の形状が長方形の箱形だったと推定でき、槨の平面形が「井」字形や「Ⅱ」字形などであった。

その時期の墓葬内に赤色顔料（朱砂）を使用した例としては、山西省襄汾県陶寺墓葬（龍山時代後期）が代表的である[3]。

人類が遺体を地下に埋めることを意識した時、すなわちそれが墓葬の出現になり、人は死後の世界を考えはじめたのである。人々は生前の住まいと同じように、死後の住まいをおそらく墓葬として建てたのであろう。死後の住まいである墓葬は、単に遺体を埋めるだけというのではなくて、死者の霊魂の拠り所となったはずである。なぜなら当時の人たちは、霊魂不滅の観念をもっていたはずであるから。墓葬は、最初はただ単なる小さな土坑で、当時の住居である竪穴住居のようなものであった。それが社会の発展に従って、生活状況に変化が生じ、自然石を積み上げた石槨（石棺）が出現した。それに続いて、原木で囲んだ木槨と、丸太を整えて刳り貫いた丸木舟形木棺が出現する。しかし、原木を板にして、長方形の木槨や箱式木棺に組み合わせるには複雑な技術がいるため、その出現はかなり遅れたはずである。

棺槨、特に木製の棺槨の出現は、墓葬の構造を複雑にしただけでなく、埋葬の過程でさえ遺体（あるいは編み物でくるんだ）を単に浅い小土坑に埋めるだけのように、早くつくることはできない。墓坑が拡大し、深くなり、木製葬具が使われるようになるにつれ、人の死後、墓坑を掘削し、木槨を構築し、木棺を制作するなど、長い時間とより多くの人力が必要となった。そればかりか、本来直接遺体を地下に埋めるやり方も、まず遺体を納棺し、墓地まで棺を運び、墓坑に収納するように改まったのである。このように人の死から納棺を経て、墓地に至り、埋葬するまでの手順が増大し、複雑になったことによって、必然的にそれに相応しい儀式が生み出されてきた。現在、その儀式には納棺、棺の搬送、埋葬などの際に行われた儀式が考えられる。木製葬具は、社会の複雑化が進むに伴って、社会格差の顕在化に応じて登場し、発展し、最後には社会的階層の喪葬等級秩序を規範する制度、すなわち喪葬礼制を創り出した。龍山時代、特にその後期には木製葬具である棺槨が用いられ、まさに喪葬等級秩序の制度が形成されつつあった。そして夏・商・周の文明社会を

迎えるのである。

木製葬具が出現し、しだいに複雑化していった過程は、社会の発展過程と相関関係にある（喪葬礼制を社会的階層に秩序づけ、その実現を政治上に発揮させた）だけでなく、人々は死後の世界を重視する冥界観を反映させた。人々（社会上層）は木製葬具を使ってよりきれいな地下の住居を造営し、非常にたくさんの副葬品を納めて、人々が抱く霊的観念を弱めるどころか、一層強固なものに表現した。

（２）夏・商・西周の時代

夏・商・西周の時代の墓葬は、龍山時代の墓葬を発展させ、変化させてきたが、最も基本的な墓葬の形態は依然として竪穴土坑（木棺、木槨）墓である。文明社会を迎えると、社会的階層の分化が進み、国家政体を維持するための階層秩序がつくられ、上に貴族を置き、下を庶民とした。それは墓葬の面にも表れ、一つは墓葬の規模の格差拡大、二つは龍山時代の墓葬の等級秩序を発展、かつ初歩的な喪葬礼制の形成である。

夏に夏礼あり。夏の都（現在の河南省偃師市二里頭村一帯）付近で発見された墓葬の序列はまだ完全ではなく、夏代の喪葬礼制の詳細についてはまだ明らかではない。

商に商礼あり。晩商〔後半期の商〕の都城である殷墟（現在の河南省安陽市小屯村一帯）および各地に分布する方国〔支配のおよんだ地方〕からたくさんの墓葬が発掘され、上は商王から下は庶民まで、いくつかの階級に分けることができる。この時期の墓葬には墓道が出現し、その墓道の数の多少によって（墓坑の大小、葬具の規模と数量、副葬品の多さおよび殉葬・犠牲者の状況は一致する）墓葬の格差が決まっていた。４本の墓道がある「亞」字形墓（特大型墓、特殊な巨大槨室）（図１－３）、２本墓道の「中」字形墓（大型墓、ほとんど二槨一棺）（図１－５）、１本墓道の「甲」字形墓（中型墓、ほとんど二槨一棺）（図１－５）、墓道無しの長方形墓（主に小型墓、ほとんど単棺、無葬具のものもある。少数の中型墓、一槨一棺）（図１－６）に分かれ、そのうちの４本墓道の「亞」字形墓が商王の墓になり、無葬具の長方形墓が下層民の墓葬になるだろうから、その他の類型墓の被葬者の階層もだいたい推測される。

この前の墓葬と比べて、上述した墓道以外に、新たに出現したいくつかの施設や特徴がある。それは、一部の特大型墓と大型墓の墓坑の平面形が正方形か、正方形に近い形をしていること。腰坑〔被葬者の腰の下辺りの墓坑下に小さな土坑を掘り窪め、人または犬を殉葬した穴〕が盛んに掘られ、さらに壁龕が出現したこと。墓内に人の殉葬、人の犠牲、車馬の副葬が盛行したこと。墓の近くの墓外にも車馬を副葬した車馬坑がつくられたこと。生け贄〔人も含む〕祭祀が盛んに行われたこと、があげられる。

葬具である「井」字形木槨はすでに新石器時代に出現しており、商代の大型墓でも河南省安陽市武官村大墓[4]などに見ることができる。文献には、（『儀礼・士喪礼』に「既井槨」鄭注曰「匠人為槨、刊治其材、以井構于殯門外也」）これを井槨というと記されている。井槨は商代における墓葬

葬具の重要な特徴である。

木棺は長方形を呈しており、一方の端がもう一方よりもやや広く作られている。商墓の中には、山東省滕州市前掌大Ｍ３、Ｍ４のように、木棺の底に赤色顔料（朱砂）を敷くものがある[5]。木棺には普通、黒か、赤の漆を塗り、中には河南省羅山県天湖商墓のように絵付けされたものがある[6]。また、木棺を木炭で包むものが現れる。

周に周礼あり。西周の墓葬は、都城のあった豊、鎬（現在の陝西省西安市斗門鎮一帯）および各地の諸侯国からたくさん発見されている。西周王墓は、今まで何の手懸かりも得られてなかったので、墓葬の序列については不完全である。墓道の数については、北京市瑠璃河Ｍ 1193 燕侯墓（図１－７）[7]以外、４本墓道の墓はまだ見つかっておらず、王墓が４本墓道であるのかどうか、研究者の関心の的になっている。そのほかの２本墓道の「中」字形墓、１本墓道の「甲」字形墓、無墓道の長方形墓は基本的に商墓と同じである。とはいえ、「中」字形墓と「甲」字形墓はどちらも墓制上、等級の大変高い墓になるにもかかわらず、諸侯国君主の河南省浚県辛村にある衛侯墓は２本墓道（図１－８）[8]を、山西省曲沃県北趙村にある晋侯墓の多くが１本墓道（図１－９）[9]を使っているように、王室の重臣や諸侯国君主の多くが採用しており、その厳格性と統一性はなかったのである。そのほか、墓葬の規模についていえば、西周墓と商墓の同類型の規模を比べると、西周墓は比較にならないほど小さくなっている。

棺槨の状況については、西周と商代のものとは明らかに異なっている。槨は一重槨と二重槨があり、商代と同じであるが、槨の構造や平面形態は根本的に変化している。保存状態のよい西周墓葬を見ると、規則正しく加工された角材を積み上げて、平面長方形に槨を造っている。それは槨室の長辺と短辺の角材の両端がきっちりと揃えられており、このような構造はすなわち文献に記された「題湊」という墓葬形態にあたり、東周時代に大変盛行した、ことを考証したことがある[10]。木棺については、西周まではすべて単棺〔一重棺〕であったが、この時期には山西省曲沃県北趙村の晋侯墓などのように二重棺、三重棺が現れる。当然、この時期の棺槨の重ね数は、未だ被葬者の身分格差に厳格な対応をしていないが、少なくとも棺槨の重ね数で等級格差を秩序づける制度が育まれていた、といえる。そうして、東周時期になると喪葬礼制の基本ができあがるのである。要するに、商墓は槨を井槨につくり、西周は題湊に造り、商墓は一重の棺を使い、西周は多重棺を用いはじめた。こうした商・周時代の棺槨制の変化は、最終的に西周・東周の喪葬礼制の重要な中身を創り出したのである。

前代と同様、西周時代の木棺は一つも残っていないが、河南省三門峡市虢国墓地[11]などの木棺の痕跡から見て、その多くは長方形の箱形であったと思われる。棺内に赤色顔料（朱砂）を敷いていた例としては、河南省鹿邑県太清宮長子口墓があげられる[12]。

墓内に腰坑を設置するやり方は、西周時代前期の墓に依然として残っている。この時期に詰め石・詰め炭の墓が出現する。墓内に人を殉葬することは商墓ほどではなくなったが、分解した車馬の副葬が目立つようになった。墓外にも車馬を副葬する風習があり、車馬を副葬する数が被葬者の

身分差と一定の対応関係をもつようになり、それが後の喪葬礼制に組み入れられ、車馬副葬制度の基礎を固めた。

商の人たちは酒を尊んだが故に、墓内に觚や爵などの青銅の酒器を常に副葬していた。周の人たちは食を重んじたが故に、墓内に鼎や簋などの食器の副葬が主になった。合わせて、被葬者の階層を規定する礼器使用の列鼎制度をつくりはじめた。それは周の喪葬礼制を構成する、重要な内容の一つである。新石器時代の墓地は氏族墓地を形つくり、墓葬は一定の区域に集中分布していた。新石器時代後期、特に龍山時代になると、社会の分化が顕著になる。それは墓地の配置にも反映し、一部の大きな墓は場所を選んで造られ、氏族墓地から離れる傾向を示すが、まだ完全に氏族墓地から離脱したものではなかった。夏時代の大型墓の分布状況は不明確であるが、王墓は独立して墓地を造っていたようである。商代の王墓は、安陽市洹水〔洹川〕以北の西北岡に集められ、独立した王墓区を形成した。西周時代、諸侯国の君主は独立した墓区を形成（山西省曲沃県北趙村の晋侯墓）するが、王墓はさらに独立した墓区をもったはずであるから、いったん発見の糸口が見つかると必ずや大きな成果が得られるであろう。

合葬墓は、商・周時代に多く見られるが、墓坑並列合葬形式が一般的である。

墓内の副葬品の種類は豊富で、その数量も多いことから、当時の人たちは死後の別世界を信じていたようで、死後の霊的観念の根深さが窺えるのである。

非常に長かった新石器時代同様、夏・商・西周時代の墓には土を積み上げた墳丘がなかった。そのことは、『周易・系辞下』に「古之葬者、厚衣之以薪、葬之中野、不封不樹」とあるように、文献からも裏付けられる。しかし、後述するように、商代にはすでに墳丘墓が出現していたという研究者もいる。

２　周辺地区の地上標識のある墓葬

（１）新石器時代

A　東北地区の紅山文化の墓葬

燕山の北方、遼寧省の西側丘陵山地には紅山文化期の墳墓が分布している。その墳墓には、墓葬の上に石を積み上げた一種の積石塚があり、石を高く積み上げることによって地上の標識とした。遼寧省牛河梁遺跡を例にとると、たくさんの地点から積石塚が発見されている。牛河梁第二地点には４基の塚（１～４号墳）が、第三地点には単基、第五地点には３基の塚があり、そのほか第十六地点などからも見つかっている。それらの積石塚はすべて一塚多墓〔一つの墳丘にたくさんの墓葬で構成〕につくられており、第二地点１号墳からは26基の墓葬が、２号墳からは４基が、４号墳からは16基が発掘され、第三地点からも10基の墓葬が発掘されている[13]。

積石塚の構造は、普通、外側に一重か二重の石壁を方形もしくは長方形に巡らし、その石壁の中に墓葬を配置し、その墓葬の上に石を積み上げたものである。牛河梁第二地点２号積石塚では、東・西・北の外側三面に石壁が巡らされ、壁内に積まれた石塚の高さは発掘調査時に最高1.2ｍが

残存していた。その大きさは東西 17.5 m、南北 18.7 mで、ほぼ方形を呈していた。塚の中央には、長さ 2.21 m、幅 0.85 mの大型石棺があり、その石棺の上を辺長 3.6 m、高さ約 1.5 mの石を積み重ねてつくった方錐台形の石槨が覆っていた。その石槨の上には土が積まれ、中央を封土に、その周囲を石積みの構造につくられていた（図１－10）[14]。

積石塚には、普通、中心に大きくて深い竪穴土坑の大墓葬があり、その墓坑内に石棺が石板で構築されている。第五地点１号墳の中心大墓（Ｍ１）では、Ｍ１は略円形の塚の中心に置かれている。墓坑は、長さ 3.8 m、幅 3.1 m、深さ 2.25 mの隅丸長方形に岩盤を穿ってつくられていた。墓坑内の石棺は、両側壁を細長い石板を６～７段に平積みにし、その両端の木口は１枚の石板を立てて構築している。その棺内の大きさは長さ 1.9 m、幅 0.55 mである。石棺には蓋はあるが底がなく、蓋は薄い石板が使われていた。棺内には仰身直肢の男性の遺体があり、遺体の横に７点の玉器が置かれていた（図１－11）。墳頂は石で覆い、積石塚につくっていた。中心大墓以外の墓葬は、大きい墓坑もあれば小さいのもあり、そのほとんどが石棺を有していた[15]。

牛河梁遺跡の紅山文化の年代は約 5580 年～ 5000 年前に測定されている。

Ｂ　東南地区良渚文化の墓葬

長江下流の太湖地区に分布する良渚文化の墓葬の形態は、一種の祭壇墓地である。祭壇墓地とは祭壇と墓地が結合したもので、人工的に土を盛り上げたか、自然の突出した丘陵上の高台に建てられた。祭壇墓地は、上海市青浦県福泉山、浙江省余杭県反山、瑶山、匯観山、廬村、海寧県大墳墩、江蘇省昆山趙陵山など、多くのところから見つかっている。つぎに匯観山について説明を加えておく。

匯観山は、余杭市瓶窯鎮外窯村にある、一つの独立した小山である。山頂から一つの祭壇と一組の墓葬が発見された。祭壇は方錐台形に復元でき、東西の両端は階段状をなし、東西 45 m、南北 33 mの長方形を呈す。祭壇の西南部に一組の墓葬があり、４基が発掘調査され、すべてが長方形の竪穴土坑墓であった。そのうちのＭ４は、長さ 4.75 m、幅 2.3 m～ 2.6 m、残深 0.2 mで、葬具は一槨一棺からなり、棺槨の両側板が少し露頭していた。副葬品は陶器７点、玉器 17 点（組）、石鉞 48 点が出土している。年代は良渚文化中期のやや早い段階にあたる。（図１－12）[16]。

良渚文化の年代は約 5300 年～ 4000 年前である。

（２）夏・商・周時代

Ａ　東北地区の積石塚

河北省平泉から夏家店上層文化の墓葬が発掘された。墓葬には竪穴土坑石棺と竪穴石蓋土坑、竪穴土坑の三種類の施設があり、すべて封土をもっていた（図１－13）。一部の封土には積み石の現象が見られ、本来墳丘は積み石で覆われていた可能性が高く、積石塚のような外観を呈していたと思われる。年代は西周時代末から春秋時代初期に考えられる[17]。

Ｂ　東南地区の土墩墓

土墩墓は主に地面に埋葬（石床、石槨、石室をつくったり、墓坑を掘ったりする）し、土を盛り上げたもので、版築をしない一種独特な埋葬方式である。主に長江下流の江南地区の江蘇省南部、安徽省南部、上海、浙江省、江西省東北部、福建省西北部などに分布している。そのほとんどは西周時代に属し、早い段階のもので夏・商の時期に、遅いもので戦国時代前期になる[18]。

次に時期の異なる代表的な土墩墓を紹介するが、そのほかについては表１－１を参照されたい。

江蘇省丹徒県大港烟墩山２号墓　山の斜面の窪地に立地する。規模は直径約 20 m、高さ２m弱である。埋葬施設は石床で、長さ 3.6 m、幅 2.4 mである。副葬品には原始瓷器、幾何学紋陶器、陶器がある。土墩の中には埋葬施設は一つしかない。西周時代前期のものである（図１－14）[19]。

江蘇省丹徒県大港母子墩　丘陵地帯の山上に立地する。規模は直径 30 m、高さ５mである。埋葬施設は墓坑の底に石を並べて、長さ 6.1 m、幅 3.2 mの枠をつくり、その中に草木灰を敷き詰め、その上に筵を敷いている。副葬品には青銅器、幾何学紋陶器、原始瓷器がある。土墩の中に墓葬は一つしかない。時期は西周時代前期から中期になる（図１－15）[20]。

安徽省屯溪市屯溪Ｍ２　山の末端にある。埋葬施設は残長 5.2 m、幅 2.2 mの石床（低い石枠で囲まれている）である。副葬品には青銅器、陶器、幾何学紋陶器、原始瓷器がある。土墩の中に墓葬は一つしかない。時期は西周時代中期である[21]。

江蘇省金壇県鼈墩　東西 15 m、南北９m、高さ２mで、平地につくられている。土？の中に墓葬が２基あり、Ｍ１は長さ２m、幅 0.9 mの範囲に木炭が敷き詰められている。副葬品には陶器、幾何学紋陶器、原始瓷器がある。時代は西周時代中・後期である[22]。

江蘇省宜興県丁蜀南山Ｍ２　山の斜面に立地する。土墩墓の規模は東西径 12 m、南北径 10 m、高さ 3.9 mである。埋葬施設は石室で、甬道と封門、墓室からなる。墓室は長さ 3.9 m、幅 0.92 m～1.04 m、高さ 1.8 mで、幾何学紋陶器が副葬されていた。時代は西周時代後期から春秋時代前期になる（図１－16）[23]。

江蘇省蘇州市真山Ｄ９Ｍ１　山頂に立地する。土墩は版築成形され、規模は東西径 70 m、南北径 32 m、高さ７mである。埋葬施設は竪穴石坑〔岩盤を穿った墓坑〕で、墓坑の規模は東西 13.8 m、南北最大幅８m、深さ 1.8 mを測る。副葬品には玉石器を中心に、原始瓷器、海貝、緑松石貝、漆器がある。墓葬は一つのみで、時代は春秋時代中・後期になり、被葬者は呉王と考えられている（図１－17）[24]。

江蘇省丹徒県北山頂墓　北山の頂上にあり、規模は東西径 32.25 m、南北径 30.75 m、高さ 5.5 mである。埋葬施設は包丁形〔墓室が刃部に、墓道が柄部にあたり、包丁の形をしている〕の竪穴土坑で、墓道と墓室からなる。墓室は長さ 5.8 m、幅 4.5 m、高さ 1.35 m～1.45 mである。副葬品には青銅器、原始瓷器、陶器がある。墓葬は一つのみで、時代は春秋時代後期になる。３人の殉葬があり、被葬者は呉王になろう（図１－18）[25]。

浙江省紹興市印山墓　印山の頂上にある。墳丘は版築形成で、東西に長い長方錐台形を呈す。規模は東西 72 m、南北 36 m、中心部が最高になり 9.8 mを測る。墓葬は、１本の水平墓道をもつ竪穴

石坑木槨墓で、東西 46 m、南北約 14 m、深さ 12.4 mの規模である。木槨は角材でもって、横断面が二等辺三角形の「人」字形に組み合わせて構築されており、甬道、前室、中室、後室からなる。木棺は、長さ 6.05 m、口幅 1.12 mの内外面漆塗りの丸木舟形で、中室に置かれていた。墳丘の周囲には南北に長い東西 265 m、東西 320 mの長方形の堀が巡らされ、四面にそれぞれ渡り道を設けてある。被葬者は紀元前 497 年に亡くなった越王允常と考えられている（図１－ 19、20）。

上述の墓葬および表１－１から見るように、土墩墓のほとんどは丘陵の斜面や山頂につくられ、一部は平地につくられている。その規模には大きさと高さの違いがあるが、それは時代差と被葬者の階層差が関係しているといえる。埋葬施設は、一般的な平地直葬以外に、木炭を敷き詰めたもの、石枠を囲って草木炭を敷き、その上に筵を敷いたもの、石で石床をつくったもの、石床を少々高くして石槨状にしたもの、完全な石室を築いたもの、がある。また、墓坑を土壌でもって築造したり、地山（岩盤）を掘ってつくる方法があり、墓坑の大きさと深さの違いなどがあるが、それらは被葬者の身分階層が反映されたものである。副葬品では、最も普遍的で地域色の濃いものに幾何学紋陶器と原始瓷器がある。そして規格性の高い墓葬には青銅器や玉器、漆器などがあり、殉葬をもつものもある。

このように上述した内容は、地域性の分類、時期差による分類などの諸分類がなく、非常に漠然としたものになってしまった。土墩墓の研究は、大型墓の発展の軌跡や、北方地区の大型墓との関係と中・小型墓とは同じでないため、大型墓と中・小型墓とは分けるべきだという指摘がなされている[26]。そこで、今はその考えに従ってまとめておきたい。

土墩墓の土墩〔封土〕と埋葬施設については、中・小型墓は広い地域と長期間にわたって一定の連続性と安定性を保ってきた。その特徴につぎの諸点があげられる。底径〔または長辺〕が 10 m～ 25 m、高さが２m～４mと土盛りの規模が小さくかつ低く、版築をしないことである。多くの土墩墓は一つの土墩にいくつかの墓葬をもつが、それは逐次付け足されたためである。平地埋葬の多くは墓坑がなく、木炭を敷き詰めたり、石床をつくったりし、小さな竪穴土坑をもつものもあるが、深さは浅く、１m以内のものが多い（遅い段階のもの）。石室の埋葬施設をもつものは、一定の地域に分布しており、特殊な土墩墓に属す。多くの土墩墓に木製の棺槨などは見つかっていない。この類の墓の副葬品は陶器、幾何学紋陶器、原始瓷器が主である。

大型土墩墓は、中・小土墩墓に比べると、規模が大きいというだけでなく、その発展、変遷の軌跡も明らかである。その主な特徴としては、封土は大きく、一般的に底径が 20 m～ 30 m、あるものによっては 60 m～ 70 mに達し、高さが３m～５mで、７m～ 12 mになるものもある。すべて一土墩に一墓葬の一次埋葬である。埋葬施設はつぎのように分けられる。西周時代前期から中期には平地に石床をつくるものが多く、石床の縁を高くするもの（地上石施設Ⅰ型－石床）や、石で墓底の枠だけを囲み、草木灰と筵を敷くもの（地上石施設Ⅱ－石框）や、西周後期には墓底の石枠をやや高く積み、その中の地山面を平らにならしたもの（地上石施設Ⅲ型－石槨）がある。さらにこの時期に土で墓坑をつくるものが現れ、その墓坑の中に槨室を設け（木製葬具が可能）、槨室の底

を墓坑の底より高く地山で台をつくるもの（地上熟土施設－竪穴土壙墓坑Ⅰ型）と、地山に土坑を掘って、槨室を上の盛土と下の地山につくるもの（地上熟土施設－竪穴土壙墓坑Ⅱ型）がある。春秋時代中期頃には地山の墓坑が出現しはじめる（地下地山施設－竪穴土坑、石坑）。そして、春秋時代後期にはすべて竪穴土坑または石坑となり、1本の墓道が設置され、土坑の底は直接地山または岩盤を加工してつくり、草木灰を敷くものもある。春秋時代中期から後期には人を殉葬することが始まり、副葬品は陶器、幾何学紋陶器、原始瓷器以外に青銅器、玉器、漆器などが副葬される。

大型土墩墓の築造行程はつぎのとおりである。

ⅰ：選　地　多くは山の斜面や丘陵、山頂などの高い場所を選択するが、丘陵に近い平地に位置するものもある。

ⅱ：整　地　地面を平らに整地し、埋葬施設を構築する準備をする。

ⅲ：埋葬施設の構築　地上施設と地下施設の分けることができ、地上施設はさらに石施設（墓坑なし）と土壙施設（墓坑あり）に分かれる。地下施設はすべて竪穴土坑または石坑である。土壙墓坑には二種類のつくり方がある。一つは直接墓坑を構築する方法で、もう一つはまず土壙を盛ってから墓坑を掘り下げ、上の盛土と下の地山につくる方法である。棺槨などの木製葬具は、その土壙施設に伴って出現したと思われるが、残念なことにそうした構造のものがはっきりと残っておらず、ただ漆の皮膜などの痕跡が残っているだけである。土墩墓の槨室の特徴は細長いことである。普通、長さが4.5 m以上で、幅が2.5 m以内のものが多く、中でも大笆斗墓の槨室は長さが6.04 m、幅が1.4 m、深さが1.5 mと細く、このような状況は木棺の形態に関係することはいうまでもない（例えば丸木舟形木棺）。

ⅳ：埋　葬　直接遺体を埋葬施設（無墓坑の地面石施設）、または遺体を入れた木棺を墓坑の槨室に納めること。同時に副葬品や殉死者なども納め置く。

ⅴ：埋　土　墓坑（土壙土坑と地山土坑）があるものはまず墓坑を埋めるが、版築はしないようである。無墓坑のものはまず遺体を覆わねばならない。

ⅵ：封土築造　土を順次積み上げて土墩を饅頭状に仕上げる。形状はほぼ円形で、そのほとんどは版築をしていないが、少し叩き締めをしたものもあるようだ。

中・小型土墩墓の築造行程も、大型土墩墓と基本的に同じであるが、ほとんどの墓葬は整地後に直接遺体を安置して、埋葬施設を重んじることに欠けている。しかし、石床をつくったり、木炭を敷いたり（西周時期）するものや、地山を浅く掘って土坑をつくる（春秋時期）ものもある。

要するに、土墩墓の埋葬方法は、高い場所を選んで、棺槨を用いずに、地面に直接埋葬し、土を盛り上げて土墩にすることを伝統としているのである。たとえ大型墓がいち早く墓坑を構築したとしても、地面の上にあって、土墩墓を建造する過程で、排水や防湿の措置に細心の注意が必要になる。そのため、高い場所を選び、地面に埋葬し、石床や石枠や石槨ならびに土壙墓坑をつくり、床に木炭や草木灰や筵を敷いたりして対応しているのである。その原因については、二つのことに注意すべきだと思われる。一つは、墓を住居と同じにまねた可能性があること。つまり、南方は雨が

多いため、水対策として家を高台に建てたり、高床建築にしているのである。二つ目は、人々の冥界観との関係についてである。つまり、地下の湿気や水が死後の住居によくないと考えていたのであろう。

西周時代後期頃から始まった、大型土墩墓の地面に構築した土壌土坑ならびに土坑内に設置された槨室（木製葬具の可能性あり）は、北方の竪穴土坑木槨墓の影響を受けたものである。しかも、春秋時代前・中期になってもその土壌土坑が多く造り続けられていることは、この地に依然として伝統的葬送観念が生き続けていたことは明らかである。春秋時代中・後期になって、ようやく墓坑が地下に穿たれる（中・小型墓もほぼ同時で、ほとんどの墓坑が浅い）ようになり、ここに至って北方竪穴土坑の埋葬形式を採り入れただけでなく、同時に北方の伝統的埋葬観である「黄泉」観念を受け入れ、新しい葬送観念をもったといえる。

3　墳丘墓の出現

（1）墳丘墓出現時期に関する研究

中国北方の黄河中・下流域の伝統的墓葬形態は竪穴土坑（石坑）墓で、埋葬施設はすべて地下に埋められている。その築造工程はつぎのとおりである。

ⅰ：選　地　普通、都邑から遠くなく、地形が高く、黄土の深い丘陵地で、斜面を選ぶ。

ⅱ：整　地　地表を平らにならす。

ⅲ：地下に深い竪穴土坑を掘る（墓道と共に）。

ⅳ：墓坑に槨室を設ける。

ⅴ：埋葬　遺体の入った木棺を墓地に運び、墓坑の槨室に納める。副葬品も槨室に納めた後槨室の上に蓋をし、殉死者、犠牲者、車馬などを分別しておく。

ⅵ：墓坑を版築して埋める。今のところ、墳丘をもつのは非常に少ない。

墓坑を埋める土は、墓坑を掘った時の土である。墓坑にはその中につくった槨室（あるいは棺だけ）のわずかな空間ができるため、墓坑を埋める時に版築しなければ、土が余ってしまうので、版築すればうまく収まるのである。しかしながら少し余った土が盛り上がり墓葬の位置を示すことになったかもしれないが、年月を経るうちにわずかに盛り上がった土は流失してしまい、早い段階で分からなくなっていただろう。

本当の墳丘墓が出現すると、上述した造墓の工程に少なくとも、土を積み上げて墳丘にする手順が増える。墳丘の築造には膨大な土量が必要であり、別のところから土を運んでこなければならず、作業量は以前より極端に増えるのである。よって高大な墳丘の出現は、先秦時代の墓制における一大変革であった。

では、いったい何時墳丘が出現したのか？これについてはずっと注目され、検討されているところである。つぎに現在の主な見解をまとめておく。

①　日本では早くにこの問題が注目され、研究されている。

（ａ）関野雄は、1950 年代に中国古代墳丘墓の起源を検討することの重要性を説き、資料の少ない状況下で研究を進めた。その結果、中国古代墳丘墓の出現を戦国時代初期と考えた[27]。

（ｂ）飯島武次は、1980 年代に南方の長江、淮河流域諸国（楚、蔡）の墳丘墓が春秋時代後期以前に遡ると考えている[28]。

② 中国での研究はやや遅れて始まった。1981 年２月、王仲殊、王世民、徐苹芳、黄展岳の４名は、日本東京で開かれた第５回古代史シンポジウムに招待され参加した。その主な内容は、中国の墳丘墓と日本の古墳の起源と発展などであった。その後、彼らの論文が次々に中国で発表された。

（ａ）1980 年代、何人かの学者は考古学調査の実例と文献とを照合して、墳丘墓の出現が春秋戦国時代の頃（春秋時代後期に出現し、戦国時代に盛行しはじめた）であったと論じた[29]。

（ｂ）以前にも墳丘墓が商代後期に出現していたとする説がある[30]。1990 年に入ると、その見解を進展させた論文が発表され、合わせて中原と南方地区では春秋時代初期に墳丘墓が普遍的に造られていたとした[31]。

早くに、商代の後期に墳丘墓が出現していたという考えは、考古学的資料と文献資料にもとづいているように見えるが、どちらかといえば推測の域を脱せず、最も問題なのは商の中心域に実例が見出せないことである。河南省羅山県蟒張郷天湖村に一つの封土の痕跡をもった商代後期の墓葬があると説いてはいる[32]ものの、やはり論拠が希薄である。特にその後の西周時代でも、今のところ墳丘墓の確認はされておらず、墓葬制度の発展変化の立場から見ても、現段階で墳丘墓の起源を遡らせることには慎重でなければならない。さらに、春秋時代に中原および南方地区で墳丘墓が普遍的に盛行していたかどうかについても、改めて考える必要がある。河南省南光山県宝相寺黄君孟夫婦墓[33]や黄季佗父墓[34]などのように、春秋前期の墓例をいくつかあげているが、墳丘の始源に関する報告はまったくなく、発掘者が調査で得たものでもない。現在に至るまで、発掘前に墳丘が残っていた例は一つもなく、発掘された春秋時代の各国のたくさんの墓葬資料を見て、たとえそのいくつかに高大な墳丘が存在していたとしても、春秋時代に墳丘墓が普遍的に盛行していたとは断いできないだろう。

一方、河南省固始侯古堆１号墓は、現在分かっている時代の早い（春秋時代末年）段階の高大な版築墳丘墓（高さ７ｍ）である。しかしこれには問題がある。つまり、春秋戦国の頃に出現した墳丘墓が、どうして最初からこれほど高い墳丘をなしていたのか、ということである。そこで、高墳丘墓が突然出現する前に、おそらく長い発展過程の中に「低墳丘墓」の時代があったのではないか、と推測できないだろうか。

王世民先生は、早くからつぎのように指摘する。「墓葬を埋め立てて余った土はやわらかな土で墳丘を形成するが、それは固定された墓の目印ではない。それは今に始まったものではないが、意識して版築された封土とはまったく異なる‥‥高大な墳丘の起源と発展を考えると、とっくに無くなった柔らかな墳丘と封土を版築した墳丘とは混同して論ずることはできない」と[35]。これに啓発

されて、中国古代墓制の継承と発展の問題を検討する必要性にもとづき、高大な墳丘をもつ高墳丘墓（本論でいう墳丘墓のこと）に対し、「低墳丘墓」の概念を提出しなければならないと思う。

新石器時代後期、とりわけ龍山時代の木製葬具の発達は、葬具が墓坑に占める空間の超大さをもたらし、墓坑を掘ってそれを埋めた時に大量の残土ができる。この残土を墓坑の上に盛ると、墓葬の目印となるが、何も版築されることもない。また、他のところから土を盛ってきてさらに高くすることもしないため、当時は高さも限られた小山のようなものだったので、その土のほとんどが消失して無くなってしまったのである[36]、と思われる。このような状況は夏・商・西周時代を通じて続いてきたのであろう。これが私の主張する「低墳丘墓」である。

この低墳丘墓の概念を主張するのは、一つの願望があるからである。それは、今後の墓葬の発掘調査、特に夏・商・周の三代の墓葬調査において、墳丘の有無に細心の注意を払ってほしいのである。これが重視されれば、新しい発見があるかもしれない。

要するに、小山状の低墳丘墓はかなり早い段階に出現したかもしれないのである。よく引用されるいくつかの文献には、孔子が生きていた春秋時代末頃には低墳丘墓がよく見られたことが記されている。『礼記・檀弓上』に、孔子が防に父母を合葬した時に語った「吾聞之古也、墓而不墳、今丘也、東西南北之人也、不可以弗識也〔吾之を聞く、古は墓して墳せず、今丘なり、東西南北の人なり、以て識さざる可からざるなり、と〕」「于是封之、崇四尺〔是において之を封ず、高さ四尺〕」や、『礼記・檀弓下』に、孔子が、季札が子を葬るのを見て「既葬而封広輪揜坎、其高可隠也〔既に葬り手封ずること、広輪坎を覆い、その高さよる可きなり〕」とある。また、この時期の墳丘の形状は不統一で、『礼記・檀弓上』に子夏が孔子のいったことを追憶して「吾見封之若堂者矣、見若坊者矣、見若覆夏屋者矣、見若斧者矣、従若斧者焉、馬鬣封之謂也〔吾之を封ずること堂のごとくする者を見る、坊のごとくする者を見る、夏屋を覆うがごとくする者を見る、斧のごとくする者を見る、斧のごとくする者に従わん、と。馬鬣封の謂なり〕」と記す。現在ある考古資料から見て、高大な墳丘の築造は春秋戦国の交に出現し、戦国時代に広く行きわたったのである。と同時に、低墳丘墓も依然とつくり続けられ、今日でも農村で広くつくり続けられている。

（2）墓上建築の出現と発展

土を積んで墳丘にするのではなくて、商代後期の都城である殷墟の一部の墓坑上から建築物遺構が検出された。その中で最もよく知られているのが、かの有名な「婦好」墓（5号墓）である（図1－21）。そのほかに、大司空村311号・312号墓の墓坑上にも類似の建築物遺構が検出されている。すでに発掘された商代後期の墓葬内で、墓上建築物が遺存しているのはごくわずかであるが、その建築物と墓葬との間には何か関係があるはずである。因みに、「婦好」のような重要人物であっても、商が存続している間は、たとえその建物の機能が葬送祭祀のためのものであっても、勝手に建てることができない。一方、考古学的調査で見つかった実例が極めて少ない点に鑑みて、そのような墓上建築物は、当時、普遍的に行われていたというよりも、特例としてみた方がよいであ

ろう。

河南省浚県辛村西周衛侯墓（１号墓）の墓坑上には厚さ 1.5 mの版築土があり、墓上建築基壇と考えられている。

このような墓上建築は東周時代にかけて存続されている。

陝西省鳳翔県にある秦都、雍城の南には春秋戦国時代の秦公の陵園がある。そこのボーリング調査ではまったく墳丘は見つからなかったが、多くの墓上から瓦片などの建築材が見つかり、１号墓からは柱穴遺構が確認された。このわずかな建築遺構と建築材から、当時、墓上に相当規模の瓦葺き建築物のあったことが推定できる[37]。

戦国時代の魏国、中山国、趙国のすべての陵墓からは建築遺構や遺物が見つかっている。そのうちの魏国と中山国の墓上建築遺構が発掘調査され、前者が低台式の建築遺構に、後者が高台式の建築遺構になり、二種類の違った建築様式の存在が明らかになった。

（３）墳丘墓出現の代表的研究

Ａ　日本における研究

①　関野雄の説。戦国時代の初め頃、北方に広がる広大な欧州アジア草原地帯の南シベリア地区では巨大な墳丘墓（kurgan）が栄えていた。墳丘には、直径３～４ｍ、高さ約 0.5 mから直径 100 m以上、高さ 20 mにもなる大小がある。墳形は円形もしくは楕円形を呈し、地下の竪穴土坑には木槨または石槨が造られ、その中に箱形木棺か丸木舟形木棺が納められていた[38]。このような地下に土壙、地上に墳丘をもつ墓葬の特徴は中国の墳丘墓と同じであるが、その多くが墳丘の周囲を長方形の石壁で囲ったり、石を立てたりする方法は中国には見られない。北方民族、特に匈奴との関係が強固になると、北方文化の一つである墳丘墓が南へ伝播し、すでにその築造技術をもっていた各諸侯国の支配者は国力や財力を誇示するために摂取することを望んだのである。それは、まず北部にある燕、趙、秦の諸国に現れ、その後、燕から斉、魯国へ伝わっていった。趙は、最初墳丘墓ではなかったが、北方に領土を広げていくにつれて、北方墳丘墓の影響を受け、墳丘墓が造られるようになった。楚国の墳丘墓は秦国から伝わったようである。しかし、中原地区は伝統を固守し、戦国時代末期でも墳丘墓は造られなかった。

飯島武次の研究は、部分的に関野雄の影響を受けている。燕国は北方の草原地域と隣接しており、その墳丘墓は河北省平泉県夏家店上層文化の墳丘墓の伝統を引き継いでいるようであるが、夏家店上層文化の墳丘墓はシベリアの墳丘墓（kurgan）と関係しているだろう、と考えている。同時に、中原地域の諸国（周、魏、韓、趙、秦、中山）は、河南省輝県固囲村魏王墓や、河北省平山県三汲村の中山墓のように、商代の墓上建築形式を継承しており、南方の長江、淮河流域諸国（楚、蔡）の墳丘墓はあるいは春秋後期以前に遡り可能性があり、その出現は南方の土墩墓の伝統に関連するかもしれない、と示唆している。

②　町田章は、上述した関野雄の発表から十数年後に、関野雄の考えとは違った見解を論じた。そ

れによると、長方形または方形の台状墳丘墓は中国内部で発生したもので、その起源は墓上に築かれた建築基壇に求めることができ、当時、盛んに建てられていた高台宮殿建築の影響を受けた、と考えたのである。墳丘と天地を祭る壇または土台とは相関連するものであり、生前もっていた権利とか、地位を広く伝えるために、それをもって死者を神格化しようとした、と結論づけた。また、商の墓上に低土壇が存在した可能性があり、南方の土墩墓はその商墓の影響を受けて生まれた可能性を指摘した[39]。

B　中国における研究

①　墳丘墓（低墳丘墓に当たる）は中原で発生した後、南方へ伝わり楚墓誕生に影響した、と考えた研究者がいる[40]。

②　南方の楚の地域（河南省南部を含む）の墳丘墓はかなり早い段階から普及していたと考えた研究者がいる[41]。また、淮河と漢水の間（今の河南省南部一帯）は、南（楚、呉）北（晋、斉）文化の合流の地にあたり、東南地域の土墩墓が西方に広がり、その地で墳丘墓が育まれて発展した、とする考えもある[42]。なお、墳丘墓が土墩墓の影響を受けて出現したと観る研究者には楊楠らがいる[43]。

③　日本の町田章と同じような観点で、墳丘の形状は墓上建築の影響を受けたとする考え[44]、墳丘は墓上建築の発展変化したものとする見方[45]もある。

以上のように低墳丘墓の概念が成り立つとすれば、それは長時間かけて発展し、春秋戦国の頃になって、ようやく社会の変革にあった新しい葬制が求められた。そして墳丘が一躍高大にして壮観な姿に変わり、高墳丘墓制が形成されたのである。つまり、新たに出現した高墳丘墓と以前からの低墳丘墓とはまったく違った墓制であって、墳丘がただ低小から高大になったという規模の違いだけでなく、墓制上の革新なのである。とはいっても、その革新はまさに低墳丘墓の中で育まれてきたのかもしれない。ところで、比較的早い段階の高墳丘墓が河南省南部の淮河と漢水の間にたくさん発見されたことについては、あるいは論者がいうように、そこは特殊なところで、その一帯の小国は中原の伝統的な礼制を守らない、先駆け的な気風が有利に働いて新しいものを創り出したのだろうか。

以上述べたように、江南地方一帯の大型墳丘墓はおおむね西周時代後期に、地上に土壌墓坑を構築しはじめ、春秋時代中・後期になるとしだいに墓坑を地下につくるようになるが、それは北方の竪穴土坑墓制の影響を受けたと見なされる。長江が南北間の相互交流を遮ることができなかった以上、遺物を除いたとしても、江南・長江周辺に聳えるかの長大な土墩が、変革しはじめた北方の墓制に影響したことは時間と空間的つながりから見て可能であろう。ただし今のところ、それを説得する根拠に欠けている。

（4）前期墳丘墓とその特徴

春秋時代の墳丘墓として確実なものは大変少ない。前述した調査された数例の墳丘資料以外で、

最も明確でよく引用されているのは河南省固始侯古堆M１である（図１－22）[46]。その墳丘は円錐形を呈し、直径55ｍ、高さ７ｍで、版築層の厚さ0.4～0.5ｍの版築成形である。墓葬は東向きで、平面甲字形を呈す。墓坑底部は東西10.8ｍ、南北９ｍ、深さ16ｍを測る。葬具は二重槨一棺で、槨室の外に砂と石を積んでいる。殉死者は17体で、副葬品には青銅器（礼器、楽器、車馬器、雑器など）、玉器、陶瓷器、漆木器などがある。墓葬の年代は春秋時代末期に推定される。

資料に乏しい現段階では、これを代表的な墓例とするならば、墳丘墓出現当初の特徴として、①中原地区の南部に位置し、後の楚の文化区域に属す。②墳丘は高大で、版築成形された円墳の可能性がある。③被葬者は一定の身分をもっていた。ことがあげられる。

４　墳丘墓出現の要因とその意義

墳丘墓（低墳丘墓を指す）の出現を商代後期に見る研究者は、商の人たちの祖先の霊魂崇拝と祖先を祭る墓地祭祀の活動が墳丘の発生を招いたのであり、墳丘の形は神を祭る時に「封土為社〔土を盛って社と為す〕」の社である「封土」を参考にした、と考えている。

墳丘墓（高墳丘墓を指す）の出現を春秋戦国の交に見る学者は、考古学上に反映された、版築の土城壁と高大な墳丘墓の普及が東周時代の社会的大変革であり、同時に墓地制度の変化をもたらした。春秋戦国の交には王室の大塚が集中分布して造られており、戦国時代中・後期には一国の君主を中心に陵墓が配置されるようになった、と考えている。

高墳丘墓の出現は、重大な社会変革をもたらした。その結果、春秋戦国の交には旧礼制が崩壊し、新しい礼制が創り出された。高大な墳丘がいったん出現すると、その伝播経路は不明であるが、ものすごい早さで各諸侯国の間に広がって、各国の政治秩序の強化と国力を誇示する道具となったのである。

第２節　中国古代墳丘墓の発展－戦国時代

１　各諸侯国における墳丘墓の概要

秦、燕、趙、斉、中山、魏、韓、楚、呉・越の順に各諸侯国の墳丘墓の状況を概述する（表１－２、１－３）。

Ａ　秦

秦の都である咸陽城の西北の黄土台地上、現在の咸陽市周陵鎮の北側に、南北に並んだ２基の高大な墳丘がある。どちらも方錐台形を呈し、以前は西周時代の王陵と誤って伝えられていたが、考古学的探査の結果、二つの陵園と陵墓の墓道、陵園内の建物遺構、陪葬坑、陪葬墓などが見つかった。それらは戦国時代後期の秦王の陵墓であることが確かめられ、被葬者は恵文王と悼武王ではないかと思われている（図１－23）[47]。

東周時代の秦国の公・王陵墓はいくつかの陵域に分散している。陝西省鳳翔県にある秦都の雍城

の南の陵園には春秋時代と一部戦国時代の秦公墓が分布している。この段階の秦公墓は堀で囲まれた区域に集中分布しているが、戦国時代には二重の堀で囲まれた独立した秦公陵園を形成する。しかし、それはまだ一陵一地の陵園形態を形作っていない[48]。陝西省臨潼県芷陽一帯は戦国時代の秦の東陵墓域であり、ここに堀で囲まれたいくつかの王陵の陵園が独立して分布している（図１－24）[49]。前述した秦都咸陽の西北の黄土台地上の秦王陵墓も独立した王陵で、しかも一式揃った陵園制度を形成していた。

戦国時代の秦王陵の特徴をまとめるとつぎのようになる。王陵はいくつかの陵域に分散し、その位置は都城に近いところもあれば、遠いところもある。一陵一地の独立した王陵が形成される。すでに陵園の墻壁や陵寝建築、陪葬坑、陪葬墓など、一式揃った陵園制度を形作っていた。ある王陵には墳丘があり、無いものもあり、未だ定まっていない。墳丘の多くは方錐台形を呈し、甚だ高大である。

B　燕

燕国の大型墳丘墓は下都（河北省易県）の東城の西北隅に位置する。全部で23基あり、南北二つの墓域に分かれている。墓域の真ん中を隔壁で仕切り、北の墓域がすなわち「虚粮塚」墓域、南の墓域がすなわち「九女台」墓域で、戦国時代燕国の王陵域をつくる[50]。

「虚粮塚」墓域には13基の墓があり、南北四列に配列され、北側の一列に４基、そのほかの三列には３基ずつが配置されている。

「九女台」墓域には10基あり、南北二列に並び、北列に５基、南列に４基が配置されている。別に１基が墓域の西南隅に配されている。

ボーリング調査および16号墓の発掘調査の結果から見た燕国王陵墓の特徴はつぎのとおりである。王陵は、城内の一隅にあり、二つの独立した陵域の組み合わせからなり、王陵の配置は整然としている。その配置は一王一陵園ではない。すべての墓葬には大きさの異なる墳丘がある。墳形は長方形が多く（南北方向のものが多い）、方形のものもあり、高さは最高のもので15ｍである。地下の墓坑壁の上部は版築成形されたうえ、焼かれている。木槨の床には木炭が敷かれ、木槨の外にある二層台は石灰とカラスガイの貝殻を混ぜ合わせたもので造っている。墓坑は焼土塊で埋まられているが、それはおそらく被葬者の遺体の保護を主目的とした、防湿の措置であろう。墓葬の底をさらにボーリングした結果は青灰色泥土であった。

C　趙

趙国の王陵は、国都である邯鄲の西北の丘陵地帯に分布する。調査の結果、王陵は、五つの高い山に分かれて、五組〔ヶ所〕が見つかっている。そのうち南面にある三組〔ヶ所〕、１～３号陵は邯鄲県に、北面にある二組〔ヶ所〕、４・５号陵は永年県に位置する[51]。詳細は表１－３を参照のこと。

五組〔ヶ所〕の趙王陵には共通の特徴がある。墓陵はすべて丘陵の山頂の開けたところに立地する。すべてに陵台が設けてあり、通路がすべて東向きにつくられている。各組〔ヶ所〕の王陵のほ

とんどに２基の主陵（陳三陵村１号墓は陵台の南寄りにあり、その北にもう一陵があるようだ。陳三陵村３号陵は陵台上に主陵があり、その西南に墳墓がある。墳丘の規模は大変大きく、高さは陵台上の主陵と同じで、これも主陵の一つになろう）があり、おそらく墓坑を異にする並列する合葬墓であろう。陳三陵村３号陵の周囲には整った陵園があり、版築の壁が残っている（図１－25）。そのほかの四組〔ヶ所〕の陵からは陵園の壁は見つかっていない。墳丘のほとんどは長方錐台形を呈すが、方錐台形に近いものもある。墳丘は高さがあり、それに加えて陵台の上に乗っているため、独立した山のように見上げるが如く、雄大さがある。

Ｄ　斉

戦国時代の田氏斉の王陵は都城臨淄の東南 10 数㎞の丘陵上にある。そのうちの一組には４基の陵墓が東西に並んでおり、「四王塚」と呼ばれている。別の一組は２基が東西に並び「二王塚」と呼ばれている。この６基はすべて上円下方墳である（図１－26）[52]。

「四王塚」の最も西側にある墳墓を見てみると、下方の基壇は南北約 245 m、東西約 155 mで、その上に高さ約８mの円墳が乗る。「四王塚」の北側の地形は一段低くなっていて、西から数えて第一・三・四番目の陵に対応して小さな塚がそれぞれに１基ずつある。それらも上円下方墳である。この小墳も最も西側のものを見てみると、南北の陵墓の間隔は 50 m、下方の基壇長は 118 m、塚の高さは 10 mあり、王陵の合葬墓と思われる。「四王塚」の西方と南方にも８基の塚があり、それらもすべて上円下方墳で、王陵区の陪葬墓になるものと思われる。

「二王塚」は、「四王塚」の東北約１㎞に位置し、すべて上円下方墳である。西側の塚を見てみると、下方部分は三段になっているようで、円墳は東側のより大きく、高さは 12 mである。また「二王塚」の東北近くに小さな塚がある。その西北にも１基の双墳があり、下方部は三段で、墳形は円墳〔上円下方墳〕である。

田氏斉王陵の特徴はつぎのとおりである。陵墓は、都城から遠く離れて地形が高く開けたところを選び、威容を誇るように造営している。多くの陵墓が並び立って王陵区を形成しており、一王一陵の配置はできていない。しかし、「二王塚」は合葬墓であるため、あるいは単独で一つの陵園を構成している可能性がある。墓坑を異にする並列合葬墓形式である。陵墓は大きさに関係なく上円下方墳であり、下方部を三段につくるものがあるようだ。

Ｅ　中　山

中山国の大型陵墓－中山王陵は２ヶ所が確認されている。その一つは都城の霊寿城内の北西部にある。３基の大墓があり、その中の６号墓が発掘調査された。もう一つは城外の西部にあり、２基の大墓（Ｍ１、Ｍ２）のうち、Ｍ１（中山墓）が発掘調査されている[53]。

Ｍ１は、２本墓道の「中」字形墓である。墓坑（墓道も含む）の上部は版築築造で、壁にはスサ入り土や泥が塗られ、表面を石灰で仕上げている。そのようなつくりは住居の壁と同じようなものである。墓坑の壁は岩層を掘り抜いてつくっている。長さ約 30 mの墓坑内には「亞」字形の槨室を構築し、その壁の周囲に沿って二重に石壁を築き、天井にも石を積んでいる。槨室の東側、東北

側、西南側に三つの器物坑を設けているが、東北側の器物坑には遺物がなかった。

墓坑上には、東西約 90 m、南北約 100.5 m、残存高約９mの高い建築基壇が築かれている。

南側墓道の南方両側には車馬坑があり、西側車馬坑の西には雑殉坑と船坑がある。雑殉坑には馬、羊、犬、車、帷が納められていた。

墓坑と北側墓道の東方には２基の陪葬墓が、西側には４基に陪葬墓がある（図１－27）。

F　魏

魏国の王陵は河南省輝県固囲村一帯に位置する。その中のＭ１～Ｍ３の３基の陵墓は東西 150 m、南北 135 mの版築基壇上に東西に並んでいて、真ん中のＭ２が最も大きい。両側のＭ２とＭ３はほぼ同じ規模である。さらに、この３基の大墓の南側に２基の大墓がある[54]。

Ｍ１～Ｍ３は発掘調査されており、すべて２本墓道の「中」字形墓で、南側墓道の幅が墓坑より広い。墓坑の壁の上部は版築築造である。Ｍ２を見てみると、墓坑の底には８層の石が敷かれ、その上に長い角材と短い角材を積み上げて複雑な木槨室を構築している。内と外の二槨の間には木炭が積まれ、槨室の外には数本の石壁が築かれ、その間を細砂で埋めている。

Ｍ１～Ｍ３には墳丘がないが、墓坑上には低い建築基壇が造られている。全体的に見て、３基の建築基壇は対称的で、よく整っている。Ｍ２で見てみると、基壇の長さは各辺 25 m～ 26 m、高さ約 0.5 mで、その上に礎石が残存する。その周囲には玉石を施した雨落ちが巡る。雨落ちの各辺の長さは 29 m、幅は 1.5 m～ 1.7 mである（図１－28）。

このほかに、Ｍ１の南側墓道内には木槨室が設けられており、二つの車が置かれていた。Ｍ１付近から２ヶ所の玉坑が見つかっているが、おそらく祭祀に使われたものであろう。また、Ｍ１付近から２基の小墓（Ｍ５、Ｍ６）が発掘されているが、おそらく陪葬墓になろう。

G　韓

韓国の王陵区は鄭韓故城の西側、現在の河南省新鄭市城関郷胡庄村一帯に位置する。近年、東西に並ぶ２基の王陵級の墓葬（東側がＭ１、西側がＭ２）が発掘された。どちらも２本墓道の「中」字形墓で、墓坑の壁はスサ入り土が塗られ、表面を白く仕上げ、墓坑の底近くの壁は白く塗った上から赤く仕上げている。葬具は二重棺二重槨で、その外側に石や木炭が積まれ、棺槨の上に角材を組み合わせて屋根を造っている。

墳丘は「中」字形を呈し、墓室と墓道を覆っている。Ｍ２の墳丘には地上３mのところに「中」字形の建物が建てられていたようで、柱穴や礎石、雨落ち、瓦礫などが検出されている。墳丘の表面が白や赤で塗彩されており、韓王陵の墳丘は実際には高い建築基壇であったとすべきであろう[55]。

Ｍ２の西側には建築遺構がある。２墓の周囲には三重の堀が巡らされている。

H　楚

湖北省江陵県にある楚の都、郢の紀南城の周辺には大小さまざまな墳墓が分布している。そのほとんどが戦国時代に墳丘墓である。その墳墓の多くは山上や丘陵などの高い地形に立地している。墳丘が方形を呈したいくつかを除くと、その大多数は楕円形につくり、版築築造である。楚の墳丘

のもう一つの特徴は墳丘の傾斜が緩やかなことである[56]。湖北省荊門市包山M２では、１本墓道の竪穴土坑墓で、二重槨三重棺である。墳丘は直径54ｍ、高さ5.8ｍの円形を呈す（図１－29）。

２　戦国時代の墳丘墓の主な特徴

前時代と比べて、戦国時代の墳丘墓にはいくつかの顕著な特徴があり、地上部分と地下部分に分けてまとめておく。

（１）地上部分

Ａ　独立した王陵形態と一組の陵園制度

春秋時代の墓地制度は依然として血縁関係を基礎にした同族墓地であり、貴族の墓地である「公墓」と庶民の「邦墓」に分かれる。

東周時代の周王室は独自の王陵墓域をもっていた。戦国時代には諸侯国もほとんどが独自の王陵域を、河北省易県燕下都燕王陵域や山東省臨淄の斉都の東南にある「四王塚」と「二王塚」のなどのように、形成している。それだけではなく、一部の諸侯国では、一人の王を中心として、企画された独立した王陵をつくるようになる。例えば、河南省輝県の魏王陵、河北省邯鄲の趙王陵、河北省平山の中山王陵などである。

王陵の陵園制の誕生は、後の秦・漢陵墓制度に重要な影響を与えた。その内容は、巨大な墳丘を中心にして版築土塀または濠で陵園を囲むもの（秦、趙、中山、韓など）、陵寝建築をもつもの（秦、中山、魏、韓など）、陪葬坑をもつもの（秦、趙、魏、中山）、陪葬墓をもつもの（秦、趙、中山、魏、斉）などが含まれる。中でも、全面ボーリング探査の結果、陝西省咸陽周陵鎮の２号秦王陵園が最も豊富に要素が揃っており、形態もはっきりしている。

戦国時代に出現した陪葬墓は、長く続いてきた殉葬制度に代わるものとしてみることができ、河北省平山の中山王Ｍ１には６基の、Ｍ６には３基の陪葬墓が、陝西省咸陽周陵鎮の２号秦王陵には168基の陪葬墓が造られているように、社会進歩の一種の体現としてとらえられる。

独立王陵および陵園制度の出現は、戦国時代の鉄器の普及、生産力の向上、経済の発展がもたらした結果であり、諸侯国の強兵、変革、競争の産物である。つまり、諸侯国の国王は、もはや一族の代表というのではなく、新しい封建政治秩序に適応した、一国家の代表として、名義上の周王から離れ、甚だしきに至っては周王の上に凌駕し、生前に擁した至上の権利と地位を、死後にも国力を誇示したのである。そして、それにかこつけて新しい封建政治の秩序を強固にすることを望み、強国の実現を夢見たことを、陵墓と陵園は最もよく反映したものである。

Ｂ　墓上の普遍的な標識物

大きく墳丘と殿堂建築の二つに分けられる。

①　墳　丘

墳丘は版築である。各諸侯国の墳丘の形状はよく似ているものの、いくつかの相違点がある。そのうちの秦、燕、趙国の王陵墳丘は長方錐台形か、方錐台形を呈す。秦国の王陵は方錐台形状で、

墳丘の傾斜はかなりきつい。斉国の王陵は上円下方の墳丘で、その傾斜も急である。楚国の陵墓の墳丘は方形のもあるが、大部分は楕円形で、その傾斜は緩やかである。安徽省淮南市蔡家崗鎮趙家孤堆Ｍ１（蔡国）の墳丘は円形につくる。

②　殿堂建築

魏、中山、韓国の王陵の上には大型の瓦葺き殿堂が建っていた。魏の王陵上の建築は低い基壇建築で、中山と韓国は高い基壇建築である。

（２）地下部分

Ａ　墓葬の形態

すべて竪穴土（石）坑木槨墓である。中山王Ｍ１，Ｍ６や韓国王陵のように、墓坑壁にスサ入り土を塗った上に白色や赤色を塗って内装している。中山王Ｍ６では、墓坑壁に偽りの柱を立てて地下宮殿のようにしている（図１－30）。また、韓国王陵では墓坑の上部に木造屋根をまねた屋根を構築している。

Ｂ　題湊の制

棺槨制度の一つである題湊の制は諸侯列国に広く普及していた。題湊とは、幅厚さ共にほぼ同じの角材を墓壁に合わせてきっちりと積み上げた槨室のことである。そして、この題湊の中に多重の棺槨を安置する。

Ｃ　詰め石・詰め炭・詰め砂

春秋時代、山東省臨淄の斉故城の５号春秋後期斉国墓[57]や臨淄郎家庄１号春秋戦国の交の斉国墓[58]などのように、すでに出現していた。戦国時代には、題湊の外側に石や木炭、砂、泥土を詰めることが一般的になるが、それは『呂氏春秋・孟冬紀・節喪』に「題湊之室、棺槨数襲、積石積炭、以環其外〔題湊の室に、棺槨其の数を襲（重）ね、石を積め炭を積め、以て其の外を環（囲）む〕」と記されていることと符合する。

石詰めや砂詰めは主に盗掘を防ぐための、炭詰めは湿気を防ぐための処置と一般にとらえられており、それは当然のことである。しかしながら、湿度防止や盗掘防止の対象は副葬品の各種物品を含んでいるのではあるが、その中心は槨・棺内に納められた被葬者でなければならない。棺槨の設置は、礼制の規範の効果以外に、石や砂、木炭を詰めることにより遺体を保護し、遺体を腐朽から守るための措置であり、それこそ墓内の諸施設を構築した最後の目的であったのだろう。南方によく見られる槨外を泥で覆う方法も、同等の目的のはずであり、時として遺体がよく保存されていることがある。

Ｄ　単独の器物坑

大型陵墓の中には槨室から独立した副葬遺物坑が現れ、しかもそれが墓坑と墓道の外へ広がり、外蔵槨制度ができはじめた。山東地区では、春秋時代の呂国や斉国の大型墓内に比較的早く単独の遺物坑が現れている。呂国では山東省沂水県劉家店子の春秋時代中期の２基の墓（図１－31）[59]、

斉国では山東省臨淄の斉故城５号春秋後期の墓などである。戦国時代には陵墓に単独の遺物坑を設置することがさらに広まり、河南省輝県固囲村Ｍ１では墓道に、河北省中山王Ｍ１とＭ６では墓内だけでなく墓外にも、陝西省咸陽市周陵鎮の戦国時代後期の２号秦王陵では陵外に 27 個もの遺物坑を設けている。

３　墓葬の等級制度

東周列国の墓葬は、４本墓道の「亞」字形、２本墓道の「中」字形、１本墓道の「甲」字形、無墓道の長方形と平面形を分けることができるが、墓道の多少によって被葬者の等級を規制する方法は、各諸侯国での実施状況はまちまちで、総体的に以前よりも緩やかになっている。それに反して、葬具である棺槨の枚数、副葬品の鼎や簋の数量は被葬者の身分階層を規制する礼制として整えられてきた。この礼制は西周に始まり、東周で形作られたために両周墓制〔西周・東周墓制〕と呼ばれている。同時に、地上の墳丘とその他の施設の出現と発展に伴って、地上の墓葬体系がしだいに形成され、墓葬の等級制度の重要な部分を構成した。しかし、地上の墓葬施設が等級によって数値化できるようになるには、前漢・後漢時代を待たねばならない。

（１）棺槨制度

『礼記・檀弓上』に「天子之棺四重」とある。鄭玄は「尚深邃也。諸侯三重、諸侯再重、大夫一重、士不重」と注す。『庄子・雑篇・天下』に「天子棺槨七重、諸侯五重、大夫三重、士再重」とある。上述の文献に記された棺槨の枚数の礼制に対して、主に二つの違った理解と考え方がある。その一つは、『礼記・檀弓上』に記された棺制の「重」は二重を表しており、『庄子・雑篇・天下』の「重」は一重を表しているとし、そこから得られた結論は、天子が二重槨五重棺を、諸侯が一重槨四重棺を、大夫が一重槨二重棺を、士が一重槨一重棺を用いたというものである[60]。別の意見は、二つの文献に記された「重」の意味は同じで、どちらも一重であり、天子が三重槨四重棺を、諸侯が二重槨三重棺を、大夫が一重槨二重棺を、士が一重槨一重棺を用いた礼制であったというものである[61]。

当然、そのほかの見方として、天子は一重槨五重棺で、諸侯が一重槨三重棺で、大夫が一重槨二重棺で、士が一重槨一重棺であった[62]とするものなどがある。

また、西周の墓葬棺槨制度の基礎の上に、春秋時代の墓葬棺槨制の秩序の発展があり、完全に揃う段階が戦国時代になる、という研究者もいる[63]。

戦国時代の墓葬の棺槨の枚数と文献記載との関係がうまく適合しているところと、しないところがある。それは、礼制というものが往々にして一種の理想化された制度であって、具体的実施にあたってはいろいろな原因で、いろいろと細かく変化したであろうことは、特に東周という急激に変化した時代においてはなおさらのことといえる。そのことは多くの墓葬の実例が、文献に記された葬送礼制の存在したことを証明している。

（2）用鼎制度

『春秋公羊伝』桓公二年何休注に「礼祭、天子九鼎、諸侯七、卿大夫五、元士三也」という。すなわち、周礼にある用鼎制度は、天子が九鼎（大牢）を用い、諸侯が七鼎を用い（大牢）、大夫が五鼎（小牢）を用い、士が三鼎（牲）を用いることである。これを正鼎（升鼎）といい、これを組み合わせたのが陪鼎（羞鼎）であり、大牢（九鼎、七鼎）が三陪鼎、小牢（五鼎）が二陪鼎、牲（三鼎）または特（一鼎）が一陪鼎になる。さらに、簋と鼎の組み合わせの数がある。大牢九鼎に八簋が、大牢七鼎に六簋が、小牢五鼎に四簋が、牲三鼎に二簋が、特一鼎に簋の組み合わせがないか、二簋が組み合わされる。墓葬の実例では、この用鼎制度は西周時代前期に、厳密に安定した状況（周王室では天子九鼎、卿七鼎、大夫五鼎、士三鼎または一鼎。諸侯国では公侯七鼎、伯五鼎、子男三鼎または一鼎）で現れている。西周時代後期から春秋初期には其の厳密性が崩れはじめ、主に諸侯が天子の鼎制を侵しているのである。春秋時代中期から戦国時代前期にはさらに進んで、諸侯の卿までが天子の鼎制を侵しており、東方諸国の庶民までもしだいに士の礼である特一鼎を用いるのが一般化した。戦国時代中・後期にいたっては、特に秦国の鼎制はしだいに崩壊してしまった[64]。ある研究者は、墓葬中のこのよう鼎制度の萌芽は西周時期にあり、春秋時代前期に発展し、さらに発展変化し続けている中、春秋時代中期になると諸侯が九鼎を用いはじめ、諸侯の卿や上大夫までもが七鼎を、下大夫が五鼎を用いるようになるが、士はなお三鼎か、一鼎であった。戦国時代中期になると、用鼎制度は弛みはじめ、遂に崩壊へと向かったのである、と考えている。

鼎や簋などの礼器以外の楽器や車馬の副葬も用鼎制度と呼応して、互いに一体となった[65]。

4　新しい墓葬形態の出現

（1）洞室墓〔横穴式墓室〕

洞室墓は長方形の竪穴土坑（墓道）の底部の一辺を洞窟状〔横穴〕に穿って埋葬する墓葬形態である。

洞室墓は、西北地方の甘粛省・青海省一帯の馬家窯文化〔新石器時代〕に最も早く出現し、商・周時代には関中地区にも存在していた。関中の秦墓に出現した洞室墓は、研究によると戦国時代中期後葉になり[66]、戦国後期に洛陽地区に伝わっている。

（2）中空塼墓

建築材の一種である中空塼の出現は比較的早いが、造墓用に使われたのは遅く、戦国時代後期で、主に河南省鄭州一帯で広まった。

第三節　西周・東周の墓制

春秋時代末期、最初に高大な墳丘墓が出現したのは淮河以南の長江に近い地方である。その墳丘

墓は江南の土墩墓の影響を排除できなかったようで、その後、その地域の楚や蔡国などの墓葬の多くは楕円形を呈し、墳丘の傾斜は緩やかである。そのことは土墩墓がこの地域に影響をおよぼした間接的な証拠となるものである。この地域以北の地区では、戦国時代の墓上施設の状況はまったくまちまちである。天下の中心にある周は、依然として墳丘のない祖先の墓制を守り続けていたようである。中原地区の韓、魏は墓上に低い基壇か、または高い基壇を築き、宮殿建築を建てており、それは中山国に影響を与えた。北辺の燕、趙と西方の秦国の墳丘は長方形か、方形を呈す。東方の斉国の墳丘は上円下方形を呈す。このように、戦国時代の各国の墓上の状況は、お互いに影響し合っていたと思われるが、それぞれの独自色を多分に保ち続けていたといえるのである。

墓上に墳丘が出現すると、たちまちのうちに諸侯列国に広まり、一部の諸侯国では墳丘を中心に一組の地上施設を造り出した。それは墳丘、陵園、陵寝建築、陪葬坑、陪葬墓などを包括したもので、基本的にその後の秦・漢墓葬の地上建設の内容を打ち立てた。

商・周の墓葬の基本的形態は竪穴土坑木槨墓であり、戦国時代中・後期に出現した洞室墓はどちらかというと小型墓に属す。竪穴木槨墓の特徴は、槨室が完全に密封されてしまうことである。墓坑は埋められてしまうと、改葬や盗掘されない限り、再び開けることができなくなり、合葬の場合は墓穴を並べる並列合葬方式が採られる。ただし、題湊葬具が使われるようになると、槨内の空間がますます広くなって、墓内に宮殿形式を模倣した建築や単独の遺物坑が出現し、墓室の邸宅化の傾向が一層顕著になってきたのである。

地上施設が造られるようになると、地上施設はもちろんのこと墓葬形態や墓葬規模にも等級が反映されなければならないが、西周・東周墓葬の等級制度は、もっぱら棺槨や用鼎、車馬の副葬制度に中心がおかれていた。もちろん、葬具である棺槨はいうまでもなく、副葬品の鼎や簋、車馬もいったん地下深く埋められると、永久に人目にさらすことができなくなる。ということは、西周・東周の墓制は埋葬の過程、つまり被葬者の身分階層によって異なる埋葬の際の細かな作法を体現することに重点が置かれていた、といえるのである。しかし、墳丘などの地上施設の出現後は、埋葬の重点が地下施設だけだったことから地下と地上の両方の施設に墓葬等級制度の重心を転換させた。こうした変換の流れは春秋戦国の交から見られるのであるが、地上施設の形成が等級基準に従って数値化できるようになるのは、前漢・後漢時代になってからのことである。

註

1　賈蘭坡『山頂洞人』龍門聯合書局　1951 年
2　欒豊実「史前棺椁的産生、発展和棺椁制度的形成」『文物』2006 年 6 期
3　中国社会科学院考古研究所山西工作隊、臨汾地区文化局「1978 － 1980 年山西襄汾陶寺墓地発掘簡報」『考古』1983 年 1 期
4　郭宝鈞「一九五〇年春殷墟発掘報告」『中国考古学報』第五冊　1951 年
5　中国社会科学院考古研究所『滕州前掌大墓地』文物出版社　2005 年
6　河南省信陽地区文管会、河南省羅山県文化館「羅山天湖商周墓地」『考古学報』1986 年 2 期
7　中国社会科学院考古研究所、北京市文物研究所琉璃河考古隊「北京琉璃河 1193 号大墓発掘簡報」『考古』1990 年 1 期
8　郭宝鈞『浚県辛村』科学出版社　1964 年
9　北京大学考古文博院、山西省考古研究所「天馬－曲村遺址北趙晋侯墓地第六次発掘」『文物』2001 年 8 期
10　劉振東「題湊与黄腸題湊」『新世紀的中国考古学－王仲殊先生八十華誕紀年論文集』科学出版社　2005 年
11　河南省文物考古研究所、三門峡市文物工作隊『三門峡虢国墓』（第一巻）文物出版社　1999 年
12　河南省文物考古研究所、周口市文化局『鹿邑太清宮長子口墓』中州古籍出版社　2000 年
13　郭大順「紅山文化的“唯玉為葬”与遼河文明起源特征再認識」『文物』1997 年 8 期
14　遼寧省文物考古研究所「遼寧牛河梁紅山文化“女神廟”与積石塚群発掘簡報」『文物』1986 年 8 期
15　遼寧省文物考古研究所「遼寧牛河梁第五地点一号塚中心大墓（Ｍ１）発掘簡報」『文物』1997 年 8 期
16　浙江省文物考古研究所、余杭市文物管理委員会「浙江余杭匯観山良渚文化祭壇与墓地発掘簡報」『文物』1997 年 7 期
17　河北省博物馆、文物管理処「河北平泉東南溝夏家店上層文化墓葬」『考古』1977 年 1 期
18　楊楠「商周時期江南地区土墩遺存的分区研究」『考古学报』1999 年 1 期
19　江蘇省丹徒考古隊「江蘇丹徒大港土墩墓発掘報告」『文物』1987 年 5 期
20　鎮江博物馆、丹徒県文管会「江蘇丹徒大港母子墩西周銅器墓発掘簡報」『文物』1984 年 5 期
21　安徽省文化局文物工作隊「安徽屯溪西周墓葬発掘報告」『考古学報』1959 年 4 期
22　鎮江市博物館、金壇県文化館「江蘇金壇鰲墩西周墓」『考古』1978 年 3 期
23　鎮江市博物館（劉建国）「江蘇宜興石室墓試掘簡報」『考古与文物』1983 年 4 期
24　蘇州博物館「江蘇蘇州滸墅関真山大墓的発掘」『文物』1996 年 2 期
25　江蘇省丹徒考古隊「江蘇丹徒北山頂春秋墓発掘報告」『東南文化』1988 年 3 ・ 4 期
26　谷建祥、林留根「江南大型土墩墓形制之研究」『東南文化』1998 年 1 期
27　関野雄「中国における墳丘の生成－北方文化の波及に寄せて」『中国考古学研究』東京大学出版会　1956 年（日本）
28　飯島武次「中国における墓上施設の出現と展開」『東アジア世界における日本古代史講座』2（倭国の形成と古墳文化）学生社　1984 年（日本）
29　黄展岳「説墳」『文物』1981 年 2 期
　王世民「中国春秋戦国時代的塚墓」『考古』1981 年 5 期
　王仲殊「中国古代墓葬概説」『考古』1981 年 5 期
30　高去尋「殷代墓葬已有墓塚説」『考古人類学刊』（台湾大学）41 期　1980 年
31　胡方平「中国封土墓的産生和流行」『考古』1994 年 6 期
　胡方平「試論中国古代墳丘的起源」『考古与文物』1993 年 5 期

32　河南省信陽地区文管会、河南省羅山県文化館「羅山天湖商周墓地」『考古学報』1986 2期
33　河南信陽地区文管会、光山県文管会「春秋早期黄君孟夫婦墓発掘報告」『考古』1984年4期
34　信陽地区文管会、光山県文管会「河南光山春秋黄季佗父墓発掘簡報」『考古』1989年1期
35　王世民「中国春秋戦国時代的塚墓」『考古』1981年5期
36　韓国河「論中国古代墳丘墓的産生与発展」『文博』1998年2期
　印群『黄河中下游地区的东周墓葬制度』社会科学文献出版社　2001年
37　陝西省雍城考古隊（韓偉）「鳳翔秦公陵園鉆探与試掘簡報」『文物』1983年7期
38　（日本）『世界考古学事典』（上）327頁　平凡社　1979年
39　（日本）町田章「中国における墳丘の形成」『歴史教育』第15巻第3号　日本書院　1967年
40　胡方平「略論楚墓墳丘産生的背景与年代」『江漢考古』1995年4期
　胡方平「楚墓墳丘起源蠡測」『東南文化』1991年3・4期
41　韓国河「論中国古代墳丘墓的産生与発展」『文博』1998年2期
42　印群『黄河中下游地区的東周墓葬制度』社会科学文献出版社　2001年
43　楊楠「論江南地区土墩墓与中国古代墳丘起源的関系」北京大学考古文博学院編『考古学研究』（五）下冊　科学出版社　2003年
44　李毓芳「西漢陵墓封土淵源与形制」『文博』1987年3期
45　張立東「初論中国古代墳丘的起源」『中原文物』1994年4期
46　固始侯古堆一号墓発掘組「河南固始侯古堆一号墓発掘簡報」『文物』1981年1期
　河南省文物考古研究所『固始侯古堆一号墓』大象出版社　2004年
47　劉衛鵬、岳起『咸陽塬上“秦陵”的発現和確認』『文物』2008年4期
　陝西省考古研究院、咸陽市文物考古研究所、周陵文物管理所「咸陽“周王陵”考古調査、勘探簡報」『考古与文物』2011年1期
48　陝西省雍城考古隊（韓偉）「鳳翔秦公陵園鉆探与試掘簡報」『文物』1983年7期
　陝西省雍城考古隊（韓偉）「鳳翔秦公陵園第二次鉆探簡報」『文物』1987年5期
49　陝西省考古研究所、臨潼県文管会「秦東陵第一号陵園勘査記」『考古与文物』1987年4期
　陝西省考古研究所、臨潼県文管会「秦東陵第二号陵園調査鉆探簡報」『考古与文物』1990年4期
　陝西省考古研究所秦陵工作站「秦東陵第四号陵園調査鉆探簡報」『考古与文物』1993年3期
　趙化成「秦東陵芻議」『考古与文物』2000年3期
50　河北省文化局文物工作隊「河北易県燕下都故城勘察与試掘」『考古学報』1965年1期
　河北省文物研究所『燕下都』文物出版社　1996年
51　河北省文管処、邯鄲地区文保所、邯鄲市文保所「河北邯鄲趙王陵」『考古』1982年6期
52　張学海「田齊六陵考」『文物』1984年9期
53　河北省文物管理処「河北省平山県戦国時期中山国墓葬発掘簡報」『文物』1979年1期
　河北省文物研究所『 譻墓－戦国中山国国王之墓』文物出版社　1995年
54　中国科学院考古研究所『輝県発掘報告』科学出版社　1956年
55　河南省文物考古研究所「河南新鄭胡庄韓王陵考古発現概述」『華夏考古』2009年3期
56　江陵県文物工作組「湖北江陵楚塚調査」『考古学集刊』（4）　1984年
57　山東省文物考古研究所「斉故城五号東周墓及大型殉馬坑的発掘」『文物』1984年9期
58　山東省博物馆「臨淄郎家庄1号東周殉人墓」『考古学報』1977年1期
59　山東省文物考古研究所、沂水県文物管理站「山東沂水劉家店子春秋墓発掘簡報」『文物』1984年9期

60　史為「長沙馬王堆一号漢墓的棺椁制度」『考古』1972 年６期

61　趙化成「周代棺椁多重制度研究」『国学研究』第五巻　北京大学出版社　1998 年

62　李玉潔『先秦喪葬制度研究』中州古籍出版社　1991 年

63　印群『黄河中下游地区的東周墓葬制度』社会科学文献出版社　2001 年

64　兪偉超、高明「周代用鼎制度研究」（上、中、下）『北京大学学报（哲学社会科学版）』1978 年１期・２期、1979 年１期

65　印群『黄河中下游地区的東周墓葬制度』社会科学文献出版社　2001 年

66　滕銘予「論関中秦墓中洞室墓的年代」『華夏考古』1993 年２期

67　鎮江市博物館「江蘇溧水、丹陽西周墓発掘簡報」『考古』1985 年８期

68　鎮江市博物館浮山果園古墓発掘組「江蘇句容浮山果園土墩墓」『考古』1979 年２期

69　南京博物院「江蘇句容県浮山果園西周墓」『考古』1977 年５期

70　南京博物院「江蘇丹徒南崗山土墩墓」『考古学報』1993 年２期

71　南京博物院「金壇裕巷土墩墓群一号墩的発掘」『考古学报』2009 年３期

72　鎮江博物館「丹徒鎮四脚墩西周土墩墓発掘報告」『東南文化』1989 年４・５期

73　谷建祥、林留根「江南大型土墩墓形制之研究」『東南文化』1998 年１期

74　劉建国（鎮江博物館）「江蘇丹徒粮山春秋石穴墓－兼談呉国的葬制及人殉」『考古与文物』1987 年４期

75　浙江省文物考古研究所、紹興県文物保護管理局『印山越王陵』文物出版社　2002 年

76　湖北省荆沙鉄路考古隊『包山楚墓』文物出版社　1991 年

77　河北省文化局文物工作隊「河北易県燕下都第十六号墓発掘」『考古学報』1965 年２期

78　安徽省文化局文物工作隊「安徽淮南市蔡家崗趙家孤堆戦国墓」『考古』1963 年４期

表１－１　中国商・周時代の江南地区土墩墓一覧（単位：ｍ）

出土地点	墓葬数量	墳丘の概要			埋葬施設	副葬品	時代	備考（註）
		地形	直径	高				
江蘇省溧水県 烏山４号墩	2	山腹斜面	約９	1	山腹斜面を土で平らにならしてある	陶器、幾何学印紋陶器、原始瓷器	西周前期	註 67
江蘇省句容県 浮山果園 D1	16	丘陵地帯の山頂	東西 23、 南北 24	2.5	M2 石床 4.2 × 1.1 ～ 1.3 M11 も石床	陶器、幾何学印紋陶器、原始瓷器	西周中期	土墩墓群中の１基、 註 68
江蘇省句容県 浮山果園 D2	8	丘陵地帯の山上	東西 15、 南北 20	3	M3 遺物安置範囲 3.9 × 1.6	陶器、幾何学印紋陶器、原始瓷器、青銅器	西周中期	陶器はすべて破損、 註 69
江蘇省金壇県 鰲墩	2	平地	東西 15、 南北９	2	M1 木炭を敷く 範囲２× 0.9	陶器、幾何学印紋陶器、原始瓷器	西周中・後期	墳丘は破壊
江蘇省宜興県 丁蜀南山 M2	1	山腹斜面	東西径 12、 南北径 10	3.9	石室は甬道、門、墓室からなる 墓室 3.9 × 0.92 ～ 1.04 × 1.8	幾何学印紋陶器	西周後期から春秋前期	
江蘇省丹徒県 南崗山 D2	1	山稜沿いに分布 （土墩墓群中の１基）	東西 14.9、 南北 10.5	2.45	長方形竪穴土坑長 1.9、幅 0.78、深さ 0.12	陶器、幾何学印紋陶器	春秋前・中期	14 基を発掘、 註 70
江蘇省丹徒県 南崗山 D12	2	山稜沿いに分布 （土墩墓群中の１基）	東西 17.3、 南北 10.8。	3.15	長方形竪穴土坑、 M1 深さ 1.05、木製葬具あり、 M2 深さ 0.84	M1 陶器、幾何学印紋陶器、原始瓷器あり M2 副葬品無し	春秋中・後期	

出土地点	墓葬数量	墳丘の概要			埋葬施設	副葬品	時代	備考（註）
		地形	直径	高				
江蘇省金壇県 裕巷 D1	3	丘陵地帯の山上	東西 25 南北 25.5	残高 2.5	M1 深さ 0.5、 M2 深さ 0.43、 M3 深さ 0.75、 別に 13 ヶ所の遺物群あり	M1 陶器あり、 M2、M3 陶器、原始瓷器あり	春秋中・後期	封土破壊、 註 71
安徽省屯溪市 M1	1	山麓の平地	33.1	1.75	石床あり、8.8 × 4.4	原始瓷器、青銅器	西周中期	石材は河原丸石
安徽省屯溪市 M2	1	丘陵の末端			石床あり、残長 5.2 × 2.2 外枠あり（石槨）	陶器、幾何学印紋陶器、原始瓷器、青銅器	西周中期	別に M3、M3 の２基あり
江蘇省丹徒県 大港烟墩山２号墓	1	山腹斜面の窪地	直径約 20	２弱	石床あり 3.6 × 2.4	原始瓷器、幾何学印紋陶器、陶器	西周前期	石、石板はすべて天然石
江蘇省丹徒県 大港母子墩	1	丘陵地帯の山頂	直径 30	5	石を墓底に積み上げた側枠（6.1 × 3.2） 真ん中に草木灰を敷き、その上に筵を敷く	青銅器、幾何学印紋陶器、原始瓷器	西周前・中期	
江蘇省丹徒県 四脚墩 M6	1		直径 27	3.7	石を高さ 0.5 に積み上げた側枠（石槨）、 残長 3.8、幅 2.6	玉器、陶器、原始瓷器	西周後期	註 72
江蘇省丹徒県 石橋大笆斗墓	1		直径 39	4.25	土壙竪穴土坑、 長さ 8.2、幅 5.2 ～ 5.8、深さ 1.5 中に椁室を設け、地山を棺台につくる	原始瓷器、青銅器	西周後期	註 73
江蘇省丹徒県 大夫墩	1		直径 60	12	土壙竪穴土坑、 長さ 15.6、幅 4.5 ～ 6.6、深さ 4.6 積石の二層台、 中に槨室を設置	原始瓷器、青銅器	春秋前・中期	
江蘇省丹徒県 粮山 M2	1	山頂	直径約 14	約 4	長方形竪穴石坑東西長 11.2 ～ 12、南北長 6.4 ～ 7、深さ９、底に草木灰を敷く	青銅器、原始瓷器、幾何学印紋陶器、陶器、玉器	春秋前期	１体の殉葬あり、 註 74
江蘇省蘇州市 真山 D9M1	1	山頂	東西径 70、 南北径 32、 版築	7	長方形竪穴土坑東西長 13.8、 南北最幅８、最深 1.8、 不規則な二層台あり	玉石器が主で、原始瓷器、海貝、緑松石貝、漆器もある	春秋中・後期	被葬者は呉王であろう
江蘇省丹徒県 北山頂墓	1	山頂	東西径 32.25、南北径 30.75	5.5	刀形竪穴土坑、 墓道と墓室からなる、 墓室規模 5.8 × 4.5 × 1.35 ～ 1.45	青銅器、原始瓷器、陶器	春秋後期	3 体の殉葬あり、 被葬者は呉王か
浙江省紹興市 印山墓	1	山頂	東西長 72、 南北幅 36	9.8	長方形竪穴石坑東西長 46、南北幅約 14、深さ 12.4	陶器、玉石器、漆木器	春秋末期	越王允常 註 75

表１－２　中国東周時代墳丘墓一覧（単位：ｍ）

墓葬所在地	発掘期間	保存状態	墳　丘	墓葬形態	棺椁構造	副葬品	被葬者の身分	年代	備考（註）
河南省固始侯古堆 M1	1978～1979	盗掘	円錐状、直径55、高さ７。版築土層厚 0.4～0.5。	１本墓道の「甲」字形墓、東向き。墓坑底東西 10.8、南北９、深さ 16	二重椁一重棺	青銅器（礼器、楽器、車馬器、雑器等）、玉器、陶瓷器、漆木器等	宋景公の妹、呉太子夫差の勾夫人	春秋末年	椁室の外を砂、石で詰める。17 体の殉葬あり。
湖北省荊門市包山 M2	1982	良好	円形直径 54、高さ 5.8	１本墓道の「甲」字形墓。墓坑東西長 34.4、南北幅 31.9、底長 7.8、幅 6.85、深さ 12.45	二重椁三重棺（外棺長方形、中棺の底孤形、内棺彩色絵のある長方形）	銅器、鉄器、鉛器、陶器、玉石器、骨角器、漆木器、竹器、麻糸、皮革製品等 1935 件（竹簡含まず）	楚国大夫	戦国（前 316 年）	墳丘未版築。註 76
河北省邯鄲市周窯 M1	1978	盗掘	規模 31 × 29、高さ 3.3	２本墓道の「中」字形墓。墓坑規模 14.5 × 12.5、深さ 7.5。	外石槨の内側に角材製の木椁、石槨現存高 3.55 漆棺は残存せず	鉄器、銅器、陶器等	陳三陵村３号趙王陵の陪葬墓	戦国	東墓道内に一車馬坑があり、２頭の殉葬馬。西墓道内に一殉葬坑があり、子供２体の殉葬。
河北省易県燕下都 M16	1964	盗掘	底部南北長 38.5、東西幅 32、高さ 7.6	１本墓道の「中」字形墓。墓坑南北 10.4 東西 7.7 深さ 7.6。	不明確	鉄器、陶器、石器、からす貝、骨器	燕国の高級貴族	戦国前期	墓壁版築後に火で焼く。槨の床に炭を敷く。白灰とカラスガイの貝殻を混ぜて二層台をつくる。焼土塊で墓坑を埋める。註 77
陝西省咸陽市周陵鎮３号陵南墓	表面調査		底辺長 43～44、上辺長４～５、高さ 10	２本墓道竪穴土坑墓			秦国の高級貴族	戦国	方錐台形の墳丘、二段築成
陝西省咸陽市周陵鎮３号陵北墓	表面調査		直径 22、高さ６	２本墓道竪穴土坑墓			秦国の高級貴族	戦国	円丘形の墳丘

表１－３　中国戦国時代の王陵一覧（単位：ｍ）

墓葬所在地	墳　丘				墓葬の形態	被葬者の身分	年代	備考（註）
	形状	大きさ	高さ	その他				
安徽省淮南市蔡家崗趙家孤堆 M1	円形	直径約 24	約４		１本墓道竪穴土坑墓。土坑規模５× 4.3。	蔡声侯産の夫人	戦国初期	発掘。註 78
安徽省淮南市蔡家崗趙家孤堆 M2	不明		１～ 2.4		１本墓道竪穴土坑墓。土坑規模５× 4.1。	蔡声侯産	戦国初期	発掘
河北省邯鄲県陳三陵村１号陵	長方台形	南北 57 ×東西 47	15	陵台の南北 288、東西 194 東向きの道あり		某代趙王	戦国	調査
河北省邯鄲県陳三陵村２号陵	長方台形	南陵南北 50 ×東西 42 北陵南北 47 ×東西 43	２陵共に 12	陵台の南北 242、東西 182 東向きの道あり 陵台の北に一陪葬墓あり		某代趙王夫婦	戦国	調査。２陵あり。

墓葬所在地	墳　　丘				墓葬の形態	被葬者の身分	年代	備考（註）
	形状	大きさ	高さ	その他				
河北省邯鄲市周窯村３号陵	長方台形	北陵南北 66 ×東西 37	北陵 5.5	陵台の南北 181、東西 85		某代趙王夫婦	戦国	調査 ２陵あり
		西南陵 74 × 66	西南陵 11	陵台の西北に陪葬墓あり				
				周囲を囲む墻壁あり，東壁 496，西壁 498，南壁 464，北壁 489				
				東向きの道あり				
河北省永年県温窯村１号陵	長方台形	49 × 47	3	陵台の南北 340、東西 216 東向きの道あり		某代趙王	戦国	調査
河北省永年県温窯村２号陵	長方台形	南陵 39 × 37	どちらも約６	陵台の南北残長 172、東西 201		某代趙王	戦国	調査 ２陵あり
		北陵 43 × 30		東向きの道あり				
河北省平山県三汲郷 M1				墓上建築基壇底辺東西約 90、南北約 100.5、墓坑口の上に残高約９	２本墓道竪穴土石坑墓、土坑辺長約 30	中山王	戦国	発掘 東側に２号墓が並列す。陪葬坑、陪葬墓あり
河北省平山県三汲郷 M6			1.7		２本墓道竪穴土石坑墓、土坑辺長約 27.5	某代中山王	戦国後期	発掘 陪葬坑、陪葬墓あり
河南省輝県固囲村 M1 ～ M3				墓上建築	２本墓道竪穴土坑墓	某代魏王（Ｍ２）と夫人（Ｍ１、Ｍ３）	戦国後期	発掘 陪葬墓、祭祀坑あり
河南省新鄭県胡庄村 M1	「中」字形		7		２本墓道竪穴土坑墓 土坑東西 18.4 ～ 21.3、南北 18.45 ～ 26、深さ約８ 二重椁二重棺 棺内外面に朱漆を塗布	某代韓王后	戦国末期	発掘
河南省新鄭県胡庄村 M2				墓上建築基壇は「中」字形を呈す 残高 10	２本墓道竪穴土坑墓 土坑東西 36.5、南北 26、深さ約 11.5 二重椁二重棺 棺内外面に朱漆を塗布	某代韓王	戦国末期	発掘 墓の西側に建築遺構あり 墓の周囲に三重の濠が巡る
陝西省咸陽市周陵鎮１号陵南墓		東西 90 ～ 120、南北 90	２～５	破壊	４本墓道竪穴土坑墓	秦恵文王	戦国	ボーリング調査
陝西省咸陽市周陵鎮１号陵北墓	方錐台形	法下長 75 ～ 88、法肩長 32 ～ 34	14.8	南墓との間隔 160	４本墓道竪穴土坑墓	秦恵文王夫人	戦国	周溝が巡り、その中に陪葬墓、建築遺構あり
陝西省咸陽市周陵鎮２号陵南墓	方錐台形	法下長 90 ～ 103.7、法肩長 41.4 ～ 48.1	14		４本墓道竪穴土坑墓	秦悼武王	戦国後期	ボーリング調査 二重の墻壁が巡る 二重の墻壁の外側にはそれぞれに濠が巡る
陝西省咸陽市周陵鎮２号陵北墓	方錐台形	法下長 55.5 ～ 66.2、法肩長 9.5 ～ 10	17.5	南墓との間隔 146	４本墓道竪穴土坑墓	秦悼武王夫人	戦国後期	建築遺構５ヶ所、陪葬坑 27 基、陪葬墓 168 基あり

第Ⅱ章　中国古代墳丘墓の繁栄－秦漢時代－

秦漢時代とは秦から前漢、新〔王莽〕、後漢までの四王朝をいう。秦代は紀元前 221 年から同 206 年までのわずか 15 年間である。前漢、新、後漢の時期は紀元前 206 年から紀元後 220 年までの 425 年間で、この時代は新を前漢に組み入れて、前漢時代と後漢時代に大別される。

第１節 秦代の墓葬

１　秦始皇帝陵

（１）始皇帝陵の概要

西安市臨潼区の東５㎞の驪山北麓に所在する始皇帝陵は、古代中国最初の一大封建国家秦朝を統一した始皇帝嬴政の陵墓である。中国史上最初の皇帝陵がつくられたことは、陵園・陵寝制度〔陵園を建て、寝殿などの建物を陵墓に造営する〕として前漢の皇帝陵築造に直接受け継がれ、大きな影響をおよぼした。

始皇帝陵の陵園は大変広大であるが、考古学調査の進展に伴って、一つ又一つと新発見が積み重なって陵園の様子が明らかになった[1]。そこでつぎに、これを陵園、陵墓建築、陪葬坑、陪葬墓の四つに分けて概述しよう（図２－１・２）。

Ａ　陵　園

内外二重に巡らせた陵園の版築土墻〔土壁〕は、南北方向の長方形を呈す。最新の測量によると内園の南北長は 1355m、東西幅は 580m で、試掘により内園を取り巻く墻壁の内側と外側の規格および構造は同じ瓦頂廊道〔墻壁の屋根を瓦葺きにし、その軒下の内側と外側を回廊にした構造〕であることがわかった。内園の真ん中には１本の東西に延びる隔壁墻があり、内園を南北に分断している。さらに北半分の区画は南北に延びる本の隔壁墻で東西に二分されており、内園は南区、東北区、西北区の３区に仕切られている。外園は、西墻壁長が 2188.4m、東墻壁長が 2185.9m、北墻壁長が 971.1m、南墻壁長が 976.2m で、東西南の三方に門が開かれている。しかし、北側の門址は未発見である。陵園の内壁と外壁の空間で、墳丘の東西軸線上からは南北両側に一組の独立した三出闕〔門楼の平面形が三段の階段形をした闕〕が対称的に検出された。内園の南区にある墳丘は、版築成形で、底辺がほぼ方形を呈した、方錐台形につくられる。その規模は東西 345m、南北 350m、頂部の東西 24m、同南北 10.4m、高さ 55m である。分布調査とボーリング調査により、墳丘の中央部で石壁と版築壁で取り巻いた地宮〔地下宮殿〕の存在が確認された。墓室は地宮の中央にあり、墓道がその東側と西側に２本つく。検測により地宮内は大量の水銀が充たされていることが検証さ

れ、史書の記載と符合することが証明された。さらに実地調査の結果、墳丘の東・南・西の三面の地下に阻水暗渠〔水の侵入を防ぐ暗渠〕が、墳丘の西側には排水暗渠がつくられており、地下水が地宮に流れ込むのを防いでいる。

B　陵寝建築

陵園内には数多くの建築遺構が見つかっている。内園南区の墳丘北側西寄りのところには「秦始出寝、起于墓側〔秦、始めて寝を出し、墓の側に起てる〕」（『後漢書・祭祀下』）と推測される寝殿遺構がある。内園西北区には便殿〔寝殿のそばに付設の別殿〕遺構の存在が考えられる。陵園西側の内墻と外墻との間には、中心となる建物とその付属建物遺構があり、陶器に刻まれた「麗山飤官」「‥‥厨」等の文字から見て、そこに陵寝に飲食を供え奉る「飤官」の施設があったと考えられ、その「飤官」遺構の北には陵園を守る官吏宿舎の遺構が想定されている。

C　陪葬坑

陵園の内外には多くの陪葬坑が分布しており、今のところ176基が検出されているが、その構成は外蔵として仕組まれている〔様々な機能をもつ陪葬坑を相互に関連づけ、合理的に系統化して、墓葬の中に内蔵するのではなく、その周辺に配置すること〕（表２－１）。陪葬坑の中でも最も規模が大きく、重要なものが兵馬俑坑である。

D　陪葬墓

主要なものは陵園の東にある上焦村の西部から全部で17基の墓葬が見つかっている。そのうち８基が発掘され、被葬者は始皇帝二世によって処刑された始皇帝の親族や大臣と思われている。内園東北区から検出された数十基の墓葬は陪葬墓になろう。このほか、墳丘西側の北端から「甲」字形の墓が見つかっている。

陵園の西南にある趙背戸村と姚池頭村一帯の広い範囲から陵墓築造にたずさわった人の刑徒の墓地が発見されているが、部分的に発掘されているだけである。

（２）始皇帝陵の特徴

秦国の存在期間は短く、墳丘墓の関する資料はあまりにも少ない。しかし秦の始皇帝陵に代表されるように、それは前代を引き継いだ墳丘墓制を基礎として創造したものであり、秦・漢代の皇帝陵の新しい型式を創り出した。

始皇帝陵の諸要素の構成は、まず墳丘を中心としてその周囲を外壁で囲み、陵園を構え、その中に建物や陪葬坑、陪葬墓などを配置されていることである。それらは前代の戦国時代に出現している。たとえば、外壁は趙王陵や中山王陵、秦王陵などに、陵寝建築と陪葬墓は趙王陵や中山王陵、魏王陵、秦王陵に、陪葬坑は趙王陵や中山王陵、秦王陵などのように。これらの要素を一つにまとめ上げて、さらに範囲を拡大し、規模を増大し、系統化させて全体に象徴的意義を具えたのは、秦の始皇帝陵がはじめである。始皇帝陵の墳丘は巨大で、形状は方錐台形（戦国時代諸国の墳丘は長方形や方形、下方上円、円形と多種であり、それと共にそれには墓上建築の形式がある）をし、そ

の外形はあるいは高々とそびえる宮殿を象徴したものであったかもしれない。墻壁は内壁と外壁で二重になって（戦国時代の中山王陵から出土した兆域の銅板には規格された王陵が二重の墻壁で囲まれ、咸陽の秦王陵も二重の墻壁をもつ）いることは、羅城と宮城の二重城壁を象徴したものであろう。墳丘の周辺のあちこちから建築遺構が検出されており（戦国期の秦国の王陵では建物は墓の側にあり、趙国や中山国、魏国、韓国では墓室の上に建てられる）、寝殿や陵園官吏舎などに分類できる。たくさんの陪葬坑は、内園内の分布はもとより、内園と外園の間および陵園外にまでおよんでいる（趙国や中山国、秦国の王陵の陪葬坑は陵園内にあり、その主なものは車馬などの交通手段で占められている）。その数は176基におよんでおり、その内容は大変充実していて、百官の役所的象徴のようである。陪葬墓は陵園内にも陵園外にもあり（趙国や中山国、魏国、秦国の王陵の陪葬墓はすべて陵園内にある）、被葬者の身分は親族や大臣などである。そのほか、始皇帝陵は初めて陵邑の制を設置している。それらを全体的に見ると、陵園の仕組みのすべては都城を模倣しているようである。それは、冥界都城の主人として地下宮殿に住んでいるとはいうものの、生前同様に天下に君臨したいという願望を抱いているように思われる。始皇帝陵が大統一封建国家を建立したのに伴って誕生したことは、始皇帝が６ヶ国を統一した功績と秦国の国力を誇示して空前絶後の陵墓を設計建造したことにある。そして、それには統治強化と統一を維持する強い政治的願望が含まれているのである。

２　秦代の中型・小型墓

秦は都を咸陽に定めたため、咸陽城〔現在の咸陽市ではなく、漢長安城の北方に位置する〕の郊外にたくさんの墓地が分布する。発掘調査された主なものをあげると、咸陽城の西3.8㎞に戦国時代中期から秦代にかけての鴨溝村墓地（125基）[2]がある。さらに咸陽城の西には任家咀墓地（242基）[3]と塔尓坡墓地（381基）[4]があり、前者が春秋時代中期から秦代までと長期間存続し、後者が戦国時代後期から秦代である。秦の都咸陽は渭河の北岸に位置し、咸陽の北に対して渭河の南岸にある秦の上林苑には多くの離宮が分布していた。そのうち最も重要な章台や興楽宮などは前漢の長安城の範囲内に位置していることもあって、漢長安城の東郊、つまり現在の西安市の北郊にある尤家庄一帯に秦墓が群集している。そのうちの一部（123基）は発掘調査されて、報告書が刊行されている[5]。その墓葬の時期は戦国時代後期から秦代である。また、西安市の南郊からも相当数の秦墓が発掘調査され、315基がまとめて報告されている[6]。これらは春秋時代末期から秦代のもので、秦杜県城に関係したものと考えられている。このほか、前述した始皇帝陵東側の上焦村でもひとまとまりの秦墓が発掘されている。関中地区以外では陝西省隴県[7]、河南省泌陽、湖北省雲夢などからも秦代の墓が見つかっている。

秦の建国は短期間なため、その前代の戦国時代末期とその後の前漢時代初期の墓葬の形態は基本的に同じで区分できない。秦代の中・小型墓の特徴を見ると、墓葬の形態は竪穴土坑墓（傾斜墓道をもつものもある）と竪穴墓道洞室墓〔竪穴に掘って横穴に墓室を刳り貫く〕、傾斜墓道洞室墓が

ある。中型墓では傾斜墓道竪穴土坑墓か、洞室墓が多く、墓道または墓室に必ず耳室か壁龕を具えている。副葬品は陶器以外では金銀器、銅器、鉄器、玉製品、骨器、漆器などが多い。小型墓では竪穴土坑墓と竪穴墓道洞室墓が多く、洞室は竪穴墓道の一方の真ん中かやや偏って掘られている。墓道は墓室より広大である。墓室にはたくさんの壁龕をもつ。主な副葬品は陶器で、その基本的組み合わせは鼎、ごう、蒜頭壷〔口唇部が大蒜の球根形状をした壷〕、繭形壷などであるが、罐〔壷〕や鋬〔椀鉢形の鍋〕、鉢、甑、缶〔甕〕などもある。

秦代の中・小型墓の墳丘の有無については、考古資料にはなく、現段階ではよくわからない。

第２節 漢代の墓葬

皇帝陵（特大型墓）、王墓、列侯〔以後、諸侯と訳す〕墓、二千石官吏墓（大型墓）、中下級官吏墓、庶民墓（中・小型墓）に分けて叙述する。

1　漢代の皇帝陵

（1）前漢皇帝陵

A　前漢皇帝陵の概要

前漢 11 代の皇帝と皇后（または夫人、后妃）の合葬陵墓のうち、9 基は渭河の北側の咸陽原〔段丘平原〕に分布している。『水経注』などの史籍によると、渭河北岸の九陵は、西から東に武帝茂陵と夫人陵、昭帝平陵と上官皇后陵、成帝延陵、平帝康陵、元帝渭陵と王皇后陵、哀帝義陵、惠帝安陵と張皇后陵、高祖長陵と呂后陵、景帝陽陵と王皇后陵に当てられている[8]。その位置関係は、茂陵が最も西に、陽陵が最も東に位置し、長陵と安陵は渭河をはさんで漢長安城に相対するところにある（図２－３）。近年、研究者は新たな研究を重ね、延陵と安陵の間にある３基の帝陵の配列を見直し、西から東へ〔平帝康陵を〕元帝渭陵に、〔元帝渭陵を〕哀帝義陵に、〔哀帝義陵を〕平帝康陵にする新見解を発表した[9]。この帝陵の問題解決には今後の考古学調査を俟たねばならない。

文帝霸陵と竇皇后陵、宣帝杜陵と王皇后陵は西安市東郊の白鹿原と東南郊の杜陵原にわかれて位置する。前漢 11 陵すべてに考古学的調査やボーリング調査が行われており、杜陵と陽陵はより多くの発掘調査も実施されている（表２－２）。

前漢帝陵は、霸陵を除くすべてに四方に墓道を持つ竪穴土坑墓形式が採られており、墓道のうち東墓道が主墓道になっている。陵〔の墓室〕には黄腸題湊の葬制〔柏の良木の黄腸木を木口積みにして槨をつくる制〕が用いられ、皇帝と皇后は金縷玉衣をまとっていると考えられる。皇帝・皇后陵の墳丘は版築成形で、四角台錐形につくられている。底部と頂部は方形もしくはほぼ方形を呈し、底辺長が 160m ～ 170m、高さが 25m ～ 30m である。その中でも茂陵が最大の墳丘をもち、底辺長が 230m、高さが 46.5m である（図２－４）。その墳丘の周囲には版築の土墻が巡らされ、略方形の陵園がつくられている。前期の長陵と安陵では皇帝と皇后陵が同じ一つの陵園に収まっているが、霸陵以後では皇帝と皇后とはそれぞれに陵園を形成する。皇帝陵園の一辺の長さは約 400m、

皇后陵園は約 350m で、陵園の四面に闕門を設けている。陵園の内外には陪葬坑が配置されており、中でも陽陵の陪葬坑の配置が最も明確である。陵園付近には寝園が設置され、寝園内に寝殿と便殿が建てられていた。さらに、皇帝陵には廟〔陵廟〕が陵の遠方もしくは近辺に建てられている。なお、陽陵と茂陵の陵園には、もう一重、外側に垣墻の巡っているのが見つかり、二重の垣墻が形成されていた。皇帝と皇后の埋葬方法は、同塋異穴合葬形式〔同じ墓地で異なった壙に葬る合葬形式〕を採っており、昔は皇后陵が皇帝陵の東側にあると考えられてきたが、近年の研究者は皇帝陵を東に皇后陵を西に置く合葬形式が主であったと考えている。規模についていうならば、皇后陵は皇帝陵よりも小さいが、呂后陵だけは長陵とほぼ同じ規模である。

史書に霸陵は「因其山、不起墳〔其れ山に因りて、墳を起こさず〕」(『漢書・文帝紀』) とある。調査の結果、霸陵の墳丘などの築造制度が、ほかの 10 陵とは違っており、墳丘もなく、陵園もない。しかも墓室は竪穴墓制なのか、それとも横穴洞室墓制なのか、よくわかっていない。

長陵から杜陵までの７陵には陵邑が設けられている。陵邑の多くは陵の北側か、東側にあるが、元帝渭陵以降には陵邑は設置されていない。

皇帝陵の周辺にはたくさんの陪葬墓が分布しており、咸陽原と杜陵源ではたくさんの墳墓が累々と連なっている様子が見られる。

杜陵の発掘調査では、杜陵園の東門と北門遺構、寝園遺構、１号と４号陪葬坑、王皇后陵の東門遺構と寝園遺構が明らかになった[10]（図２－５）。

陽陵の発掘調査では、南面の闕門遺構、陵園内の墳丘東側の陪葬坑（11 基)、陵園外南区の陪葬坑（14 基)、羅経石〔表面の十字形の線刻が東西南北を指しているため羅盤石と呼ばれていた礎石〕遺構、刑徒墓（29 基)、陪葬墓園と陵邑遺構が調査された[11]（図２－６・７）。

B　前漢皇帝陵の特徴

前漢皇帝陵の制度は、方形墳丘の外周を取り巻く二重の垣墻で陵園を構成し、陵園内外に陵寝建築や陪葬坑、陪葬墓などの配置に見られるように、秦の始皇帝陵を継承してきたことは明らかである。前漢帝陵墓は秦の制度を全面に継承すると共に、しだいに何某かの変化をもたらしていった。たとえば、墳丘底部の形状を長方形（長陵、安陵）から方形または方形に近い形に変化させたこと、陵園の形状を長方形（始皇帝陵は南北に長方形、長陵も南北に長方形、安陵は東西に長方形）から方形または方形に近い形に変化させたこと、陵寝建築を陵園（内垣墻）内（始皇帝陵、長陵）から陵園（内垣墻）外（内外の垣墻の間）に移したこと、陪葬坑を陵園の内外広範囲に配置（始皇帝陵）していたのを陵園（内垣墻）の内外（内外垣墻の間）にそろえて配置するように変えたこと、陪葬墓を陵園の内外に配置（始皇帝陵）していたのを陵園外に配置するように変えたこと、などがあげられる。このような変化は漢代初頭にはじまっているが、総体的には景帝陽陵の時期に完成したようである。合葬形式では長陵と安陵の同園内合葬は異園合葬へと変化する（文帝の時からはじまるが、やや特殊である)。

前漢皇帝陵にはさらに陵廟と陵邑を設置（高祖長陵から宣帝杜陵まで）されているが、陵廟は前

漢に新しく取り入れられたものである。

（２）後漢皇帝陵

Ａ　後漢皇帝陵の概要

後漢皇帝陵は12基あるが、献帝禅陵が河南省焦作市修武県にある以外は、洛陽市の東北の孟津県にある邙山と洛陽市の東の偃師市に分布する。その11基は光武帝原陵、明帝顕節陵、章帝敬陵、和帝慎陵、殤帝康陵、安帝恭陵、順帝憲陵、衝帝懐陵、質帝静陵、桓帝宣陵、霊帝文陵である。文献によればそれぞれの帝陵は後漢洛陽城の位置と関係しており、北部の邙山には原陵、恭陵、憲陵、懐陵、文陵の５基が、そのほかの６陵は偃師市に所在する（図２－８）。『帝王世紀』などの文献には諸陵の方位や規模が記されているのであるが、わずかなそれらの内容をもとに各帝陵の位置を確定することはできない。邙山の５陵について見ると、原陵は孟津県鉄謝村付近の「劉秀墳」に伝えられているが、ある研究者はこれに賛同せず、送庄郷劉家井村の西北にある大塚を原陵に、三十里鋪村の南にある俗称「大漢塚」を恭陵に、「大漢塚」の南側にある平楽村の「二漢塚」と「三漢塚」をそれぞれ憲陵と懐陵に、送庄郷護駕庄村の南にある大塚を文陵に考えている。しかし、別の研究者はこの見方に反対で、劉家井村の西北にある大塚を原陵とせず、文陵にあてるなど、今日に至るまで共通の認識に至っていない[12]。偃師の６陵についても、近年の考古学調査やボーリング調査、試掘により、白草坡と李家村、郭家嶺、西干村、冠店などの村域から６基以上見つかっており、現在のところそれらを各帝陵に対応させることは不可能である[13]。

ボーリング調査の結果、後漢皇帝陵の墳丘は円錐台形につくられ、墓葬の形態は１本の墓道（南向き）に塼石室墓で、墳丘の東北部と南部に陵寝建築遺構が配され、帝陵の周辺にわずかな陪葬墓が分布することが確認された。なお、文献には帝陵の周囲に行馬〔駒除け〕が設置されていると記されている。

Ｂ　後漢皇帝陵の特徴

前漢皇帝陵のつくり方に比べて、後漢皇帝陵のそれは著しく変化した。墳丘を囲繞していた陵園の墻は「行馬〔駒除け〕」に取って代わり、方錐台形の墳丘は円錐台形に変化し、墓室の四方に付けられた墓道は１本になり、黄腸題湊の墓制は石題湊塼室〔石槨塼室〕の墓制となり、皇帝と皇后の埋葬は異陵並穴合葬〔別々に陵と墓穴を構えて同じ陵園内に葬る〕から同陵同穴合葬〔同じ陵内の同じ墓室に葬る〕に変わり、陵寝建築は簡素化して献殿などになり、陵廟と陪葬坑はなくなっている。しかし、陵園入口から陵までの墓道には石像が並べられるようになる。このように全体的には、陵墓施設は簡素化への方向に変化しているのである。

２　漢代の王墓

漢は創建の当初、王と諸侯の二等級の爵位をつくり、前・後漢は分封王侯の制を設けた。王と諸侯墓制は漢代の喪葬礼制の中でも重要な構成部分であり、したがって漢代の考古学では重要な調査

研究対象となっている。

（1）前漢王墓

王墓の規模は皇帝陵につぐ大型墓で、その数も多く、広域に分布している。そのため考古学調査は、全面発掘されたものもあれば、部分発掘や単なる表面調査だけのものもあり、部分的にしか進んでいない。報告書の刊行も本報告のものや概報、ダイジェストなどとまちまちである。全面あるいは部分的に発掘された資料の公表は多く、時期や被葬者の身分がはっきりわかった前漢王侯と王后墓は45基で、それらが属する王国は広陽、中山、趙、常山、河間、菑川、斉、呂、済南、済北、昌邑、魯、梁、楚、泗水、広陵、長沙、南越の18にのぼり（表２－３）、北京市と河北省、山東省、河南省、江蘇省、湖南省、広東省に分布している。王墓の発見が最も多いのは梁国と楚国であるが、あるものは表面調査しかされていない。北京の老山漢墓や安徽省の六安漢墓などは全面発掘されているにもかかわらず、資料は未発表であるため、ここには収録していない。そのため、前漢王墓の発見数はここにあげた数より多くなるだろう。

王墓の研究は、その系列の考古学的調査に伴ってしだいに進展していった。考古資料が一定程度蓄積されると、黄腸題湊葬制の研究や玉衣制度の研究、車馬殉葬制度の研究、墓上建築制度の研究、墓葬外蔵槨制度の研究など、特定の問題が研究されるようになった。最近では、王墓の総合的研究に力が入れられる一方、研究の細分化と深化が進み、王墓研究は漢代考古学の中でも特に注目されている。

王墓研究で、まず問題となるのは被葬者の身分の認定である。王墓と認定しやすいものとしては「黄腸題湊」墓制の導入や被葬者の金縷玉衣の着装があげられる。墓から出土した銘文や朱書きの王国名、紀年銘のある器物や封泥、印章などの文字資料は、墓葬の国を断定できるだけでなく、その時の王をも確定することができる。このような特徴のない大型墓は、墓地の立地、封土の高さ、墓葬の形態、副葬品の特徴などから考察し、関連する史書の記載を参考に被葬者の身分を認定する。しかしながら、被葬者の所属を確定することは難しく、発掘調査者と研究者とは往々にして意見の違いから論争を引き起こすのである。それは王墓研究上、難しい問題である。

A　前漢王墓の概要

ここでは墓葬の形態と副葬品について概述する。

ⅰ　墓葬の形態

築造の違いから竪穴土石坑墓と横穴崖洞墓に大別する。竪穴土石坑墓は土坑内の墓室の材質と築造方法の違いにより、木槨墓と黄腸題湊墓、石室墓に区分する。

①竪穴木槨墓

山を穿って壙とするか、または土を掘って坑とし、その墓穴に木槨室を築いたものである。その多くは１本の傾斜墓道（山東省巨野県紅土山の漢墓は水平墓道）を設けるが、２本の傾斜墓道のものもある。今までに８基ほど見つかっているが、墓室がわかっているのは河北省献県の36号墓[14]、河北省獲鹿県高庄１号墓[15]、山東省長清県双乳山１号墓[16]と巨野県紅土山漢墓[17]の４基である。山

東省章丘市洛庄漢墓[18]、危山漢墓[19]、臨淄区窩托村漢墓[20]は未発掘であり、江蘇省泗陽県大青墩漢墓[21]は発掘されているが墓室の報告がはっきりしない。このほかに、湖南省長沙401号漢墓は、かなり大きな規模で、金餅〔金製の円板〕、木車模型、「楊主家般」銘のある漆盤などが出土し、墓の西南側には長沙王后墓がある[22]。しかし、その被葬者が長沙王であるかどうかは新資料の検証を待たねばならない。そこで長清県双乳山１号墓を例にあげて説明しておく。

長清双乳山１号墓は、１本の墓道をもつ竪穴石坑木槨墓で、墓室を南に置き、北に向いて開き、墓道と墓室からなる。墓道の長さは60m、深さは18mで、両側に長さ・幅共に14mの二層台〔二段掘りの段〕を設える。墓道の南、墓室に接するところから木板で囲った長さ31.55mの槨室〔外蔵室〕がある。槨室〔外蔵室〕の真ん中やや南寄りに横板が渡されて、部屋を南北に二分している。北側区画には馬１頭と明器車馬器が置かれ、南側区画には大型車３輌、小型車１輌、馬７頭、鹿２頭が並べられていた。鍍金や金銀象嵌の車馬器の種類は完備しており、その工芸は非常に精巧である。墓道と墓室の連結部の両側には高さ11mと12mの門闕が穿たれている。墓室は長さ25ｍ、幅24.3m、深さ５ｍで、その底は墓道の底より13m高い。槨室は墓室の中央北部に位置し、長さ10.6m、幅9.3mで、その底は墓室の底より17m低く、最深高は22mになる。槨室内は二重槨三重棺に設えてある。槨室からは大量の銅器、金餅、陶器、玉器、漆器、家畜家禽などが出土し、玉器の中でも覆面と枕が特に精美である。また、単轅〔ながえ〕彩色漆塗り車輌の模型は、本物の二分の一につくられている。発掘調査者は、墓の被葬者を武帝の后元二年（A.D.87）の末に薨去した済北王劉寛に推定している[23]（図２－９）。

②黄腸題湊墓

１本ないし２本の傾斜道につながった土石墓坑で構成される。墓坑の底に規則正しくつくられた角材を長方形の壁帯に組み上げ、その壁体の内側と外側に壁を巡らせて木槨を構築し、そして内側の木槨に前室と棺室をつくり、套棺〔重棺〕を置く。棺室と木槨の間はだいたい回廊を形成する。このような木材を大量に用いて複雑な構造につくる墓室の形態を黄腸題湊葬制という。『漢書･霍光伝』に「光薨、賜梓宮、便房、黄腸題湊各一具、樅木外蔵槨十五具。〔光薨ず。梓宮、便房、黄腸題湊各一具に、樅木外蔵槨十五具を賜う。」という。蘇林が注に引きて「以柏木黄心致累棺外、故曰黄腸。木頭皆内向､故曰題湊。〔柏木黄心を以て棺外を致累す。故に黄腸という。木頭皆内向す。故に題湊という〕」という。考古学発掘調査の実例所見と文献に記された黄腸題湊葬制とは完全に符合している。黄腸題湊葬制は､ただ角材を長方形の壁体に積み上げたものではなく､｢梓宮｣と｢便房｣､｢樅木外蔵槨｣などの装具を同時に包括したものであり､一つの葬制にまとめたものである。｢黄腸題湊｣はその中でも不可欠な葬具の一つである。

黄腸題湊の資料が公表されている墓は、北京大葆台１号墓・２号墓[24]、河北省定県40号墓[25]、石家庄市小沿村漢墓[26]、江蘇省高郵天山１号墓・２号墓[27]、湖南省長沙象鼻嘴１号墓[28]、陡山漢墓[29]、望城坡１号墓[30]の９基である。これ以外に北京老山漢墓、河北省定県三盤山漢墓[31]、定州137号墓[32]、安徽省六安漢墓などが黄腸題湊墓になるが、報告が簡単なため、形態は不明である。

つぎに北京大葆台１号墓と石家庄市小沿村漢墓、長沙象鼻嘴１号墓を例にあげておく。

北京大葆台１号墓は傾斜墓道１本の竪穴土壙墓で、墓室を北に置き南向きにつくる。墓坑の長さ26.8 m、幅 21.2 mである。主体部は題湊壁体の内に前室と棺室がつくられ、題湊壁と棺室、前室の間は回廊になっており、棺室内に二重槨二重棺が置かれる。被葬者は玉衣を装着する。題湊壁の外側は二重の回廊が巡り、墓道に対応するところに過道〔甬道〕を設けている。墓道には木槨室がつくられ、車輌３輌、馬 13 頭が収められていた。副葬品は銅器、鉄器、鉛器、銀器、陶器、玉石器、骨器、角器、牙器、漆器および絹織物など 800 余点が出土した。被葬者は、元帝初元４（B.C.45）年に薨去した広陽王劉建に推定されている（図２－10）。

石家庄市小沿村漢墓は南北に２本の墓道を具えている。墓坑は、長さ 14.5 m、幅 12.4 mで、二層台が設けられており、その東西台上に柱穴が対称に配置されている。主体部は題湊と棺槨からなり、題湊は木板で囲まれている。題湊の東南角の題湊木から「王」の標記が発見された。題湊内には一重槨二重棺が置かれていたようである。副葬品は少量の銅器、陶器、玉器であるが、その中に「長耳」の銅印があり、被葬者を確定する重要な証拠となっている。それにより発掘調査者は、被葬者を漢の初頭紀元前 202 年に薨去した趙景王張耳としている（図２－11）。

象鼻嘴１号墓は長沙市の湘江西岸の咸家湖畔にある小丘上に位置する、傾斜墓道１本の竪穴石坑墓である。墓は西向きで、墓道の東端両側に「偶人」が置かれている。墓坑は、長さ 20.55m、幅 18.5 ～ 18.9m で、二段掘りに掘られている。主体部は、外から内に向かって題湊壁体、外槨、内槨、棺室そして三重の套棺というように、極めて複雑な棺槨構造につくられている。外槨壁と内槨壁の間、内槨壁と棺室壁の間は二重の回廊になっており、さらに回廊の中をいくつかの小空間に仕切っている。内槨と外郭の門の間には角材を敷き詰めて舗装し、特に前室の床面を最も高くつくってあり、前室の前は過道に、後は棺室に、左右は回廊に通じている。副葬品は陶器が多く、玉器と漆器は少量である。被葬者は前漢時代前期の長沙王と思われる（図２－12）。

③竪穴石室墓

１本の傾斜墓道に接続する石室墓坑で構成される。石室は石を積み上げてつくる。河南省永城県窯山１号墓・２号墓、僖山１号墓、２号墓[33]、広東省広州市象崗山漢墓[34]の５基がある。つぎに永城県窯山２号墓と広州市象崗山漢墓について記しておこう。

永城県窯山２号墓は西から東向きの単室墓である。墓室の南北壁を石積みにしてつくり、屋根は細長い石を渡し、切妻式〔三角屋根〕につくる。墓道は石を積み上げて閉塞する。使用された石材には 20 余ヶ所に刻字が見られる。墓室内からは玉衣片、玉璧、玉璜などの玉器のほかに、小型銅器、銅飾り、銀飾り、釉陶器などが出土している。被葬者は前漢時代後期の梁国の王后になろう（図２－13）。

広州市象崗山漢墓は墓室を北に置き南を向く。墓は墓道、前室と東西耳室、主室と東西北の三側室から構成される。墓道と前室、前室と主室との間には二つの石門が設えてあり、そのほかの各室には木門が設けてある。ほとんどの墓室は石坑の床に石を積んで構築している。しかし、東西耳室

は洞室〔横穴〕を穿って、その上で洞室内に石を積み上げてつくっている。主室には一槨一棺を置く。被葬者は絲縷玉衣を着け、その周りには大量の精美な玉器と玉具鉄剣が副えられていた。棺外には銅・鉄製兵器、漆塗り屏風、銅・玉製灯具が散らばっていた。北側室には銅器や鉄器、陶器、漆器が部屋いっぱいに積み上げられ、器の中にはいろいろな動物の骨頭〔当初は肉が付いていた〕が盛られており、そして「泰官」の封泥も出土した。東側室には３～４体の殉葬者が葬られており、皆装具を具え、組玉飾りの佩帯を着け、各自大量の副葬品を持っていた。出土した印章からそれらは右夫人趙藍（「右夫人璽」「趙藍」）、左夫人（「左夫人印」）、泰夫人（「泰夫人印」）、□夫人（「□夫人印」）であることが判明した。西側室には大量の動物の骨格ならびに７体の殉葬者が収められており、「景巷令印」の印を身に帯びていた。前室には木車が置かれ、１体の殉葬人があった。東耳室からは大量の楽器と宴会用具、それに１体の殉葬人が出土した。西耳室出土の器物が最も豊富で、銅器・陶器の生活用具、銅・鉄製兵器、工具、金銀器皿、玉石器、象牙器、漆木竹器、絹織物、印章封泥などがあった。さらに、墓道にも副葬品と殉葬者が置かれていた。発掘調査者は、「文帝行璽」龍鈕金印と「趙昧」方錐台形鈕の玉印を拠り所にして、文献を参考に、被葬者は武帝の時代に薨去した第二代南越王趙昧に断定している。この墓は数少ない未盗掘の王墓の一つで、嶺南地区で最大規模の漢墓である。その形状は残りがよく、副葬品も豊富で、前漢時代の南越王国を研究する上で重要な資料となっている（図２－14）。

④崖洞墓〔横穴墓〕

崖洞墓は山の中腹に穿たれた横穴洞式墓を指す。１本の露天墓道をもつのが一般的であるが、河南省永城県保安山２号墓は２本の墓道があり、山東省昌楽県東圈漢墓の墓道は竪坑につくられている。墓道の多くは石でもって塞がれるが、河北省満城陵山漢墓は日干しレンガで壁をつくり溶鉄を流し込んだもの（１号墓）と塼で壁をつくったもの（２号墓）があり、特殊な封門〔閉塞〕方法である。墓道や甬道の両側にはほとんど一対になった耳室が穿たれている。墓室の掘削規模は大きく、主要な墓室は前室と後室の二つあるのが一般的である。その前・後室には数に違いがあるが側室が付設されており、後室にはそれを取り巻く回廊が掘られている。墓室には地上の宮殿建築を模倣して、床に排水暗渠や排水溝を整えたり、壁を平滑にして漆や朱を塗って彩色壁画を描いたり、屋根〔天井〕は、平屋根を除くと、丸屋根やドーム、切妻〔三角･合掌〕、寄せ棟、台形状の屋根につくったりしている。また、主要な墓室を瓦葺きの木造建築や石造建築風につくったりし、被葬者の棺を安置する主室以外は車馬房や厨房、兵器庫、金庫などの部門別に部屋を設置し、厨房の脇には井戸を穿ち、氷室を置き、後室のそばには浴室や便所を具える。墓の入口にあたる墓道前の両側に二つの門闕を掘り、近衛兵や儀仗俑を並べる、などの工夫が凝らされている。

資料が公表されている崖洞墓は全部で23基あり、内訳はつぎのとおりである。中山国が満城陵山１号墓・２号墓[35]の２基。菑川国が昌楽県東圈１号墓[36]の１基。魯国が山東省曲阜九龍山２～５号墓[37]の４基。梁国が河南省永城県保安山１号墓・２号墓、柿園漢墓、夫子山１号墓・２号墓、鉄角山２号墓、南山１号墓、黄土山２号墓[38]の８基。楚国が江蘇省徐州市獅子山漢墓[39]、馱籃山１

号墓・２号墓[40]、北洞山漢墓[41]、亀山２号墓南墓・北墓[42]、石橋１号墓・２号墓[43]の８基。これらの墓は河北省と山東省、河南省、江蘇省の相互に隣接する省に分布している。

王侯の中でも早く崖洞墓埋葬形式を導入したのは梁国と楚国である。梁国で年代が最も早く知られている崖洞墓は孝王墓である。孝王劉武は、文帝十二年（B.C.168）に淮陽王から梁王になり、景帝の時、王12年となり、景帝中元六年（B.C.144）に薨去したが、墓はその前に基本的に掘り上がっていたようだ。梁の孝王墓は、規模が大きく、その掘削工事に相当期間を要したことから、文帝に時にすでに建造に取りかかっていたと思われる。楚国の初代劉姓王は元王劉交で、文帝元年（B.C.179）に薨去しており、ある研究者は徐州の楚王山１号墓を元王劉交墓に考えている[44]。この墓は未だ発掘調査されておらず、被葬者の確定を見合わせるのがよいだろう。楚国二代目の劉姓王は夷王劉郢客で、文帝二年（B.C.178）に継承し、文帝五年（B.C.175）に薨去した。劉郢客の墓の所在については決着がついていないが、崖洞墓であることに疑問はないようで、とすれば前漢王侯の崖王墓では最も早いものになる。文献には、漢の文帝霸陵はほかの前漢帝陵と違って、「因山為蔵、不復起墳〔山に因りて蔵を為す、また墳を起こさず〕」（「史記・孝文本紀」集解）と記す。現有資料を見ると、霸陵の実態は未だつかめないが、王侯が崖洞墓をつくることは、少なくとも埋葬観念や埋葬形式の上で霸陵の「因山為蔵」の影響を考慮して、霸陵にその源を求めるのがよいだろう。前漢王侯の埋葬形態には、方錐台形の墳丘、黄腸題湊葬具、玉衣装着、「裸体」陶俑（永城県柿園漢墓）、実用車馬などの使用が認められるが、そのことは王侯国が「同制京師〔京師（みやこ）と同じ制度につくる〕」を採用したり、皇帝からの恩賜に預かったことによる。皇帝と王侯の陵墓制度の関係を見ると、崖洞墓の採用では王侯が皇帝（文帝）を模倣した可能性がかなり高い。とはいうものの、霸陵の建造開始年代（文帝初年頃）よりも、さらに早い崖洞墓があるかどうか、これについては新たな考古学調査と研究を待たねばならない。

つぎに中山国、菑川国、魯国、梁国、楚国の順に概説しておく。

中山国　満城陵山１号墓・２号墓は、陵山主峰の東斜面にあり、東向きに、120mの間隔をもって南北に並列してつくられている。１号墓は南側にあり、全長51.7m、容積約2700m^{3}である。墓道、甬道、南北耳室、前室、後室と回廊で構成されている。後室は前室の西に位置し、出部屋状の側室が一つ付く（図２－15）。２号墓は全長49.7m、容積3000m^{3}である。墓室の平面配置は１号墓とほぼ同じであるが、後室の位置が前室の南側にあり、後室を取り巻く回廊はない。二つの耳室と甬道には実用の馬車と食物を貯蔵する陶器が置かれ、前室には帷を張っていろいろな器物が収められ、後室には棺槨が安置されていた。棺槨の周りには珠玉宝石が散乱していた。被葬者は金縷玉衣を装着しており、初めて発掘で完全な玉衣をまとって出土した。２号墓の鑲玉漆棺〔玉を象嵌した漆棺〕は初めての発見である。この２基の墓は埋蔵文化財の宝庫で、共に銅器、鉄器、金製品、銀製品、陶器、玉石器、漆器、絹織物4200点以上が出土し、良質品の多いのが特徴である。形状が完全な鉄製鎧と帷は初めての出土である。なお、器物の中には医療用の金銀針、銅盒、銅製水時計、鉄製ものさしなど、自然科学史の研究に重要なものも含まれている。１号墓の被葬者は金縷玉衣を

着け、出土した銅器銘文や封泥に「中山」の国名が多く見られることから、この墓は前漢の中山王墓であることは明らかである。銅器と漆器の銘文の紀年は20年以上で、『漢書・諸侯王表』と対照した結果、被葬者は武帝元鼎四年（B.C.113）に薨去した靖王劉勝と認定された。２号墓の被葬者も金縷玉衣を着け、銅器銘文と封泥文字に「中山」国名が見え、出土銅印に名「竇綰」、字「君須」とあることから、被葬者は劉勝の妻になり、１号墓の異穴合葬墓に断定された。

菑川国　昌楽東圏１号墓の形態は、縦坑式の墓道（下部は甬道になる）に南室と北室、４つの側室で構成された特殊なものである（図２－16）。鍍金銅器、鉄器、陶器、玉器が出土している。銅製灯明皿の「菑川宦謁右般北宮豆元年五月造第十五」の銘文、封泥の「菑川后府」などの文字資料に、副葬品の時代的特徴などを綜合して、被葬者は前漢時代中期の菑川王后に推定されている。

魯　国　曲阜九龍山２～５号墓の４基はいずれも南を向き、東西に並んでいる。２号墓は全長64.9m、容積2600m^{3}である。最も大きい３号墓は全長72.1m、容積2900m^{3}である（図２－17）。４号墓は全長70.3m、容積2800m^{3}である。最も小さい５号墓は全長53.5m、容積2100m^{3}である。この４基の形態はよく似ているが、墓室の数は同じでない。墓葬は、墓道（２耳室付属）、甬道（２耳室付属）、前室（４側室設置、５号墓は前室無し）、後室（５号墓は主室。４・５号墓には２側室設置）、それに壁龕（２号墓には無い）で構成される。４基の墓の出土遺物は銅器、鉄器、金銀装飾品、陶器、玉石器など1900余点にのぼる。墓葬の形態や規模、その副葬品などの銀縷玉衣、実用馬車、「宮中行楽銭」、「王未央」銅印、「王陵塞石」の刻文などから、これらの墓の被葬者は前漢時代中期から後期の魯王および王后と推測される。発掘調査者は、３号墓から「王慶忌」銅印が出土したことから、その被葬者を魯の孝王劉慶忌としている。

梁　国　公表された資料の多い８基の墓以外に、鉄角山１号墓、南山２号墓、黄土山１号墓も崖洞墓であり[45]、その被葬者は梁王またはその王后とされる。つぎに保安山１号墓と２号墓について概述しておく。

保安山１号墓と２号墓は、保安山の一峰にあり、200mの距離を置いて東向きに南北に並ぶ。１号墓は、全長96.45mで、墓道と二対の耳室、主室と六つの側室、回廊とその四隅の角室からなる。墓内の面積は612㎡で、容積は1367m^{3}である（図２－18）。墓は早い時期に盗掘にあっており、墓室内には何も残っていなかったが、墓道入口の床から20数枚の「貨銭」が出土し、それは盗掘時期を知る上で重要な物証である。

保安山２号墓は、全長210.5m、東側と西側に２本の墓道がある。墓室の配置から見ると東側の墓道が主であったようだ。墓室は、前室と後室が主体となり、後室の周囲を回廊が取り巻いている。墓道および甬道、前室、回廊には34の耳室と側室が設けられている。特異なものとしては、東墓道の西端に前庭が設けられていること、回廊の南側に隧道が掘られていることである。墓室の総面積は1600㎡、総容積は6500m^{3}である（図２－19）。墓道、甬道、前庭の閉塞石、墓室の封門石板、墓室の門扉などには刻字があり、墓室の壁には朱書文字がある。これらの文字は、墓葬の年代、墓室の性格や用途、被葬者の所属などを研究する上で重要なものである。副葬品には銅器、鉄器、陶器、

玉石器がある。玉衣片もわずか一片が残っていた。墓外には二つの陪葬坑があり、１号坑からは実用の鍍金銅車馬器、兵器、玉器など2000余点が出土し、その中に「梁后園」銅印１枚が含まれていた。２号坑からは大量の銅車馬明器が出土した。この墓は今までに発掘された中では最大規模で、形態も最も複雑な崖洞墓である。発掘調査者は、１号墓を梁の孝王墓に、２号墓を梁孝王の妻李后墓にあてている。

楚　国　公表された資料の多い８基以外に、楚王山漢墓（２基）、南洞山漢墓（２基）、臥牛山漢墓（１基）[46]があり、その多くは大型崖洞墓になり、楚王とその王后が葬られていると考えられる。つぎに獅子山、北洞山、亀山２号墓について概述しておく。

獅子山漢墓は、南向きで、全長117ｍを測り、墓道、甬道、前室、後室で構成される。墓道は外墓道と内墓道に分かれる。外墓道には殉葬の一体があり、「食官監印」などの遺物40点あまりが出土した。内墓道は、上方を開削して天井をつくらず、吹き抜けにした下部には両側に耳室が３つ穿たれている。甬道の両側には耳室を６つ穿っている（図２－20）。前室の東半部には棺床と思われる、少し高くなったところがあり、そこから玉製の鼻塞〔鼻詰めの栓〕と人骨が出土している。被葬者は金縷玉衣を着け、鑲玉漆棺に納められていた。墓室は、部分的に仕上げが施され、まだ仕上げができていないところがあり、工事が完了していなかったことを意味している。内墓道上部を開削して吹き抜けにする工法は、前漢の崖洞墓では初めてである。副葬品は豊富で、銅器、鉄器、金銀器、陶器、玉器など2000点以上におよび、特に銅銭と官印、玉器、封泥の数も多く、価値の高いものである。また、墓中からは３体の殉葬も見つかっている。墓外には兵馬俑の陪葬坑が設けられており、こうした作法は前漢王墓では初めての発見である。発掘調査者は、この被葬者を文帝前元五年（B.C.175）に薨去した第二代楚王の夷王劉郢客か、または景帝前元三年（B.C.154）に自害した第三代楚王劉戊に推定している。

北洞山漢墓は、南向きで、全長77.3ｍ、墓道と主体の墓室、付属の墓室で構成される。墓道の両側には２つの土台があり、７つの壁龕と２つの耳室が具わっている。主体の墓室は甬道（２つの耳室を付属）に、前室と後室（２つの便所を具える）からなる。付属の墓室は、11部屋からなり、墓道の東側に位置して主体墓室よりも低く、12段の階段で通じている（図２－21）。竪穴墓室の工法は、竪穴に掘った石坑に石室をつくる方法がとられ、横穴式洞室の主体墓室とは違っている。このような主体部と付属部の両方をそろえ、二種類の違った工法でつくられた王墓の発見は初めてである。副葬品には銅器、鉄器、金製品、陶器、玉器、漆器などがあるが、特に金縷玉鱗鎧状衣片に、「楚宮司丞」「楚御府印」「楚武庫印」「楚邸」などの銅印章は被葬者の身分を判断する資料になる。発掘調査者は、被葬者を武帝元光六年（B.C.129）に薨去した第５代楚王の安王劉道としている。

亀山２号墓は、西向きで、南北に並列する２本の墓道と甬道、二組の墓室からなるが、南北に並列する二つの墓とすべきであろう。二つの墓の間隔は14mで、墓室間は穴が開けられてつながっている。南側の墓は全長約83mで、墓道、甬道（３耳室が付属）、前室（３側室が付属）、後室（２側室が付属）で構成されている。北側の墓は全長83.5mで、墓道、甬道（１耳室が付属）、前室（２

側室が付属)、後室からなる（図２－22)。二つの墓の前室と後室はどちらも南北に置かれており、墓道の方向と一致しない。副葬品の多くは盗掘されているが、南墓の後室の西側室から「劉注」亀紐銀印が１点出土した。これにより、南墓の被葬者は武帝元鼎元年（B.C.116）に薨去した第６代楚王の襄王劉注に確定した。北墓の被葬者は劉注の妻になろう。

ⅱ　副葬品

前漢王墓の大多数は、程度の差はあるが盗掘を受けている。しかし、満城陵山１号墓と２号墓、広州象崗山漢墓、長清双乳山１号墓は盗掘からまぬがれていた。未盗掘の王墓の副葬品は大変豊富であるが、盗掘を受けた王墓でもその多くに精美で貴重なものが少なからず残されている。王墓の副葬品中、一般漢墓によくある陶器や小型銅器、鉄器を除外すると、いくつかの貴重な大型銅器、鍍金銅器、金器、銀器、玉器などがある。銅器と鍍金銅器が大量に副葬されることは王墓の特徴の一つである。漢代の高度に発達した鍍金技術は、蓋弓棒などの車馬器、鋪首銜環〔環を銜えた獣面形をした把手または把手飾りで、棺の側面や槨壁、門などに付く〕などの棺の装飾品、耳杯の耳、容器の脚などの漆器の装飾、牌飾りなど、主に各種装飾品に用いられている。王墓出土の金製品は少ないが、その多くは小型装飾品である。といえども、金銀は本来貴重なものであるため、被葬者の身分の高さを象徴するものである。また、大量に出土している精美な玉器や緑松石、真珠、瑪瑙、琥珀、ガラスなども貴重な品々である。王墓出土の銅器や漆器の銘文、印章、封泥などの文字資料は、被葬者の身分の直接の拠り所となるもので、副葬品の中でも特に重要なものとして扱われている。

Ｂ　葬制の小結

漢代の王墓は陵と称す、と「『後漢書・礼儀誌』に記されている。曲阜九龍山３号墓の墓道境界垣に積まれた石塊には「王陵塞石広四尺」の刻銘がある。

前漢王墓は一般に王都付近の平原や山丘にあり、墓室を地下深く掘り込むか、山腹を穿ってつくり、墳丘を墓室上または山頂に高く積み上げている。多くの王墓は墓外に数の違いはあるものの陪葬坑をつくる。墳丘の周囲に墻壁を巡らして墓園を形成し、墓園に礼制建築を設置する。また、王墓の周りにはたくさんの陪葬墓を配置する。王墓はふつう、王と后は異穴合葬形式を採っており、規模は一般的に王后墓より王墓の方が大きい。

つぎに墳丘等の築造、墓葬形態、埋葬制度について述べる。

ⅰ　墳丘等の築造制

完全な王墓は地上部分と地下部分に分けられる。地上部分はさらに墳丘と墓園、礼制建築、陪葬墓などに分けられる[47]。

①墳　丘

漢代の喪葬礼制は墳丘の高度を厳格に規定し、被葬者の身分の違いにより墳丘の高さは一様でない。昔の文献には漢代王侯墓の墳丘の高さについては記されていない。王侯身分の等級から見ると、墳丘の高さは皇帝陵より低く、諸侯より高くしなければならない。『漢旧儀』には前漢帝陵は「墳高十二丈。武帝墳高二十丈」とある（清孫星衍等輯、周天遊点校『漢官六種』中華書局　1990年)。

考古学的調査によると、前漢諸帝陵の墳丘の高さは30m前後、武帝茂陵の高さは46.5mで、文献の内容とほぼ符合する。『周礼・春官・塚人』の鄭注に、「漢律曰列侯墳高四丈、関内侯以下至庶人各有差」という。考古学的調査では諸侯の墳丘の高さは、その記載内容と基本的に一致している。このことから、王侯墓の墳丘高さは四丈から十二丈の間になろう。

前漢王墓の形式は、竪穴土石坑墓と横穴崖洞墓の二種類がある。竪穴土壙墓の多くは傾斜地を選んで築造されており、墳丘は黄土を版築成形し、墳丘底部は円形または楕円形につくられているのが多い。底径は40m～250m、現存高はほとんど12m～16mである。石家庄小沿村漢墓の墳丘高が15m、定県40号墓が16mであるが、それより高いものとしては、臨淄区窩托村漢墓の24mがある。山丘頂部に築造された竪穴石坑墓で高大な墳丘は、永城窯山1号墓の墳丘高が10m、巨野紅土山漢墓が10.2mである。このように、保存良好な前漢王墓の墳丘高は諸侯墓の四丈（換算約9.2 m）より高く、皇帝陵の十二丈（換算約27.7m）より低いことがわかる。それは前にあげた文献の記載と一致している。

山腹に開削された崖洞墓は、その上が高くそびえる山頂になり、巨大な墳丘のような形を呈している。しかしながら、永城の諸梁王墓、徐州市獅子山、北洞山楚王墓のように山頂に版築封土を築くものもある。

王墓の墳丘の中には、章丘洛庄漢墓、永城保安山2号墓、夫子山1号墓などのように方錐台形を呈するものがある。少数の王侯墓に皇帝の墳丘形である方錐台形を用いることができたのは、おそらく皇帝より恩賜を得ていたからであろう。

②墓　園

前漢皇帝陵には陵園が設けられるように、王侯墓にも墓園が設けられている。墓園は墳丘の周囲を壁が取り巻いているが、その壁の多くは版築でつくられている。

定県40号墓は墳丘の周囲を長方形に版築の墻壁が取り巻く。その規模は南北145m、東西127mで、墻壁基部の幅は11mである。このような長方形の版築墻壁墓園は、傾斜地につくられた王墓の墓園としては一般的な形態と思われる。永城保安山1号墓と2号墓、柿園漢墓では外周を取り巻く版築墻壁が見つかったが、それは保安山のほとんどの地域を囲い込んでいた。その平面形は不規則な長方形を呈し、南壁と北壁の残長は400m以上あり、東壁は約900mにわたって断続的に残っていたが、西壁は壊れていた。東壁では門跡が一ヶ所見つかった。その門道の南北幅は4mで、方形の石で舗装されていた。この墓園の規模は皇帝陵園よりも大きい。その主な理由としては、保安山の山が険しく、墻壁を築くには不適当という、地形的制約を受けたことにより、墻壁を築くのに適した山麓の平坦なところに築いたためだろう。

徐州石橋1号・2号崖洞墓は、山頂に南北60m、東西30mのやや平坦なところがあり、そこを取り囲む石墻が断続的に残っている。石墻は石塊を積み上げたもので、わずかに基礎部分が残存していて、その西北角の残存状況はよく、残長1.9m、幅1.5m、残高0.7mであった。すなわち、高山に築かれた崖洞墓は山頂に平坦な場所があれば墓園を築くことができたのである。

③礼制建築

前漢皇帝陵の周辺には礼制建築が配置されており、「同制京師」の王侯墓も例外ではない。

石家庄小沿村漢墓の西 50m のところには、秦漢時期の塼瓦が多量散布しているし、満城陵山漢墓の山頂にも前漢の塼瓦が見受けられる。ということから、そこに建造物があったことがわかる。墳墓の頂上やその周辺に塼瓦などの建築材が散布することは、永城保安山２号墓や窯山１号墓、鉄角山２号墓、徐州獅子山漢墓でも知られている。今までの発見で、規模が最大で、保存状態が最もよい王墓建築遺構は保安山墓園のものである。この遺構は保安山１号墓の東北にある高台の一等地に位置し、南北 110m、東西 60m の長方形で、南向きにつくられている。その周囲は墻壁で囲まれ、南側と東側に門が開かれており、正面は南門と思われる。南門の外には小さな広場があり、門の内側は南北二区に分かれており、それぞれ門道で通じている。南区は東西 22.2m、南北 16.4m の正殿を中心とし、庭と回廊がその周囲を取り巻いている。北区は庭を中心に、それを取り巻くように東、南、北の三方に大きさと形態の異なる建物を配置している（図２－23）。出土した平瓦や丸瓦には「孝園」のスタンプがある。発掘調査者は、この建築遺構を保安山１号墓の寝園遺構と見ている。

前漢皇帝陵の近辺にある主な礼制建築には寝殿と廟の二つがあり、それらの性格は異なり、使われ方も一様でない。王墓近辺から発見された建築遺構も寝殿と廟に分けることができるが、その区別は建築場所が墳頂にあるか、その脇にあるか、その位置関係にあろう。

④陪葬墓

前漢皇帝陵と同じように、王墓にも数の違いはあるが陪葬墓が配置されている。満城陵山漢墓には近くの山の斜面に、長さと幅が 10m ～ 20m、高さが３m ～５m の小墳丘と上円下方墳が 18 基存在する。それらは陵山中山王墓の陪葬墓である。永城梁王墓と徐州楚王墓の近くでも陪葬墓が見つかっている。保安山２号墓の西北には３号墓があり、保安山１号墓の東側と西側には小型墓が、柿園漢墓の南側と東南側、東北側にも小型墓が分布している。その中の保安山３号墓からは金縷玉衣片と玉製の鼻塞、玉握などが出土しており、被葬者はある一定の身分をもっていたようである。徐州の北洞山漢墓の北側にある后楼山漢墓群は、その陪葬墓と思われる。その１号墓と５号墓からは玉面と玉枕が出土し、４号墓の被葬者は銀縷玉衣を着けており、かなりの身分の高さが窺われる[48]。これらの陪葬墓に葬られた人の身分は、王の嬪妃や家族成員、王国の官吏、墓守人など、広い範囲におよんでいたのである。

ⅱ　墓葬形態

①形態の発展と変遷

前漢皇帝陵は基本的に一致（文帝霸陵は除く）しているが、同じではなく、その形態は多様である。竪穴木槨墓は先秦〔秦以前の時代、夏商周時代〕時代に貴族の間で普遍的に使われていた墓葬形態である。前漢時代前・中期、王墓の主要な埋葬形態として引き続き継続された。章丘洛庄と臨淄区窩托村の前漢時代前期の漢墓は、まだ「中」字形の２本墓道をとどめ、墓外に多くの陪葬坑を伝統的に配置している。しかし、前漢時代後期には、王墓に木槨墓を使わなくなっていた。

黄腸題湊墓は漢代初期に出現し、そのまま前漢時代後期の早い段階まで続いているが、王墓では主導の位置を占めなかった。前漢初頭の石家庄小沿村漢墓は、伝統的な「中」字形の形態が保たれている。長沙地区の３基の黄腸題湊墓は、墓室近くの墓道の両側に「偶人〔塑像人形〕」を置いたり、棺の底板の上に透かし彫りした板〔簀の子のような役割をもつ薄い板〕を敷いたり、内側の回廊を部屋に仕切ったりする方法を採っており、それは楚墓の伝統の影響を受けているのである。黄腸題湊墓の出現は前漢の新たな喪葬礼制の制定と実施関係をつくり上げたが、それはもともと皇帝の制であって、王墓に取り入れられる形態ではなかった。王墓にその葬制が使用できたのは皇帝の恩賜によるものであろう。考古学的調査から見ると、黄腸題湊墓の使用は北方の中山国と広陽国、東南方の六安国と広陵国、中南方の長沙国などのように、前漢から辺境の地域に分封された諸侯国がほとんどである。それらの諸王侯が特別な葬制を賜った背景には、政治上の籠絡的策略があったからであろう。前漢の黄腸題湊制は後漢の塼石題湊制に直接に影響をおよぼしている。

竪穴石室墓は、竪穴木槨墓と横穴崖洞墓が結びついた、つまり竪穴木槨墓の形式に横穴崖洞墓の「因山為蔵」という目的を達成した一形式であり、広州象崗山漢墓によく認められる。この墓の主体部は、竪穴墓の形式（２耳室は横穴を掘る形式を採用）が採られているが、その平面配置と立体空間が崖洞墓によく似ているのである。永城梁国の４基の竪穴石室墓は、前漢時代後期に梁国の国力が弱体化したことによる産物と考えられている。竪穴石室墓が採用された時代は前漢時代中・後期になる。

崖洞墓は前漢時代前期に出現すると、たちまち流行し、いくつかの王国に取り入れられ、魯国や梁国、楚国の主要な墓制となる。崖洞墓は前漢に起こった墓葬の一形式で、伝統的な竪穴木槨墓の平面配置と立体構造から脱して、「事死如生（死につかえて生のごとし）」の葬送観念と墓室の邸宅化実現に適応したものである。山腹を立体的空間に穿って、建築造形と装飾を施し、邸宅としての壮大な墓室群をつくり出す。そして、用棺制度と衣衾制度よりも竪穴木槨墓と「黄腸題湊」墓から完全に決別し、新しい局面を開いたのである。前漢時代の時期が異なると、崖洞墓の形態も同じでない。前漢時代前期、梁国や楚国の国力が強大になると、崖洞墓の規模が巨大化し、墓室を多く、墓道を広く長く掘削する制度が整えられ、墓葬全体の平面配置に複雑化の傾向が現れる。たとえば、永城保安山２号墓は２本の墓道をもつが、一直線ではなく、墓室の配置も規則性がなく、対称性もない。また崖洞墓の中には、徐州獅子山漢墓のように内墓道の上部を切り開いて吹き抜けにしたり、北洞山漢墓のように主体墓室とは別に付属墓室を設置することなど、数少ない工法も発見されている。前漢時代中・後期になると、崖洞墓の規模が小さくなり、墓室も減少し、掘削も粗雑になり、中には洞室内に瓦葺き木造建築を行ったもの、墓道を短くいたもの、甬道を長くしたものもある。満城陵山や曲阜九龍山、徐州亀山２号墓、石橋漢墓などのように、墓葬全体の平面配置を墓道、甬道（耳室を付設）、前室と後室（側室を付設）で構成し、簡潔にうまく整えたものもある。満城陵山１号墓や永城保安山１号墓・２号墓のような回廊のつくり方は、地域差として捉えられよう。

以上述べたように、前漢王墓に用いられた木槨墓は伝統的な墓葬形態が踏襲され、石室墓は崖洞

墓の影響のもとに出現した竪穴墓系統の新形式の一つである。黄腸題湊墓と崖洞墓の二種類は、新しく出現した形式で、前者が後者よりも早く出現し、早く消滅した。両者の墓室配置や構造は独自の体系で発展変遷するが、崖洞墓の回廊の出現は黄腸題湊墓制の影響を受けたものと思われる。黄腸題湊墓の変化は総体的に緩やかであるのに対し、崖洞墓は前漢前期と中・後期を比べると形態や配置に大きな変化が認められる。

先秦時代の墓制と比べて、前漢時代の大型墓の形態で最大の変化は、竪穴閉塞式木槨から横穴開放式洞室・石室・木（槨）室に変わったことである。崖洞墓については多言を要しない。石室墓は竪穴式の建造方法であったのが、横穴開放式の墓室となる。同様に伝統的竪穴墓形式の黄腸題湊墓は、題湊で囲まれた空間が前漢時代前期にはすでに横穴式墓室に似た開放型構造の木室になっていた。竪穴木槨墓が最も伝統的なものであったとしても、前漢のある段階に墓道に向かって木槨に門扉が付けられたことによって、槨内が事実上、横穴開放式に変化したのである。

墓室の構造変化に関連して墓道の構造も変化し、先秦時代の墓道の底の墓坑の底より高い形式から、墓道の底と墓坑の底が相通じる形式に変わった。

墓道の構造変化に関連して納棺方式が変化し、先秦時代の墓坑または木槨の上から棺を吊して槨内に入れる方式から、墓道から槨内に棺を運び入れるようになった。

このように伝統的竪穴墓制についていうならば、棺を槨内に安置する方式の変化があり、墓道構造の変化と槨室構造の変化とは相互に関連しあって、それらは同時に発生したということである。

②黄腸題湊葬制

黄腸題湊墓制は、本来天子の制である。そのため諸王侯や朝廷の重臣が享受できたのは、おそらく皇帝の恩賜によるものであろう。

黄腸題湊墓は竪穴系統の墓制を踏襲したものであるが、伝統的棺槨構造とはまったく異なるものであり、前漢に出現して適応した新しい礼制で、まったくの新しい葬制である。文献には、先秦時代の墓葬に「題湊」の制が出現していたことが記されており、「題湊」の制と黄腸題湊葬制とは関係がありそうであるが、本質的に区別されるものであり、黄腸題湊葬制は「題湊」の制にまったく新しい内容を付与したものである[49]。

前漢の黄腸題湊墓が発見されると、たちまち「黄腸題湊」「便房」「梓宮」「外蔵槨」などについての研究が展開されていった[50]。つぎにその概要を記す。

文献に記された墓葬の実例を参照すれば、「黄腸題湊」は最も見分けやすい。長沙望城坡１号墓の壁に積み上げられた角材に「題湊」と刻まれた銘文がある。最も早い「黄腸題湊」は石家庄小沿村漢墓で、それが張耳の墓とすれば、漢の初めには「黄腸題湊」が王墓に出現していたことになる。

黄腸題湊墓の題湊形態と棺槨構造は、時期が違うと異なった特徴を有する。漢初期の石家庄小沿村漢墓では、題湊の壁は木板で平面「凸」字形につくられており、題湊壁内の棺槨構造は簡単で、先秦時期の木槨墓棺槨形式の特徴を残している。つまり、題湊壁とその中の木槨とはつながる通路や門がなく、閉鎖された空間に構成されており、原始的特徴が見られるのである。文帝・景帝の時

期、黄腸題湊の題湊壁の多くは、角材を枘と枘穴をかみ合わせる方法ではなく、単に平たく積み上げるだけであった。長沙陡壁山漢墓の題湊に積み重ねられた層数は少なく、題湊壁の高さは木槨よりも低い。しかも、陡壁山と望城坡１号墓の題湊壁と棺槨はやはり閉塞された空間に構成され、棺槨構造も簡単であり、こうした特徴は原始的な形態といえる。なお、望城坡１号墓の題湊壁の高さは木槨よりも高い。象鼻嘴１号墓の題湊平面形は「凸」字形を呈しているが、題湊と二重木槨とは通路または門でつながって解放的空間になっている。しかも、題湊内の棺槨構造は大変複雑になっている。このような特徴は、この時期に題湊がしだいに成長してきたことを表している。そして前漢時代中・後期に黄腸題湊墓の題湊は完成の域に達するのである。北京大葆台１号墓では題湊壁の頂部に木材をかけてさらに強固にし、高郵県天山漢墓では題湊材の四面に枘穴と枘でもって上下左右を結合し、全部の題湊材を一つの枠組み構造につくり上げている。また題湊壁の高さを木槨と同じにすることによって、題湊壁内に内回廊を設けるだけにとどまらず、題湊壁外にも外回廊をつくり、さらに開放的空間をつくり出しているのである。また天山漢墓では題湊材の木口の真ん中に小さな方形の木塊を挿入しているが、それは「柏木黄心」の象徴として用いられたものである。

黄腸題湊墓に使われる用材の材質は厳格性が求められる。いわゆる「黄腸」とは題湊材に用いられた柏木の黄心のことを指す。黄腸題湊墓で、墓材のはっきりしないものを除くと、大部分の墓の題湊材は柏木であり、文献の記載と符合する。ただし例外もあり、高郵県天山１号墓の題湊材は柏木ではなく、楠木である。

「便房」は黄腸題湊墓にとって一つの重要な葬具である。文献に記された黄腸題湊墓の各葬具の配置順序を見ると、それは「黄腸題湊」と「梓宮」の間に置かれたようである。ふつう黄腸題湊墓では題湊壁の内側に一重ないし二重の槨が設けられ、その槨の中に棺室と前室がつくられ、棺室の中に套棺〔二重以上の覆棺〕が置かれる。筆者は、棺室・前室と題湊壁との間の空間を「便房」と考えている。というのは、一般的に棺室と前室の周りは一重ないし二重の回廊が巡らされ、その回廊の多くは小さな部屋に区切られているからである。

研究者の間では「便房」の位置について、見方が大きく分かれている。ある人は「便房」を墓室の前室とし[51]、ある人は棺室そのものを「便房」とし[52]、ある人は内槨と棺房を総称して「便房」とし[53]、ある人は棺房を取り巻いたその回廊の内側の回廊を「便房」に考えている[54]のである。

「梓宮」は「黄腸題湊」の中央に置くことについて、多くの研究者は棺房内に置かれた套棺を「梓宮」と見ている。黄腸題湊墓では、棺室は棺を置く場所であり、そこと棺とは分けることのできない関係にある。前室は棺室の前にあり、その多くは棺室と相通じており、直接つながっている（北京大葆台１号墓）か、一体のもの（高郵天山１号墓）である。その前室にはいろいろな器具が置かれており、その後の棺内に横たわっている主人の服務に備えている。このように見ると、前室と棺室とは直接的に、密接に関係しているのである。黄腸題湊墓の前室と棺室の床面がその他の部分より高いことから考えて、筆者は「梓宮」を棺室と前室を包括して一つの葬具と見なしたい。高郵県天山１号墓の棺室は特殊で二重になっており、どちらも「梓宮」に属す。文献によく「梓棺」と「梓

宮」という言葉が出てくるが、その区別は、「梓棺」が単棺または套棺のことを指すとすれば、「梓宮」が棺室と前室とを包括したものをいっているのだろう。

『漢書・霍光伝』服虔を引く顔注は、外蔵槨とは「在正蔵外、婢妾之蔵、或曰厨厩之属也。〔正蔵の外に在り、婢妾の蔵、或は厨厩の属なりと曰く〕」といい、黄腸題湊墓の中に「正蔵」と「外蔵槨」の区分があったようだ。霍光が受け賜った葬具の順序を見ると、内側から外に「梓宮」「便房」「黄腸題湊」の順となり、それより外側に「外蔵槨」がある。「外蔵」の意味するところは、前述した「梓宮」「便房」「黄腸題湊」が「正蔵」になることで暗示されている。つまり「外蔵槨」の位置が「正蔵」の外になるからには、それは題湊壁の外であるということになり、題湊壁の内側に「外蔵槨」があることはあり得ないのである。まさに『漢書･霍光伝』劉敞注に「以次言之、先親身着衣被、次梓宮、次便房、次題湊、次外蔵〔以て次に之を言う、まず親身に着衣を被る、次に梓宮、次に便房、次に題湊、次に外蔵〕」（清王先謙『漢書補注』上海古籍出版社　2008 年）とあるとおりである。黄腸題湊墓では、中央に棺房と前室（梓宮）を置き、それを取り巻く回廊（便房）とは門でもってつなぎ、さらに「黄腸題湊」と一体のものに組み合わせ、全体として関連性のある綜合体につくる。まさしく、それが「正蔵」なのである。「外蔵槨」は、高郵県天山１号墓や北京大葆台１号墓の題湊の外を巡る外回廊と墓道内の木槨室のように、題湊の外の施設である。長沙陡壁山漢墓と象鼻嘴１号墓の間にはつの陪葬坑が、望城坡１号墓の傍には３つの陪葬坑があるが、それらも「外蔵槨」となるものである。

③正蔵〔埋葬主体〕と外蔵槨

外蔵槨の概念は黄腸題湊墓から出たものであるが、他の形態の墓葬の中にも存在している。伝統的な木槨墓では、棺あるいは套棺は墓室の中心に置かれ、棺の外は槨で覆われ、棺と槨は幾重にも取り巻く密閉空間である正蔵で構成されていて、これが墓葬の主体部分をなしていた。外蔵槨は、正蔵とは反対に正蔵の付属として、正蔵の外に置かれた。その場所は、墓壙内の棺槨の外であったり、墓道の中にあったり、墓外に設けられたりしている。外蔵槨の起源は、商代の大きな貴族墓の殉葬棺と車馬殉葬坑にあり、春秋時代中・後期になると単独の器物坑が出現する[55]。秦漢時代にはこの種の器物坑である外蔵槨が大変盛行する。前漢の諸王侯の木槨墓のうち、献県 36 号墓の耳室内の木槨箱、長清双乳山１号墓の墓道内の木槨室、巨野紅土山漢墓の墓道内に置かれた車馬、臨淄窩托村と章丘洛庄漢墓の墓道両側に設けられた器物坑、泗陽大青墩漢墓の主槨室以外の木槨室ならびに墓外の一器物坑、獲鹿高庄１号墓周囲の器物坑、章丘危山漢墓付近の陪葬坑などはすべて墓葬の外蔵槨に属す。

黄腸題湊墓の正蔵と外蔵槨については前述したとおりである。

石室墓は竪穴墓の系列に属すものであるが、墓内の構造と崖洞墓とはよく似たところがある。それらはふつう一つないし二つの主たる墓室をもつ。主たる墓室が二つの場合、後室に棺を置き、前室に各種器具を置く。後室の周囲には回廊を巡らし、前室と後室に側室を付設する。墓道や甬道の両側には耳室を設けて、食品の貯蔵や宴会容器の格納に用い、車馬や偶人〔塑像人形〕を置いたり

する。石室墓と崖洞墓の構造的配置、各墓室の機能を見て見ると、前室と後室とは門でもって通じて、前室は直接後室の仕事場として密接な関係にあり、前・後室とそれらに直接つながった側室と回廊などは墓葬の正蔵を構成している。そして墓道と甬道の両側の耳室は外蔵槨になる。満城陵山１号墓を見ると、正蔵は前室と後室（一側室付設）、回廊からなり、二つの耳室は外蔵槨になる。墓外の陪葬坑も外蔵槨になり、永城のたくさんの梁王墓の外にある陪葬坑なども同じである。

王墓の外蔵槨の基本的内容は、まさに服虔がいうとおり、「婢妾〔そば仕え〕」あり、「厨厩〔厨房と厩〕」あり、である。漢代でも人を殉葬する悪習があり、王墓でも広州象崗山漢墓と徐州獅子山漢墓で見つかっている。しかし社会が発展進歩するにしたがい、人の殉葬が禁止されたのに伴って、いろんな材質の俑が代替として使われるようになった。中でも陶俑の副葬が最も一般的である。陶俑は人の殉葬の代替品であるため、人の身分の違いに合わせて陶俑の形象も各種各様、いろいろと違っている。章丘危山漢墓と徐州獅子山漢墓の兵馬俑坑外蔵槨の陶俑は、鎧を付け、武器を持ち、馬にまたがり、整然と並んだ陣容を採っている。それは生前に統率した軍隊を象徴したものである。徐州北洞山漢墓内の陶俑は、置かれた位置も違っていれば、身分の表し方もまちまちで、墓道の両側にある７つの小龕から出土した 222 体の彩色陶俑は、長剣をぶら下げ、箭箙を背負い、楚国の王宮の儀衛兵を象徴しているようである。付属建築の第５室からは陶俑と銅編鐘、石磬、陶瑟が共伴して出土し、その身分は楽伎舞女にあたる。付属建築第６～第 11 室は厨房を象徴したもので、そこの陶俑は厨房の雑役を担った身分と思われる。このような外蔵槨の「婢妾の属」は、被葬者に奉仕する人（俑）を総括して示したものである。

「厨」に関しては、前漢王墓の徐州北洞山漢墓から見つかっている。その付属建築第６～第 11 室にはレンガづくりの竈、井戸、穀物倉庫がつくりつけられ、それに炊飯用の陶釜、甑、動物の骨格（肉食）、炭化穀物と陶俑が出土し、一組の象徴的厨房建築を構成している。当然、外蔵槨の「厨」すべてがこのように迫真のものばかりでは決してない。大多数は、その中のいくつかのものを取り上げて象徴的につくって副葬しているのである。たとえば、陶製竈、穀物貯蔵かん、酒壷、水甕、動物または動物俑、煮炊き用の調理器具、飲食器などがある。

「厩」については、前漢王墓には車あるいは馬、車馬器具がある。長清双乳山１号墓では、墓道の槨室内から大型車３輌、小型車１輌、馬８頭、鹿２頭が出土している。広州象崗山漢墓では墓道と前室に漆塗り木車の模型が１輌ずつ置かれていた。北京大葆台１号墓では墓道の槨室から彩色朱輪馬車３輌と馬 13 頭が出土している。満城陵山１号墓では甬道に車２輌と馬５頭が、南耳室には車４輌と馬 11 頭が置かれ、陵山２号墓では北耳室に車４輌と馬 13 頭が置かれていた、などがあげられる。

後漢の人服虔は、墓葬の外蔵槨について簡潔に要点を大変うまくまとめており、そこから外蔵槨で最重要ないくつかの項目の内容を取り上げてみた。王墓外蔵槨の状況を見て見ると、大は軍隊（兵馬俑坑）から、小は武器庫、金庫、絹織物倉庫などまで、多岐にわたる。その基本は衣･食･住･行〔移動〕･用〔日常品〕のいろんな方面を網羅しており、生前の豪奢で華美な生活を反映したものになっ

ている。

ⅲ　副葬制度

①車馬の殉葬

実用の車馬が副葬されていることは、前漢諸王侯墓とその他の大型墓とを分ける重要な特徴の一つである。王墓に真の車馬を副葬することは前漢時代前期にはじまり、前漢時代中期から後期前葉にかけて盛行する。しかしおおよそ前漢時代後期後葉には、それまで長期にわたって使われてきた真の車馬が明器の車馬に取って代わられる。一般に副葬車輛は３輛で、その王墓に北京大葆台１号墓・２号墓、定県 40 号墓、満城陵山２号墓、獲鹿高庄１号墓、長清双乳山１号墓、曲阜九龍山の４基の墓などがある。また同時に小型車輛１輛を副葬していた王墓、満城陵山２号墓や長清双乳山１号墓などもある。なお、満城陵山１号墓のように副葬車輛が６輛の例がある。研究によると、前漢王墓に副葬された３輛の車は、衣冠を墓穴に送り届ける魂車とされ、先秦時代の喪葬時に使われた乗車、道車、槀車にあたる[56]。別の研究者は違った見方をしていて、前漢王墓に副葬された３輛の車を王の青蓋車（安車）、戎車（あるいは猟車）、軺車に考えている[57]。

②棺　槨

竪穴木槨墓と黄腸題湊墓は、先秦時代の多重棺槨の風習を留めたものである。竪穴木槨墓には長清双乳山１号墓の二重槨三重棺、献県 36 号墓の三重棺（一槨）があるが、巨野紅土山漢墓は一槨一棺で、決して一致していない。黄腸題湊墓の多くは、石家庄小沿村漢墓や長沙陡壁山漢墓、望城坡１号墓、高郵県天山１号墓、北京大葆台１号墓（別に二重槨あり）のように二重棺であるが、象鼻嘴１号墓は三重棺、定県 40 号墓は五重棺であり、どうも統一されていないように思われる。

竪穴石室墓と横穴崖洞墓では、棺槨の保存状態のよい例がほとんどなく、棺槨の状況はよくわからない。ただし、広州象崗山漢墓は一棺一槨であり、徐州獅子山漢墓や満城陵山２号墓では数少ない鑲玉漆棺〔玉を象嵌した漆棺〕が使われている。このことから見て、新たに起こった二つの墓葬形態は、先秦時代の多重棺槨制から完全に脱却した可能性があり、単棺だけの使用である。

③玉衣着装

玉衣は漢代皇帝や貴族の死後に装着する特殊な衣装で、王侯墓からも多く発見されている。漢代の玉衣の起源については、先秦時代の貴族墓の中に、顔面に玉を綴った面かぶせ、身体に玉を綴った服を着せた遺体のあることに由来する、という研究がある[58]。玉衣着装の制度について、『後漢書・礼儀誌』には、皇帝は金縷玉衣を、王侯や諸侯、貴人、公主は銀縷玉衣を、大貴人と長公主は銅縷玉衣を用いると記されている。発掘調査で出土した玉衣を見ると、前漢時期は玉衣の使用上の厳格な等級制度は未形成だったようである。諸王侯や諸侯でも金縷玉衣を使用している者もいる。諸王墓では満城陵山１号墓・２号墓、定県 40 号墓、永城窯山１号墓、永城僖山１号墓、徐州獅子山漢墓、徐州北洞山漢墓、高郵県天山２号墓などが、諸侯墓では邢台南郊漢墓がある。しかし、王墓であっても長清双乳山１号墓などのように玉衣が使われていないものもあり、広州象崗山漢墓のように絲縷玉衣という特殊なものもある。

文献には、ある高位高官が死後に玉衣の使用を賜ったと記している。

（２）後漢王墓

後漢は、前漢の王と諸侯の分封制度を継承している。後漢諸王侯・諸侯の埋葬制度も前漢を継承し、発展させている。

Ａ　後漢王墓の概要

後漢諸王侯墓の考古学的調査の件数ならびに分布範囲は前漢にはおよばない。報告のあるものは、河北省定県北庄漢墓[64]、定県43号墓[65]、山東省臨淄金嶺鎮１号墓[66]、山東省済寧市肖王庄１号墓[67]、済寧市普育小学校漢墓[68]、河南省淮陽県北関１号墓[69]、江蘇省徐州市土山漢墓[70]、江蘇省邗江県甘泉２号墓[71]の８基である。それらに関係する王国は、中山と斉、任城、陳、彭城、広陵になり、分布地域は河北省、山東省、河南省、江蘇省にまたがっている（表２－４）。

ｉ　墓葬の形態

後漢王墓はすべて１本墓道の竪穴土壙塼石墓である。墓室は、ほとんど塼と石材で構築されるが、塼か石材だけを積み上げてつくられたものもある。ふつう、墓道や甬道には１ないし２つの耳室が付設され、墓室は前室と後室に分けられているが、中には後室を二つ並列させたものもある。ほとんどの墓室の周囲には回廊が巡らされており、回廊の外周に石垣を積み上げたものもある。つぎに邗江県甘泉２号墓、定県北庄漢墓、淮陽県北関１号墓、済寧市普育小学校漢墓について記しておく。

邗江県甘泉２号墓は盛り上げた封土の中に墓室を築いている。墓室は南向きで、前室と二つの並列する後室、回廊からなる。後室の両端には門や壁がなく、直接前室と回廊に通じている。副葬品は前室と後室、回廊に置かれ、銅器、鉄器、銀器、陶瓷器、ガラス製品、漆器および、金･玉･瑪瑙･琥珀・真珠・緑松石・ガラスの装飾品が散布していた。銅製雁脚台灯に「山陽邸」「建武廿八年造」の銘があり、それにより被葬者は後漢の明帝永平十年（A.D.67）に自殺した広陵国の思王劉荊に考えられている。そのことは採取された亀紐の「広陵王璽」金印から実証されよう。この墓には並列する二つの後室があることから、夫婦同穴合葬墓になろう（図２－24）。

定県北庄漢墓は塼と石を積み上げて、南向きに墓室をつくる。墓室は、墓道、東耳室、前室、後室、後室を取り巻く回廊で構成される。前室と後室、回廊は門でもって通じている。墓室の外周には石垣を積み上げ、天井は３層に石を敷き平たくつくる。耳室には陶器の飲食器が置かれていた。墓室からは銅器、鉄器、玉石器が400点以上出土し、二組の鍍金の銅縷玉衣があった。玉片の背面に「中山」の墨書、陶製釜に「大官釜」の刻文、銅製弩機に「建武卅二年」の刻銘があり、そのほか石塊の刻文や墨書などの文字資料を総合的に分析した結果、被葬者は後漢の和帝永元二年（A.D.90）に薨去した中山国の簡王劉焉とその妻であることがわかった（図２－25）。

淮陽県北関１号墓も塼と石を積み上げて、東向きに墓室をつくる。墓室は、墓道、甬道、南北耳室、前室、後室、回廊で構成される。回廊は墓室全体を囲繞し、その中に７つの小部屋をつくっている。各室には甬道があり、アーチ形の門でつながっている。副葬品は、銅器や陶器、玉器などが

あるが、中でも、彫刻画像のある石製の石倉楼〔石造楼閣風倉庫〕などの石製品は最も注目に値する。被葬者については、墓葬規模や形態、配置、装着の銀縷玉衣、回廊の壁塼に押印された「安君寿壁」などを勘案して、後漢安帝延光３年（A.D.124）に薨去した陳国の頃王劉崇になろう。この墳丘の下の１号墓の北側にある墓は劉崇の妻のものと考えられる（図２－26）。

済寧市普育小学校漢墓の墓室は、東向きに石材で構築され、墓道、前室、南北耳室、後室、後室の三面を取り巻く回廊で構成される。門と敷石を除くすべての墓室の石材面には、いろいろな紋様が線刻や浅い浮彫や象嵌されている。その紋様には連弧紋、垂幃紋〔慶弔に詩文などを書いた幕の裾模様〕、菱形紋、水波紋、幾何学紋、天文図などがある。出土遺物には銅器、陶器、玉石器、骨器100余点、銭貨350枚、鉄器、漆器の残片などがあるが、中でも重要なのが銅縷玉衣である。発掘調査者は、被葬者を後漢後期の桓帝･霊帝の頃の任城国王劉博の妻か、劉佗の妻と考えている（図２－27）。

ⅱ　副葬品

後漢８基の王墓はすべて盗掘にあっており、副葬品の全貌を知ることは難しい。後漢の王墓は本物の車輌や馬を殉葬せず、代わりに模型の車馬を用いた。そのため鍍金された車馬器がもっぱら使われ、鍍金の銅容器や硯箱、博山炉〔上部を山形にした香炉〕などの生活用器も収められた。金製品では定県43号墓のように特色のあるいろんな金飾りを造形したものがあり、銀製品では盒や椀および各種装飾品がある。後漢王墓ではミニチュアの明器の副葬が盛行し、陶製の楼閣や倉庫、風車唐臼、井戸、竈、厠圏〔囲い込み便所〕、猪、鶏、犬および石製の井戸、猪、羊、鶏などがある。王墓の中には、邗江県甘泉２号墓の銘文のある銅製雁脚台灯や「広陵王璽」亀紐金印、定県北庄漢墓の玉衣片の背面に墨書、陶釜に刻文、銅製弩機に銘、刻文、石に墨書があるように、わずかな文字資料をもつものもあり、淮陽県北関１号墓には塼に押されたスタンプ文字がある。

Ｂ　葬制の小結

後漢の王墓には並列合葬墓〔墓が並列する合葬墓〕と同穴合葬墓とがある。臨淄金嶺鎮１号墓、済寧市肖王庄１号墓、淮陽県北関１号墓、徐州市土山１号墓、済寧市普育小学校漢墓では一つの後室に、一つの玉衣が出土している。そのうち、淮陽県北関１号墓とその北下にある墓、徐州市土山１号墓とその南のある２号墓は明らかに並列合葬になるものである。邗江県甘泉２号墓と定県43号墓は二つの後室が並列し、定県43号墓と定県北庄漢墓からは二組の玉衣が出土していることから、この３基は同穴合葬であることは明らかである。

ⅰ　墳丘等の築造制

①墳丘

後漢王墓のうち墳丘が見あたらないか、報告がない３基を除く５基の墳丘の規模は、定県北庄漢墓が各辺長40m〔報告書は長さ・幅で大きさを記しているが、円墳の可能性がある〕、高さ20mで、定県43号墓が底径40m、高さ12mで、臨淄金嶺鎮１号墓がほぼ円錐台形を呈し、底径35.4m～37.2m、高さ10.75mで、済寧市肖王庄１号墓が底径約60m、高さ約11mで、邗江県甘泉２号墓が

直径 60m、高さ約 13m である。５基の墳丘の高さは 20m、12m、10.75m、11m、13m と、総体的に見て、すべて 10m を超えている。このことから後漢王墓の墳丘の高さが前漢王墓の高さと基本的に一致しているといえる。つまり王墓の墳丘の高さは、諸侯墓（『周礼・春官・塚人』鄭注に「漢律曰列侯墳高四丈､関内侯以下至庶人各有差」という）と帝陵（『漢旧儀』に前漢帝陵の「墳高十二丈、武帝墳高二十丈」とある）との間にある。よって、ある一面、前漢と後漢の喪葬制度には一致性と関連性があるといえる。

墳丘の形状は、臨淄金嶺鎮１号墓は略円錐台形に、定県 43 号墓と済寧市肖王庄１号墓、邗江県甘泉２号墓は墳丘の大きさが直径で示されていることから円錐台形に、定県北庄漢墓についても円墳に捉えられるようで、後漢諸王侯墓の墳丘形状と後漢皇帝陵のそれとはよく似ている。

②その他

後漢王墓には墓園遺構は発見されていない。後漢皇帝陵には、墻壁に代わって「行馬〔駒除け〕」を配置した、陵園が設けられている。後漢王墓にも皇帝陵の陵園に倣った形態のものが置かれていたのかどうかについては、今後の研究を待たなければならない。

文献からは、『後漢書・東海恭王疆伝』に「将作大匠留起陵廟」とあるように、後漢王墓の近くに廟などの建築物があったと記されているが、今のところ考古学的調査では発見されていない。

前漢皇帝陵や王陵の前では、石像の発見は未だにない。武帝茂陵の陪葬墓である霍去病墓の周囲には有名な石像、象、牛、馬、魚、猪、虎、羊、闘人熊、馬踏匈奴などが並べられている。霍去病は生前たびたび匈奴を征服し、輝かしい戦功を立てたため、彼の墓にはそのようなたくさんの石像が建てられたのであり、そのことは特殊な経歴に関係があってのことである。後漢皇帝陵の前では大きな象の石像が発見されたり、たくさんの後漢の石羊、石天禄〔想像上の虎形〕、石辟邪〔想像上の動物〕、石獅子などが伝世しているが、それらは一般に墓前のものと認識されている。それは後漢時代、墓前に石像を樹立することが盛行したからである。文献の中には、諸王侯墓前にも石像が建てられた可能性を示唆するものもある。『水経注・易水』には「中山簡王之葬也、厚其葬、採涿郡山石以樹墳塋、陵隧石獣、併出此山、有所遺二石虎、后人因以名岡。〔中山簡王これに葬るなり、厚く其れ葬る、涿郡の山石を採り以て墳塋を樹てる、陵のみちに石獣あり、ならべて此の山に出る、二石の虎遺る所あり、後の人岡の名を以て因る。〕」と記す。

ⅱ　墓葬の形態

①形態の特徴

後漢の王墓が前漢の木槨墓と崖洞墓の形態を完全に放棄し、前漢の竪穴墓形式と崖洞墓の平面配置、空間構造の石室墓を基礎に、黄腸題湊墓の影響を受けて、前・後室に回廊を巡らせた塼石構造の墓をつくり出し、時代に適応させて発展変化させたことは、後漢王墓の基本的形態上の重要な特徴である。

②塼石題湊

後漢王墓の回廊の付け方は、前漢の黄腸題湊墓と崖洞墓の回廊の形態を継承したものである。定

県北庄漢墓を例に採ると、墓室の配置構造は大変黄腸題湊墓に似て、「梓宮」（後室）、「便房」（回廊）、題湊の壁（石壁）、「外蔵槨」（耳室）はそろっている、が違うことは前室がそれらから独立していることである。この墓の内部は、黄腸木が黄腸石に、木の題湊壁が石の題湊壁に変化し、題湊壁内外のも木造の「梓宮」「便房」「外蔵槨」もすべて塼室に変わった。多くの墓は回廊の周囲に別に石の題湊壁をつくることはないようだが、この墓は回廊の外側に塼壁か石壁を巡らして題湊壁の機能を象徴している。

③正蔵と外蔵槨

後漢王の塼石室墓の平面配置は前漢の崖洞墓によく似ている。一般的に前・後二つの主要墓室があり、後室に棺を安置し、前室に各種器具を置く。前室には側室が付設され、後室の周りに回廊が巡る。墓道あるいは甬道の両側には、食糧を貯蔵したり、車馬と偶人を置くための耳室が設けてある。墓の構造配置および各部屋の機能を見ると、前・後二室には門で隔てられるが、前室は直接後室の仕事部屋として密接な関係にある。そのため、前・後の墓室とそれにつながる側室ならびに回廊は墓葬の正蔵を構成し、墓道と甬道、その両側の耳室は外蔵槨になる。たとえば、臨淄金嶺鎮１号墓の前室と後室、回廊は正蔵になり、甬道の両側の耳室は外蔵槨となる。

ⅲ　玉　衣

玉衣の使用制度について、『後漢書・礼儀誌』には皇帝は金縷玉衣を、王と初封諸侯、貴人、公主は銀縷玉衣を、大貴人、長公主は銅縷玉衣を用いると記す。考古学調査で検出した玉衣資料を見ると、前述したように前漢時期の玉衣の使用法は、未だ厳格な等級制度になっていなかった。それが後漢代になって、文献にあるように、身分によって縷質を分ける制度が形づくられ、王と始封諸侯が銀縷玉衣を着けるようになったのである。文献に記載のない嗣位諸侯、王および諸侯の妻子は銅縷玉衣を用い、さらに一部の銅縷玉衣を使用した墓については、被葬者が大貴人や長公主などの身分であったと思われる。

後漢の王墓では普遍的に玉衣着装が見られる。定県 43 号墓、臨淄金嶺鎮１号墓、済寧市肖王庄１号墓、淮陽県北関１号墓、徐州市土山１号墓の５基の被葬者は銀縷玉衣を着けていたので、身分は王になる。済寧市普育小学校漢墓は銅縷玉衣を、定県 43 号墓の片方の被葬者が銅縷石衣を着けており、彼女らは王后になろう。やや特殊な事例として定県北庄漢墓と邗江県甘泉２号墓があげられる。前者からは二組の鍍金銅縷玉衣が出土している。それについて、銀縷に相当する鍍金銅縷であろうとする見方[72]と、鍍金銅縷は金縷の代用とする見方[73]とがある。後者は玉衣の出土がなく、被葬者が自殺しなければならなかった背後関係が考えられる。このように、後漢王墓検出の玉衣着装の状況は、文献に記された玉衣使用の身分による縷質制度と基本的に一致しているのである。

現有考古資料から、後漢時期の墓葬で玉衣使用の是非を巡って具体的に最もよく等級の特徴を表したものに、10 数基発掘されている二千石官吏墓うち、河北省望都２号漢墓の被葬者が劉姓の皇族で贈られた銅縷玉衣を着装していた以外はすべて、玉衣の使用は見られない、ことがあげられる。

以上、墓葬資料に制限はあるものの、後漢諸王侯墓の考古学的研究を行ったが、一部墳墓の建造

制や副葬品などについて深く立ち入ることができなかった。今後、完全な諸王侯墓が発掘され、より多くの研究が進むことを期待したい。

3　漢代の諸侯墓

諸侯は王につぐ第二位の爵位で、前漢初頭に分封がはじまり、そのまま後漢末まで続いた。諸侯墓の制度は漢代喪葬礼制の重要な構成部分であり、漢代墓葬の等級制度の研究上、重要な一つを占めている。

諸侯の研究と諸王侯の研究は同じで、まずその識別からしなければならない。墓内から出土した数少ない印章、封泥、漆器、銅器の銘文などの文字資料から、被葬者が何代の誰かを確定する。着装した玉衣が出土すれば、墓の立地や墳丘の高さ、副葬品の特徴に文献の内容を参考にして、被葬者の身分を推定するのである。

（1）前漢の諸侯墓

前漢の諸侯と諸侯夫人の墓は13基がわかっており、そのうち12基が前漢時代前期に、1基が前漢時代中期になる。それらは河北省邢台市南郊漢墓[74]、陝西省咸陽市楊家湾4号墓・5号墓[75]、西安市新安機塼廠漢墓[76]、四川省綿陽市双包山2号墓[77]、山東省済南市臘山漢墓[78]、安徽省阜陽市双古堆1号墓・2号墓[79]、江蘇省徐州市簸箕山3号墓[80]、湖南省長沙市馬王堆1号墓・2号墓・3号墓[81]、沅陵県虎溪山1号墓[82]で、そのうち徐州市簸箕山3号墓と長沙市馬王堆1号墓・3号墓、沅陵県虎溪山1号墓は保存状態が完全であった。これらの墓に関わる侯国は、南曲侯、絳侯または条侯、汝陰侯、宛朐侯、軑侯、沅陵侯で、河北省、陝西省、四川省、山東省、安徽省、江蘇省、湖南省に分布している（表2－5）。また、河北省隆堯漢墓では230点以上の金縷玉衣片が出土し、その多くに金箔彫刻紋飾りがあることから、その被葬者を前漢時代中・後期の某代象氏侯に推定されている[83]。山東省陽谷県呉楼1号墓は規模の大きな塼室墓で、墓室の大きさは南北長12.06m、東西幅9.56m、並列する二つの墓室をもち、墓室の周囲に回廊が巡る。副葬品には銅器、鉄器、鉛器、陶器、石器、骨器、銭貨などがあり、被葬者は前漢時代後期の某代陽平侯夫婦と推定されている[84]。

A　墓葬の形態

塼室墓1基を除いて、その他は1本墓道の竪穴土石坑木槨墓である。

i　木槨墓

墓室は木造構築である。つぎに咸陽市楊家湾4号墓、徐州市簸箕山3号墓、長沙市馬王堆1号墓、沅陵県虎溪山1号墓について概述する。

咸陽市楊家湾4号墓は、曲尺形の傾斜墓道（南向き）と墓室で構成される。墓道と墓室の壁は階段状につくられており、本来極めて複雑な木造構造につくられている。墓室の床面規模は東西長10.57m～11.01m、南北幅8m～8.75mである。墓室には木炭が堆積しており、棺槨の形態は不詳である。墓坑の内外には18の陪葬器物坑があり、そのうち墓道内に5穴、墓外に13穴がある。陪葬坑は、車坑（K7）、穀物食料、車馬坑（K4、K5、K6）、陶器坑（K1、K2、K3）銅器坑と兵馬俑

坑（10 穴。６穴は騎馬俑を安置、全部で 580 点以上。４穴は立俑を安置、約 2000 点）というように埋納器物ごとに分類されていた。最もよく被葬者の身分を証明するものは墓室から出土した 200 枚以上の銀縷玉衣片である。被葬者は絳侯周勃か、または条侯周亞夫に考えられている（図２－28）。

徐州市簸箕山３号墓は竪穴石坑墓で、傾斜墓道は付けられていない。墓坑の大きさは南北長 3.6m、東西幅 2.6m で、墓底の東西壁に１つずつ浅い龕が穿たれ、副葬品を収めている。葬具は一棺一槨のようである。墓の西北 28m のところに、南北長７m、東西幅 1.1m の陪葬坑が一つ設けられていた。墓室の副葬品は 100 点（組）で、銅器、鉄器、金銀器、陶器、玉器、骨器などである。陪葬坑からは男女の陶俑 25 点が出土した。被葬者は腰に「宛朐侯埶」と篆書された亀紐の金印を着けており、それにより被葬者が宛朐侯劉埶であることがわかった。史書には劉埶が「七国之乱」に関わったと記されており、罷免あるいは誅殺されたのだろう。

長沙市馬王堆１号墓は傾斜墓道（北向き）と墓室からなる。墓道の両壁には二層台〔二段掘り〕が設けられている。墓坑の大きさは南北長 19.5m、東西幅 17.8m である。墓坑の壁は四段の階段状につくられている。棺室と槨室との間には東西南北四面に辺廂〔辺箱。副葬品を入れる小部屋〕がつくられている。被葬者は女性で、遺体の保存状態は非常に良好である。副葬品は 1000 点以上ある。主なものに、竹簡（312 点。内容は遣策〔副葬品の目録〕）、帛画（１幅）、絹織物（絹、紗、綺、羅紗、錦、絛〔組紐〕、組帯、印花紗、刺繡など）、漆器（184 点。朱書、墨書「軑侯家」などの文字や押印文字がある）、木俑（162 点）、竹木器（竹竿〔楽器の一種〕、竹竿律、竹簍〔籠〕、竹夾、竹扇、竹薫罩〔薫炉用の伏せ籠〕、竹の箸、竹席〔ござ〕、木瑟、木杖、木製の璧、木梳、木篦〔すき櫛〕、木製の犀角、木製の象牙、48 個の衣類や絹織物、食品、薬草、明器などを入れた竹笥〔行李〕がある）。さらに、小型の銅器や錫器、陶器、角器などもある。出土した「軑侯家丞」の封泥や「軑侯家」の漆器銘文に加え、並列した２号墓の被葬者が長沙国丞相であった軑侯利蒼であることを参考にして、この墓の被葬者を文帝初元十二年以降数年の間に薨去した、利蒼の妻に推測された（図２－29）。

沅陵県虎溪山１号墓は、傾斜墓道（東向き）に南北に付設する耳室と墓室で構成される。墓室は、主となる槨室と南北両側の外蔵槨室に分かれ、主槨室はさらに頭部側と南北両側に辺廂〔副葬品入れの小部屋〕と棺室に区切られる。被葬者は二重の套棺に納まる。三つの辺廂と内側の棺、外蔵槨室、耳室からは、銅器、陶器、玉器、滑石、漆木器、絹織物、竹簡など 1500 点（組）以上の副葬品が出土した。文字資料としては、漆器の銘文「沅五十三」などや、「呉陽」玉印、1336 枚（段）の竹簡（内容は『黄簿』、『日書』、『美食方』の三種類）がある。被葬者は文帝后元二年（B.C.162）に薨去した初代沅陵侯呉陽である。この墓の南側 20m 足らずのところに２号墓がある（図２－30）。

ⅱ　塼室墓

邢台市南郊漢墓の１基のみで、墓道（東向き）と墓室で構成される。墓室の壁は塼積みで、天井は木板で覆われている。墓室の規模は東西長 7.05m、南北幅 2.85m。副葬品は銅器、鉄器、陶器、玉石器など 30 余点である。出土した金縷玉衣片や「劉遷」と陰刻された亀紐銅印に加え、文献記

載内容を参考にして、被葬者は宣帝甘露三年（B.C.51）に薨去した南曲の煬侯劉遷であることが確かめられた。

B　葬制の小結

前漢諸侯墓の多くは、侯国都城付近の地形がやや高くなった家族墓内につくられており、夫婦異穴合葬墓形式が一般的である。以下に墳丘等の築造制、墓葬形態、副葬品についてまとめておく。

ⅰ　墳丘等の築造制

これには墳丘、墓園、墓に伴う建築物、石像などが含まれる。

①墳　丘

『周礼・春宮・塚人』鄭注に「漢律曰列侯墳高四丈、関内侯以下至庶民各有差〔漢律に曰く、列侯は墳高四丈にして、内侯以下庶民に至るまで差有りと申す〕」という。諸侯の墳丘高は４」丈で、漢尺一尺 23.1㎝で計算すると、4 丈は約 9.24m になる。諸侯墓の資料を見ると、ごく一部の墓葬（阜陽双古堆漢墓）以外、墳丘の高さはすべて８m 以内である。それは諸侯墓の墳丘が長年の間に自然浸食されたことを考慮しても、もとの高さは文献の記載内容と基本的に一致している。

諸侯墓の墳丘は版築造成で、その多くは円形または楕円形につくられている。咸陽楊家湾５号墓の墳丘が方錐台形につくられていることは、高祖長陵の陪葬として享用を受け賜ったためであろう。それは、冠軍侯霍去病墓の墳丘形を祁連山に、長平侯衛青墓の墳丘形を廬山に似せた特例と同じである。

②墓　園

諸侯墓に墓園を設置することについて文献には、『漢書・董賢伝』に「又令将作為賢起塚塋義陵傍…外為徼道、周垣数里、門闕罘徼甚盛。（又将作を命令し賢に義陵の傍に塚塋を起こし、…外に道をなし、垣を回らすこと数里、門闕罘罳〔網を張った窓のある宮門外のついたて〕甚だ盛んなり。」とあるが、今のところ考古学調査では実例は見つかっていない。

③墓に伴う建築物

前漢諸侯墓の傍には祠堂等の建築物が建っていた。済南市臘山漢墓は早くに盗掘されており、その盗掘坑から大量の雲紋瓦当や縄目平瓦、丸瓦、紋様塼などの遺物が発見された。そのことは、墓の傍に建っていた建物が倒壊廃棄された後、盗掘坑をその建築材で塞いだと推測できるのである。

④石　像

武帝茂陵の陪葬墓である霍去病墓の周囲には、象や牛、馬、魚、猪、虎、羊、闘人熊、馬踏匈奴などの石像が配置されている。これは前漢諸侯墓の中では特別なことである。

ⅱ　墓葬の形態

前漢諸侯墓は、主に伝統的竪穴木槨墓の形態を採用している。前漢時代中期に塼積みの墓室が出現するが、墓室の天井を木板で覆っており、形態は木槨墓によく似たものである。

前漢諸侯墓の正蔵の外側には外蔵槨が設けられている。西安市新安機塼廠漢墓は墓道に器物箱が、咸陽市楊家湾４号墓は墓道に５つの器物坑と墓外に 13 の器物坑が、徐州市簸箕山３号墓は墓外に

陶俑坑などがあるが、それらはすべて墓葬の外蔵槨にあたる。

ⅲ　副葬品

前漢諸侯墓の副葬品は非常に多いが、王墓に比べると大型銅器や鍍金銅器、大型玉器は少なく、金銀器の主なものはわずかな小型装飾品である。阜陽双古堆漢墓、長沙馬王堆漢墓、沅陵県虎溪山１号墓、綿陽市双包山２号墓からは大量の漆木器が出土するが、それは南方地方の諸侯墓の副葬品の中でも大きな特色を持っている。そこに保存されてきた大量の竹木簡牘は、その地方独特の文献資料として重要である。

玉衣を装着することは、前漢諸侯墓ではふつうには使用がないが、一部の諸侯墓では馬王堆１号墓のように、先秦時代の衣衾の制を踏襲しているものもあるようだ。玉衣を使用したものには、邢台市南郊漢墓の金縷以外には、咸陽市楊家湾４号墓・５号墓、綿陽市双包山２号墓の銀縷がある。

（２）後漢の諸侯墓

被葬者の身分が比較的はっきりしている後漢の諸侯級の墓は、河南省洛陽市白馬寺漢墓[86]、安徽省亳県董園村１号墓・２号墓[87]がある。また、一部の墓に玉衣片または石衣片が出土しているが、被葬者の身分を確定できないため、本文後の表に列挙した（表２－６）。

Ａ　墓葬の形態

後漢諸侯墓は、塼石積室墓で、墓道・甬道と２～３の墓室から形成されるのが一般的である。

ⅰ　洛陽白馬寺漢墓は塼室墓で、傾斜墓道（南向き）と横長の前室（一側室を付設）、後室で墓葬を構成する。墓室の規模は南北長 12m、東西幅 11.7m である。墳丘は円形を呈し、大きさは直径 48m、版築造成で、発掘調査時の高さはわずかに１m ほどが残っていた。前室と耳室には、銅器や鉄器、陶器、玉器などの各種副葬品があったが、その多くは小型品か、残欠器物であった。棺は後室に安置され、年代は後漢時代後期である。墓中から出土した玉片は玉衣片の可能性があり、墓葬の規模の大きさからも、被葬者は諸侯級であったといえる（図２－31）。

ⅱ　亳県董園村１号墓も塼室墓で、傾斜墓道（東向き）、前室、中室、後室（二側室を付設）で墓葬を構成する。墓室の規模は長さ 13m、幅 10.4m である。墓室の壁には彩色壁画がある。出土文字資料には、陽刻印字塼と陰刻文字塼がある。副葬品の中には銀縷玉衣と銅縷玉衣が一組ずつあり、ほかに銅器、鉄器、金銀器、青瓷、陶器、玉器、歯牙器、ガラス製品などが出土した。年代は後漢時代後期（桓帝延熹年間）で、被葬者は諸侯夫婦である。この墓は亳県の曹氏宗族の墓の一つである。

ⅲ　亳県董園村２号墓は、墓室の大部分が石積みで、耳室が塼積みでつくられている。墓葬は甬道（東向き）、前室（二側室を付設）、中室（二側室を付設）、後室からなる。墓室の規模は長さ 15.3m、幅 10.2m である。甬道の石壁には人物像の線刻画がある。また、石門の外側には鋪首銜環〔輪を銜えた獣面把手〕が、門の縁には竜虎が、門石の上部には鳳、鹿、羽人が刻まれている。副葬品は残らず奪い取られて、空っぽであったが、数百片の銀縷玉衣片が残されていたため、被葬者が諸侯級であったことが推測された。年代は後漢時代後期で、この墓も亳県の曹氏宗族の墓の一つである。

B　墳丘等の築造制

後漢諸侯級の墓葬は円形の墳丘をもつ。墳丘のほかに墓園が設けられている。洛陽の白馬寺漢墓の墓園は、黄土を版築した墻壁でもって長方形につくられている。南北二辺の墻壁の長さはどちらも約 190m、東西二辺の墻壁の長さはどちらも約 135 mである。墻壁の基底部の幅は 2.5m ～ 4.0m。その体部の幅は 1.2m ～ 1.3m である。墓園の四隅には守衛用の小屋がある。

墓の傍に建物があるのは、洛陽白馬寺漢墓の一例だけである。その建物は墓園の東側にあり、一つの建物群を構成している。その分布範囲は東西 90m、南北 70 数 m である。建物群全体の配置は、周囲を幅 1 mの版築土塀で囲んだ中を、さらに南北方向に 2 本の幅 1 m の版築土塀区切り、東西に三分割した敷地につくり、それぞれの敷地に殿〔大型建物〕・堂・廊・舎〔小屋〕を建てる。また周囲を囲む土塀の外にも付属建物がある。 1 号院の西隣には墓園の主人である被葬者の墓がある。その 1 号院の殿堂が最大規模を誇り、この建築群の主体建物になる。その殿堂基壇の規模は東西 28 m、南北残長 12.5 m～ 22 mで、周りの何ヶ所かに階段または斜道を付け、外周に塼敷き廊下と玉砂利の雨落ちを巡らす。

4　漢代二千石官吏墓

二千石官は漢代の地方行政官では最高の官吏になり、郡太守（二千石）〔郡長官〕と郡都尉（比二千石）〔郡武官の長〕がこれに属す。また、中央官吏の中にもたくさんの二千石官吏に属す高官（二千石、二千石と比二千石を含む）がいる。二千石官吏は、漢代の中央と地方の官僚体制の重要な部分を構成しており、この階層の埋葬形態は漢代の喪葬等級制度において重要な内容を構成している。

この階層の墓葬は、形態や配置はもちろんのこと副葬品もはっきりしておらず、その等級の特徴も定まっていないため、二千石官吏墓の識別はかなり困難である。幸いに、墓から出土した印章や墓の壁題、扁額の題字などの文字資料があり、被葬者の身分を識別する重要な物証となっている。

（1）二千石官吏墓の概要

二千石級官吏墓は、今のところ 11 基が確認されている。それらを時期別に分けると、後漢時代後期が大多数を占めて 10 基あり、残る 1 基は王莽の新のものである。墓葬の分布は河南省、河北省、山東省、江蘇省、内蒙古自治区、甘粛省におよんでいる。そのほか、いくつかの墓葬に、その規模や形態から二千石級によく似たものがあるが、直接結論を得る証拠を欠き、確定できないでいる。これについては後に概説し、研究の参考に供したい。

前漢時代の二千石官吏墓は一つもわかっておらず、今後の発見に期待したい。

墓室の種類は、その建材から、塼室墓、塼石混合積み室墓、石室墓の 3 種に分けられる。なお墓葬のすべては盗掘を受けている。

A　河南省唐河県新店漢墓

塼石混合積み室墓で、封土と墓道は破壊されている。墓室は東向きで、前室（二耳室付設）、中室、並列する二つの後室、後室と中室を取り巻く回廊からなる（図 2 － 32）。墓室の規模は、東西

長 9.5m、南北幅 6.15m である。画像石が 35 幅あり、朱彩されている。題材は、二龍穿璧〔頭と尾を逆にして絡まって璧をつらぬく二龍〕、笏を持った門吏、四神、鋪首銜環、羽人、二龍後尾〔頭と尾を逆にして絡まった二龍〕、材官蹶張〔尻を地につけて弓を引く武人〕、拝謁、太鼓打ち、闘獣、門闕、家屋、人物、動物、百戯、馴虎、騎象などである。彫刻手法は浅い浮彫を主とし、一幅に線刻がある。また、前室の南耳室の門柱に「郁平大尹馮君孺人車庫」、前室と中室の間にある門楣の後に「東方」、南門柱に「郁平大尹馮君孺人中大門」、中室南北回廊の間にある門楣にそれぞれ「南方」「北方」、中室と南主室の間の門楣に「西方門内」「大尹馮君孺人蔵閣」、二つの後室の間の中柱に「郁平大尹馮君孺人始建国天鳳五年十月十柒日葵巳葬千歳不発」などの刻文がある。副葬品には銅器、鉄器、釉陶、陶器、銭貨などがある。墓内の刻文題記から、被葬者は郁平郡の大尹馮君孺人で、王莽の始建国天鳳五年（A.D.18）に葬られたことがわかる。郡名の「郁平」と官名の「大尹」は王莽の改編によるもので、「大尹」は太守に相当し、二千石の官にあたる[97]。

B　江蘇省邳県青龍山漢墓

西向きの石室墓で、墓園の墻壁と封土、墓室からなる。墓園の墻壁は石積みで、山の斜面につくられており、南半部が方形、北半部が台形を呈す。総面積は 250㎡である。復元によると、墻壁の基礎は版築と砕石で、壁は４層に石を積み上げている。高さは 1.35m で、頂部を切妻屋根につくり、丸瓦を葺いたように畝と雲紋瓦当を刻み出している。封土は墓園の北半部にあり、円形に盛り上げている（図２－33）。墓室は、石材でもって構築され、床には紋様塼が敷かれており、前室と後室、後室を取り巻く回廊で構成される（図２－34）。墓室の規模は東西長 7.2m、南北幅 4.65m である。７幅の画像石があり、題材は門吏、車馬出向、厨房、宴会、囲碁、楽舞雑伎、狩猟、四神、瑞獣、弔問、大儺〔仮面を着けた舞〕などを浅く浮彫にして底に線刻を入れ、朱彩して描いている。画像石の一方に墓誌が一緒に刻まれており、被葬者は後漢の桓帝和平元年（A.D.150）７月７日に死去し、桓帝元嘉元年（A.D.151）３月 20 日に葬られた彭城相繆宇に確認された。相は二千石の官にあたる[98]。

C　河南省密県打虎亭漢墓

南向きに、30m の間隔をおいて東西並列して２基ある。どちらも塼石混合積み室墓である。

１号墓は西側にあり、封土、傾斜墓道、甬道、前室、中室（３耳室付設）、後室で構成される（図２－35）。封土の高さは 15m で、封土の裾に切石を積んだ石壁を巡らす。封土の南側には石碑と建物の礎石があったといわれている。墓室の規模は南北長 25.16m、東西幅最も広いところで 17.78m である。墓室の主要な装飾は画像石で、題材は鋪首銜環、四神、庭院、厨房、人物、車馬、宴会、動物、花卉、幾何学紋などで、彫方は浅い浮彫を主とし、線刻も使われている。

２号墓は東側にあり、形態は１号墓とほぼ同じである（図２－36）。墓室の規模は南北長 19.14m、東西幅 16.65m で、封土の高さは約 7.5m である。墓室には画像石のほかに、主に壁画が描かれている。その内容は人物、動物、車馬、厨房、宴会、楽舞百劇、花卉、幾何学紋などである。

１号墓、２号墓の年代は後漢時代後期である。『水経注』の記載内容を参考に、１号墓の被葬者

を弘農太守張伯雅に、２号墓をその配偶者に推測されている。『水経注』には、張伯雅の墓前には石廟、石闕、石碑、石人、石柱、石獣などがあったと記している。発掘調査中、この２基の墓道から屋根の形状をした石部材の残欠や画像石の残欠が出土している。この画像石の彫刻技法と２基の墓室の画像石のそれとは違っており、その石部材は石廟や石闕を建てた時の建築部材の残欠と思われる[99]。

D　河南省滎陽萇村漢墓

北向きの塼石混合積み室墓である。封土、甬道、前室（１室付設）、並列する三後室からなり、墓室の規模は南北長約 17m、東西幅は最も広いところで約 20m である（図２－37）。封土の高さは約 10m である。墓室には数幅の画像石があるが、主要な装飾は色彩壁画で、総面積は約 300㎡になる。題材は楼闕庭院、車馬出向、人物故事、珍禽異獣、楽舞百劇、花卉、幾何学紋など、内容豊富で多岐にわたる。年代は後漢時代後期である。壁画の扁額題記に墨書で「巴郡太守時車」「済陽太守時車」「斉相時車」などと記されており、被葬者の身分は二千石の官であったと推測される[100]。

E　河北省望都漢墓

２基あり、約 30m の間隔をおいて南向きに、東西に並列する。どちらも塼室墓である。

１号墓は西側にあり、封土、墓道、甬道、前室（２耳室付設）、中室（２耳室付設）、後室（１壁龕付帯）で構成される（図２－38）。墓室の規模は、墓道を含めて南北長 20.35m、東西幅は最長で 14.74m、封土の高さは 11m である。副葬品は少なく、陶器と石器などである。前室の壁一面に壁画が描かれており、その内容は主として人物と動物で、たくさんの扁額の書がある。中室のアーチ状天井の塼面には白色文字の書がある。年代は２号墓とほぼ同じで、後漢時代後期である。被葬者の官職は、壁画の内容から推測して、少なくとも二千石であったようである。

２号墓は東側にあり、封土、甬道、五つの墓室（東西に耳室をもつ四室があり、最後の一室は北壁に１壁龕がつく）で構成される（図２－39）。墓室の規模は、墓道を含めて南北長 32.18m、東西幅は最長 13.4m である。墓室は地面上に築かれ、高さ約 13m の封土が盛られている。墓室の壁には人物などの彩色壁画が描かれている。副葬品には銅器、鉄器、釉陶器、陶器、玉器、骨器、銭貨などのほかに、鍍金された銅車馬器、朱彩紋陶器がある。重要なものとしては 425 片の銅縷玉・石衣片と一つの買地券塼がある。その買地券から墓の年代が後漢の霊帝光和五年（A.D.182）であることがわかった。被葬者の身分は二千石の官、太守になろう。被葬者が身につけていた銅縷玉衣は、劉姓皇族で下賜されたために使用したものと思われる[101]。

F　河北省安平漢墓

東向きの塼室墓である。封土、甬道、前一室（２耳室を付設）、前二室（２耳室付設）、中室（１耳室付設）、並列する二後室（それぞれに１壁龕付帯）で構成される（図２－40）。墓室の規模は、東西全長 22.58m、南北幅は最長 11.63m で、封土の高さは３m である。棺は二後室に安置されている。墓室のアーチ状天井の塼面全体に白色文字の書がある。前一室の南耳室と前二室および前二室の南

耳室には、車馬出向、建物、謁見、伎楽などの壁画が描かれている。副葬品には銅器、鉄器、瓷器、陶器、銭貨などがある。後室の天井に「惟熹平五年」の題記があり、墓の年代が後漢の霊帝熹平五年（A.D.176）であることがわかる。また、壁画の車馬出向図の分析から、被葬者の身分が二千石の官吏だったようである[102]。

G　山東省沂南漢墓

南向きの石室墓である。封土、前室（２耳室付設）、中室（３耳室付設）、並列する二後室で構成される（図２－41）。墓室の規模は南北長8.7m、東西幅7.55mである。副葬品は銅鏃１点とわずかな陶器だけである。墓の中門、前室、中室、後室は73幅の画像石で飾られている。内容は戦争、祭祀、車馬出向、宴会、楽舞百戯、閑居生活、歴史故事、神話人物、羽人、仙異禽獣〔仙界にいる珍禽獣〕、厩などである。年代は後漢時代後期になろう。墓の規模や画像石資料から、被葬者の身分は二千石の官吏に考えられる[103]。

H　甘粛省武威市雷台漢墓

東向きの塼室墓である。封土、傾斜墓道、甬道、前室（２耳室付設）、中室（１耳室付設）、後室で構成される（図２－42）。後室に２棺が安置されている。墓室の規模は東西全長19.2m、幅は最長10.3mで、封土の高さは６ｍである。墓道、前室、中室、後室には簡単な図案の壁画がある。内容は樹形紋、蓮花紋、幾何学紋などである。副葬品には銅器、鉄器、金銀器、陶器、玉石器、骨器、琥珀製品、漆器など231点に、銅銭21125枚がある。重要な副葬品には銅俑、銅車馬隊列、銀印などがあり、その中で最も有名な芸術品は銅製の踏燕奔馬である。研究の結果、墓の年代は後漢時代後期で、被葬者は張姓将軍夫婦である。張姓将軍の官職は比二千石と思われる[104]。

I　内蒙古自治区和林格尓漢墓

東向きの塼室墓である。封土、傾斜墓道、前室（２耳室付設）、中室（１耳室付設）、後室で構成される（図２－43）。墓室の規模は東西長12.65m、南北幅最長約11mである。副葬品には銅器、鉄器、陶器、漆器などがある。墓室は、壁画46組、57画面で飾られ、その面積は約100余㎡になり、識別できる扁額の題記は250条近くにのぼる。壁画の内容は大変豊富で、主なものに車馬出向図、役所、倉庫、荘園、閑居、宴会厨房、楽舞百戯、農耕、採桑、放牧、歴史故事、仙人、四神、祥瑞、渭水橋などがある。年代は後漢時代後期で、壁画の扁額の題記から、被葬者の生前の任務が「使持節護烏桓校尉」であったことがわかり、二千石の官であった[105]。

上述した11基の漢墓のように被葬者の身分や等級がはっきりしたものやある程度わかるもの以外にも、規模は小さいが、形態が二千石官吏墓に類似する２基がある。

１基は、河南省唐河針織廠漢墓で、東向きの石室墓である。封土、墓道、前室、並列する二後室、後室を取り巻く回廊で構成される。墓室の規模は東西長5.08m、南北幅4.52mである（図２－44）。74幅の画像石があり、歴史故事、神話故事、車馬出向、門吏、楼閣、武器庫、楽舞百戯、四神、天文図などが表されている。彫刻は浅い浮彫と線刻技法が採られている。年代は後漢時代後期になるが、直接被葬者の身分を反映する物証が出土していない。前・後室と後室を取り巻く回廊の

特徴から二千石の官に思われていた[106]。もう１基は、河南省南陽市楊官寺漢墓で、東向きの石室墓である。傾斜墓道、前室、並列する二後室、後室を取り巻く回廊で構成される（図２－45）。墓室の規模は東西長6.47 m、南北幅5.6 mである。14幅の画像石があり、建物、人物故事、珍禽異獣、幾何学紋などが表されている。副葬品には銅器、鉄器、鉛器、陶器、銭貨などがある。年代は後漢時代前期である。前・後室と後室を取り巻く回廊の特徴から、被葬者は二千石の官だったと思われていた[107]。

（２）二千石官吏墓の特徴

A　墳丘等の築造

二千石官吏墓には元来封土があったが、すでに封土がなくなっているものがあれば、なお10 mあまりの高さをもつものもある。密県打虎亭１号墓の封土の高さが15 m、望都２号墓が13 m、望都１号墓が11 m、滎陽萇村漢墓が約10 mというように、それらは文献に記された諸侯墓の封土の高さを超えている。このような現象が後漢時代後期になって起こる原因としては、特に後漢末期に喪葬礼制が破綻したことにより、封土の高度の制もますます荒廃したのだろう。

封土の形状は円形につくられている。邳県青龍山漢墓は封土を円形盛り上げ、密県打虎亭１号墓は封土の基底部に切石積みの石壁を巡らしている。

封土の周囲に墻壁を回らし、建物を配置して墓園を形成した実例としては邳県青龍山漢墓があげられる。文献には墓葬の近くに石廟を建てたり、石碑や石獣などを立てたことが記されているが、それは密県打虎亭漢墓に多少なりとも反映されている。

B　墓葬形態

二千石官吏墓は１本の傾斜墓道の塼・石室墓である。墓葬の大きさも大小あり、墓室の数も多い少ないがあるが、平面配置は基本的に二種類である。その一は、前･後室あるいは前･中･後室（前･中室の多くは耳室を付設）の多室墓で、後室を二つないし三つを並列するものがある。特殊なものとしては、河北省安平漢墓の前一室、前二室、中室、並列する二後室（各室に１壁龕付帯）の組み合わせのものや、河北省望都２号漢墓の全部で五室の主墓室（最後の一室に１壁龕付帯）の組み合わせのものがある。その二は、前・後室または前・中・後室、中・後室の三面を取り巻く回廊（前室に耳室付帯）のある、回廊付き多室墓で、後室に並列する二つの墓室の並列するものがある。

今わかっている二千石官吏墓を見ると、回廊付き多室墓は、遅くとも王莽の新の時期（河南省唐河新店漢墓）に出現し、後漢時代前期から後期までそのまま使われてきた。一方、回廊の付かない多室墓は、主に後漢時代中・後期に盛行する。ただし全体を通して見ると、二千石官吏墓の主流は回廊の付かない多室墓であり、墓室の数は２から５室のうち、３室のものが最も多く見られる。

王莽の新、後漢時代の二千石官吏墓は、墓室に画像石や壁画でもって飾るのが一般的になり、華麗で堂々とした画像石墓と壁画墓で構成されるのに対し、後漢王墓に鮮明な特徴がないことの是非は、地方官吏墓が喪葬礼制の制約が少なかったこと、多少なりとも民間世俗文化との関係があった

からといえよう。とはいえ、ここで確認しておかなければならないことは、発見されたたくさんの画像石墓と壁画墓のうちのいくつかには二千石官吏墓に識別できない可能性のあるものがあり、また、二千石官吏墓に画像石墓や壁画墓を採り入れなかったものもあるかもしれない、ということである。

これらの墓の遺体の保存状況は良い状態でないため、二千石官吏墓の合葬形式を判断するのを困難にしている。これについて分析すると、後漢の二千石官吏墓が並穴合葬墓だとすれば、河南省密県打虎亭１号墓と２号墓は30mの間隔をおいて東西に並列しており、夫妻並穴合葬墓の可能性が高い。しかし、墓葬の主流が同穴合葬とすれば、多室塼墓の配置構造が同穴合葬の条件となり、甘粛省武威市雷台漢墓では後室の中央に二つの漆塗り木棺が東西に並べられていたようで、張姓将軍夫婦の合葬墓として認められている。また多くの墓には並列する２ないし３の後室があり、同穴合葬のためにつくられたとすれば大変都合がよく、河北省安平漢墓では並列する二つの後室から棺材の痕跡と少量の人骨が見つかっているのである。

C　副葬品

二千石官吏墓の副葬品の多くは盗掘にあっている。王侯墓と比べると、副葬品の中で金銀器、鍍金銅器、宝石類、玉器などの貴重品の副葬が少ないようである。それらの多くは小型装飾品であるため、副葬されていれば、盗掘後の残骸品の中に何某かのものは遺留されているはずである。また、玉衣片がまれに発見されることがあるが、二千石官吏は玉衣の着装はできないことになっている。玉衣をはじめ市場に流通することのない貴重品の副葬は、王侯と二千石官吏の地位や身分を分ける重要な一線を画しているのである。

つぎに付帯説明をしておく。広西壮族自治区貴県羅泊湾１号・２号墓[108]、貴港漢墓[109]などは大型地方官吏墓に属す。陝西省潼関県吊橋楊氏墓群全部で７基の塼室墓（番号墓１～墓７）は、ふつうに封土、傾斜墓道、甬道、前室、後室で構成される。墓７は甬道と前室にそれぞれ１耳室が付設され、墓４は前室に２耳室が付設され、後室は並列する二室がある。それぞれの墓にはすべて二つ以上の遺骨があった。この墓群は後漢時代中・後期の楊震の家族墓である。楊震家族は数代太尉の官職にあり、その墓葬はそれ相当の規模で、形態配置も簡潔にして、玉衣の装着はなかった。このように都城任務の高級官吏は、死後、喪葬礼制に遵守していたといえる[110]。

5　漢代の中・小型墓

（1）西安地区

西安は前漢の都であったため、長年にわたってたくさんの漢墓が見つかってきた。近年、市内および郊外の開発に伴って発掘調査した、漢墓の報告書がつぎつぎに刊行され、漢墓の編年研究を打ち立てられた。すでに発表されている大部分の漢墓は西安市の北郊に分布している[111]。ということは、漢の長安城の東郊と東南郊には長安城に生活した中流・下層民の墓地の存在が予想される。また、西安市東郊の白鹿原の西北斜面から前・後漢の墓葬が発掘調査されている[112]。つぎに分期

ごとの概要を説明しておく。

前漢時代前期（武帝元狩五年以前）　墓葬の形態には竪穴土壙墓（一部の中型墓は傾斜墓道をもつ）と竪穴墓道洞室墓〔横穴墓〕（墓道の幅が墓室より大、同等、小がある）、傾斜墓道洞室墓があるが、竪穴墓道洞室墓が主をなす。副葬品の組み合わせは、銅製礼器を模倣した色彩絵のある陶礼器の鼎や盒、鈁を主にして（大型墓には壷がある）、別に罐〔壷〕、倉庫、竈、灯明、香炉などがある。銭貨はすべて漢初頭の半両銭である。

前漢時代中期（武帝元狩五年から宣帝の前葉）　墓葬の形態は、墓道の幅が墓室と同等か、小さい洞室墓が主で、竪穴土壙墓、墓道が墓室より広い洞室墓、傾斜墓道洞室墓がある。墓室の封門〔閉塞〕は、前期の木板による封門以外では、新出の日干しレンガや条塼〔細長いレンガ状の塼〕で封門される。副葬品の組み合わせは基本的に前期と同じであるが、新たに化粧箱や小型の陶器釜などの容器類が出現する。陶器の形式は、前期の家形倉庫が消滅し、円形筒形倉庫がしだいに盛行するなどの変化が見られる。銭貨は五銖銭が出現する。

前漢時代後期　墓葬の形態は竪穴墓道洞室墓が主で、ついで傾斜墓道洞室墓で、新たに条塼と子母塼〔ほぼ正方形で、ジグソーパズルのように両端に突起と凹みがあり組み合わせるようになっている塼〕を積み上げて天井をアーチにした塼室墓が出現する。墓室の封門は条塼で封門するのが主になり、日干しレンガと木板による封門はしだいに減少していく。副葬品の組み合わせは、銅製礼器を模倣した陶礼器の鼎や盒、壷（鈁）は主役の地位から副次的なものへと後退し、代わって罐、化粧箱、倉庫、竈などの生活用品の明器が主となり、器表に施釉されたものが多くなる。銅銭はすべて五銖銭になり、新たに磨郭五銖銭〔銭貨の縁をすり減らして外郭をほとんどなくしたもの〕と小五銖銭が出現する。

王莽の新から後漢時代初頭　墓葬形態は前漢時代後期とほぼ同じである。副葬品の組み合わせは、壷、罐、化粧箱、倉庫などの生活用品の明器が主で、器表に施釉するものが多い。そして、銅製礼器を模倣した鼎、盒、壷の陶礼器の完全な組み合わせは極めて少なくなる。銭貨には五銖銭と新の各種王莽銭がある。

後漢時代前期　墓葬の形態は、単室または複室塼墓である。副葬品の組み合わせは、壷、罐、倉庫、竈を主とし、新たに井戸などの模型明器ならびに釜、甑の組み合わせが加わる。銭貨は主に後漢の五銖銭である。

後漢時代中・後期　墓葬の形態は、多室の塼墓が盛行し、前室の天井はドーム状をしたものがある。副葬品から銅製礼器を模倣した陶礼器は姿を消し、新たに陶製の案、耳杯、杓〔匙〕などの器類および猪、犬、牛、鶏などの家畜家禽形の明器が登場する。銭貨は五銖銭の中で「四出」紋五銖銭〔背面の方郭の四隅から外郭に向かって直線を放出した五銖銭〕が現れる。

（2）洛陽地区

1950年代初、洛陽市の開発に伴って、市の西北にある焼溝村の西南地区から225基の漢代の墓

葬が発掘調査された。そこは漢代の河南県城の近郊にあたり、そこで生活した城内の一般官吏と庶民の墓地に考えられている。調査後、この漢墓の編年研究が進められた[113]。

前漢時代中期　主な墓葬の形態は、竪穴墓道の平天井洞室墓〔横穴墓〕で、洞室内を空心塼〔空洞塼〕でもって１～２室を構築するのもある。陶器の組み合わせは、銅製礼器を模倣した鼎、敦、壷があり、罐、瓮〔甕〕、倉庫、竈、井戸、炉などの模型明器がある。銅鏡は星雲紋鏡が主流を占め、ほかに草葉紋鏡があり、日光鏡や昭明鏡が現れる。銅銭はすべて前漢の五銖銭である。

前漢時代後期（王莽の新を含む）　墓葬の形態は、竪穴墓道の塼積みアーチ形天井洞室墓が主流をなし、墓室は１～２室である。そのほかに数は少ないが、平天井とドーム形天井のものがある。墓葬に耳室が付設するのが盛行する。陶器の組み合わせは中期と基本的に同じであるが、型式変化が見られる。新たに盒、案、盤、杓〔匙〕、耳杯、碗などの器形が出現する。銅鏡は、日光鏡と昭明鏡のほかに、変形四螭紋鏡、四乳鏡、連弧紋鏡、規矩鏡が出現する。銭貨には前漢の五銖銭と王莽銭が見られる。

後漢時代前期　墓葬の形態は、竪穴墓道の単ドーム形天井（前室）塼墓が主で、ほかに単ドーム形天井土壙墓があり、二つのドーム形天井塼室墓が現れる。陶器の組み合わせは前漢時代後期とほぼ同じであるが、銅製礼器を模倣したか鼎や敦、壷は消滅し、杯、案、盤、杓などの器形が主となる。銅鏡には四乳鏡と規矩鏡があり、銭貨は後漢の五銖銭と王莽銭である。

後漢時代中期　墓葬の形態は後漢時代前期とほぼ同じである。陶器の組み合わせには鶏、犬、猪などの家畜家禽の模型明器が加わる。銅鏡は雲雷紋鏡、夔鳳紋鏡、長宜子孫鏡が出現する。銭貨は後漢時代前期と同じである。

後漢時代後期　墓葬の形態は竪穴墓道の横長前室土壙墓と塼室墓が主流をなし、規模のやや大きい墓に傾斜墓道が使われた。陶器の組み合わせは後漢時代中期とほぼ同じである。銅鏡は長宜子孫鏡が主流をなし、変形四葉紋鏡、四鳳鏡、人物画像鏡、神獣鏡が出現する。銭貨は後漢時代後期の五銖銭および剪輪五銖銭〔五銖銭の縁を切り取り細工したもの〕、剪環五銖銭〔五銖銭の真ん中を丸く刳り貫き細工をしたもの〕がある。また、鉄鏡と鉄銭が出土している。

洛陽地区は前漢時代の墓葬資料は比較的少ない。墓葬の形態は竪穴墓道の平天井洞室墓か、平天井の空心塼積み洞室墓である。陶器の組み合わせは主に銅製模倣の陶礼器の鼎、敦、壷で、ほかに俑頭などが出土している。

（３）長沙地区

1950 年代初、長沙市近郊の開発に伴って、陳家大山、伍家嶺、識字嶺と五里碑、徐家湾などで漢代の墓葬が発掘調査され、前漢から後漢時代各時期の墓葬の特徴がまとめられている[114]。その後、墓葬資料の増加（2000 基以上）に伴って、長沙地区の漢墓の編年が補われた[115]。

前漢時代前期前葉（下限は文帝・景帝の頃）　墓葬の形態は、平面形がほぼ正方形の竪穴土坑墓を呈し、わずかながら傾斜墓道や階段墓道をもつものがある。副葬品は陶器が主で、その組み合わせ

は鼎、盆、壷、罐、壜〔甕壷の類〕、甑、香炉などであるが、罐を大量に使用しているのはその時代の特徴である。泥土でつくった「郢称」泥版〔郢称の文字の入った碁盤目をスタンプした泥版〕、半両銭、金餅などの泥質冥銭の副葬は、その時代の極めて大きな特色である。

前漢時代前期後葉（文帝・景帝の頃から武帝元狩五年以前）　墓葬の形態と陶器の組み合わせは前段の時期とほぼ同じであるが、陶器の器形に変化が見られる。泥質冥銭は「両」版と半両銭になる。

前漢時代中期（武帝元狩五年から宣帝・元帝の頃まで）　墓葬の形態は平面形が長方形の竪穴土坑墓である。副葬陶器では、竈、硬質陶罐、南越式施釉陶器が新出する。泥質冥銭は五銖銭と金餅になる。

前漢時代後期（下限は王莽新まで）　墓葬の形態はさらに長い長方形になる方向へ進む。副葬陶器では、新たに倉庫、竈、井戸などの模型明器が現れる。泥質冥銭は五銖銭であるが、銅銭の五銖銭、大泉五十、貨泉がある。

後漢時代　墓葬の形態はすべて塼室墓になる。副葬陶器のうち、硬質陶器、施釉陶器および模型明器が増加する。陶器以外の副葬品では、銅鏡の変遷に規則性を求めることができ、年代を判定する上で重要な資料の一つとなっている。

（4）広州地区

1950年代、広州市の都市開発に伴って、409基の前漢から後漢の中・小型墓が発掘調査された。それらの資料をもとに、前漢から後漢の墓葬を5期に分類している[116]。

前漢時代前期（B.C.219～B.C.111）　墓葬の形態には竪穴土坑墓、竪穴木槨墓、竪穴分室木槨墓の3種類があり、竪穴木槨墓が主流をなしている。副葬品は陶器が中心で、中でも灰白色の硬質陶器が大多数を占める。その紋様は、印紋と幾何学形の刻み紋が主である。いくつかの墓からは秦の半両銭と漢初の半両銭銅貨が出土している。

前漢時代中期（下限は元帝･成帝の頃）　墓葬の形態は､墓道をもつ竪穴木槨墓と竪穴分室木槨墓（二層分室）を主とし、一部に竪穴土坑墓がある。陶器は灰白色硬質陶器が主であるが、施釉陶器が増加し、紋様の簡素化が進み、前漢時代前期の地方色のある器形が消滅する。模型明器は前漢時代前期より増加する。ごく一部の墓葬から五銖銭銅貨が出土している。

前漢時代後期（下限は建武初年まで）　墓葬の形態はすべて墓道をもつ竪穴木槨墓と竪穴分室木槨墓で、後者は二層分室墓が主になり、新たに二層の横長前堂構造が出現する。陶器は器種が増え、紋様は印紋が顕著に減少するのに対し、刻み紋は盛んに行なわれるようになる。模型明器は非常に普及する。銭貨は五銖銭と大泉五十がある。玉類の装飾品が増加する。

後漢時代前期（下限は建初の前まで）　基本的に前漢時代後期の墓制を踏襲するが、竪穴分室木槨墓に新たに仮の二層分室構造が出現する。新たに直アーチ形天井の塼室などが出現する。出土陶器は前漢時代後期と同じであるが、形式は変化したところがある。いろんな材料の玉類の出土も多い。

後漢時代後期（下限は後漢末年まで）　墓葬形態は塼室墓が主であるが、竪穴分室木槨墓がなお存

在する。塼室墓には、新たにドーム形天井とアーチ形天井の合わさった塼室と、二つのドーム天井の塼室が出現する。副葬品では明器の種類が多くなり、形式の変化も見られる。銅製品には鏡や銭貨などがある。

（５）その他の地区

漢代の墓葬は全国各地で発見されており、その数は数万基以上になるであろう。ここでは、漢代の二都であった西安と洛陽、そして長沙、広州地区を重点的に述べる。前述のそれらの地区以外でも、甘粛省武威、酒泉、内蒙古自治区の中南部、山東省済南、臨沂、江蘇省徐州、揚州、湖北省江陵、広西壮族自治区貴港、合浦などでもたくさんの漢墓が発掘されている。それらの漢墓を取り上げて地域的特徴を示すことは大変意義あることである。

６　漢代の壁画墓、画像石墓、画像塼墓

（１）壁画墓

壁画墓は、漢代墓葬中に占める割合は非常に小さい。主要分布地区を示すと、河南省洛陽周辺、蘇北、皖北、魯西南地区、西安周辺地区、冀中から冀南地区、万里長城の沿線地域、遼寧省遼陽地区になる（表２－７）。主要な墓葬には、河南省永城県柿園漢墓（前漢前期）、河南省洛陽市卜千秋墓（前漢中期やや後半）、洛陽 61 号墓（前漢元帝～成帝）、陝西省西南交通大学壁画墓（前漢後期）[117]、西安理工大学壁画墓（前漢後期）、洛陽浅井頭壁画墓（前漢成帝～王莽新）、内蒙古自治区托克托県閔氏壁画墓（前漢末年）、洛陽市金谷園新莽壁画墓（地皇元年～地皇四年）、洛陽市偃師県新莽壁画墓、洛陽市尹屯新莽壁画墓、陝西省千陽県新莽壁画墓、山西省平陸棗園村壁画墓（王莽新～後漢初期）、洛陽市北郊後漢壁画墓（後漢初期）、陝西省旬邑百子村後漢壁画墓（後漢前期）、内蒙古自治区鳳凰山１号墓（後漢前期）、河北省望都後漢壁画墓（後漢中期）、遼寧省遼陽市旧城東門里後漢壁画墓（後漢中期後半）、河北省安平後漢壁画墓（熹平五年（A.D.176））[118]、内蒙古自治区和林格尓後漢壁画墓（後漢後期）[119]、河南省偃師県杏園村後漢壁画墓（後漢後期）[120]、洛陽機車廠後漢壁画墓（後漢後期）、洛陽西工後漢壁画墓（後漢後期）、洛陽市朱村後漢壁画墓（後漢後期）、河南省榮陽萇村後漢壁画墓（後漢後期）、河南省密県打虎亭後漢壁画墓（後漢後期）、山西省夏県王村後漢壁画墓（後漢後期）、山東省梁山後漢壁画墓（後漢後期）、遼陽市三道濠後漢壁画墓（後漢後期）、遼陽市棒台子屯後漢壁画墓（後漢後期）、遼陽市鵝房１号墓（後漢末年）などがある。

壁画墓の根元についてはさまざまな見解があるが、洞室墓の出現が壁画墓を発展させる空間を提供したことは肯定できよう。漢代壁画墓の壁画の配置はおおむね非人間と人間との二大テーマに分けられる。いかなる墓葬形態であろうとも、墓室の天井および上部には太陽・月・星、女媧、伏羲、西王母、羽人、方相氏、神獣などの非人間的形象が表されていることが多く、下部には車馬出向、狩猟、宴会、楽舞百戯、城池庭院、農耕収穫などの人間生活の情景が表されているのである。壁画の題材を見ると、前漢時代中・後期の壁画墓では神仙および僻邪の題材が非常に大きな割合を占め

ており、後漢時代中・後期の壁画では被葬者の仕えた履歴の宣揚や現実生活の題材の表現が突出している。

（2）画像石墓

画像石墓は、画像を彫刻した切石を積み上げて墓室をつくる墓葬のことをいう。その墓室は石だけで構築されたものと、塼と石を混ぜて構築したものがある。画像石墓は、前漢時代後期に出現し、後漢時代末期に消滅した、漢代特有の墓葬形式の一つである。画像石墓がつくられるきっかけは漢代の厚葬の風習に求められる。その分布域は漢代の経済、文化のよく発達した地域で、しかも豊富な石材資源に恵まれ、供給可能な地区であることなど、諸々の要素がこのような独特の墓葬形式を生み出したのである。

画像石墓は今までに数百基が発掘調査されており、一般に４地区に分けて研究が進められている。その４地区は次のとおりである。一つは、山東省、江蘇省中北部、安徽省北部、河南省東部、河北省東南部で、通称東区である。二つは、南陽市を中心とする河南省西南部と湖北省北部で、通称中区である。三つは、陝西省北部と山西省西部で、通称西区である。四つは、四川省、重慶地区で、通称南区である。この４地区を中心とする以外でも、河南省洛陽市・鄭州市、北京市、天津市、甘粛省、江南の浙江省などで見つかっている。

東区の重要なものとしては、山東省沂南画像石墓、安丘県董家庄画像石墓、江蘇省徐州市茅村画像石墓、青山泉白集画像石墓などがあげられる。それらの彫刻技法には陰線刻、凹面線刻、凸面線刻、浅い浮彫、高い浮彫、透かし彫りがある。中区には河南省南陽市楊官寺画像石墓、襄城県茨溝画像石墓、唐河県新店画像石墓、唐河県針織廠画像石墓などがあり、彫刻技法は浅い浮彫技法が主で、陰線刻と凹面彫りも見られる。西区は陝西省神木県大保当画像石墓をもって代表させると、主に凸面線刻技法で彫られ、それに色彩画が補われている。南区の画像石は成都と重慶からたくさん見つかっており、主に浅い浮彫技法で彫られている。

漢墓の画像石の内容は、おおむね生産活動、社会生活、日常生活、歴史故事、神話故事、天文図象、祥瑞辟邪、仙人、昇仙の類に装飾図案類などに分けられる。生産活動の図像には農業〔(牛耕、地ならし、草刈り、収穫)、牧畜（放牧、牛の去勢)、漁業（捕魚)、手工業（紡織、造車、精錬、醸酒）がある。社会生活や日常生活の図像には拝謁、車馬出向、建築、厨房、宴会、楽舞百戯、投壺〔壺に矢を投げ入れる遊技〕、六博〔賽の目〕、狩猟などがある。歴史故事の図像には、周公の成王補佐、孔子の老子拝謁、二桃三士を殺す、璧を完うして趙に帰る、荊軻秦王を刺す、泗水撈鼎〔泗水から鼎を掬う〕、鴻門の会などがある。神話の故事の図像には伏羲女媧、東王公、西王母、嫦娥月に奔る、牛郎織女などがある。天文図像には日月、北斗七星、東宮青龍・西宮白虎・南宮朱雀・北宮玄武の四神図などがある。祥瑞辟邪の図像には鋪首銜環〔環を銜えた獣面の把手〕、神荼鬱塁、方相氏、龍、象、嘉禾、四神などがある。装飾図案には幾何学紋、銭貨紋、唐草紋などがある。ある研究者は、漢代人達の宇宙観念に基づいて画像石の図象を、天上の世界、仙人の世界、人間の現実の世界、地下冥

土の世界に分けて解釈することを主張している[121]。

漢墓の画像石は、当時の生産、生活、思想信仰および死生観、宇宙観を知る重要な材料にとどまらず、美術史を研究する上でも貴重な資料となっている。

（3）画像塼墓

画像塼墓は、画像をスタンプした画像塼を墓室の壁に挿入してつくったものである。画像塼には空心塼とふつうの長方形塼・方形塼の二種類がある。画像空心塼墓は、主に河南省鄭州、洛陽、南陽などの地域で見つかっており、その多くは前漢時代中・後期の時期である。ふつうの画像塼墓は、主に四川省の成都平野一帯に分布し、多くは後漢時代のものであるが、後漢時代後期から蜀漢時代のものもある。画像塼の内容には、農業と養蚕、塩井、建築、市井、道路交通、車馬、儒教経典の講義、楽舞百戯、神話伝説などの図像があり、漢代の生産、生活、風俗、信仰などの実態を知る遺物となっている[122]。

第３節　秦漢墓制

前章で述べたように、西周・東周の墓制の核心は棺槨にあり、列鼎〔身分に応じて埋納する鼎の数が決められていた制度〕と車馬の副葬にかかる規律がそれぞれの階層等級によって決められており、それらはいったん地下に埋納されると再び人の前に示されることはなかった。春秋戦国時代になると、高大な墳丘が出現し、それまでの伝統的墓制に深刻な変化が表れた。戦国時代、墓に関連した地上の施設は、墳丘以外に陵園、陵寝に類する建物、陪葬坑、陪葬墓などで構成される陵園制度ができる。その陵園制度にかかる各種要素は基本的に備わったのではあるが、各国の陵墓施設の内容はすべてが同じではなかった。

秦が６ヶ国を統一した後、各国の陵墓制度が始皇帝陵に集められ、墳丘、陵園、陵寝建築、陪葬坑、陪葬墓、陵邑などの一層完備した陵園の設置が形づくられ、大成された。秦の立国期間は大変短く、そこで創られた陵寝制度は漢代へ引き継がれた。その制度は、前漢から後漢の 400 年間を通じて継承され、変革され、それらを地上に設置することを墓葬等級制度の中へ量的な基準として組み入れさせた。

漢代皇帝陵と王、諸侯、二千石官吏の大型墓には墳丘、陵園（墓園）、礼制建築などが組み合わされて築造された。帝王陵墓には陪葬墓の設置が盛行し、前漢皇帝陵には陵邑が設けられた（高祖長陵から宣帝杜陵まで）。前漢帝王陵では陪葬坑を付設することが盛行し、後漢陵墓では陵園入口から陵墓に通じる墓道には石像が並べることが盛んに行われた。その石像は主に象、羊、天禄、辟邪、獅子などの動物が造形されている。

前漢皇帝陵は４本の墓道をもつ黄腸題湊制が採用され、金縷玉衣が着装された。諸王墓には伝統的な竪穴木槨墓または新興の黄腸題湊墓、崖洞墓、石室墓と、その形態は不統一で、被葬者によっ

ては金縷玉衣か、銀縷玉衣が装着された。諸侯墓は一般に伝統的竪穴木槨墓が採用され、被葬者は金縷玉衣または銀縷玉衣を装着するものもある。後漢皇帝陵、王侯墓、二千石官吏墓はすべて１本の墓道の塼石室墓が使われた。墓室は、皇帝陵が黄腸石題湊で、王墓が回廊のある前・後室墓をよく使い、諸侯墓が多室墓で、二千石官吏墓が多室墓か、回廊付き多室墓である。皇帝は金縷玉衣を、諸王と始封諸侯は銀縷玉衣を、嗣位諸侯と王、諸侯の妻子は銅縷玉衣を装着した。全体を通していうと、前漢王墓の形態が比較的多様である以外、前漢・後漢の各身分別の墓葬形態は基本的に統一されていたのである。

墓葬の形態の変革により、漢代墓内の空間は一層増大し、墓室は邸宅化に一歩前進したが、それは崖洞墓において特に際立っている。徐州の北洞山漢墓では墓外に門闕を設け、墓室の屋根を切妻形〔合掌屋根〕などの各種形式につくり、墓内に厨房と歌舞庁〔ダンスホール〕、便所などの生活施設を設置している。永城の保安山２号墓では二つの主要な墓室に自ら「東宮」「西宮」と名付けている。

墓室内の装飾のために出現した漢代の壁画、画像石、画像塼などは、当時の人たちの冥界観を検討する上で、直接見ることのできる形ある材料である。

前漢と後漢は、封建的喪葬等級制を実行した。この制度は地上と地下の両方の大部分を包括するものである。地上部分の中心は墳丘にあり、墳丘の高さは被葬者の等級にしたがって厳格に規制されており、地上の施設は喪葬等級制度の中で非常に整った要素になったことを示している。地下部分は墓葬形態を除くと、等級差別を具体的に表す主なものは玉衣の着装である。

註

1　陝西省文物管理委員会「秦始皇陵調査簡報」『考古』1962 年第８期
　袁仲一『秦始皇陵兵馬俑研究』文物出版社　1990 年
　陝西省考古研究所、秦始皇兵馬俑博物館『秦始皇帝陵園考古報告（1999)』科学出版社　2000 年
　陝西省考古研究所、秦始皇兵馬俑博物館『秦始皇帝陵園考古報告（2000)』科学出版社　2006 年
　陝西省考古研究所、秦始皇兵馬俑博物館『秦始皇帝陵園考古報告（2001 ～ 2003)』科学出版社　2007 年
　段清波、張穎嵐「秦始皇帝陵的外藏系統」『考古』2003 年第 11 期
　陝西省考古研究所、始皇陵秦俑坑考古発掘隊『秦始皇陵兵馬俑坑一号坑発掘報告（1974 ～ 1984)』文物出版社　1988 年
2　陝西省考古研究所『秦都咸陽考古報告』科学出版社　2004 年
3　咸陽市文物考古研究所『任家咀秦墓』科学出版社　2005 年
4　咸陽市文物考古研究所『塔尔坡秦墓』三秦出版社　1998 年
5　陝西省考古研究所『西安北郊秦墓』三秦出版社　2006 年
6　西安市文物保護考古所『西安南郊秦墓』陝西人民出版社　2004 年
7　陝西省考古研究所『隴県店子秦墓』三秦出版社　1998 年
8　杜葆仁「西漢諸陵位置考」『考古与文物』1980 年第１期。
　劉慶柱、李毓芳「西漢諸陵調査与研究」『文物資料叢刊』（６）　文物出版社　1982 年

劉慶柱、李毓芳『西漢十一帝陵』陝西人民出版社　1987 年
岳起、劉衛鵬「由平陵建制談西漢帝陵制度的幾個問題」『考古与文物』2007 年第 5 期
9　王建新「西漢后四陵名位考察」『古代文明』第 2 巻
10　中国社会科学院考古研究所『漢杜陵陵園遺址』科学出版社　1993 年
11　焦南峰「漢陽陵従葬坑初探」『文物』2006 年第 7 期
焦南峰「試論西漢帝陵的建設理念」『考古』2007 年第 11 期
12　陳長安「洛陽邙山東漢陵試探」『中原文物』1982 年第 3 期
李南可「従東漢“建寧”、“熹平”両塊黄腸石看霊帝文陵」『中原文物』1985 年第 3 期
洛陽市第二文物工作隊「洛陽邙山陵墓群的文物普査」『文物』2007 年第 10 期
洛陽市第二文物工作隊、偃師市文物管理委員会「偃師白草坡東漢帝陵陵園遺址」『文物』2007 年第 10 期
13　韓国河『東漢帝陵有関問題的探討』『考古与文物』2007 年第 5 期
14　河北省文物研究所、滄州市文物管理処、献県文物管理所「献県第 36 号漢墓発掘報告」『河北省考古文集』東方出版社　1998 年
15　河北省文物研究所、鹿泉市文物保管所『高庄漢墓』科学出版社　2006 年
16　山東大学考古系、山東省文物局、長清県文化局「山東長清県双乳山一号漢墓発掘簡報」『考古』1997 年第 3 期
17　山東省荷澤地区漢墓発掘小組「巨野紅土山西漢墓」『考古学報』1983 年第 4 期
18　済南市考古研究所、山東大学考古系、山東省文物考古研究所、章丘市博物館「山東章丘市洛庄漢墓陪葬坑的清理」『考古』2004 年第 8 期
19　王守功「危山漢墓－第五処用兵馬俑陪葬的王陵」『文物天地』2004 年第 2 期
20　山東省淄博市博物館「西漢斉王墓随葬器物坑」『考古学報』1985 年第 2 期
21　張金萍、張蔚星「大胆抽象与拙朴的漢代木彫－西漢泗水国王陵出土」『文物天地』2004 年第 1 期
22　中国科学院考古研究所『長沙発掘報告』文物出版社　1957 年
23　任相宏「双乳山一号汉墓墓主考略」『考古』1997 年第 3 期
24　大葆台漢墓発掘組『北京大葆台漢墓』文物出版社　1989 年
25　河北省文物研究所「河北定県 40 号漢墓発掘簡報」『文物』1981 年第 8 期
河北省博物馆、文物管理処、中共定県県委宣伝部、定県博物馆「定県 40 号漢墓出土的金縷玉衣」『文物』1976 年第 7 期
26　石家庄市図書館文物考古小組「河北石家庄市北郊西漢墓発掘簡報」『考古』1980 年第 1 期
27　梁白泉「高郵天山一号漢墓発掘側記」『文博通訊』第 32 期
28　湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号西漢墓」『考古学報』1981 年第 1 期
29　長沙市文化局文物組「長沙咸家湖西漢曹嬰墓」『文物』1979 年第 3 期
30　曹硯農、宋少華『長沙発掘西漢長沙王室墓』『中国文物報』1993 年 8 月 22 日
31　文物編輯委員会『文物考古工作三十年』文物出版社　1979 年
32　樊書海、李恩佳「定州 137 号漢墓」『中国考古学年鑑（1997）』96 頁　文物出版社 1999 年
33　河南省文物考古研究所『永城西漢梁国王陵与寝園』中州古籍出版社　1996 年
河南省商丘市文物管理委員会、河南省文物考古研究所、河南省永城市文物管理委員会『芒碭山西漢梁王墓地』文物出版社　2001 年
34　広州市文物管理委員会、中国社会科学院考古研究所、広東省博物馆『西漢南越王墓』文物出版社　1991 年
35　中国社会科学院考古研究所、河北省文物管理処『満城漢墓発掘報告』文物出版社 1980 年
36　潍坊市博物館、昌楽県文管所「山東昌楽県東圈漢墓」『考古』1993 年第 6 期

37　山東省博物館「曲阜九龍山漢墓発掘簡報」『文物』1972 年第 5 期

38　河南省文物考古研究所『永城西漢梁国王陵与寝園』中州古籍出版社　1996 年

河南省商丘市文物管理委員会、河南省文物考古研究所、河南省永城市文物管理委員会『芒碭山西漢梁王墓地』文物出版社　2001 年

39　獅子山楚王陵考古発掘隊「徐州獅子山西漢楚王陵発掘簡報」『文物』1998 年第 8 期

韋正、李虎仁、鄒厚本「江蘇徐州市獅子山西漢墓的発掘与収穫」『考古』1998 年第 8 期

徐州博物館「徐州獅子山兵馬俑坑第一次発掘簡報」『文物』1986 年第 12 期

40　邱永生、徐旭「徐州市馱籃山西漢墓」『中国考古学年鑑（1991）』173 頁　文物出版社　1992 年

41　徐州博物馆、南京大学歴史学系考古専業『徐州北洞山西漢楚王墓』文物出版社　2003 年

42　南京博物院、銅山県文化館「銅山亀山二号西漢崖洞墓」『考古学報』1985 年第 1 期

尤振堯「〈銅山亀山二号西漢崖洞墓〉一文的重要補充」『考古学報』1985 年第 3 期

徐州博物館「江蘇銅山県亀山二号西漢崖洞墓材料的再補充」『考古』1997 年第 2 期

43　徐州博物館「徐州石橋漢墓清理報告」『文物』1984 年第 11 期

孟强「徐州東洞山三号漢墓的発掘及対東洞山漢墓的再認識」『東南文化』2003 年第 7 期

44　耿建軍「試析徐州西漢楚王墓出土官印及封泥的性質」『考古』2000 年第 9 期

45　河南省商丘市文物管理委員会、河南省文物考古研究所、河南省永城市文物管理委員会『芒碭山西漢梁王墓地』文物出版社　2001 年

46　梁勇「従西漢楚王墓的建築結構看楚王墓的排列順序」『文物』2001 年第 10 期

47　劉振東「漢代諸侯王、列侯墓的地面建制－漢代王侯墓制研究之一」『漢唐与辺疆考古研究』第一輯　文物出版社　1994 年

48　徐州博物館「徐州后楼山西漢墓発掘報告」『文物』1993 年第 4 期

徐州博物馆、南京大学歴史学系考古専業『徐州北洞山西漢楚王墓』175 頁　文物出版社　2003 年

49　劉振東「題湊与黄腸題湊」『新世紀的中国考古学－王仲殊先生八十華誕記念論文集』科学出版社　2005 年

50　単先進「西漢“黄腸題湊”葬制初探」『中国考古学会第三次年会論文集』文物出版社　1984 年

劉德増「也談漢代“黄腸題湊”葬制」『考古』1987 年第 4 期

51　魯琪「試談大葆台西漢墓的“梓宮”、“便房”、“黄腸題湊”」『文物』1977 年第 6 期

52　黄展岳「釈“便房”」『中国文物報』1993 年 6 月 20 日

53　単先進「西漢“黄腸題湊”葬制初探」『中国考古学会第三次年会論文集』　文物出版社　1984 年

劉德増「也談漢代“黄腸題湊”葬制」『考古』1987 年第 4 期

54　兪偉超「漢代諸侯王与列侯墓葬的形制分析－兼論“周制”、“漢制”与“晋制”的三階段性」『中国考古学会第一次年会論文集』文物出版社　1979 年

55　李如森「漢代“外藏槨”的起源与演変」『考古』1997 年第 12 期

劉振東「中国古代陵墓中的外藏槨－漢代王侯墓制研究之二」『考古与文物』1999 年第 4 期

56　高崇文「西漢諸侯王墓車馬殉葬制度探討」『文物』1992 年第 2 期

57　鄭滦明「西漢諸侯王墓所見的車馬殉葬制度『考古』2002 年第 1 期

58　盧兆蔭「試論両漢的玉衣」『考古』1981 年第 1 期

盧兆蔭「再論両漢的玉衣」『文物』1989 年第 10 期

59　孫貫文、趙超「由出土印章看両処墓葬的墓主等問題」『考古』1981 年第 4 期

60　黄展岳「漢代諸侯王墓論述」『考古学報』1998 年第 1 期

61　孫貫文、趙超「由出土印章看両処墓葬的墓主等問題」『考古』1981 年第 4 期

62　劉振東、譚青枝「関于河南永城保安山二号墓墓主問題」『考古与文物』2001 年第 4 期
63　徐州獅子山や馱籃山、北洞山の楚王墓の被葬者についてはいくつかの論争があり、つぎの各論文を参照のこと。
宋治民「獅子山西漢楚王陵的両個問題」『考古与文物』2000 年第 1 期
黄盛璋「徐州獅子山楚王墓墓主与出土印章問題」『考古』2000 年第 9 期
耿建軍「試析徐州西漢楚王墓出土官印及封泥的性質」『考古』2000 年第 9 期
梁勇「従西漢楚王墓的建築結構看楚王墓的排列順序」『文物』2001 年第 10 期
韋正「江蘇徐州市獅子山西漢墓墓主的再認識」『考古』2002 年第 9 期
孟強「従随葬品談徐州獅子山漢墓的墓主問題」『考古』2006 年第 9 期
梁勇「徐州獅子山楚王墓出土印章与墓主問題的再認識」『考古』2006 年第 9 期
64　河北省文化局文物工作隊「河北定県北庄漢墓発掘報告」『考古学報』1964 年第 2 期
65　定県博物館「河北定県 43 号漢墓発掘簡報」『文物』1973 年第 11 期
66　山東省文物考古研究所「山東臨淄金嶺鎮一号漢墓」『考古学報』1999 年第 1 期
67　済寧市文物管理局「山東済寧市肖王庄一号漢墓」『考古学集刊』第 12 集　中国大百科全書出版社　1999 年
68　済寧市博物館「山東済寧発見一座東漢墓」『考古』1994 年第 2 期
69　周口地区文物工作隊、淮陽県博物館「河南淮陽北関一号漢墓発掘簡報」『文物』1991 年第 4 期
70　「徐州土山東漢墓清理簡報」『文博通訊』第 15 期
71　南京博物院「江蘇邗江甘泉二号漢墓」『文物』1981 年第 11 期
72　史為「関于“金縷玉衣”的資料簡介」『考古』1972 年第 2 期
73　黄展岳「漢代諸侯王墓論述」『考古学報』1998 年第 1 期
74　河北省文物管理処「河北邢台南郊西漢墓」『考古』1980 年第 5 期
75　陝西省文管会、博物館、咸陽市博物館「咸陽楊家湾漢墓発掘簡報」『文物』1977 年第 10 期
陝西省文物管理委員会、咸楊市博物館「陝西省咸楊市楊家湾出土大批西漢彩絵陶俑」『文物』1966 年第 3 期
76　鄭洪春「陝西新安機塼廠漢初積炭墓発掘報告」『考古与文物』1990 年第 4 期
77　四川省文物考古研究院、綿陽博物館『綿陽双包山漢墓』文物出版社　2006 年
78　済南市考古研究所「済南市臘山漢墓発掘簡報」『考古』2004 年第 8 期
79　安徽省文物工作隊、阜陽地区博物館、阜陽県文化局「阜陽双古堆西漢汝陰侯墓発掘簡報」『文物』1978 年第 8 期
80　徐州博物館「徐州西漢宛朐侯劉埶墓」『文物』1997 年第 2 期
81　湖南省博物館、湖南省文物考古研究所『長沙馬王堆二、三号漢墓－第一巻 田野考古発掘報告』文物出版社 2004 年
湖南省博物館、中国科学院考古研究所『長沙馬王堆一号漢墓』文物出版社 1973 年
82　湖南省文物考古研究所、懐化市文物処、沅陵県博物館「沅陵虎溪山一号漢墓発掘簡報」『文物』2003 年第 1 期
83　隆堯県文物保管所「河北隆堯県出土刻花貼金玉片」『文物』1992 年第 4 期
84　聊城市文物管理委員会「山東陽谷県呉楼一号漢墓的発掘」『考古』1999 年第 11 期
85　傅挙有「漢代列侯的家吏－兼談馬王堆三号墓墓主」『文物』1999 年第 1 期
陳松長「馬王堆三号墓主的再認識」『文物』2003 年第 8 期
86　中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊「漢魏洛陽城西東漢墓園遺址」『考古学報』1993 年第 3 期
87　安徽省亳県博物館「亳県曹操宗族墓葬」『文物』1978 年第 8 期
88　睢文、南波「江蘇睢寧県劉楼東漢墓清理簡報」『文物資料叢刊』4　文物出版社　1980 年
89　石家庄市文物保管所「石家庄北郊東漢墓」『考古』1984 年第 9 期

90　河北省文物研究所「蠡県漢墓発掘紀要」『文物』1983 年第 6 期
91　山東省博物館「山東東平王陵山漢墓清理簡報」『考古』1966 年第 4 期
92　李鑑昭「江蘇睢寧九女墩漢墓清理簡報」『考古』1955 年第 2 期
93　洛陽市文物工作隊『洛陽発掘的四座東漢玉衣墓』『考古与文物』1999 年第 1 期
94　李銀徳「徐州市屯里拉犁山東漢石室墓」『中国考古学年鑑（1986)』123 頁　文物出版社　1988 年
　　王愷「徐州市屯里村東漢石室墓」『中国考古学年鑑（1987)』141 頁　文物出版社　1988 年
95「山東鄒城市郭里鎮廟東村東漢塼墓」『中国文物報』1998 年 2 月 4 日
96　済南市考古研究所、長清区文物管理所「済南市長清区大覚寺村一・二号漢墓清理簡報」『考古』2004 年第 8 期
97　南陽地区文物隊、南陽博物館「唐河漢郁平大尹馮君孺人画像石墓」『考古学報』1980 年 2 期
98　南京博物院、邳県文化館「東漢彭城相繆宇墓」『文物』1984 年 8 期
99　河南省文物研究所『密県打虎亭漢墓』文物出版社　1993 年
100　州市文物考古研究所、滎陽市文物保護管理所「河南滎陽葺村漢代壁画墓調査」『文物』1996 年 3 期
101　北京歴史博物館、河北省文物管理委員会『望都漢墓壁画』中国古典芸術出版社　1955 年
　　河北省文化局文物工作隊『望都二号漢墓』文物出版社　1959 年
102　河北省文物研究所『安平東漢壁画墓』文物出版社　1990 年
103　南京博物院、山東省文物管理処『沂南古画像石墓発掘報告』文化部文物管理局出版　1956 年
104　甘粛省博物館「武威雷台漢墓」『考古学報』1974 年 2 期
105　内蒙古自治区博物館文物工作隊『和林格尓漢墓壁画』文物出版社　1978 年
106　周到、李京華「唐河針織廠漢画像石墓的発掘」『文物』1973 年 6 期
107　河南省文化局文物工作隊「河南南陽楊官寺漢画像石墓発掘報告」『考古学報』1963 年 1 期
108　広西壮族自治区文物工作隊「広西貴県羅泊湾一号墓発掘簡報」『文物』1978 年 9 期
　　広西壮族自治区文物工作隊「広西貴県羅泊湾二号漢墓」『考古』1982 年 4 期
109　陳文「貴港発掘西漢大型木槨墓」『中国文物報』1995 年 11 月 19 日
110　陝西省文物管理委員会「潼関吊橋漢代楊氏墓群発掘簡記」『文物』1961 年 1 期
111　西安市文物保護考古所『西安龍首原漢墓（甲編)』西北大学出版社　1999 年
　　西安市文物保護考古所、鄭州大学考古専業『長安漢墓』陝西人民出版社　2004 年
112　陝西省考古研究所『白鹿原漢墓』三秦出版社　2003 年
113　洛陽区考古発掘隊『洛陽焼溝漢墓』科学出版社　1959 年
114　中国科学院考古研究所『長沙発掘報告』科学出版社　1957 年
115　宋少華「西漢長沙国（臨湘）中小型墓葬分期概論」『考古耕耘録－湖南省中青年考古学者論文選集』岳麓書社
　　1999 年
116　広州市文物管理委員会、広州市博物館『広州漢墓』文物出版社　1981 年
117　陝西省考古研究所、西安交通大学「西安交通大学西漢壁画墓」西安交通大学出版社　1991 年
118　河北省文物研究所『安平東漢壁画墓』文物出版社　1990 年
119　内蒙古自治区博物館文物工作隊『和林格尓漢墓壁画』文物出版社　1978 年
120　中国社会科学院考古研究所『杏園東漢墓壁画』遼寧美術出版社　1995 年
121　信立祥『漢代画像石綜合研究』文物出版社　2000 年
122　劉志遠、余德章、劉文傑『四川漢代画像塼与漢代社会』文物出版社　1983 年

表２－１　秦始皇陵陪葬坑一覧

名称	位置	墳丘との位置関係	数量	平面 形態	摘要	性質	発掘 時期	備考 (注)
銅車馬坑	岳家溝村の東北	中部西側 20 m	1	“巾”字形	銅車馬２輌出土	中央官庁の象徴—太僕	1980 年	部分発掘
K0006	岳家溝村の東	西南角約 50 mの内園西南角	1	“中”字形	文官俑８点、御手俑４点、銅鉞４点、木車、馬約 20 頭	中央官庁の象徴—廷尉	2000 年	全面発掘
跽坐俑坑、禽獣坑	岳家溝村の北	西側内外園の間	31	方形、長方形	跽坐俑〔上半身を伸ばした状態で跪く俑〕 珍禽異獣	苑囿の象徴	1978 年	４基を発掘
馬厩坑	岳家溝村の北	西側内外園の間の南部	1	曲尺形	馬、陶俑等	馬厩の象徴		試掘
K9801	下陳村の北	東南側 200 m内外園の間	1	長方形	石甲冑	武庫の象徴	1998 年	試掘
K9901		K9801 正南 35 m	1	“凸”字形	大銅鼎１点、百戯俑 11 点	百戯芸能の象徴	1999 年	試掘
馬厩坑	上焦村の西	東南外園の東側	98	ほぼ方形、長方形	跽坐俑 馬	馬厩の象徴	1976 ～ 1977 年	37 基を発掘
兵馬俑坑　１号	西楊村	東外園壁の東 1225 m、東門外大道の北側	3	長方形	木車、陶馬･俑、銅兵器、車馬器	軍隊の象徴	1974 ～ 1984 年	部分発掘
兵馬俑坑　２号	西楊村	東外園壁の東 1225 m、東門外大道の北側	3	曲尺形	木車、陶馬･俑、銅兵器、車馬器	軍隊の象徴	1976 年から今に至る	部分発掘
兵馬俑坑　３号	西楊村	東外園壁の東 1225 m、東門外大道の北側	3	“凹”字形	木車１輌、陶馬４点、陶俑 68 点、銅兵器 34 点	軍隊の象徴	1977 年	全面発掘
K0007	陳王村の西北	東北外園の東北約 900 m	1	“F”形	銅天鵞、仙鶴、鴻雁 46 点、箕踞姿俑８点、跽姿俑７点	中央官庁—左弋外池の象徴	2001 ～ 2003 年	全面発掘
動物坑		K0007 正西約 500 m	1	長方形	大鳥（鶴）、鶏、猪、羊、犬、鼈、魚等の動物	苑囿の象徴	1995 年	全面発掘

※そのほかにボーリング調査で 37 基の陪葬坑を確認している。内訳は、墳丘の東側で４基（K0101、0202、0203、0204）、北側で２基（K0201、0205）、墳丘の北側東寄りで７基、墳丘の西銅車馬坑の南で２基（含 K0003），墳丘の南で２基（K0001、K0002）、西内外園の間の南部で曲尺形馬厩坑の東と北から 19 基（含 K0004、K0005）、東内外園の間の南部で K9801 の北から１基（K9902）である。

表２－２　前漢十一陵一覧

帝后陵名	位置	墳丘 底辺（東西×南北）	墳丘 頂辺（東西×南北）	墳丘 高さ	陵園（東西×南北）	陪葬坑位置、数量	陵旁の建築	陵邑位置（陵園との位置関係）	陪葬墓の位置
高祖長陵	窯店郷三義村	164 ～ 166 × 132 ～ 134	38.7 × 17.5	24.6	900 × 1000	園内墳丘の東北部	園内の北 園外の南	北側	東北
呂后陵	同一陵園、長陵の西北	162 ～ 164 × 134	40.5 × 15.3	24.5			北園内の		
惠帝安陵	韓家湾郷白廟村	163 × 140	50 × 29	28	940 × 840	園内墳丘の東北部		北側	東
張皇后陵	同一陵園、安陵西北	70 × 63	28 × 28	8					
文帝霸陵	西安東郊の毛西郷楊圪塔村								
竇皇后陵	霸陵東南	辺長 137 ～ 143		19.5					
景帝陽陵	正陽鎮張家湾村	168.5 × 167.5	56 × 63.5	32.28	辺長 417.5 ～ 418	陵園内 86 基(11 基発掘、試掘)、外 48 基（15 基発掘、試掘）	四周（東南は陵廟遺構）	東	北、東
王皇后陵	陽陵東北	辺長 151 ～ 167.5	辺長 48 ～ 64	26.49	辺長 347.5 ～ 350	陵園内 28 基			
武帝茂陵	興平県南位郷策村	231 × 234	39.5 × 35.5	46.5	430 × 414	陵園内 63 基、陵園外 115 基	東南、西北	東	東、東北
李夫人墓	茂陵の西北	114 × 131	21 × 40			墳丘の南に４基	西北		
昭帝平陵	平陵郷大王村、互助村	辺長 160 ～ 170	40 × 40	32	東 404 西 429 南 416 北 428	陵園外の南、西南 21 基（発掘３基）	北	東北	四周
上官皇后陵	平陵の西北	160 × 160	辺長 45 ～ 48	30	東 380 西 386 南 370 北 381	陵園外の西、西南５基	北、西南		

帝后陵名	位　置	墳　　丘			陵園（東西×南北）	陪葬坑位置、数量	陵旁の建築	陵邑位置（陵園との位置関係）	陪葬墓の位置
		底辺（東西×南北）	頂辺（東西×南北）	高さ					
宣帝杜陵	西安南郊の曲江池郷三兆村	172 × 172	50 × 50	29	433 × 433	北４基、西南１基	南側、北、東北	西北	東北、東南
王皇后陵	杜陵の東南	148 × 148	45 × 45	24	334 × 335		南側		
元帝渭陵	周陵郷新庄村	162 × 164	50 × 50	29	400 × 410		北		東北、南
王皇后陵	渭陵の西北	85 × 85	30 × 30	17	364 × 360				
成帝延陵	周陵郷厳家溝村	173 × 173	51 × 51	31	382 × 400				東
哀帝義陵	周陵郷南賀村	175 × 175	55 × 55	30	420 × 420				四周
平帝康陵	周陵郷大寨村	216 × 209	60 × 60	26.6	420 × 420				東

※表中墳丘等の寸法にはいくつかの測量数値があるが、その内の一つを採用。単位はｍ

表２－３　前漢王墓一覧

№.	墓名	墓　葬　の　形　　態	副　葬　品	時代	被葬者	備考
1	北京大葆台１号墓	一本墓道竪穴土坑黄腸題湊墓。南向き。玉衣着装。墓道内に木槨室あり、車３輌、馬 13 頭を安置。	銅器、鉄器、鉛器、銀器、陶器、玉石器、骨器、角器、歯牙器、漆木器、絹織物 800 余点	元帝初元四年（B.C.45）	広陽王劉建	異穴合葬
2	大葆台２号墓	１号墓の西に位置する。一本墓道竪穴土坑黄腸題湊墓。南向き。土坑長 17.7、幅 11.75 ｍ。墓室を火で焼く。墓道内に車３輌、馬 10 頭を葬る。	たびたび盗掘を受けている	１号墓にほぼ同じ時期	広陽王劉建の妻	
3	河北省満城陵山１号墓	一本墓道崖洞墓。東向き。墓道、甬道、南北耳室、前室、後室、回廊からなる。金縷玉衣を着装。	二基の保存良好。どちらも銅器、鉄器、金銀器、陶器、玉石器、漆器、絹織物 4200 点以上出土。	武帝元鼎四年（B.C.113）	中山靖王劉勝	異穴合葬
4	満城陵山２号墓	１号墓の北に位置する。120 ｍの間隔。墓室平面配置は１号墓とほぼ同じであるが，後室の位置が前室の南にあり、後室を取り巻く回廊なし。金縷玉衣を着装。玉象嵌漆棺。		１号墓と同時期	中山靖王劉勝の妻竇綰	
5	河北省定県 40 号墓	一本墓道竪穴土坑黄腸題湊墓。全長約 61 ｍ、墓坑長 31、幅 12.9 ｍ。題湊木で前後を囲い、それぞれを独立させて通じていないようである。前部を三間に仕切り、車３輌、馬 13 頭、大量の鍍金車馬器を副葬す。後部は題湊壁内に槨室と棺室を設け、その間を回廊とする。棺室内には五重の棺を安置す。金縷玉衣を着装。九竅塞〔目耳鼻口を塞ぐもの〕をもつ。	棺室内に銅器、漆器、絹織物、書写用具、竹簡等を副葬。遺体の周りには銅鏡、剣、弩機、鉄剣、ナイフ、金餅 40 塊、馬蹄金２塊、麟趾金１塊、大量の玉器を並べる。	宣帝五鳳三年（B.C.55）	中山懐王劉修	
6	河北省石家庄小沿村漢墓	南北二本墓道の竪穴土坑黄腸題湊墓。題湊は木板で囲い、題湊内に一重槨二重棺を置いたようである。	少量の銅器、陶器、玉器があり、その中に「長耳」銅印が一つ含まれる。	B.C.202	趙景王張耳	被葬者の論争あり（59）
7	河北省獲鹿高庄１号墓	東西二本墓道の竪穴土坑木槨墓。全長 95.4 ｍ。墓坑長 35.3、幅 32.2 ～ 33.8 ｍ。土坑の底に木槨を築き、木槨の外側に石材を積み上げて石槨をつくる。墓坑の周囲に９箇の器物入れの外蔵槨を設け、中に３輌の実用車、馬 14 頭、９輌の明器車、木俑、木馬俑、木船模型等を納める。この墓の北に２号墓あり。	外蔵槨から大量の銅器、鉄器、銀器、陶器、玉器、石器、漆器および銅車馬器、鉄車馬器が出土。銅器、銀器に「五官」、「常山」、「常山食官」、「常食中般」、「宦者銅般」「廿九年」等の刻銘あり。	武帝元鼎三年（B.C.114）	常山憲王劉舜	異穴合葬
8	河北省献県 36 号墓	竪穴土坑木槨墓。墓道、耳室、墓室からなる。墓道は東向きで、長さ 50 ｍ余、中を砂で埋める。耳室は墓道の南側の墓室近くにあり、中に 18 点の釉陶壺と一群の鶏骨を入れた木箱を置く。墓室の土壙はほぼ方形で、辺長 10.2 ～ 14.4 ｍ。木槨構造は複雑で、中に三重棺を置き、その外を青膏泥〔青い粘質土〕で覆い、さらに炭と砂で埋める。この墓葬の南にさらに規模の大きな墓葬があり、二つの墓葬は同一の墳丘下にある。	銅器、金餅、陶器、玉器等。玉器の種類は、礼玉璧、耳鼻塞玉、装飾用の玉環、瑗、璜、心形佩、舞人、鸞、璇、帯鈎、串珠、瑞獣　等と大変多い。	前漢前期	某代河間王后	異穴合葬
9	山東省昌楽東圈１号墓	崖洞墓。縦坑式墓道（下部は甬道になる）、南室、北室、四角側室からなる。この墓の西 20 ｍに２号墓がある。	鍍金銅器、鉄器、陶器、玉器。銅灯盤銘文「菑川」、封泥「菑川后府」等の文字資料がある。	前漢中期	某代菑川王后	異穴合葬
10	山東省臨淄窩托村漢墓	未発掘。２本墓道「中」字形竪穴土坑墓。墓坑長約 42、幅約 41 ｍ。北墓道の西側と南墓道の両側に５基の竪穴土坑木槨室陪葬坑がある。１号坑には主に生活用具を納める。２号坑は殉犬坑で、30 匹を入れる。３号坑と５号坑は銅・鉄製兵器を納める。４号坑は車馬坑で、大車３輌、小車１輌、馬 13 頭、犬２匹を納める。	５基の陪葬坑出土器物は 12100 点以上。その中に刻銘銅器、銀器が 53 点。中でも多い刻銘は「斉大官」「斉食官」「大官北宮」「南宮鼎」等である。	文帝元年（B.C.179）	斉哀王劉襄	
11	山東省章丘洛庄漢墓	未発掘。２本墓道「中」字形竪穴土坑墓。東墓道が主墓道になる。墓葬の周囲から全部で各種陪葬坑と祭祀坑 36 基を発掘。	22 基の祭祀坑からは主に動物遺骸、俑、陶器、漆器が出土。14 基の陪葬坑はそれぞれ馬坑、犬坑、車馬坑、兵器坑、食物坑（動物坑）、楽器坑のように内容が決まっている。大量の金製品、銅器、陶器、石器、骨器、木器および「呂内史印」「呂大官印」「呂大行印」の封泥と大量の銅器銘文が出土。	高后二年（B.C.186）	呂王呂台	

№.	墓名	墓　葬　の　形　　態	副　葬　品	時代	被葬者	備考
12	山東省章丘危山漢墓	未発掘。１本墓道竪穴石坑墓。墓の周囲に陪葬坑が分布。	１号陪葬坑から４組の陶車馬と歩兵俑、騎兵俑が出土。２号陪葬坑から１組の陶車馬と少しの陶俑が出土。その他に11箇の木箱あり。	景帝前元三年(B.C.154)	済南王劉辟光	
13	山東省長清双乳山１号墓	１本墓道竪穴石坑木槨墓。北向き。墓道の南部、墓室近くに木板で囲まれた槨室があり、中に真車馬と車馬器、冥器車馬器を納める。槨室内に二重槨三重棺を安置。この墓の西に42.3m離れて、異穴合葬の２号墓あり。	保存良好。槨室内から大量の銅器、金餅、陶器、玉器、漆器、家畜家禽等出土。また単轅彩絵塗漆車の模型、本物の約二分の一がある。	武帝后元二年(B.C.87)	末代済北王劉寛	被葬者の論争あり[60]
14	山東省巨野紅土山漢墓	１本墓道竪穴石坑木槨墓。東向き。墓道長60.5m、中に１車４馬を埋める。墓室を前室と後室に分ける。前室長４m、幅4.7m、内に副葬品を納める。後室長5.64m、幅4.7m、一重棺一重槨を安置。墓室の天井を木材で掛け、その上に四層に石を敷く。墓道と墓室の埋め土と封土中に三層に石を敷く。	大量の銅・鉄製兵器、刻銘銅器、陶器、玉器、 漆器が出土。	武帝后元二年(B.C.87)	昌邑哀王劉髆	
15～18	山東省曲阜九龍山２～５号墓	南向き、東西並列。四墓の形態はほぼ同じであるが、墓室の数が違うだけである。墓道（二耳室付設）、甬道（二耳室付設）、前室（四側室付設、５号墓は前室なし）、後室（５号墓の主室。４号、５号墓に二側室付設）、壁龕（２号墓は無し）からなる。	四墓出土銅器、鉄器、金銀装飾品、陶器、玉石器1900点以上。被葬者の身分を表すものに銀縷玉衣、実用車馬、「宮中行楽銭」「王未央」「王慶忌」の銅印および「王陵塞石」の刻文等がある。	前漢中・後期	魯王及王后（３号墓は孝王劉慶忌の墓）	被葬者論争あり[61]
19	河南省永城保安山１号墓	崖洞墓。東向き。全長96.45m。墓道、二対の耳室、主室と６側室、回廊、四隅の部屋からなる。墓内面積612㎡、容積1367㎥。	早くに盗掘を受け、墓室には何も残っていなかったが、墓道の入口部の床から20数枚の「貨泉」銭貨出土	景帝中元六年(B.C.144)	梁孝王劉武	異穴合葬
20	保安山２号墓	１号墓の北、200mに位置する。崖洞墓。全長210.5m。東西２本墓道。前室と後室は主要墓室であり、後室の周囲に回廊を穿つ。墓道、甬道、前室、回廊すべてに耳室と側室34部屋を設ける。墓室面積1600㎡、容積6500m³。墓外に陪葬坑を２基付設。	銅器、鉄器、陶器、玉石器。玉衣片は一片のみ残存。１号陪葬坑から実用鍍金銅車馬飾り、兵器、玉器等2000点以上出土。その中に「梁后園」銅印１点あり。２号陪葬坑から大量の明器銅車馬器出土。	武帝元朔年間	梁孝王劉武の妻李后	被葬者論争あり[62]
21	永城柿園漢墓	保安山１号墓の東南、150mに位置する。西向き。墓道、甬道、主室、８側室からなる。全長95.7m、面積383.5㎡、容積1738m³。この墓の主室には四神、仙草、雲気紋等の彩色壁画が描かれている。	銅兵器、鍍金鍍銀銅車馬飾り、陶俑、玉片、石片等一万点以上。銭貨一万斤以上。	前漢前期	某代梁王	
22	永城夫子山１号墓	未発掘。崖洞墓。東向き。墓の東南約150mの所に一陪葬坑あり。	金獅子頭、羊頭形飾り、鍍金銅車馬器、陶俑、玉衣片等。陪葬坑から銅鈁、壺、甑、釜、鍪、盆、勺、灯火器等が出土（採集）。	前漢中期	某代梁王	異穴合葬
23	永城夫子山２号墓	未発掘。１号墓の北、約100mに位置する。崖洞墓。墓道は東向きで、南北に耳室を設け、墓室を前室と後室に分ける。後室に５側室を付設。墓の東約50mに一陪葬坑あり。	陪葬坑から大量の鍍金銅車馬器と象牙の馬轡１点が出土。	前漢中期	某代梁王后	
24	永城鉄角山２号墓	未発掘。崖洞墓。墓道は東向きで、南北に耳室を付設。墓の東約50mに一陪葬坑あり。２号墓の南に１号墓があり、二墓の墳丘の間隔は20m。	陪葬坑から大量の鍍金・鍍銀銅車馬器が出土。また鉄製・骨製車馬器も出土（採集）。	前漢中期	某代梁王后	異穴合葬
25	永城南山１号墓	未発掘。崖洞墓。東向き。墓道の西に甬道が接し、甬道の西に墓室が接す。墓室に６側室を付設。墓東南約57に一陪葬坑あり。１号墓の北、約30mに２号墓がある。	陪葬坑から銅鐘、銅壺各１点、五銖銭２枚出土。	前漢中期	某代梁王	異穴合葬
26	永城黄土山２号墓	未発掘。崖洞墓。墓道は北向き。墓室は前室と後室に別れ、前室は東西に耳室を付設。２号墓の南、約20mに１号墓あり。	後室から多くの実用銅器、銅明器、大量の五銖銭、陶器、玉器等出土。	前漢中期	某代梁王后	異穴合葬
27	永城窯山１号墓	未発掘。１本墓道竪穴石坑石室墓。墓道は東向き。	金縷玉衣片300枚、玉璧９点、玉環１点、銅鈁１点、銅剣１本、骨飾り１点。	前漢後期	某代梁王	異穴合葬
28	永城窯山２号墓	１号墓北、20mに位置する。１本墓道竪穴石坑石室墓。墓道は東向き。	銅器、陶器、漆器（銀タガ）、玉衣片（55枚）、玉器（37点璧等）、楽器（銅瑟柱）等。	前漢後期	某代梁王后	
29	永城僖山１号墓	１本墓道竪穴石坑石室墓。墓道は東向き。	金縷玉衣片1000枚以上、璧、圭、鉞、戈、舞人、蟬、鳩、猪等の玉器、真珠瑪瑙飾り等。	前漢後期	某代梁王	異穴合葬
30	永城僖山２号墓	１号墓の西、50mに位置する。１本墓道竪穴石坑石室墓。墓道は西向き。	銅器、鉄器、陶器、玉衣片、璧、璜等の玉器、水晶飾り、瑪瑙飾り等。	前漢後期	某代梁王后	
31	江蘇省徐州獅子山漢墓	崖洞墓。南向き。全長117m。墓道、甬道、前室、後室からなる。墓道は外墓道と内墓道に分かれる。内墓道の上部は露天掘り、下部の両側に３耳室を付設。甬道の両側に６耳室あり。前室の東半部は棺床のようである。金縷玉衣を着装し、玉象嵌漆棺を使用。墓外に兵馬俑陪葬坑あり。	銅兵器、鉄兵器、容器、金銀器、陶器、玉器共で2000点以上。特に銅銭、官印、玉器、封泥の数が多く、価値が高い。墓中に３体の殉葬あり。	前漢前期(B.C.175～B.C.154)	楚夷王劉郢客或いは楚王劉戊	被葬者論争あり[63]
32～33	徐州馱籃山１号、２号墓	崖洞墓。南向き。130mの間隔で東西に並列す。１号墓は西側にあり、全長53.74m。墓道、甬道（６耳室付設）、前室（５側室付設）、後室からなる。２号墓は全長51.6mで、形態は１号墓にほぼ同じ。ただし前室に３側室を付設。	二墓の副葬品は1000点以上である。	前漢前期	某代楚王と王后	異穴合葬

№	墓名	墓　葬　の　形　　態	副　葬　品	時代	被葬者	備考
34	徐州北洞山漢墓	崖洞墓。南向き。全長 77.3m。墓道、主体墓室、附属墓室からなる。墓道両側に二つの土墩を築造し、七つの壁龕と２耳室を付設。主体墓室は甬道（２耳室付設）および前室と後室（２トイレ付設）を包括。附属墓室合わせて 11 部屋が墓道東側に位置する。	銅器、鉄器、金製品、陶器、玉器、漆木器。その内の金縷玉鱗甲状衣片および「楚宮司丞」「楚御府印」「楚武庫印」「楚邸」等の銅印章は被葬者の身分を判定する資料になる。	武帝元光六年（B.C.129）	楚安王劉道	
35～36	徐州亀山２号墓	崖洞墓。西向き。南北並列の二墓。南墓は全長約 83m で、墓道、甬道（３耳室付設）、前室（３側室付設）、後室（２側室付設）からなる。北墓は全長 83.5m で、墓道、甬道（１耳室付設）、前室（２側室付設）、後室からなる。二墓の墓室は通用門で通じる。	たびたび盗掘を受けている。南墓の後室の西側室内から「劉注」亀紐銀印出土。	武帝元鼎元年（B.C.116）	楚襄王劉注（南墓）とその妻	異穴合葬
37	徐州石橋１号墓	崖洞墓。西向き。全長 61m。墓道、甬道（１耳室付設）、前室（２側室付設）、後室（２側室付設）からなる。	伝１号墓出土銅器、玉衣片等遺物あり。	前漢中期	某代楚王	異穴合葬
38	徐州石橋２号墓	崖洞墓。西向き。１号墓の北、10m に位置する。墓道は破壊されており、甬道と一主室が残る。	銅器、鉄器、陶器、玉器、漆器 167 点。銅器に「明光宮」「王后家」刻銘、漆器に「中宮」の朱書あり。	前漢中期	某代楚王后	
39	江蘇省泗陽大青墩漢墓	１本墓道竪穴土坑木槨墓。南向き。墓室南北長 9.60m、幅 8.80m。主槨室の東、西、南の三面に別に木槨を設け、副葬品を納置。槨材に「王宅」「泗水王塚」等刻銘あり。墓道の西側に一陪葬坑あり。	銅器、鉄器、陶器、玉器、漆器、木器が数百点ある中で、木俑、木馬等の動物俑の数が多いという特色をもっている。	前漢	某代泗水王	
40	江蘇省高郵天山１号墓	１本墓道竪穴石坑黄腸題湊墓。南向き。今までの同類墓制中、最も形態が複雑であり、保存状態が最も良好。墓坑の題湊壁内に槨室と二重の棺室をつくる。槨室と外がわの棺室の間は内回廊になり、回廊内をいくつかの小部屋に区切る。小部屋の木門には漆で「食官内户」「中府内户」等と書かれている。板材にも「広陵船官」刻文がある。内側の棺室内は前を前室とし、後に二重棺を安置する。題湊壁の外側に外回廊をつくる。		宣帝五鳳四年（B.C.54）	広陵厲王劉胥	異穴合葬
41	天山２号墓	１本墓道竪穴石坑黄腸題湊墓。南向きで、１号墓と東西に並列す。形態は１号墓とほぼ同じであるが、題湊壁の外側に外回廊がなく、南題湊壁から墓道にかけて木槨室があり、車馬器が納められる。金縷玉衣を着装。	「広陵私府」封泥と「六十二年八月戊戌」墨書の木箱があり、被葬者を確定する重要な資料である。	１号墓とほぼ同時期	广陵厲王劉胥の妻	
42	湖南省長沙象鼻嘴１号墓	１本墓道竪穴石坑黄腸題湊墓。西向き。墓道東端の両側に「偶人〔人形〕」を配置。墓坑長 20.55 m、幅 18.5 ～ 18.9m。墓坑には外側から内に向かって題湊壁、外郭、内槨、棺室、三重棺の順につくられている。外郭と内槨、内槨と棺室との間は二重の回廊になっている。内槨門と外郭門の間は前室になる。	ほとんどが陶器で、少量の玉器と漆器がある。	前漢前期	某代長沙王	
43	長沙陡壁山漢墓	１本墓道竪穴石坑黄腸題湊墓。西向き。墓道東端の両側に「偶人」を配置。墓坑残長 12.8 m、幅 10 m。墓坑に題湊壁を築き、その中に槨室、棺室、前室をつくる。槨室と棺室の間は回廊で、回廊内はいくつかの小部屋に仕切られている。棺室は狭く、重ね棺はほとんど入れられない。	銅器、鉄器、陶器、玉器、石器、漆木器 300 点以上。その中に３個の印章があり、２個に「曹○」、１個に「妾○」の文字がある。「長沙后丞」封泥もある。	前漢前期	某代長沙王后曹○	
44	長沙望城坡１号墓	１本墓道竪穴石坑黄腸題湊墓。西向き。墓道東端の両側に「偶人」を配置。全長 37m、幅 15.98m。墓坑に題湊壁を築き、その中に槨を設け、槨内に前室と棺室をつくる。槨と棺室の間は回廊で、回廊はいくつかの小部屋に仕切られている。棺室には重ね棺を安置。墓の傍に３基の陪葬坑がある。	銅器、鉄器、金・銀器、陶器、玉器、ガラス製品、漆器、竹木器、骨器 2000 点以上。文字資料には「長沙后府」「長沙庫丞」封泥、「漁陽家」銘漆器等がある。	前漢前期	某代長沙王后「漁陽」	
45	広東省広州象崗山漢墓	１本墓道竪穴石坑石室墓。南向き。墓道、前室とその東西耳室、主室とその東西北３側室からなる。大部分の墓室は石坑の底に石を積み上げてつくるが、東西耳室は洞室〔横穴〕を掘った上に、洞室内に石を積み上げている。主室には一重槨一重棺を安置。絲縷玉衣を着装。	保存良好。大量の銅器、鉄器、金銀器、陶器、玉石器、象牙製品、漆木竹器、絹織物等。「文帝行璽」龍鈕金印、「趙昧」方錐台形鈕玉印等の文字資料は被葬者を判定するための重要な根拠となる。	武帝時期	第二代南越王赵昧	

表２－４　後漢王墓一覧

No.	墓名	墓　葬　の　形　態	副　葬　品	時代	被葬者	備考
1	河北省定県北庄漢墓	塼と石を積み上げる。南向き。墓道、東耳室、前室、後室、後室を取り巻く回廊からなる。前室、后室、回廊には門があり、相通じている。墓室の外周には石壁を積み、天井部には石を三層に敷く。	墓室内から銅器、鉄器、玉石器 400 点以上と、二組の鍍金銅縷玉衣が出土。文字資料としては玉片背面に「中山」の墨書、陶釜に「大官釜」刻文、銅弩機刻銘に「建武卅二年」の刻銘および石に刻まれた文や墨書がある。	和帝永元二年 (A.D.90)	中山簡王劉焉とその妻	同穴合葬
2	定県 43 号墓	南向き。墓道、甬道、東西耳室、前室、並列する２後室からなる。	銅器、鉄器、金銀器、陶器、玉器、骨器 1000 点以上。後室から銀縷玉衣と銅縷玉衣が一組ずつ出土し、被葬者が二人であることが判明。	霊帝熹平三年 (A.D.174)	中山穆王劉暢夫婦	同穴合葬
3	山東省臨淄金嶺鎮１号墓	南向き。墓道、甬道、東西耳室、前室、後室、後室三面を取り巻く回廊からなる。墓壙南北長 23.6m、幅 17.4m。墓室の主体部は塼を積み上げてつくり、甬道、前室、後室、回廊には青石板を張り巡らす。	銅器、鉄器、陶器、玉石器 100 点以上。玉器には璧、環、璜、璇、格、剣の柄頭、塞〔鼻や耳などを塞ぐ玉〕、佩、銀縷玉衣片等があるが、その多くは破片である。他にも珌瑯璫〔ほうろうの耳飾り〕、五銖銭、画像石、金箔、腐朽した絹織物等がある。	明帝永平十三年 (A.D.70)	斉煬王劉石	
4	山東省済寧普育小学校漢墓	東向き。東西 6.18m、南北 8.08m。墓道、前室、南北耳室、後室、後室三面を取り巻く回廊からなる。すべての墓室は石灰岩で構築されている。	銅器、陶器、玉石器、骨器 100 点以上、銭貨 350 枚あり、重要なものに銅縷玉衣片がある。	後漢後期桓霊〔桓帝・霊帝〕の頃	任城王劉博または劉佗の妻	
5	済寧肖王庄１号墓	南向き。墓道、南北耳室、甬道、前室、後室、前・後室を取り巻く回廊からなる。回廊の外を石壁が取り巻く。墓室の南北 15.89m、東西 15.9m、高さ 8.35m。	銅器、陶器、玉石器等がある。銀縷玉衣を着装。4000 余塊の石材中 782 塊に刻銘や朱書きがある。	和帝永元十三年 (A.D.101)	任城孝王劉尚	
6	河南省淮陽北関１号墓	塼石を積み上げてつくる。東向き。墓道、甬道、南北耳室、前室、後室、回廊からなる。１号墓の北側、同塚の下にもう１　　基ある。	副葬品中、石倉楼の彫刻など、石製品に優れた特色が見られる。他に銅器、陶器、玉器等がある。銀縷玉衣を着装。	安帝延光三年 (A.D.124)	陳頃王劉崇	異穴合葬
7	江蘇省徐州土山漢墓	塼石を一緒に積み上げてつくる。墓道、甬道、前室、後室からなる。	銀縷玉衣を着装。	後漢中・後期	某代彭城王	
8	江蘇省邗江甘泉２号墓	墓室は地上の墳丘内につくる。南向き。前室、並列する二后室、回廊からなる。	銅器、鉄器、銀器、陶瓷器、ガラス製品、漆器並びに金、玉、玛瑙、琥珀、真珠、緑松石、ガラス装飾品。銅製雁足灯明台に「山陽邸」、「建武廿八年造」銘文あり。「広陵王璽」亀鈕金印。	明帝永平十年 (A.D.67)	広陵思王劉荆夫婦	同穴合葬

表２－５　前漢諸侯墓一覧

No.	墓名	墓葬の形態	副葬品	時代	被葬者	備考
1	河北省邢台南郊漢墓	墓道と塼積み墓室からなる。東向き。	銅器、鉄器、陶器、玉石器等 30 点以上あり、金縷玉衣片と「劉遷」亀鈕銅印が含まれる。	宣帝甘露三年 (B.C.51)	南曲煬侯劉遷	
2	陝西省咸陽楊家湾４号墓	曲尺形傾斜墓道（南向き）と墓室からなる。墓坑内外合わせて陪葬器物坑が 18 基あり、その内、墓道内に５基、墓外に 13 基である。	陪葬坑の中には車坑，食料・車馬坑，陶器坑，銅器坑、兵馬俑坑がある。200 片以上の銀縷玉衣片も出土。	文帝・景帝の時期	絳侯周勃または条侯周亞夫夫婦	異穴合葬
3	咸陽楊家湾５号墓	４号墓の北 26m に位置する。４号墓と形態は同じであるが、墓道方向が反する。葬具は一重棺一重槨。棺槨の周囲に炭で埋める。棺槨の間に副葬品を納める。	銅器、鉄器、陶器、玉器、銭貨等があり，最もよく被葬者の身分を説明できるものに 202 片の銀縷玉衣片がある。			
4	陝西省西安新安機塼廠漢墓	傾斜墓道（北向き）、器物箱、墓室からなる。器物箱の中には騎馬俑、立俑、陶製牛、車器等を納める。墓坑内に槨室があり、槨室の周囲を炭で覆う。槨室内に棺室があり、棺室内に棺を安置す．槨室と棺室の間には辺廂〔小部屋〕（３頭廂、２辺廂、３足廂）を形成する。	銅器、鉄器、釉陶器、陶器、石製品、漆木器、銅銭等。最も特色のある陶俑は裸体騎馬俑と裸体男女立俑である。裸体立俑の形態的特徴をした着衣立俑、着衣俑、牛、羊、猪、鶏、鳩等。文字資料には“利成家丞”封泥がある。	前漢前期	諸侯級	
5	四川省綿陽双包山２号墓	傾斜墓道と墓室（前室、後室）からなる。墓壙内に木槨室を建て、槨室の周囲を青灰色粘質土で覆う。前室は五つの小部屋に仕切られ、副葬品が置かれ、後室には棺が安置される。前室と後室の間には門があり、通じている。	銅器、鉄器、銀器、陶器、玉器、竹製品、漆木器、銭貨等 1000 点以上あり。漆木器には、漆馬、漆車、経脈漆彫木人〔医用木俑〕、木俑、木牛、木竈等に特色がある。銀縷玉衣片もある。	前漢前期	諸侯級	
6	山東省済南臘山漢墓	墓道と墓室からなる。平面曲尺形を呈す。墓道は南向きで，墓室は東西に向く。墓室は前室と後室に分かれ、前室に３個の木槨箱を置き、後室に棺槨を置く。	銅器、鉄器、陶器、玉器、漆器および「傅○」水晶印章、「妾○」瑪瑙印章、「夫人私府」封泥等 70 余点出土。	前漢前期	某諸侯夫人傅○	

No.	墓名	墓葬の形態	副葬品	時代	被葬者	備考
7	安徽省阜陽双古堆１号墓	墓道（南向き）と墓室からなる。墓口南北長 9.2m、東西幅 7.65m。槨室の外を炭で覆う。槨室内を板で仕切り、槨室を頭廂〔頭部側の小部屋〕と棺室に二分する。棺室内には棺床があり、その上に棺を安置する。頭廂と棺槨の間に副葬品を置く。	銅器、鉄器、鉛製品、金銀器、陶器、石製品、漆木器、銭貨等、全部で 206 点ある。重要なものには二十八宿円盤、六壬式盤〔吉凶を占う道具〕、太乙九宮占盤等の漆器および竹簡（『蒼頡篇』『詩経』『刑徳』等）がある。それらは漢代の天文学や医学など、古代の科学技術と典籍に関する貴重な資料である。	文帝十五年（B.C.165）	第二代汝陰侯夏侯竈	異穴合葬
8	阜陽双古堆２号墓	形態配置は１号墓と同じである。墓口南北長 23.5m、東西幅 13m。	銅器、鉄器、陶器、漆器等 64 点ある。その中で重要なものは漆器と銅器の銘文「女陰侯」、封泥の「女陰家丞」である。	１号墓とほぼ同時期	夏侯竈の妻	
9	江蘇省徐州簸箕山３号墓	竪穴石坑。葬具一重棺一重槨のようである。墓底の東西二壁に一つずつ浅い龕を穿ち、副葬品を納める。墓の西北 28m に一陪葬器物坑がある。	保存良好。銅器、鉄器、金銀器、陶器、玉石器、骨器等 100 点（組）ある。其中に「宛朐侯執」亀鈕金印がある。陪葬坑から男女陶俑 25 点出土。	景帝時期	宛朐侯劉執	
10	湖南省長沙馬王堆１号墓	傾斜墓道（北向き）と墓室からなる。墓坑の底に槨室を設ける。槨室内に棺室があり、棺室内に四重棺を安置す。棺室と槨室の間の東、西、南、北の四つの辺廂〔小部屋〕を設ける。	保存良好。竹簡、帛画、絹織物、漆器、木俑、竹木器等、他に小物の銅器、錫器、陶器、角器等、全部で 1000 点以上ある。文字資料には「軑侯家丞」封泥、「軑侯家」漆器銘文等がある。	文帝初元十二年以降数年の間	軑侯利蒼の妻「辛追」	異穴合葬
11	長沙馬王堆２号墓	１号墓の西に位置する。傾斜墓道（北向き）と墓室からなる。墓坑は楕円形を呈す。墓坑長径 11.23m、短径 8.9m。槨室の外を炭と白・黄色粘質土で覆う。葬具は二重槨二重棺。	漆器を主とし、銅器、銀器、陶器、玉器、鼈甲製品等がある。その中で最重要なものは、「利蒼」盞頂〔箱形鈕〕玉印、「軑侯之印」亀鈕銅印、「長沙丞相」亀鈕鍍金銅印の３点の印章である。	呂后二年（B.C.186）	長沙国丞相、軑侯利蒼	
12	長沙馬王堆３号墓	１号墓の南に位置する。傾斜墓道（北向き）と墓室からなる。墓坑の南北長 16.3m、東西幅 15.45m。墓坑壁を三段の階段状につくる。槨室の外を炭と青色粘質土で覆う。槨室内に棺室を設け、棺室内に三重棺を安置す。棺室と槨室の間、東、西、南、北に四つの辺廂〔小部屋〕をつくる。	保存良好。1000 点以上あり、主な物に帛画（４幅）、帛書（『周易』『老子』等 50 種、地図２幅）、簡牘〔竹・木簡〕（610 本。内容は遣策と医書の二つの部分からなる）、竹木器（兵器、楽器、木博具１組、竹笥〔竹行李〕52 個）、漆器（319 点。「軑侯家」等文字が朱書きされている物がある）、木俑（106 点）、絹織物の他に小物銅器、鉄器、陶器、角器等がある。	文帝初元十二年（B.C.168）	第二代軑侯利豨的兄弟	軑侯利豨とする考えもある[85]
13	湖南省沅陵虎溪山１号墓	墓道（東向き）、南北耳室、墓室からなる。墓室は主槨室と南北二列の外蔵槨室で構成。主槨室は頭廂と南北辺廂と棺室に分かれる。被葬者は棺内に納める。該墓の南側 20m 足らずに２号墓あり。	保存良好。銅器、陶器、玉器、滑石製品、漆木器、絹織物、竹簡等 1500 点（組）以上。文字資料に漆器銘文「沅五十三」等、「呉陽」玉印、1336 枚（段）の竹簡がある。	文帝后元二年（B.C.162）	初代沅陵侯呉陽	異穴合葬

表２－６　後漢の玉衣墓一覧

No.	墳墓名	墓葬の形態	副葬品	時代	出典（註）
1	江蘇省睢寧劉楼漢墓	塼室墓。東南向き。甬道（２耳室付設）、前室、後室からなる。南北長 11.9m、幅 6m。	銅器、鉄器、鉛製品、陶器等。銅縷玉衣片 130 余片、銀縷玉衣片２片。	後漢前期	註 88
2	河北省石家庄北郊漢墓	塼室墓。南向き。墓道、甬道（２耳室付設）、前室と後室からなる。	銅器、陶器、玉石器、銭貨等。銅縷玉衣片 76 片。	後漢前期	註 89
3	河北省蠡県漢墓	塼室墓。南向き。墓道、前室（２側室付設）、中室（１側室付設）、後室からなる。墓道も連ねて南北長 32.55m、幅 11.6m。封土高 7.9m。	銅器、鉄器、金銀器、陶器、骨器、玉石器、真珠、漆器等。銅車馬器、その多くは鍍金。銅縷漢白玉衣片 222 片。	後漢中期（某代蠡吾侯）	註 90
4	山東省東平王陵山漢墓	塼石室墓。南向き。墓道、前室（２側室付設）、後室からなる。長さ 7.82m、幅 7.48m。後室に二つの棺安置。	銅器、陶器、玉器、象牙物差し、銭貨等。銅縷漢白玉衣片 1647 片。	後漢中・後期（東平憲王の家族）	註 91
5	江蘇省睢寧九女墩漢墓	塼石室墓。南向き。墓道、前室（２側室付設）、中室、後室からなる。長さ 15m、幅 11.5m。石材を用いた所に画像を雕刻。	銅器、鉄器、銀器、錫器、陶器、珉玉器〔玉に似た美石〕、ガラス製品、骨器、銭貨等。珉玉器は璧、猪、229 片の銅縷玉衣片がある。	後漢後期	
6	河南省洛陽西関漢墓	塼室墓。南向き。墓道、甬道、前室（１側室付設）、後室からなる。後室に二つの棺安置。	銅器、鉄器、陶器、玉石器、銭貨等。鍍金銅縷漢白玉衣片・石衣片 1100 余片。	後漢後期	
7	河南省洛陽東花壇機車〔機関車〕廠１号墓	塼室墓。南向き。墓道、甬道、前室（１側室付設）、後室からなる。	金銀器、陶器、玉器等。鍍金銅縷漢白玉衣片 1000 片弱。	後漢後期	
8	河南省洛陽東花坛壇機車廠 346 号墓	塼室墓。南向き。墓道、甬道、前室（１側室付設）、後室からなる。封土高 6.8m。	銅器、鉄器、銀器、鉛製品、陶器、玉石器等。完全な鍍金銅縷玉衣片 750 片。	後漢後期	
9	河南省洛陽東北郊 575 号墓	塼室墓。東向き。墓道、甬道、前室（２側室付設）、後室からなる。	銀縷玉衣、鍍金銅縷玉衣片 530 余片。	後漢後期	
10	江蘇省徐州拉犁山１号墓	石室墓。北向き。前室（２側室付設）、二中室（２側室付設）、後室、回廊（１耳室付設）からなる。全長 14.9m、最広幅 10m。封土高 5.1m。	銅器、鉄器、金銀器、玉石器、陶器、骨器、琥珀製品、水晶製品、銭貨等。銅縷玉衣片 500 余片。	後漢時代	
11	山東省鄒城廟東村漢墓	塼室墓。南向き。墓道（左右に耳室付設）二主室からなる。封土高 9.5m。	銀縷玉衣片。	後漢後期（某代高平侯）	
12	山東省済南長清大覚寺２号墓	塼石室墓。南向き。墓道、前室（２側室付設）、中室、後室からなる。全長 47m、最広幅 14m。	銅器、鉄器、金銀器、陶器、玉石器、銭貨 110 点余。銅縷玉衣片 1000 片以上あり、玉衣二組分に相当。	後漢後期	

表２－７　漢代の壁画墓一覧

墳墓名	時　代	壁　画　の　内　容	墓葬の形態
河南省永城柿園漢墓	前漢前期	主墓室の天井部：龍を中心に白虎、朱雀、怪獣、霊芝を混ぜ合わせた紋様に、雲気紋を埋めた図案。縁枠は交叉菱形紋と連璧紋で飾る。南壁：豹紋、朱雀、霊芝、仙山で飾り、縁枠を連璧紋で飾る。西壁の入口以北は連璧紋がわずかに残る。	多室崖洞墓
河南省洛陽卜千秋墓	前漢中期稍后（B.C.86～B.C.49）	主主室の天井部：節〔三重の房を着けた杖状のもの〕を執る仙人が神獣を率いて被葬者を導く昇仙図 主室の後壁：方相氏。	竪穴墓道多室空心塼小塼墓
河南省洛陽焼溝61号墓	前漢元帝～成帝（B.C.48～B.C. 7）	天井の棟：日月星象図、羊頭浮彫り、虎食旱魃〔旱魃は怪獣のようなものである〕、歴史故事、大儺儀式図（宴会図）、三つの「恐」字。	竪穴墓道多室空心塼小塼アーチ形天井墓
西安交通大学前漢壁画墓	前漢後期	太陽（金烏）、月（蟾蜍玉兔）、青龍白虎朱雀玄武、二十八星宿図、鶴鹿白鳥等の瑞禽異獣。	傾斜墓道単室塼アーチ形天井墓（左右に耳室）
西安理工大学前漢壁画墓	前漢後期	アーチ形天井：日（金烏）月（蟾蜍、玉兔）、朱雀、仙鶴〔仙人が飼っている鶴〕、大雁〔鵞鳥〕、雲気紋。北壁：龍に乗る仙人、瑞獣。南壁：青龍、白虎。東壁：狩猟、車馬出行。西壁：楽舞、闘鶏図。	傾斜墓道単室塼アーチ形天井墓（左右に耳室）
河南省洛陽浅井頭前漢壁画墓	前漢成帝～王莽時代	天井の棟の南側に、南から北に向かって14個の塼を組み合わせた一幅の長画：朱雀、伏羲、太陽（中に金烏）、白虎、双龍、羽人、朱雀、璧を貫く二龍、蟾蜍、人面龍身の神獣、月（蟾蜍、玉兔）、女媧。北側には7個の塼組に瑞雲図。屋根形の天井：雲気紋図。	竪穴墓道多室空心塼墓
内蒙古自治区托克托県閔氏壁画墓	前漢末期	侍者の下僕、牛車、馬車、厨房、鶏犬等の供え物用食肉の家禽家畜、酒甕、井戸、竈等。	多室ドーム形天井およびアーチ形天井塼墓
河南省洛陽金谷園壁画墓	新（王莽）地皇元年～地皇四年	ドーム形天井：星象図、日月図、仙鶴、飛鳥。	多室ドーム形天井、アーチ形天井空心塼・小塼墓
河南省洛陽偃師県新莽壁画墓	新（王莽）時代	前室：虎頭の方相氏、月を捧げ持つ常議、太陽を捧げ持つ羲和。中室：厨房図、六博宴会楽舞図。後室：西王母、玉兔、蟾蜍、九尾の狐。	竪穴墓道多室空心塼小塼アーチ形天井墓
河南省洛陽尹屯新莽壁画墓	新（王莽）時代	中室の藻井〔宮殿・寺院建築の天井を格子状または六角、八角に仕切った窪み部で、絵が描かれている〕：太陽（三足烏）、月（蟾蜍）、雲。東側天井：神獣に乗る仙人、青龍。南側天井：虬龙〔伝説上の角のある小さな龍〕、人首蛇身。西側の天井：双闕，虎、女子，楼台、一人牽牛。北側の天井：人首蛇身獣、人首魚身鳳尾獣。後室：勾玉状の連なった雲紋内を仙草や花卉で埋めた図案。	竪穴墓道多室ドーム形天井、アーチ形天井塼室墓
陝西省千陽県新莽壁画墓	新（王莽）時代	太陽（金烏）、月、青龍、白虎、雲気。	塼敷き土洞墓
山西省平陸棗園村壁画墓	王莽～後漢初頭	青龍、白虎、玄武（蛇無し）。その間を流雲紋で満たし、流雲の間に100個以上の星と日月、白鶴を描く。山水、人物、屋舎、牛耕、馬車、天秤棒で荷を担ぐ等の生活風景。	単室塼アーチ形天井墓（単耳室）
河南省洛陽北郊後漢壁画墓	後漢初頭	前室：太陽を持ち上げる伏羲、月を持ち上げる女媧、龍車に乗る仙人、鹿車に乗る仙人、弓と矢、侍者、門吏。	竪穴墓道多室空心塼墓
陝西省旬邑百子村後漢壁画墓	後漢前期	墓道出入り口：方相氏、門吏。前室ドーム形天井：太陽（金烏）、月（蟾蜍）、青龍白虎朱雀。前室の四壁：庭院と屋舎、家畜と穀倉、農耕と放牧。後室：厨房と宴客、部下と門吏。	多室塼石墓
内蒙古自治区鳳凰山M1	後漢前期	墓門：門吏、食事を捧げ持つ侍者。墓室の天井部：月（蟾蜍と玉兔）、星。後壁上部：方相氏と一本角獣。後壁下部：垂帳、三門吏と犬。東壁：楽舞百戯、庄園武庫、出行と狩猟。	傾斜墓道の妻形屋根土洞墓
河北省望都後漢壁画墓	後漢中期	壁画を上下二段に分層すると、上段は、寺門卒、門亭長の門を守る役人や、仁恕椽、賊曹、門下賊曹、門下遊徼、辟車伍佰、門下史、門下小史、主記吏、主簿などの被葬者の臣下である人物が描かれ、下段は、羊、鶏、おしどり、東山に遊ぶ白兔、アヒル、ノロ〔鹿の一種〕、芝草等の祥禽瑞獣が描かれている。	多室塼アーチ形天井墓
遼寧省遼陽旧城東門里後漢壁画墓	後漢中期後葉	盾を持つ門兵、槊〔旗印〕を持つ小官吏、出行、宴席、牛車、星座、流雲紋水波紋の中に瑞獣を飾る。	石板で平天井を構築した洞室墓
河北省安平後漢墓	熹平五年（A.D.176）	被葬者の座像、車馬出行、建造物、楽舞百戯。	
内蒙古自治区和林格尓後漢壁画墓	後漢後期	前室：被葬者の仕途図（中段に被葬者の歴任官職を描く）、下属部下の官吏達（下段）、朱雀、鳳凰、白象、麒麟、雨師。中室：庭園図、楽舞百戯図、歴史故事図、七女の父の仇討ち図、祥瑞図。後室：四霊図、夫婦像、侍女、庄園図。南北耳室：宴会図、厨房図、農耕収穫図、穀倉図、馬の放牧図、牛の放牧図。	多室ドーム形天井およびアーチ形天井塼墓
河南省偃師杏園村後漢壁画墓	後漢後期	車馬出行、作坊〔工房〕と宴会。	傾斜墓道多室塼アーチ形天井墓
河南省洛陽機車工廠後漢壁画墓	後漢後期	門侍、車馬出行、瑞獣祥禽、侍女、楽舞百戯。	多室塼石アーチ形天井墓
河南省洛陽西工後漢壁画墓	後漢後期	夫妻帳下の寝台に座す図、車馬図、歩行図。	塼室アーチ形天井墓
河南省洛陽朱村後漢壁画墓	後漢後期	車馬出行、瑞獣図。	傾斜墓道帯耳室横向塼室アーチ形天井墓
河南省滎陽芪村後漢壁画墓	後漢後期	被葬者の仕途図、楽舞図、車馬出行図、瑞禽図、歴史故事、侍吏。	多室アーチ形天井塼室墓
河南省密県打虎亭後漢壁画墓	後漢後期	甬道と各室の天井部：蓮花、菱形藻井、祥禽瑞獣図。中室南壁：車馬出行。中室北壁：百戯図。中室すべての壁に物を捧げ持つ侍者図あり。耳室：家禽家畜等庄園図、厨房図、下僕図。	傾斜墓道多室塼石室墓
山西省夏県王村後漢壁画墓	後漢後期（桓帝、霊帝時期）	神仙図、歌舞宴会図、車馬出行図、夫妻帳下の寝台に座す図、文武侍吏。	傾斜墓道多室塼アーチ形天井墓
山东省梁山漢墓	後漢後期	伏羲、鳳凰、庭院、厨房。	多室ドーム形天井およびアーチ形天井塼室墓
遼寧省三道壕漢墓	後漢後期	夫妻対座宴客図、厨房図、車馬出行図（男女主人出行）。	多室石板墓
遼寧省棒台子屯漢壁画墓	後漢後期	門吏門犬、楽舞百戯、車馬出行、邸宅厨房、日月雲気、主人寝台に座し宴会。	多室石板墓
遼寧省三道壕令支令張君墓	後漢後期～魏	夫妻帳下の寝台に座す図、厨房図、人馬図。	多室石板墓
遼寧省遼陽鵞房1号墓	後漢末期	日月、持経〔経書を持つ〕図、宴会百戯図、楼閣図、繋がれた馬の図、日本鹿。	多室石板墓

第Ⅲ章　中国古代墳丘墓の衰退－魏晋時期－

後漢末年、地方州郡は各々兵力を強めて互いに攻め合い、勢力は一方が没落し一方が繁栄し、最終的に魏呉蜀の三国鼎立の局面を迎えた。

曹魏は北方に地域を拡大し、洛陽を都とした。伝統的に曹魏は、220年の曹丕（魏文帝）が漢に代わって帝を称してから、265年に司馬炎（晋武帝）が魏に代わって晋を立てるまでの45年間である。西晋の滅亡は316年で、51年間である。曹魏、西晋は1世紀近く続き、主に3世紀に相当する。以下、曹魏と西晋の墓葬について、個別に論じる。

第1節　曹魏の墓葬

一般的に、曹魏の立国期間は短く、その墓制の前半は後漢墓に類似し、後半はまた西晋墓と混同しやすい。そのため峻別は非常に難しく、曹魏墓制の研究を困難なものとしている。これまでよく引用された資料は、1956年の洛陽澗西で発掘された正始八年（A.D.247）墓[1]などの少数の墓葬に限られた。近年、報告されたものとして、1951年の山東省東阿県魚山で発掘され、青龍元年（A.D.233）に修建された陳思王曹植墓[2]、陝西省西安市郭杜鎮で発掘された景元元年（A.D.261）墓、河南省安陽県西高穴村で発掘され、後漢建安二十五年（すなわち曹魏黄初元年（A.D.220））に葬られた魏武王曹操墓（高陵）[4]、および洛陽孟津三十里鋪で発掘され、太和二年（A.D.228）に葬られた壮侯曹休墓[5]がある。以上のいくつかのものは、年代が確定可能な墓葬である。これらの墓葬および比較検討によって、おおよそ曹魏時期に推定することができた墓葬は、この時期の墓制を研究するうえで新しい局面を迎えており、多くの研究者によって魏晋墓葬について研究を行われている[6]。

1　墓葬の概況

ここでは年代が明らかな墓葬を主に、曹魏墓の概況を紹介する（表３－１）。

A　河南安陽西高穴２号墓

封土をもたない。一条の傾斜した墓道を有する多室磚墓。磁北から110度の方向を向く。墓道・甬道（内側に墓門を設け、外側に厚さ1.45ｍの封門磚壁がある）、前室および南側室・北側室・後室および南側室・北側室からなる（図３－１、３－２）。全長は60m弱である。

墓壁の表面には石灰を塗布し、上下には数層にわたって鉄釘が打たれており、個別の釘穴には縄糸の痕跡が残っていることから、当時、墓壁には幕のような織物が掛っていたはずである。

墓室内には、３体の頭骨とその他の骨格が発見され、鑑定によって３個体に分別され、１体は

60 歳前後の男性、１体は 50 歳前後の女性、残りの１体は 20 歳前後の女性であるとされた。後室と２つの側室から発見された木棺などの葬具の状況から、男性墓主は後室後部、２体の女性は両方の側室に置かれていたものと推測できる。

盗掘によって、副葬品は墓内各所に散乱し、多くはすでに元の位置から離れている。金銀器・鉄器・銅器・玉石器・陶瓷器・骨器・漆木器、および水晶・瑪瑙・珍珠など約 400 点がある。

墓葬の地理的な位置、年代、出土文字資料（石牌）など副葬品と新たに付近で出土した後趙時期の魯潜墓誌や歴史文献を総合的に分析した結果、この墓の墓主は著名な歴史人物である曹操であり、後漢建安二十五年（A.D.220）に埋葬されたものとした。

２号墓の周囲は、垣壁を築いて陵園を形成する。平面は長方形で、北壁の長さは 100.8m、南壁の長さは 108.2m、東壁の長さは 68.8m、西壁は壊されている。東壁の外側には溝濠があり、２つの門道を設けている。

ほかにも文献記載によれば、曹操高陵には祭殿が立てられており、のちに文帝のときに取り壊された。『晋書』志第十・礼中には以下のような記載がある。

「魏武葬高陵、有司依漢立陵上祭殿。至文帝黄初三年、乃詔曰『先帝躬履節俭、遺詔省約。子以述父为孝、臣以系事為忠。古不墓祭、皆設设于廟。高陵上殿皆毁壊、車馬還厩、衣服蔵府、以従先帝俭德之志。』」（魏の武帝は高陵に埋葬された。官吏は漢に倣い陵うえに祭殿を建てた。文帝の黄初三年になって、文帝は詔していった「先帝は身につけるものから節倹し、省約することを遺詔とした。子は父の事績を受け継ぐことをもって孝となし、臣は良く仕えることをもって忠となす。かつては墓では祀りを行わず、みな廟を設けて行った。そのため、高陵にある祭殿は取り壊し、車馬は厩に帰し、衣服は宮廷に収め、先帝の倹德の志に従いなさい」と。）

B　河南孟津三十里鋪 44 号墓

墳丘をもたない。一条の傾斜した墓道を有する多室磚墓。磁北から 98 度の方向を向く。墓道･甬道･前室および南の２つの側室・北側室・東側室・後室からなる。全長は 50.6m である。合葬墓。

墓葬は盗掘され、副葬品は鉄器・銅器・金銀飾・土器などである。

後室から出土した「曹休」の銅印章によって、墓主は太和二年（A.D.228）に亡くなった壮侯曹休であることが確定した。

C　山東東阿魚山曹魏墓

1951 年に発掘されたが、資料の公表が遅れ、墓葬の形態については諸説がある。墳丘はないと見るべきである。形態は二室磚墓で、前室は方形、後室は不明である（図３－３）。前室には棺が 1 つ置かれていた。

墓葬は盗掘され、副葬品は鉄器・銅器・玉石器・ガラス器・土器の計 132 点である。

墓葬の地理的位置や出土した銘文磚など副葬品、文献記載から、この墓の墓主は、何度も封ぜられ、かつて鄄城王、雍丘王、東阿王となり、最後は陳王となった陳思王の曹植で、墓葬は青龍元年（A.D.233）に修建されたものである。

D　河南洛陽澗西曹魏墓

一条の傾斜した墓道を有する多室磚墓。墓道・甬道・前室および南側室・北側室・後室からなる。磁北から100度の方向を向く（図３－４）。

墓葬は盗掘され、副葬品は鉄器・銅器・玉石器・土器など計65点である。その中で最も重要なのは、まさに「正始八年」の刻銘の鉄帷帳架である。この紀年により、墓の年代が正始八年（A.D.247）もしくはやや後の時期であることが分かる。

E　陝西西安郭杜13号墓

一条の傾斜した墓道を有する前後二室の土洞墓。墓道（上部には階段を有する）・甬道・前室・後室からなる。磁北から182度の方向を向く（図３－５）。後室には木棺が置かれ、二人合葬である。副葬品は鉄器･銅器･土器など計20点である。その中で、鎮墓陶瓶には朱書きで「景元元年十二月」などの文字が見られる。推算すると、景元元年十二月は261年に相当する。

以上の５基の墓葬は年代が明確で、220年から261年までで、その中で年代の近いものは、わずかに数年から十数年のみで、河南・山東・陝西など隣接地区に分布する。曹魏40年余りの墓葬の状況は基本的にこのようにいえる。これ以外に、おおよそ曹魏時期と判断可能ないくつかの墓葬がある。河南新郷１号墓[7]（一条の傾斜した墓道を有する前後二室の墓）（図３－６）、河南偃師杏園村６号墓[8]（一条の傾斜した墓道を有する前後二室の墓で、前室は２つの側室、後室は１つの小側室がある）（図３－７）、西安郭杜13号墓のすぐ近くの14号墓（一条の傾斜した墓道を有する前後二室の墓で、前室は２つの側室がある）（図３－８）などである。

２　葬制総論

曹魏の帝陵はこれまで発見されていない。上述の８基の墓はすべて前・後の主要墓室を有する二室墓で、その中でも安陽西高穴２号墓は魏武王曹操墓、東阿魚山墓は陳思王曹植墓、孟津三十里鋪墓は壮侯曹休墓とされている。その他の墓の墓主は不明であるが、墓葬の形態と規模から見て、すべて大中型墓の範疇に属する。ここでは墓葬等級の細分はせず、おおよそ大中型墓を例として、曹魏の墓制を分析する。

曹操墓を曹魏墓制の中に入れて議論するわけは、第一にこの墓は曹魏が漢に取って代ったその年にあたり、曹操の死の時期は名義上、後漢紀年に属していたが、実質的にまさに曹魏が自立する前夜にあたるためである。第二に、曹操は事実上、曹魏の墓制の開拓者であるためである。この点はのちに言及する。

以下、地面施設、墓葬の形態、副葬品の三方面から論述する。

（１）地面施設

前漢・後漢の墓制は、ともに地面施設を極めて重視した。たとえば、墳丘・陵園・陵寝建築などである。後漢になると、墳丘の傍らに神道を敷き、石獣を置くことが流行する。ただし、上述の曹魏墓葬は、曹操墓で陵園が発見されたのを除き、関連する地面の施設はいまだ発見されていない。

漢代を通じて最も普遍的で、また被葬者の等級・身分を視覚的に体現していた墳丘も、もはや保留にはできず、まさに「不封不樹」であった。地面施設の有無は、墓葬制度の大局と関わり、魏晋墓制と漢代墓制を区分する重要な特徴である。

（２）墓葬形態

既知の曹魏の大中型墓から見ると、一条の長い傾斜した墓道を有する二つの主要墓室の前後室墓であり、側室がないもの（東阿魚山墓、新郷１号墓、西安郭杜 13 号墓）、前室に２～４室の側室をもつもの（孟津三十里鋪 44 号墓は４室、洛陽澗西墓は２室、西安郭杜 14 号墓は２室）、前後室ともに側室を有するもの（安陽西高穴２号墓は前後室にそれぞれ２室が伴う。偃師杏園村６号墓は前室に２室、後室に１室が伴う）がある。墓室はほとんどが磚室で、前室が磚室、後室が土洞のもの（偃師杏園村６号墓）、全体が土洞のもの（西安郭杜 13 号墓、14 号墓）もある。

墓室の平面形から見ると、前後２つの墓室がともに方形、もしくは方形に近いのは安陽西高穴２号墓のみで、東阿魚山墓は前室は方形だが、後室は不明である。前室は方形もしくは方形に近く、後室が長方形であるのは、新郷１号墓、洛陽澗西墓、西安郭杜 13 号墓、14 号墓の４基がある。前後室がともに長方形なのは孟津三十里鋪 44 号墓と偃師杏園村６号墓の２基で、そのうち前者は前室が横列式である。

墓室の立体形から見ると、おおよそ平面が方形もしくは方形に近いものの墓室は、四角寄棟形もしくは丸天井で、墓室が長方形のものは、多くが弓なり形で、新郷１号墓のみ、長方形の後室が四角寄棟形である。

葬具はすべて木棺で、長方形である。棺の痕跡を残すものもあり、棺蓋を固定するための鉄釘のみを残すものもある。釘の長さは６～ 20cm。墓内は多くは２～３人の合葬である。

洛陽澗西曹魏墓からは９点の鉄質の帷帳の部品が出土した。出土したのは、前室の傍らであるが、当時、帷帳は後室の木棺うえに張られていたはずである。そのため盗掘時に位置が移動したのである。安陽西高穴２号墓の後室南北側室内には木棺の四周に鉄質の帷帳の部品が見つかり、帷帳は元来棺上に被せてあったことを物語る。このほか、この墓の前室と後室の壁面には数層にわたって鉄釘が残っており、前室の釘端は円孔状で、後室の釘頭は鉤状である。前室の釘穴には縄糸痕跡が残っていたことから見て、これらの鉄釘は、墓室の壁に幕のような織物を掛けていた可能性がある。幕には各種の図案が描かれ、掛けることで壁画と同じようなものであったかもしれない。この墓の後室内で帷帳の部品が発見されたかは分からないが、もし見つかっていないのであれば、後室内に木棺が置かれ、そのほかでは帷帳が壁に鉄釘で掛けられていたかもしれない。

後漢後期の大中型墓葬の形態と比較し、曹魏の墓葬形態は根本的に変化した。主に以下のような点が挙げられる。

ⅰ：墓葬はより深いところに築かれ、傾斜した墓道もそれに伴い長くなった。墓道壁には階段が多く設けられ、階段の数は墓葬の深度、墓道の長さと正比例する。このような現象が生じた原因

は、墓制全体の変化にある。すなわち、後漢の大中型墓の墓室の上面には高くて大きな墳丘が築かれ、下面の墓室を保護していたため、墓坑を深く掘る必要はなかった。曹魏の墓葬は「不封不樹」のため、墓室はより深いところに築かれた。

ⅱ：墓葬の規模は全体的に小さくなり、墓室の数の減少や形態・配置の簡略化において具体的な変化が表れている。

後漢の王墓はすでに８基が発見され、絶対多数は回廊を有する前・後室の磚石墓で、前・中・後室の３室の磚墓もある。諸侯墓と判別できたものは少ないが、主に前・中・後室の磚石墓である。二千石官吏の墓に識別されたものは10数基で、２種類の形態・配置のものがある。１つは前・後室、もしくは前・中・後室の多室墓で、後室が並列した２、３室の墓室のものもある。もう１つは、前・後室、もしくは前・中・後室があり、中・後室の三面が回廊を取り囲んだ回廊多室墓で、後室が並列した２室の墓室のものもある。全体的に見て、二千石官吏の墓は主に回廊をもたない多室墓で、おもな墓室の数は２～５室で一定せず、３室が最も流行する。

曹魏の墓葬で墓主の身分が判明しているのは曹操墓、曹植墓、曹休墓の３基のみである。前二者は王墓で、後漢の王墓と比較して、回廊制が完全になくなっているのみならず、主要な墓室は３室から２室となっている。後一者は諸侯墓で、後漢の諸侯墓と比較し、墓室の数も減少している。曹魏王侯墓は、甚だしきに至っては、後漢の二千石官吏や地方豪族の墓葬よりも墓室の数は少なく、規模も大きくはない。

ⅲ：曹魏の大中型墓の墓内装飾は簡略化の傾向にあり、墓壁を装飾した壁画や画像石が発見されていない。後漢後期の諸侯や二千石官吏は、普遍的に壁画墓や画像石墓を採用していた。

ⅳ：後漢後期の墓と比較して、曹魏の墓の平面形状にも変化がある。後漢後期では、王・侯・二千石官吏的大型墓は勿論、中型墓においても、基本的にすべて横前室（二室墓の前室、もしくは多室墓の中室）の形態を採用した。ただ少数の墓の墓室のみ方形に近いものである（内蒙古ホリンゴル漢墓など）。これに対し、曹魏の墓の前室の多くは方形もしくは縦長方形で、後室は縦長方形か方形で、後漢と比べ、全面的な顕著な変化が生じ、かつこうした変化は曹操墓より始まる。5、後漢後期には多人数、数世代の合葬が流行し、横前室・並列後室墓はまさにこうした合葬の需要に適応したものである。曹魏では多くとも２・３人の一代合葬で、合葬の風習の変化は墓室の減少や形状の変化の原因の一つである。

曹魏の皇帝陵墓はいまだ発見されていない。王の曹植は、その墓葬形態には疑問点が存在し、その他の墓は、曹休墓が明確な諸侯級であるのを除き、墓主の身分は明らかでない。このため、現有の墓葬資料で曹魏墓の等級標準と等級秩序を区別することはなお困難である。ただし、単に墓葬形態からいえば、墓主の等級の高低は、墓室の大きさ、深度、墓道の長さおよび墓室・墓道の階段の数などおおよそ正比例する。

現有資料から、墓葬形態からおおよそ曹魏墓葬の変化過程を見ることができる。高等級の墓は曹魏初頭の墓室（もしくは前室）は、曹操墓（A.D.220）と曹植墓（A.D.233）のように、方形であり、

そのほかの大中型墓は、曹魏前期は、曹休墓（A.D.228）と河南新郷１号墓のように、前室はすでに方形であるけれども、横前室の特徴が残存している。おおよそ曹魏中期からは、洛陽澗西曹魏墓（A.D.247）、西安郭杜 13 号墓（A.D.261）、14 号墓、偃師杏园園６号墓のように、墓葬の前室はすべて方形に近い形かスムースな長方形となる。

（３）副葬品

地面施設と墓葬形態の急激で徹底した変化と比べ、副葬品の変化は緩やかである。後漢後期に流行した土器は曹魏の墓葬にも見える。たとえば日用土器の鼎・罐・壺・盆・案・奩・盤・碗・勺・耳杯・灯など、模型明器の倉・灶・井戸・鶏・鴨・鵞鳥・犬・猪圏などである。ただし、同時に新たな器物や器形も出現する。双沿罐・空柱盤・侍俑・武俑などである。これらの変化過程は、西晋時代まで持続する。

（４）小　結

以上の分析から見て、曹魏墓は地面施設の消失と墓葬形態の変化は急速で徹底したものであり、かつその変化は、曹魏の紀年に入る前の曹操の時期に始まった。これは、新しい墓制の成立は自然発生的なものではなく、深い歴史的な要因があり、王朝交代という大きな背景があったものと概括できる。文献の記載を引用すれば、すなわち歴史的背景とその過程を明確に説明できる。

後漢末年、群雄が蜂起し、中原の覇を争った。曹操は建安元年（A.D.196）に献帝を許に迎え、天子を従わせて諸侯に号令し、後漢政権は名ばかりのものとなり、実質的に滅亡した。曹操はあちこちに征戦し、北方を統一する過程で、当時の貧弱化した社会現状に対し、一連の改革を行った。政治方面では官制を改革し、司法制度も改革し、経済方面では屯田を実行し、文化教育方面では県学を起こし､民俗方面では厚葬を禁止し､風俗を改めた。かつ政令の形式をもって頒布実行した。『三国志』魏書一･武帝紀には次のような記載がある。

曹操が建安十年冀州を平定したのち、「令民不得復私讎、禁厚葬、皆一之于法。」（民は個人的な復讐をしてはならず、厚葬を禁じ、すべてを法に統一する）」

同じ年にさらに次のように命じた「……吾欲整斉風俗……」（…私は風俗を正したい…）

曹操が死ぬ２年前の建安二十三年六月、命令していった「古之葬者、必居瘠薄之地。其規西門豹祠西原上為寿陵、因高為基、不封不樹。周礼冢人掌公墓之地、凡諸侯居左右以前、卿大夫居後、漢制亦謂之陪陵。其公卿大臣列将有功者、宜陪寿陵、其広為兆域、使足相容。」（古の埋葬は必ず瘦せた地に行なった。西門豹（戦国時代の魏の臣）祠の西の高原に寿陵を計画し、高地を利用して基礎とし、土盛りをせず樹も植えない。『周礼』においては、冢人が公墓地を管理し、すべて諸侯の墓を前方に置き、卿・大夫の墓を後方に置いた。漢の制度には、それを陪陵と呼んだ。公卿・大臣・将軍のうち功有る者の墓を寿陵に随従せしめるべきである。従って、それらを十分包含し得るよう、墓域を広大にせよ。）

建安二十五年となり、「庚子、王崩于洛陽、年六十六。遺令曰『天下尚未安定、未得遵古也…斂以時服、無藏金玉珍宝。』謚曰武王。二月丁卯、葬高陵。」（庚子のとき、王は洛陽で崩御した。六十六歳であった。遺令では「天下はまだ定まっておらず、古いしきたりに従うことはできない。…遺体は平服で埋葬し、金銀や珍しい宝を納めてはならない」といわれた。武王といい、二月丁卯に高陵に葬られた。）

裴松之の『魏書』を引用した注には、「及造作宮室、繕治器械、無不為之法則、皆尽其意。雅性節倹、不好華麗……常以送終之制、襲称之数、繁而無益、俗又過之、故預自制終亡衣服、四篋而已。」とある。

曹操墓の発掘状況は、上述の文献記載と一致する。墓葬そのものおよび文献記載からみられることは、曹操が倹約を主張し、厚葬を禁止した思想と作法は一貫しており、それは主に次のような点に現れている。

・数百年にわたり行われた墳丘墓制をやめ、地表上に墳丘を設けず、すなわち「不封不樹」である。
・地下の墓葬形態に規制を加え、後漢の王が普遍的に用いた回廊墓制をやめさせた。諸侯・二千石官吏・地方豪族が普遍的に用いた３室の主要墓室を設けた埋葬形態を省略化させた。そして前・後２室の墓室構造のものを採用させた。
・後漢晩期に流行した横前室墓制を改め、前後墓室の平面形状を方形に近い形にした。
・画像石や壁画で墓壁を装飾するのをやめさせた。
・地面上に墳丘を築かせず、墓室埋葬はより深くなり、墓道を長くさせ、階段を設けた。
・玉衣を用いず、遺体は平服で埋葬し、前漢・後漢 400 年余りの玉衣葬制を止めさせた。
・金玉珍宝を埋葬せず、副葬品は土器を主とし、少量の鉄器・銅器・玉石器を用いた。

これらは曹魏墓制のおもな変革が曹操のときに大体完成していたことを物語っている。

曹操墓は、その生活の後漢末年の墓葬全体の状況と比較して、根本的な変化が発生し、かつその変化は偶然に出現したわけではない。それは曹操力行した旧社会・旧制度への改造の必然的な結果であり、上述したような「（曹操）及造作宮室、繕治器械、無不為之法則」を表している。彼は「送終之制」に対して、「為之法則」をしたわけである。同時に、曹操墓は後漢墓との間にも関係があり、地面上に陵園を設け、祭殿を建て、陪塚墓域を規画するあり方は、すべて漢墓の制度を継承したものである。曹操が晩年に居住したのはやや北にある鄴城で、その墓葬の前・後室がともに方形の四角寄棟形の構造をしているのは、かすかに陝西北部から内蒙古南部一帯の後漢後期の墓葬の影響を見ることができる。たとえば、陝西神木大保当漢墓９や内蒙古ホリンゴル漢墓などである。

曹丕は漢に代わって自立したのち、喪葬上における葬送の薄葬制度をより強化した。

『三国志』魏書二・文帝紀では、曹丕が黄初三年（A.D.222）に終制（自身の葬送についての託け）を述べた「…封樹之制、非上古也、吾無取焉。寿陵因山為体、無為封樹、無立寝殿、造園邑、通神道。夫葬也者、蔵也、欲人之不得見也。骨無痛痒之知、冢非栖神之宅、礼不墓祭、欲存亡之不黷也、為棺槨足以朽骨、衣衾足以朽肉而已。故吾営此丘墟不食之地、欲使易代之後不知其処。無施葦炭、無蔵金銀銅鉄、一以瓦器、合古塗車、芻霊之義。棺但漆際会三過、飯含無以珠玉、無施珠襦玉匣、諸

愚俗所為也。…自古及今、未有不亡之国、亦無不掘之墓也。喪乱以来、漢氏諸陵無不発掘、至乃焼取玉匣金縷、骸骨並尽、是焚如之刑、豈不重痛哉！禍由乎厚葬封樹。…其皇后及貴人以下、不随王之国者、有終没皆葬澗西、前又以表其処矣。…若違今詔、妄有所変改造施、吾為戮尸地下、戮而重戮、死而重死。臣子為蔑死君父、不忠不孝、使死者有知、将不福汝。其以此詔蔵之宗廟、副在尚書、秘書、三府。」と。

上記の文章を分析すると、曹丕の葬制に関する規定を知ることができる。

・地上には「不封不樹」であるのみならず、寝殿を建てることや園邑を築くこと、神道を通すことも禁止した。

・地下の墓室・棺槨を簡略化した。

・玉衣を禁止した。

・副葬品は土器を主とした。

・合葬しないことを良しとした。

これらの規定は、基本的に曹操の時代にすでに創出されたもので、曹丕は、その中でいくつかの点を強化し、国家の政令の形式で頒布した。曹魏墓葬制度の正式な確立を特徴づけている。

曹魏の葬制変革の原因は、上述の曹丕の終制に反映されており、研究者も多く論究している。ここで強調したいのは、経済・喪葬観念などの方面の原因以外に、最も重要なのは当時の政治における原因である。すなわち曹操の時期から、まさに新しい王朝を建てる下準備を行っていた。新王朝に適応するため、新しい礼制の設定が求められ、喪葬礼制はまさに新しい礼制の一部分だったのである。

以前は、識別可能な曹魏墓葬資料は大変少なく、研究者は一般に当該期の墓葬は、まさに漢墓と晋墓の間の過渡的な形態とみられており、曹魏墓制に対する認識不足という状況であった。曹魏墓葬資料の増加に伴い、現在においてはこうした見方や状況は変わるべきである。曹魏墓制は、王朝交代という政治的な需要に適合したものであり、当時の経済・民俗等の現況に基づき、また盗墓の盛行という歴史的な教訓を鑑み、さらに曹操本人の性情や好みなどの要素も加わり、曹操によって始められた築かれた一連の後漢墓制とは完全に異なる新たな墓制であった。これは歴史的な必然性と偶然性が合わさったのちに生み出された結果である。このような認識から、西晋墓制はまさに曹魏墓制の継承を基礎として変化したものと見るべきである。墓制についていえば、魏制は漢制に対しての転覆で、晋制は魏制に対しての継承と改造ということができる。

後漢の献帝と夫人はともに魏の時代に亡くなった。献帝（山陽公）は青龍二年（A.D.234）に亡くなった。『後漢書』孝献帝紀には、

「以漢天子礼儀葬于禅陵、置園邑令丞。」（漢の天子の礼儀をもって、禅陵に埋葬し、園邑令丞を置いた。）

とある。献帝夫人は景元元年（A.D.260）に亡くなった。『三国志』魏書四·三少帝紀には、

「及葬、車服制度皆如漢氏故事。」（葬儀を行うにあたり、車服制度はすべて漢氏の故事の如く行った。）

とある。ここで、献帝と夫人の葬儀は漢礼を採用することを強調したのは、まさに曹魏はすでに漢礼を採用しないことを物語った。

第２節　西晋墓葬

西晋は265年に魏に代わって王朝を樹立し、316年に滅んだ。都は洛陽に置いた。そのうち、304～306年は、張方が惠帝を脅迫して長安に連れ去り、晋末の313～316年には愍帝は長安に遷都した。

１　墓葬概況

西晋墓葬は、都城の洛陽を中心とした中原地区と南京を中心とした江浙地区での発見が比較的多い。

まずは西晋帝陵の考古学的発見を紹介する。これらは、西晋の喪葬等級制度を理解するうえで重要な意義がある。

（１）皇帝陵

洛陽故城東から出土した荀岳墓誌と左棻墓誌を手掛かりにして、踏査・ボーリング探査・発掘と研究を経て、文帝（司馬昭）崇陽陵と武帝（司馬炎）峻陽陵の地理的位置、陵区の墓葬の分布と形態が確認された[10]。

Ａ　文帝崇陽陵

洛陽故城より東の邙山の南麗に位置する。ボーリング探査では５基の墓葬を確認し、いずれも南向きの長くて広い傾斜した墓道を、もつ土洞墓である。その中で、１号墓は墓地の最も東に位置し、規模は最大で、墓道は長さ46m、幅11m、墓室は長さ4.5m、幅3.7m、高さ2.5mで、文帝の崇陽陵と推測される。そのほかの４基の墓は南北の２列に分かれ、１号墓の西にあり、規模はすべて１号墓より小さい。崇陽陵の陪葬墓と見るべきであろう。

墓地の東・北・西の３方向には、ボーリング探査で発見した版築土壁垣があり、平面形は北が短く南が長い台形の陵園がある。南壁のみ存在しない。東壁は約384m、北壁は約80m、西壁は約330mである。これ以外にも２か所で陵園と関係した建築遺構が発見されている（図３－９）。

Ｂ　武帝峻陽陵

崇陽陵より西に約３㎞の邙山の南麓に位置する。陵区には、23基の墓葬が集中して分布する。墓はすべて南を向き、長くて広い、階段を備え傾斜した墓道を、もつ土洞墓である。配列は順序をもち、配置も整然としている。その中でも１号墓は陵区の東南部にあり、おおよそほかの墓葬から独立し、規模も最大で、墓道は長さ36m、幅10.5m、墓室は長さ5.5m、幅３m、高さ２mである。これこそは、武帝の峻陽陵である。そのほかの22基の墓は陵区西北部に所在し、南北に４列に並んで配置されている。規模は１号墓よりも小さく、帝陵の陪葬墓である（図３－10）。

陵園遺跡は、ボーリング探査では発見されていない。

（２）そのほかの墓葬

ここでは２つの大きな地域で区分し、すなわち洛陽を中心とした北方地域と南京を中心とした南方地域であり、西晋墓葬の全体的な状況を把握する。

Ａ　北方地域

歴年来の都城である洛陽城の周辺で、現在の洛陽市区およびその周辺の偃師 11、孟津 12、新安 13 などでは比較的多くの西晋墓葬が発掘されている。また河南省の鞏義 14、鄭州、新郷 15、南陽 16 などでも発見がある。これ以外にも、陝西、山西、山東、河北省や北京市でも報告があり、特にこれらの中には一部の紀年墓も含まれ、西晋墓葬の特徴を確定するうえで、重要な役割を発揮する（表３－２）。

言及すべきは、甘粛省武威、酒泉、嘉峪関、玉門、敦煌など河西回廊一帯および青海省の一部の地区では大量の魏晋十六国時期の墓葬が発掘されていることである。遼寧省の朝陽、錦州、遼陽、瀋陽などでも、少なくない魏晋十六国墓葬が発見されている。各種の要因により、西北地区と東北地区の魏晋十六国墓葬は、中原地区の墓葬とは共通した点とともに、独自の特色も形成している。ただここでは、詳しく議論はしない。

墓主の身分・等級に関しては、はっきりとした例が大変少ない。そのため、ここでは大まかに大中型墓と小型墓の２つに大別する。

ｉ　大中型墓

一条の傾斜した墓道をもつ、多室墓もしくは単室墓である。多室墓には、前後二つの主要墓室をもった双室墓が主流で、ほかにもごく少数、前中後の三つの墓室を有した三室墓もある。墓室には、磚室、磚室と土洞を合わせたもの、ならびに土洞の三形式が存在する。

①　三室墓

北京順義で２基（M3、M5）発見されているのみである。この２基とほかの６基の墓が同一墓地に共存する。ほかの６基のうち、１基は単室墓、５基は双室墓である。これら８基の墓葬はすべて南を向き、配列は整然とし、規模において差異がある以外は、用いた墓磚や墓室の平面・立体構造は類似し、M8 より出土した磚銘「泰始七年（A.D.271）夏四月作磚」より、これらの墓葬の時期は西晋初期であることが分かる。

２つの墓は、ともに傾斜した墓道･甬道･前室･中室･後室から構成される。その中で M3 の前室（2.62 × 1.68m）と後室（2.8 × 1.05m）の平面形は、縦長方形であり、中室（1.7 × 1.7m）の平面形は正方形である。３つの墓室の西壁は一直線上にあり[17]（図３－11）、墓室の頂部は四角寄棟形もしくは「人」字形である。中室と後室にはそれぞれ１棺が置かれる。

②　双室墓

双室墓の前室と後室の平面形状は異なることから、墓葬全体の視覚上の差異を形成し、墓室の平面形状はまた、往往にしてその立体構成と関連している。そのため、これに基づき、双室墓を次の４型に分類できる。

Ⅰ型－横前室双室墓　ごく少数、事例がある。山東滕州元康九年墓のように、横前室の幅は後室の幅よりわずかに広い。この墓は竪穴土坑画像石室墓で、南を向き、板状の石を積み上げて構成し、前室には２つの耳室がある。前室・后室の頂部はいずれも積み上げによって方形の藻井（装飾板をはめ込んだ折上げ天井）を築いている。前室の南壁、横額と頂蓋６点の画像石を共用する[18]（図３－12）。ほかにも、山東蒼山晋墓は、後漢の画像石墓の墓室を利用したとされている[19]。

Ⅱ型－前後が縦長方形の双室墓　非常に少ない。河南鄭州晋墓のように、西向きで、墓道・甬道・前室・後室から構成され、前室と後室はともに縦長方形である。前・後室内にはそれぞれ一つの棺を置く（図３－13）[20]。

Ⅲ型－前方形後長方形双室墓　この形式は、双室墓の中で最もよくみられる種類のもので、北方各地でくまなく分布している。一般に前室は方形もしくは方形に近く、後室は縦長方形、前室に側室が伴うものもある。

洛陽およびその周辺地区、および陝西西安地区のこのタイプの墓葬は、一般には前室はきれいな方形で広くて大きく、後室は狭くて長く比較的小さい。洛陽 HM719 のような例は、磚室墓で、前室は２つの側室をもつ[21](図３－14)。洛陽永寧二年墓は、土洞墓で、前室には１つの側室を伴う[22](図３－15)。

山東境内のいくつかの墓葬は、前室がやや小さく、後室が前室と幅が同じかやや広いのが特徴である。鄒城永康二年劉宝墓[23]（図３－16）や臨朐咸寧三年墓[24]（図３－17）はこうした特徴をもつ。北京順義晋墓は、前述のように、前室、後室の一壁面は、一直線上にある。M2（図３－18）はまさにこうした例である。

Ⅳ型－前後方形双室墓　洛陽とその周辺地区、および陝西西安地区で流行する。前後二室はともに、方形もしくは方形に近い形態である。偃師杏園村 34 号墓は、前室が土洞、後室がドーム型の磚室である[25]（図３－19)。洛陽谷水 FM4 のような例は、前後室ともにドーム型の磚室で、前室には１つの側室が伴う[26]（図３－20)。

③　単室墓

一般的に、墓道・甬道（内側に石門を設けるものもある）・墓室から構成される。墓道と墓室の平面形状から、３型に分類される。

Ⅰ型－墓道が墓室よりも幅広い単室墓　長く傾斜した墓道が、墓室よりも幅広く、墓道の両側には階段があり、多くは５段か７段である。墓室は縦長方形で、多くはアーチ型の土洞で、磚室のものもある。

こうした墓葬の形態は大変独特で、現有の資料の中では、崇陽陵・峻陽陵とその周辺に主に分布していることが知られており、帝陵や帝陵の陪葬墓に属するものである。崇陽陵区のボーリング探査で見つかった５基（そのうち M4、M5 はすでに発掘済み）（図３－21)、峻陽陵区のボーリング探査で見つかった 23 基、偃師市首陽山鎮で発掘された３基（02YXM1、02YXM2、08YXM4）[27]（図３－22）などが挙げられる。このほか、孟津三十里鋪 M120 もこの形態である[28]。

Ⅱ型－墓道が墓室より狭い方形単室墓　墓道の多くは傾斜式で、竪井式のものもある。傾斜した墓道の両壁には多くの段の階段が伴う。墓室の多くは、ドーム型の方形、もしくは方形に近い形態の磚室もしくは土洞のものである。墓室に１～２の側室、あるいは仮側室が伴うものもある。磚室墓の例に洛陽の元康九年徐美人墓（図３－23）が挙げられる。土洞墓の例として、洛陽厚載門街CM3032[29]（図３－-24）が挙げられる。

Ⅲ型－墓道が墓室より狭い長方形単室墓　墓室は土洞のものと磚室のものがある。洛陽孟津三十里鋪 M117 は磚室墓である（図３－25）。北京地区で見られるこの種類の墓葬の墓道の多くは、墓室の片側に偏っている。M7（図３－26）が挙げられる。

ⅱ　小型墓

洛陽で、いくつかの小型の竪穴土坑墓が発掘された。土坑の面積は約３㎡で、棺は陶棺のもの（M51[30]）（図３－27）、磚で積んだ棺のもの、木棺のものの３種類がある。棺を用いない墓もあり、直接埋葬する。このほか、蘇華芝墓のように、墓道を有するが、土洞墓室が長さ 2.2m、幅 1.3m、面積は 3㎡未満のものもあり、小型墓に属する[31]（図３－28）。

Ｂ　南方地域

西晋墓葬は南方の江浙一帯に発見が多い。その中でも南京地区が最も集中する。このほか、湖北・湖南・安徽・江西・福建・雲南などでも発見されている。北方と同じように、南方の西晋墓でも一部の紀年墓が含まれる（表３－３）。

南方の西晋墓では、双磚室と単磚室の両種が常見され、大中型墓葬に属する。三室墓もわずかに発見され、江西靖安虎山西晋墓[32]（図３－29）などが挙げられる。

双室墓は一般に、前室は方形もしくは方形に近い形態で、後室は縦長方形、墓室の頂部は多くがドーム型（北方地域のⅢ型双室墓とほぼ同じ）である。墓の例として、宜興晋墓の１号墓[33]（図３－30）と４号墓[34]（図４－31）などがある。北方地域と異なるのは、双室墓の後室の幅が前室の幅に接近するか同じで、甚だしいものは前室より大きくなる。こうした墓葬形態は東呉の時期にはすでに存在し、著名な安徽馬鞍山朱然墓[35]（図３－32）などがあり、明らかに両者の間には継承関係がある。こうした双室墓の形態は山東地区の西晋墓にも影響を与え、諸城１号（太康六年）墓[36]や臨朐咸寧三年墓などが挙げられる。

双室墓には個別の横前室墓もあり、浙江と福建で発見されている。

単室墓の墓室は一般に縦長方形で、甬道全体と合わせ、平面形が「凸」字形を示す。南京江寧上湖 M1[37]（図３－33）が挙げられる。個別の墓室が方形のものもあり、湖南安郷光熙元年（A.D.306）劉弘墓[38]（図３－34）が挙げられる。この墓は、墓室の四壁に沿って帷帳が掛けられている。

２　葬制総論

地面施設・墓葬形態・副葬品の三方面から論述する。

（１）地面施設

北方地域において、洛陽およびその周辺では多くの晋墓が発掘され、皇帝陵も含め、墳丘など地

面施設は発見されていない。山東と北京では、いくつかの墓葬で墳丘の存在の可能性が報告されているが、多くは確認に至ってはいない。目下のところ、墳丘が伴う西晋墓は１例が確定しているのみで、すなわち山東鄒城永康二年劉宝墓である。この墓の墳丘は版築で築かれ、直径は 40m に達し、高 12.4m である。ただし、墳丘中より、後漢後期の画像石残片が発見されたことから、後漢墓の墳丘を再利用した可能性も排除できない。

南方地域においては、発掘簡報で墓上の封土の状況を報告しているが、多くは詳しい説明がない。南京将軍山西晋墓は、発掘前は直径約 20m の封土が残っており、最も厚い個所で約 2m の封土が見られた[39]。さらに宜興晋墓は平地上に墓室が修建され、その後、封土を覆いかぶせる方法で構築された。このため、南方地域の西晋墓の一部に墳丘が存在したといえるか否かは、高いとはいい切れない。

（２）墓葬形態

北方地域の西晋墓は、墓道の多くは長い傾斜式で、階段が伴うものもある。双室墓と単室墓が流行し、墓室は深くに埋められた。墓道と墓室は非対称的なものが常見される。すなわち、墓道がおおよそ墓室の片側に偏っている。双室墓においても、２つの墓室の配置が非対称的なものがある。すなわち、前室がおおよそ後室の片側に偏り、甚だしきに至っては、前室と後室の一壁面が一直線上に存在する。墓室の中には、整った形をしておらず、台形を呈するものもある。墓室の壁の多くは弧形で、墓室の四角の多くは角柱が設けられ、墓室壁に斗栱や壁龕を築くものもある。

少数の墓葬の中には、墓室内に棺床を築くものもあり、棺床上には木棺が置かれた。洛陽元康九年徐美人墓は墓室の片側に二層の磚で高められた棺床が築かれている。洛陽澗西 16 工区 82 号墓も棺床が築かれ[40]、西安地区の晋墓にも同様なものが見られる。

洛陽およびその周辺地区と陝西西安地区では、墓葬形態において強い共通性がある。また、山西・山東・北京などの地区では、地方的な特色が表れている。

山西太原尖草坪晋墓は、墓道と甬道の間に過洞と竪井を設置し、非常に数少ない構築法のものである[41]。北京石景山区八角村墓は、前室の片側に石板で囲んだ石龕を築き、龕内壁と頂部に壁画を描く特殊なものである[42]。

墓葬の合葬の情況について、単室墓のうち崇陽陵 M4、M5 は単人葬で、偃師首陽山で発掘された４基の帝陵陪葬墓も単人葬である。このほか、帝陵陪葬墓に属し、墓誌碑が見られる荀岳墓・左棻墓・羊瑾墓・何楨墓などは単人葬である可能性が高い。洛陽衡山路 DM115 は室内に１体の人骨があり、１つの側室には２体の人骨があった。これは単室墓合葬の例である[43]。双室墓にも、単人葬があるのを除き、河南鄭州晋墓には、前・後室それぞれに１点の木棺が置かれている。河南鞏義站街晋墓の後室にも２点の木棺が並べて置かれ、偃師杏園村 M34 前室には１棺が置かれ、後室には２棺が置かれている（一男一女が納められている）。洛陽 HM719 は銘文磚から裴玄治とその１人の息子と１人の娘を納めた合葬墓であることが知られている（前室の２つの側室内に置かれて

いる)。これらはすべて、双室墓合葬の事例である。50 年代は洛陽で発掘された 54 基墓葬のうち、三人合葬は１基、二人合葬は８基、単人葬は 18 基である。

以上の墓の例を見て見ると、単室墓、双室墓に関わらず、いずれも単人葬も２人、３人の合葬が存在する。その中で２人の合葬は多くが夫婦のはずであり、２人以上の合葬は家族のはずである。父と早世した子女を合葬したものが多く見られる。

この時期の木棺の形状・色調について、実物資料から言及する。

洛陽谷水 FM4 の前室の側室には１点の陶棺が置かれ、片側が大きくもう一方が小さく、平面はおおよそ台形である。長さ 0.9m、幅 0.21 ～ 0.27m、高さ 0.27m[44]（図３－ 35)。洛陽 HM719 前室の２つの側室には、ともに陶棺の板が残され、平面形状は同様に台形である。洛陽華山路 CM2348 の甬道には１点の陶棺が置かれ、片側が大きくもう一方が小さいのみならず、高さも一致しない。長さ 0.79m、幅 0.194 ～ 0.254m、高さ 0.21 ～ 0.24m である[45]（図３－ 36)。洛陽谷水 FM5 の墓室には２点の木棺の痕跡が残り、平面はともに台形である。１点は長さ 2.04m、幅 0.44 ～ 0.5m、もう１点は長さ２m、幅 0.4 ～ 0.5m である[46]。棺木の痕跡が台形である例は、西安地区の晋墓でも見られる[47]。また、長方形の棺が見られる例もある。洛陽 C1M8632 の墓室には１体の人骨以外に、１点の陶棺もあり、長方形である。長さ 0.9m、幅 0.3m、高さ 0.28m で、子供の人骨が納められている[48]。北京西郊永嘉元年華芳墓の木棺も長方形で、長さ 2.6m、幅 0.8m、高さ 1.1m で、棺蓋の長さは 3.1m である[49]。

上述の陶棺の形状と墓に残存した木棺の痕跡、出土した棺釘の状況から理解して、西晋墓においては普遍的に漆木棺が使用され、木棺の形状は少なくとも長方形と台形の２種類があり、平面が台形の木棺は、高さは一方が高くもう一方が低いものもある。陶棺は小児専用である。

偃師首陽山六和飼料厂 M4 では、木棺に塗られた黒漆が残存している。こうした状況は、西安や北京の晋墓でも見られる。北京西郊永嘉元年華芳墓では、木棺に黒漆皮が残存している。

墓よりまれに、銅質帷帳の部品が出土することがある。河南新安西晋墓（C12M262）では、８点の部品の出土位置から見て、当時の帷帳は木棺の上方に張っていた（図３－ 37)。帷帳は長方体で（図３－ 38)、長さはおおよそ棺長より長い。幅は棺よりもやや長いであろう。このほか、多くの墓より陶質の帳座に相当するものが出土している。獣形のもの、方形・円形で素面のものがあり、座の中央にはいずれも円形・方形の孔が開いている。洛陽北郊西晋墓では、一組４点の陶座が出土している。墓室における出土分布から見ると、おおよそ長方形の空間を囲っており、さらに他の副葬品の位置から見て、この位置には元来、棺が置かれていたとみられる。この空間内に鉄鏡１枚が残り、鏡類の多くは棺内に置かれたからである。またこの空間の外側には２点の陶槅があり、この棺の前には、陶槅を始めとした土器の器皿を置くことができる場所であった。上述の２例の資料から、帷帳は木棺の上に掛けられていたと推測できる。当然ながら、多くの墓から出土した陶帳座は一組４点にならなく、かつ置くのは凌乱している。実際に帷帳を掛けるのに用いられたのではなく、象徴的な意味があったのみかもしれない。

南方地域の西晋墓でも、同様に双室墓と単室墓が流行する。ただし、墓室はあまり深くには埋まっておらず、墓道も長くはなく、階段も伴わない。一般に墓道と墓室は対称的に配置され、墓室は整然としている。墓室壁はまた、弧形を呈し、墓室壁には仮窓格子が設置され、墓室の曲がり角に灯台を設置する。双室墓の前室と単室墓内には積み上げ式の１基の祭台が築かれることが流行し、2基築くものもある。単室墓と双室墓の後室には、棺床を敷き詰めて築くものが存在し、宜興４号墓のように、双室墓の棺床の前に祭台を築くものもある。甬道・墓道の下には、排水道を築き、双室墓の後室は前室よりも、やや高い位置にある。前室中央はその両側よりもやや高い。これらはすべて、墓内の水をよりよく排水するためのものである。灯台・棺床・祭台・排水道などの施設は、東呉墓にすでに存在している。

南方の西晋墓の棺木は保存しにくいが、出土した鉄・銅の棺釘の状況から見て、木棺が使用されたとみられる。合葬の状況は、保存状況の良い墓の例が少ないが、単人葬、夫婦合葬、２人以上の家族合葬などのいくつかの種類の形式がある。夫婦合葬の墓の例は、南京板橋鎮楊家山の並列した双室墓[50]があり、家族合葬の例は宜興５号墓などがある。

木棺上に帷帳を掛けるあり方は、北方のようには流行しない。実例として、湖南安郷光熙元年劉弘墓がある。

南方の西晋墓には、多くの墓葬が並列して整然と配置された状況が見られ、これは当時の家族埋葬の習俗において反映されたものである。たとえば、宜興周氏家族墓地（１～６号墓）（図３－39）などがある。こうした習俗は、南京仙鶴山孫呉墓のように[51]、東呉期にすでに存在していた。

（３）副葬品

曹魏の墓葬資料は少ないため、副葬品の分類は行えなかった。ここでは副葬品の墓における位置と用途により、北方地域の西晋墓の副葬品を大きく４つに分類する。

第一類　装身用具で、主に棺内に置かれた。銅（鉄）鏡、銅銭ほか、男性に多いものとして、銅弩機など兵器、銅帯鈎、女性に多いものとして、銅（銀）簪、金（銀）鐲、金（銀・銅）指環など首飾りが挙げられる。

第二類　実用（もしくは明器）器具。鉄製品（戟･戈･剣･刀･削･剪）、銅製品（甗･洗･熨斗･熏炉･灯・刀・削）、玉石（石板硯）、陶瓷、漆木などがある。常見される土器には、甕、壺（盤口壺、扁壺）、罐（双系罐、四系罐、盤口罐）、甑、盆、案、盤（空柱盤）、碗、耳杯、奩、勺、槅などがあり、多くは炊厨や飲食の器具で、ほかにも灯、博山炉、帳座などがある。

第三類　陶質模型明器。水井、水斗、倉、灶、碓、磨、（猪）舎（厨を象徴する）、厠所、（牛、馬）車（厩を象徴する）などがある。

第四類　陶俑。武士俑・鎮墓獣・犬（鎮墓類）、馬・牛（車）（厩を象徴する）、男女侍俑（婢妾を象徴する）、猪・羊・鶏・鴨（厨を象徴する）などがある。

第二類から第四類の副葬品の墓葬における位置は、各墓で一致するわけではないが、一定の規律

は認められる。その中で武士俑・鎮墓獣・犬俑などの多くは、墓室の前端に位置し、甬道に面する。灯は多くは墓室の曲がり角に位置する。厠は、河南鞏義站街晋墓のように、棺のそばに位置する例がある。「厨」を象徴する模型明器・器具および猪・鶏・鴨などの動物俑は、「厩」を象徴する馬・牛車などと同じく、墓室に付随する側室内もしくは墓室の壁付近に位置する。「婢妾」を象徴する男女侍俑は、おおよそこの間に位置する。これら３種類のものは別別の個所に置かれることもあり、たとえば、２つの側室の中や墓室の両側の壁に、一括して置かれることもある。このほか、洛陽春都路西晋墓[52]や洛陽谷水 FM5 など、墓の主人の棺の前には、一般に槅・盤・碗・耳杯・奩・勺などの飲食器具を置き、１つの独立した祭奠場所を構成しているらしい。西晋文帝崇陽陵４号墓などのように、個別の墓の甬道内に猪・犬・牛など肉食動物を置き、封閉時に祭奠を行ったと思われる痕跡を有するものもある。

南方地域の西晋墓副葬品の顕著な特色は、多くの青瓷器と釉陶器があり、かつ器類あるいは器形において北方とは異なる穀倉罐・鶏首壺・唾盂・烛台・虎子・熏藍・熏炉・杵・臼・篩・ほうき・ちりとり・鶏籠・鴨圈（囲み状の小屋）・鵞鳥圈・猪圈・犬圈・水井・吊桶などがある。南方地域の西晋墓の副葬品には、陶俑類の人物俑・鎮墓獣の発見が少なく、帳座も多くはない。

（４）小　結

上文では、西晋墓制は曹魏墓制を継承して改変したものであることを提議した。『晋書』帝紀第一·宣帝には、

（宣帝司馬懿）「先是、預作終制、于首陽山為土藏、不墳不樹；作『顧命』三篇、斂以時服、不設明器、後終者不得合葬。一如遺命。」

とある。『晋書』志第十·礼中には、

「宣帝豫自于首陽山為土藏、不墳不樹、作『顧命終制』、斂以時服、不設明器。景（司馬師）、文（司馬昭）皆謹奉成命、無所加焉。景帝崩、喪事制度又依宣帝故事。武帝（司馬炎）泰始四年、文明王皇后崩、将合葬、開崇陽陵（文帝司馬昭）、使太尉司馬望奉祭。」

とある。

馬懿・景帝司馬師・文帝司馬昭は、魏の政治を独占するもいまだ自立してはいない。このうち、宣帝の高原陵と景帝の峻平陵はまだ発見されていない。上述の記載に見られるように、彼らが魏制の「不封不樹」「殮以時服」を完全に守った。のみならず「不設明器」までもして、素焼きの器も副葬していなかったのであれば、まさに薄葬の極みである。文帝の崇陽陵はすでに考古学的なボーリング探査で初歩的に確認され、墓葬は、長い傾斜した墓道を有する単室土洞墓であり、極めて簡単なものである。しかし、この陵の墓区の外圏には囲壁が築かれている。武帝の峻陽陵に至っては、考古資料においては、墓葬そのものは極めて簡単な単室土洞墓であり、陵墓周辺からは墳丘·祭殿·陵園などの地面施設は発見されていない。峻陽陵は少なくとも、曹魏時期の帝陵の葬制が延続したものといえる。

魏文帝は、終制（生前に述べた葬送に対する託け）の中に地面施設の規制に関することがあり、「寿陵因山為体、無為封樹、無立寝殿、造園邑、通神道」とした。西晋帝陵の多くは、延続して変化しておらず、ある研究者は、帝陵の上には「標」を立てていたであろうと考えている。これ以外にも、北方の広大な地域で発見された大量の墓葬は、個別の報告内容が不明瞭なものを除き、基本的に墳丘など地面施設は発見されていない。このことは少なくとも北方地域の西晋墓は全体的に曹魏の墓制を延続していたといえる。南方地域の西晋墓は、いくつかの墳丘を伴う資料があるが、全体的な状況を代表しているかどうか、さらに考察が必要である。

文献に記載された曹操高陵が陪葬墓区を有する。考古学的調査によって西晋崇陽陵・峻陽陵にともに陪葬墓が設けられていることが証明された。魏晋帝王陵墓は陪葬制があるといえる。

墓葬の形態について、考古資料から見て、帝陵とその陪葬墓には厳格な規制があり、崇陽陵区・峻陽陵区およびその周辺の発見・発掘された墓葬は、すべて大墓道小墓室のⅠ型単室墓である。洛陽とそれ以外の地域で類似した墓葬が個別で見られ、たとえば徐美人墓は、階段を有する長く広い傾斜した墓道をもつ単室墓であるが、墓室はおおよそ方形で、かつ磚室で、Ⅰ型墓とは異なるものである。Ⅰ型単室墓は帝陵とその陪葬墓の専用の形態で、中央官署が統一的に設計し、修建したものといえる。

帝陵以外の大中型墓は、ごく個別的に三室墓がある以外は、南方では北方で流行したのは双室墓・単室墓である。双室墓において、ごく個別的な横前室墓（Ⅰ型）がある以外は、北方では前室方形で後室縦長方形のもの（Ⅲ型）と双方形（Ⅳ型）の双室墓が多く見られ、これらはすべて曹魏の墓葬形態を継承したものである。南方で多く見られる前室方形で後室縦長方形の双室墓は、孫呉の墓葬形態の影響を受けたものである。単室墓には、北方で流行したのは方形単室墓（Ⅱ型）であり、これは西晋墓の重要な類別の一つであり、西晋墓葬形態の重要な特徴でもある。南方では長方形単室墓が流行した。

魏文帝の終制の中に葬具と葬服の規制に関することがある。「棺但漆際会三過、飯含無以珠玉、無施珠襦玉匣」とあり、西晋墓には普遍的に漆木棺が使用され、玉衣殮服の使用した状況は見られない。これは、葬具と葬服においても曹魏墓制が延続していたことを示している。これのみならず、曹魏墓葬において帷帳を棺に被せる風習も、晋墓は継承している。

曹魏の大中型墓においては、同穴合葬が流行し、これは後漢の喪葬風習の延続である。宣帝司馬懿の終制に「後終者不得合葬」という内容がある。ただし、景帝峻陽陵と文帝崇陽陵は、ともに合葬を行っている。このような状況であるが、この「後終者不得合葬」は、ほかの等級の墓葬に影響を与えた可能性がある。たとえば、双室墓と単室墓には合葬のものがあるが、同時に多くの単人葬のものもあり、とりわけ帝陵の陪葬墓のⅠ型単室墓は普遍的に単人葬である。

秦漢以来の大量の考古資料から、封建社会の喪葬礼制の核心は、皇帝と王侯等の皇族の等級秩序を規範付けることにあると見ることができる。文献記載と現有の考古資料は、西晋帝陵の埋葬制度を部分的に示している。そのほかの王などは、資料が乏しいため、なおその墓制は明らかでない。

このほか、帝王の喪葬礼制は、中央任職の官吏に影響を与えた。たとえば、文献に記載された、朝廷で官を受けた王祥・皇甫謐・石苞らは、薄葬の遺令を出している。

どの例がある。劉宝の爵は関内侯で、劉弘の官爵は鎮南将軍・宣城公である。このことから、上述の副葬品に関する規制は、皇族以外の公侯や地方官吏への拘束は強くなかったとみられる。

上述の通り、晋墓の副葬品は４つに大きく分類でき、大きな類別は、「厨厩」と「婢妾」のカテゴリーにほかならず、漢魏以来の墓葬と大きな違いはない。「厩」を象徴する単馬と牛車を副葬することがすこぶる特徴的で、秦漢以来の馬車とは異なる。陶俑における鎮墓俑類の組成も晋墓の副葬品の顕著な特色の一つである。双室墓の前室、あるいは単室墓の棺の片側に、主に陶槅・盤・碗・耳杯・奩・勺などの飲食器を置いて祭奠区となす。これも西晋墓の副葬品の置き方の一つの特徴である。地面施設が禁じられたため、墓内の立碑の風習が盛んになった。

文献記載や墓葬の実例が少ないから、帝陵以外の墓葬の等級秩序の詳細は不明である。墓葬形態から見ると、山東鄒城関内侯劉宝墓は双室墓で、前室には２つの側室が付随する。洛陽関中侯裴祇墓は４人の家族葬のため、双室墓であり、前室には１つの側室が付随し、側室にはまた１つの附室が伴う。江蘇宜興１号前将軍周処墓は双室墓、宜興４号関内侯周舫墓も双室墓、湖南安郷鎮南将軍・宣城公劉弘墓は単室墓である。公・侯などの官爵者の墓葬は双室磚墓が主で、単室磚墓もある。副葬品はすこぶる豊富である。その他の規模が小さい単室墓の墓主は低級官吏か官爵をもたない富裕階層であった可能性が高い。

南方・北方の墓葬は、形態や副葬品などには違いがあり、主に地域文化伝承の違いにより形成されたものである。ただし、墓葬制度を大きく見ると、西晋統一時期においては、南方・北方は収束性を有している。

帝陵以外の大中型墓葬から見て、西晋時期は厚葬の風習が台頭する。これは主に副葬品の豊富さに表れている。ただし、漢代の地上地下立体式の埋葬施設と比べると、西晋墓葬は依然として薄葬の範疇に入る。

第３節　魏晋墓制

秦漢の墓制は、漢魏時期にすでに奢侈な厚葬と認識されていた。漢末の時期において、曹操は新興政権の生みの親として、経済、民俗などの各種社会状況から見て、さらに政治変革の需要のため、漢代の厚葬の風俗を薄葬化することを提唱し、漢代墓制を比較的徹底的に止めさせ、まったく新しい埋葬制度を創新した。その後、魏文帝曹丕は、終制を定めるにあたり、その父の曹操の遺令を基礎として、薄葬思想を強化させた。さらに詔書の形式で頒布し、曹魏墓制を正式に確立させた。
西晋立国の前に司馬懿は終制を定めるにあたり、魏文帝の終制を継承させると同時に、さらに徹底した薄葬を推進させた。その後、司馬師もこの制を謹遵させた。晋武帝司馬炎のときも改変しなかった。帝陵のほか、西晋の北方の中小型墓葬も多くは魏制を受け継いだ。

魏晋墓制は薄葬を実行し、地上施設は排除し、地下の墓室・棺槨・殮服・副葬品を簡略化した。とりわけ玉衣殮服をやめさせたのは、最も徹底しているといえよう。ただし、魏晋時期において、量化可能な要素によってどのように墓葬の等級秩序を表現したかは、今のところ考古学上においては説明できない。あるいは曹魏・西晋ともに立国が短く、細かく厳密な喪葬等級制度はまだ完全に出来上がらなかったことも考えられる。

註

1 李宗道、趙国璧：「洛陽16工区曹魏墓清理」、『考古通訊』1958年7期。洛陽市文物工作隊：「洛陽曹魏正始八年墓発掘報告」、『考古』1989年4期。

2 劉玉新：「山東省東阿県曹植墓的発掘」、『華夏考古』1999年1期。東阿文化館：「山東東阿県魚山曹植墓発現一銘文磚」、『文物』1979年5期。蘆善煥：「曹植墓磚銘釈読浅議」、『文物』1996年10期。

3 西安市文物保護考古所：「西安三国曹魏紀年墓清理簡報」、『考古与文物』2007年2期。張全民：「曹魏景元元年朱書鎮墓文解読」、『考古与文物』2007年2期。

4 河南省文物考古研究所、安陽県文化局：「河南安陽市西高穴曹操高陵」、『考古』2010年8期。

5 厳輝：「曹操墓和曹休墓的比較与研究」、『中国文物報』2010年9月17日第5版。

6 張小舟：「北方地区魏晋十六国墓葬的分区与分期」、『考古学報』1987年1期。洛陽市文物工作隊：「洛陽曹魏正始八年墓発掘報告」、『考古』1989年4期。朱亮、李德方：「洛陽魏晋墓葬分期的初歩研究」、載洛陽市文物工作隊：『洛陽考古四十年』、科学出版社、1996年。李梅田：「中原魏晋北朝墓葬文化的階段性」、『華夏考古』2004年1期；「関中地区魏晋北朝墓葬文化因素分析」、『考古与文物』2004年2期。

7 新郷市文物工作隊：「河南新郷市発現一座魏晋墓葬」、『考古』2007年10期。

8 中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊：「河南偃師杏园村的両座魏晋墓」、『考古』1985年8期。

9 陝西省考古研究所、楡林市文物管理委員会弁公室：『神木大保当－漢代城址与墓葬考古報告』、科学出版社、2001年。

10 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城工作隊：「西晋帝陵勘察記」、『考古』1984年12期。

11 洛陽市第二文物工作隊、偃師商城博物館：「河南偃師西晋支伯姫墓発掘簡報」、『文物』2009年3期。

12 洛陽市文物工作隊：「洛陽孟津晋墓、北魏墓発掘簡報」、『文物』1991年8期。

13 洛陽市文物工作隊：「河南新安西晋墓（C12M262）発掘簡報」、『文物』2004年12期。

14 鄭州市文物考古研究所、鞏義市文物保護管理所：「河南鞏義站街晋墓」、『文物』2004年11期。河南省文物考古研究所：「河南鞏義市倉西戦国漢晋墓」、『考古学報』1995年3期。河南省文物考古研究所、鞏義市文物保管所：「鞏義市北窑湾漢晋唐五代墓葬」、『考古学報』1996年3期。

15 河南省文物局南水北調文物保護弁公室、四川大学考古学系：「河南衛輝大司馬墓地晋墓（M18）発掘簡報」、『文物』2009年1期。蔡海玉：「河南輝県発現一座西晋墓」、『考古』1990年4期。

16 河南省文化局文物工作隊、南陽市文物管理委員会：「河南南陽東関晋墓」、『考古』1963年1期。

17 北京市文物工作隊：「北京市順義県大营村西晋墓葬発掘簡報」、『文物』1983年10期。

18 滕州市文化局、滕州市博物館：「山東滕州市西晋元康九年墓」、『考古』1999年12期。

19 臨沂地区文管会、蒼山県文管所：「山東蒼山県晋墓」、『考古』1989年8期。

20 河南省文化局文物工作隊第一隊：「河南鄭州晋墓発掘記」、『考古通訊』1957年1期。

21 洛陽市第二文物工作隊：「洛陽新発現的両座西晋墓発掘簡報」、『文物』2009年3期。

22　河南省文化局文物工作隊第二隊：「洛陽晋墓的発掘」、『考古学報』1957 年 1 期。
23　山東鄒城市文物局：「山東鄒城西晋劉宝墓」、『文物』2005 年 1 期。
24　宮德傑、李福昌：「山東臨朐西晋、劉宋紀年墓」、『文物』2002 年 9 期。
25　中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊：「河南偃師杏园村的両座魏晋墓」、『考古』1985 年 8 期。
26　洛陽市第二文物工作隊：「洛陽谷水晋墓」、『文物』1996 年 8 期。
27　洛陽市第二文物工作隊、偃師市文物局：「河南偃師市首陽山西晋帝陵陪葬墓」、『考古』2010 年 2 期。
28　310 国道孟津考古隊：「洛陽孟津三十里鋪西晋墓発掘報告」、『華夏考古』1993 年 1 期。
29　洛陽市文物工作隊：「洛陽厚載門街西晋墓発掘簡報」、『文物』2009 年 11 期。
30　河南省文化局文物工作隊第二隊：「洛陽晋墓的発掘」、『考古学報』1957 年 1 期。
31　洛陽市文物工作隊：「西晋蘇華芝墓」、『文物』2005 年 1 期。
32　江西省文物工作隊：「江西靖安虎山西晋、南朝墓」、『考古』1987 年 6 期。
33　羅宗真：「江蘇宜興晋墓発掘報告」、『考古学報』1957 年 4 期。
34　南京博物院：「江蘇宜興晋墓的第二次発掘」、『考古』1977 年 2 期。
35　安徽省文物考古研究所、馬鞍山市文化局：「安徽馬鞍山東呉朱然墓発掘簡報」、『文物』1986 年 3 期。
36　諸城県博物館：「山東省諸城県西晋墓清理簡報」、『考古』1985 年 12 期。
37　南京市博物館、南京市江寧区博物館：「南京江寧上湖孫呉、西晋墓」、『文物』2007 年 1 期。
38　安郷県文物管理所：「湖南安郷西晋劉弘墓」、『文物』1993 年 11 期。
39　南京市博物館、南京市江寧区博物館：「南京将軍山西晋墓発掘簡報」、『文物』2008 年 3 期。
40　河南文化局文物工作隊第二隊 16 工区発掘小組：「洛陽潤西 16 工区 82 号墓清理記略」、『文物参考資料』1956 年 3 期。
41　太原市文物考古研究所：「太原市尖草坪西晋墓」、『文物』2003 年 3 期。
42　石景山区文物管理所：「北京市石景山区八角村魏晋墓」、『文物』2001 年 4 期。
43　洛陽市第二文物工作隊：「洛陽衡山路西晋墓発掘簡報」、『文物』2005 年 7 期。
44　洛陽市第二文物工作隊：「洛陽谷水晋墓」、『文物』1996 年 8 期。
45　洛陽市第二文物工作隊：「洛陽華山路西晋墓発掘簡報」、『文物』2006 年 12 期。
46　洛陽市第二文物工作隊：「洛陽谷水晋墓（FM5）発掘簡報」、『文物』1997 年 9 期。
47　陝西省考古研究所：「西安北郊晋唐墓葬発掘簡報」、『考古与文物』2003 年 6 期。陝西省考古研究所、西北大学文博学院：「西安南郊西晋墓発掘簡報」、『文物』2007 年 8 期。
48　洛陽市文物工作隊：「洛陽潤河東岸発現的一座西晋墓」、『文物』2007 年 9 期。
49　北京市文物工作隊：「北京西郊西晋王浚妻華芳墓清理簡報」、『文物』1965 年 12 期。
50　南京市博物館、南京市雨花台区文管会：「江蘇南京市板橋鎮楊家山西晋双室墓」、『考古』1998 年 8 期。
51　南京市博物館、南京師范大学文物与博物館学系：「南京仙鶴山孫呉、西晋墓」、『文物』2007 年 1 期。
52　洛陽市第二文物工作隊：「洛陽春都路西晋墓発掘簡報」、『文物』2000 年 10 期。
53　黄明蘭：「西晋裴祗和北魏元暐両墓拾零」、『文物』1982 年 1 期。
54　陝西省考古研究所配合基建考古隊：「西安東郊田王晋墓清理簡報」、『考古与文物』1990 年 5 期。
55　南京市博物館：「江蘇南京鄧府山呉墓和柳塘村西晋墓」、『考古』1992 年 8 期。
56　南京市博物館、南京市江寧区博物館：「南京将軍山西晋墓発掘簡報」、『文物』2008 年 3 期。
57　南京市博物館：「南京殷巷西晋紀年墓」、『文物』2002 年 7 期。
58　安吉県博物館（程亦勝）：「浙江安吉天子崗漢晋墓」、『文物』1995 年 6 期。
59　紹興県文管所：「浙江紹興坡塘郷後家岭晋太康七年墓」、『考古』1992 年 5 期。

60　徐定水、金柏東：「浙江平陽発現一座晋墓」、『考古』1988 年 10 期。

61　傅亦民：「浙江奉化市晋紀年墓的清理」、『考古』2003 年２期。

62　沈作霖：「浙江紹興鳳凰山西晋永嘉七年墓」、『文物』1991 年６期。

63　宜昌地区博物館、宜都県文化館：「湖北宜都発掘三座漢晋墓」、『考古』1988 年８期。

64　王善才、胡金豪：「湖北新洲旧街鎮発現両座西晋墓」、『考古』1995 年４期。

65　劉松山：「湖北黄梅県松林咀西晋紀年墓」、『考古』2004 年８期。

66　老河口市博物館：「湖北老河口市李楼西晋紀年墓」、『考古』1998 年２期。

67　馬鞍山市文物管理所、馬鞍山市博物館：「安徽馬鞍山桃冲村三座晋墓清理簡報」、『文物』1993 年 11 期。

68　鳳台県文物管理所：「安徽省鳳台県発現一座西晋墓」、『考古』1992 年 11 期。

69　陳恩、駱明勇：「福建連江県発現西晋紀年墓」、『考古』1991 年３期。

70　福建省博物館、浦城県文化館：「福建浦城呂処塢晋墓清理簡報」、『考古』1988 年 10 期。

71　大理市文管所：「大理市荷花寺村西晋墓清理簡報」、『考古』1989 年８期。

72　大理州文管所、大理市博物館：「雲南大理市喜洲鎮発現両座西晋紀年墓」、『考古』1995 年２期。

表３－１　曹魏墓葬一覧表（単位：ｍ）

№	地点	墓道					墓室						合葬	年代	墓主
		方向	長さ	幅（口部～底部）	最深	階段	前室			後室					
							東西	南北	頂部	東西	南北	頂部			
1	河南安陽西高穴２号墓	東	39.5	9.8 ～ 4.1	15	7	3.85	3.87	攢尖	3.82	3.85	攢尖	3	220 年	曹操
2	河南孟津三十里鋪 44 号墓	東	35	9	10.5	7	3.5	4.25	拱形	3.55	2	拱形	2	228 年	曹休
3	山東東阿魚山墓						4.35	4.35					1	233 年	曹植
4	河南洛陽澗西曹魏墓	東	23.5	2.8 ～ 1.84	10.3	5	3.38	3.25		3.2	1.95			247 年	
5	陝西西安郭杜 13 号墓	南		0.8 ～ 0.88	6.2	無	2.38 ～ 2.6	2.8	穹窿	1.3 ～ 1.5	2.7	拱形	2	261 年	
6	陝西西安郭杜 14 号墓	南		0.8 ～ 0.9		無	2.12 ～ 2.32	2.4 ～ 2.5	穹窿	1.5	2.7 ～ 2.8	拱形	3		
7	河南新郷１号墓	北		1.14	3.6	無	1.6	1.4	攢尖	1.6	2.38	攢尖	2		
8	河南偃師杏園村６号墓	西	12	2.6 ～ 1	9	4	3	1.9		9.25	3				

表３－２　北方地域西晋紀年墓葬一覧表（単位：m）

No.	地点	墓道					墓室						合葬	年代と墓主	備注
		方向	長さ	幅	最深	階段	前室			後室					
							東西	南北	頂部	東西	南北	頂部			
1	北京順義泰始七年墓（磚室）						前室と後室の２室墓。							271 年	
2	山東臨朐咸寧三年墓（磚室）	南					1.9 ～ 2.1	2	穹窿	2.6 ～ 2.7	3 ～ 3.1	穹窿		277 年	
3	山東諸城太康六年墓（磚室）	南	残 6	1.2			単室墓、東西 2.1 ～ 2.3、南北 2.5 ～ 2.6。穹窿頂。							285 年	
4	河南洛陽太康八年墓（磚室）	南				3	単室墓、約東西 3.2、南北 3.7。							287 年	残墓志碑
5	河南洛陽太康八年墓（土洞）						単室墓、東西 1.3、南北 2.2。							287 年蘇華芝	銘文磚
6	河南洛陽元康三年墓（磚室）	東	26	1.12	12		3.1	3	穹窿	4.44	1.76	拱形	4	293 年関中侯裴祗一家	墓志碑。前室に１側室が伴う。註 53
7	陝西西安元康四年墓（土洞）	北	17.35	0.9		1	2.85	2.85	穹窿	3.15	3	穹窿	3	294 年	前室に１側室が伴う。註 54
8	山東滕州元康九年墓（石室）	南					3.08	2.46	方形	2.75	2.36	方形		299 年	竪穴土坑画像石室墓。前室に２側室が伴う。
9	河南洛陽元康九年墓（磚室）		37.36	5.1	12.2	4	単室墓、約 4.8 × 4.4。						1	299 年徐美人	墓志碑
10	河南偃師永康元年墓（土洞）	南	13.2	1	7.8	竪井式	単室墓、東西 3.7、南北 3.1。						1	300 年支伯姫	
11	山東鄒城永康二年墓（磚室）	南	18.2				2.75	2.9	弧形	2.75	3.5	弧形	2	301 年関内侯劉宝	墓志碑。高大な封土。前室に２側室が伴う。
12	河南洛陽永寧二年墓（土洞）	西		約 7.4		4	約 7	約 7.3		約 7.4	約 4		3	302 年孫世蘭および２子	墓志碑。前室に１側室が伴う。
13	北京西郊永嘉元年墓（磚室）	南					単室墓、東西 2.7、南北 5.6。						1	307 年 華芳	墓志碑

表３－３　南方地域西晋紀年墓葬一覧表（単位：m）

No.	地点	墓葬形態	墓室						合葬	年代と墓主	備注
			前室			後室					
			東西	南北	頂部	東西	南北	頂部			
1	江蘇南京柳塘西晋墓	南向。二室墓。前室に１つの方形祭台あり。	2.1	2	穹窿	2.1	3.53	穹窿		太康六年（A.D.285）	紀年磚 註 55
2	江蘇南京将軍山西晋墓	墳丘直径約 20 m。南向。二室墓。前室、甬道底に排水溝を設ける。	2.5	2.5	穹窿	2.06 ～ 2.2	3.66	穹窿	1 ?	太康七年（A.D.286）	紀年磚 註 56
3	江蘇宜興西晋１号墓	墳丘。東向。二室墓。前室に２祭台、後室に１祭台あり。	2.32	2.34	穹窿	4.5	2.2	穹窿	2 ?	元康七年（A.D.297） 前将軍周処	紀年磚
4	江蘇宜興西晋４号墓	東向。二室墓。前室に１石案、後室中央に棺床、その前に１石案あり。	3.54	3.54	穹窿	5.5	3.58	穹窿		永寧二年（A.D.302） 関内侯周紡	紀年磚
5	江蘇南京殷巷西晋墓	南向。二室墓。前室に１方形祭台あり。	2.8	2.76	穹窿	2.16	3.64	拱形		永興二年（A.D.305）	紀年磚 註 57
6	江蘇宜興西晋５号墓	東向。二室墓。前室に２側室あり。	3.06	2.94	穹窿	4.12	2.82	穹窿		建興四年（A.D.316） 周玘	紀年磚
7	浙江安吉天子崗２号西晋墓	北向。二室墓（横前室）。	2.52	1.26		1.79	3.27			太康六年（A.D.285）	紀年磚 註 58
8	浙江紹興後家岭西晋墓	西向。単室墓。	4.4	2.2						太康七年（A.D.286）	紀年磚 註 59
9	浙江平陽西晋墓	南北向。二室墓。								元康元年（A.D.291）	谷倉罐碑文 註 60
10	浙江奉化余家壩３号西晋墓	北向。単室墓。								元康九年（A.D.299）	紀年磚 註 61
11	浙江紹興鳳凰山西晋墓	南向。単室墓。棺床。	1.73	3.95						永嘉七年（A.D.313）	紀年磚 註 62
12	湖北宜都３号西晋墓	西向。単室墓。	11.95	2.05	拱形					永平十年（A.D.291）	紀年磚 註 63
13	湖北新洲旧街西晋墓	東西向。単室墓。	約 2	約 1	拱形					太康元年（A.D.280）	紀年磚 註 64

14	湖北黄梅松林咀西晋墓	南向。二室墓。前室に祭台。甬道、墓道下に排水溝。	2.48	2.44	穹窿	1.7	3.14	穹窿		元康四年（A.D.294） 中郎馮氏	紀年磚 註 65
15	湖北老河口李楼西晋墓	南向。二室墓。前室に１側室あり、後室は並列の双室である。	2.8	2.8	穹窿	1.18 × 2	3.35	拱形	3 ?	泰始九年（A.D.273）	銘文陶座 註 66
16	湖南安郷西晋墓	単室墓。墓道下に排水道。墓室中央に棺床。墓室四壁に沿って帷帳を掛ける。	3.6	3.6	穹窿				1	光熙元年（A.D.306） 鎮南将軍・宣城公劉弘	金印
17	安徽馬鞍山桃冲村 2 号晋墓	南向。二室墓。								建興四年（A.D.316）	紀年磚 註 67
18	安徽馬鞍山桃冲村 3 号晋墓	南向。二室墓。	1.7	1.35			3.65			永嘉二年（A.D.308）	紀年磚
19	安徽鳳台西晋墓	南向。単室墓。	1.58	3.15						永寧二年（A.D.302）	紀年磚 註 68
20	江西靖安虎山 1 号西晋墓	東向。三室墓。								太康七年（A.D.286）	紀年磚
21	江西靖安虎山 2 号西晋墓	東向。三室墓。								太康九年（A.D.288） 校尉	紀年磚
22	福建連江西晋墓（3 座）	単室墓								元康二年（A.D.292） 元康三年（A.D.293） 元康九年（A.D.299）	紀年磚 註 69
23	福建浦城呂処塢 1 号西晋墓	西向。単室墓。	4.32	1.68						元康六年（A.D.296）	紀年磚 註 70
24	福建浦城呂処塢 2 号西晋墓	西向。二室墓（横前室）。	1.6	3.48		4.36	1.48			元康六年（A.D.296）	紀年磚
25	福建浦城呂処塢 3 号西晋墓	西向。単室墓。	3.84	1.54						元康六年（A.D.296）	紀年磚
26	福建浦城呂処塢 4 号西晋墓	西向。単室墓。	3.8	1.42						元康六年（A.D.296）	紀年磚
27	雲南大理荷花寺村西晋墓	東向。二室の石室墓。	3.45	1.85	拱形	4.15	1.8			太康十年（A.D.289）	紀年磚 註 71
28	雲南大理喜洲鎮西晋 1 号墓	東向。単室墓。								太康六年（A.D.285）	紀年磚 註 72
29	雲南大理喜洲鎮西晋 2 号墓	東向。単室墓。	2.82	1.13						泰始五年（A.D.269）	紀年磚

第Ⅳ章　中国古代墳丘墓の復興－東晋十六国・南北朝時代－

317 年、琅邪王司馬睿（晋元帝）が晋王に即位して東晋が始まり、420 年に劉裕（宋武帝）が晋に替わって独立して南朝が始まるまで、東晋は 103 年の間、建康に都をおいた（現江蘇省南京市）。南朝は宋（A.D.420 ～ 479）、斉（A.D.479 ～ 502）、梁（A.D.502 ～ 557）、陳（A.D.557 ～ 589）の計 169 年間を経て、都は依然として建康であった。

これに対して、主に北方では、304 ～ 439 年の間に全部で 16 もの小国が興亡し、これを歴史に十六国時代と呼ぶ。この時代は、東晋より開始は早く、終わるのは遅く、計 135 年間になる。最後に北魏によって統一され、その後北朝が開始する。十六国時代に建てられた都は数多く、継続時間がやや長い２つの中心地区は、長安（現陝西省西安市）と鄴城（現河北省臨漳県内）である。北朝は北魏（A.D.386 ～ 534）、東魏北斉（A.D.534 ～ 577）、西魏北周（A.D.535 ～ 581）の計 142 年間である。北魏は盛楽（現内蒙古自治区ホリンゴール）、平城（現山西省大同市）、洛陽（現河南省洛陽市東郊外）に相次いで都し、東魏北斉は鄴城に、西魏北周は長安に都をおいた。

東晋十六国時代は主に 4 世紀、南北朝時代は主に５～６世紀である。

第１節　十六国・北朝墳丘墓

1　十六国墓葬

北方中原地区の十六国時代墓葬の発見は非常に少なく、その原因は、戦乱の頻発によって、経済が衰退し、人口が激減したことである。前漢の古都長安は前趙・前秦・後秦が都をおいた地であり、後趙もまたかつてここを経営したことがあり、十六国時代における東方の鄴城と肩を並べる、大中心都市のひとつであった。長安城周辺、つまり現在の西安と咸陽一帯では、この数年来、十六国時代墓葬が発見確認されており、考古資料の欠乏甚だしかった十六国墓葬考古研究に、かつてない好機をもたらした。したがってここでは、この地区の墓葬資料を中心として十六国時代墓葬制度を検討する。

（１）墓葬概況

咸陽で十六国墓葬が発見されたのを契機として、以前に発見されていた墓の認識が更新され、長安地区十六国墓葬の様相が次第に明晰になってきた。研究によればこれらの墓には、西安北郊外４基１）、西安南郊外草廠坡１基２）、西安南郊外の韋曲２基３）、西安南郊外瓦胡同１基４）、咸陽北郊外南賀村１基５ ）、咸陽師院 10 基、咸陽中鉄七局三処４基、咸陽文林小区９基、咸陽平陵１基６がある。以上の墓は西安に８基、咸陽に 25 基あり、合計 33 基である（表４－１）。このほか、

近年西安南郊外鳳栖原で３基、咸陽渭城底張で16基の十六国墓が発掘された[7]。

これらの墓はいずれも長い傾斜した墓道をもつ土洞墓である。墓道と墓室の形態によって、２類に分類できる。

第一類　長い傾斜した墓道に階段を設けず、墓道は墓室より狭まり、平面形は狭長形あるいは台形を呈す。

A　双室墓

前室と後室、２つの主要な墓室がある。前室と後室の間が甬道で連結されるか、直接連結するかによって、２型式に分ける。

Ⅰ型　両室の間にやや長い甬道があり、前室と後室いずれも方形あるいは方形に近い形を呈すもの。

西安南郊外草廠坡墓と咸陽中鉄七局三処M1の２基がある。前者は、甬道に近い墓道の両側それぞれに南北に長い耳室が付き、中に副葬品が置かれているのが特徴である（図４－１）。後者は前室に２側室を備えて、台形を呈し、中には木棺が置かれている（図４－２）。

Ⅱ型　２つの墓室が直接連結され、一般に前室は方形あるいは方形に近い形を呈し、後室は比較的小さく、長方形あるいは台形を呈し、形状は不揃いであることが多く、前室のほかの側室の形状に類似する。

西安瓦胡同M7、咸陽師院M1～5・10・11、中鉄七局三処M2・4の10基がある。そのうち咸陽師院M2は前後室の間に短い甬道をもつ。

瓦胡同M7と咸陽師院M5では「豊貨」銅銭が出土しており、前者は側室１つをもち（図４－３）、後者は側室３つをもつ（図４－４）。

B　単室墓

主要な墓室１つのみで、平面形は方形あるいは方形に近い形を呈す。

咸陽平陵M1、咸陽師院M6・8・9の４基がある。

咸陽平陵M1は、墓道に１つの過洞と１つの竪井をもち、墓内の副葬品は豊富で配置位置が基本的に原位置のままであるという、非常に重要な墓である（図４－５）。

第二類　長い傾斜した墓道の両脇に階段を設け、墓道は墓室より幅広く、平面形が台形あるいは長方形を呈するもの。これも双室墓・単室墓の２種類がある。墓室方向は墓道方向と一致しないことが多い。

A　双室墓

２つの墓室の間にやや長い甬道があり、前室と後室いずれも方形あるいは方形に近い形を呈し、前室に側室が付くものもある。

西安韋曲M1・2と咸陽中鉄七局三処M3の３基がある。韋曲M1・2は墓道と甬道の間に１つの過洞と１つの竪井を設けるという特徴がある。M1の過洞・甬道とM2の過洞上にはいずれも土彫刻で作った家屋模型がある。M1の墓室と墓道は方向が異なり、墓室形状はやや不整形である（図４－６）。M2の前室と後室の四隅にはいずれも土彫刻による角柱があり、柱の下には柱礎がある。

Ｍ２の前室は１つの側室を有し、中には１人の子供が葬られている。M2 前室内には方形に近い土台があり、祭台に似ている（図４－７）。中鉄七局三処 M3 の前室は１つの浅い側室をもつ（図４－８）。

B　単室墓

主要な墓室１つのみで、多くは方形あるいは方形に近い形状を呈し、形状が甚だしく不整形なものがある。２基は側室があり、中に木棺を置いている。

咸陽文林小区の９基があり、配列は揃っている。墓道はいずれも南向きで、最深部はいずれも９m を超え、墓道の東・西・北壁に２つずつ階段を設ける。そのうち M49 では紀年銘文塼が１点出土している（図４－９）。

（２）葬制概論

十六国時代には五胡が雄を争い、北方は分裂した。旧都長安では元々兵家が重視され、頻繁に戦があった。前趙の立国は短く、兵戈が絶えなかった。後趙は長安に拠し、戦はやや稀であった。前秦が北方を統一したことで、京畿の地は休息の時を得た。

１　地上施設

十六国時期には小国が興廃し、葬制も一定ではなかった。前趙の劉曜が寿陵を高大にしてほしく、薄葬を主張する大臣に諫められ、それで「今勅悉停寿陵制度、一遵覇陵之法」とした。しかし劉曜はその父と妻を葬る時には「負土為墳、其下周回二里」とし、その父の墓は永垣陵と号し（この陵の位置を陝西省白水県林皐鎮趙家窯村東とする人があり、その墳丘は現存高約 15m である：陝西省文物局・西安文物保護修復中心『陝西帝陵档案』、陝西出版集団三秦出版社、2010 年）、その妻羊氏の墓は顕平陵と号し、その後「大雨霖、震曜父墓門屋、大風飄発其父寝堂于垣外五十余歩。」であった。この記録によってわかるのは、劉曜の父と妻の墓は墳丘を築くのみならず、さらに陵園と寝堂を有し、あわせて劉曜はまた「遣胡元増其父及妻墓高九十尺。」としたのである。（以上『晋書』載記第三・劉曜より引用）。

『晋書』載記第五・石勒下によれば後趙の石勒が死の前にいい遺したことは「斂以時服、載以常車、無蔵金宝、無内器玩。」「以咸和七年死…夜瘞山谷、莫知其所、備文物虚葬、号高平陵。」とあり、この記録には魏晋薄葬制度の影響が見られ、あるいは石勒の葬が異族葬俗であるかもしれない。

十六国の葬制は、地上に墳丘・陵園・寝堂を構築し、あるいはこういった施設がないものもあり、各国の制度はすべてが同じというわけではない。西安・咸陽一帯で発見されている十六国墓葬では、いまだ墳丘に関する報告はない。

２　墓葬形態

上述したように、ここでは長安一帯の十六国墓葬を、その形態的特徴によって２類に分けた。第一類墓中の瓦胡同Ｍ７と咸陽師院Ｍ５ではいずれも「豊貨」銅銭が出土している。「豊貨」銭は後趙の石勒が紀元 329 年に鋳造したもので、後趙と前趙が 10 年間併存していたため、この種の銭

貨はあるいは前趙の世に関中に流入したものかもしれない。しかし後趙が前趙を滅亡してから長安地区に流入した可能性が大きく、当然またより遅い時期に存在していた可能性も完全に排除することはできない。したがって墓葬形態と副葬品の特徴から、第一類墓の時代は晋末から前後趙時期としておく。

第二類墓中の咸陽文林小区 M49 で前秦建元十四年（紀元 378 年）紀年銘塼が出土し、墓葬形態と副葬品の特徴によれば、この類の墓の時代は前秦時期である。この類の墓の最も明確な特徴は、長大化した階段を備えた傾斜した墓道を有していることであり、墓の埋葬深度は絶対多数が９m 以上で、この点から西晋崇陽陵区と峻平陵区の墓葬形態が想起される。前秦は紀元 351 年に長安に都し、この時は西晋滅亡からまださほど時が経過しておらず、かつ晋末には愍帝が長安にいたために、この一帯には晋制には残っており、加えて前秦苻堅が王猛を重用し、儒教を興した。『晋書』（載記第十三･苻堅上）に、「自永嘉之乱、庠序無聞、及堅之僭、頗留心儒学、王猛整斉風俗、政理称挙、学校漸興」とある。よって、この種の墓葬形態は晋制の名残と見なすことができる。

十六国墓葬は一般的に木棺を使用し、また木棺を用いずに直葬するものある。たとえば咸陽師院 M5 は後室と１つの側室内に棺３つを置くが遺体は入れず、そのほかの側室内に３人を葬っているが棺は用いておらず、また咸陽文林小区 M69 では計３人が葬られているが、２人は棺があり、１人は棺がなく、また咸陽文林小区 M35 では１人しか埋葬されておらず、棺をもたない。木棺腐朽痕跡から見ると、棺の形状は基本的にいずれも頭側が幅広で脚側が幅狭な形状である。棺は墓内に置かれている状況は、第一類墓では前後主室に置かれる場合は、木棺の頭側を墓門に向けて、側室に置かれる場合は一般に頭側を主室に向ける。当然例外もあり、たとえば咸陽師院 M10 前室では木棺の頭側を後室に向けている。第二類墓の木棺の多くは、墓道と垂直に配置されている。

合葬状況に関しては、単人葬は非常に少なく、たとえば咸陽平陵Ｍ１と文林小区 M35 である。多くは２～３人葬で、４人葬もある。２人葬の場合、被葬者は男性１人女性１人、夫婦合葬のはずである。３人葬の場合男性２人女性１人、男性１人女性２人、男性１人女性１人小児１人といった複数の状況がある。４人葬の場合は男性２人女性２人である。いずれも家族葬であろう。

この時この地では家族葬が流行しており、出土銘文塼から咸陽文林小区墓地は朱氏一族の墓地であったことがわかる。咸陽師院墓地の 10 基の墓は２列に整列して分布しており、これもまた家族墓地であろう。

３　副葬品

大きく４類に分類できる。

第一類　装身具、棺内に置かれるもの。銅銭･鏡（銅･鉄）･釵（金･銀･銅）･簪（銀･銅）･鐲（金･銀・銅）・指輪（銀・銅）・銅耳環など。

第二類　実用（あるいは明器）器具。銅鐎斗・釜・盆など、陶罐・甑・盆・槅・盤・耳杯・勺・碗など。

第三類　陶質模型明器。倉・井戸・磨・碓・竈・（牛）車・（馬）軺車など。

第四類　陶俑。男女侍俑・胡人俑・牽馬俑・伎楽俑（撫箏・撃鼓・弾琵琶・吹奏・歌唱）・騎馬俑・騎馬鼓吹俑（吹角・撃鼓・吹排簫）・武士俑及び鞍馬・鎧馬・牛（車）・馬（軺車）・豚・羊・犬・鶏・鴨など。

つまり、個別の墓葬、たとえば西安草廠坡墓と咸陽平陵M1など出土遺物が比較的豊富なものを除いて、大多数の墓は遺物が少ない。西晋墓と比較して金属器は少ないが、装身具類はおおよそ同じである。副葬品は主に陶製品で、そのうち実用器具の類は貧弱で、数も多くない。前代と比較して、模型明器類と陶俑類の内容は同様で、「厨」「厩」「婢妾」が中心だが、鎮墓俑類は衰退し、たとえば鎮墓獣などは見られない。このほか、圏厠類明器はなくなり、同時に伎楽俑・騎馬俑・騎馬鼓吹俑・鎧馬俑などの新形態の俑が現れる。

4　小　結

以前、十六国墓葬の発見が非常に少なかった頃には、研究は制約を受けていた。西安・咸陽のこの時期の墓が発見、認定されるにしたがって、関連する研究も徐々に展開していったのである[8]。

西安・咸陽の十六国墓葬は全体的に大中型墓に属し、そのうち双室墓（第一類Ⅰ型と第二類）が大型墓にあたる。咸陽師院Ｍ４（第一類Ⅱ型双室墓）では「楡槀令印」銅印が出土しており、その被葬者は中級官吏であると考えられ、中型墓の規模を代表する。このほか、『晋書』（載記第三・劉曜）には前趙「（劉）曜始禁無官者不聴乗馬」とあり、『晋書』（載記第十三・苻堅上）には前秦苻堅もまたかつて「非命士已上、不得乗車馬于都城百里之内」と命を下しており、当時騎馬や馬車に乗るには一定の身分地位が必要であったことを示している。十六国墓葬中では鞍馬あるいは牛車が出土した墓は少なくなく、被葬者の身分が低いわけではないことを示している。

十六国墓葬ではまだ墳丘が発見されていないが、文献記載には、少なくとも前趙等の国には墳丘や陵園などの地上施設があったとあり、魏晋墓制がすでに崩壊し始めたことを示している。

十六国墓葬はいずれも長い傾斜した墓道をもつ土洞墓であり、土洞は双室と単室の２種類があり、墓室は側室をもち合葬に用いる。墓葬形態では墓道と墓室の方向が一致ではなく、墓室の形状はあまり整っておらず、墓室の壁はおおよそ胴張り、天井部は穹窿頂という特徴をもち、全体的に見て西晋墓の特徴を多く遺している。特に第二類墓はそれがより明らかで、西晋墓葬形態の延長であるといえる。しかし同時に墓葬形態にはまた新たな変化も出現しており、たとえば西安草廠坡墓の墓道は両側に縦長方形の耳室を付設し、西安韋曲２基の墓及び咸陽平陵Ｍ１の墓道は過洞と竪井を有す。過洞と竪井をもつ墓道は後漢時期にすでに出現していたが、西晋時期にも発見されている所がある。しかし十六国時代に至ると、それらは明らかに増加する。このほか、西安韋曲の２基のように過洞・甬道における土彫刻による家型模型のやり方は、おそらく同時期の河西一帯の墓葬形態の影響によるものである。

副葬品中の鎧馬・騎鎧馬俑などに見られる濃厚な軍事的色彩は、十六国時代に頻繁に戦争があったことを、活き活きと映し出しているのであり、騎馬鼓吹俑・伎楽俑は当時の「関隴清晏、百姓豊

楽」（『晋書』載記第十三・苻堅下）といった社会状況を表現している。前秦の苻堅が王猛に対して「賜以美妾五人、上女妓十二人、中妓三十八人、馬百匹、車十乗。猛上疏固辞不受。」（『晋書』載記第十四・苻堅下）とあり、伎楽俑はおそらく女妓たちが楽を奏で歌唱している場面を表現したものであろう。

つまり、現状で発見されている長安地区十六国墓葬資料によると、墓葬形態全体においてはまだ濃厚な晋墓の特徴を留めながらも、同時に魏晋墓制がすでに崩壊しており、新しい墓葬形態の要素が出現し、かつ特徴が明らかで、そこに新しい墓制が胎動していることを示している。

２　北朝の北魏墓葬

北魏は拓跋珪が代王を称した386年に始まり、後に魏王と改称し、盛楽に都した。398年に拓跋珪は平城に遷都して、皇帝を名乗った。すなわち道武帝である。439年、太武帝拓跋燾が北方を統一した。494年、孝文帝拓跋宏は洛陽に遷都した。534年、北魏は東魏と西魏に分裂した。

北魏は386～439年の50余年間、まだ十六国時代にあった。398～494年の約100年間、都は平城に置かれ、その後の40年は洛陽に置かれた。ここでは北魏都城平城（現山西省大同）と洛陽（現河南省洛陽）一帯で発見された墓を主な対象として議論に加える。

（１）墓葬概況

１　皇帝陵

北魏道武帝拓跋珪以来、献文帝拓跋弘までの五代の皇帝は、いずれも旧都盛楽一帯の「金陵」に葬られ、皇后・皇太子と王公侯臣もまた多くは金陵に陪葬された。文明太后からは平城の北の方山に陵寝を造営開始し、名を永固陵という。孝文帝は孝の心を表すために永固陵の北に万年堂という寿陵を造営したが、孝文帝が洛陽に遷都した後に、洛陽の都に死んで、結局は邙山の長陵に葬られ、万年堂は「虚宮」となった。その後宣武帝は景陵に、孝明帝は定陵に、孝荘帝は静陵にと、いずれも邙山の上に葬られた。

北魏が平城に都をおいていた時期の帝王陵寝－金陵の所在地は、今なお不明確である。当時は鮮卑の古い習慣を維持していたのか、あるいはまだ魏晋の薄葬規範を尊重していたのか、少なくとも地上に高大な墳丘は築いていないのであろう。

Ａ　永固陵

文明皇太后の永固陵は、大同から北に25kmの鎮川郷西寺児梁山（旧称方山）南部に位置している。この陵の調査は1920年代に始まり、1976年に発掘作業を行った。発掘データによると、墳丘は円形を呈し、長方形基壇上に築かれており、基壇は東西124m、南北117m、墳丘高は22.87m（図４－10）である。墓は南向きの単室塼室墓で、墓道・甬道（前甬道・後甬道）・墓室という構成で、後甬道内に２つの石門が設けられ、墓室の平面形は方形に近く、東西6.83m、南北6.4m、高さ7.3mで、四壁はやや外側に張り、四隅攢尖頂である（図４－11）。万年堂と永固陵の形状は類似しており、規模はわずかに小さい。墳丘底辺長は約60m、高さは13mである。墓室は東西5.69m、南北5.68m、

高さは6.97mである。

『魏書』（高祖紀第七上）によると、「（太和五年）夏四月己亥、行幸方山。建永固石室于山上、立碑于石室之庭、又銘太皇太后終制于金冊、又起鑑玄殿。」また『魏書』（皇后列伝第一）には「高祖乃詔有司営建寿陵于方山、又起永固石室、将終為清廟焉。太和五年起作、八年而成、刊石立碑、頌太后功徳。」とある。文献記録から見て、永固陵は墓葬自体以外に、永固石室と鑑玄殿などの付属の建物を含むべきで、その中の永固石室は陵廟に属するべきで、石室の前には石碑が立っている。これらの建物は永固陵の南に位置すると考えられ、遺跡はなお残っている。思遠仏寺などの建物に関しては、永固陵に従属するかどうか、まだ議論がある[9]。

B　長　陵

孝文帝の長陵は、北魏が洛陽に遷って最初の帝陵であり[10]、孟津県朝陽郷官荘村東に位置する（図４－12）。近年考古学調査、ボーリング、試掘調査が行われ、おおよその陵園範囲、墳丘規模とそのほかの陵園施設が明らかになってきた。

陵園は平面長方形で、東西443m、南北390mである。垣は版築で、一部の壁の基礎が残存しており、壁の中央に門が開き、すでに西壁と南壁の２箇所の門跡が発見されている。陵園の垣外には環壕がめぐる。陵園内には大小２つの墳丘があり、大きいのが孝文帝陵で、陵園中部の北寄りにあり、底面は円形で、最大径103m、高さ約21m、墳丘外側には版築による溝がめぐる。小さいのは文昭皇后陵で、陵園北西部にあり、墳丘の底径42m、高さ約15mである。２つの陵はいずれも長い傾斜した墓道塼室墓で、南向きの墓道が発見されている。孝文帝陵の南21mの所で、おそらく石像の台座であろう２つの対称的な石墩が発見されている。２つの台座の間は神道であり、北の墓道に向かっている。それ以外に、陵園内ではまた３基の建築基壇が発見され、２基は文昭皇后陵の東南に位置し、１基は孝文帝陵の東南に位置しており、おそらく寝廟に類する建物に属するものであろう（図４－13）。

C　景　陵

宣武帝景陵は邙山郷冢頭村の東にあり、1991年に発掘調査が行われた[11]。

景陵はまだ墳丘を囲む垣が発見されていない。墳丘底面形はおおよそ円形を呈し、直径105～110m、高さ約24mで、頂部は平らである（図４－14）。陵の南約10mで、神道西側の石像であろう石刻武士像１体が発見されている。

墓葬構造は永固陵と基本的に同じで、南向き単室塼墓で、墓道・甬道（前甬道・後甬道）と墓室から構成され、後甬道と墓室の間に石門が設けられ、墓室の平面は四角形に近く、東西6.92m、南北6.73m、高さ9.36m、四壁はやや外面へ張り、四隅攢尖頂である。墓室西部に15個の方形石板を用いて構成された南北長方形の棺床があり、長さ3.86m、幅2.2m、高さ0.16 mである。棺床の四隅には元々それぞれ１つの帳座が置かれていたはずだが、発掘時には１つだけが幸いにして残存していた（図４－15）。

このほか、孝明帝定陵と孝荘帝静陵に関しては研究者の予察もあるが、さらなる考古調査を必要

としている[12]。

永固陵・万年堂・長陵・景陵の考古資料から見て、北魏帝后陵墓には規制があるようである（表４－２）。万年堂が特殊な状況にあるのを除けば、永固陵・長陵・景陵の墳丘規模は近似しており、永固陵・景陵の墓室規模も大体同じである。文献記載により、これは文明太后の終制に関係がある。『魏書』（高祖紀第七上）によると、「（太和五年）夏四月己亥、行幸方山。建永固石室于山上、立碑于石室之庭、又銘太皇太后終制于金冊。」とある。文明太后が作った終制の内容は、一部が太和一四年の詔書にある。太和一四年に文明太后を埋葬し、「詔曰「尊旨従倹、不申罔極之痛、称情允礼、仰損倹訓之徳。進退思惟、倍用崩感。又山陵之節、亦有成命、内則方丈、外裁揜坎、脱于孝子之心有所不尽者、室中可二丈、墳不得過三十余歩。今以山陵万世所仰、複広為六十歩。辜負遺旨、益以痛絶。其幽房大小、棺槨質約、不設明器。至于素帳、縵茵、瓷瓦之物、亦皆不置。此則遵先志、従冊令、倶奉遺事。而有従有違、未達者或以致怪。梓宮之里、玄堂之内、聖霊所凭、是以一一奉遵、仰昭倹徳。其余外事、有所不従、以尽痛慕之情。其宣示遠近、著告群司、上明倹誨之善、下彰違命之失」」（『魏書』皇后列伝第一）。上述の文中の「内則方丈、外裁揜坎、脱于孝子之心有所不尽者、室中可二丈、墳不得過三十余歩。」を引いて、文明太后の終制の内容に属するとする。孝文帝が文明太后陵墓を処置する際には、陵内一部の墓室・棺槨・副葬品などの方面において終制を遵守し、しかし墓外の墳丘については終制の基礎上から倍に拡大し、すなわち30歩から60歩に拡張したのである。

もし太和十四年詔書中の一部の文字に、文明太后終制の内容を見いだすとすれば、ある一面では孝文帝の永固陵修築や文明太后埋葬過程で、文明太后の終制に従い、また孝心によって終制の内容を一部改変し、それによって永固陵の埋葬制度が形成されたことが示されているといえる。同時にまた北魏前期に平城に居した皇帝の埋葬制度は、新創出された永固陵とは別物であろうことが現れている。

万年堂は孝文帝が孝心を表すために永固陵に陪葬した寿陵であり、その規模は自然と永固陵より小さいものとなった。しかし孝文帝遷洛後に計画された長陵の規模は永固陵に相当し、長陵が永固陵の規模を真似て建造されたことを示している。そして北魏が洛陽において建造する帝陵の模範となり、その後の宣武帝景陵も、おおよそこの規模に準じている。

長陵を例にし、洛陽北魏帝陵の比較的完全な制度においては、大体外に陵園があり、内に陵墓を建て、陵墓南墓道の延長線の両側に沿って石像を配置して神道を形成し、そのほかの寝廟類建築は陵墓の東南に置かれる。このような制度は長陵以外の帝陵中では、まだ完全に現れていない。この制度は、永固陵と比較すると著しい変化が発生している。たとえば新たに神道と石像が出現し、陵墓の周囲を垣で取り囲んで保護し、墳丘も下方上円から円形になっている点などである。またこれら地上施設の新出現要素は、すべて後漢陵墓にもあった特徴であり、つまり孝文帝遷洛後、漢化が一歩進んだ結果と見なすことができるのである。

永固陵から洛陽諸陵の代表とする長陵までは、北魏の新墓制が草創期から完整するまでの過程を

見ることができる。墓制中で地下施設に属する要素については全体で大きな変化はなく、地上施設に属する要素において根本的な変化が起こっており、これは孝文帝が新局面を打開するために、遷都して変化を企図した政治上の需要であり、また一歩漢文化の学習、吸収を進めた成果なのである。

そのほかに文献の記録によると、北魏時代は陵墓付近に陵邑を設置することがあり、今後の考古調査において注視する必要がある。

２　大中型墓

北魏墓葬は主に山西大同と河南洛陽及び周辺地区に見られ、そのほかに内モンゴル・寧夏・陝西・山東・河北などの省・区でもいくつか発見されている。ここ数年来、大同一帯で数百基の北魏墓葬が発掘され、主に大同市の東郊外と南郊外に分布し、そのうち東郊外には大中型墓が比較的多く、南郊外には小型墓がよく見られる。次に北魏の大・中型墓について、平城と洛陽２時期に分けて概略を述べる。

ｉ　平城時期

主に双室塼墓・単室塼墓・単室土洞墓の３種類がある。双室と単室塼墓の多くは大型墓に属し、一部の単室塼墓と単室土洞墓は中型墓に属する。

①双室塼墓

数量はとても少なく、２基のみである。石家寨司馬金龍墓[13]と湖東１号墓[14]、どちらも大同市東南郊外に位置する。いずれも長い傾斜した墓道・甬道・前室と後室から構成され、前室・後室の平面形はいずれも胴張方形を呈し、天井部は四隅攢尖頂である。

司馬金龍墓の前室は東西 4.56m、南北 4.43m、後室は東西 6.12m、南北 6.01m で、後室は１つの方形側室を有し、前室と後室、後室と側室の間はいずれも長い甬道（図４－16）で連がれている。後室西側には１つの石棺床が南北方向に置かれ、長さ 2.41m、幅 1.33m、高さ 0.51m で、６枚の石板から構成され、前・後・左・右に各１枚、上面に２枚、そのうちの前面（東側）の１枚には図案が彫刻されており、仏教色豊かである。棺床上には元々棺が並べられていたはずで、発掘時に棺板は棺床の東に放置されていた。そのほかに、墓室内で計４点の石彫刻の柱礎が出土しており、その中の２点は前後室間の甬道西側に、１点は後室の南側中央に、１点は棺床上に位置し、棺床の上下には２本の木欄干及びそのほかの木彫刻装飾品、漆絵木板などが残存しており、それらをあわせて推測すると、当時棺床上には一揃いの囲屏[15]が設置されており、その構造はおおおよそ床の四隅に石礎（そのうち、四隅に立体的な伎楽童子が彫刻されている２点が、棺床前側の両隅に置かれている）が置かれ、石礎の上には木柱がのり、木柱間には横向きの木欄干を連ねて骨組みとし、その間には漆絵木板を嵌めこんである。囲屏の前（東側）は開口しているはずである。囲屏上にはおそらく帷帳が懸けられている。木板漆絵の内容は帝王・将相・烈女・孝子と高人・逸士などの故事伝説である。碑状の墓誌から被葬者は司馬金龍夫妻であることが知られ、司馬金龍は父爵を襲って琅琊王となり、太和八年（A.D.484）に死去し、その妻姫辰は延興四年（A.D.474）に死去した。２人

はおそらく１つの棺内に納められていた。

湖東１号墓は元来、地上に墳丘をもっていた。前室一辺 3.82m、後室一辺 4.2m、後室はやや前室より大きい（図４－17）。後室中部には一槨一棺が置かれ、棺の下には棺床が設けられている。棺槨はいずれも前が幅広く後ろが狭く、前が高く後ろが低い形状で、つまり頭側が広く高い形状である。槨の内外は漆で黒く塗られ、外面は鍍金銅釘帽と銅鋪首で飾られている。棺蓋の表はアーチ形で、前の縁は圭形を呈し、棺外は黒漆地に赤白２色で絵が描かれ、鍍金銅釘帽と銅牌で飾られている。棺内には１人の男性が葬られている。漆棺に描かれた図案や蓮花化生の銅飾りなど、仏教色に満ちており、棺の後戸板には“半啓門”の図像がある。

②単室塼墓

約 20 数基と数は多い。１本の長い傾斜した墓道を有し、一部に過洞と竪井を設ける。たとえば大同の七里村 M1・M14 などである[16]。墓室平面形は胴張方形あるいは方形に近い形を呈し、天井部は四隅攢尖頂であり、１つの側室をもつものもある。墓室開口部は塼を用いて閉塞する。一部の墓室内に塼棺床があり、木棺は頭側が広く脚側が狭い形状である。木棺を用いず被葬者を直接尸床に置く方法もあり、尸床には木･塼･石の３種類があって、木製尸床にはたとえば大同七里村 M1（夫婦合葬）（図４－18）･M37（１男２女合葬）などがあり、塼製尸床にはたとえば大同迎賓大道Ｍ２・M3・M26・M78（図４－19）などがあり[17]、石製尸床にはたとえば七里村 M14 があり、墓室内に２台、側室内に１台、３台の尸床には１人の男性、４人の女性の合計５人が埋葬されている（図４－20）。多くは一種の石灰枕を用いる。

ある墓室には壁画が描かれており、たとえば大同沙嶺 M7[18]（図４－21）、下深井 M1[19]、迎賓道 M16 などがある。

宋紹祖墓の墓室内には石槨が構築されている。この墓は大同市東郊外に位置し、南向きの傾斜した墓道・２つの過洞・２つの竪井・甬道と墓室によって構成される[20]（図４－22）。墓室の東西は 4.24m、南北は 4.13m、高さ 4.7m である。石槨は間口３間の単檐懸山頂で木造建築を模倣しており、百数件の青石の部材を組み合わせている（図４－23）。その南には前廊が設けられ、間口３間奥行き１間である。北は後室で、平面形はおおよそ長方形を呈し、地梁測量によると東西 2.98m、南北 2.3m で、南向きに２枚の石門が開口している。石槨内の東･西･北の３壁の下部には壁画が描かれており、その内容は楽舞である。石槨内には石で築いた尸床があり、平面形は倒置した“凹”字形で（図４－24）、東西 2.39m、南北 1.03 ～ 1.88m、高さ 0.31m で、石材上には紋様が彫刻されている。尸床の西部には２つの石灰枕があり、平面形はやや楕円形を呈し、両端は尖り、わずかに上に傾斜していることから、被葬者は直接尸床上に横たえられていたのであり、木棺などを使用していなかったことがわかる。出土塼銘文から、被葬者は幽州刺史である敦煌公宋紹祖夫妻で、太和元年（A.D.477）に埋葬されたことがわかる。

③単室土洞墓

およそ数百基と、数量が最も多い。多くは傾斜した墓道で、過洞と竪井を設けているものもある。

墓室の平面形状には３種類あり、台形・刀形・方形である。墓室長２～３m、最も広い所は１m～２m余りで、一部の墓は壁龕がある。墓室口は普通木板、日干し煉瓦あるいは土塊を用いて閉塞する。一般に木棺を使用し、まだ彩色画が残る木棺もあり、個別の墓では棺の外に槨を有する。石灰枕あるいは土灰枕の使用がよく見られる。単人葬が最も多く、二棺二人合葬と単棺二人合葬もある。一般には少量の土器・漆器などを副葬し、ある墓では獣骨が発見されている。個別の墓では比較的豊富な遺物が出土しており、銀器・銀飾・銅器・銅飾・ガラス器などがある。

台形土洞墓　墓道は墓室中央部に位置し、一部が竪坑式になっている。墓室平面形は狭長な台形を呈し、天井部は前が高く後ろが低くなっている。事例に大同七里村M28がある（図４－25）。

刀形土洞墓　墓道は墓室の一辺に偏っている。墓室前側の幅は後側の約２倍広く、天井部は前が高く後ろが低い。事例に大同七里村M30がある（図４－26）。

方形土洞墓　墓道は墓室の中央部に位置し、墓室平面形は方形に近く、天井部は平らであり、あるいは前が高く後ろが低い。ある墓室は比較的大きく、一辺４m前後ある。たとえば大同七里村M25は、一槨一棺である（図４－27）。個別の墓室では切石で築いた尸床があり、たとえば大同電銲器材廠M112では、被葬者は直接尸床上に横たえられ、棺を用いない[21]（図４－28）。

大同南郊外智家堡で発見された１基の石槨壁画墓は[22]、おそらく土洞墓である。南向きで、墓室は東西2.11m、南北1.13mである（図４－29）。石槨は単檐懸山頂で木造建築を模倣しており、数十枚の砂岩を部材とし、南側には石門がひとつ開口している（図４－30）。石槨内の四壁、及び天井部にはいずれも彩色画が描かれ、その内容は被葬者・侍者・羽人・牛車・馬・木・花などである。

ⅱ　洛陽時期

北魏が洛陽に遷った後の墓は、総計するとおよそ20余基で、主に洛陽故城西北の邙山と故城以東の偃師一帯において発見され、そのうち邙山上の墓は帝陵を中心に分布している。そのほかに、旧都大同の東郊外で発見された元淑墓や、大同以西の小站村において封和突墓が発見されており、これらもこの一時期の墓である（表４－３）。

北魏洛陽時期の墓葬形態は単一で、いずれも単室墓であり、双室墓は見られない。墓室は土洞と塼室の２種類があり、それぞれ約半分を占めている。墓道は傾斜と竪坑の２種類があり、傾斜した墓道が多数を占め、ある墓道は竪井と過洞を有し、多くは各一つで、各二つもある。

①単室塼墓

約10基あり、２基は大同郊外にある。そのうちの３基は王墓で、すなわち陽平王元冏墓[23]（図４－31）、清河王元懌墓[24]、死後に江陽王に追封された元乂墓[25]である。また４基は刺史の墓で、洛陽に２基あり、すなわち燕州刺史寇猛墓[26]と、死後に洛州刺史に追贈された元睿墓[27]（図４－32）であり、大同には２基、つまり肆朔燕三州刺史元淑墓[28]（図４－33）と、死後に洛州刺史に追贈された封和突墓[29]である。このほか３基の墓の被葬者の身分は不明であり、それらは偃師南蔡荘90YNLTM2[30]、南蔡荘89YNLTM4[31]（図４－34）と偃師杏園村YDⅡM926（図４－35）で、被葬者の身分は低くはない。

洛陽の２基の王墓は地上に円形墳丘が現存しており、元乂墓の墳丘底径は35m、高さ20m、元懌墓の墳丘底径は30m、高さ15mである。大同元淑墓の墳丘底部の平面形は長方形で、東西63m、南北79m、高さ3.7m、版築はされていない。

墓道はいずれも南向きで、２基が竪坑式である以外はいずれも傾斜式で、いずれも過洞と竪井を有さない。墓室平面形はやや方形を呈し、元淑墓のみは長方形で、四壁はやや胴張り、四隅攢尖頂（あるいは穹窿頂）である。元懌墓と元乂墓の墓室内には壁画が描かれている。元乂墓の墓室には２つの仮耳室がある。南蔡荘89YNLTM4墓室には、塼で並列する２つの槨室が築かれている。元淑墓の墓室西側には塼棺床がある。

棺木が明らかなものには、単棺葬と二棺合葬の２種類がある。

②単室土洞墓

約10数基ある。そのうちの２基は王墓で、すなわち南平王元暐墓[32]（図４－36）と常山王元邵墓[33]（図４－37）である。４基は官吏墓で、すなわち死後に瀛洲刺史に追贈された王温墓[34]、河間太守郭定興墓[35]（図４－38）、燕州治中従史侯掌[36]と死後に楽陵太守に追贈された染華墓[37]である。このほか数基の被葬者身分は不明である。

いずれも地上に墳丘は残存しない。

墓道は１基が西向きである以外、いずれも南向きであり、１基が竪坑式である以外は、いずれも傾斜式で、そのうちの７基は過洞と竪井を有し、２基が各二つである以外は（１基は南平王元暐墓）、いずれも各一つである。墓室平面形の多くは方形あるいは方形に近い形状で、四壁は胴張りを呈し、四隅攢尖頂（あるいは穹窿頂）であり、１基の墓室は台形を呈している。３基の墓室には壁画が描かれる（１基は南平王元暐墓）。

棺が明らかなものの多くは単棺葬で、そのうちの２基は石棺を用いる（１基が南平王元暐墓）。常山王元邵墓は土棺床を有す。

３　小型墓

主に大同南郊外と東郊外で発見され、およそ数十基ある。いずれも平面形は長方形あるいは台形の竪穴土坑墓で、一般的に長さは２ｍ余り、幅は１ｍに満たない。木棺をよく用いる。副葬品は少量の土器で、ある墓では獣骨が発見されている。事例としては大同電銲器材廠M235（図４－39）がある。

洛陽地区の小型墓は澗西一帯である程度発見されている[38]。

（２）葬制総論

地上施設、墓葬形態、副葬品の３方面から概述する。

１　地上施設

北魏帝陵の墳丘、陵園等の地上施設の状況は、前述したとおりである。

大・中型墓の考古発見によって、平城時期北魏墓は一部の墓においては本来墳丘があったと推測されるものの（山西大同湖東北魏１号墓のように）、まだ確実な例は見られず、そのため、現状の資料から考えると、当時決して墳丘を尊ばなかったといえる。あるいは少なくともまだ、非常に高大な、顕著な墳丘は造営されていなかったとはいえる。しかし洛陽時期北魏墓の状況は全く異なる。すでに報告された墓例では、洛陽の元乂墓と元懌墓など、これら２基の墓はいずれも王墓で、墳丘は円形で、どちらもとても高大である。大同には元淑墓があり、墳丘平面形は長方形、高さ 3.7m、洛陽一帯の墓の墳丘形態とは異なるようである。

洛陽時期北魏大・中型墓はおそらく一般に墳丘を有するが、墳丘以外の地上施設は発見されていない。

２　墓葬形態

帝陵形態と構造は、永固陵、万年堂、景陵の発掘情況から見て、いずれも一墓道の単室塼墓である。その甬道は前後２段に分かれ、明らかな特徴を備え、甬道の前段幅は広く短く、後段は狭長であり、ある研究者は前段の甬道を前室と見なし、それによって墓全体を前後墓室の双室墓と見なす。しかし、もし後室が幅広で、高く、四壁が外反し、四隅攢尖頂であるなどの状況から比較すると、前甬道の面積は狭く、低く、四壁は平直で、アーチ型天井を呈し、明らかに後室と整合する一つの墓室としての条件を備えておらず、これに加えて墓門（石門）はいずれも後甬道の両端あるいは一端に設けられ、それによって前甬道は墓門の外に置いて、さらに前甬道は前室と見なすことができないということを示している。そのため、ここは景陵発掘報告のいい方を採用して、甬道の一部分としておく。帝陵の墓室平面はおよそ四角形で、辺長 6.5 ～ 7 m、四隅攢尖頂、高さ 7 ～ 10m である（万年堂を除く）。景陵墓室内には石棺床が設置され、石帳座が出土している。

前述したように、平城時期の北魏大中型墓は双室塼墓・単室塼墓・単室土洞墓の３種類がある。双室塼墓は２基のみで、そのうち１基の被葬者身分は明らかになっていて、すなわち琅琊王司馬金龍である。双室塼墓形態を採用することができる、被葬者の身分は高いはずだが、いずれも王の等級であるか否かは、なお断言できない。単室塼墓は多くみつかっており、宋紹祖の爵の敦煌公から見て、この類の墓葬形態の被葬者身分もまた低くはないが、宋紹祖墓が採用している殿堂式石槨は一般的ではなく、特別例に属する。少数の墓には壁画がある。単室土洞墓の規模は一般に小さく、その被葬者身分は中下級官吏であると考えられ、あるものは一般平民であるかもしれない。

洛陽時期の北魏墓はいずれも単室墓で、塼室と土洞の２種があり、墓道の絶対多数は南向きである。塼室墓の墓室規模は差が激しく、普通は 4.4 ～ 4.5㎡、しかし元懌墓塼室は約一辺９m で、帝陵墓室よりもずっと大きく、元乂墓塼室は 7 × 7.5m で、これもまた帝陵墓室よりも規模が大きい。この２つの王墓塼室の規模は大きく、地上墳丘も高く、彼らの死亡時における特殊な政治背景が関係している。元懌は胡太后専権時に重用されたが、後に元乂は胡太后を幽閉し、元懌を殺害した。胡太后が政権再奪後、また元乂が殺害され、元懌に対して追封改葬を行い、元乂もまた胡太后の妹

を娶っていたために、厚葬された。このためにこの２墓は、当時の政局が乱れた状況を反映しているのである。そのほかの塼室墓の被葬者身分が明らかなのは、あと４基の刺史級官吏墓で、大同元淑墓の墓室がやや大きいのを除けば、そのほかは一辺 4.4 m が多い。現状の資料から考えて、塼室墓の被葬者身分は最高封爵の王及び刺史（あるものは死後に贈られた）等の高級官吏で、王墓墓室が一辺約５m 以上、刺史級官吏墓の墓室は一辺約４～５m、墓室がより小さい墓の被葬者身分はより低い。少数の墓内には壁画がある。

南平王元暐墓と常山王元邵墓はいずれも土洞墓で、かつ規模は大きくなく、このような状況もまた彼らの死亡時の政治的背景が関係している。すなわちこの二王は殺され、正常でない死亡に属する。そのほかの土洞墓の被葬者身分が明らかなものには、刺史･太守（あるものは死後に贈られた）等の官吏である。墓室は一辺３～５m、大きさには一定の区別があるが、被葬者身分の高低は決して密接な関係はない。少数の墓には壁画がある。７基の墓の墓道は竪井と過洞を有し、土洞墓の半数以上を占める。

平城と洛陽一帯の北魏墓の中では元懌墓のみが、甬道内に石門を設けている。

北魏墓では単人墓が最も多く見られ、また双人双棺あるいは単棺合葬もある。多くは木棺を用い、石棺を用いるものもあり[39]（図４－40）、これらはすべて有棺葬であり、棺の形状はいずれも頭側が幅広で脚側が狭い形状の台形である。墓室内には棺床を設置して木棺を置くものがあり、土棺床・塼棺床・石棺床の３種がある。平城時期には一種の石灰枕の使用が流行した。葬具においては、２種の現象が注意に値する。一つはある墓内には棺外に槨を置くもので、たとえば大同湖東１号墓と七里村 25 号墓は一槨一棺で、元淑墓は一槨内に二棺を並列し、いずれも木槨である。偃師南蔡荘 89YNLT4 号墓の墓室内には塼で作った並列する二つの槨室がある。宋紹祖墓等では殿堂式の石槨を採用し、槨内は無棺である。もう一つは被葬者は直接尸床上に横たえられて、棺を使用しなく、無棺葬あるいは尸床葬と称することができる。この葬法は２人以上を合葬する情況が存在する。

ここでは尸床の概念は、棺床に対して提出したものである。棺床は棺を置く床台を指し、この用語が用いられている時間はすでに久しく、変更するべきではないが、棺を用いずに直接死体置く床台を棺床と呼ぶことはできないため、尸床と呼ぶことにする。棺を置く棺床と、死体を置く尸床の総称として、床台を用いる。

３　副葬品

前章の西晋墓副葬品の分類方法にしたがって、北魏墓も同様の装身具・実用（あるいは明器）器具・陶模型明器・陶俑の四大類副葬品があり、表現する内容は依然として現実生活中の厨・厩・婢妾の模倣が中心である。鎮墓類の陶俑はさらに流行し、武士俑と鎮墓獣が組合され、鎮墓獣の多くは２点一対で、１点は人面で１点は獣面である。副葬品の大類から見ると、最も顕著な変化は陶俑に見られる。たとえば十六国時期に出現する牛車を中心とする出行俑群（馬・牛車・武士俑・騎馬武士俑・甲騎具装俑・騎馬鼓吹俑・そのほか各種男女俑等）は継承されさらに豊富になり、「婢妾」

俑の種類と数量は大いに増加し（一般の男女侍俑を除き、そのほかに抱瓶俑・執盆俑・乳母俑・妓楽俑・舞俑・胡俑など）、駱駝俑が流行する等である。四大類副葬品を同時に備えた墓の多くは当然ながら大型墓と一部の中型墓で、一般の中小型墓は装身具以外に、少量の陶器と石器（石灯）と漆器が副葬されるのみである。

石製品の使用も北魏墓葬の一つの特徴であり、大きいものは石槨・石棺・石棺床・石門があり、小さいものは石灯などがある。

平城時期北魏墓の中には、動物の殉葬習俗が存在する。

西方の金銀器とガラス器も発見されており、当時の中国と西方の交流を研究する上での貴重な資料である。

出土墓誌の大きさ規格問題に関して、碑形墓誌以外には、諸王墓誌は一般に一辺 0.8 ～ 1.0m で、刺史･太守等の官吏墓誌の多くは一辺 0.5 ～ 0.6m である。一定の等級規制が存在したのかもしれない。

4　小　結

平城時期北魏墓はまだ地上施設の造営を重視しておらず、墓葬形態の双室塼墓・単室塼墓・単室土洞墓という区分は、被葬者の身分の差異を表しており、墓葬の等級には一定の規制が存在していたと考えられる。ただ現在ある資料からでは、まだその明確な概要を把握するのは困難であるが、大体被葬者の爵位と官職の高低による墓葬等級の規則は存在する。

孝文帝遷洛後、帝王陵墓の地上施設は次第に整っていった。帝陵の地上施設計画は文明太后の永固陵に始まり、孝文帝長陵までには一つの完整した陵園制度が形成された。墳丘高さ 20m 以上、墳丘南側の墓道延長線上の両側には石像を安置して神道を構成する、等の制度である。墓葬形態は前後甬道を備える塼室墓であり、甬道内には石門を設け、景陵墓室内には石棺床を設け、棺床上に帷帳を張り、甬道と墓室地面には全面に石板を舗装する。諸王墓中では元懌・元乂・元暐・元邵がいずれも非正常な死亡であるが、元懌・元乂墓の規模は偏って大きく、元乂・元邵墓の規模は偏って小さく、どちらも客観的な王墓規格を反映しているとはいえないが、それでもこれら 4 基の墓からは制度的問題を看取できる。たとえば墳丘高度が同時期の帝陵を超えない、20m 以内、甬道が前後二段に分かれなく、甬道内は元暐墓以外はいずれも石門を設けず、墓室内には石棺床を設けず、墓内には多くは壁画を描くなど、帝陵に対して王墓には一定の制度規範が存在したことを示しており、等級上は帝陵に次ぐ大型墓である。そのほかの刺史墓では多くが塼室を用い、塼室規模は大体似通っている。太守墓では土洞を多く用い、墓葬規模も差は大きくなく、洛陽時期北魏墓葬の等級序列はさらに一層強化されることを表している。今後の発掘成果を待てば、さらに多くの墓葬資料が発表され、北魏墓葬の等級序列がより一層明らかになることだろう。

過洞と竪井については、平城時期の単室塼墓と土洞墓には両方設置する墓の例があるが、全体に占める割合は少ない。洛陽時期になると、過洞と竪井は土洞墓のみに見られるようになり、かつ土洞墓総数の半分以上を占め、この時期には過洞と竪井を設置する方法が、すでに流行し始めていた

ことを示すが、まだ墓葬等級の標識とはなっていない。

無棺葬（尸床葬）の民族問題に関しては、現在のところまだ明らかでない。陝西西安ではかつて、北周ソグド（粟特）人康業と安伽の墓が発見されたが、これらはいずれも無棺の尸床葬であった。もし北魏平城時期にさかのぼるなら、都城大同一帯で発見されている無棺葬の民族は、ソグド人である可能性が極めて大きい。文献中にその関連情報を見いだすことができる。『魏書』等の史籍によれば、太武帝太延年間に粟特国は幾度も魏に遣使し、文成帝時期まで継続された。『魏書』（列伝第九十・西域）には「（粟特）其国商人先多詣涼土販貨、及克姑臧、悉見虜。高宗初、粟特王遣使請贖之、詔聴焉。自后無使朝献。」とある。また『魏書』（志第二十・釈老志）には「太延中、涼州平、徙其国人于京邑。」とあり、魏が涼州を平定後、そこの住民が大量に平城一帯に移住しており、そのうち一部はソグド人であろう。平城一帯にはすでにソグド人が居住していたのなら、彼らの死後、尸床葬俗を採用して平城郊外に埋葬した、という可能性は高い。このほか、宋紹祖の爵は敦煌公であり、尸床葬を採用しているのも、その一帯のソグド人葬俗の影響を受けたからであろう。

3　北朝の東魏北斉墓葬

534 年に北魏は東魏と西魏に分裂した。東魏は北斉に替わり、577 年北斉が滅びて北周となった。東魏北斉は 43 年間で、鄴城に都を置いた（現河北省臨漳県内）。

（1）墓葬概況

東魏北斉墓葬はその統轄範囲内の宏大な地域で発見され、現在の河北、河南、山西、北京、山東などの省市に分布し、総数およそ 200 余基あり、その中の４分の３以上は鄴城一帯に位置している。ほかに山西太原、山東済南・淄博、河北景県などにやや多く発見されている。ここでは鄴城付近の資料を中心にして、東魏北斉墓制の概論を述べる。

鄴城遺跡の西北約５km の漳河と滏陽河の間には、東魏北斉帝陵と大型陪葬墓が分布し、この時期最大規模の陵墓群を構成している。ここが河北省南端の磁県に属するため、通常は磁県北朝墓群と称す。河ひとつ隔てた漳河南岸にも多数の東魏北斉墓が分布し、中小型墓を主とする。ここは河南省北端の安陽市安陽県に属するため、安陽北朝墓群と称し、その中ではまた、ここ数年来安豊郷固岸村一帯で掘られた墓葬数が最多であり（表４－４）。

１　皇帝陵

磁県北朝墓群は東魏帝陵と北斉帝陵を中心として分布形成されている。魏孝静帝元善見の西陵（M35）が申荘郷前港村東南にあることが知られており、墳丘はほぼ円形を呈し、東西 121.5m、南北 118m、高さ 21.3m、墳頂の長さと幅はそれぞれ約 43m で[41]、墳丘の周囲の垣によって陵園を構成しており、平面形はほぼ四角形を呈し、一辺約 1140m、垣基部が残存しており、墳丘南側にも建物遺跡が残存している。近年出土した墓誌銘資料の分析によると、西陵の南は東魏皇族元氏の陪葬墓区であり、その中には大型墓が多く、西陵の東は異姓の功労者を陪葬する墓区であった[42]。

北斉帝陵は上述の西陵の東北に位置し、その中の大塚営村北のＭ１はおそらく神武皇帝高歓の

義平陵、Ｍ２はおそらく文襄帝高澄の峻成陵である。この２陵は地上に墳丘をもち、前者の墳丘は南北 79m、東西 77m、高さ 21.3 で、後者は 1977 年の時点ではまだ 22m の高さがあった。発掘されている M106 は湾漳村にあり、文宣帝高洋の武寧陵だと考えられている。これら帝陵付近には多くの北斉皇族高氏の墓が陪葬されており、その中には大型墓がかなりあり、それ以外にもそのほか異姓氏族功労者の陪葬墓がある。

東魏北斉帝陵で発掘されているのは湾漳 M106 のみである。この陵墓の地上施設は墳丘、神道、石像、建物などがある。墳丘底部はやや円形を呈し、直径 100 ～ 110m、本来の高さは 30m 余りであったが、現在すでに残存していない。陵の南で長さ 270m、幅 15m の道路遺構が発見されており、神道と考えられる。墓室の南約 100m の神道西側約 15m の所に１体の石像があり、高さ 4.06m で、神道東側にも本来もうひとつの石像があったであろう。墓室の南 270m の神道の東西両側にはそれぞれ１基の建築基壇(図４－41)が発見されている。陵園の垣についてはまだよくわかかっていない。

陵墓の地下施設は墓道、甬道、墓室によって構成されている（図４－42)。墓道は傾斜式で、甬道は前後２つの部分に分かれており、前甬道の方が後甬道より幅広で、後甬道内には石門を設ける。単墓室は５層の塼で築き、平面の胴張り四角形、東西 7.4m、南北 7.56m、元来の高さ 12.6m で、四隅攢尖頂である。甬道と墓室の床面には石板を敷き、墓室西側には須弥座式石棺床がある。墓道、甬道上方の門壁、甬道と墓室の壁面にはいずれも壁画が描かれている。比較分析によればこの墓は帝陵のランクに属し、文宣帝高洋の武寧陵である可能性が最も高い（560 年埋葬)。

２　大型墓

東魏北斉の官秩は“品”級によって高低が定められ、第一品・従一品から、第九品・従九品まで、合計 18 の品級があった。同時に、爵位もまた品級と連動し、その中で王爵の品級が最高で、第一品であり、その次に開国郡公、散郡公、開国県公、散県公、開国県侯、散県侯、開国県伯、散県伯、開国県子、散県子、開国県男、散県男（従５品)、合計 13 級の爵がある。

鄴城地区で正式に発掘された王墓、すなわち第一品官吏墓は２基のみで、それは河北磁県北斉馮翊文昭王高潤墓[43]（図４－43）と、修城郡王高孝緒墓[44]である。２墓はいずれも墓道、甬道と墓室からなる。墓道は傾斜式で、甬道の前後は幅が同じで、中には石門を設ける。単墓室で、平面形は胴張り方形、墓道、甬道上方の門壁、甬道と墓室の壁面にはいずれも壁画が描かれている。異なる点は、高潤墓墓室は３層の塼で築かれており、東西 6.45m、南北 6.4m、墓室西側に石棺床が築かれている。高孝緒墓墓室は２層の塼で築かれており、東西 5.6m、南北 5.2m、棺床の状況は不確かである。高潤は武平七年（A.D.576）に埋葬され、高孝緒の埋葬年は不明である。

河北磁県長広郡開国公高湛の妻の茹茹隣和公主呂叱地墓[45]は、もしその夫高湛の爵位に準じるならば、従一品であるべきである。高潤墓と比べると、この墓の墓室は同様に３層塼の墓室ではあるが、面積はより小さく、東西 5.58m、南北 5.23m で、棺床は塼築、棒状の青石で周囲を囲んでいる。壁画は同様に墓道、甬道上の門壁、甬道と墓室の壁面に施されている。比較的特殊なのは、この墓

の甬道は前、後に２段に分かれており、前甬道が後甬道より幅広である点である。しかし後甬道内にはただ石門框があるだけで、石門を備えておらず、それ以外にも後甬道の両壁にはまたそれぞれ１つの極めて小さい壁龕（図４－44）がある。埋葬年は東魏武定八年（A.D.550）である。

しかし、同じく従一品等級の河北磁県北斉開府儀同三司、懐州刺史尭峻墓[46]と、河南安陽北斉驃騎大将軍、開府儀同三司、涼州刺史范粋墓[47]では、前者は甬道内に石門を設け、一層塼の墓室で、東西 4.52m、南北 4.38m、塼棺床があり、埋葬年は北斉天統三年（A.D.567）（図４－45）である。後者は甬道内に石門を設けず、土洞墓室、東西 2.7m、南北 2.88m、塼棺床があり、埋葬年は北斉武平六年（A.D.575）（図４－46）である。

河南安陽北斉驃騎大将軍和紹隆墓[48]と車騎大将軍賈進墓[49]は第二品の等級で、甬道内に石門を設けないが、前者は単層塼室で、一辺 3.5 ～ 3.6m、塼棺床をもち、埋葬年は北斉天統四年（A.D.568）である。後者は土洞墓室で、一辺約３m、壁画装飾があり、埋葬年は北斉武平二年（A.D.571）である。

河北磁県鎮東将軍、徐州刺史元祜墓[50]は、従二品の等級で、墓道は１過洞１竪井をもち、甬道内に石門を設けず、土洞墓室、東西 4.5 ～ 4.7m、南北 4.3 ～ 5m で（図４－47）、過洞口上方・甬道口上方・墓室内に壁画が描かれており、埋葬年は東魏天平四年（A.D.537）である。

上述したように、鄴城地区東魏北斉の従二品以上の等級の大型墓はいずれも一本の傾斜した墓道をもつ単室墓で、墓室は塼室と土洞の二種があり、平面形はいずれも胴張り四角形を呈し、墓室内に石棺床あるいは塼棺床を設け、多くの墓内には壁画が描かれている。

３　中小型墓

いずれも１本の墓道をもつ単室塼墓あるいは単室土洞墓で、墓室平面形は胴張り方形・鏟形あるいは刀形を呈し、ある墓室内には塼棺床を設け、またあるものには囲屏石榻を設けて、棺木を用いない。たとえば河南安陽固岸墓地Ⅱ区 M5751）（図４－48）がある。

（２）葬制総論

地上施設・墓葬形態・副葬品の３方面から論述する。

１　地上施設

地上には陵園、陵寝建築、墳丘、神道、石刻などの一連の施設がある。陵園の実例は東魏孝静帝西陵に見ることができる。墳丘は皆円形で、高さは被葬者の身分と関係があり、上述した西陵の高さは 21.3m で、推測された神武皇帝の義平陵の高さは 21.3m、文襄帝峻成陵のもとの高さは約 22m、文宣帝武寧陵のもとの高さは約 30m で、この時期の帝陵の墳丘高はいずれも 20m 以上であったことがわかる。そのほかのランクの墓の関係する墳丘高の資料はより少なく、まだ系統だった認識を得ることができない。調査によると、東魏の文宣王元亶墓の墳丘残存高は約８m で（もとはもっと高い）、北斉司馬興龍墓の墳丘の残存高は 11.4m、その子の司馬遵業墓の墳丘残存高は 10.5m、司馬遵業は太尉などの要職にあったため、官は第一品と並び、この数例の墓の墳丘残存状況から見

て、諸王などの高品級官吏墓の墳丘は高さ10m以上である。神道・石刻・陵園建築の実例は文宣帝武寧陵に見られ、そのほかの陵墓の付近にも石刻が残っているものもある。たとえば東魏宜陽王元景植墓の前には石碑があり、東魏文宣王元亶墓の前にはもと石羊があり、北斉神武帝義平陵の前にはもと天禄・石闕などがあり、北斉孝宣公高翻・広平公高盛墓の前にはいずれも石碑と石虎などがあり、北斉司馬興龍墓の前には石羊の立像と臥像が１体ずつある[52]。ここからわかることは、皇帝陵の前には石闕・石人・石天禄などを置くことができ、皇帝に陪葬する高爵位貴族墓の前には多く石碑・石虎・石羊などが見られ、石人は見られない。これはもしかすると帝陵とそのほかの墓とで、用いる石刻に区別があったということかもしれない。

２　墓葬形態

鄴城地区の東魏北斉墓は、皇帝陵あるいは王公貴族墓に関わらず、いずれも一墓道単室墓で、一般に墓道は南向きで、この１点においては極めて大きく一致している。

現状の資料から見て、墓葬の規模と被葬者身分等級にはより強い関連性が存在する。墓葬の規模は多方面に表され、たとえば墓葬全体の長さ（墓道長、甬道長、墓室の大きさに細分可能）、甬道は２段に分かれるか否か、甬道内に石門が設置されているかどうか、墓室は塼室かあるいは土洞か、塼室の塼は何層か、甬道と墓室の舗装は石かあるいは塼を用いているのか、棺床は石で築くかそれとも塼で築くか、壁画が墓道、甬道、墓室のどの程度を覆っているか、また壁画の内容は、等である。

皇帝陵は全体規模が巨大である以外に、以下のような特徴がある。甬道が前後２段に分かれ、前段は後段より幅広く、後段内には石門が設置される。甬道、墓室の地面には石板が敷かれる。墓室は５層の塼で築かれる。墓室は一辺７m以上で長い。棺床は石で築かれる。壁画は墓道・甬道・墓室の壁面に描かれる、等である。

王墓の高潤墓と高孝緒墓においては、甬道は２段に分かれず、石門が設置されている。甬道・墓室の地面は塼が敷きつめられている。墓室は３層あるいは２層の塼で築かれる。墓室は一辺５m以上である。壁画は墓道・甬道・墓室の壁面に描かれる。２墓は同様に王墓だが、高潤墓の規模は比較的大きく、たとえば墓室一辺の長さは6.4mに達し、墓室内に石で築いた棺床などがあり、おそらく墓誌銘にある「賻給之数、率礼有加」と関係がある。

茹茹公主は皇族長広郡開国公高湛の妻で、この墓の甬道は前後２段に分かれ、前段幅は後段より広く、後段内には石門框が設置されているが、石門はない。甬道、墓室の地面には塼が敷きつめられ、墓室は３層の塼で築かれている。墓室の一辺の長さは５m以上である。棺床は塼で築かれ、棒状の石材で周囲を囲んでいる。壁画は墓道・甬道・墓室の壁面に描かれている。墓葬全体の規制から見て、この墓の規模と高孝緒墓に相当し、もしそのほかの従一品官吏墓と比較するならば、規模は大きく、加えて甬道を分段する方式を用いていることから、おそらく墓誌銘の「送終之礼、宜優常数」と関連がある。

尭峻墓は従一品の等級に属し、甬道は段に分けず、中に石門を設ける。墓室は単層の塼築で、墓

室一辺は４m 以上､棺床は塼築である。同様に従一品の范粋墓は土洞墓で､しかも規模はより小さく、おそらく特殊な状況に属する。

第二品等級の和紹隆墓は、甬道内に石門を設けておらず、墓室は単層塼築である。墓室一辺は３m 以上で、塼築棺床がある。同様に第二品の賈進墓は土洞墓で、墓室の規模はやや小さいが、さほどの違いはない。

従二品等級の元祜墓は土洞墓である。

上述した数基の第一品、従一品、第二品、従二品等級の大型墓から見られ、国家が皇族などに対して葬式上で特別な賻贈を与える以外、鄴城地区の東魏北斉墓においては比較的明確な等級の規制が存在した。当然、たとえば范粋墓などのような、いくつかの特殊な状況も存在した。

研究によれば、当時並州地区（現在の山西省太原市一帯）の墓においても相似した等級制度[53]がある。

東魏北斉墓は単人葬と２～３人合葬がある。

３　副葬品

ここでは前章の副葬品の分類の構想にしたがって、湾漳 M106（文宣帝武寧陵）を例にして分析を行う。この墓の副葬品も四種類に大別できる。第１類は被葬者の装身具で、棺槨中から出土し、たとえば玉佩、真珠、瑪瑙玉、水晶玉、石珠、陶珠などがある。第２類は各種の実用的な（あるいは明器）器具で、その中には陶器（釜、鼎、缶、皿、耳杯、灯、虎子)、磁器（罐、碗）があり、主に棺床上あるいはその付近に分布し、石灯は墓室の四隅を置かれる。第３類は陶模型明器で、倉、井戸、かまど、臼、厠、編鐘、編磬、車などがあり、多くは棺床付近に置かれる。第４類は陶俑で、鎮墓俑、儀仗俑、侍俑と各種の陶禽獣（鎮墓獣、駱駝、馬、牛、羊、豚、犬、鶏）があり、多くは棺床より東の区域に置かれる。

そのほかの東魏北斉大中型墓においても、この墓と極めて高い一致性をもつ種類の副葬品が出土しているが、ただ墓の等級が異なるため、副葬品の数量と品質にはある程度の違いがある。

４　小　結

東魏北斉皇帝陵の地上施設と墓葬の形態は、全体に北魏陵墓の制度を継承している。地上施設として陵園・陵寝建築・墳丘・神道・石刻などの要素はいずれも、洛陽時期北魏帝陵においてすでに形成されていたものである。もし東魏西陵と北魏長陵を比較するならば、西陵陵園は一辺約 1140m で、長陵陵園は一辺 500m 未満であり、陵園規模では前者が大きく凌ぐが、墳丘規模は似ていて、長陵墳丘は直径 105 ～ 110m、高さ 24m、西陵墳丘は直径約 120m、高さ 21.3m である。そのほか、東魏北斉帝陵の神道両側にある石刻は人物像のほかに、動物があるが、これは北魏帝陵においては見つかっていない。墓葬の形態と規模においては、東魏北斉帝陵と北魏帝陵は大変近く、たとえば甬道はすべて前後２段に分かれ、後甬道に石門（位置は異なる）を設け、甬道と墓室の地

面には石を敷き、墓室は５層の塼築で、墓室内には石棺床などを設ける。北斉武寧陵の墓室は北魏景陵のそれより少し大きいが、その差は大きくない。東魏北斉帝陵と北魏帝陵の最大の違いは、墓内を壁画で装飾する点であり、しかも墓道・甬道・墓室のすべてを壁画装飾で覆っているのである。

大・中型墓について、地上施設では、東魏北斉墓と北魏墓は墳丘の形態と規模がおおよそ共通しているほか、東魏北斉墓では石刻を立てることが流行し、その種類には虎や羊などがあり、しかも碑を立てる風習は北魏時代に比べて盛んに行われた。墓葬の形態では、いずれも単室塼墓と単室土洞墓の２種類がある。全体的に、北魏洛陽時期大・中型墓においては等級序列がわずかに顕在化しているが、東魏北斉墓の完整した等級制度には遠く及ばない。そのほか、東魏北斉土洞墓においては、北魏土洞墓で流行する墓道に竪井と過洞を付帯する方式はない。

東魏北斉墓と北魏墓における副葬品の種類は、基本的に同一である。

４　北朝の西魏北周墓葬

北魏は534年に分裂して東魏と西魏になった。西魏は北周に替わり、581年には北周が隋に替わった。西魏北周は合わせて47年間で、都は長安城にあった（現在の陝西省西安市）。

（１）墓葬概況

西魏墓葬の発見はとても少なく、墓葬の形態が明らかで、年代が確実なのは、陝西咸陽侯義墓[59]と謝婆仁墓[60]の２基だけである。北周墓も主に咸陽以北の黄土高原で発見され、そのうち咸陽国際空港建設中に検出された10数基は、被葬者の身分等級がとても高いものが大部分で、おそらく高級官吏の墓地である[61]。近年また空港の第二期拡張工事中に29基の墓が発掘された[62]。周の武帝孝陵がこの墓地の東にあり[63]、拓跋虎墓がこの墓地の南にある[64]。それ以外に北周墓葬が、当時の都長安の東の郊外と南の郊外、すなわち現在の西安市北郊外と南郊外で発見されている。そのうち西安市北郊外で発見された４基の墓は、被葬者はすべて当時の中央アジア民族で、その中の３人はソグド人の後裔で[65]、もう１人は罽賓から来たバラモンの後裔である[66]。ここからわかるように、この一帯は長安に来た中央アジア人の埋葬区だったのである。西安市南郊外の数基の墓は、規模はやや小さくて、おそらく一般官吏墓であろう。

都の長安から遠く離れた寧夏固原で発掘された４基の北周墓[67]は、都城付近の墓との比較資料とすることができる（表４－５）。

１　皇帝陵

西魏には３人の皇帝がいたが、文帝元宝炬の永陵のみがその所在を知られている。永陵は陝西省富平県留古鎮大衆村に位置し、地上には円形墳丘が残存し、底径約230m、高さは13mである。墳丘の南には１点の石獣が残存している。永陵の東北にもう１つ墳丘があり、底径91.3m、残存高約５mで、性質は不明である。

宇文泰は西魏時期に死去し、成陵に埋葬され、後に北周文帝に尊ばれた。成陵は富平県宮里郷に位置し、墳丘は円形で、底径約149m、高さ9.6mで、元は近くに石獅子蹲踞像が１点あった（陝

西省文物局・西安文物保護修復中心：『陝西帝陵档案』陝西出版集団三秦出版社、2010 年）。

北周は全部で５人の皇帝があり、その中の武帝宇文邕の孝陵は盗掘されたために発掘が行われた。孝陵は陝西省咸陽市底張鎮陳馬村に位置し、１本の長い傾斜した墓道をもつ土洞墓で、墓道は南向きで、５つの竪井をもち、その中の第４、５の竪井の東西両壁にはそれぞれ１つの壁龕（合計４つ）があり、墓室北側には１つ壁龕があり、墓室と壁龕は合わせて南北 5.5m、東西 3.8m である（図４－ 49）。埋葬年は宣政元年（A.D.578）である。２つの墓誌銘と２組の棺槨が出土し、夫婦合葬墓である。孝陵は墳丘などの地上施設が発見されていない。

２　大中型墓

西魏北周墓葬の主な形態は、長い傾斜した墓道をもつ単室土洞墓で、ほかに双室土洞墓と単室塼墓も少しある。

A　双室土洞墓

主要な墓室、つまり前室・後室の２つがあり、前後室の間には甬道がなく、あるものは前室に１つの側室が付く。一般に前室が比較的大きく、平面形はおよそ方形を呈し、後室が比較的小さく、平面形は台形あるいは長方形を呈す。例として、咸陽の叱羅協墓（図４－ 50）、若干雲墓（図４－ 51）、独孤蔵墓（図４－ 52）、固原の田弘墓（図４－ 53）があり、いずれも北周墓である。棺槨は多くは後室に並べられるが、たとえば田弘墓のように前後２室両方に棺槨を置くものもある。また後室と側室に棺槨を置くものには、独孤蔵墓がある。

墓道にある竪井の数は様々で、たとえば叱羅協墓は６つ、田弘墓は５つ、若干雲墓と独孤蔵墓はそれぞれ３つである。前室規模もまた一様でなく、たとえば叱羅協墓前室の一辺は長さ 3.8m、田弘墓の前室の一辺は長さ約 3.2m、若干雲墓前室の一辺の長さは約 2.2m、独孤蔵墓前室の一辺の長さは約 2.7m である。

副葬される墓誌銘の大きさ（一辺の長さ）は、叱羅協墓が 0.733m、田弘墓が 0.72m、若干雲墓が 0.57m、独孤蔵墓が 0.54m である。そのうち叱羅協墓、田弘墓、独孤蔵墓には壁画が描かれている。

B　単室土洞墓

土洞墓室がひとつだけである。このような形態の墓葬の数量が最も多く、最も流行したもので、そのうち被葬者身分が比較的明確なものに、たとえば咸陽の西魏侯義墓、北周宇文俠墓[68]（図４－ 54）、尉遲運墓（図４－ 55）、拓跋虎墓、王徳衡墓（図４－ 56）、西安北郊外の北周康業墓（図４－ 57）、史君墓（図４－ 58）、及び固原の北周李賢墓（図４－ 59）、宇文猛墓などがある。そのうち康業墓と史君墓の被葬者はそれぞれ中央アジアの康国、史国から来たソグド人の末裔である。

これらの墓の墓道にある竪井の数が明らかなものでは、西魏侯義墓は０個、北周宇文俠墓は５個、尉遲運墓は５個、王徳衡墓は３個、史君墓は５個、李賢墓３個、宇文猛墓は５個である。

墓室の平面形はその多数が方形あるいは方形に近い形状を呈し、そのうち北周宇文俠墓室の一辺の長さは約 3.6m、尉遲運墓室の一辺の長さは約 3.5m、康業墓室の一辺の長さは約 3.4m、史君墓室

の一辺の長さは約 3.6m、李賢墓室の一辺の長さは約 3.9 m、宇文猛墓室の一辺の長さは約 3.5m である。たとえば王徳衡墓のように、一部の墓室の平面形は長方形を呈す。同墓室の長さは 4.35m で、幅は 3.06m である。

副葬される墓誌銘の大きさ（一辺の長さ）は、西魏侯義墓は 0.65m、北周宇文倹墓は約 0.73m、尉遲運墓は 0.73m、拓跋虎墓は 0.42m、王徳衡墓は 0.51m、康業墓は 0.465m、李賢墓は 0.675m である。

そのうちの西魏侯義墓、北周尉遲運墓、王徳衡墓、康業墓、史君墓、李賢墓、宇文猛墓には壁画が描かれている。

C　単室塼墓

甬道と墓室が塼築のもの。発見されているのは２基だけで、西安北郊外の北周李誕墓（図４－60）と安伽墓（４－61）である。

この２基の規模は大きく違わず、墓室形状は単室土洞墓に似ていて、平面形はおよそ方形を呈し、一辺の長さは約 3.6m である。李誕墓の墓道は未発掘なので、状況が不明である。安伽墓は長い傾斜した墓道で、５つの竪井がある。

被葬者李誕は中央アジアの罽賓国から来たバラモンで、安伽は中央アジアの安国から来たソグド人の末裔である。

（２）葬制総論

西魏北周と東魏北斉はどちらも北魏から分裂したものだが、この２つの東西に対峙する政権は、政治・文化上の距離が次第に離れてゆき、とても大きな相違を示すようになる。たとえば北周は儒教を敬い、仏教と道教を禁じ、質朴を崇めたが、北斉は仏教を尊んで、豪華さを崇めた。これらの文化意識上の違いは、墓葬制度上にもある程度現れている。

１　地上施設

西魏文帝の永陵と宇文泰の成陵はいずれも比較的高大な墳丘をもち、近くには石獣などの神道石刻が残存する。これら地上施設は、明らかに北魏から継承された帝陵の制度であり、この２陵に対してまだ全面的な考古調査を行っていないため、その地上に設置された内容の詳しいことは分からないが、陵園及び関連建物などの施設があったと推測される。

しかし、北周武帝孝陵の地上には何もなく、そのほかのいくつかの北周帝陵は今なおいかなる手がかりもないため、地上施設が何もなかった可能性が高い。北魏・西魏の長時期に流行した墳丘などの地上施設の陵墓制度の背景下で、北周帝陵は依然として地上施設を建築せず、北周帝陵制度の重大な変革を体現している。その根本的原因は、北周の復古の文化政策とは関係があり、埋葬上においてまた薄葬を行ったことが表れている。同時期の北斉帝陵の高墳丘と比較して見ると、北周帝陵の質朴さが、とりわけ際立っていることがわかるだろう。帝陵だけではなく、北周の大・中型墓も、ほとんど同様に墳丘などの地上施設の姿が見えず、個別になお判断を保留している報告以外には、咸陽叱羅協墓がかつて高さ 20m の墳丘を有していたとされ、また尉遲運墓が検出された時に

３体の石像、２体の石羊、２体の石虎が墓の南の地下に埋められていた例がある。たとえ叱羅協墓の墳丘と尉遲運墓の神道石刻が確かに存在していたとしても、これらはわずかな事例にすぎない。

以上のように、北周時期の都一帯の墓葬は、帝陵から、一般墓葬まで、地上に墳丘などの施設がない。このような推定は、文献と出土墓誌銘からも証明される。『周書』（帝紀第四・明帝）には、明帝の死が近づき、以下のような詔が下ったと記されている。「朕稟生俭素、非能力行菲薄、毎寝大布之被、服大帛之衣、凡是器用、皆無彫刻。身終之日、豈容違棄此好。喪事所須、務従俭約、斂以時服、勿使有金玉之飾。若以礼不可闕、皆令用瓦。小斂訖、七日哭。文武百官各権辟衰麻、且以素服従事。葬日、選択不毛之地、因地勢為墳、勿封勿樹。且厚葬傷生、聖人所誡、朕既服膺聖人之教、安敢違之。凡百官司、勿異朕此意。」また『周書』（帝紀第六･武帝下）には武帝の遺詔があり、「朕平生居処、毎存菲薄、非直以訓子孫、亦乃本心所好。喪事資用、須使俭而合礼、墓而不墳、自古通典。」薄葬は帝陵だけに留まらず、咸陽北周譙王宇文俭墓出土の墓誌銘には、「率由古礼、不封不樹」とあり、皇帝の提唱が、臣下の葬制に対しても影響を及ぼしていたことがわかる。この３例の文献記載から、３点の認識を得ることができる。１つは、この何人の北周帝王は生前に俭約し、死後に薄葬された。２つめは、彼らの葬儀は簡略だが、「合礼」である必要があった。すなわち礼制に合致しなくてはならなかったのであり、当時依然として等級秩序の規範に基づく喪葬制度が存在したことを表している。３つめは、すべて「墓而不墳」としていることで、つまり「勿封勿樹」や「不封不樹」である。埋葬制度の諸要素の変革の中で、地上施設を建てる伝統がすでに長く、影響が非常に深かったため、変革は最も困難であったのだということを、重点的に強調しているのである。

固原で発見された３基の北周墓が長安地区の北周墓と違う点は、すべて墳丘を有している点であり、見たところ京城の埋葬制度はこのような遠隔地には届かなかったようである。また次に述べるように、墓道が付く竪井の数、墓室・墓誌銘の大きさと被葬者の身分等級の対応関係においては、それらは都一帯の墓ほど強い規制性がない。

２　墓葬形態

西魏北周の官秩は“命”級の高低によって定められ、正九命・九命から、正一命・一命まで、全部で 18 のランクがあり、同時にまた王・公・侯・伯・子・男の爵位制が施行された。

北周墓は土洞墓を主とする特徴が明確で、墓道はいずれも南向きで、非常に統一性が高い。双室土洞墓と単室土洞墓と等級の違いは不明瞭で、皇帝の武帝孝陵が採用したのは単室墓で、双室墓の被葬者は正九命・九命あるいは八命の官吏であり、だから、双室墓もまた単室墓にひとつの側室を付加したものだということができる。長い傾斜した墓道に竪井と過洞を付く形態がとても流行し、壁龕はすでに高級墓の墓道中に現れていたが、たとえば武帝孝陵と叱羅協墓などのように、まだ普遍的ではなかった。都長安一帯の被葬者身分が明らかな墓から見ると、全体的に、墓道に設けられた竪井の数と墓の等級が対応する。たとえば武帝孝陵は５つの竪井をもち、官秩が正九命の宇文俭墓・尉遲運墓はいずれも５つだが、同様に正九命の官秩である若干雲墓は３つの過洞だけで、おそ

らく彼が殺害されたという政治背景と関係がある。以上のように、正九命の官吏墓には通常５つの竪井を設けた。帝陵はより多い竪井があるべきだが、武帝孝陵は５つだけで、これはおそらく薄葬の成果を表している。九命官吏の叱羅協墓は６つの竪井を設置するやり方をとっており、これは明らかに特例である。九命官吏の王徳衡墓と八命官吏の独孤蔵墓は３つの竪井を設置し、おそらくこの等級における規制を示している。それ以外に、墓室（双室墓では前室を指す）の大きさもまた、墓道の竪井の数と被葬者の身分等級と大体において対応する。たとえば５つの竪井をもつ正九命等級の墓は、墓室の一辺の長さ３m 以上（3.5m 前後）で、３つの竪井をもつ等級の墓は、墓室の一辺の長さが３m 以下（2.8m 前後）である。墓誌銘も同様な特徴を表し、５つの竪井をもつ正九命等級の墓では、墓誌銘の一辺の長さが約 0.7m、３つの竪井をもつ等級の墓では、墓誌銘の一辺の長さが約 0.5m である。墓室と墓誌銘については、差異は少ないが、武帝孝陵はいずれも正九命墓より大きく、帝陵の特性を表しているが、叱羅協墓は一貫して特例である。

西安北郊外にある４基の北周時期に中国に来た中央アジア人墓、康業と史君の２基は単室土洞墓で、傾斜墓道の状況は不明であり、李誕と安伽の２基は単室塼墓で、墓道にはそれぞれ５つの竪井を設けている。この４基の外来民族墓の状況を見ると、その埋葬習俗は中国の墓葬と異なっているため、そのほかの北周墓と一緒にして等級制度問題を討論するべきではない。この４基の墓葬の独特な特徴は以下のとおりである。李誕墓と安伽墓は発見されている北周墓中でただ２基のみの塼室墓であり、しかも墓道はいずれも５つの竪井を伴っており、当時の現地で流行していた土洞墓制とは明らかに異なっている。５つの竪井の規模も被葬者の身分等級と一致せず、特殊であるといえる。４基はいずれも石門を設けている点が共通している。４基はいずれも木質の棺槨を用いず、たとえば李誕墓は石棺、康業墓と安伽墓は囲屏石榻、史君墓は石槨（「石堂」）を用いるなど、すべて石製の葬具を用いている。個別の装身具以外に、４基はいずれもその当時流行していた副葬品を用いていない。研究者が指摘しているように、４基の形態（長い傾斜した墓道の単室墓、墓内に壁画が描かれる等）は当時の流行であり、塼墓室、石門、石棺、石槨、石榻などの施設と葬具は北周長安一帯で流行した方法ではないが、以前の北魏時代においてはいずれも先例があり、中国の文化要素に属するものである。しかしこれらの石製施設と葬具がこの時この場所で使用され、その上に中央アジア民族の生活的特徴をもつ図像を飾り、石槨（図４－62）・石榻（図４－63）の無棺葬を行い、そして当時流行していた副葬品を用いず、口中に貨幣を含ませる作法など、いずれも中国と相違する西方の中央アジアソグド民族等の埋葬習俗が示されており、これらは中国の文化要素ではない。つまり、この４基の墓葬は中央アジアの民族文化と中国の文化の混合体であり、中国に来た中央アジアソグド民族等の埋葬習俗と埋葬観念が反映されているのである。

北周墓葬では単人埋葬、夫婦同穴合葬もある。

３　副葬品

大分類から見ると、北魏及び東魏北斉墓の副葬品と等しいが、副葬品の数量は少なく、また器形

がより小さく、製作方法も比較的簡単になっており、ここにも一定の薄葬化の傾向が現れている。

4　小　結

上述したように、比較的集中している咸陽以北の黄土高原で発見されている北周墓のうち、形態が完全でかつ被葬者の身分が明確な一部の墓の例を見ると、北周時期、特に武帝時期の墓葬は一部の特例以外、墓道に付く竪井の数、墓室規模と墓誌銘の大きさなどに一定の等級序列が表されており、少なくとも都一帯の北周墓においては等級制度が存在したことを示している。同時に北周時期、特に武帝時期の埋葬礼制を含む儀礼制度に拘束力があったということを反映している。固原一帯の北周墓制はそれと異なり、西安北郊外にある４基のソグド人とバラモン人の墓は、さらに特殊である。

北周墓葬、特に都一帯の墓葬は、薄葬化の特徴を鮮明に表している。北周の薄葬化は上から下に実行され、帝王が提唱実行した。その原因を追って見ると、当時の社会状況に行き着く。たとえば北斉との政治、軍事的対峙及び数年間の戦争による経済の困窮などと関係があり、しかも北周の統治者が制度の改変を遂行し、仏教道教を抑えて儒教を尊んで、質朴を崇め、風俗を簡素化した策略の結果である、といわざるを得ない。北周統治者の志は遥か高く、懸命な改革の目的はほかでもなく富国強兵であり、それは当時の敵－北斉、南朝と対抗するためであった。

北斉墓制と比べて、北周が薄葬化を遂行したことは、主に以下の点に現れている。１つは墳丘、陵園、神道、建物などすべての地上施設を徹底的に禁止した。つまり「勿封勿樹」である。２つめは墓の形態において、塼室を用いず、甬道内に石門を設けず、あるものは木門を設け、墓室内では塼・石棺床を築かず、あるものは土棺床あるいは木棺床を設けている。３つめは墓室壁画が発達しないことで、壁画は粗雑で内容は簡単である。４つめは副葬品が少なく、しかも製作が質朴である。

第２節　東晋・南朝墳丘墓

三国時期の孫呉及びその後の東晋、南朝の宋･斉･梁･陳はすべて健康に都し、「六朝」と総称される。地縁経済・文化伝承などの要因から、六朝墓葬の間には明確な継承関係が存在する。このため、ここでは東晋・南朝の墓葬を論じる前に、孫呉の墓葬の考古学的発見状況を簡単に述べる。

孫呉の墓葬は長江沿線の湖北・江西・安徽・江蘇などの省で発見が多く、とりわけ湖北鄂州・江西南昌・安徽馬鞍山・江蘇南京などの地に集中する。

三国時期の曹魏墓葬は、後漢墓制への変革を基礎として、魏晋墓制を創生した。その中で極めて重要であるのは、地面施設を廃絶させたことであり、墳丘・陵園・陵寝建築・神道石刻などは殆どなくなった。考古学的な実例から見ると、同時期の孫呉の墓葬は墳丘など地面施設を伴い、曹魏墓制と異なっている。たとえば、馬鞍山朱然とその家族墓[69]は、馬鞍山宋山東呉墓[70]や南京江寧上坊孫呉 M1[71]などはいずれも墳丘を有する。その中でも、宋山東呉墓の墳丘は覆斗形で、長さ 28m、幅 14m、高さ 3.5m である。そのほかのいくつかの墓の墳丘の多くは破壊され、形状は不明である。

ある研究者は、東呉帝陵には墳丘があったであろうと考証する[72]。上述の墳丘を有する孫呉墓の例から見て、こうした認識は合理的である。甚だしきに至っては、宋山東呉墓は、発掘担当者によって、呉の景帝孫休の陵墓である可能性が考えられている。孫呉墓葬の地面施設は、墳丘以外に、南京江寧上坊孫呉墓の付近でのみ、建築材料が発見されており、墳丘のそばに陵寝類の建築遺存が存在していたことが推測されている。

孫呉墓葬の形態は主に２種類ある。一つは前後の２室の主要墓室からなる双室塼墓、もう一つはただ１室の主要墓室からなる単室塼墓である。

墓葬の平面配置から、双室墓にはまた、横前室双室墓と方形（もしくは方形に近い形態）前室双室墓の２類があり、２類の墓の後室はともに縦長方形（横前室墓には、並列した双後室が伴うものもある）で、前室には多くの場合側室が伴う。墓の甬道や後室にも耳室・側室が伴うものもあり、個別の墓の後室には壁龕が伴う。前室には常に塼積の祭台が見られ、後室にはしばしば塼積の棺床及び棺を受ける施設がある。墓の内外には、しばしば排水施設を設ける。横前室双室墓の例として、鄂城孫将軍墓[73]（図４－64）や馬鞍山宋山墓（図４－65）などがあり、方形（もしくは方形に近い）前室双室墓の例として、馬鞍山の朱然とその家族の墓（図４－66）や南京江寧上坊Ｍ１（図４－67）などがある。方形（もしくは方形に近い）前室双室墓の中で、後室の幅が前室に近いか同じであるものもあり、こうした形態は南方地区の西晋墓に対して影響を与え、例として南京清涼山孫呉墓がある[74]（図４－68）。

単室墓は一般的に、墓室は長方形で、側室か壁龕を伴うものもある。例として、南京大光路薛秋墓[75]（図４－69）などがある。

このほか、孫呉時期には並列双室塼墓や竪穴土壙墓などの形態もある。

馬鞍山朱然墓には２基の棺があり、保存は良好である。棺はおおよそ長方形で、底板･左右の側板･前後の擋板・蓋板の６つの木板から組み合わされる。木板の間には、枘穴によってつながっている。そのうち１号棺は棺長が 2.93m、幅 0.92m、高さ 0.73m、棺蓋長さ 3.62m、幅 0.94m。棺外には黒漆、棺内には赤漆が塗られる（図４－70）。同時期には木を穿って棺底と両側壁とし、その後、前後の板を挟み込み、さらに蓋板を加えて長方形木棺とした。棺は片側が大きく、もう一方は小さい。例として、江西南昌高栄墓[76]がある。

孫呉墓葬の副葬品も、装身用具・実用（もしくは明器）の器具・模型の明器・陶俑の４つに分類できる。これ以外にも、鉛地券や「穀倉罐」が大変特色があり、西晋時期にもなお使用された。

孫呉の帝陵はいまだ発掘されていない。一部の研究者が認識するように馬鞍山宋山東呉墓が呉景帝孫休の陵墓かもしれないが、こうした見解は学界では広い支持は得られていない。南京江寧上坊孫呉墓は、王墓ではないかと考えられている。総じて、双室塼墓は帝陵以外の大型墓葬に属し、単室塼墓は中型墓葬に属す。

墓葬形態から見て、孫呉墓葬は曹魏墓葬と比較的一致した変化傾向が見られる。すなわち後漢墓葬と比べ、簡単化の傾向である。

孫呉は西晋に統一されたのちも、南方の西晋墓は孫呉墓の直接の影響を受けている。南方の西晋墓の概況は、先に述べたとおりである。西晋以降、北方は十六国が相争う局面に入り、南方は晋－東晋の統治が続く。

1　東晋墓葬

東晋は、317 年から 420 年まで、103 年に及び、11 人の帝が存在する。東晋は建康（現在の江蘇省南京市）に都を置いたため、この時期の皇帝陵や世家大族墓の多くは南京市とその周辺に分布する。ここでは南京地区の東晋墓を中心として、東晋墓の概況を簡単に述べる。

（1）墓葬概況

1　皇帝陵

東晋末代の皇帝－晋恭帝の玄宮石碣の発見を契機として[77]、研究者たちは文献記載を参考に、発見された東晋大墓の比較研究を行った。南京大学北園東晋墓[78]（図４－71）、南京富貴山東晋墓[79]（図４－72～73）、南京北郊汽輪電機厂東晋墓[80]（図４－74）は同時期の墓葬と比べ、規模が大きく、形態も特殊で、副葬品も豊富であり、東晋帝陵に属する可能性が考えられている。その中でも南京大学北園東晋墓は、「鶏籠山の陽」に葬られた東晋元帝（司馬叡）の建平陵、明帝（司馬紹）の武平陵、成帝（司馬衍）の興平陵、哀帝（司馬丕）の安平陵の四陵のいずれかにあたる可能性がある。南京富貴山東晋墓は、「鐘山の陽」に葬られた東晋康帝（司馬岳）の崇平陵、簡文帝（司馬昱）の高平陵、孝武帝（司馬曜）の隆平陵、安帝（司馬徳宗）の休平陵、恭帝（司馬徳文）の冲平陵の五陵のいずれかにあたる可能性がある。南京北郊の汽輪電機厂東晋墓は、「幕府山の陽」に葬られた東晋穆帝（司馬聃）の永平陵の可能性がある（以上の東晋帝陵の地理的位置は、唐代の許嵩の編纂した『建康実録』による）[81]。

上述の３基の墓葬の共通した特徴は次のとおりである。

・地面にはいずれも墳丘などの陵園施設は見られない。

・墓外には、いずれも障土壁が設けられている。

・墓葬形態は、いずれも甬道を伴う方形に近い、もしくは長方形のアーチ天蓋の単室塼墓で、南京大学北園墓の場合は、１つの側室が伴う。

・墓道は短く小さい。

・甬道内には、いずれも２本の木門槽がある。

・墓室の長さ、幅はいずれも４m 以上で、面積はおおよそ 17～36㎡ほどである。

・墓室内壁は、直櫺窓や灯龕を設けない。

・墓内には、祭台や棺床を設けない。

・棺木はすでに腐朽してなくなっている。しかし銅・鉄の棺釘は出土している。

・墓内からは、４点一組の陶座が出土し、龍首のものと虎首のものはそれぞれ二つがある（南京大学北園墓ではそれぞれ１点が出土している）。

・比較的多くの金・銀・玉石・ガラス器皿などの希少な物品が副葬される（表４－６第１～３）。

南京北郊の汽輪電機厂東晋墓の近くに所在する幕府山１～４号墓は、４基の墓のうち３基に４点一組の龍首や虎首が装飾された陶座が出土している。そのため東晋の皇族の墓葬ではないかと考えられている[82]（表４－６第４～７）。富貴山に位置するそれ以外の４基の東晋墓（２号墓、４～６号墓）も皇族の墓葬であるかもしれない[83]（表４－６第８～９）。東晋では一族で集合して埋葬する習慣が大変流行し、皇族の司馬氏も例外ではない。当然、皇陵と比較していえば、そのほかの墓葬も陪葬の性格を有する。

２　大中型墓葬－世家大族墓を主として

歴年にわたり、南京地区では多くの世家大族墓地が発見・発掘されている。その中で著名なものとして、象山王氏・老虎山顔氏・郭家山温氏・司家山謝氏・戚家山謝氏・呂家山李氏・仙鶴山高氏家族墓地などがある（図４－75）。

Ａ　象山王氏家族墓地

象山は南京市北郊に位置し、東南・東北には郭家山・老虎山に近接する。

20 世紀 60 年代以来、継続してこの一帯で 11 基の墓葬が発掘されている（M1 ～ M11 と番号が付けられている）[84]。その中で１基（M2）の時期は南朝に属し、そのほかの 10 基は東晋墓である（表４－６第 10 ～ 19）。10 基の東晋墓は象山の４つの区域に分布する。その中で、西部に１基（M7）、西南部に４基（M1、M3 ～ M5）、東南部に４座（M8 ～ M11）、東北部に１基（M6）分布する（図４－76）。

10 基の東晋墓の規模は差がなく、形態も同じであり、１基の墓室がドーム型である（M7）（図４－77）以外は、ほかはすべてアーチ型である。多くは甬道があり、甬道内には木門を設けない。墓室内は一般に棺床と祭台がない。多くは排水溝が設けられている。墓室壁には、多くは灯龕が設けられている。墓外には、多くは障土壁が設けられている。明らかに傾斜した墓道と封土があるのは、M10 のみである（図４－78）。

墓中から出土した墓誌により、M1 の墓主は王興之夫妻（王彬の子）、M3 の墓主は王丹虎（王彬の娘）、M5 の墓主は王閩之（王興之の子）、M6 の墓主は夏金虎（王彬の継室夫人）、M8 佥の墓主は王佥之（王彬と夏金虎の子）、M9 の墓主は王建之夫妻（王彬の孫）、M11 の墓主は王康之夫妻（王彬の孫と思われる）である。このことから、象山は東晋の王氏一族の王彬の一つの家族墓地であることが確定し、ここでは少なくとも王氏の三代が埋葬されている。

Ｂ　老虎山顔氏家族墓地

老虎山は南京市北郊に位置し、西南には象山・郭家山に近接する。

老虎山東晋墓地からは、４基の墓葬が発掘された（M1 ～ M4 と番号が付けられている）[85]。４基の墓は形態が近似し、いずれも甬道を伴う長方形単室塼墓であり、墓葬の規模はほぼ同じである。M1 の墓室はドーム型で、そのほかの３基の墓室はアーチ型である。３基の墓は甬道内に一基の木

門が設けられ、３基の墓の墓室前部には祭台がある。墓壁はいずれも直櫺窓か灯龕を設けている。墓内にはいずれも排水溝がある。その中でM2・M3は明らかな夫妻合葬墓である（表４－６第20～23）。

墓内より出土した塼墓誌・石印章・銅印章、ならびに『晋書』列伝第五十八・孝友伝・『金陵通伝』などの文献記載を参照すれば、M1の墓主は安成太守顔謙夫人の劉氏である。しかし、この墓からは25枚の銅棺釘と５枚の鉄棺釘が出土している。そのため、元来墓内に２棺が置かれていた可能性は排除できず、この墓が顔謙夫妻二人が合葬されていた可能性も排除できない。M3の墓主は零陵太守顔約夫妻である。M2の墓主は顔髦の子の顔綝夫妻である。M4の墓主は顔鎮之である。髦・謙・約は、東晋の名臣の琅琊人の顔含の３人の子で、このことから老虎山の諸々の墓は顔氏の家族墓であることがわかる。

『晋書』には、顔含が死の前に「遺命素棺薄斂」と述べたと記載され、その子孫の墓葬には顔含の「遺命」をかすかに見ることができる。

C　郭家山温氏家族墓地

郭家山は南京市北郊に位置し、西北・東北には象山・老虎山を望む。歴年にわたり、ここでは六朝墓葬の13基（Ｍ１～M13と番号が付けられる）が発掘され、そのうち孫呉墓葬が３基（Ｍ６～Ｍ８）、西晋墓葬が１基（M11）、東晋墓葬が９基（M1～M5・M9・M10・M12・M13）[86]である。９基の東晋墓葬の中で、M1～M5の５基は郭家山の東端に位置し、M9・M10・M12・M13の４基は郭家山の西端に位置する（表４－６第24～32）（図４－79）。

M9・M10・M12・M13の４基の墓は東西に並列し、形態は近似し、いずれも甬道を伴った単室塼墓である。このうち３基の墓室はドーム型で、１基の墓室はアーチ型である（M13）（図４－80）。甬道内にはいずれも一基の木門が設けられる。墓室壁はいずれも直櫺窓や灯龕を設けている。墓内は、いずれも塼棺床か祭台があり、排水溝を設ける。墓外はいずれも障土壁がある（図４－81）。４基の墓の中でM10の規模が最大であり、ほかの３基の規模は大差がない。出土した塼墓誌によれば、M9の墓主は東晋の大将軍であった始安忠武公温嶠で、M12の墓主は温嶠の子で、新建県侯温式之である。郭家山の西端一帯は東晋温氏の家族墓地であることが確定した。

M1～M5の５基の墓はいずれも東晋前期に属し、形態は共通し、すべて甬道を伴う単室のドーム型塼墓である。その中でM1の規模が最大である。しかし、墓主の身分は不明である。そのため、これらの墓が温氏の家族墓に属するかどうかは確定できない。

D　司家山謝氏家族墓地

司家山は南京市南郊に位置し、1980年代にここで７基の墓葬が調査され（M1～M7と番号が付けられる）[87]（表４－６第33～39）、そのうちM2～M5の４基は東晋後期の墓で、M1・M6・M7の３基は南朝墓である（図４－82）。

７基の墓葬は南北２列に分かれ、南には４基、北には３基が並び、それぞれの列において、墓葬は東西に並列する。墓葬はいずれも南向きで、形態はほぼ同じで（M7は大部分が壊されている）、

大きさも近似する。いずれも甬道を伴う長方形のアーチ型の単室塼墓である。３基の墓には、甬道内に一基の木門を設ける。墓室壁は、いずれも直櫺窓や灯龕を設けており、一般的にそれぞれ５点がある。墓内はいずれも塼棺床があり、塼祭台を設けるものもある。いずれも排水溝がある。墓外に障土壁を設けるものもある。墓葬の墓道と墳丘の状況は不明である。

出土した塼墓誌から、M4 の墓主は東晋謝球とその夫人の王徳光（図４－83)、M5 の墓主は東晋謝温（図４－84)、M6 の墓主は南朝劉宋の謝琉である。このことから、東晋後期から南朝にかけての謝氏の家族のなかの一支系の墓地であることが確定した。

E　戚家山謝氏家族墓地

戚家山は、南京市南郊の雨花台の東北に位置する。20 世紀の 60 年代に山の北麓で５基の不完全な墓が調査された。そのうち３号墓は双室塼墓で、総長は約８m で、前、後の二室は同じ幅で、幅は約２m88)（図４－85）である。この墓は破壊を受けていたが、幸いなことに１点の花崗岩の墓誌が残され、墓主は東晋明帝太寧元年（324 年）に卒した謝艉であることが明記されていた。『晋書』によれば、謝艉は咸亭侯に封ぜられた。このことから、戚家山一帯が東晋の謝氏の家族墓地であったことが推知できる。

F　呂家山李氏家族墓地

呂家山は南京市東北郊に位置する。西は仙鶴山に隣接する。20 世紀の 70 年代に山の東南麓で１基の東晋墓が発掘された[89]。90 年代末にも、山の西南麓で３基の東晋墓が調査された（M1 ～ M3 と番号が付けられる）[90]（表４－６第 40 ～ 43)。　呂家山 M1 ～ M3 は南向きで、東西に並列し、形態は同じである（M3 は大部分が破壊されている）（図４－86)。地面上には、いずれも低い墳丘が残り、いずれも傾斜した墓道・甬道・長方形のアーチ型の塼室からなる。甬道内には一基の木門が設けられる。墓室壁には灯龕があり、墓内には排水溝が設けられる。墓内の埋葬された人数が異なるため、３基の墓の規模は同じでない。

出土した塼墓誌から、M1 の墓主は李緝とその夫人の陳氏で（図４－87)、M2 の墓主は李纂とその夫人の武氏・何氏で（図４－88)、M3 の墓主は李摹で、ここは李氏の家族墓地であることが明らかとなった。このほか、墓誌の紀年によれば、３基の墓は同時に築造され、同時に葬られている。このことから改葬である可能性が最も高い。

G　仙鶴山高氏家族墓地

仙鶴山は、南京市東北郊に位置し、東は呂家山に隣接する。20 世紀 90 年代に山の東南麓で、６基の墓葬が調査された（M1 ～ M6 と番号が付けられる)。その中で３基の時期は孫呉のもので、残りの３基は東晋のものである[91]（表４－６第 44 ～ 46)。

３基の東晋墓は南北の２列に分かれる（図４－89)。南列の２基は東西に並列し（M2、M3)、北列には１基がある（M6）（図４－90)。墓葬はいずれも南向きで、形態はおおよそ同じである。大きさも類似する。いずれも甬道を伴う長方形単室塼墓で、１基は墓室がドーム型であり、２基は墓室がアート型である。甬道内には、いずれも木門を設けず、墓室壁には直櫺窓か灯龕を設けてい

る。墓内にはいずれも塼棺床があり、排水溝を設けない。墓外に障土壁を設けるものもある。３基の墓はいずれも傾斜した墓道があるが、墳丘の状況は不明である。

出土した塼墓誌から、M2 の墓主は東晋の建昌伯高崧とその夫人謝氏で（図４－91）、このことから、ここは高氏の家族墓地であることが明らかとなった。

（２）葬制総論

１　墓地の選択

江南は雨が多い湿地帯のため、南京一帯の東晋墓葬の多くは低い丘陵の傾斜地の途中に築かれる。塼を用いて墓が築かれ、墓内には塼積の棺床が設けられる。墓内・墓外には排水施設が築かれる。このほか、墓葬は高く広々とした箇所に置かれ、これは当時の風水観念が墓地の選択に影響を与えたことを表している[92]。

２　族葬の風習

生前は家族が集まって住み、死後は家族がともに埋葬するのは中国古代の長く不変的な社会風習である。ただ時期によって同じではなく、族葬の形式には差異が存在する。上述の多くの家族墓地は、東晋時期の族葬風習の真実を反映している。

３　地面施設

上に述べたように、魏晋墓制の核心は薄葬である。その主な内容の一つは、秦漢以来盛行した墳丘・陵園・陵寝建築・神道石刻などの地面施設の廃絶である。魏晋以来、墓に石獣・碑・表を用いることが禁じられ、それが緩まれたことは、以下の文献からも確認できる。

『宋書』志第五・礼二には、

「漢以後、天下送死奢靡、多作石室石獣碑銘等物。建安十年、魏武帝以天下雕弊、下令不得厚葬、又禁立碑。魏高貴郷公甘露二年、大将軍参軍太原王倫卒、倫兄俊作『表徳論』、以述倫遺美、云「祗畏王典、不得為銘、乃撰録行事、就刊于墓之陰云尓」。此則碑禁尚厳也。此後復弛替。晋武帝咸寧四年、又詔曰「此石獣碑表、既私褒美、興長虚偽、傷財害人、莫大于此。一禁断之。其犯者雖会赦令、皆当毀壊」。至元帝太興元年、有司奏「故驃騎府主簿故恩営葬旧君顧栄、求立碑」。詔特听立。自是後、禁又漸頽。大臣長吏、人皆私立。義熙中、尚書祠部郎中裴松之又議禁断、于是至今。」

とある。

墓上に碑を立てることが魏晋時期に総体的に禁止されていたことがわかるが、それが弛緩している時もあり、特に東晋ではそれが甚だしい。

皇帝陵に推定される南京大学北園墓・南京富貴山墓・南京北郊汽輪電機厂墓はいうまでもなく、規模が帝陵に次ぐ大中型墓に代表され世家大族墓も、高大な墳丘は殆ど発見されていない。こうした状況は文献記載と一致する。『建康実録』の記載によれば、南京付近に位置する東晋十陵のうち

明確に墳丘をもたないものは５陵で、墳丘を有するものは晋穆帝の永平陵のみである、という。南京北郊汽輪電機厂墓は、研究者によって穆帝の永平陵の可能性が推測され、発掘時には墳丘は見られなかった。あるいは、その墳丘は「周四十歩、高一丈六尺」というものであり、本来は高くなく、発掘時には消失してなくなっていたのであろう。そのほかの大中型墓葬の中で、いくつか墳丘を有するものがあり、南京幕府山 M1 には高さ約３ｍの墳丘があり、南京呂家山 M1 の墳丘は高さ約 1.6m である（図４－92）。呂家山 M2 にも墳丘があり、南京象山 M10 の墳丘は円形で、高３～４ｍである。ただし、これらの墓葬の墳丘の紹介は非常に簡略であり、これらの墳丘の形状や規模、版築を行っているか否かなど、状況ははっきりしない。

東晋墓の地上建筑に関する考古資料として、南京仙鶴山 M6 の一例のみが知られている。探査によれば、M6 の西側で東西長さ 20m、南北幅３ｍの建築遺構が発見された。ただし、未発掘のため、M6 との関係は不明である。

上述したように、帝陵と世家大族墓葬の考古学的発見と文献記載を総合すると、東晋墓の地面施設については、基本的に西晋墓制を延用したことが初歩的に断定できる。すなわち、墳丘・陵園・陵寝建築・神道石刻などの地面施設をもたない。個別の陵墓は墳丘を有しているけれども、一般的に低くて小さく、陵寝類建築を墓の側に有するものや墓前に碑を立てていたであろうものもある。総じて、東晋墓葬の地面施設は発達せず、顕著ではなかった。

４　墓葬形態

南京地区の主要な東晋の大中型墓葬資料から見て、墓葬の形態は単一的であり、大部分は単室塼墓であるということができる。南京大学北園墓などのように、個別の墓には一つの側室がある。墓葬は、普遍的に傾斜した墓道を備えていたはずであるが、大多数は発掘時、もしくは基礎工事段階に壊され、もしくは建築の工期が迫っているなどの理由で調査がなされていない。我々に残された東晋墓葬の多くは墓道を備えていない印象を与える。明らかに傾斜した墓道を備えたものは数例あり、帝陵と推測される南京富貴山墓及び南京象山 M10、南京呂家山 M1・M2、南京仙鶴山 M2・M3・M6 などの世家大族墓である。多数の墓は甬道を備え、墓葬平面は「凸」字形を呈する。甬道をもたないものも数例ある。甬道内には木門を一基設置するものもあり、あるいは二基設置するものや設けないものもある。墓室の多くは長方形を呈し、方形に近いものもある。墓室の頂部の構造は２種類ある。アーチ型とドーム型で、前者が最もよく見られる。２種類の墓頂構造と墓葬の時代の前後は密接な関係があり、ドーム型が早く、多くが東晋前期で、中期のものもある。アーチ型のものが遅く、一般に東晋後期である。墓内･墓外のほかの施設として、墓室壁の直欞仮窓や「凸」字形の灯龕があり、地面には棺床や祭台が敷かれ、墓外には排水溝や障土壁などが設けられる。これは墓葬の時代の前後に関係がある以外に、皇帝陵や世家大族墓地の使用習慣とも関連する。これらの施設と墓頂構造は一様で、墓葬の等級とは関係は大きくないようである。

世家大族墓の規模は大小あり、墓室面積は約５～15㎡である。同一の家族墓地の墓葬形態と規

模は近似している。異なった家族墓地の墓葬形態は近似しているかそれぞれ特色があり、墓葬規模も異なっている。たとえば、老虎山顔氏家族・呂家山李氏家族墓の規模は一般的に小さく、墓室面積はすべて10㎡以内。象山王氏家族墓の規模は中等を主とし、墓室面積は多くは10㎡前後。司家山謝氏家族・仙鶴山高氏家族墓の規模は一般的にやや大きく、墓室面積はすべて10㎡以上。郭家山温氏家族墓の規模は最大で、墓室面積は多くは15㎡前後に達し、中でもM1は18㎡近く、M10は24㎡近い。

墓葬形態のうち、等級を体現した特徴としておおよそ以下のような点がある。第一に墓葬の規模が大きく、墓室平面が方形に近く、アーチ型の頂部のものは最高の等級である。南京郭家山M10等のように、墓葬の規模が大きく、墓室の平面が方形に近いが、墓室の頂部がドーム型のものは、等級は前者には及ばない。第二に甬道内に２つの木門を設置するものの等級は最高である。ただし、甬道内に木門１つを設けるものと木門を設けないものとの間に厳格な等級の違いは存在しない。第三に、墓葬内外は比較的簡略であるが、棺床・祭台・直欞仮窓・灯龕・排水溝などの施設を設けないもの（とりわけ直欞仮窓と灯龕を設けないもの）は等級が最高である。ここで最高といったものは、当然皇帝陵を指す。

葬具はいずれも木棺で、銅釘か鉄釘を用いる木棺が朽ちた後、銅・鉄釘のみが残る。江蘇省江寧県下坊村東晋墓では１基の形態が完全な木棺が保存され、底板・左右の２枚の側板・前後の２枚の側板と蓋板の合計６枚の木板で組み合わされ、木板の間は枘穴と銅釘で固定されていた。銅釘には２種類あり、１種は大釘で、合計16点あり、底板と側板（２列８点）、側板と擋板（４列８点）を固定するのに用いられた。ほかの１種は小釘で、蓋板と側板を合わせるのに用いられた。棺長3.01m、一端の幅は0.62 m、もう一端の幅は0.59mで、高さ0.76mである。棺蓋板の両端は弧形を呈し、長さ3.655m、幅0.57m。この木棺は一方がやや大きく、一方がやや小さい台形を呈する。外側には赤漆が塗られ、棺内は幅広い頭側が板で仕切られ、棺内の空間は頭箱と棺室の２つの部分からなる[93]（図４－93）。南京仙鶴山Ｍ２は２つの棺が葬られ、そのうち１棺は大部分が保存され、形状は上述の木棺と類似し、銅釘を使用する。ただし、棺内空間を区分してはおらず、棺外に塗られるのは黒漆である（図４－94）。もう１基の棺は朽ちているが、興味深いのはこの棺は鉄釘が使用されている。南京象山Ｍ１、Ｍ３の木棺は朽ちているが、残された棺の痕跡から見て、一方がやや大きく、一方がやや小さい形態である。棺形は上述の木棺と類似する。

仙鶴山M2とM6はともに２基の棺を葬り、かつ別々に銅棺釘と鉄棺釘を用いている。このことから、このほかの墓で鉄・銅の２種類の棺釘がともに一定の数量（10数点ほど）が存在した場合、元来２棺であったとすべきである。ただし、注意すべきは、東晋墓の多くは盗掘され、墓中に残された遺物は往々にして元来のすべてのものではない。棺釘の種類と数量もかくのごとくで、これに加え、南京象山M3のように、ただ１人を葬りながら、同じように銅・鉄の棺釘が出土する例がある。そのため、出土した棺釘をもとに木棺の数量を推測する時は、墓室の大小やそのほかの副葬品の状況などを参考に、全面的、総合的な分析が必要である。

墓中の木棺の数量、墓誌の記録、及び副葬品（鏡・玉石豚の数量）などの状況から、東晋では夫婦同穴合葬が流行したことがわかる。皇帝陵も同穴合葬のはずで、文献にも多く記載が見られ、皇帝と皇后は同じ陵に葬られる。たとえば、明帝と明穆皇后は武平陵、恭皇后と成帝は興平陵、康帝と康献皇后は崇平陵、定皇后と孝武帝は隆平陵、穆帝と章皇后は永平陵、僖皇后と安帝は休平陵にそれぞれ葬られる。このほか、皇帝陵に推測される南京大学北園墓と南京北郊汽輪電機厂墓を見ると、前者は３人が葬られた可能性があり、後者は出土した銅釘と鉄釘がそれぞれ 18 点で、２棺であったと見るべきである。当然、同時期に単人葬も存在した。

５　副葬品

前述のごとく、北方では魏晋時期に墓葬制度に根本的な変化が生じ、秦漢時期の厚葬をやめ、薄葬制度が実行されて以来、十六国から北朝を経て、墓中の副葬品は大きく４つに分類できる。主に棺内に置かれる装身用具、墓室中に置かれる各種の実用（あるいは明器）器具、陶模型明器、陶俑である。西晋時期の南方地域の墓葬副葬品の顕著な特色であると指摘されているのは、多くの青瓷器・釉陶器があり、かつ一部の器類や器形も北方と異なる。このほか、陶俑類に属する人物俑や鎮墓獣の発見は少なく、帳座も多くない。西晋の北方と南方の墓葬において、副葬品の表現に差異があり、地方的要素に起因するものと見るのが自然である。南方の西晋墓は孫呉墓葬の伝統の影響を受けており、このように形成された南方の西晋墓の要素は、同一地域内の東晋墓に継承され、そのため、東晋墓葬の副葬品は、これまで同様に用いられる装身用具（銅鏡、鉄鏡、銅銭、弩機、石板、滑石豚、金・銀・銅・玉石・琥珀・瑪瑙・琉璃・トルコ石・水晶・カーボン・料などの飾具等）と各種の実用品（もしくは明器）の器具（青瓷器、陶器、銅器、鉄器、ガラス器、漆器など）の２大類以外に、陶俑類は依然少なく、模型明器類も衰退が顕著である。陶俑の種類と数量は非常に少なく、一般に数点の男俑か女俑があるのみで、鎮墓獣などほかの俑は見られない。また、皇帝陵とその陪葬墓と推定されるものより主に発見される。このほか、個別の墓から石俑（南京司家山 M1）が出土する。模型明器は陶憑幾･案が常見され、倉･竈なども稀である。南京象山 M7 は特例であり、未盗掘で、多くの模型明器が出土したのみならず、１点の案、１点の憑幾、５点の倉があり、同時に多くの陶俑類が存在し、１点の牛、１点の車、１点の馬、14 点の俑がある。東晋墓葬で模型明器・俑類の副葬が少なくなる原因は、墓葬の盗掘で副葬品の保存が完全でないこと以外にも、主に副葬風習に変化が発生したこともある。単室墓の形態は、墓主の起居を表現したものが主で、「厨厩」や「婢妾」を象徴するものが減少もしくは省略した。このほか、西晋墓葬と同様に、東晋墓葬でも墓誌を副葬することが流する。墓誌の多くは塼質で、石質のものも少量存在する（南京象山 M1、M9、M10）。

副葬品において、明確に墓葬の等級を体現したものは少ない。たとえば、龍首や虎首を装飾した陶座は、皇帝陵に推定される３基から出土する以外にも、皇帝陵の陪葬墓である可能性のある墓（南京幕府山 M1･M3･M4）及び世家大族墓（南京郭家山 M10･M13）においても発見されている。金･

銀・玉石・玻璃器皿など、珍しい物品の副葬もかくのごとくである。こうした物品は墓葬の等級の絶対的な根拠にはならないが、こうしたものを使用できた墓葬は、等級が確実に高い。

６　小　結

全体的に見て、東晋の喪葬制度は、西晋の葬制の継承と発展上にあり、両晋の墓制は一脈相承である。

皇帝陵から見て、以下のようなことがいえる。まず、両晋の帝陵の分布の特徴は類似する。これらはともに、都城に隣接した山の斜面に位置し、かつ１つの陵区のみではない。西晋の文帝崇陽陵と武帝峻陽陵は洛陽城より東の邙山の南斜面に位置し、２つの陵の距離は約３㎞であり、そのほかの西晋帝陵の位置はなお不明確であり、ほかの陵区があるはずである。東晋の帝陵は３つの陵区があり、建康城の南の「鶏籠山之陽」、城の東の「鐘山之陽」、城の北の「幕府山之陽」にそれぞれ位置する。次に、両晋帝陵の地面施設は類似し、ともに「不封不樹」で、神道石刻などもない。第三に、両晋帝陵付近は、ともに陪葬墓が分布する。第四に両晋帝陵の形態は類似し、ともに傾斜した墓道に甬道を伴ったアーチ型の頂部の単室墓である。異なった点は、既知の西晋崇陽陵と峻陽陵は土洞墓で、かつ墓道は幅広くて長い。東晋帝陵は塼室墓で、墓道は狭く小さい。墓葬規模から見て、東晋帝陵の墓室面積が西晋帝陵より大きいといっても、墓道の面積を加えれば、東晋帝陵は西晋帝陵の工程の規模には到底及ばない。

西晋墓葬と同様に、世家大族墓地に代表される東晋の大中型墓葬の多くは、墳丘など地面施設が発見されておらず、部分的に墳丘があるのみで、かつ高く大きなものではない。墓葬形態は、西晋時期のように豊富多様でない。西晋には三室墓・双室墓もあり、単室墓もある。東晋の多くは、形態が類似した単室墓である。墓道は西晋墓葬のようには発達しない。一部の墓葬の甬道内に設置される木門は、西晋墓においても常見され、ただ西晋墓には石門が多用される。こうした状況から、墓葬規模において、東晋墓葬は総体的に小さくなったといえる。

墓葬内外の棺床・祭台・直欞仮窓・灯龕・排水溝などの施設は、いずれも出現・変遷の過程を経て、三国時代の孫呉墓葬において棺床・祭台・灯台・排水溝などがすでに比較的流行する。こうしたあり方は南方の西晋墓においても継承され、直欞仮窓はこの時期に出現する。東晋墓葬はごく自然にこうした施設を留め、整合する。たとえば、直欞仮窓は「凸」字形の灯龕と組み合わさって時代の特徴となる。

副葬品については、東晋の大中型墓葬は南方の西晋墓の副葬品の組み合わせを継承し、変化もあり、のみならず東晋皇帝陵に推定される墓も北方の西晋墓の伝統を継承し、多くの陶質器皿が副葬される。

総じて、地面施設、墓葬形態、、墓葬規模、副葬品などの状況から、両晋の墓葬は内的に連携していると理解でき、同時に東晋墓葬には魏晋以来の薄葬制度が維持されているのみならず、かつ薄葬化の傾向がさらに進む。

『晋書』志第十・礼中には、

「江左初、元・明崇倹、且百度草創、山陵奉終、省約備矣。」

とあり、『晋書』列伝第五十三・江逌伝には

「穆帝崩、山陵将用宝器、逌諫曰：‘以宣皇顧命終制、山陵不設明器、以貽後則。景帝奉遵遺制。逮文明皇後崩、武皇帝亦承前制、無所施設、惟脯糒之奠、瓦器而已。昔康皇帝玄宮始用宝剣金舄、此蓋太妃罔已之情、実違先旨累世之法。今外欲以為故事、臣請述先旨、停此二物。’書奏、従之。」

とあり、『晋書』志第十・礼中には、

「孝武帝太元四年九月、皇后王氏崩。詔曰：‘終事唯従倹速。’」

とある。以上は、すべて東晋皇帝の喪葬の節倹に関する記録である。文献にも東晋の大臣が薄葬を遺令した例が記載され、ここでは詳しくは挙げない。東晋喪葬の倹約を尊んだ原因は、まさに政治沿革、経済状況、軍事形勢、文化風習と密切に関連する。

東晋墓葬の等級の特徴について、上文ではすでに簡単な分析を行った。西晋墓葬の等級の問題を回顧すると、墓葬形態において、皇帝陵とその陪葬墓は厳格な規制があるが、帝陵以外の大中型墓葬は等級を区別する具体的な要素はなく、副葬品においても、文献に記載された関連する規定については、皇族以外の公侯、あるいは地方官吏への拘束力は強くない。このことから、封建社会における喪葬礼制の核心は、皇帝と王侯などの皇族の等級秩序を規範としたものであるといえる。現有の考古学的な資料から東晋墓葬の等級制度を観察すると、依然としてこのような認識を超えることはない。推定された３基の皇帝陵から、基本的に等級を体現している具体的な要素が帰納できる。たとえば、形態に関しては甬道内の二基の木門、副葬品では龍首・虎首を装飾した陶座の使用などである。ただし、帝陵以外の墓葬については、等級秩序の手がかりと具体的な要素はいまだ明らかでない。東晋墓葬の等級問題について論及した研究者もおり、参考できる[94]。

２　南朝墓葬

東晋ののち、宋・斉・梁・陳を経て、陳は隋に滅ぼされる。南朝四代は前後継承され、420 年から 589 年まで、169 年に及び、都は建康に置かれた。南朝と北方の北朝は長期にわたり対峙する局面が継続する。

南朝墓葬は、その疆域内において発見されており、その中で都城の所在した南京地区で最も集中している。ここでは南京とその臨近地区で発見された南朝皇帝・王・公陵墓と墓主の身分が明確な官吏墓のみを代表として、南朝墓葬について簡単に論じる。

（１）墓葬概況

１　皇帝陵

南朝四代の帝位継承者は 20 人余りに及ぶが、廃位になったり、殺されたものもいる。そのため、追封された帝も加えても、全体で 10 数基の帝陵が存在するのみである。その中で４基がすでに発掘され、内容は江蘇丹陽胡橋仙鶴坳[95]（図４－95）、胡橋呉家村（図４－96）、建山金家村[96]の３

基の斉陵と南京西善橋油坊村罐子山[97]（図４－97）の１基の陳陵（表４－７）である。

４基の帝陵はいずれも盗掘・破壊が著しく、墓葬形態の残存状況も悪く、副葬品も少ない。４陵の資料を整合すると、共通した特徴が見られる。陵墓の選地は低い山・丘陵にあり、谷間の平地に面し、陵前には水溜りが多い。陵墓上には墳丘があり、一般には高大ではない。このうち２陵の墳丘の前方の数百ｍには神道石刻が遺存し、天禄と麒麟がそれぞれ１基ずつ存在する。形態は、アーチ型の頂部の甬道を有する単室塼墓で、墓前には墓道が設けられているはずで、ただし墓室頂部の構造は不明瞭である。甬道内には二基の石門が設けられ、石門の形態はおおよそ共通し、門の上方には人字型の斗栱のレリーフがある。墓室の規模は宏大で、平面は長方楕円形もしくは八角形を呈する。長さは８～10m、幅は５ｍ余り、面積は40㎡余り。墓室内には棺床が設けられるが、祭台はない。墓室壁には直櫺窓と灯龕があるはずである。甬道と墓室の壁面には複雑な図案と塼積みの壁画で装飾され、壁画の題材は、甬道の頂部に日・月があり、甬道の両側壁には獅子・武士、墓室の両側壁には羽人戯龍・羽人戯虎・飛天・竹林七賢と栄啓期・車馬出行（騎馬楽隊・騎馬武士・執戟侍衛･執扇執蓋侍従）などがある。墓の甬道口にカラー壁画を描くものもある（胡橋呉家村斉陵･建山金家村斉陵）。墓内には排水溝が設けられ、墓外遠方の水溜りに通じる。墓外には障土壁が設けられる。

南京西善橋宮山大墓[98]（図４－98）の時代と墓主の身分については、大いに論争がある。墓の時代についてはひとまず宋代説をとる[99]。墓主の身分については確定できないが、上述の帝陵のいくつかの主な指標から見て、この墓は帝陵級には達しないものと見られる。たとえば、甬道には１つの石門のみが設けられ、墓室は小さく、面積は20㎡余りで、上述の諸陵墓の墓室面積の約半分である。墓室壁面には竹林七賢と栄啓期の塼積みの壁画が装飾されるが、ほかの題材はなく、壁画の内容は簡略である。

２　王・公陵墓

A　王　陵

出土した墓誌から王陵であることが確定しているのは２基である。すなわち、南京甘家巷一帯に位置する梁の２代の桂陽王蕭融[100]とその嗣子の蕭象の墓である[101]（図４－99）。墓葬の地理的位置、出土した墓誌の残文、地表に残された神道石刻、文献記載から、基本的に王陵と確認されたのは３基である。すなわち、南京甘家巷梁安成王蕭秀墓（M6）[102]（図４－100）、南京白龍山梁臨川王蕭宏墓[103]（図４－101）、南京堯化門梁南平王蕭偉墓である[104]（図４－102）。これら５基の王陵はすべて梁代のもので、年代は502年から536年の間である。

先に述べた南京西善橋宮山宋墓は、皇帝級の墓ではない。この墓と梁の諸々の王陵と比較すると、墓室構造と規模の上では強く一致し、さらにこの墓の墓室には竹林七賢と栄啓期の塼積みの壁画で装飾され、墓主の身分は低くはない。王であった可能性がある。

南京蔡家塘１号墓[105]の等級について、ある研究者は墓主を梁始興王蕭憺、もしくはその子の蕭

曄ではないかと考えている[106]。この墓の墓室長は5.83m、幅3.05m、面積は約17.78㎡で、梁のそのほかの王陵と比べ、規模は小さい。そのため、墓主は蕭憺ではないであろう。憺の子の曄は、かつて上黄侯に封じられ、墓の規模から見て符合する。ただし、蕭曄は晋陵太守の在任中に卒しており、建康に帰葬されたかどうかは、史書には記載がない。そのため、蕭曄墓であるかは決められない。

宋・梁の６基の王陵の資料からその特徴を、以下のようにまとめることができる。

・陵墓はいずれも低い山・丘陵に立地する。

・地面施設については、個別の陵墓上に低い墳丘があり、陵前の1000m前後には神道石刻が並べられる。蕭秀陵の陵前の石刻が最も保存される数が多く、２基の辟邪、２基の柱、４基の碑がある。そのほかでは、蕭宏陵の陵前には辟邪・柱・碑が２基ずつあり、蕭融陵の陵前には２基の辟邪、蕭偉陵の陵前には２基の石柱がある。近年、蕭偉陵の陵前の石柱の北側で一対の陵園門闕遺構が発掘された。実に得難い成果である。

・陵墓の形態は、甬道を伴う単室塼墓であり、墓道の状況は不明である。墓頂部が保存された例から見て、墓室はアーチ型である。甬道内には１つの石門を設け、その形態はほぼ同じであり、門の上方に人字型の斗栱のレリーフが施された。

・墓室の規模は比較的大きく、平面は多く長方楕円形を呈する。長さは６～８ｍ、幅は３ｍ前後で、面積は多くは20㎡以上である。

・墓には多くは塼積の棺床と石の祭台が設けられ、棺床上には石の棺座が置かれる。

・墓室壁には、直欞窓や灯龕が設けられる。

・甬道と墓室の壁面には紋様塼で装飾される。

・墓内には排水溝があり、墓前の水溜りに通じる。

・墓外には障土壁が設けられる。

Ｂ　公　墓

墓主の身分が明らかであるのは１基のみである。すなわち、南京西善橋陳義陽郡公黄法𣰰墓[107]（図４－103）である。この墓と諸々の王墓の形態は類似し、異なっているのは甬道と墓室の間に２つの耳室があり、墓室内にはカラー壁画が描かれていることである。墓室長5.5ｍ、幅3.15ｍ、面積約17.33㎡で、規模は王墓よりやや小さい。

南京蔡家塘１号墓（図４－104）の規模はこの墓とほぼ同じで、墓葬の等級も大差ない。もしくは公侯クラスかもしれない。

３　官吏墓

ここでは３基の時代と墓主の身分が明らかな墓葬の例を挙げ、南朝官吏墓の一般的な状況を説明したい。南京司家山謝氏家族墓地Ｍ６の墓主は宋海陵太守謝珫[108]（図４－105）である。南京太平門外南朝墓の墓主は宋武原県令明曇愔[109]（図４－106）である。南京燕子磯南朝墓の墓主は梁輔国将軍である[110]（図４－107）。

３基の墓はいずれも、甬道を伴うアーチ型の頂部をもつ単室塼墓で、甬道内には１つの木門もしくは石門がある。墓葬形態は総じて王公陵墓と大差ない。ただ墓葬の規模はもっと小さく、墓室は長さ４～６m、幅２m 余、面積は 10㎡前後である。

（２）葬制総論

１　墓地の選択

「風水」思想の影響を受け、南朝の帝王陵墓は、山丘を背とし、開かれた平地や山間の谷地に面している。南京梁臨川王蕭宏墓は、白龍山の北斜面に立地し、平地に面している。その神道は石刻１組６基を墓の北 1000m の地点に配列する。神道の左右両側にそれぞれ１基ずつ、道を挟んだ小山丘が立てている（図４－108）。南京堯化門梁南平王蕭偉墓は、老米蕩と呼ばれる山谷の北峰を背として、谷地に面している。その神道は門闕と石柱を谷口の個所に配置する（図４－109）。南京甘家巷梁桂陽王蕭象墓もまた、劉家塘と呼ばれる山の北斜面に立地し、高い山峰を背とし、谷地に面する（図４－110）。

２　族葬風習

南朝は、東晋と同様に同族聚葬が盛行した。代表的な事例として、南斉五帝陵が江蘇丹陽胡橋、建山一帯に集中分布する例や梁諸王陵が南京東北郊の堯化門・甘家巷一帯に集中分布する例などがよく挙げられる。

３　地面施設

南朝皇帝は、多くは生前に節約に励み、死後は簡葬を遺詔したが、墳丘・陵園・陵寝建築・神道石刻など陵墓の地面施設は、いずれも流行し、盛んになったのは時代の風潮であった。

Ａ　墳　丘

南朝の時期は、墓上には普遍的に墳丘が築かれる。ただし、墓葬の墳丘の考古学的な発見は大変少なく、報告の多くは詳細が不明である。丹陽胡橋仙鶴坳斉陵や南京西善橋油坊村罐子山陳陵などのように、報告の中には墓坑の埋土を墳丘とするものもあり、これによれば測量した墳丘の高度は不正確である。丹陽胡橋呉家村斉陵の報告のみ、この墓室は版築された円形の土墩の中に埋まっていることが述べられている。土墩の現存は、東西 30m、南北 28m、高８m である。ただし、この土墩は全部が版築された墓葬の封土であるのか、部分的に元来の地形を利用しているのかは分からない。総じていえば、発掘された南朝帝王陵墓から、墳丘の多くは残存しないか、殆ど少ないかである。『建康実録』の記載によれば、宋・陳の四帝陵の高度は、いずれも一丈四尺から二丈の間とされ、帝陵の墳丘は甚だしく高大でないことがわかる。王侯から身分の低い官吏・庶民にいたるまでの墓葬は、その墳丘の規模は推して知るべしである。

南朝帝王陵墓の墳丘が高大ではない理由は、魏晋の薄葬遺制の影響以外にも、この時期の陵墓の

選地とも関係する。すなわち陵墓は山丘の斜面に位置し、高大な墳丘を堆築するのは容易ではない。さらに陵墓の多くは山谷内や群山に隠れ、直接人に示されるものではない。墓葬そのものもまた、山によって成り立っており、墳丘によって特別な高さを必要としない。別の面では、神道石刻の多くは陵墓より離れており、かつ山谷の出口や墓前の平地に配列される。これらが陵墓の標識施設となって人々に示され、陵墓の地面施設のうち、石獣碑表などが墳丘の代わりとなり、墓主の身分と墓葬の等級の物的な代表となった。このことが、たぶん南朝陵墓の墳丘が甚だしく高大ではない、根本的な原因となったのだろう。

南朝墓葬の墳丘の多くは円形か楕円形を呈する。

B　陵園と陵寝建築

南朝帝王陵墓は墳丘を築き、神道を設けており、陵墓兆域を体現した陵園が存在したはずである。南京堯化門梁南平王蕭偉墓の南約 800m の地点に一対の石柱があり、石柱の北側には一対の門闕建築遺構がある。東闕の東西長は 11.81m、南北幅は 2.03m、西闕の東西長は 11.82m、南北幅は 1.94m。両方の闕の間隔は 5.57m である[111]（図４－111）。この門闕は陵園の入口であり、神道石柱は陵園の外に立つ。ただし門闕遺構と関連した陵園の障壁は発見されておらず、当時の陵園に囲壁が築かれたかどうかは不明である。ほかの施設や自然地形によって表示されていたのかもしれない。

南朝帝王陵墓に寝廟類の建築が設けられていた状況は、文献記載に見られるが、考古学的に発見された実例はない[112]。

C　神道石刻

南朝帝王陵墓では、神道両側に石刻を列置することが流行した。石刻は一般に墳丘から 500 ～ 1000m 離れた個所にあり、墳丘と基本的に一直線上にある。石刻は獣・柱・碑の３種類に分けられ、多くの陵墓では獣・柱・碑をそれぞれ一対で合計６点を用いる。前方から後方に向かい神道の両側に配置する。いくつかの陵墓では４組８点を用いる。たとえば、南京甘家巷梁安成王蕭秀墓では、神道石刻は一対の石碑が増えた。多くの陵墓では石獣があるのみであり、これは神道石刻が毀損・遺失した結果である。

南朝の石刻は 35 箇所で残され、その中で南京 15 箇所、江寧８箇所、句容１箇所、丹陽 11 箇所である。南朝陵墓石刻の保存状況については、詳しくは表４－８を参照されたい。

４　墓葬形態

南朝皇帝・王公・官吏の墓葬の形態は上述のとおりである。

南朝の一般墓葬の建造順序はおおよそ次のとおりである。

選地－墓道･墓坑を掘る－墓坑内に塼室を築く－棺と副葬品を配置する－墓門を遮断する－墓坑･墓道を埋める－墓坑・墓道上に墳丘を築く

帝王の多くは生前に寿陵を築いたため、墓室の構築と埋葬の間には一定の時間の間隔がある。そのため、大型の帝王陵墓は入葬前に墓坑を埋め、墳丘を堆積していた可能性がある。もしこのよう

であれば、陵墓の築造順序は次のとおりである。

選地－墓道・墓坑を掘る－墓坑内に塼室を築く－甬道の外側に封門壁を築く（障土壁の作用もあり－墓坑を埋める－墓坑上に墳丘を築く－墓道から甬道を経て墓室に入り、棺と副葬品を配置する－石門と封門壁を封閉する－墓道を埋める

こうして見ると、墓内・墓道に排水溝を設置することはなおさら必要なことであり、排水溝は実は埋葬以前より機能を発揮していた。このほか、南朝の大型陵墓の甬道外の封門壁は、保存のよい南京堯化門梁南平王蕭偉墓（図４－112）などのように、往往にしてアーチ型の頂部をなし、これは、墓坑を埋めて墳丘を築いたのち、墓道を通って封門壁と甬道を経由して墓室に葬りやすく、また合葬時に再度墓道を開削し、封門壁のアーチ型の頂部以下の塼を崩して、甬道を経由して墓室に到達しやすいためであろう。南京西善橋油坊村罐子山陳陵のように、甬道の外側の封門壁の内側に高大な障土壁を築くものもあり、上述の目的に沿ったものである。

南朝陵墓の建造（建築材料の運送など）や使用（棺木の入葬など）に関わらず、墓道は墓葬に不可欠な重要な構成要素である。しかしさまざまな原因により、今日まで南朝墓葬の墓道の状況の報告は稀である。南京西善橋油坊村罐子山陳陵は墓道を有するが、墓道の底部が水平状か傾斜状かでさえ、報告の説明は不明瞭である。

陵園・陵寝建築・神道石刻など、南朝陵墓のそのほかの地面施設は、おおよそ墓葬そのものと同時に完成していた。

葬具の木棺はいずれも朽ちたことにより、鉄の棺釘の多くは存留している。墓内に遺存した人骨、墓室棺床上に設置された石の棺座、出土墓誌、そのほかの副葬品（滑石豚）などの状況から、南朝でも同様に二人－夫婦合葬が盛行した。

５　副葬品

装身用具・実用（もしくは明器）器具・模型明器・俑の４大分類される副葬品において、東晋墓葬と比べ、模型明器類は依然として少なく、種類は屋（家屋）・憑幾（ひじかけ）・灶（かまど）・牛車などがある。俑類は増加し、主に陶俑・石俑・陶馬・石馬などがある。その中で石俑・石馬は頗る特徴的である。ほかに一種の犀牛状鎮墓獣も出土している。当然、南朝帝王陵墓の多くはひどく盗掘に遭い、残ったものは副葬品の全貌を反映しているわけではない。墓誌は多数出土し、主に石製である。

６　小　結

南朝宋は東晋より禅譲され、斉・梁・陳もまた禅譲して交代した。そのため、東晋より南朝に至るまで、各種の制度は前後一脈に継承され、喪葬制度もまた斯くの如しである。南朝墓制は東晋墓制の継承を基礎として創新されたものである。

南朝墓制の東晋墓制の継承は、主に墓葬の地下部分、すなわち墓葬形態に表されている。当然な

がら、継承と同時に変化もある。東晋・南朝の大中型墓葬の多くは一条の傾斜した墓道に甬道を伴った単室塼墓である。甬道はいずれもアーチ状である。墓室は、東晋前期はドーム状のものがあるが、東晋後期から南朝に至るまではアーチ状のものとなる。甬道内には１つもしくは２つの門が設けられる。東晋は木門で、南朝は石門が多い。墓室壁には直櫺仮窓と灯龕が付設される。灯龕は、東晋は“凸”字形で、南朝は桃形が多い。墓室地面には、棺床や祭台が敷かれる。南朝では、棺床上に石の棺座を設置することが流行し、祭台もまた石質のものが多い。墓外には排水溝や障土壁が設けられる。

南朝墓制の創新は主に墳丘・陵園・陵寝建築・神道石刻など地面施設に表れる。東晋墓葬は曹魏・西晋の薄葬の制を援用したといっても、緩和がなされ、墳丘・石碑などが偶に採用された。南朝に至り、こうした地面施設がともに盛行し、陵墓制度の不可欠な構成要素となった。そして後世の墓制に重大な影響を与えた。

南朝の大中型陵墓において、形態面で等級を体現した特徴として、以下の点が挙げられる。

・地面施設：墳丘や陵園の規模、神道石刻の数量・種類・大きさなど。その中でも最も顕著なのは、帝陵の神道石刻における一対の石獣はいずれも角が生え、一方が双角でもう一方が単角である点であり、一般に天禄と麒麟と称される。王侯陵墓の神道石刻においては、一対の石獣はいずれも角が生えず、辟邪と称される。

・墓葬規模：帝陵の規模は宏大で、墓室は長さ８～10m、幅５ｍ余りで、面積は40㎡余り、甬道内には２つの石門がある。王陵の規模はやや大きく、墓室の長さは６～８ｍ、幅は３ｍ前後で、面積は多くは20㎡以上である。公侯墓の規模は王陵よりやや小さく、墓室面積は20㎡以下である。郡守・県令など官吏の墓葬の規模はさらに小さく、墓室の長さは４～６ｍ、幅は２ｍ余、面積は10㎡前後である。王・公・官吏の陵墓の甬道内にはいずれも１つの石門（もしくは木門）が設けられる。

・墓内装飾：帝陵の甬道・墓室壁面の装飾は、複雑な図案と塼積みの壁画からなる。王・公・官吏の陵墓の甬道・墓室壁面は紋様塼の装飾があるのみである。このため、南朝では帝王・公侯など皇族と大臣の喪葬においてはすでに比較的厳格な等級制度が形成されていたということができる。

墓葬は盗掘によって、大量の副葬品が失われ、目前の副葬品は墓葬の等級制度は反映されていない。文献記載は、南朝帝陵の副葬が簡略に従った状況を反映している。たとえば、『南斉書』本紀第三・武帝紀には、

「（武帝）臨崩又詔‘凡諸游費、宜従休息。自今遠近荐献、務存節俭、不得出界営求、相高奢麗。金粟繒紘、弊民已多、珠玉玩好、傷工尤重、厳加禁絶、不得有違準繩。’九月丙寅、葬景安陵。」

とある。『陳書』本紀第五・宣帝紀には、

「（宣帝）遺詔曰‘…凡厥終制、事従省約。金銀之飾、不須入壙、明器之具、皆令用瓦。唯使俭而合礼、勿得奢而乖度。’」

とある。

南朝墓葬は、地下墓室・地上施設とも東晋の同クラスの墓葬と比べ規模も大きくなった。このため、南朝墓制はすでに魏晋以来の薄葬の制の束縛を脱し、少しずつ厚葬の方向へと発展していったといえる。その原因は、まさに劉宋が晋にとって代わった政治的な事件があり、朝代の転換が新たな喪葬礼制を生み出した。宋･斉･梁･陳の間の禅代もまた、葬制の一新を継続し完全なものとした。

第３節　南北朝墓制

魏晋においては、薄葬の制度が始まり、後世に一定の影響を与えた。北方の十六国墓葬は、当該期の長安地区の墓例から見て、墓葬形態は晋墓の特徴が色濃く見られる。ただし、文献記載の墓葬の地面施設の復興と副葬品の俑類の変化から見ることができ、一種の新たな墓制が育まれていた。南方の東晋墓葬は全面的に西晋墓制が延続していた。

甚だしきに至っては、南北朝期に至って、北朝の北魏･東魏北斉･西魏北周及び南朝の宋･斉･梁･陳はいずれも単室墓が主である。こうした簡約化した墓葬形態は実質的に魏晋墓制の残存と見ることができる。特に西魏北周の地上施設をしないあり方や地下の土洞墓室の墓制は魏晋薄葬の制度の複製であり、北周に大興した「復古の風」の別の一種の表現である。

南北朝の墓制の重大な変化は、主に地面施設に表れ、墳丘・陵園・陵寝建築・神道石刻などの全面的な復興が行われた。このほか、墓内装飾が新たに盛行し、副葬品組成にも変化が生じた。たとえば、北朝墓葬で大いに流行した俑類の副葬などもそうである。地面施設においては、北朝は南朝に比べ、墳丘は高大で、陵園も規整された。南朝は北朝に比べ神道が長く、石刻が多く、かつ大きい。北朝の石刻は石闕・石碑・動物（虎・羊など）以外にも、石人がある。南朝の石刻は基本的に石柱・石碑・動物（天禄・辟邪）があり、石人は見られない。墓内装飾においては、北朝では壁画が流行し、南朝では塼積みの壁画が流行した。副葬品においては、北朝は南朝よりも模型明器と俑類の使用が多い。

北朝墓制と南朝墓制は、共通点とともに差異点がある。地面施設においては、南北朝ともに魏晋墓制を突破した。両者を比べると、南朝は劉宋の初期より始まり、北朝は北魏文明太后の永固陵より始まったようで、南朝が北朝よりも使用が早い。時間的に見て、南朝が北朝に影響を与えた可能性が高い。墓葬形態においては、北朝と南朝はともに魏晋墓制を焼き直したものである。副葬品においては、俑類の副葬を重視した北朝は十六国墓葬の影響を受けた。しかし、南朝では特に流行はせず、このことは東晋さらに西晋墓制にさかのぼるであろう。

総じて、南北朝墓制は魏晋以来の薄葬の制度の束縛を脱し、地面施設は全面的に復興した。墓葬等級制度は地下・地上の諸施設とともに構成され、かつ比較的成熟した段階に到達した。南北朝墓制は厚葬の風習を再開し、のちの隋唐墓制に重要な影響を与えたといえる。

註

1 陝西省考古研究所：「西安北郊北朝墓清理簡報」、『考古与文物』2005 年 1 期。

2 陝西省文物管理委員会：「西安南郊草厂坡村北朝墓的発掘」、『考古』1959 年 6 期。

3 陝西省考古研究所：「長安県北朝墓葬清理簡報」、『考古与文物』1990 年 5 期。

4 西安市文物保護考古所：「西安財政干部培訓中心漢、後趙墓発掘簡報」、『文博』1997 年 6 期。

5 李朝陽：「咸陽市郊清理一座北朝墓」、『考古与文物』1998 年 1 期。

6 咸陽市文物考古研究所：『咸陽十六国墓』、文物出版社、2006 年。

7 張全民等：「西安長安鳳栖原墓葬発掘」；劉呆運等：「陝西咸陽渭城底張墓葬及陶窯 2009 年発掘」、いずれも国家文物局：『2009 中国重要考古発現』、文物出版社、2010 年。

8 韋正：「関中十六国考古的新收獲」、『考古与文物』2006 年 2 期；「関中十六国墓葬研究的几个問題」、『考古』2007 年 10 期。

9 宿白：「盛楽、平城一带的拓跋鮮卑～北魏遺跡－鮮卑遺跡輯録之二」、『文物』1977 年 11 期。大同市博物館、山西省文物工作委員会：「大同方山北魏永固陵」、『文物』1978 年 7 期。（日）岡村秀典、向井佑介：「北魏方山永固陵の研究－東亜考古学会 1939 年収集品を中心として」、『東方学報』京都第 80 冊、2007 年 3 月。

10 河南省文化局文物工作隊：「洛陽北魏長陵遺址調査」、『考古』1966 年 3 期。洛陽市第二文物工作隊：「北魏孝文帝長陵的調査和鉆探」、『文物』2005 年 7 期。

11 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊、洛陽古墓博物館：「北魏宣武帝景陵発掘報告」、『考古』1994 年 9 期。

12 陳長安：「洛陽邙山北魏定陵、終寧陵考」、『中原文物』1987 年特刊。黄明蘭：「洛陽北魏景陵位置的确定和静陵位置的推測」、『文物』1978 年 7 期。

13 山西省大同市博物館、山西省文物工作委員会：「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」、『文物』1972 年 3 期。

14 山西省大同市考古研究所：「大同湖東北魏一号墓」、『文物』2004 年 12 期。

15 山本忠尚：「囲屏石床の研究」、『中国考古学』第 6 号（2006 年）。（日本）

16 大同市考古研究所：「山西大同七里村北魏墓群発掘簡報」、『文物』2006 年 10 期。

17 大同市考古研究所：「山西大同迎賓大道北魏墓群」、『文物』2006 年 10 期。

18 大同市考古研究所：「山西大同沙岭北魏壁画墓発掘簡報」、『文物』2006 年 10 期。

19 大同市考古研究所：「山西大同下深井北魏墓発掘簡報」、『文物』2004 年 6 期。

20 山西省考古研究所、大同市考古研究所：「大同市北魏宋紹祖墓発掘簡報」、『文物』2001 年 7 期。

21 山西省考古研究所、大同市博物館：「大同南郊北魏墓群発掘簡報」、『文物』1992 年 8 期。

22 王銀田、劉俊喜：「大同智家堡北魏墓石槨壁画」、『文物』2001 年 7 期。

23 310 国道孟津考古隊：「洛陽孟津邙山西晋北魏墓発掘報告」、『華夏考古』1993 年 1 期。

24 徐婵菲：「洛陽北魏元懌墓壁画」、『文物』2002 年 2 期。

25 洛陽博物館：「河南洛陽北魏元乂墓調査」、『文物』1974 年 12 期。

26 侯鴻鈞：「洛陽西車站発現北魏墓一座」、『文物参考資料』1957 年 2 期。

27 中国社会科学院考古研究所河南二隊：「河南偃師県杏園村的四座北魏墓」、『考古』1991 年 9 期。

28 大同市博物館：「大同東郊北魏元淑墓」、『文物』1989 年 8 期。

29 馬玉基：「大同市小站村花圪塔台北魏墓清理簡報」、『文物』1983 8 期。

30 偃師商城博物館：「河南偃師両座北魏墓発掘簡報」、『考古』1993 年 5 期。

31 偃師商城博物館：「河南偃師南蔡庄北魏墓」、『考古』1991 年 9 期。

32 黄明蘭：「西晋裴祗和北魏元暐両墓拾零」、『文物』1982 年 1 期。

33　洛陽博物館：「洛陽北魏元邵墓」、『考古』1973 年 4 期。
34　洛陽市文物工作隊：「洛陽孟津北陳村北魏壁画墓」、『文物』1995 年 8 期。
35　洛陽市第二文物工作隊：「洛陽紗厂西路北魏 HM555 発掘簡報」、『文物』2002 年 9 期。
36　洛陽市文物工作隊：「洛陽孟津晋墓、北魏墓発掘簡報」、『文物』1991 年 8 期。
37　偃師商城博物館：「河南偃師両座北魏墓発掘簡報」、『考古』1993 年 5 期。
38　河南省文化局文物工作隊：「一九五五年洛陽澗西区北朝及隋唐墓葬発掘報告」、『考古学報』1959 年 2 期。
39　洛陽市第二文物工作隊：「偃師前杜楼北魏石棺墓発掘簡報」、『文物』2006 年 12 期。
40　洛陽市第二文物工作隊：「洛陽衡山路北魏墓発掘簡報」、『文物』2009 年 3 期。
41　中国社会科学院考古研究所、河北省文物研究所：『磁県湾漳北朝壁画墓』、科学出版社、2003 年。
42　馬忠理：「磁県北朝墓群－東魏北斉陵墓兆域考」、『文物』1994 年 11 期。
43　磁県文化館：「河北磁県北斉高潤墓」、『考古』1979 年 3 期。
44　張晩峥：「河北磁県北斉高孝緒墓」、国家文物局：『2009 中国重要考古発現』、文物出版社、2010 年。
45　磁県文化館：「河北磁県東魏茹茹公主墓発掘簡報」、『文物』1984 年 4 期。
46　磁県文化館：「河北磁県東陳村北斉堯峻墓」、『文物』1984 年 4 期。
47　河南省博物館：「河南安陽北斉范粹墓発掘簡報」、『文物』1972 年 1 期。
48　河南省文物研究所、安陽県文管会：「安陽北斉和紹隆夫婦合葬墓清理簡報」、『中原文物』1987 年 1 期。
49　河南省文物管理局南水北調文物保護管理弁公室、安陽市文物考古研究所：「河南安陽県北斉賈進墓」、『考古』2011 年 4 期。
50　中国社会科学院考古研究所河北工作隊：「河北磁県北朝墓群発現東魏皇族元祜墓」、『考古』2007 年 11 期。
51　河南省文物考古研究所：「河南安陽固岸墓地考古発掘收獲」、『華夏考古』2009 年 3 期。
52　馬忠理：「磁県北朝墓群－東魏北斉陵墓兆域考」、『文物』1994 年 11 期。
53　楊效俊：「東魏、北斉墓葬的考古学研究」、『考古与文物』2000 年 5 期。
54　磁県文化館：「河北磁県東陳村東魏墓」、『考古』1977 年 6 期。
55　河南省文物管理局南水北調文物保護弁公室、河南省文物考古研究所：「河南安陽市固岸墓地Ⅱ区 51 号東魏墓」、『考古』2008 年 5 期。
56　磁県文物保管所：「河北磁県北斉元良墓」、『考古』1997 年 3 期。
57　安陽県文教局：「河南安陽県清理一座北斉墓」、『考古』1972 年 1 期。
58　河南省文物考古研究所：「河南安陽県固岸墓地 2 号墓発掘簡報」、『華夏考古』2007 年 2 期。
59　咸陽市文管会、咸陽博物館：「咸陽市胡家溝西魏侯義墓清理簡報」、『文物』1987 年 12 期。
60　劉衛鵬：「咸陽西魏謝婆仁墓清理簡報」、『考古与文物』2003 年 1 期。
61　員安志：「中国北周珍貴文物－北周墓葬発掘報告」、陝西人民美术出版社、1992 年。
62　劉呆運等：「陝西咸陽渭城底張墓葬及陶窯 2009 年発掘」、国家文物局：『2009 中国重要考古発現』、文物出版社、2010 年。
63　陝西省考古研究所、咸陽市考古研究所：「北周武帝孝陵発掘簡報」、『考古与文物』1997 年 2 期。
64　咸陽市渭城区文管会：「咸陽市渭城区北周拓跋虎夫婦墓清理記」、『文物』1993 年 11 期。
65　陝西省考古研究所：「西安発現的北周安伽墓」、『文物』2001 年 1 期；「西安北周安伽墓」、文物出版社、2003 年。西安市文物保護考古所：「西安北周涼州薩保史君墓発掘簡報」、『文物』2005 年 3 期。西安市文物保護考古所：「西安北周康業墓発掘簡報」、『文物』2008 年 6 期。
66　程林泉等：「西安北郊北周李誕墓」、国家文物局：『2005 中国重要考古発現』、文物出版社、2006 年。程林泉：「西

安北周李誕墓的考古発現与研究」、西北大学考古学系、西北大学文化遺产与考古学研究中心：『西部考古』（第一輯）、三秦出版社、2006 年。

67 寧夏回族自治区博物館、寧夏固原博物館：「寧夏固原北周李賢夫婦墓発掘簡報」、『文物』1985 年 11 期。寧夏回族自治区固原博物館、中日原州联合考古隊：『原州古墓集成』、文物出版社、1999 年。原州联合考古隊：『北周田弘墓』、文物出版社、2009 年。

68 陝西省考古研究所：「北周宇文儉墓清理発掘簡報」、『考古与文物』2001 年 3 期。

69 安徽省文物考古研究所、馬鞍山市文化局：「安徽馬鞍山東呉朱然墓発掘簡報」、『文物』1986 年 3 期；馬鞍山市文物管理所：「安徽省馬鞍山市朱然家族墓発掘簡報」、『東南文化』2007 年 6 期。

70 安徽省文物考古研究所、馬鞍山市文物管理所：「安徽馬鞍山宋山東呉墓発掘簡報」、『江漢考古』2007 年 4 期。

71 南京市博物館、南京市江寧区博物館：「南京江寧上坊孫呉墓発掘簡報」、『文物』2008 年 12 期。

72 蘆海鳴：「六朝陵寝制度新探」、蔣贊初主編：『南京大学歴史系考古専業成立三十周年記念文集』、天津人民出版社、2002 年。

73 鄂城県博物館：「鄂城東呉孫将軍墓」、『考古』1978 年 3 期。

74 李蔚然：「南京六朝墓葬」、『文物』1959 年 4 期。

75 南京市博物館：「南京大光路孫呉薛秋墓発掘簡報」、『文物』2008 年 3 期。

76 江西省歴史博物館：「江西南昌市東呉高栄墓的発掘」、『考古』1980 年 3 期。

77 李蔚然：「南京富貴山発現晋恭帝玄室石碣」、『考古』1961 年 5 期。

78 南京大学歴史系考古組：「南京大学北園東晋墓」、『文物』1973 年 4 期。

79 南京博物院：「南京富貴山東晋墓発掘報告」、『考古』1966 年 4 期。

80 南京市博物館：「南京北郊東晋墓発掘簡報」、『考古』1983 年 4 期。

81 蔣贊初：「南京東晋帝陵考」、『東南文化』1992 年 3 ・ 4 期。

82 華東文物工作隊：「南京幕府山六朝墓清理簡報」、「文物参考資料」1956 年 6 期。南京市博物館：「南京幕府山東晋墓」、『文物』1990 年 8 期。

83 南京市博物館、南京市玄武区文化局：「江蘇南京市富貴山六朝墓地発掘簡報」、『考古』1998 年 8 期。

84 南京市文物保管委員会：「南京人台山東晋興之夫婦墓発掘報告」、『文物』1965 年 6 期；「南京象山東晋王丹虎墓和二、四号墓発掘簡報」、『文物』1965 年 10 期。南京市博物館：「南京象山 5 号、6 号、7 号墓発掘簡報」、『文物』1972 年 11 期；「南京象山 8 号、9 号、10 号墓発掘簡報」、『文物』2000 年 7 期；「南京象山 11 号墓清理簡報」、『文物』2002 年 7 期。

85 南京市文物保管委員会：「南京老虎山晋墓」、『考古』1959 年 6 期。

86 南京市博物館：「南京北郊郭家山東晋墓葬発掘簡報」、『文物』1981 年 12 期；「江蘇南京北郊郭家山五号墓清理簡報」、『考古』1989 年 7 期；「南京北郊東晋温嶠墓」、『文物』2002 年 7 期；「南京市郭家山東晋温氏家族墓」、『考古』2008 年 6 期。

87 南京市博物館、雨花区文化局：「南京司家山東晋、南朝謝氏家族墓」、『文物』2000 年 7 期；「南京南郊六朝謝温墓」、『文物』1998 年 5 期；「南京南郊六朝謝珫墓」、『文物』1998 年 5 期。

88 南京市文物保管委員会：「南京戚家山東晋謝　墓簡報」、『文物』1965 年 6 期。

89 南京市博物館考古組：「南京郊区三座東晋墓」、『考古』1983 年 4 期。

90 南京市博物館：「南京呂家山東晋李氏家族墓」、『文物』2000 年 7 期。

91 南京市博物館：「江蘇南京仙鶴観東晋墓」、『文物』2001 年 3 期。

92 李蔚然：「論南京地区六朝墓的葬地選択和排葬方法」、『考古』1983 年 4 期。羅宗真：「六朝陵墓埋葬制度総述」、

『中国考古学会第一次年会論文集』(1979)、文物出版社、1980 年。
93　南京市博物館、江寧県文管会：「江蘇江寧県下坊村東晋墓的清理」、『考古』1998 年８期。
94　韋正：『六朝墓葬的考古学研究』、北京大学出版社、2011 年。
95　南京博物院：「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁画」、『文物』1974 年２期。
96　南京博物院：「江蘇丹陽県胡橋、建山両座南朝墓葬」、『文物』1980 年２期。
97　羅宗真：「南京西善橋油坊村南朝大墓的発掘」、『考古』1963 年６期。
98　南京博物院、南京市文物保管委員会：「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁画」、『文物』1960 年８・９期。
99　韋正：「南京西善橋宮山“竹林七賢”壁画墓的時代」、『文物』2005 年４期。
100　阮国林：「南京梁桂陽王蕭融夫婦合葬墓」、『文物』1981 年 12 期。
101　南京博物院：「梁朝桂陽王蕭象墓」、『文物』1990 年８期。
102　南京博物院、南京市文物保管委員会：「南京栖霞山甘家巷六朝墓群」、『考古』1976 年５期。
103　南京市博物館、栖霞区文管会：「江蘇南京市白龍山南朝墓」、『考古』1998 年 12 期。
104　南京博物院：「南京堯化門南朝梁墓発掘簡報」、『文物』1981 年 12 期。
105　金琦：「南京甘家巷和童家山六朝墓」、『考古』1963 年６期。
106　周裕興：「南京南朝墓制研究」、蔣贊初主編：『南京大学歴史系考古専業成立三十周年紀念文集』、天津人民出版社、2002 年。
107　南京市博物館：「南京西善橋南朝墓」、『文物』1993 年 11 期。
108　南京市博物館、雨花区文化局：「南京南郊六朝謝珫墓」、『文物』1998 年５期。
109　南京市文物管理委員会：「南京太平門外劉宋明昙憘墓」、『考古』1976 年１期。
110　南京市文物保管委員会：「南京郊区両座南朝墓清理簡報」、『文物』1980 年２期。
111　南京市文物研究所、南京栖霞区文化局：「南京梁南平王蕭偉墓闕発掘簡報」、『文物』2002 年７期。
112　王志高：「南朝帝王陵寝初探」、『南方文物』1999 年４期。

表４－１　長安地区一部の十六国墓葬一覧表（単位：m）

No.	地点	墓道					墓室						合葬	年代	備注
		方向	長さ	幅（口部）	最深	階段	前室			後室					
							東西	南北	頂部	東西	南北	頂部			
1	陝西西安瓦胡同Ｍ７	南		0.96			2.4	3	弧形				1	後趙	２側室が伴う
2	陝西西安韋曲Ｍ１	南	32.8		7.3	3	2.9～3.2	3.1		3.1～3.4	3		1	十六国	墓道は過洞・竪井が伴う
3	陝西西安草厂坡墓	南	残 13.4	1.37			3.2	3		3.1	3			十六国	墓道は２耳室が伴う
4	陝西咸陽南賀村墓	南		1.2			3.5	3.5						十六国	１側室が伴う
5	陝西咸陽中鉄七局Ｍ１	西	13.4	0.92～0.98	8.4		2.5～2.7	2.5～2.7	覆斗形	2.12～2.41	2.12～2.18	覆斗形	4	十六国	前室は２側室が伴う
6	陝西咸陽中鉄七局Ｍ３	西		3.65	9.75	2	2.13～2.32	2.28～2.6	覆斗形	2.5～2.6	2.35～2.5		4	十六国	前室は１側室が伴う
7	陝西咸陽文林小区 M49	南	17.5	2.9～3.2	9.8	2	2.85～3.25	2.7	穹窿形				1	前秦建元十四年	銘文磚
8	陝西咸陽師院Ｍ５	東		1.06	4.7		2.2～2.3	2.2～2.5	穹窿形	2.1～2.4	1.8	弧形	3	後趙	前室に３側室が伴う
9	陝西咸陽平陵Ｍ１	南			9.7		2.44～2.6	2.28～2.7	穹窿形				1		墓道は過洞・竪井が伴う

表４－２　北魏帝陵一覧表（単位：m）

No.	地点	墓室					地面設施					備注
		方向	東西	南北	高	頂部	陵園		墳丘			
							東西	南北	辺長・直径	高	頂部	
1	文明太後永固陵	南	6.83	6.4	7.3	四角攢尖			117 × 124	22.87	平	墳丘底部は長方形、その南に陵廟等建築。490 年。
2	孝文帝“万年堂”	南	5.69	5.68	6.97	四角攢尖			60 × 60	13	平	墳丘底部は方形。
3	孝文帝長陵	南					443	390	103	21	平	神道両側は元来石像が立っていた。墳丘東南に建築遺跡あり。
	文昭皇后陵	南							42	15	平	墳丘東南に建築遺跡あり。
4	宣武帝景陵	南	6.92	6.73	9.36	四角攢尖			105 ～ 110	24	平	神道両側に元来石像が立っていた。515 年。

表４－３　洛陽時期北魏墓葬一覧表（単位：m）

No.	地点	墓道				墓室				墓誌	合葬	身分、年代	備注
		方向	形態	過洞	竪井	形態		法量					
						材料	頂部	東西	南北				
1	元冏墓 (孟津朝陽村 M17)	南	傾斜			磚室	四角攢尖	5.1 ～ 5.4	5.1 ～ 5.4	0.48 × 0.57	?	陽平王、早卒。永平四年（511 年）	M18 形態同じ
2	元懌墓（洛陽北郊）治め	南				磚室	穹窿	約 9	約 9	0.95 × 1	?	清河王、殺害される。孝昌元年（525 年）	円形墳丘、底径 30、高 15。甬道に石門を置く。甬道と墓室には壁画を描く。
3	元乂墓（孟津朝陽村）	南	傾斜			磚室	穹窿	7	7.5	有	?	殺害され、死後江陽王を追封。孝昌二年（526 年）	円形墳丘、底径 35、高 20。壁画あり。墓室に２つの仮耳室。
4	元暐墓（洛陽北金家溝村）	南	傾斜	2	2	土洞	穹窿	3.2 ～ 3.5	3.3	0.83 × 0.85	?	南平王、殺害される。孝昌三年（527 年）	壁画あり。石棺を用いる。
5	元邵墓（洛陽北盤龍冢村）	南	傾斜	1	1	土洞	四角攢尖	3.9	4	0.97 × 0.97	?	常山王、殺害される。建義元年（528 年）	土台棺床あり
6	大同東郊元淑夫婦墓	南	傾斜			磚室	四角攢尖	6.75	5.7	0.43 × 0.79	1 槨 2 棺	肆朔燕三州刺史・平城鎮将。永平元年（508 年）	墳丘底部長方形、東西 63、南北 79、高 3.7、版築なし。墓室西側に磚棺床。墓誌は碑形、底座あり。
7	大同小站村封和突墓	南				磚室		4.47 ～ 4.63	4.3 ～ 4.4	0.33 × 0.42	1 棺	昌国子、死後洛州刺史を贈られる。正始元年（504 年）	墓誌は碑形、底座あり。
8	洛陽西車站北魏墓	南				磚室	四角攢尖			有	?	平北将軍燕州刺史寇猛。正始三年（506 年）	
9	偃師杏園村 YD Ⅱ M914	南	竪井			磚室	四角攢尖	4.4	4.4	0.53 × 0.56	2 棺	元睿。熙平元年（516 年）	死後洛州刺史を追贈
10	孟津北陳村 C10M68	南	?			土洞	穹窿	3	2.8	0.585 × 0.585		安東将軍王温。太昌元年（532 年）	死後瀛洲刺史を追贈。 墓室に壁画あり。
11	洛陽紗厂西路 HM555	南	傾斜、台階	1	1	土洞	四角攢尖	2.92 ～ 4.05	3.8	50 × 50	?	河間太守郭定興。正光三年（522 年）	
12	孟津三十里鋪 M22	南	竪井			土洞		3.16	2.95	有	1 棺	燕州治中従事史侯掌。正光五年（524 年）	
13	偃師杏園村 90YCXM7	南	傾斜	1	1	土洞	穹窿	4.64	4.84	0.585 × 0.585	1 棺	鎮遠将軍、射声校尉染華。孝昌二年（526 年）	死後楽陵太守を追贈
14	偃師南蔡庄 90YNLTM2	南	傾斜			磚室		5.5	5.26		?	北魏後期	
15	偃師南蔡庄 89YNLTM4	南	傾斜			磚室		4.5	4.5	残	?	北魏	墓室内には磚の槨室が二つ並列する
16	偃師杏園村 YD Ⅱ M926	南	竪井			磚室	四角攢尖	3.25	3.25		1 棺	北魏	
17	孟津朝陽村 M15	南	傾斜	1	1	土洞		4	4.2		?	北魏後期	M14 形態同じ
18	偃師杏園村 YD Ⅱ M4031	西	傾斜			土洞	稍拱	3	2.38		1 棺	正始五年（508 年）	朱書陶罐
19	偃師杏園村 YD Ⅱ M1101	南	傾斜	2	2	土洞	四角攢尖	3.7	4.1		?	北魏	
20	偃師前杜楼 M 1	南	傾斜	1	1	土洞	穹窿	3.56 ～ 3.8	3.7		?	北魏後期	墓室に壁画あり。石棺。
21	洛陽衡山路 HM621	南	傾斜			土洞		2.6	2.6		?	北魏後期	
22	洛陽西南張庄村北魏墓	南	傾斜			土洞	平	1.4	3.1		1 棺	董富妻郭氏。太和十二年（477 年）	40)

表４－４　東魏、北斉鄴城地区墓葬一覧表（単位：m）

No.	地点	甬道		墓室					墓誌	壁画	合葬	墓主身分	備注
		分段	石門	形態		法量		棺床				埋葬年代	
				材料	頂部	東西	南北						
1	河北磁県 M003（未盗）	無	無	土洞	穹窿？	4.5～4.7	4.3～5	無	0.71×0.71	過洞入口上方、甬道入口上方、墓室	一棺一槨	鎮東将軍・徐州刺史元祜；東魏天平四年（537）	墳丘残高約1.8 m。墓道には過洞・竪井各１つ伴う。
2	河北磁県東陳村Ｍ１	無	無	磚室	穹窿	4.26	4.8	無	0.56×0.56	墓室		南陽郡君趙胡仁；東魏武定五年（547）	墓室四壁は単層磚、墓頂は双層磚。54）
3	河南安陽固岸墓地Ⅱ区 M57	無	無	土洞				囲屏石榻は棺木が見られない。	有	無	２人	東魏武定六年（548）	墓道は竪井あり
4	河北磁県大冢营村Ｍ１	二段	石門框	三層磚室	穹窿	5.58	5.23	磚棺床、周りに青石。	0.62×0.62	墓道・甬道上の門墻、甬道、墓室	１人	長広郡開国公高湛妻・茹茹隣和公主閭叱地連；東魏武定八年（550）	甬道に２つの壁龕を設ける
5	河南安陽固岸墓地Ⅱ区 M51（未盗）	無	無	磚室	四角攢尖	2.92	2.62	須弥座式磚棺床	無	無	２人	東魏後期	甬道口上方に磚砌門楼 55）
6	河北磁県北斉元良墓	無	有	土洞		3.1或は4.2	4.2或は3.1	無	0.43×0.43	無		北斉天保四年（553）	56）
7	河北磁県湾漳 M106	二段	有	五層磚室	四角攢尖	7.4	7.56	須弥座式石棺床		墓道、甬道上の門墻、甬道、墓室	一棺一槨	文宣帝高洋的武寧陵。北斉乾明元年（560）	墓南に１つの石人像。甬道と墓室底に石を敷く。
8	河北磁県北斉堯峻墓	無	有	単層磚室	穹窿？	4.52	4.38	磚棺床	0.86×0.86	甬道上の門墻	３人	開府儀同三司・懐州刺史堯峻。北斉天統三年（567）	堯峻妻吐谷渾静媚565年卒、妻独孤思男571年卒。
9	河南安陽北斉和紹隆墓	無	無	単層磚室	穹窿	3.5或は3.6	3.6或は3.5	磚棺床	0.55×0.55	無	２人	驃騎大将軍和紹隆。北斉天統四年（568）	
10	河南安陽北斉賈進墓	無	無	土洞	四角攢尖	3	2.9	無	0.4×0.4	墓道・甬道上の門楼、墓室	１人	車騎大将軍賈進。北斉武平二年（571）	
11	河南安陽北斉范粹墓	無	無	土洞	穹窿？	2.7	2.88	磚棺床	0.46×0.46	墓室	１人	驃騎大将軍・開府儀同三司・涼州刺史范粹。北斉武平六年（575）	
12	河北磁県北斉高潤墓	無	有	三層磚室		6.45	6.4	石棺床	73.5×73.5	墓道、甬道、甬道上の門墻、墓室		馮翊文昭王高潤。北斉武平七年（576）	
13	河北磁県北斉高孝緒墓	無	有	二層磚室		5.6	5.2	不清	0.8×0.8（墓誌蓋）	墓道、甬道、甬道上的門墻、墓室		修城郡王高孝緒	墳丘高は６m近い
14	河南安陽北斉顔氏墓	無	無	土洞？		2.36	2.4	磚棺床	0.35×0.28～0.35	墓室	１人	文宣帝高洋妃顔玉光。北斉武平七年（576）	墳丘高約８m。墓誌は磚質。[57]
15	河南安陽固岸墓地Ⅰ区Ｍ２（未盗）	無	無	土洞	弧形			無	無	無	１人	北斉	木棺を用いる[58]

表４－５　西魏北周墓葬一覧表　（単位：m）

No.	地点	墓道				墓室		墓誌	合葬	身分、年代	備注
		方向	形態	過洞	竪井	東西	南北				
1	陝西咸陽胡家溝西魏侯義墓	南	傾斜台階	無	無	2.8～3	2.74～2.86	0.65×0.65	1	西魏大統十年（544）	甬道、墓室に壁画あり。墓室内に地山の棺床あり。
2	陝西咸陽馬家堡西魏謝婆仁墓	南	傾斜	無	無	2.4～2.66	2.87～3.04	0.326×0.16	1	西魏大統十六年（550）	墓誌は磚
3	陝西咸陽坡劉村北周拓跋虎墓	南	傾斜					0.42×0.42		驃騎大将軍（九命）。保定四年（564）	単室墓、壊される。
4	陝西咸陽北周叱羅協墓	南	傾斜	6	6	3.8	3.8	0.733×0.733		車騎大将軍（九命）。建德四年（575）	墳丘のもとの高さは約20 mという。第5､6竪井底部の東西両壁には各々壁龕あり（計４点）。墓道両壁、過洞入口上方、墓室壁に壁画あり。後室長2.7、幅1.7、中に土棺床あり。
5	陝西咸陽北周王德衡墓	南	傾斜	3	3	4.35	3.06	0.51×0.51	2	儀同大将軍（九命）。建德五年（576）	甬道内に石門あり。墓室壁に壁画あり。墓室内に土棺床あり。
6	陝西咸陽北周宇文儉墓	南	傾斜	5	5	3.65	3.6	0.722～0.73×0.735		譙忠孝王、柱国大将軍（正九命）。建德七年（578）	甬道内に木門あり。
7	陝西咸陽北周武帝孝陵	南	傾斜	5	5	3.8	5.5（壁龕を含む）	0.85×0.85	2	皇帝。宣政元年（578）	第４、５竪井の東西両壁に各々壁龕あり（計４点）。墓室内に２基の棺槨あり。墓室北側に壁龕が連なる。
8	陝西咸陽北周若干雲墓	南	傾斜	3	3	2.2～2.4	2.2	0.57×0.57	1	上開府大将軍（正九命）。宣政元年（578）	後室長2.6、幅1.16～1.3。墓主は殺害された可能性あり。

No.	地点	墓道				墓室		墓誌	合葬	身分、年代	備注
		方向	形態	過洞	竪井	東西	南北				
9	陝西咸陽北周独孤藏墓	南	傾斜	3	3	2.8	2.7	0.54 × 0.54	2	大都督（八命）。宣政元年（578）	甬道内に木門あり。墓道、甬道、墓室壁に条帯状壁画。後室長2.7、幅0.8 ～ 1.4、中に木棺床、その上に木棺槨、平面梯形。前室に１側室、１人の女性を内葬。
10	陝西咸陽北周尉遲運墓	南	傾斜	5	5	3.7	3.4	0.73 × 0.73	2	上柱国大将軍（正九命）。大成元年（579）	墓南地下で石人３点、石羊２点、石虎２点が発見。 墓室壁に壁画あり。
11	陝西咸陽３号北周墓	南	傾斜	3	3	2.75 ～ 3.1	2.4 ～ 2.85				
12	陝西咸陽４号北周墓	南	傾斜	3	3	3	2.5				墓室内に土棺床あり。
13	陝西咸陽５号北周墓	南	傾斜	1	1	2.4	1.9		2		墓室内に土棺床あり。
14	陝西咸陽６号北周墓	南	傾斜	2	2	3	2.5				
15	陝西咸陽 11 号北周墓	南	傾斜	5	5	3	3				
16	陝西西安北郊北周李誕墓	南	傾斜			3.62 ～ 3.88	3.56 ～ 3.65	有	2	保定四年（564）	甬道・墓室は磚築。甬道内に石門あり。墓室四壁に紅彩が残存。墓室内に石棺あり。
17	陝西西安北郊北周康業墓	南	傾斜			3.3 ～ 3.4	3.3 ～ 3.4	0.465 × 0.465	1	大天主。天和六年（571）	甬道内に石門あり。甬道、墓室に壁画あり。墓室内に囲屏石榻あり。
18	陝西西安北郊北周安伽墓	南	傾斜	5	5	3.7	3.5	0.47 × 0.47	1	同州薩保・大都督。大象元年（579）	甬道・墓室は磚築。甬道内に石門あり。過洞・甬道上方、第１～４竪井、墓室に壁画あり。墓室内に囲屏石榻あり。
19	陝西西安北郊北周史君墓	南	傾斜	5	5	3.7	3.5	石堂門楣上に題銘あり	2	涼州薩保。大象二年（580）	甬道内に石門あり。墓道、過洞上方、竪井、墓室に壁画あり。墓室内に殿堂式“石堂”（石槨）あり、内に石榻を並べる。
20	陝西西安南郊南里王村 13 号墓	南	傾斜			2.3	1.9 ～ 2		1	北周	墓室内に土棺床あり。
21	陝西西安南郊塔坡村 M３	南	傾斜	1	1	2.7	3.1			北周	
22	寧夏固原北周宇文猛墓	南	傾斜	5	5	3.6	3.5	有	1	驃騎大将軍（九命）。保定三年（563）	墳丘底径 12、残高 4.6。墓室内に磚棺床あり。木棺、槨あり。墓道、過洞、竪井、甬道、墓室内に壁画あり。
23	寧夏固原北周李賢墓	南	傾斜	3	3	4	3.85	0.675 × 0.675	2	大将軍（正九命）。天和四年（569）	墳丘底径 12.5、残高５。甬道内に１点壁龕あり。墓道、過洞、竪井、甬道、墓室内に壁画あり。木棺、槨あり。
24	寧夏固原北周田弘墓	南	傾斜	4	5	3.18 ～ 3.27	3.14 ～ 3.26	0.715 × 0.721	2	柱国大将軍（正九命）。建德四年（575）	墳丘底径約 20、残高約４。後室長 3.32、幅 0.99 ～ 1.46。前後室いずれも棺を置き、２棺とも二重。前室に１側室が付く。甬道、前後墓室、側室に壁画あり。

表４－６　南京地区東晋墓葬一覧表（単位：ｍ）

No.	地点	墓道	甬道		墓室							障土壁	副葬品	合葬	墓葬年代・墓主身分	備考
			有無	木門槽	頂部	法量		祭台	棺床	直櫺窓・灯龕	排水溝					
						東西	南北									
1	南京大学北園東晋墓	?	有	2	?	4	4.4	無	無	無	無	有	青瓷器；陶器（座４：龍首１・虎首１・羊首２、俑２）；鉄兵器；玻璃器；金・銀・銅・水晶・瑪瑙等飾具。	推測３人	皇帝陵？	１側室あり、中に鉄棺釘、虎首陶座１。
2	南京汽輪電机厂東晋墓	?	有	2	券頂	4.24	4.98	無	無	無	無	有	青瓷器；陶器（座４：龍首２・虎首２、俑２）；玻璃器；金・銀・玉石・瑪瑙・琥珀飾具；鉄鏡２。	?	皇帝陵？	銅棺釘 18 点、鉄棺釘 18 点。
3	南京富貴山東晋墓	有	有	2	券頂	5 18	7.06	無	無	無	有	有	青瓷器；陶器（座４：龍首２・虎首２、俑４）；玉石・琉璃飾具。	?	皇帝陵？	銅棺釘・鉄棺釘が同出
4	南京幕府山Ｍ１	?	有	1	券頂	5.5	2.6	無	有	無	有	有	青瓷器；陶器（座４：龍首２・虎首２）；漆器；玉器；滑石豚４；金・滑石飾具；銅銭。	?	皇族？	高さ約３ｍの墳丘あり
5	南京幕府山Ｍ２	?	無	?	?	7.8	2.8	?	有	?	有	?	青瓷器；陶器（残俑４）；滑石豚３；銅銭。	?	皇族？	
6	南京幕府山Ｍ３	?	有	無	券頂	1.9	4.6	無	有	各５点	有	無	青瓷器；陶器（座４：龍首２・虎首２、模型明器：案・凭几・倉）；滑石豚２。	?	皇族？	

№	地点	墓道	甬道		墓室							障土壁	副葬品	合葬	墓葬年代・墓主身分	備注
			有無	木門槽	頂部	法量		祭台	棺床	直櫺窓・灯龕	排水溝					
						東西	南北									
7	南京幕府山Ｍ４	?	有	1	券頂	1.85	4.93	無	無	各１点	有	無	青瓷器；陶器（座４：龍首２・虎首２）；石黛板１；滑石豚２；金・銀・カーボン・石・トルコ石・瑪瑙・玻璃飾具；鉄鏡１。	?	皇族？	
8	南京富貴山Ｍ２	?	有	1	券頂	1.2	4.22	無	無	無	無	無	青瓷器；陶俑４、陶馬１；銅器；鉄兵器；金・銀飾具；鉄鏡１。	?	皇族？	
9	南京富貴山Ｍ４	?	有	1	券頂	1.89	4.87	無	無	無	無	無	青瓷器；銅器；鉄器；金・銀・琥珀・カーボン・玻璃飾具；鉄鏡２。	?	皇族？	
10	南京象山Ｍ１	?	有	無	券頂	1.74～1.75	3.69～3.7	無	無	無	無	無	青瓷器；鉛人１；金銀飾具；石板２；銅鏡１、鉄鏡１。石墓誌１。	２人	咸康七年（341）、永和四年（348）；王興之夫婦（王彬の子）	銅棺釘 13 点、鉄棺釘 25 点。
11	南京象山Ｍ３（未盗）	?	無	?	券頂	1.15	4.25	無	無	２灯龕	有	有	青瓷器；金・銀・トルコ石・琥珀・琉璃飾具；石板１；鉄鏡１。磚墓誌１。	１人	升平三年（359）；王丹虎（王彬の女）	銅棺釘８点、鉄棺釘６点。
12	南京象山M4	?	有	無	券頂	2.07～2.09	4.54	無	無	２灯龕	有	有	青瓷器	?		銅棺釘
13	南京象山M5	?	無	?	券頂	1.06	4.49	無	無	２灯龕	有	有	青瓷器；陶器；銅鏡１。磚墓誌１。	?	升平二年（358）；王閎之（王彬の孫、王興之の子）	
14	南京象山Ｍ６	?	有	無	券頂	1.25	4.44	有	無	１窓３龕	有	?	青瓷器；陶器；滑石豚２。磚墓誌１。	１人	太元十七年（392）；夏金虎（王彬の継室夫人）	
15	南京象山Ｍ７（未盗）	?	有	1	穹窿頂	3.9	3.22	無	無	各３点	無	無	青瓷器；陶器（困、牛車、牛、馬、俑14）；玻璃杯；玉器；滑石豚２、石板１；金・銀・トルコ石・瑪瑙・琥珀・水晶飾具；銅鏡３。	３人		銅・鉄棺釘 22 点
16	南京象山Ｍ８	?	有	無	券頂	1.95	4.5	無	無	３灯龕	有	有	青瓷器；陶器；滑石豚２、石板１；鉄鏡２。磚墓誌１。	?	泰和二年（367）；丹楊令王　之（王彬と夏金虎の子）	
17	南京象山Ｍ９（未盗）	?	有	無	券頂	2	4.42	無	無	３灯龕	有	有	青瓷器；滑石豚４、石板２；金．銀・玉飾具。銅鏡１、鉄鏡１。墓誌３（２石１磚）。	２人	泰和六年（371）；鄱陽太守・都亭侯王建之夫婦（王彬の孫、王彭之の子）	
18	南京象山M10	傾斜墓道	有	無	券頂	2	4.45	無	無	３灯龕	有	有	青瓷器；石硯１；鉄鏡１。石墓誌１（誌文不明）。	?		円形墳丘高３～４ｍ
19	南京象山M11	?	有	無	券頂	1.8	4.13	無	無	３灯龕	有	有	磚墓誌２	２人	永和十二年（356）、泰元十四年（389）；王康之夫婦（王彬の孫？）	
20	南京老虎山Ｍ１	?	有	1	穹窿頂	1.65～1.75	3.94	無	無	各３点	有	無	青瓷器；陶器；銅器；鉄器；滑石豚；石珠、水晶珠；銅銭。磚墓誌。	?	永和元年（345）；顔謙夫人劉氏	銅棺釘 25 点、鉄棺釘５点。
21	南京老虎山Ｍ２	?	有	1	券頂	1.91	4.55	有	無	３点の龕	有	無	青瓷器；陶器；銅器；鉄器；金・銀飾具；滑石豚４；銅鏡２。	２人	顔綝夫婦	銅棺釘 23 点、鉄棺釘 10 点。
22	南京老虎山Ｍ３	?	有	無	券頂	1.9～1.98	4.66	有	無	３点の龕	有	無	青瓷器；陶器；銅器；石器、滑石豚４；金飾具；鉄鏡１；銅銭。石印。	２人	零陵太守顔約夫婦	銅棺釘 21 点、鉄棺釘。

№	地点	墓道	甬道		墓室							障土壁	副葬品	合葬	墓葬年代・墓主身分	備注
			有無	木門槽	項部	法量		祭台	棺床	直櫺窓・灯龕	排水溝					
						東西	南北									
23	南京老虎山Ｍ４	?	有	1	券項	1.66	4.63	有	無	３点の龕	有	無	青瓷器；陶器（陶座2、灯盞が付く）；銅器；鉄器；滑石豚２；金飾具;銅鏡1。銅印。	?	顔鎮之	銅、鉄棺釘
24	南京郭家山Ｍ１	?	有	?	穹窿項	3.56	5.03			有			青瓷器；陶器；玉石器（玉豚５、滑石豚８）；金・銀・銅飾具等。紀年磚。		永和三年(347)	
25	南京郭家山Ｍ２	?	有	?	穹窿項					有					東晋前期	
26	南京郭家山Ｍ３	?	有	?	穹窿項					有					咸和元年(326)	
27	南京郭家山Ｍ４	?	有	1	穹窿項	3.7	4.01	無	無	各３点	無	無			東晋前期	墓室壁上に灯台を設ける
28	南京郭家山Ｍ５	?	有	1	穹窿項	2.1	4.53	無	無	３点の窓	無	有	青瓷器；玉石器等。		東晋前期	墓室壁上に灯台を設ける。銅棺釘。
29	南京郭家山Ｍ９	?	有	1	穹窿項	3.96	3.75	有	無	各３点	有	有	青瓷器；陶器；石器；金・銅飾具。磚墓誌１。	?	東晋前期；大将軍・始安忠武公温嶠	銅棺釘１点、鉄棺釘45点余。
30	南京郭家山M10	?	有	1	穹窿項	4.28	5.6	有	有	各３点	有	有	青瓷器；陶器（座４：龍形２・虎形２、仓１、灶１、俑４）；玉石器；鉄鏡１。	?	東晋前期	封門墻に仮窓あり。銅・鉄棺釘。
31	南京郭家山M12	?	有	1	穹窿項	2.64	4.92	有	有	有	有	有	青瓷器；陶器（仓１、灶１、男俑２）；金飾具；石器；銅銭。陶墓誌１。	?	泰和六年(371)；新建県侯温式之	封門墻に仮窓あり。銅、鉄棺釘。
32	南京郭家山M13	?	有	1	券項	2.92	5.36	無	有	各２点	有	有	青瓷器；陶器（座２：龍形１・虎形１、俑３）；石器（豚３）；金銀飾具；銅銭。	２人？	東晋中後期一劉宋初期	墓室三壁おおよそ弧形。銅・鉄棺釘。
33	南京司家山Ｍ１	?	有	1	券項	2.23	5.12	無	有	各５点	有	無	青瓷器；陶器；石俑２。石墓誌１、誌文は不明。	?	南朝	
34	南京司家山Ｍ２	?	有	無	券項	2.1	5.54	無	有	各５点	有	有	青瓷器；陶器。	?		
35	南京司家山Ｍ３	?	有	無	?	2.3	5.65	無	有	各５点	有	無	青瓷器；陶器。	?		
36	南京司家山Ｍ４	?	有	無	券項	2.18	5.7	有	有	各５点	有	無	青瓷器；石板１。磚墓誌２。	２人	義熙三年(407)、義熙十二年(416)；輔国参軍謝球と夫人王德光	
37	南京司家山M5	?	有	1	券項	1.96～2.18	6	無	有	各３点	有	有	青瓷器；陶器；石板１。磚墓誌１。	?	義熙二年(406)；謝温	墓室壁はやや外曲
38	南京司家山M6	?	有	1	券項	2.15～2.25	4.45	有	有	各５点	有	有	青瓷器；滑石豚３。磚墓誌１組６点。	２人？	宋永初二年(421)；海陵太守謝琉	墓室三壁やや外曲
39	南京司家山M7	?	?	?	?	2.15	残3.84	?	?	?	?	?	青瓷器；石器３。	?	南朝	墓が壊された
40	南京呂家山東晋墓（未盗のよう）	?	有	無	券項	4.07	1.73	無	無	各３点	無	無	青瓷器；陶器；滑石豚２；銅鏡２。	?	?	銅、鉄棺釘６点
41	南京呂家山M1	傾斜墓道	有	1	券項	1.6～1.86	4.43	無	無	３点の龕	有	有	青瓷器；陶器；滑石豚１；鉄鏡２。磚墓誌１。	２人	湘南郷侯李緝と夫人陳氏	墳丘高約1.6ｍ。 鉄棺釘15点、銅棺釘１点。
42	南京呂家山M2	傾斜墓道	有	1	券項	２～2.15	4.34	無	無	３点の龕	有	有	青瓷器；陶器；滑石豚２；石板１；鉄鏡１；銅銭。磚墓誌３。	３人	李　と夫人武氏、何氏	墳丘あり。 鉄棺釘14点。
43	南京呂家山M3	?	?	?	券項	1.21～1.35	残3.86	?	?	残存１龕	有	?	青瓷器；陶器。磚墓誌１合。	1	李摹	破壊される。銅棺釘１点。
44	南京仙鶴山Ｍ２（未盗）	傾斜墓道	有	無	券項	2.2～2.36	4.72	無	有	４点の灯龕	無	無	青瓷器；陶器；銅器；鉄器；漆器；玉器（豚２）；滑石豚２；金器；琥珀・料器等；鉄鏡３。磚墓誌２。	２棺分用銅鉄釘	泰和元年(366)、永和十二年(356)；建昌伯高崧と夫人謝氏	墓室２側壁はやや外曲
45	南京仙鶴山Ｍ３	傾斜墓道	有	無	券項	2.08～2.14	4.94	無	有	各３点	無	有	青瓷器；陶器；滑石豚３；料珠；鉄鏡１。	２人？	東晋後期；高崧子高耆夫婦？	墓室３壁はやや外曲。銅・鉄棺釘。
46	南京仙鶴山Ｍ６（未盗）	傾斜墓道	有	無	穹窿項	2.8～2.95	4.9	無	有	各３点	無	有	青瓷器；陶器；銅器；鉄器；漆器；玉器；金銀器；玻璃・水晶・松香・トルコ石・琥珀・料器等；銅銭；鉄鏡１。	２棺分用銅鉄釘	東晋前期；高崧父母高悝夫婦？	墓西側に建築遺跡。 墓室３壁やや外曲。

表４－７　南京および周辺地区南朝墓葬一覧表（単位：ｍ）

No.	地点	墓道	甬道		墓室							障土壁	拼磚壁画と副葬品	合葬	墓葬年代・墓主身分	備注
			有無	石門	頂部	法量		祭台	棺床	直櫺窓・灯龕	排水溝					
						東西	南北									
1	江蘇丹陽胡橋仙鶴坳南朝墓	?	有	2	?	4.9	9.4	無	有	?	有	有	甬道壁には獅子等があり、墓室壁には竹林七賢、羽人戯虎、飛天、車馬出行（騎馬楽隊、騎馬武士、執戟侍衛、執扇・蓋侍従）等がある。 青瓷器、陶器（陶俑、屋）、石器（石俑）、鉄器、金・玉・瑪瑙・琥珀・水晶・料飾具等。	夫婦２人	斉帝陵級	墳丘不明。墓南 510 m に石麒麟と石天禄各１があり。
2	江蘇丹陽建山金家村南朝墓	?	有	2	?	5.17	8.4	石祭台	有	各６点	有	有	甬道頂に日、月があり、壁に獅子、武士がある；墓室壁に羽人戯龍・戯虎、飛天、竹林七賢と栄啓期、車馬出行等がある。 青瓷器、陶器（俑）、石器（俑）、漆器、銅銭等。	?	斉帝陵級	墓南 800 m に石麒麟と石天禄が各１あり。
3	江蘇丹陽胡橋呉家村南朝墓	?	有	2	?	5.19	8.2	石祭台	有	?	有	有	壁画内容は基本的に上墓と同じ。 陶器（俑、犀牛）、石器（俑、馬）、漆器、銅銭等。	?	斉帝陵級	封土東西 30 m、南北 28 m、高８m。
4	南京西善橋油坊村罐子山南朝墓	有	有	2	?	約 5.2	約 8.5	?	?	?	有	有	甬道壁に獅子あり。 青瓷器、陶器（陶俑）、玉器等。	?	陳帝陵級	墳丘不明、推算によると高さ約１m。
5	南京西善橋宮山南朝墓	?	有	1	券頂	6.85	3.1	無	有	２窓３龕	有	有	墓室壁に竹林七賢と栄啓期がある。 青瓷器、陶器（俑６、凭几１、灶１、犀牛２、馬１）、玉石器（滑石豚２）、銅鏡１、鉄鏡１、銅銭８。	２棺座	宋	
6	南京甘家巷梁蕭融夫婦墓	?	有	?	?	3.15	約６	?	?	?	?	?	石墓誌２	２人	天監元年（502）と十三年（514）；梁桂陽王蕭融夫婦	墓南 1000 m に石辟邪一対あり
7	南京甘家巷Ｍ６	?	有	1	?	3.25	6.3	石祭台？	有	有灯龕	有	有	青瓷器、陶器（俑１）、石案足７・座８・凭几１・硯１。石墓誌２（文字不明）。		天監十七年（518）；梁安成王蕭秀	墓南 1000 m に石辟邪、石柱各一双あり、石碑２双。
8	南京白龍山南朝墓	?	有	1	券頂	3.7	7.7 高 5.25	石祭台	有	有灯龕	有	有	青瓷器、陶器（俑１、凭几１、屋１）、石祭台等、銅鏡１、鉄鏡１。石墓誌２（文字不明）。	棺座石板１	普通七年（526）；梁臨川王蕭宏	墳丘楕円形、底周長約 50 m、高３m 余。墓北 1000 m に石辟邪、石柱、石碑各一双。
9	南京堯化門南朝墓	?	有	1	券頂	3.48	6.2 高 4.44	?	?	?	有	有	青瓷器、陶器（俑３、牛車、凭几、屋１）、石座６・案足４・凭几・豚２、銅鏡、銅銭。石墓誌４。	棺座石板４	中大通五年（533）；梁南平王蕭偉	墓南約 800 m に石柱一双、柱北に門闕一双。
10	南京甘家巷梁蕭象墓	?	有	1	?	2.96	6.48	石祭台	?	?	有	有	青瓷器、陶器（俑２、馬１、凭几１、屋２）、石祭台１・足２・豚１、銅銭７。石墓誌１。	棺座石板２	大同二年（536）；梁桂陽王蕭象	梁桂陽王蕭融嗣子
11	南京甘家巷蔡家塘Ｍ１	?	有	1	?	3.05	5.83	石祭台２	有	?	有	?	青瓷器、陶器（俑、牛車、凭几）、玉环２、石俑・祭台２・座４・豚、鉄鏡。	２棺座：石板４	梁？	
12	南京西善橋陳黄法墓	?	有	1	?	3.15	5.5	石祭台	有	有	無	有	青瓷器、陶器、石祭台１・座４。石墓誌１。	棺座石板２	陳義陽郡公黄法	甬道は２耳室あり。墓室内は元来壁画あり。
13	南京司家山Ｍ６	?	有	１木門	券頂	2.15～2.25	4.45	有	有	各５点	有	有	青瓷器；滑石豚３。磚墓誌一組６。	２人？	永初二年（421）；宋海陵太守謝琉。	墓室三壁はやや外曲する

No.	地点	墓道	甬道		墓室							障土壁	拼磚壁画と副葬品	合葬	墓葬年代・墓主身分	備注
			有無	石門	頂部	法量		祭台	棺床	直櫺窓・灯龕	排水溝					
						東西	南北									
14	南京太平門外宋明昙憘墓	?	有	?	券頂	2.04	5.5	無	有	?	?	無	青瓷器、陶器（陶俑３）、滑石豚２。石墓誌１。		元徽三年(475)；宋武原県令	
15	南京燕子矶南朝墓	?	有	1	?	5	2.35	石祭台	有	?	無	無	石俑４、石馬１、座３。石墓誌１。	２棺？	普通二年(521)；梁輔国将軍	

表４－８　江蘇現存南朝陵墓神道石刻一覧表

No.	石刻所在地	現存石刻	陵墓名称	備注
1	江寧県麒麟鎮麒麟鋪村	石麒麟２（左双角、四足欠損；右一角、角欠損）	宋武帝劉裕初寧陵	
2	丹陽市胡橋郷狮子湾	石麒麟２（１完形、１欠損）	斉宣帝蕭承之永安陵	
3	丹陽市前艾郷田家村	石麒麟２（１完形、１欠損）	斉武帝蕭賾景安陵	
4	丹陽市埤城鎮水経山南仙塘湾附近鶴仙坳	石麒麟２	斉景帝蕭道生修安陵	発掘
5	丹陽市荆林鎮三城巷東北	石麒麟２（１完形、１欠損）	斉景帝蕭鸾興安陵	
6	丹陽市建山郷金王陳村	石麒麟２	金王陳南斉失名墓	発掘
7	丹陽市建山郷爛石弄北	石辟邪２（１完形、１欠損）	爛石弄南斉失名墓	
8	丹陽市埤城鎮水経山村	石辟邪２	水経山南斉失名墓	
9	丹陽市陵口鎮東	石麒麟２（いずれも欠損）	斉梁陵口	
10	丹陽市荆林鎮三城巷東北	石麒麟２（いずれも欠損）、石础２、石柱２、石碑２（龟趺座のみ残存）	梁文帝蕭顺之建陵	
11	丹陽市荆林鎮三城巷劉家村	石麒麟１	梁武帝蕭衍修陵	
12	丹陽市荆林鎮三城巷劉家村	石麒麟１（欠損）	梁簡文帝蕭纲庄陵	
13	句容県石狮郷石狮村	石辟邪２、石柱２	梁南康簡王蕭绩墓	
14	南京煉油厂小学内	石辟邪２、石柱１（柱頭小辟邪のみ残存）	梁桂陽簡王蕭融墓	発掘
15	南京栖霞鎮甘家巷四隊	石辟邪２、石柱２（１柱座のみ、１柱頭は欠損）、石碑４（２碑比較的完形、２碑龟趺座のみ残存）	梁安成康王蕭秀墓	発掘
16	南京栖霞鎮甘家巷四隊	石辟邪２（１頭欠損、１後胯のみ残存）、小辟邪２、石碑３（１碑完存、２碑龟趺座のみ残存）	梁始興忠武王蕭憺墓	
17	南京栖霞鎮十月村（太平村）	石辟邪２（１おおよそ欠損、１欠損、地下に埋入）	梁呉平忠侯蕭景墓	
18	南京栖霞鎮甘家巷四隊	石辟邪２（やや欠損）	梁鄱陽忠烈王蕭恢墓	
19	南京栖霞区仙林農場張庫村	石辟邪２（１完存、１欠損）、石柱２（１柱座のみ、１柱頭は欠損）、石碑２（１完形、１龟趺座のみ残存）	梁臨川靖惠王蕭宏墓	発掘
20	南京栖霞区仙林農場張庫村	石柱２（柱座のみ残存）	梁平楽侯蕭正義墓（？）	
21	南京尧化鎮北家辺	石柱２（数点に割れる、地下に埋入）	梁南平元襄王蕭偉墓（？）	発掘
22	南京栖霞鎮董家辺	石柱１（柱頭は欠損）	梁新渝宽侯蕭暎墓	
23	江寧県淳化鎮劉家辺	石桩２（柱頭いずれも欠損）、石辟邪２	梁建安敏侯蕭正立墓	
24	江寧県上坊郷石馬冲	石麒麟２（風蝕甚だしい）	陳武帝陳霸先万安陵	
25	南京栖霞鎮新合村狮子冲	石麒麟２（完存）	陳文帝陳蒨永寧陵	
26	江寧県江寧鎮建中村方旗廟	石辟邪２（１完形、１後半身欠損）	方旗廟失名墓	
27	燕子矶鎮太平村太子凹（現在は南京博物院に移設）	石辟邪１（頭部やや欠損）	太平村失名墓	

28	江寧県淳化鎮宋墅村	石柱２（１柱頭のみ残る、１柱頭小辟邪欠損）	宋墅村失名墓	
29	江寧県上坊郷耿崗村	石柱１（柱頭欠損）	耿崗村失名墓	
30	南京燕子矶鎮笆斗山徐家村金陵石化公司化工一厂内	石柱１（柱頭欠損）	徐家村失名墓	
31	江寧県上坊郷侯村	石辟邪２、石柱１（柱頭欠損）	侯村失名墓	
32	南京栖霞区馬群鎮狮子壩村	石辟邪１（欠損）	狮子壩村失名墓	
33	南京栖霞区仙林農場張庫村	石柱２（いずれも欠損）	張庫村失名墓	
34	江寧麒麟鎮晨光行政村後村	石碑１（破損した亀趺座のみ残る）	後村失名墓	
35	南京雨花台区馬家店村	石碑２（亀趺座のみ残る）	馬家店失名墓	

※表は『江蘇考古五十年』（南京出版社、2000 年）287 頁表１に基づき作成、そのうち１箇所は王志高「南朝帝王陵寝初探」（『南方文物』1999 年 4 期）注釈④补による。

第Ⅴ章　中日古代墳丘墓の比較研究

中国古代の東周時代から南北朝時代は、日本の弥生時代と古墳時代にほぼ相当する。この比較的長期に及ぶ歴史的時期において、中日両国間の関係が深まるにつれ、特に中国文化は日本古代社会に深甚な影響を与えた。このような影響は、墓葬の制度にも何かしら反映しており、中日両国の学界が長きにわたって関心を寄せる課題となってきた。

第１節　東周～秦漢時代と弥生時代

弥生時代の暦年代の問題に関して、学界で大論争が行われている。伝統的に弥生時代は、紀元前３世紀から紀元後３世紀までとされてきた。しかし、新たな年代測定研究により、１～２世紀ほどその開始年代を遡上させ得る。要するに、弥生時代の存続時期は、おおよそ戦国～秦漢時代に相当する。

以下では、まず弥生時代の墳丘墓の概況について簡説する。

１　弥生墳丘墓の概況

（１）墳丘墓の源流

現在の考古資料を見る限り、日本では旧石器時代の墓葬の実例は確認されていない。日本最古の墓葬は縄文時代に始まる。縄文時代の墓制には、主として土壙墓・廃屋墓・土器棺墓（甕棺墓）・石棺墓・木棺墓がある。この中では土壙墓が最も基本的な墓葬形態である。例えば、地域的に流行した配石墓（集石墓）は、その基本的な墓葬形態は土壙墓と同じであり、これに数基の石棺墓が加わったものである。また、北海道には一種の環状土籬（周堤墓ないし周溝墓）があるが、その墓葬形態は依然として土壙墓である。木棺墓は縄文時代晩期末に、支石墓の主体部として九州全域に出現する。縄文時代の墓制は、弥生時代の墓制に多少なりとも接続しているのである。

縄文時代の数種類の墓制は、どれも墳丘の意識を生み出していない。しかし、北海道の環状土籬や本州の関東地方・中部地方・東北地方の配石墓、そして九州一帯の支石墓は、周堤や配石を地上に表して墓葬の標示としている。さらに環状土籬は、区画墓としての特徴も有している。これらの縄文時代の墓制は、地上に墓標ないし区画を設置する方式を備えており、おそらく弥生時代の墳丘墓の発生に一定の関連があるだろう。

縄文時代晩期にはすでに、一部の地域において墓葬上に盛土を行う現象が発現しているが、それらは墳丘墓と呼べないだろう。真正の墳丘をもつ墓葬が登場するのは、弥生時代以降である。

（２）弥生時代の墳丘墓の概況

弥生時代の墓制には、土壙墓・甕棺墓・土器棺再葬墓・石棺墓（配石するものもある）・木棺墓・支石墓・墳丘墓がある。この中で、土壙墓と支石墓などは縄文時代から継続する墓制であり、他方で墳丘墓などは弥生時代に新たに発生した墓制である。

弥生時代の墓制には、配石石棺墓や支石墓などのように地上に墓標を設置したものもあり、甕棺墓などは埋葬の上に若干の盛土を施しているが、明確な墳丘を有し墳丘墓と称し得るものは周溝墓と台状墓（四隅突出形墳丘墓を含む）のみである。弥生墳丘墓の概念に関しては多種多様な見解があるが、本論では和田晴吾の観点に従い議論を展開する[1]。

１　周溝墓

周溝墓とは、四周に溝を掘削し、中央に土を積んで土台を築き、土台の上か下に墓壙を設置する埋葬形式の種類を指す。四周の溝と盛土が平面台形（多くは方形）を呈するため、一般に方形周溝墓と呼称する。この他、周溝と土台が円形を呈するものがあり、円形周溝墓と称する。

方形周溝墓の分布は広範におよび、ほとんど日本全域を覆っている。従って、弥生時代を代表する墓制の種類といえる。

方形周溝墓の最古例は弥生時代前期前葉（弥生時代は前期・中期・後期・終末期に時期区分する）に認められ、九州北部と畿内に出現した。しかし、九州北部では発展を見るに至らず、畿内を中心として各地に伝播した。例えば、前期中葉には四国北岸などで、前期後葉には滋賀で、前期末葉には東海西部（愛知・三重）と兵庫北部などで出現し、中期には東海東部・関東・北陸まで拡がり、それから東北地方にまで拡大し、後期には九州北部に波及した。

方形周溝墓は通常、集落付近の平地に造営されている。墳丘は盛土からなり、しばしば多数の墳丘で墓地が構成される（図５－１）。墳丘規模と埋葬状況については、弥生時代前期～中期前葉は墳丘長５～10m で、通常は単数埋葬、中期中葉～後葉には長さ 15m を超える墳丘が出現し、20 ～ 30m に達する墳丘もあり、２人あるいは多人数の埋葬が頻見する（図５－２）。

円形周溝墓は方形周溝墓に比べ少ないが、墳丘の築造法や墓壙などの埋葬施設は方形周溝墓に相似する。円形周溝墓は、弥生時代前期中葉に瀬戸内中部（香川・岡山）に出現し、中期には兵庫を経由して瀬戸内海を東進し、大阪湾北岸に到達する。後期には愛媛から大阪まで波及し、終末期には分布範囲がさらに拡大する。中期中～後葉には墳丘径 15m を上回るものが出現し、後期には径 20m 超の大型墓も現れる。これらは基本的に単数埋葬である。

２　台状墓

台状墓とは、丘陵や尾根上に所在し、地山を削り出すことで一定の高さをもつ土台を形成し、土台の上に墓壙を掘って埋葬を行う墓葬形態の一種を指す。掘削で形成される土台の平面形が方形であることが多いため、一般に方形台状墓と呼ばれる。この他、土台が円形を呈するものは、円形台状墓と呼ばれる。

台状墓は通常、集落付近の丘陵や尾根上に築かれる。聳立するその墳丘は、地山を削り出して形成されており、溝を掘り盛土することで墳丘が形成される周溝墓とは方式である（図５－３）。
方形台状墓は、中国地方と日本海沿岸一帯に多く分布しており、方形周溝墓の分布と比べると、分布の集中地域が存在している。おおよそ弥生時代前期末～中期初頭に出現した。中期後葉以降には、墳丘の斜面に貼石をする方式が現れる。これは方形貼石台状墓と呼ばれる。方形貼石台状墓の四隅は外方に突出し、四隅突出形方形台状墓を形成する。四隅突出形方形台状墓は、弥生時代中期後葉に中国内陸部（広島）に出現し、後期には日本海沿岸の島根東部・鳥取西部まで拡がり、後期後半～終末期には北陸まで波及する。

円形台状墓は数が少なく、出現も遅れる。弥生時代後期後半に岡山南部に認められ、終末期には香川・徳島にも散見する。

周溝墓と台状墓は、それぞれで発展をみせる他、相互に影響を与えあってもいた。例えば、ある地域において方形周溝墓は、方形台状墓の影響を受け、丘陵上に築かれている。貼石を用い、方形貼石周溝墓を形成するものもある。他方、別の地域では、方形周溝墓の影響を受け、四隅突出形方形台状墓が平地に築かれ、周溝をめぐらし、四隅突出形方形周溝墓を形成している。

３　小　結

弥生墳丘墓の代表である方形周溝墓と台状墓を比較すれば、前者は後者よりも出現が早く、かつ分布も広い。おおむね、方形周溝墓は畿内を中心に展開し、方形台状墓は中国地方と日本海沿岸一帯が主要分布域であったと説き得る。この両種の墓制が共存し、相互に影響を与えつつ新たな墓葬形態を生み出した地域もあった。

円形周溝墓と台状墓については、前者の出現が比較的早く、分布も比較的広いが、両者が出現・分布が一致する地域もある。両者ともおおよそ瀬戸内地域を中心に分布する。

周溝墓と台状墓とには、多くの共通点がある。例えば、これらはみな多数の墳墓で墓地を構成し、個々の墳墓は全て明確な区画（台状墓では周溝をめぐらす例もある）と一定の高さの墳丘を有し、墓壙の形状と葬具の使用状況も基本的に同一である、といった共通点が認められる。一方、両者の主だった違いとしては、第一に出現時期・盛行した中心地域・分布範囲が異なることを、第二に築造に選択される立地が異なり、そのため採用される築造方式も相違することを挙げ得る。
上述のように、弥生墳丘墓の墳丘は基本的に方形と円形に二大分できる。前者は方形・四隅突出形方形・双方中方形・前方後方形に、後者は円形・双方中円形・前方後円形に細分できる。

（３）弥生時代後半の墳丘墓の概況

上記したように、弥生時代中期中・後葉になると、畿内地域において方形周溝墓の規模が増大する。例えば大阪府加美遺跡 Y1 号墓（中期後葉）は、墳丘基底部長が南北 26m・東西 15m、墳頂部長が南北 22m・東西 11m、墳丘高約３m、周溝幅６～ 10m、周溝の深さ約１m を測り、同じく規模

の大きな大阪府瓜生堂遺跡２号方形周溝墓と比べても、規模の増大が明白である（図５－４）。この他、加美遺跡 Y1 号墓には 23 基の木棺を埋葬しており、中でも中央木棺は、底板以外の棺板がみな二重である。

弥生時代後期後半～終末期になると、墳丘墓は規模に留まることなくさらなる拡大を見せる。墳丘墓の中には、集団墓地から独立してくるものもある。例えば周溝墓の系統である奈良県纒向遺跡の前方後円形墳丘墓群（弥生時代終末期）の中には、勝山（墳長約 120m・後円部径約 70m）・石塚（墳長約 96m・後円部径 63m）（図５－５）・東田大塚（墳長 108m ～・後円部径約 68m）・矢塚（墳長約 95m・後円部径約 60m）がある。

台状墓の系統である岡山県楯築墳丘墓は、規模の巨大さと形状の特殊さのため、しばしば弥生墳丘墓の典型的資料として引用される。この墳丘墓は、略円形を呈する墳丘の東北部と西南部の二箇所に突出部をもつ構成で、全長約 80m、中円部の直径約 43m・高さ約５m を測る（盛土をした箇所は、厚い部分では 1m 以上）。西南突出部は長さ約 22m で、東北突出部は破壊に遭っている（図５－６）。円丘と突出部の斜面には列石を施し、墳頂部には「弧帯石」があり、中心埋葬の上部には巨石が立っている。埋葬施設は２箇所あり、中心埋葬施設内には木槨が築かれ、暗渠の排水溝もある。木棺の底部には、大量の辰砂が敷き詰めるように撒かれている。木棺内外から玉・翡翠製勾玉・瑪瑙製棗玉・碧玉製管玉・鉄剣などの副葬品が見つかった。木槨の上方からは、礫石・破砕土器・土製の装飾品などが検出されたが、これらは埋葬祭祀の遺物である。中心埋葬施設の東南にもう一基の埋葬施設がある。木棺のみであり、被葬者の頭部と推定される箇所で少量の朱が検出された。この埋葬施設は中心埋葬に後出するもので、中心埋葬の陪葬であろう。本墳丘墓の時期は、弥生時代後期中～後葉である。

また、四隅突出形台状墓の例を再び挙げると、島根県西谷３号墳丘墓（弥生時代後期後葉）といったものがある。この墳丘墓は墳丘長約 47m・幅約 39m・高さ約５m の規模をもつ（図５－７）。

古墳時代の前方後円墳の先導として、弥生時代後期および終末期に、楯築墳丘墓のように円丘部に突出部を付設する方式が出現した。纒向石塚などの墳丘墓は典型例の最たるものである。この他、方形周溝墓か方形台状墓（四隅突出形墓を含む）かにかかわらず、みな墳丘上に配石する現象が認められる。古墳時代の埴輪の先導として、特殊器台形土器もすでに出現している（主要な分布域は吉備）。大型墳丘墓の埋葬施設として、木槨と竪穴式石槨がすでに出現している。木槨や石槨の内部には木棺が設置されている。弥生墳丘墓の副葬品は比較的少なく、大型墳丘墓にしても例外でない。弥生墳丘墓を相互に比較すれば、楯築墳丘墓の副葬品は非常に豊富であるといえる。

要するに、弥生時代後期～終末期に至ると、方形系統か円形系統かにかかわらず、墳丘墓に大型の墓葬が出現し、しかも集団墓地から独立してくるのである。これだけでなく、陸橋が進化してできた突出部が次第に発達して、最終的に古墳時代の前方後円墳および前方後方墳の前方部へと発展を遂げた。形状がそれぞれ若干異なるこれらの大型墳丘墓は、地域首長の専用の墳形として、徐々に相異なるものになっていった。墳丘墓の大型化と特定形態への収斂化の過程に伴い、埴輪の前身

である特殊器台形土器が登場し、埋葬施設として木槨・竪穴式石槨・木棺を全て使用し、棺内に大量の朱を用いる例が多くなっていった。

２　中日両国の墳丘墓の比較研究の現状

弥生墳丘墓が考古学的に発見されその研究が着手されたのは比較的遅かった（例えば方形周溝墓は 1964 年に、方形台状墓は 1971 年に確認された）ため、中国大陸および韓半島との関係について討論が開始されるのも比較的遅かった。

比較的早くに研究を展開したのが、日本の学者である樋口隆康と菅谷文則である。彼らは 1990 年代初頭（1990 年）に論考を発表し、中国江南一帯の呉越文化と土墩墓の墓制が日本の弥生文化と墳丘墓の発生に影響を与えたと考えた[2]。その後、中日両国の学術交流の増加に従い、中国の学者も討論に加わるようになった。その劈頭となったのが俞偉超の 1993 年の論文であり、弥生時代の方形周溝墓と中国の秦文化との関係が密接であることを考察した[3]。俞は、中国西北地区の卡約文化（紀元前二千年紀）に溝で囲繞する墳丘墓があり、これが東周時代の秦国の囲溝墓にまで及ぶことを紹介し、おそらく秦代に日本列島へと東渡した中国の移民がこの種の形態の墓制を日本に携えて来たと考えた。これに続いて王巍は、1997 年に発表した論文において、俞に類似する視点をもちつつ、次のように考えた。すなわち、秦人はおそらくまず朝鮮半島に到来し、それにより囲溝墓の形態がこの地にもたらされ、現地人の墓葬に影響が及んだのであり、従って日本の弥生時代の周溝墓が中国大陸から直接に伝来した可能性を否定し去ることはできないものの、朝鮮半島を経由した可能性も存在するのだ、と。この他に王は、弥生時代の円形墳丘墓はおそらく、中国の河北省北部から遼寧省に及ぶ一帯で見出される春秋戦国時代の円形墳丘墓および韓半島南部で見出される円形墳丘墓にある程度関連すると考えた。王はさらに踏み込んで、弥生時代後期後半における円形墳丘墓の大型化と突出部の出現は、中国漢代の上冢（上陵）の習俗の影響を受けたかもしれず、突出部は埋葬儀礼ないし祭祀の場所が一層発展した結果と見なせ、程なく前方後円（方）墳の前方部になったと推論した[4]。

20 世紀末から 21 世紀初めにかけて、この問題に関する討論はさらに活発になった。韓国において寛倉里遺跡の方形周溝墓群が発見されたことで、日本の学者もまた視線を韓半島に転じることになった。渡辺昌宏は 1999 年の論文において、おそらく韓半島中西部からの移民が方形周溝墓をもたらしたと考えた[5]。この少し後、藤井整は 2001 年の論文において、方形周溝墓の出現を中国大陸ないし韓半島の移民に由来するとのいう見解に焦点を当て、次のような考えを提示した。すなわち、方形周溝墓に備わる「方形区画」の思想は日本固有のものではなく、韓半島ないし中国大陸から伝来した可能性があるが、しかし上述の移民説は肯定できず、また方形周溝墓の出現が外来墓制の直接的影響を受けたというのにも賛意を表し得ず、方形周溝墓はまず丹後を通過し、但馬地域と中国大陸ないし韓半島の交流プロセスが進行する中で、その思想や文化要素を吸収し、畿内地域において独自に出現・発展したのだ、と[6]。ほぼ時を同じくして、中日両国の学者はまた、さらに広範な

視野から中日古代墳丘墓の関係について討究を行った。中国の学者では、王巍がこれに関する見方を再述し、日本に対する中国の影響が墳丘墓の築造や墳形などの面に限定されず、埋葬儀礼・墓葬祭祀・思想・信仰・政治制度など多くの側面にまで及んでいることを強調した[7]。日本の学者では、卜部行弘が後漢の墳丘墓と同時期の弥生墳丘墓とを比較し、弥生墳丘墓は中国墓制の影響を受けておらず、独自に発展・変化したと論じた[8]。

その後も、日本の学者はこの方面の研究に関心を注ぎ続けている。例えば中村大介は、東アジア的視角から方形周溝墓の系統研究を行った。中村は、埋葬施設の設置位置がこの墓制の重要な側面であることを特に強調し、日本の方形周溝墓の源流が中国の中原地区には存在しないと考え、従って俞偉超の秦代移民説には賛同せず、方形周溝墓の原型については韓半島南部を探索すべきと考えた。そして具体的に、韓国全羅南道西部地域と同時期の日本列島の関係が最も密接であると説いた。この研究は従前の認識を超え出ていないものの、詳細な論証を経ているだけに一層強い説得力を備えている[9]。この他に、鐘方正樹は、漢・唐の陵墓の墳丘形状が見せる変化という観点から出発し、次のように考えた。後漢の皇帝陵と一般の墓葬は等しく円墳が流行しており、同時期（弥生時代後期）の日本列島に併立した国々の中から若干の国王が後漢に遣使・朝貢し、後漢の円墳墓制に接触したことで、この時期の列島の墓制に影響が及んだと考えられ、同後期後半になり瀬戸内地域において相対的に大規模な円形墳墓が顕著になる現象は、おそらくこの種の史的背景により具現したものである、と。そして、弥生時代の諸王が後漢王朝を模倣して円形墳墓を次第に大型化させつつ築造する中で、長期にわたって発展してきた在来の墓葬の陸橋部ないし突出部を付設し、ついに奈良盆地東南部に前方後円墳が形成されたのであり、これは中国の権威である円形墳墓が日本列島の伝統的な方形墳墓に取って代わり、重要な位置を占めるに至ったことを象徴すると説いた[10]。

上述したように、弥生時代の墳丘墓に関して、とりわけ方形周溝墓の源流の問題に関して、おおよそ四種類の観点に集約することができる。すなわち、中国大陸から来たか韓半島を経由して来た移民説、中国南方の土墩墓の影響を受けたとする説、中国大陸ないし韓半島の「方形区画」思想の影響のもと、畿内地域で独自に創出されたとする説、中国大陸とも韓半島とも全く無関係で列島において自生したとする説、である。さらに簡略化していえば、三種類の観点にまとめ得る。直接移民説（中国大陸ないし韓半島）、文化要素伝播説（中国大陸ないし韓半島）、独自発生説、の三種類である。

中日両国の古代墳丘墓の墓制にかかわっている学者のこれらの論説はみな、中日の古代文化交流という事実に立脚しており、墓制の側面から弥生墳丘墓の起源を探索することを試みている。この方面での研究において日本の学者たちは、熱烈な願望と絶えざる信念を示し続けてきた。今後も、中国・朝鮮・韓国などの地で考古学的な新発見が増加するに従い、関連諸研究が継続してゆき日進月歩で究明が深まってゆくものと信じている。

3　中日両国の墳丘墓の比較分析

文献記録を参照すると、中日古代の政府の正式な往来は後漢の光武帝の建武中元二年（A.D.57）に始まっている。しかし、それ以前にもすでに両国間で長期に及ぶ通交関係が結ばれていたことは間違いない。それを具体的に示すのが、日本で発見される中国文物であり、例えば銅銭や銅鏡などといったものがある。ただ以下では、文献記録の検討は行わず、“モノ”の移動にも関説せず、専ら中日の墓制、とりわけ墳丘などの地上施設や墓室、そして棺槨などの埋葬施設の対比分析を実施する。

（一）地上部分－墳丘を中心に－

1　墳　丘

A　形　状

中国：戦国－方形（長方形）、円形（楕円形）、上円下方、殿堂式建築

秦－方形

前漢－方形、円形

後漢－円形

日本：方形（長方形、四隅突出形）、円形（楕円形）

B　規　模

中国：高大

日本：低小

C　造営方法

中国：大部分が版築で土を積み上げる。版築を行わないものもある。

日本：周溝墓は盛土を行うが、版築は行わない。台状墓は四周を削り出して成形する。

D　制度化の度合い

中国：等級制度は比較的成熟しており、墳丘の大小と高低により被葬者の身分・等級が具現される。漢代にはすでに墳丘高が被葬者の身分・等級の量的指標にされていた。

日本：墳丘の大小と高低により被葬者の身分・等級が具現されるが、まだ制度化されていない。

2　墓域の施設

中国：陵園（墓園）の囲壁ないし周溝

日本：周溝

3　その他の施設

中国：陵園（墓園）建築、陪葬坑、陪葬墓、陵邑など

日本：祭祀跡？

（2）地下部分－副葬品と棺槨を中心に－

1　墓　壙

A　形　状

中国：竪穴土（石）壙ないし土洞、崖洞

日本：竪穴土壙

B　造営方法

中国：竪穴墓－地山に土壙を掘り下げる。

洞室墓－地山ないし山中に空洞を掘る。

日本：地山に土壙を掘り下げるか、盛土を積み上げてその上から土壙を掘る。

2　葬　具

A　槨

中国：竪穴式木槨および横穴式木槨（黄腸題湊）、横穴式石室、塼室

日本：竪穴式木槨、石槨

B　棺

中国：木棺（鑲玉漆棺）、石棺

日本：木棺

3　副葬品

中国：数量が多く、質・種類ともに豊富。

日本：数量が少なく、質・種類ともに貧弱。

（3）墓葬の建造手順

中国：竪穴木槨墓＝選地→墓道・墓壙の掘り下げ→槨室の構築（黄腸題湊）→棺・副葬品の設置→墓道・墓壙を埋め戻し、墳丘を築成。横穴土洞墓・崖洞墓・石室墓・塼室墓＝選地→墓道・墓壙の掘り下げ→空洞の掘削ないし石室・塼室の構築→墓壙の埋め戻し（墳丘の築成）→棺・副葬品の設置→墓道を埋め戻し、墳丘を築成。この他の陵園施設は、おそらく選地後すみやかに造営された。

日本：周溝墓＝選地→墳丘の成形→墓壙の掘り下げ→棺・副葬品の設置→墓壙の埋め戻し。台状墓＝選地→低丘陵の四周を削り出し、墳丘を成形→墓壙の掘り下げ、ないし構築した石槨・木槨周辺に盛土→棺・副葬品の設置→墓壙の埋め戻し、ないし石槨・木槨の被覆。

（4）小　結

上述の分析から、中日の同時期の墳丘墓にはすでに甚大な相違があるが、相似する要素も若干ながら存在することを看取できる。

A　中日の墳丘墓の差異

総体的に見ると、中日の墳丘墓の主要な差異は、以下の側面に表れている。

ⅰ：墓葬のおおよその築造手順を見ると、中国の墓葬は墓壙を先に掘り、その後墳丘を積み上げる。そのため、墓壙は全て墳丘下にあり、ほとんどの埋葬は極めて深い。他方、日本の墓葬はまず墳丘を先に築き、その後墓壙を掘る。そのため、墓壙は全て墳丘中にあり、ほとんどの埋葬は比較的浅い。

ⅱ：墓葬の地上部分を見ると、中国の墓葬はまとまった地上施設のセットを備え、その内容は豊かで、さらに墳丘高を等級制度の量的指標にしている。他方、日本の墓葬は墳丘と周溝など僅かな地上施設があるだけで、明確な等級制度も形成されていない。この他、墳丘の造営方法や規模も相異なる。

ⅲ：墓葬の地下部分を見ると、中国の墓葬は種類が多く、規模も大きく、墓室の構造も複雑で、棺槨の葬具も完整で、副葬品も発達している。他方、日本の墓葬はこれと正反対である。

B　中日の墳丘墓の相似性

中日の墳丘墓の相似的要素のうち主要なものは、以下の側面に表れている。

ⅰ:墳丘の形状は全て方形と円形に二大分される。中国の秦と前漢の墓葬の墳丘は方形を尊重し、後漢の墓葬の墳丘はみな円形を呈している。日本の弥生時代の墳丘墓は方形を主体とし、弥生時代後期～終末期に至って円形が徐々に現れ、位置づけを高めてゆく。墳丘の外周には全て墓域を標示する施設が備わっており、中国の墓葬は囲壁を主体とし、周溝も有するが、日本の墓葬はみな周溝で囲う。

ⅱ：墓には全て木棺を使用する。日本の墓葬からは、若干の中国器物が出土する。

4　小　結

戦国時代と秦漢期こそまさに、中国古代の墓制に大変革が生じ、新たな墓制が形成された時期であった。地下に設置される伝統的な木槨の墓室は、邸宅化の過程を経ながら、次第に竪穴式の閉鎖的空間から横穴式の開放的空間へと変遷を遂げていった。前漢初期になると、この種の横穴式開放的空間を有する墓葬の実例を見ることができる。それと時を同じくして、前漢初期には黄腸題湊墓や崖洞墓などの新たな墓制が軒並み出現し、後漢になると墓葬の形態と構造は塼石室墓に統一された。その一方、春秋晩期に墓上に大型墳丘が現れて以降、諸侯の列国において墓葬の地上施設が陸続と登場した。墳丘を中心として墳丘・陵園・陵寝建築・陪葬坑・陪葬墓などを内包する一揃いの陵園施設が徐々に形成された。そして秦が全国統一に及ぶと、始皇帝陵は諸侯の列国における陵寝の要素を集約し、空前の規模を誇る陵園を造営した。その後、前漢には秦の陵寝制度を継承しつつある程度改め、後漢の陵寝制度は前漢のものを引き継ぎつつ、ある程度これに増減を加えた。要するに、これら地上施設のセットは出現して以後、戦国・秦漢にわたる長期の盛衰を経たのである。中国の戦国時代と秦漢期に相当し、なおかつすでに中国との活潑な往来が生じていた日本の弥生時

代は、大陸系統の文物が頻見する他に、墓制において一体いかなる影響を受けたのであろうか。

まず、これに関する比較研究の論点に対して分析を加えておく。

１　方形周溝墓が中国大陸の移民に由来すると見る見解について

この種の観点は、中日の関連する墓制の年代を比較する上では問題ないが、しかし墓制全体の状況を論じる場合、弥生時代の周溝墓と秦人の周溝墓の存在には根本的な差異がある。例えば秦人の周溝墓として説明に用いられる山西省侯馬戦国墓[11]では、並列する二基の墓（M26・M27）の外周を周溝が囲繞する。これらの墓はどちらも竪穴を深く掘り込んだ木棺墓であり、周溝内の４人の埋葬はどれも木棺ではなく、しかも仰向けか俯せで、縄縛されるか跪いた状態であり、これらがみな殉葬者であることは明らかである（図５－８）。この他の事例としては､河南省陝県の８基の周溝墓がある[12]。時期は秦末～前漢初期に属する。これらの周溝墓と弥生周溝墓とを比較すると、周溝が相似することを除いて、その他の埋葬施設はみな異なっている。その他に、この種の周溝墓は東周時代には秦国や越国などの少数の地域のみに存在し、秦漢時代になってもなお存在するが、しかし墓葬の主要形態ではないことも挙げ得る。もし当時、実際に秦人が戦乱を避けて日本列島に到来したと説くとすれば、次のような難点がある。まず第一に、方形周溝墓の数から見て人数が多くなりすぎ理解し難い。第二に、遙々海を越えて渡来した秦人は、言葉も通じず社会状況も全く異なる異郷の地において、強大な列島の現地人にどうやって対面したのだろうか。しかも彼らは、秦人のいかなる物品や技術も携えておらず、葬送の墓制をこの地にもたらしただけであるのに、その墓制を現地人に受容させ、その結果列島の地にその墓制が根付き花開いたことになる。これは甚だ想像し難いことである。もし秦人が実際に列島に到来したとしても、彼らは列島を辿るルートを知らなかっただろう。しかも、弥生周溝墓は近畿地域を中心に展開し、渡来民が最も到着しやすい九州地域では発達していない。従って、列島に東渡した秦人もしくはその後裔の墓葬が弥生周溝墓だとする見解は成立し難いと考える。

２　弥生墓制が土墩墓の影響を受けたとする観点について

中国南方の土墩墓の主要な特徴としては、地面に埋葬し（石床・石槨・石室もあれば、墓壙を構築するものもある)､土を積んで墳丘を形成するが版築を行わないことが挙げられる。土墩墓は西周期に流行し、早いものは夏・殷の頃に求めることができ、遅いものは戦国初期まで降る。土墩墓と弥生墳丘墓を比較すると、埋葬施設が全て当時の地面上に位置することを除けば、前者の造営方法・造営順序・墓葬の全体状況と後者との差異は顕著である。従って、現段階では、土墩墓が弥生墓制の発生に影響を与えたとする説は、支持するに足る証拠をさらに多く積み上げる必要がある。

３　弥生・古墳時代の墳形の変化が中国の墳形の影響を受けたとする観点について

巨視的に見れば、この種の推論には一定の合理性がある。しかし、研究上の実証性が、つまり両者の墳形の相関性を示す証拠の鎖が不足している。後漢の墓制と弥生時代後期の墓制を対比するならば、やはり甚大な差異を看取し得る。例えば、両者の造墓方法および手順、地上施設の種類およ

び規模、地下の墓室の形状および規模、その副葬品の種類および数量等々、あらゆる面で比べものにならない。このような状況下において、もし単純に両者の墳形の類似性からその関連性の存在を導き出すとすれば、論拠薄弱の感は免れ難い。ましてや円形墳墓は弥生時代の初めからすでに存在しており、しかも方形墳墓と並行して発展する過程の中で劣勢にある。その後円形墳墓は次第に大型化し、さらに陸橋部ないし突出部も大型化して、ようやく前方後円墳へと進化するのである。単純に墳丘形状から見たとしても、後漢の円形墳丘と弥生時代後期～終末期の突出部を有する円形墳丘には、大きな隔たりがある。従って、弥生時代の円形墳丘墓が方形墳丘墓に取って代わり、重要な位置を占めてゆく過程の中で、後漢の円形墳墓の影響を受けたと説くよりも、やはり弥生社会が発展するに応じて、各種の政治勢力や政治集団が消長し、それにより重視される墳丘形状の変化を導いたと説く方が、一層の説得力がある。当然ながら、弥生社会の各政治集団が、とりわけ弥生時代後期～終末期の各小国が、後漢王朝との関係を通じて自らの影響力と実力を増強し、それら相互の競合的発展の中で優勢な地位が生じたこともありえないことではない。

上記のように、中日両国の同時期の墳丘墓の諸要素を対比分析すれば、両者間の差異が甚大かつ主だったものであることを看取できる。このことは、中国の墳丘墓の墓葬形態が日本の墳丘墓に直接的な影響を及ぼしていないことを明示する。もしくは、日本の墳丘墓は縄文時代の墓制を基礎として、社会変革の背景のもと次第に発展・変化してきたものである。中日両国の墓葬には墳形・墓域から棺の使用などの側面に至るまで僅かな類似性が存在しているが、両国間で直接的影響・被影響の関係が生じたことを十分に説明できない。

文化因子伝播説は完全に否定できないが、しかしやはり、一層説得力のある証拠の発見を待ち、探し求める必要がある。現段階において私は、代表的な弥生墳丘墓である方形周溝墓が中心的地域たる畿内地域で独自に発生し、発展したとの視点に傾いている。方形周溝墓の発生・発展の過程は弥生社会の発展・変化の過程と密接に関連していたと考えている。無論、当時の弥生社会はすでに東アジア的交流の舞台に登っていたため、急速に発展・成長し、中国大陸および韓半島の強烈な刺戟と影響を受けていた。従って、観念面で最も保守的と考えられる葬送活動において弥生社会には自生的かつ自己成長的な一面があったものの、しかし弥生社会の成長過程を総体的に見れば、弥生墓制は当時の東アジア世界と全く無関係であったわけではない。こうした意味からすると、弥生墳丘墓の出現と成長過程は中国大陸と韓半島から間接的影響を受けていたといえる。

第２節　魏晋・南北朝時代と古墳時代

日本の古墳時代の暦年代に関して、学界内では相異なる認識がある。一般に奈良県箸墓古墳（最古の巨大前方後円墳）の出現をもって、弥生時代と古墳時代を区分する標識としている。しかし実際には、墓制の変遷を比較するのは、これが単純な時代よりも相当に複雑である。例えば、箸墓古墳の出現以前にすでに比較的規模の大きな前方後円形墳丘墓が存在しており、そのためこうした墳

丘墓が群在する奈良県纒向遺跡の発展段階にはすでに古墳時代に突入していたと考える研究者もいれば、他方で弥生時代の方形周溝墓と方形台状墓などの墓葬形態が古墳時代以降にも依然として若干の特定地域に存在すると考える研究者もいる、などといったことがある。

古墳時代は弥生時代を後継し、おおよそ３世紀中葉に開始し、６世紀末ないし７世紀初頭まで続く。中国の魏晋・十六国・南北朝期にほぼ相当する。

以下ではまず、古墳時代の墓葬の概況について簡略に述べる。

1　日本の古墳の概況

和田晴吾は古墳時代を三時期（11 小期）に大分している。すなわち、前期（１～４期）、中期（５～８期）、後期（９～11 期）で、前期はおよそ３世紀中葉から４世紀中葉まで、中期はおよそ４世紀後葉から５世紀中葉まで、後期はおよそ５世紀後葉から６世紀末ないし７世紀初頭までである[13]。墳丘の形状を見ると、古墳には主に前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳という四大種類がある。前方後円墳が約 4700 基、前方後方墳が約 500 基、さらに大小様々の円墳および方墳があり、古墳の総数は約 10 万基に及ぶ。墳丘を有する古墳の他に、無墳丘の木棺墓・箱式石棺墓・埴輪棺墓・葬具をもたない土壙墓もある。都出比呂志は、古墳時代に存在した身分等級秩序が、まさにこれら相異なる墳形および墳丘規模の使用に由来する規範に合致すると考え、それゆえこれを「前方後円墳体制」と称している[14]。

数ある古墳の中で、規模が最も大きく古墳時代の特徴および古墳文化を最もよく体現し得ており、そして最も重要なものこそ、前方後円墳である。加えて前方後円墳は畿内地域を中心にしているので、以下では前方後円墳を代表として古墳の概況および特性を略述するとともに、古墳時代の各時期の代表的な性格を備える古墳例を列挙する。

前方後円墳の起源ないし象徴的意味に関しては、「宮車模倣説」「主墳陪塚連接説」「丘尾切断説」「広口壺模倣説」「祭壇付加説」などといったように、種々多様な見解があり、今なお統一的な見方が形成されていない。

古墳の外部施設は、いかなる形状の墳丘であろうと、そのほとんどが人工の盛土から形成されており、さらに下段から上段に積み上げられた幾層かの段をなしている（段築）。墳丘の表面には、一般に石塊が敷き詰められ（葺石）、それゆえ墳丘は、見上げるとまるで一座の岩山のようである。墳頂部やその他の平坦面には、各種の形状の埴輪を樹立している。墳丘の周囲は溝で取り囲まれており（周濠）、二重ないし三重の溝もある。

埋葬施設の主要形式としては、竪穴式石槨と横穴式石室の他、粘土槨などがある。棺の主要形式には、木棺（割竹形・舟形・組合式）と石棺（箱式・割竹形・舟形・長持形・家形）の他、埴輪棺・陶棺・土器棺・夾紵棺などがある。

古墳の埋葬の最大の特徴は、墓室が墳頂に位置することである。つまり、古墳築造の順序は、まず墳丘を積み上げ、それからその頂部に壙を掘り竪穴式石槨を構築するというもので、これは明ら

かに弥生時代の周溝墓から継承してきた埋葬方式である。その後、横穴式石室を採用するに至っても、石室はなお地面の上に築かれている。要するに、弥生時代の墓制と同様に、古墳の墓室は地下に建造されず、地上に建造されているのである。

古墳の埋葬におけるもう一つの顕著な特徴は、墳丘規模と墓室の規模とが比例しないことで、簡単にいうと、例えば大墳丘に小墓室が築かれているのである。

以下、畿内の古墳の状況について事例を挙げつつ説明する。

（1）前期古墳

1　箸墓古墳[15]

古墳時代の開始の標識となる巨大前方後円墳であり、それゆえ本墳の出現は、古墳研究において尋常ならざる重要性をもつ。

箸墓古墳は奈良盆地東南部の桜井市北部に位置し、平地上に聳立している。周辺には著名な纒向石塚・矢塚・勝山・東田大塚など弥生時代終末期の大型前方後円形墳丘墓が分布しており、弥生時代終末期～古墳時代初頭に生じた社会の大変動の中でこの地域が見せる様相は特に注目される。

幾次にも及ぶ発掘調査を経て、本墳の規模と形状はおおよそ究明されている。墳長は東西約 280m を測る。前方部は西を向き、前方部長約 130m・前方部幅約 147m・前方部高 16m で、前方部の前面は四段の台状に築成され、側面もおそらく台状に築成されている。後円部は直径約 160m・高さ 29.4m を測り、五段の台状に築成されている（図５－９）。前方部北側面の最下部から葺石が検出されており、墳丘上から特殊器台形・特殊円筒形・特殊壺形埴輪片が採集されている。墳丘の外周には幅約 10m の周濠状の落ち込みがめぐり、その一部は墳丘外の現在の道路に痕跡を留めている。埋葬施設に関しては、竪穴式石槨が採用されていると推測される。

2　中山大塚古墳[16]

奈良県天理市に位置し、龍王山が西へ延びる尾根端に所在する。付近には西殿塚古墳・東殿塚古墳・燈籠山古墳など著名な前方後円墳が分布する。

本墳の墳長は南北約 130m を測る。前方部は南を向き、前方部幅約 56m・高さ約 10.5m である。後円部は二段の台状に築成され、直径約 67m・高さ 11.3m である。墳頂部に隅円方形の壇が築かれ、その下に竪穴式石槨が造られている。石槨は内法長 7.5m・幅 1.35m（南側）～ 1.4m（北側）・高さ２m を測る（図５－10）。墳丘には葺石が葺かれ、壺形・円筒形埴輪が樹立されている。盗掘されており、副葬品はあまり残っていなかったが、銅鏡片と鉄器が検出されている。

本墳や箸墓古墳・西殿塚古墳[17]などはみな初期古墳の代表的存在である。

3　桜井茶臼山古墳[18]

桜井市の東南の字外山に所在する。墳丘は三段の台状に築成され、墳丘長は南北 200m を測る。墳丘の前方部は南を向き、前方部幅約 61m・高さ約 13m である。後円部の直径は約 110m・高さ約 24m である。墳丘の表面には葺石が葺かれ、外周に周濠がめぐる。墳丘の特徴として、前方部が比較的長く、その両側面が比較的平直で、全体の平面形が柄鏡形を呈することが挙げられる（図５－

11)。

本墳は、盗掘を被ったため、1949（昭和 24）年に第一次発掘調査が実施され、2009（平成 21）年には奈良県立橿原考古学研究所が、埋葬施設をさらに詳細に理解するとともに木棺を科学的に保護する目的で、後円部の埋葬施設に再調査を実施した。

本墳は鳥見山北麓の一条の尾根を利用して築成されており、墓壙は地山を穿ったものである。墓壙は長方形で、南北約 11m・東西約 4.8m・深さ約 2.9m を測る。前方部に向く墓壙南辺の西半部は、本墳造営時に墓壙の隅を開けて、石材と木棺を運搬する通路としていた。墓壙内には、水銀朱を塗布した板石を幾重にも積み重ねて竪穴式石槨を築成している。石槨の内法は、全長（南北）6.75m・北端の幅 1.27m・高さ約 1.7m を測る。石槨の底部には２～３層の板石を敷き詰めている。石槨底部の形状は浅い溝状を呈し南北方向に延びる。その上に花崗岩バイラン土で棺床を形成し、木棺を棺床上に設置している。木棺は腐朽していることに加え、かつて盗掘に遭い破壊されているので、原形を留めていない。現在、僅かに棺身の底部を残すのみで、その長さ 4.89m・幅 0.75m・最厚部 0.27m である。石槨の頂部には、水銀朱を全面に塗布した 12 枚の細長い天井石を使用し、そのうち最大の１枚は重量約 1.5t と見積もられる。石槨頂部は、ベンガラを混和した赤色粘土も使用して、全面を被覆している。

墓壙上には周囲より一ｍ足らずの高さを有する方形土壇が築かれている。その規模は第一次発掘調査により南北 12.3m・東西 9.75m の長方形に復元されたが、2009 年の発掘調査により若干の訂正が必要となっている。土壇上は板石と礫石で装飾し、縁辺部には底部穿孔の二重口縁壺がぐるりと埋置されている。検出された若干の炭粒から、方形壇の上でかつて火を使用した何らかの儀式が挙行されたことが推測される。この他、方形壇の外周に深さ約 1.4m の布掘り状の掘り方がめぐり、その中に直径約 0.3m の丸太を埋め込んで、丸太垣を構成していた。丸太垣はまさに方形壇を包囲して立っており、その効果は墓室と方形壇を保護することにあった。柱芯での丸太垣の全体の規模は南北約 12.7m・東西約 10.4m に復元される。

かつて盗掘に遭ったため、副葬品の数量と原位置はすでに不明瞭である。石槨内からは僅かに玉杖などの石製品や鉄製・青銅製の武器、銅鏡の残片などが出土したのみである。

（２）中期古墳

１　津堂城山古墳[19]

大阪府藤井寺市に所在する。墳丘は破壊が著しいが、墳丘長約 208m を測る。前方部は南を向き、前方部幅約 121m・高さ約 12.7m である。後円部の直径は約 128m・高さ約 16.9m である。墳丘の表面には葺石が葺かれている。後円部の中央には墳丘主軸に平行して竪穴式石槨が構築されており、内法長 6.1m・幅 2.1m・高さ 1.1m を測る。石槨内には長さ 3.4m・幅 1.6m・高さ 1.8m の長持形石棺を内蔵している（図５－ 12)。盗掘に遭っているが、石棺内外からなお比較的多くの銅器（銅鏡を含む）・鉄器・石製品が出土した。発掘調査によると、墳丘には方形壇状の「造出」が付設されて

おり、墳丘の外周には二重の盾形周濠と周堤がめぐる。東側の内濠内には方墳状の特殊施設があり、その上には水鳥形埴輪が配置されていた。墳丘上からも各種の埴輪が出土した。

本墳は前期古墳の要素と中期古墳の要素を併有しているため、南河内の平坦台地上に初現した中期大型前方後円墳の代表例と見なされており、古墳研究において重要な位置を占めている。

２　誉田御廟山古墳[20]

大阪府羽曳野市誉田の台地上に所在する、特大の規模を誇る前方後円墳である。墳丘長約 425m を測る。前方部は北を向き、前方部幅約 300m・高さ約 36m、後円部直径約 250m・高さ約 35m である。墳丘長は大仙古墳に僅かに下回るが、日本第二位の座を占める。前方部と後円部は三段の壇状に築成される。前方部と後円部の連接部の両側面には方形壇状の「造出」が設けられている。墳丘の外周には二重の盾形周濠と周堤がめぐらされている（図５－13）。墳丘および内堤・外堤の全てに葺石があり、さらに円筒埴輪が囲繞する。この他、各種の形象埴輪・笠形木製品・魚形土製品が出土している。埋葬施設は竪穴式石槨内に長持形石棺を設けたもののはずである。

この古墳は、宮内庁により応神天皇の陵墓に治定されており、古墳時代中期を最も代表する古墳の一基である。

３　大仙古墳[21]

大阪府堺市に所在する特大の前方後円墳である。大山古墳とも称する。台地の縁辺に位置する。墳丘長約 486m で、日本最大の古墳である。前方部は西南を向き、前方部幅約 305m･高さ約 33m、後円部直径約 249m・高さ約 35m を測る。墳丘は三段の壇状に築成されている。前方部と後円部の連接部の両側面には「造出」が備わる。葺石と埴輪を有する。墳丘の外周には三重の盾形周濠がめぐるが、外堤は後世に付加されたものと考えられている（図５－14）。前方部と後円部にそれぞれ別個に埋葬施設がある。前方部の埋葬施設は竪穴式石槨内に長持形石棺が設置されたもので、絵図資料によると石槨長 3.6 ～ 3.9m・幅 2.4m、石棺の蓋長 2.4 ～ 2.7m・幅 1.45m・高さ約１m であることを知り得る。前方部石槨内からは刀剣・甲冑・ガラス壺などの遺物が出土した。

この古墳は、宮内庁により仁徳天皇陵に治定されており、これまた古墳時代中期を最も代表する古墳の一基である。

（３）後期古墳

１　今城塚古墳[22]

大阪府高槻市の台地平坦面上に造営されている。墳丘長約 190m を測る。前方部を西北に向け､前方部幅約 140m・高さ約 12m である。後円部は直径約 100m・高さ約９m である。前方部と後円部の連接部の両側面には「造出」が備わる（図５－15）。墳丘表面には葺石がある。墳丘の外周には二重の盾形周濠がめぐる。墳丘と中堤から埴輪が出土している。横穴式石室を採用していると推測できる。兵庫県の高砂産流紋岩質凝灰岩（竜山石）､奈良県と大阪府の境にある二上山産の白石凝灰岩、九州の宇土産の阿蘇溶結凝灰岩（馬門石）からなる三種類の家形石棺の石材が発見されている。

副葬品には鉄製武器・ガラス玉などがある。

本墳は継体天皇の陵墓と推測されており、古墳時代後期を代表する古墳の一基である。

２　見瀬丸山古墳[23]

奈良県橿原市見瀬の丘陵の一端に所在する。墳丘長は約 310m を測る。前方部を西北に向け、前方部幅約 210m・高さ約 15m である。後円部は直径約 150m・高さ約 21m である。墳丘の外周には盾形周濠をめぐらす（図５－16）。墓葬施設の系統は横穴式石室で、後円部に位置し、天然石の石塊を使用している。南に開口し、全長 26.6m・墓室長 7.2m・墓道長 18.3m を測る。石室内には二基の家形石棺が設置されている。

本墳の墳丘と石室は古墳時代後期で最大の規模を誇り、欽明天皇の陵墓と推測することもできる。

３　藤ノ木古墳[24]

奈良県生駒郡斑鳩町の法隆寺字藤ノ木に所在する。円墳で、直径 48m・高さ約９m を測る。円筒埴輪が検出されている。発掘調査の結果、埋葬施設は横穴式石室で東南に開口し、墓室と墓道は礫石で舗装し、その下には排水溝が設置され、閉塞石の保存が良好であることが判明した。石室長 14.2m、墓室長 6.14m・幅 2.73m・高さ 4.32m、墓道長 8.06m・幅 1.78m・高さ 2.5m を測り、大型石室に属する（図５－17）。石室内には一基の家形石棺が設置されている。石棺は片側が広く高く、もう片側が狭く低くなっており、長さ 2.3m・最大幅 1.26m・最大高 1.54m である。石棺の全面が塗朱され、棺内には二人が埋葬され、金製品・金銅製品・鉄製品・石製品・ガラス製品・木製品・絹製品など大量の物品が副葬されていた。この他、石室内から馬具・鉄鏃・須恵器・土師器などの遺物が出土した。

２　中日両国の墓制の比較研究の現状

弥生墳丘墓の考古学的発見と比較研究は、前方後円墳を代表とする各種形状の巨大古墳が列島各地に存在するため、古墳および中国古代墓制との関係についての研究が早くから開始され、とりわけ前方後円墳の起源をめぐって展開してきた。

1910 ～ 20 年代に、喜田貞吉・梅原末治・森本六爾らは前方後円墳の前方部をめぐって論述を行い、前方部の主要な機能は礼拝と祭祀に使用するものだと考え、従って前方部の出現とはまさしく、中国古代において墓前に祭壇ないし寝殿を付設する方式に影響を受けたものと考えた。これは、前方後円墳の起源に関する主要見解の一つに他ならない。すなわち、前方部祭壇付加説である。その後、1950 年代にも後藤守一がこの説を主張しており、この説の影響は現在に至るまでずっと続いているといえる[25]。前述したように、中国の学者の王魏は、弥生時代後期後半における円形墳丘墓の大型化および突出部の出現は、漢代における上冢（上陵）の習俗の影響を受けた可能性があると考えている。そして、埋葬儀礼ないし祭祀の場所である突出部が一層の発展を遂げ、程なく前方後円（方）墳の前方部を形成したと見なしている。この見解は、古墳時代の前方後円墳の成立と中国古代の葬送制度とに関連があると説明することを除けば、前方後円墳の前方部の機能がまさに埋葬時に

挙行される儀式もしくは埋葬後に実施される祭祀の場所であることを強調する考えである[26]。

同様に、前方後円墳の議論に関して、1940年代に駒井和愛は、この墳形が中国古代の方基円墳に由来する可能性を考えた。西嶋定生は1960年代という早い時期に、前方後円墳とはおそらく中国古代の祭祀である天の円丘と地の方丘とを結合して生じた形状であろうとの見方を提示した。この説は以後の研究に強い影響を与えた。また、1970年代に重松明久は、中国の道教思想の影響と前方後円墳の起源とを関連付けた。1980年代に至ると、都出比呂志は前方後円墳が弥生文化から生み出されたことを肯定すると同時に、中国思想の影響も関係していると考えた。都出は、前方後円墳において中国思想が主に三つの方面で表れていると見る。すなわち、第一に死者を北頭位にするのは中国思想の影響であり、第二に墳丘を三段築成にするのは中国における郊祀の祭壇の影響であり、第三に墳丘の三段築成および朱を使用した多量副葬は、中国道教の昇仙思想の影響であると見るのである。飯島武次[27]と岩崎卓也はこの説の影響を受けている。王巍もこの説の影響を受け、1990年代の著書で次のような考えを示した。すなわち、中国の段築の陵墓と日本の三段築成の前方後円墳は、全て漢代における祭天の円丘や崑崙山信仰などの道教思想の影響に基づいて出現したものであり、前方後円墳は漢代に流行した「天円地方」「天界」「仙山」「死後昇仙」といった思想の影響に加え、弥生墳丘墓およびその思想・信仰の多様な影響を受けて形成されたのだ、と[28]。

こうした説の他に、前方後円墳中国出現説や韓半島出現説などのように、前方後円墳が中国大陸ないし韓半島の影響を受けたと想定する観点もいくつかある。

上述の外来影響説とは相異なり、前方後円墳の自生発展説を主張する研究者もある。例えば近藤義郎は、1980年代の著作において、中国からの影響があった可能性を決して否定しなかったものの、前方後円墳の主要素が中国墓制に認められず、それらは弥生墳丘墓の中から次第に成熟してきたものであり、それゆえ前方後円墳は日本独自の歴史的産物であることを強調した[29]。町田章は、1990年代の論文において、前方後円墳と中国中枢部の墓制に直接的な関係がないことを論じた[30]。卜部行弘は2000年代の論文で、日本における巨大前方後円墳の出現とすでに薄葬化を経た同時期の魏晋の墓制とは比較し得ないと考えた。そして、古墳が発展してゆく方向から見ると、その規模は古墳時代中期に頂点に達するが、当該期にはやはり中国（南朝墓制）の影響がもたらされていないことから、古墳とは明白に日本独自のものと見なした[31]。この他、中国の学者の俞偉超も同様の観点を有している[32]。

上述した前方後円墳の起源に関する比較研究の他には、装飾墓および横穴式石室の比較研究も比較的早い時期から開始されていた。中国大陸・朝鮮半島・日本列島の古代装飾墓の比較研究に関しては、日本の学者である町田章がすでに1980年代に論文を発表していた[33]。近年では、中国の学者である黄暁芬がこうした研究の流れに加わっている[34]。古墳時代の途中で埋葬施設が竪穴式石槨から横穴式石室へと転換したが、これが古墳の埋葬における第一次の重要な変革である。横穴式石室は日本固有のものではない。比較的早い時期の研究において、畿内における横穴式石室の出現は、おそらく中国南朝の塼室墓からの影響と関連があると考えた研究者もあった[35]。現在、研究者は一

般に、横穴式石室は韓半島から日本に伝来してきたものであり、そして韓半島の横穴式石室の源流は高句麗にあり、さらにその遡源を追うならば、漢代の楽浪地域の横穴式塼室墓と関連があり、ひいては中国大陸の漢魏代の横穴式塼室墓と連繋して生じたものと考えている[36]。

装飾墓であろうと横穴式石室であろうと、日本列島は総じて隣接する韓半島との関係が密接であり、中国大陸との直接的な関係は生じなかった。

近年では、日本の横口式石槨や棺などの埋葬施設の発展について比較研究を行っている学者もある。鐘方正樹は、魏晋から北周・隋に至るまで比較的長期にわたって存在した墓葬形態の一種（前室棺室墓）についての考察に基づき、この種の墓葬形態は高句麗の墓葬にも見出すことができ、おそらくこれは北周や隋の影響下でもたらされ、高句麗におけるこの種の墓葬形態はおそらく日本にも影響を与え、これこそ日本の終末期古墳を代表する埋葬施設の一つである横口式石槨であると考えた[37]。和田晴吾は、東アジアに広範に存在するいわゆる「開かれた棺」に対する総合的研究を行い、九州に見られる「開かれた棺」は中国北朝と同類の墓葬施設と関連する可能性が高いと考えた。そして、考察をさらに一歩進めて、日本の５世紀の対外関係に論及し、「５世紀の対外関係といえば、文献や考古資料の検討から、倭－百済－中国・南朝の関係が重視されてきたが、ここでは「開かれた棺」という視点から九州－（高句麗）－北朝とつながる関係を、「閉ざされた棺」のヤマト（畿内）－百済－南朝とは異なるものとして提示」している[38]。

以上で述べたことをまとめると、日本の古墳と中国の古代墓制の関係の比較研究に関しては、墳丘など地上施設の対比に限定されることなく、墓室やその装飾・副葬品の対比にまで及んでおり、研究の幅と深みが拡大を遂げている。

前方後円墳の源流に関する諸研究を総括すれば、二種類の説すなわち外来影響説と大和自生説の範囲を出ないといえる。前者には中国大陸影響説と韓半島影響説が含まれ、そして中国大陸影響説は、墓制ないし郊祀祭壇の直接影響説および北枕思想・道教の昇仙思想などの思想観念の間接的影響説とに分けられる。この他、東アジアの装飾墓・横穴式石室・横口式石槨・「開かれた棺」といった個別項目の諸研究の中から、次のことを私たちは難なく見出すことができる。すなわち、日本列島全体と中国大陸には直接的な関係が生じておらず、確かに上述の墓葬要素は全て中国大陸に淵源するものの、しかしこれらはほぼ全て、韓半島を経由してようやく日本列島との関係が生じるべきものであり、つまり韓半島と日本列島の関係こそ最も緊密なのである。

３　中日両国の墓制の対比分析

魏晋期には薄葬が実施され、墳丘などの地上施設はほとんど消滅した。この時期の地下墓室には土洞と塼室の両種があり、棺は木棺と陶棺に分けられ、成人には木棺（その平面形は少なくとも長方形と台形の二種類がある）を、子供には陶棺を使用した。この種の単純な墓制と鮮やかな対比を見せるのが日本の古墳である。古墳はその出現当初から、すでに前方後円墳を代表とする巨大な墳丘を有している。墓室は竪穴式石槨で、木棺は非常に長大である。これらの特徴は、魏晋の墓葬と

強烈な対照をなしている。それゆえ、古墳の起源と魏晋の墓制には些かの関連もないとするべきで、古墳の源流は弥生墳丘墓の中から探索するべきである。古墳とは、弥生社会が発展して特定段階に到達し、そのため社会に大きな変化が起き、そして墓制の変革が引き起こされて生じたものだということができ、これを突然変異と説く者もある。勿論、弥生社会が古墳社会へと発展変化を遂げてゆく中で、同時期の中国大陸および韓半島の情勢の影響もしくは刺戟を受けたということは、当然あり得る。

古墳時代を最も代表する墓葬は前方後円墳であり、その墓室は竪穴式石槨から横穴式石室へと転換し、棺も木棺から石棺へと転換する。中国では十六国時代が幕を上げると、地上に再び墳丘が現れた。南北朝時代になると、墳丘はすでに普遍的に流行するに及んだ。墳丘は基本的に円形で、地下の墓室は依然として土洞と塼室の両種である。棺は木棺を主体とするが石棺も少数ながら存在し、棺の平面形は基本的に台形である。これらの状況を比較分析すると、日本における古墳の発展過程と中国の十六国・南北朝の墓制には、やはり直接的な関係は何もないようであり、日本の古墳は自身の道筋に沿って発展変化を遂げたとするべきである。

ここまで、中日の同時期の墓制に対する比較研究の視点のみから、自身の見解を述べ、両国の墓制間に直接的な影響関係はなく、また前方後円墳の起源に関する前方部祭壇付加説も否定されるであろうことを考察した。前方後円墳の起源に関するこの他の見解については、日本の学者の西嶋定生や都出比呂志[39]を代表とする見解がある。彼らは、中国古代思想の中から前方後円墳発生の動力を探索しようと試みており、そのうち郊祀祭壇説の影響力が最も大きい。彼らのうちある者は、前方後円墳とはおそらく中国古代祭祀における天の円丘と地の方丘とが結合して生じた形状であると考えている。またある者は、前期と中期の前方後円墳の後円部がしばしば三段の台状に築成され（三段築成）、この種の方式が弥生墳丘墓に見られないのは、中国の円丘築造の構造の影響を受けたためかもしれないと考えている。しかし考えてみれば、円丘と方丘は現実世界において天地祭祀の施設として使用されているのであり、天地は古代帝王の最重要の祭祀対象であるのだから、円丘・方丘と墳墓を対等のものとするなどといった大それた願望は叶うべくもない。従って、中国古代の帝王陵墓と天地祭祀の祭壇とは全く関係がないのである。日本の古墳が同時期の中国墓制の直接的影響を受けていないのに、現実世界の祭壇の影響を受けたであろうと見なす、この種の認識は、実証性を欠くばかりか、論理的な合理性も欠いているのである。

古墳の埋葬方向（北枕）に関して、古墳時代前期には畿内地域と吉備地域（岡山県）を中心に、瀬戸内海北岸および出雲地域（島根県）において、北頭位埋葬の傾向が顕著だという問題がある。現在では一般に、古墳時代前期はおよそ３世紀中葉から４世紀中葉までと考えられており、これはまさに魏晋期に相当する。とりわけ日本における巨大古墳の出現初期はおよそ曹魏期に当たる。ところが曹魏期の墓葬は東頭位と西頭位を主体としているのである。もし中日両国の同時期における墓制を比較する立場から出発するならば、前期古墳の北頭位という特徴は曹魏の墓葬の頭位方向とまるで異なることになる。従って、両者間の直接的な影響関係は成立し難いのである。もしこの問題

に関して、中国古代葬送思想の影響論を強調するだけであっても、やはり説得力のある証明を下すことは難しい。

これらの他、中国古代の道教思想の影響に関して、古墳の三段築成と崑崙山信仰、古墳埋葬における朱の愛好などといった問題がある。まず崑崙山信仰の問題について見てみよう。私は本論文の結語において、中国古代の冥界観を通時的に議論し、戦国時代・秦漢期には神仙思想が非常に流行したが、当時の人々の観念では神仙は現実世界の中に存在し、神山・仙界（蓬萊・方丈・瀛州・崑崙など）に居住し、不老長生を享受するものと考えられていたことを指摘している。秦の始皇帝や漢の武帝は不老長生を追い求め、様々な方法を採用した。例えば都城の咸陽や長安の付近に池園を建設し、池中に蓬萊・方丈・瀛州といった神山を造営したり、長安に飛廉館・桂館を、甘泉（甘泉宮）に益寿館･延寿館･通天台などを建造して神仙を招来しようとした。当時の人々は不老長生を追い求め、仙人になることを期待していた。ただ仙人になるのは、必ずや生きている時でなければならず、死んでしまえば仙人はなれなかった。それゆえ、不老長生の追求に関連する施設は現実世界にのみ存在し、墓葬に見られる神仙図像（画像石や壁画など）は、現実世界の模擬にすぎないものであった。その上、後漢中～末期に始まり一時的に大流行した神仙思想も、特に魏晋期になるとすでに衰退し、墓葬内で表現されるものの大部分が現実生活の縮図となった。中国における神仙観念が上記のようなものであり、しかも魏晋期には神仙観念がすでに衰退していたことを考えると、崑崙山信仰などの神仙思想（道教思想）が日本の前方後円墳の形成に影響を与えたかどうか、再考を重ねるべきである。

次に墓葬において朱を用いる問題について見てみよう。日本古代の墓葬で朱を大量に用いるようになるのは、古墳時代の開始期からではなく、すでに弥生時代の墳丘墓において存在しており、その最も有名な事例は楯築墳丘墓である。従って、前期古墳の埋葬施設において朱が愛好されることは、中国思想からの影響に直接的に由来するというよりも、むしろ弥生時代以来の習俗を継承したものと説いた方がよい。ただ、弥生時代の墓葬内に大量の朱を用いる現象が、中国墓制ないし中国思想からの影響と関連があるのかどうかということになると、これは別問題であり、探求に値する問題である。

第３節　小　結

弥生時代と古墳時代は､日本古代社会に重大な変化が発生した時期であり､この時期の日本と中国大陸および韓半島とにますます密接な関係が生じたことは否定できない。例えば、稲作技術が伝来して弥生社会の経済的基礎が築かれ、そして各種の鉄器・銅器が伝来して日本の金属製作技術の向上を導き、これにより経済発展がさらに促進された。経済発展の需要に適応しつつ、人と物の交流に伴って、各種の思想や観念までもが流入するようになるのは必然のことであり、最終的に当時の日本社会の政治構造に一定の影響を及ぼした。しかしこの時期、中日両国の社会発展の水準は相違

しており、そのため両国間の交流はおそらく、依然として物的流通におおむね限定されており、人の往来と物的流通を通じてある種の社会的・政治的な需要が満たされていた。人の往来を通じて真に日本の各種社会制度（政治・経済・文化など）に建設的な影響が及ぼされるようになるのは、例えば飛鳥時代や奈良時代の都城制度や律令制度などのように、古墳時代以後まで待たねばならなかっただろう。

各種の思想・観念のうち、葬送観念こそ最も強く伝統性と保守性を備えもつ。弥生時代の墳丘墓と古墳時代の古墳は、どちらも当時の社会状況と需要に応じて出現し、社会の変化に従って変容したはずである。そうした社会の変化は、おそらく当時の中国大陸からの刺戟と影響を受けていたであろうが、しかし当時の人々が有する葬送観念は容易には変化し得なかった。

弥生時代の墓制、特に弥生時代後期～終末期の墓制は、秦漢の墓制と比較し得ないのであるが、しかし東周の墓制との間には相似する一面が認められる。例えば中国では、春秋時代に墳丘墓が出現し、その墳丘はそれぞれ異なった形状を呈していた。戦国時代に至ると、諸侯の列国において高大な墳丘が遍く造営されるようになった。この時期の墳丘の形状は依然として不統一で、しかも墳丘の規範による被葬者の身分・等級制度を形成していなかった。日本の弥生時代の墓制もこれと同様であり、弥生時代前期に墳丘墓が出現し、後期～終末期に墳丘が大型化したのであり、しかも地域ごとに墳丘の形状がことごとく相違していた。こうした現象の原因を追究すると、両国の当時における対外的な社会情勢が相似していたことと関連していたことがわかる。東周時代は名目的には統一されており、統一の象徴たる周王が存在していた。しかし実際には、諸侯各国はそれぞれ政治を執り行っていた。それら諸侯各国は、様々な方法を採用して自身の力量を発展させ、地域に覇を唱えることを求めた。そして、墓制の構成部分のうち墳丘を高大に造営することで自国の強固な統治を成就させ、その実力を誇示する一つの手段とした。日本の弥生時代はこれと似た社会状況であった。農業経済の発展に従い、列島各地で幾多の政治集団が出現し、競争を経ながら発展を遂げ、多数の小国へと展開した。これらの小国も、様々な手段を通じて自身の力量を強大化させた。これらの手段には、中国との往来を通じて一定の影響力を獲得することも含まれていた。また中国の場合と同様に、墓制の構成部分のうち墳丘が大型化を遂げてゆく過程において、墳丘自体が各小国の強固な統治と実力を誇示する一種の道具になっていった。従って、弥生墳丘墓の出現と発展・変化は、まさしく弥生社会の発展・変化の必要に応じたものということができるし、また弥生時代の墳丘墓は縄文時代の基礎の上に成り立っており、社会に変革が発生する背景のもとで次第に発展・変化を遂げてきたものということもできるのである。

こうした考えの筋道に従うならば、古墳時代の墓制と秦漢の墓制とを対比することも同様に可能になる。墓葬の地下部分を論から捨象するならば、秦漢における墓制の主要な特徴の一つは、地上施設が発達していることであり、そうした施設の中心は墳丘である。箸墓古墳が古墳時代の端緒に、その巨大な形姿を地上に現したのと同様に、秦の始皇帝陵もまた空前絶後の規模をもって突如出現した。その後、前漢の墓制は秦の墓制を継承あるいは発展させた。墳丘は方形を尊重しつつも同時

に円形も存在し、さらに墳形と墳高が被葬者の等級秩序の制度を形成するようになり、これは後漢までずっと継続した。日本では箸墓古墳が確立して以後、前方後円墳が尊重されつつも同時に前方後方墳・方墳・円墳も存在し、墳形と墳丘規模で被葬者の身分等級の規則を体現するようになった。中国のあり方から見るならば、秦漢の墓制は伝統的墓制の継承に立脚しつつ革新されたものであった。これは統一された一大国家の政治的需要に応じたものであった。そしてまた、皇帝権を強化し、封建的な等級制度の需要を維持するものであり、当然ながら同時に社会経済的・技術的条件を具備するものでもあった。一方、視点を転じて日本の古墳時代を見るならば、この時代は統一を求め統治を強化していた時代に相違なく、巨大古墳はまさにこうした社会発展状況に応じつつ、気運に乗じて生まれたものであり、このような社会状況を維持するべく効力を発揮したものであった。従って、古墳の源流は弥生墳丘墓の中に探索すべきであり、古墳とは弥生社会が発展して一定の段階に到達し、そのため社会に深刻な変化が発生し、墓制の変革が引き起こされて誕生したものだということができるのであり、ある者はこれを突然変異と説くわけである。

要するに、墓葬を地下部分と地上部分とに二大分するならば、前者は当然のこと死者のため設置され、後者は主として生者による奉仕のためのもの、なかんずく現実社会の政治的奉仕のためのものであった。

中日両国における同時期の墓制の比較分析を通じて、全体的に看取できることは、弥生時代の墳丘墓および古墳時代の前方後円墳の形態と中国大陸の中原地域における戦国・秦漢・魏晋・南北朝の墓制とには直接的な関係が認められないことである。これは墓葬制度の面のみに限られることではなく、都城制度・政治制度・経済制度などの面においても、日本に対する中国からの直接的な影響はことごとく看取できない。しかしながら結局、前漢・後漢以降、日本と中国王朝との間に直接的な交渉が生まれ、交渉を通じて日本社会に影響がおよび得ることになった。そして日本社会は、中国からの影響下において変化が生じ、さらに一歩進んで墓葬制度などの各種制度の変化が促進されたのである。このような意味からいうと、各種制度のレヴェルにおいては、社会発展の水準が相違していたり伝統文化の差異があったりしたために、中国から日本への直接的な影響は生じなかったが、しかし当時における日本社会の変化は中国大陸および韓半島からの影響と密接な関係があったのである。従って、弥生墓制と古墳の埋葬はどちらとも、中国大陸および韓半島の情勢から間接的な影響を受けていたということができる[40]。

註

1　和田晴吾「弥生墳丘墓の再検討」和田編『古代日韓交流の考古学的研究―葬制の比較研究』2003 年。

2　樋口隆康「弥生文化に影響与えた呉越文化」、菅谷文則「日本の首長層が目指した墓制・土墩墓」（いずれも『最新日本文化起源論：日本人と江南文化』学習研究社、1990 年。

3　俞偉超「方形周溝墓与秦文化的関係」『中国歴史博物館館刊』第 21 期、1993 年。俞偉超「方形周溝墓」『季刊考古学』第 54 号、1996 年。俞偉超・茂木雅博「中国と日本の周溝墓」後藤直・茂木雅博編『東アジアと日本の考古学』Ⅰ墓制①〈墳丘〉、同成社、2001 年。

4　王巍「弥生・古墳時代の墳丘墓から見た古代中国の影響」上田正昭編『古代の日本と渡来の文化』学生社、1997 年。

5　渡辺昌宏「方形周溝墓の源流」大阪府立弥生文化博物館編『平成 11 年春季特別展：渡来人登場－弥生文化を開いた人々』1999 年。

6　藤井整「方形周溝墓の成立」京都府埋蔵文化財調査研究センター編『京都府埋蔵文化財情報』第 82 号、2001 年。

7　王巍「中日古代墳丘墓の比較研究」後藤直・茂木雅博編『東アジアと日本の考古学』Ⅰ墓制①〈墳丘〉、同成社、2001 年。

8　卜部行弘「墳丘墓の日中比較」後藤直・茂木雅博編『東アジアと日本の考古学』Ⅰ墓制①〈墳丘〉、同成社、2001 年。

9　中村大介「方形周溝墓の成立と東アジアの墓制」『朝鮮古代研究』第５号、2004 年。

10　鐘方正樹「日中における王陵の墳形変化とその関連性」『博望』第５号、2004 年。

11　山西省文物管理委員会・山西省考古研究所「侯馬東周殉人墓」『文物』1960 年８・９合刊。

12　三門峡市文物工作隊「三門峡市火電廠秦人墓発掘簡報」『華夏考古』1993 年４期。

13　和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第 34 巻第２号、1987 年。和田晴吾「古墳文化論」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』第１巻 東アジアにおける国家の形成、東京大学出版会、2004 年。

14　都出比呂志「墳丘の型式」石野博信他編『古墳時代の研究』７古墳Ⅰ 墳丘と内部構造、雄山閣、1992 年。

15　奈良県立橿原考古学研究所編『大和前方後円墳集成』学生社、2001 年。

16　木下亘ほか『中山大塚古墳　附編葛本弁天塚古墳　上の山古墳』奈良県橿原考古学研究所調査報告第 82 冊　奈良県教育委員会、1996 年

17　天理市教育委員会『東殿塚古墳・西殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告 ７、2000 年。

18　豊岡卓之編『桜井茶臼山古墳　範囲確認調査報告』奈良県文化財調査報告書第 110 集　奈良県立橿原考古学研究所、2004 年。

19　大阪府『大阪史名称天然記念物調査報告』第５輯、1934 年。

20　宮内庁書陵部『陵墓地形図集成 』宮内庁書陵部陵墓課編、1999 年。

21　宮内庁書陵部『陵墓地形図集成 』宮内庁書陵部陵墓課編、1999 年。

22　高槻市『高槻市史』第６巻考古編、1973 年。

23　福尾正彦「畝傍陵墓参考値石室内現状調査報告」『書陵部紀要』宮内庁書陵部、1994 年。

24　奈良県立橿原考古学研究所『斑鳩　藤ノ木古墳　第一次調査報告』奈良県立橿原考古学研究所、1990 年。

25　以下の諸説は、明記するもの以外は全て以下の文献による。岩崎卓也「前方後円墳の起源」『季刊考古学』第 54 号、雄山閣、1996 年。

26　王巍「弥生・古墳時代の墳丘墓から見た古代中国の影響」上田正昭編『古代の日本と渡来の文化』学生社、1997

年。
27 飯島武次・石野博信「対論―東アジアの墳丘墓」『古墳発生前後の古代日本』大和書房、1987 年。
28 王巍『中国から見た邪馬台国と倭政権』雄山閣、1993 年。
29 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店、1983 年。近藤義郎「前方後円墳の誕生」『岩波講座日本考古学』６、1986 年。
30 町田章「東アジアの墓制と日本への影響」石野博信他編『古墳時代の研究』13 東アジアの中の古墳文化、雄山閣、1993 年。
31 卜部行弘「墳丘墓の日中比較」後藤直･茂木雅博編『東アジアと日本の考古学』Ⅰ墓制①〈墳丘〉、同成社、2001 年。
32 俞偉超「中国魏晋墓制并非日本古墳之源」『古史的考古学探索』文物出版社、2002 年。
33 町田章『古代東アジアの装飾墓』同朋舎、1987 年。
34 黄暁芬「東アジア地域における葬制文化」和田晴吾編『渡来遺物から見た古代日韓交流の考古学的研究』2007 年。
35 白石太一郎「日本における横穴式石室の系譜－横穴式石室の受容に関する一考察－」『先史学研究』５、1965 年。
36 藤井和夫「東アジアの横穴式墓室」田村晃一他編『新版古代の日本』第二巻 アジアから見た古代日本、角川書店、1992 年。吉井秀夫「朝鮮の墳墓と日本の古墳文化」鈴木靖民編『日本の時代史』2 倭国と東アジア、吉川弘文館、2002 年。
37 鐘方正樹「北周墓と横口式石槨」茂木雅博編『日中交流の考古学』同成社、2007 年。
38 和田晴吾「東アジアの“開かれた棺”」和田編『渡来遺物から見た古代日韓交流の考古学的研究』2007 年。
39 都出比呂志「古墳が造られた時代」都出編『古代史復元』6 古墳時代の王と民衆、講談社、1989 年。
40 都出比呂志「古墳と東アジア」京都府埋蔵文化財調査研究センター編『京都府埋蔵文化財論集』第 6 集、2010 年。

終　　章

ここまで幾章かを設けて、中国古代の西周・東周の墓制、秦漢の墓制、魏晋の墓制、南北朝の墓制について論述を行ってきた。この終章では、中国古代の墓葬研究のうち若干の問題について、特に中国の古代人の冥界観について概論を加え、本論を締め括ることにする。

1　中国古代の墓葬と研究

1　墓葬資料の性格

墓葬には、歴史上の各時期にある種の特殊な建築が広範に存在している。それゆえ、考古学的な実践の中で大量の発見があり、そのためこうした発見は考古学的研究の主要な対象となり、そして他の多くの学問分野が学術研究を展開させてゆく際の実物資料の源泉となる。空間的な関係の点から見ると、完整な１基の墓葬は地上部分と地下部分とに二大分できる。前者には墳丘･陵園（墓園）･陵寝建築･神道石刻などの施設があり、後者は墓葬の形態や棺槨葬具や各種副葬品から構成される。墓葬に付設される陪葬坑は墓の内部あるいは外部に分布する。墓の外部に位置する陪葬坑は、墓葬の地上施設の一部に組み込まれていることもある。

墓とは人間が死体を処理する主要なやり方であり、人々が死後に帰り着くところである。墓とは一種の客観的存在であり、私たちが古代社会の各種の観念と技術を研究する際に真実の資料を提供してくれる。しかし、これらの客観的かつ真正な材料をいかに解読すればよいのかが、方法論上の問題になる。たとえば、地上施設や墓葬形態や副葬品の解読について、墓葬の装飾図像の解読について等々といった方法論上の問題である。この他注意を要するのが、墓葬はしばしば数百年、数千年の歳月を経てようやく再び日の目を見ており、そのため現在の私たちが目にする墓葬はすでに初造時のものではなく、初造時の内包的要素の一部は歳月の経過に従って永遠に消滅してしまっているということである。

2　墓葬研究の重点

墓葬研究が関連する側面は極めて広く、また社会科学と自然科学の多くの学問分野との関係も密接である。しかし特に、古代社会の儀礼制度の一部分たる墓制こそ、つまり葬送の礼制こそ墓葬研究の核心をなすはずである。同時にまた、墓葬の展開は人々の死後の世界の光景であり、墓葬が表現するのは死後の世界に対する人々の観念である。従って、古代の人々の死生観すなわち冥界観は、墓葬研究の重要な分野になるはずである。

2　中国古代の墓制および墓葬等級制度の変遷

新石器時代から殷周期に至るまで、中原地域の墓葬の主要形態は竪穴墓壙木槨墓であった。この墓葬形態では地上に高大な墳丘は見当たらず、葬送行為において埋葬過程が特に重視され、墓壙を埋め戻してしまうと、そこで葬送は終了した。しかし、殷代晩期の墓葬上に建造物の実例があることがすでに発見されており、高大な墳丘が出現する以前に、墓上における標示物の造営がすでに始まっており、それに応じた儀礼活動が実施されていたことが立証されている。春秋時代の末年になると、墓上に高大な墳丘が出現し、墳丘を中心とする地上施設のセットが徐々に形成されていった。このセットには墳丘・陵園・陵寝建築・陪葬坑・陪葬墓等が含まれる。墓葬の地上施設が現れて以降は、たとえ墓壙が埋め戻されても葬送活動はまだ終結せず、墓上の高大な墳丘は被葬者の身分・等級を明示し、陵寝建築では各種の儀礼活動が継続的に行われた。このため墓葬も地下部分と地上部分とに二大分された。地下の墓室は冥界の家として設置され、地上施設は冥界と現世とを繋ぐ橋梁となり、ここで各種の儀礼活動が演じられた。こうした活動は地下世界の死者への奉仕となり、同時にまた現実世界の政治的奉仕となった。このような儀礼活動は、現実社会の政治・統治を維持する重要な手段になったのである。

前章で述べたように、西周および東周の墓葬等級制度の核心をなしていたのは棺槨・用鼎・車馬随葬制度であった。しかし、墳丘などの地上施設が出現した後、伝統的墓制は変革に遭遇するに至った。地上施設は墓葬の重要な構成部分として新たな墓制に正式に組み込まれ、最終的に墓葬等級制度における重要な内容になった。

秦漢期には、地上施設が繁栄を極めると同時に、地下の墓葬の形態にも根本的な変化が生じた。竪穴木槨の墓制は次第に終結に向かってゆき、前漢の木槨墓の他、黄腸題湊墓・崖洞墓・石室墓が新興の墓葬形態になった。後漢に至ると、世の中は塼室墓と石室墓に統一され、墓室の空間も密封から開放へと向かっていった。前漢・後漢の墓葬の等級制度は、地上・地下の両部分によって具現されるようになった。地上部分の中心は墳丘であり、墳丘の高さを用いて被葬者の等級秩序を厳格に定めた。地下部分は、墓葬の形態を除くと、主に殮服の玉衣を用いて等級の格差を具現化した。

魏晋期の墓制の核心は薄葬である。地上施設は全て廃止され、地下の墓室・棺槨・副葬品はみな簡略化され、玉衣の殮服は徹底的に放棄されるに至った。しかし魏晋は、国の存続が短期間であるなどの原因により、比較的厳格な葬送等級制度をおそらくは形成しなかった。

魏晋期に創出された薄葬の制は、十六国から南北朝に至る墓葬に対して一定の影響を与えた。しかし同時に、十六国期が始まると、魏晋の薄葬の制は次第に破壊されていった。たとえば、地上施設が再び登場した。南北朝期に至ると、ある種の魏晋の墓制と秦漢の墓制とが混合して新たな墓制が大体形成された。地上・地下の諸施設による墓葬等級制度が一体的に構成され、しかもこれらは比較的成熟した段階にまで達していた。南北朝の墓制は厚葬の風を再開し、隋唐の墓制に重要な影響を与えた。

3　中国古代墓葬の棺槨形態と合葬習俗

中原地域の新石器時代の墓葬に使用される木棺の形状は長方形に作られ、槨の平面形には「井」字形や「Ⅱ」字形などがある。

殷代の墓葬の木棺は長方形を呈し、短辺の一端がもう一端よりもわずかに広い。槨は多く「井」字形を呈する。西周の墓葬の木棺も長方形に作られ、槨はしばしば枋を用いて囲って形をなした(これを題湊と呼ぶ)。東周期の中原地域の墓葬は依然として長方形木棺であったが、楚墓では長方形木棺に加えて長方懸底や長方弧形懸底などの形状の木棺も使用され、題湊槨室も流行し続けた。合葬墓は殷周期にはすでにありふれたものになっており、通常は全て並穴合葬の形式が採用されていた。

秦漢期には、王墓に使用していた鑲玉漆棺や、列侯の長沙の馬王堆漢墓出土の木棺の実例から見て、棺の形状は依然として長方形で、伝統的な竪穴墓は題湊槨室を引き続き使用していた。大型墓は依然として並穴合葬の形式を採用しており、おおよそ後漢から、大型墓に並穴合葬と同穴合葬が併存するようになった。しかし、中・小型墓の状況はこれと異なっていた。洞室墓と塼室墓の流行に応じて、同穴合葬はおよそ前漢中期に大型墓よりも早く出現し、二人以上の家族の同穴合葬も後漢期から流行し始めた[1]。

魏の墓葬では、長方形の木棺が引き続き使用された。西晋の墓葬の木棺には長方形と梯形の両種があり、後者は短辺の一端がもう一端よりわずかに大きく、しかも高い。十六国期の長安地域における墓葬の木棺は、基本的に全て短辺の一端がもう一端よりも大きな梯形に作られている。北朝における墓葬の木棺の形状はみな、短辺の一端が広く高く、もう一端が低く狭まる梯形であり、北魏の平城期にも棺外に槨を用いる墓の事例が多数ある。東晋の墓葬の木棺も、短辺の一端がもう一端よりもわずかに大きな梯形を呈し、南朝における墓葬の木棺の形状は東晋のものと相似しているはずである。魏晋から南北朝まで、同穴合葬は合葬の主要形式となり、同時に二人以上の家族の同穴合葬の事例も存在する。

木棺の形状に関して大まかにいえば、秦漢以前は基本的に長方形を主とし、魏晋以後になると短辺の一端が広く高く、もう一端が低く狭まる梯形に変化する。

4　中国古代人の冥界観

死に対して、古代人はいかなる観念を持っていたのだろうか。死後の世界に対して、古代人はいかなるプランを立てていたのだろうか。古代人の死後の世界の情景に関して、墓葬から理解を得ることは可能である。しかし、古代人の死の観念に対して、文献史料による解読と墓葬資料による解読とで異なることに関連して、生み出される認識は異なっている。ここに墓葬研究の難点があるのであり、依然として探求を続けてゆかねばならない。

中国古代の墓葬を研究する場合、古代人の死生観、すなわち冥界観が不可避の重要な問題となり、それゆえこの問題に思考をめぐらさざるをえない。ここはまず、この問題に対する基本的な見方に

ついて略述し、その上で概要的に論述を行う。

（1）中国の古代人による冥界観の最初の認識

中国の古代人の冥界観について、手始めに以下のいくつかの認識を帰納しておく。

1．中国の古代人は、死とは現実生活や生命の終了であり、同時にまた別種の新生活や新たな生命の開始だと見なしていた。そのため死後を、すなわち葬儀の処置を極めて重要視していた。古代人は墓葬をまさに死後の新生活・新生命の舞台と見なし、それゆえ死後の別世界、すなわち冥界の経営に精魂を込めたのであった。墓は単に死者の死体を収容するだけの場所ではなく、死者の「精神」の家園でもあった。

中国の新石器時代の墓葬は、墓壙の小さなものから大きなものへ、棺槨のないものからあるものへ、副葬品の少ないものから多いものへという変化を経験した。殷周期に至ると、この種の伝統墓制は一層の発展を遂げ、墓壙と棺槨はさらに大きくなり、副葬品もさらに豊富となった。春秋末期に高大な墳丘が墓上に出現して以降、一式揃った地上の陵園施設が速やかに興隆し、それと同時に宮殿建築を模倣した墓室が出現した。秦漢期以後には墓葬装飾も興隆した。

地上に陵園施設が形成され、墓室の邸宅化が進み、墓葬装飾が興隆し、副葬品が絶えず潤沢化していったことは、墓が被葬者の遺体を安置する以外に、その魂魄の憩う地でもあったことを十分に立証している。

2．中国古代人の冥界観は全て生者の観念であった。まさしく生者による死の認識であり、死後の世界への想像であり、死後の世界へのプランおよび経営であった。これらの冥界観を構成する要素の大部分は現実世界に存在していた。冥界を想像して構築されたものは現実世界を模倣して複製したものにすぎず、その目的はまさしく冥界の家屋を建築することにあった。

3．中国古代人が抱く冥界観の思想の基礎は、霊魂不滅という古来からの素朴な観念と儒家思想とが結合したものであった。伝統的な道家思想およびその後に形成された道教や、西方から伝来した仏教などの思想は、古代人の冥界観にもある程度具現されているけれども、しかしこれらの宗教思想が中国古代において伝統的かつ主流の冥界観の主体になることはしてなかった。

4．先秦期には廟祭と墓祭が二重になって存在し、戦国期から秦漢期に至るまで地上施設のセットと地下施設のセットとが併存していたため、従って被葬者の魂魄は当然のこと、自由に移動できる特性を備えていると見なされたのである。一方では死者の遺骸を墓穴に納め、死者が墓の内部空間とありとあらゆる副葬品を思うまま利用できるようにしえた。他方で、廟祭であろうと墓祭であろうと、祭祀の直接の対象は神主（よりしろ）であったけれど、神主の背後には隠れつつ活動する特定の魂魄が存在し、こうした祭の際に死者の魂魄が墓穴を離れて祭祀の場にやって来て献祭を受けたと考えることができるのだろうか。

5．中国では新石器時代晩期から葬礼制度が萌芽的に現れた。殷周期に至ると、奴隷等級制度に適応した一揃いの葬礼制度（両周墓制）を形成した。秦漢期には再び、封建等級制度に適応した葬礼

制度（秦漢墓制）が創出された。魏晋期には、時代の変化に適応するために秦漢の墓制を全面的に否定するとともに、魏晋の墓制を形成した。十六国期および南北朝期には、長期にわたる戦乱を経て、墓制が次第に魏晋の墓制の影響を脱し、大体一揃いの南北朝墓制を形成した。中国古代の墓葬制度を通観すると、墓葬の形態と副葬品は時代の変化に従い現れ方に差異があり、墓上施設の出現以後はその内容も時期ごとに全く同じではないが、各時期の墓制の核心は各々の時代背景に関連する墓葬等級制度である。『荀子』礼論の「死に事うること生に事うるが如く」は、少なくとも二重の意味が含意されている。死への対処は生時における対処と同じようにすべきだというのがその一つの意味である。これはまさに、葬儀は死者の生時の等級身分に合致させるべきということであり、これこそ墓葬等級制度が形成された原因であった。もう一つの意味は、死への対処は生きている時と同じようにすべきだということである。これはまさに、死者は冥界の家屋にいて生前と同様の生活が必要だということである。中国古代の墓葬の葬礼制度と冥界観は相互に関連していたのである。秦漢以前の墓葬では礼制がいくぶん色濃く表現されていた。秦漢以後、墓葬において礼制の内容が引き続き表現されるとともに、世俗生活の表現も重視されるようになり、そして世俗生活化の傾向がますます顕著になっていった。

６．中国の古代人の冥界観は格別の安定性を備えていた。本論で言及したように、新石器時代から南北朝期に至るまで、この観念はほとんど改変されなかった。

要するに中国の古代人は、墓を死者が冥界にいる家屋と見なしていたのである。この冥界の家屋は現実の家園の複製･再建であり、墓に具現されている各種の観念は全て現世に存在するものであった。従って、地下の墓葬を通じて地上の現世を見ることができるのである。

（２）中国古代人の冥界観の論綱

ここでは秦漢期を中心に、地上の陵園施設、地下の墓室構造、墓葬装飾の図像、殮服、副葬品の組み合わせなどの側面について、上述の観点から説明を加える。

１　地上の陵園施設－被葬者の生前の宮都を再現

上述した通り、春秋末年に大きな墳丘が墓上に出現して以降、列国において墳丘を中心とする陵園施設のセットが次第に形成されていった。この陵園施設には墳丘・陵園・陵寝建築・陪葬坑・陪葬墓などが含まれていた。秦の始皇帝陵は列国の陵園建築の集大成であり、空前絶後の陵園施設が造営された。前漢の帝陵は、基本的に始皇帝陵の陵園の内容を継承した上で、ある程度の変化を見せた。後漢の帝陵の施設では、さらにある程度の加除がなされた。魏晋に至ると陵園施設が廃止され、南北朝には再び回復した。各時代の墓葬の地上施設はことごとく同じではないが、しかしいずれも被葬者の生前の宮を再現したものと見なせる。以下、前漢の帝陵を例にとり簡説する。

前漢十一陵のうち景帝の陽陵と宣帝の杜陵のみ、その調査が比較的よく展開している。陽陵考古調査を長期にわたり主宰してきた焦南峰は、前漢帝陵に対し深く掘り下げた研究を進めている。彼は、前漢帝陵の建設理念に論及した際、前漢帝陵を建設する手本は前漢王朝であり、前漢帝陵は現

実の前漢帝国を模倣して成されたと考えた[2]。もちろん、前漢帝陵が模倣の対象としたのは長安城の皇宮（未央宮）だと考える研究者もいる[3]。

前漢帝陵が模倣したのが前漢帝国であろうと長安城であろうと、あるいは皇宮の未央宮であろうと、いずれにせよみな現実世界を複製したものであった。

２　地下の墓室構造－被葬者の生前の宮室を象徴

中原地域の伝統的な竪穴木槨の墓制は限定されていたため、題湊の制度により墓室の立体空間は拡大し得たものの、漢代以前には墓室が邸宅化してゆくプロセスは非常に緩慢であった。たとえそうであっても､墓室をまさに被葬者の生前の宮室の象徴と見なす研究者もいる。たとえば俞偉超は、戦国楚墓の頭箱･棺箱･辺箱･足箱を区別して、それぞれ周代の宮室制度の前朝（堂）･寝（室）･房･北堂および下室の象徴と考えた[4]。

河北省平山の中山国王陵（Ｍ６）（図１－30）や河南省新鄭胡庄の韓国王陵などのように、戦国時代の竪穴木槨墓には邸宅化してゆく明確な傾向が認められる。前者は墓壙壁に偽の立柱を設置して地下宮殿を象徴し、後者は墓壙上部に木造屋根を模倣した建造物があった。墓壙内に宮室建築を模造するこの種のやり方は、陝西省咸陽楊家湾の２基の大型漢墓（Ｍ４・Ｍ５）（図２－28）などのように、前漢初期に至るまで継続した。

竪穴木槨墓の特徴の一つとして、木造の槨室は竪穴式の密閉空間を構成しており、いったん閉塞されると外界と完全に隔離されてしまうことがある。しかし前漢初期に至ると、墓道に対応して木槨外に門扉を設置する竪穴木槨墓も存在し、その結果槨室は、湖南省沅陵の虎渓山一号漢墓（図２－30）などのように、横穴式の開放空間に変容させられた。前漢期における他の墓制では、竪穴形態を採用する黄腸題湊墓のように、前漢初期には題湊によって囲まれた空間が、まさに横穴式木室と同様の開放構造を形成していたのである。前漢初期にすでに出現していた崖洞墓とその後に出現した石室墓および後漢以後の塼室墓は、全て開放式の横穴墓であった。墓室が竪穴式の封鎖空間から横穴式の開放空間へと変わったことそれ自体は、邸宅化の結果であったが、それは同時に、墓室がさらに邸宅化を進めてゆく条件を創り出した。前漢の崖洞墓を例にとると、徐州の北洞山漢墓のように墓外に門闕を設置するものがあり、墓室の頂部の形式には両斜面形式など多種類があり、墓内には厨房・歌舞広間・厠などの生活施設が設けられている。さらにまた、永城保安山２号墓の２基の主要墓室のように、「東宮」と「西宮」と自称する仕方もある。

俞偉超はさらに、黄腸題湊墓の「正蔵」を「明堂」･後寝･「便房」に分け、崖洞墓と塼室墓の前室･後室・回廊を区別して、それぞれ「明堂」・後寝・「便房」と見なし、三室塼墓の前室・中室・後室を区別して、それぞれ庭・「明堂」・後寝の象徴と見なしている。

要するに、墓室の平面形態や立体構造から見ても、あるいは墓室の邸宅化傾向から見ても、地下の墓室はまさしく地上の居室の複製であり、墓葬とはすなわち冥界において死者が居る家なのである。

3　墓葬の装飾図像－現実世界の図像および生者の思想観念を複製

墓葬の装飾には壁画・画像石・画像塼など多種にわたる形式がある。それらは基本的に全て漢代から流行し始めた。壁画と画像塼が使用し続けられた期間は非常に長く、実に隋唐以後にまで及んでいる。画像石は主として漢代に使用された。壁画・画像石・画像塼の製作法と表現形式はそれぞれ異なっているが、しかしそれら装飾墓葬の目的と図像内容には比較的大きな一致が認められる。

黄佩賢は漢代の墓葬壁画に対して全面的な系統的研究を行った。彼女は壁画の内容を四種類に大分する。すなわち、天象・昇仙・神話・祥瑞、御凶・駆邪逐疫、経史人物・故事、生涯の経歴・現実生活、の四種類である[5]。俞偉超は、漢の画像石の内容に関して八種類に大分している。すなわち天象、鬼神、祥瑞、古代の帝王・聖賢と忠臣・孝子・烈士・貞女など歴史上の成否の故事、被葬者の身分を表現した車馬出行図など、被葬者の財産を表現した農地・牧場・作業場など、被葬者の生活を表現した邸宅・穀倉・厨房・宴会・楽舞・百戯・講義・捕虜献上などの催し、装飾文様帯、の八種類である[6]。信立祥は中国古代における画像塼の題材の内容について概説し、祭祀のたぐいの図像（車馬出行・墓闕・厨房・百戯楽舞・歴史故事など）、天上における諸神の世界の図像（日神・月神・伏羲・女禍・青龍・白虎・朱雀・玄武など）、仙界の図像（西王母・東王公・墓主騎鹿昇仙・墓主雲車昇仙・天人など）、被葬者の地下生活の図像（盾を持つ亭長・戟を持ち剣を佩用する武士・奴僕・安居・宴会・市楼・塩井・採蓮・農作業など）があると考えた[7]。

壁画・画像石・画像塼の内容に対する上述の分類から、これら三種類の装飾図像の表現内容が相互に関連しながら基本的に一致することを見出せる。しかし、これらの図像の部分に対する解釈と分類に関しては、研究者間で相違がある。たとえば壁画と画像石は全て天象・祥瑞・歴史故事・現実生活などの内容を有しており、壁画にある昇仙・神話・御凶・駆邪逐疫などの題材のほとんどに、画像石の鬼神のたぐいが含まれているのである。壁画の分類では昇仙などの内容が強調されていることを見出せる一方、画像石の分類ではこの種の題材が稀薄化しており、漢代の人々の死生観に対する研究者たちの認識が相違することを示している。同様に、画像塼にも昇仙・歴史故事・現実生活などの題材があるが、上記の研究者は現実生活と歴史人物の画像の一部を祭祀のたぐいに繰り入れてしまっており、また現実生活の画像の大部分を被葬者の地下生活の図像と見なすとともに、この種の図像を「完全に現実の人間世界の縮図になっている」と考えている。

信立祥は、秦漢の人々が考える宇宙世界は四つの階層から構成されていたと指摘している。すなわち、天帝と自然神が住まう天上世界、西王母などが住まう仙界、現実の人間世界、死者の霊魂が住まう地下世界である。この「四界」により、上述した三種類の装飾図像に対して概括を行うならば、天界（日月星辰・風雲雷雨など）、仙界（西王母・羽人・昇仙など）、陽界（祥瑞・歴史故事・現実生活など）、陰界に区分でき、鬼神のたぐいは天界・仙界・陽界に区別して繰り入れることができる。陰界すなわち冥界に関して、黄佩賢は漢代の壁画を研究した際に、漢人が観念する宇宙は天上・人間・地下に三分できると考えたものの、「しかし地下世界の図像を象徴する専区を特に切り開いて

はいない」と論じている。俞偉超もまた、漢の画像石における「鬼神」のたぐいの図像を研究した際に、「漢代の信仰のあり方に照らして考察すると、地下の鬼神もある程度表現されているはずである。しかしこれらは全て、今後の識別を待たねばならない」と考えている。信立祥は画像塼を研究した際、被葬者の地下生活の図像は「完全に現実の人間世界の縮図になって」おり、地下世界（陰界の図景）を描出していないと推定している。要するに、壁画であろうと画像石や画像塼であろうと、いずれもいわゆる陰界を具体的かつ明確に描写していないのであり、実際のところ、これらはまさに古代人の冥界観を映し出しているのである。陰界（冥界）とは陽界の複製であり再現なのである。

疑うまでもなく、墓葬装飾の図像には非常に雑然とした内容が認められる。これらは全て生者の観念に由来し、それらの大部分は天象・祥瑞・現実生活などの画像のように、客観的存在に対する人々の認識を表現したものであるが、歴史故事や神仙鬼怪の図像のように、人々の歴史観念や思想意識を表現したものもある。これらの図像は、当時の人々が経験したこと（現実生活・祥瑞）、見たこと（天象）、考えたこと（歴史故事・神仙鬼怪）を反映したものである。それらの大部分は、人々の日常生活に存在するものであった。しかしそれらは、たとえば天界と仙界が墓室の頂部ないし上部に配置され、天空と仙境を象徴し、陽界が墓室の中部ないし下部に配置され、実生活を表現したように、墓葬の際に複製され、若干の配列および組み合わせが行われた。このように墓室とはまさに、上には蒼穹および神々が、下には「現実世界」（耕作・厨房・宴会・車馬）があるかのようなものであった。ただ実際には、これらは現実世界の複製であり再現であった。

天界の様々な天象、陽界の現実生活、祥瑞などの画像について、ここで討論する必要はない。ここではこの他の内容の図像、すなわち四神・方相氏・西王母・歴史故事のみを例にとり、それらが人々の現実生活にも同様に存在していたことを論証する。

四神は墓葬装飾のうち最も流行した図像の一つである。漢の長安城の長楽宮５号建築（凌室）遺跡において、かつて四神の図案の空心塼が出土し、さらに漢代の銅鏡にこの種の装飾図案が頻見し、山東省臨朐の咸寧三年（西晋・277 年）墓出土の銅鏡の銘帯に「青龍在左」「白虎在右」の銘文があるように[8]、この種の図像には現実社会でも出会える。

方相氏はというと、それ自身まさに現実社会の追儺の主役であり、『周礼』夏官・方相氏に「方相氏、蒙熊皮、黄金四目、玄衣朱裳、執戈揚盾、帥百隷而時難、以索室駆疫」とある。

仙界の西王母や羽人などの図像に関しては、『漢書』五行志下之上に、（哀帝建平四年（前３年））「其夏、京師郡国民聚会里巷阡陌、設張博具、歌舞祠西王母」と記載されているように、これらはみな現実社会の西王母および羽人などの神仙思想信仰に由来する。漢代の銅器・銅鏡・漆器の装飾図案にも、西王母の姿を見ることができ、「西王母」の榜題を有するものもある[9]。神仙や羽人に関する文献の記載はさらに多く、たとえば『漢書』郊祀志下には「公孫卿曰、「仙人可見、上往常遽、以故不見。今陛下可為館如緱氏城、置脯棗、神人宜可致。且仙人好楼居」。于是上令長安則作飛廉・桂館、甘泉則作益寿・延寿館、使卿持節設具而候神人。乃作通天台、置祠具其下、将招来神仙之属」とある。『漢書』地理志上には、「仙人祠」が設けられているとの記載が多く

あり、琅邪郡の不其県のみに「有太一・仙人祠九所、及明堂、武帝所起」との記載がある。羽人の図像は、たとえば上述した山東省臨朐の咸寧三年墓出土鏡に、龍に乗る羽人や鳳に乗る羽人の文様があったり、湖南省安郷の劉弘墓（西晋）から出土した玉尊にも羽人などの文様があるように[10]、銅鏡その他の器物に見られる。この他、「雲気車」などの記載は、たとえば『史記』孝武本紀に認められる。そこでは、武帝の寵愛と信用を受けた方士の少翁が文成将軍の地位を拝した際に、「文成言曰、「上即欲与神通、宮室被服不象神、神物不至」。乃作画雲気車、及各以勝日駕車辟悪鬼。又作甘泉宮、中為台室、画天・地・泰一諸神、而置祭具以致天神」と記載されている。

歴史故事の題材に関する画像は、宮室壁画に頻見する。たとえば、「（武帝之）李夫人少而蚤卒、上憐閔焉、図画其形於甘泉宮」（『漢書』外戚伝上）、「日磾母教誨両子、甚有法度、上聞而嘉之。病死、詔図画於甘泉宮、署曰「休屠王閼氏」」（『漢書』霍光金日磾伝）のように、また『漢書』李広蘇建伝に宣帝の「甘露三年、單于始入朝。上思股肱之美、乃図画其人於麒麟閣、法其形貌、署其官爵姓名」とあり、この際に霍光ら11名の名臣の画像を未央宮の麒麟閣に描いたと記載されているように、当時の朝廷の嬪妃･名臣･賢婦を題材にしたものがある。『漢書』外戚伝下に「成帝遊於後庭、嘗欲与（班）婕妤同輦載、婕妤辞曰「観古図画、賢聖之君皆有名臣在側、三代末主乃有嬖女、今欲同輦、得無近似之乎？」上善其言而止」とあるように、宮室壁画には前代の君臣と寵姫も見られる。この他、後漢の王延寿の「魯霊光殿賦」が研究者に幅広く引用され、墓葬装飾図像の種類と意図を説明するために利用されている。この賦には以下のように記載されている。すなわち、「図画天地、品類群生。雑物奇怪、山神海霊。写載其状、託之丹青。千変万化、事各繆形。随色象類、曲得其情。上紀開闢、遂古之初。五龍比翼、人皇九頭。伏羲鱗身、女媧蛇躯。鴻荒朴略、厥狀睢盱。煥炳可観、黄帝唐虞。軒冕以庸、衣裳有殊。下及三后、姪妃乱主。忠臣孝子、烈士貞女。賢愚成敗、靡不載叙。悪以誡世、善以示後」と[11]。文献の記載以外では、秦都の咸陽の三号宮殿建築において多くの壁画の痕跡が発見され、その内容には車馬・人物・建物・動物・植物・神霊怪異・幾何学文様などがあった[12]。また漢都の長安の長楽宮四号宮殿でも壁画の残塊がかつて発見されており、その大部分は幾何学図案であった[13]。

要するに、墓葬の壁画・画像石・画像塼に現れる各種図像のほとんどは現実社会に存在しているのであり、これらの図像を複製・統合し、墓室内に編成・配列することは、墓室を現実的な居室に余すことなく模倣する目的を達成してほしいのであった。

以下では、昇仙の問題について検討を付け加えておく。

漢代の墓葬装飾には、西王母や羽人など神仙信仰に関連する図像が多くある。それゆえ多くの研究者は、これらの図像は当時の人々が抱いていた死後昇仙なる観念を反映しているのだと推定している。また、昇仙するのは死者ではなく死者の霊魂だと考える研究者もある。

『史記』孝武本紀の記載にすでに注意している研究者もある。そこには、前漢の武帝が北巡朔方を行い帰り道に橋山の黄帝塚を祭った際、「上曰「吾聞黄帝不死、今有塚、何也？」或対曰「黄帝已仙上天、群臣葬其衣冠」」と記されている。秦の始皇帝と漢の武帝が、仙人を求め仙人になるべ

く最も熱を上げたことは周知のことである。武帝は黄帝が仙人になったことを知っており、それゆえ黄帝の塚を目にした際、疑問を発している。このくだりの対話は短いものの、しかし社会の最上層にある名士の口から出ているだけに、その真実性には疑問の余地がなく、それゆえ漢人の神仙に対する理解を最もよく説明し得ているのである。つまり生者だけが仙人になれるのであり、いったん死んでしまうと墳墓に埋葬されなければならず、当然ながら成仙と無関係になる。人は死ぬと仙人にはなれず、死人の霊魂は当然のこと仙人にはなれないのである。

死者は昇仙できないとすれば、墓葬装飾に神仙図像が大量に存在するのは一体なぜなのだろうか。ここで上記した論述に戻る必要がある。すなわち、これら西王母や羽人などの姿は、単に神仙思想に関する現実社会の図画が墓葬内に複製されたものに過ぎないのである。この他、いわゆる「墓主騎鹿昇仙」や「墓主雲車昇仙」などの図像、つまり鹿に騎ったり雲車に乗ったりする（または龍を御す）のは、被葬者ではありえず、また被葬者の霊魂でもありえない。彼らは人々の観念中に存在する成仙した人物に属するのである。では被葬者とその霊魂はというと、依然として冥界の家にとどまり、陽界と同様の暮らしを送っているのである。

4　殮服－被葬者の遺骸を朽ちさせず保護する

先秦期の絞衾制であれ、漢代の玉衣制であれ、殮服を使用する目的の一つは、被葬者の遺骸を朽ちさせず保護することであった。考古学的調査においてすでに、保存状態が比較的良好な漢代の遺骸が数例発見されている。中でも最も有名であるのが、湖南省長沙にある馬王堆一号墓の女性遺骸であり、ここでは絞衾制が採用されている。玉衣を身に付けて遺骸を朽ちないようにすることは、文献にしか記載されていない。たとえば『後漢書』劉玄劉盆子列伝には、「（劉盆子は軍隊を率いる）発掘諸陵、取其宝貨、遂汚辱呂后屍。凡賊所発、有玉匣殮者率皆如生、故赤眉得多行淫穢」とある。またその他の記録もあり、『漢書』外戚伝下には、平帝の在位時に権勢を握った王莽が、元帝の傅皇后の陵墓を掘ることを奏上しており、「既開傅太后棺、臭聞數里」とある。傅皇后は玉衣を身に付けていたが、その遺骸を朽ちさせず有効に保護できなかったわけである。

墓葬内で死者の遺骸がよく保護され得たのは、殮服によるだけでなく、棺槨などの葬具やその他の施設によるものでもあった。被葬者の遺骸を良好に保護し朽ちないようにしない限り、被葬者の霊魂が依り付くところはありえなかったようである。遼寧省蓋県の九壠１号後漢墓の塼銘には、「嘆曰死者魂帰棺槨無妄飛揚而無憂万歳之后乃復会」とあり[14]、南京仙鶴山５号孫呉墓の塼銘にも「平原広敞神霊安居」とある[15]。考古学的発掘で出土し貴重な文献史料とされるこれら漢・魏の墓塼銘により、被葬者の霊魂は他所に居るのではなく、まさに墓中にあることが十分に証明されているのである。

5　副葬品の組み合わせ－生者の生活必需品の模擬

中国の古代墓葬を通観すると、時期を問わず副葬品が少なからずあるが、特に秦漢の墓葬の副葬

品は、その種類および数量の上で一つのピークに達した。これらの副葬品のほとんどに、日常生活の衣・食・住・行などの方面に使用されるものは全て含み、何でもあるといえる。魏晋期に薄葬が実行されて以来、墓葬規模の縮小に従って、副葬品の種類と数量も減少した。それでも、副葬品には装身具・実用具（あるいは明器）・陶質模型の明器・陶俑など、いくつかの大別品が含まれていた。副葬品の象徴的意義から見ると、秦漢期と大きな相違は何もなく、「厨房」や「厩舎」、「婢」や「妾」もある。中国古代の墓葬において、副葬品の各種物品が特に重視されたのは、被葬者の霊魂が冥界の家において陽界と同じ生活を引き続き享受できるようにするためであった。

註

1　韓国河「試論漢晋時期合葬礼俗的淵源及発展」『考古』1999 年 10 期。
2　焦南峰「試論西漢帝陵的建設理念」『考古』2007 年 11 期。
3　趙化成「秦始皇陵園布局結構的再認識」『遠望集―陝西省考古研究所華誕四十周年紀念文集』（下）、陝西人民美術出版社、1998 年。
4　俞偉超「漢代諸侯王与列侯墓葬的形制分析―兼論“周制”、“漢制”与“晋制”的三階段制」『先秦両漢考古学論集』文物出版社、1985 年。
5　黄佩賢『漢代墓室壁画研究』文物出版社、2008 年。
6　俞偉超「中国画像石概論」中国画像石全集編輯委員会編『中国画像石全集』1 山東漢画像石、山東美術出版社・河南美術出版社、2000 年。
7　信立祥「中国古代画像塼概論」中国画像塼全集編輯委員会編『中国画像塼全集』四川漢画像塼、四川出版集団・四川美術出版社、2006 年。
8　宮徳杰・李福昌「山東臨朐西晋、劉宋紀年墓」『文物』2002 年 9 期。
9　叢徳新・羅志宏「重慶巫山県東漢鎏金銅牌飾的発現与研究」『考古』1998 年 12 期。賀西林「漢代芸術中的羽人及其象徴意義」『文物』2010 年 7 期。楊愛国「漢代文物銘文所見吉祥語初論」中国社会科学院考古研究所・広州市文物考古研究所編『西漢南越国考古与漢文化』科学出版社、2010 年。
10　安郷県文物管理所「湖南安郷西晋劉弘墓」『文物』1993 年 11 期。
11　蕭統選・李善注（国学基本叢書簡編）『文選』巻十一、商務印書館。
12　陝西省考古研究所『秦都咸陽考古報告』科学出版社、2004 年。
13　中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊「西安市漢長安城長楽宮四号建築遺址」『考古』2006 年 10 期。
14　許玉林「遼寧盖県東漢墓」『文物』1993 年 4 期。
15　南京市博物館・南京師範大学文物与博物館学系「南京仙鶴山孫呉、西晋墓」『文物』2007 年 1 期。

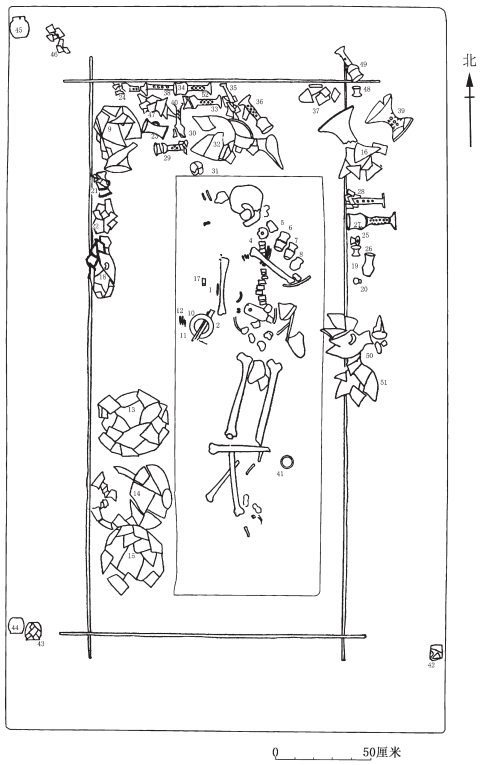


図 1-1 山東省鄒県野店 M51 平面図（1/40）

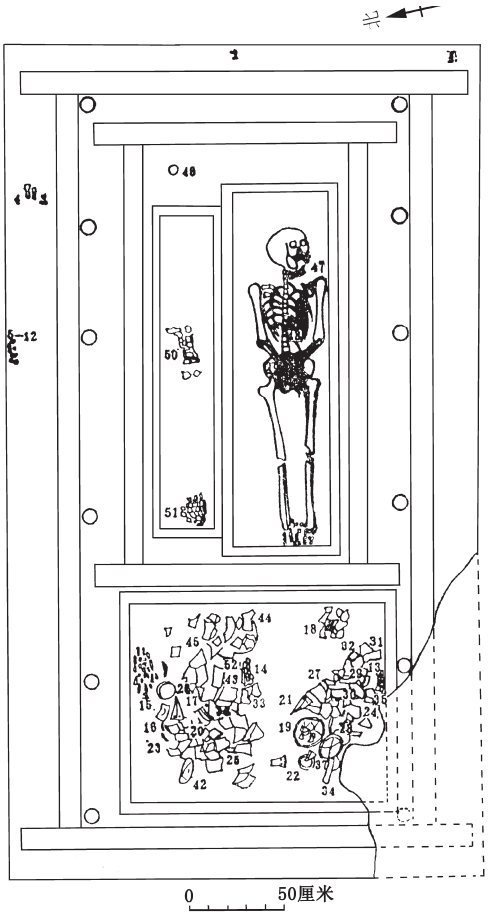


図 1-2 山東省臨朐県西朱封 M1 平面図（1/40）

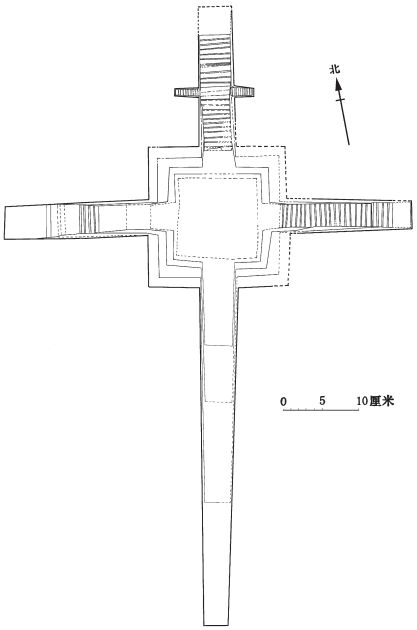


図 1-3 河南省安陽市侯家庄西北岡 HPKM1500 平面図（1/10 ）

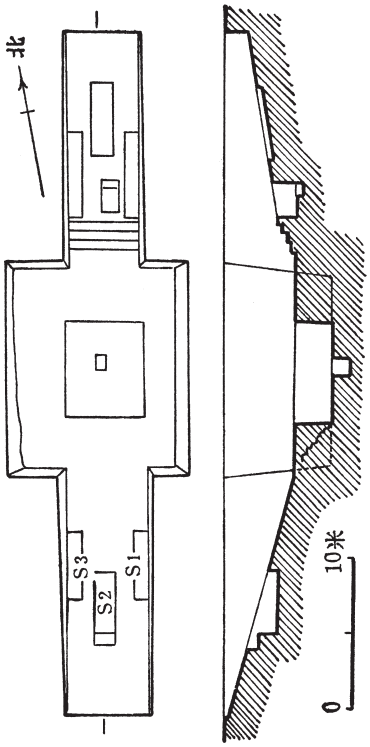


図 1-4 河南省安陽市武官村大墓平・断面図（1/500）

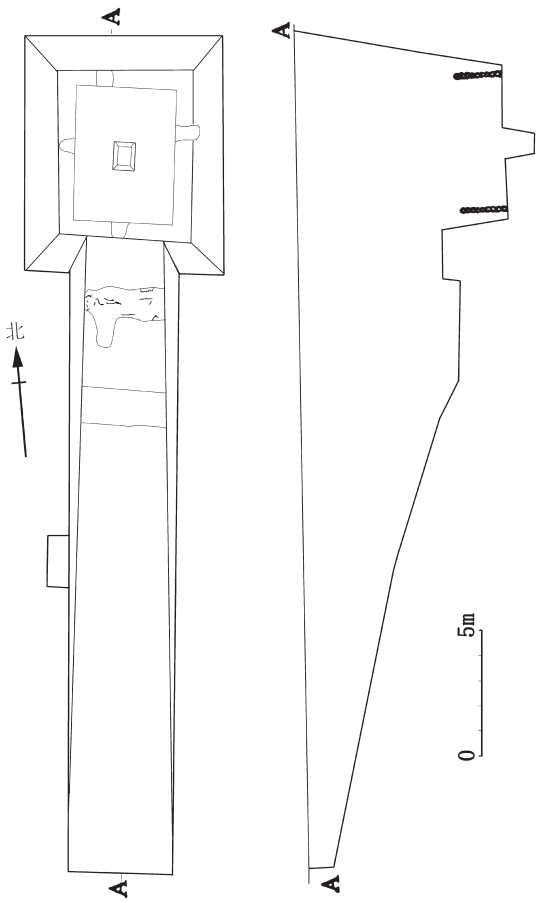


図 1-5 河南省安陽市武官北地 M260 平・断面図（1/1,500）

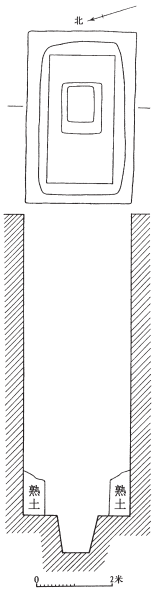


図 1-6 河南省安陽市郭家庄 M160 平・断面図（1/200）

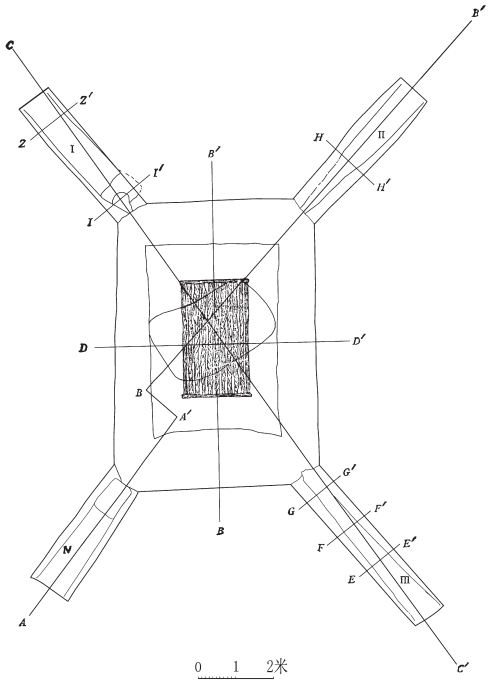


図 1-7 北京市琉璃河 M1193 平面図（1/200）

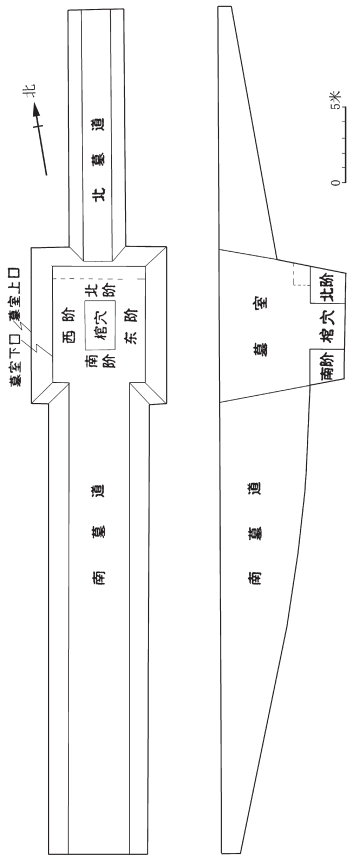


図 1-8 河南省浚県辛村 M1 形制概念図（1/500）

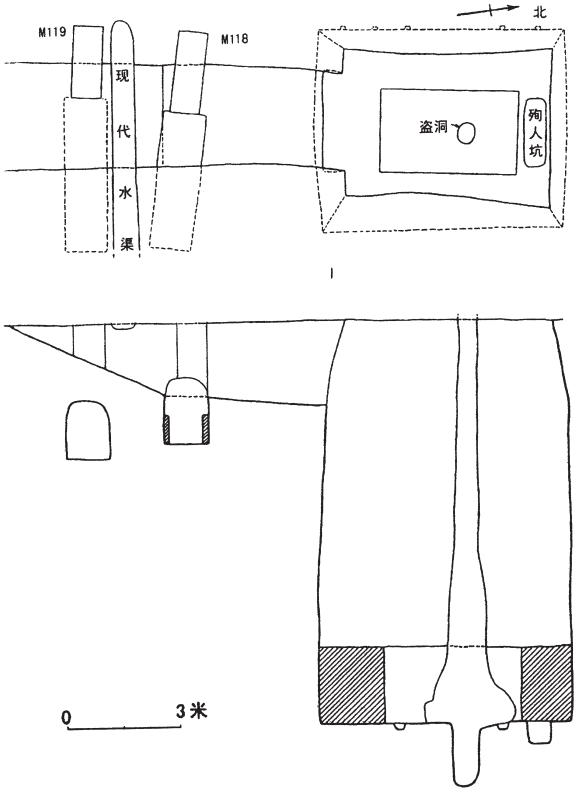


図 1-9 山西省曲沃北趙村 M114 平・断面図（1/200）

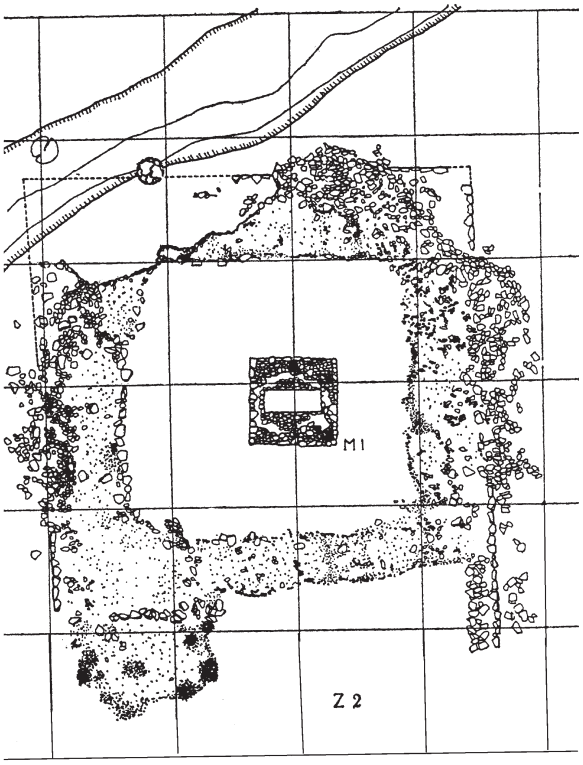


図 1-10 遼寧省凌源牛河梁第二地点二号積石塚平面図

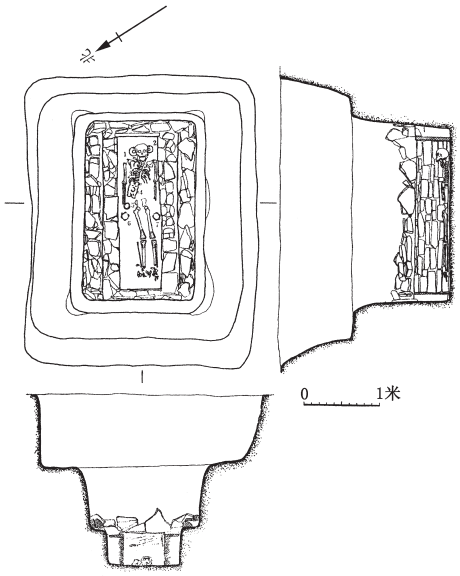


図 1-11 遼寧省凌源牛河梁第五地点一号塚中心大墓（M1）平・断面図（1/100）

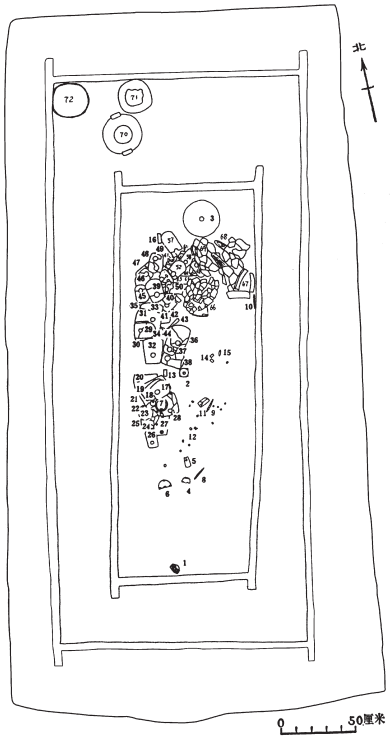


図 1-12 浙江省余杭市汇観山 M4 平面図（1/50）

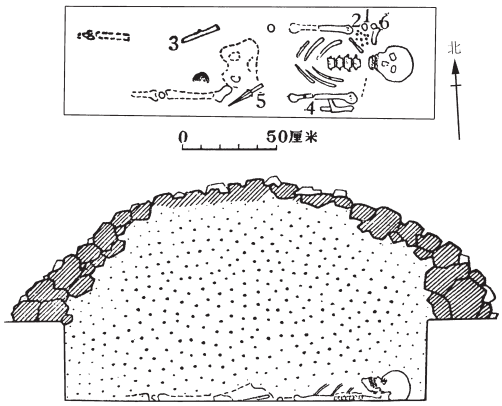


図 1-13 河北省平泉 M6 平・断面図（1/40）

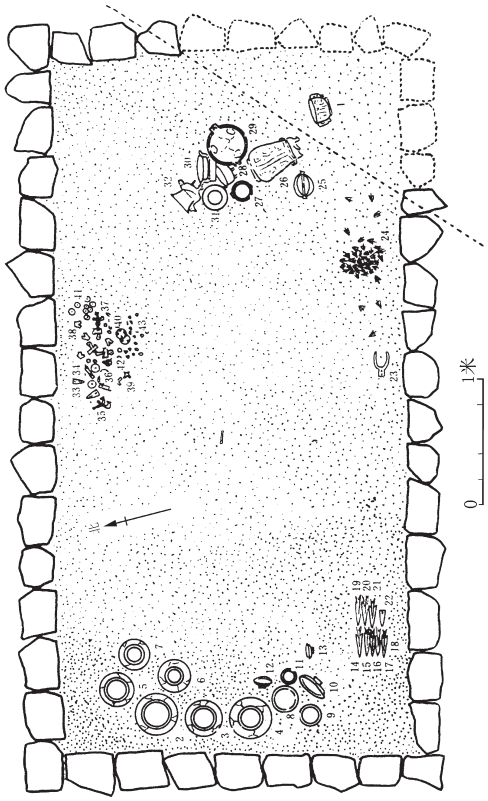


図 1-15 江蘇省丹徒大港母子墩墓底平面図（1/60）

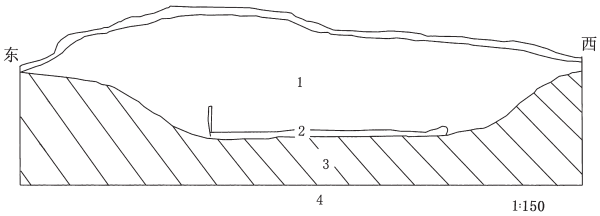


図 1-14 江蘇省丹徒大港煙墩山 M2 断面図

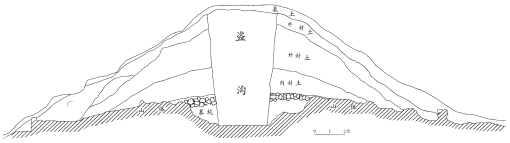


図 1-17 江蘇省蘇州市真山 D9M1 墳丘南北向断面図（1/500）

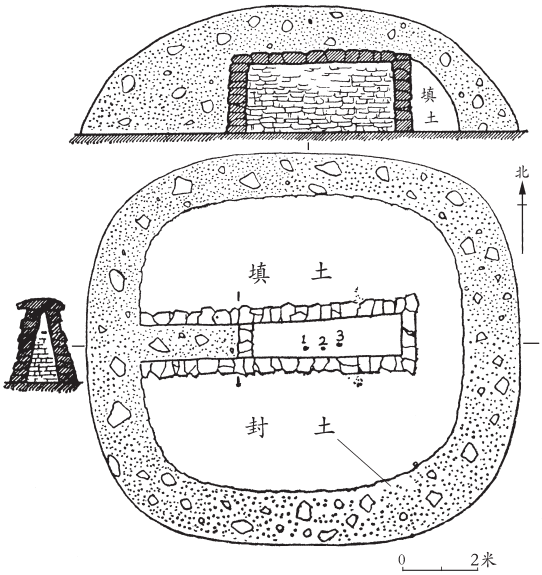


図 1-16 江蘇省宜興丁蜀南山 M2 平・断面図（1/200）

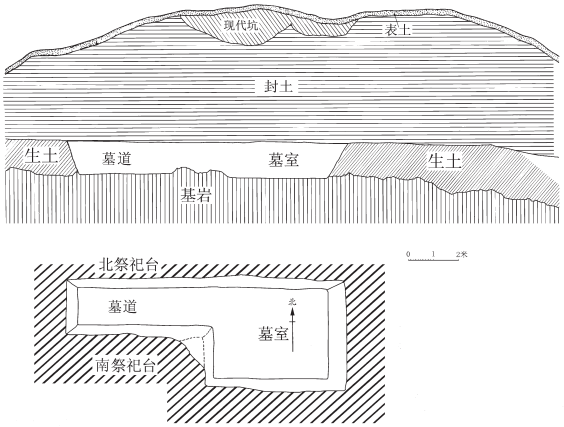


図 1-18 江蘇省丹徒北山頂墓平・断面図（1/300）

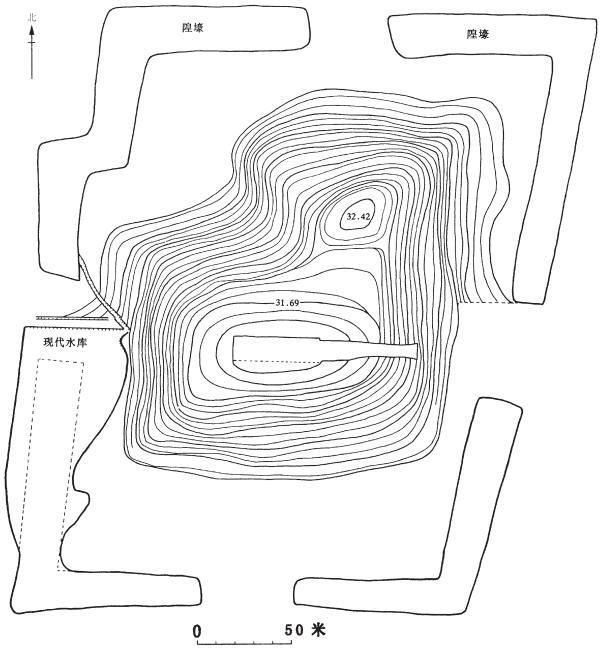


図 1-19 浙江省紹興県印山墓隍壕平面図（1/4,000）

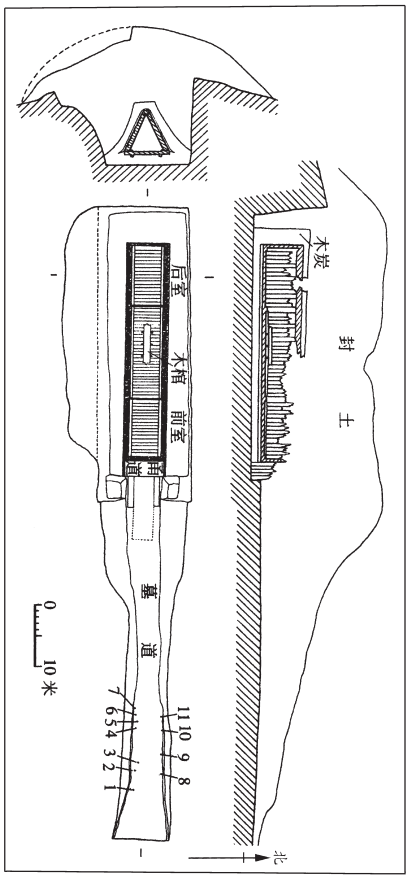


図 1-20 浙浙江省紹興県印山墓墳丘・墓坑
平・断面図（1/1,200）

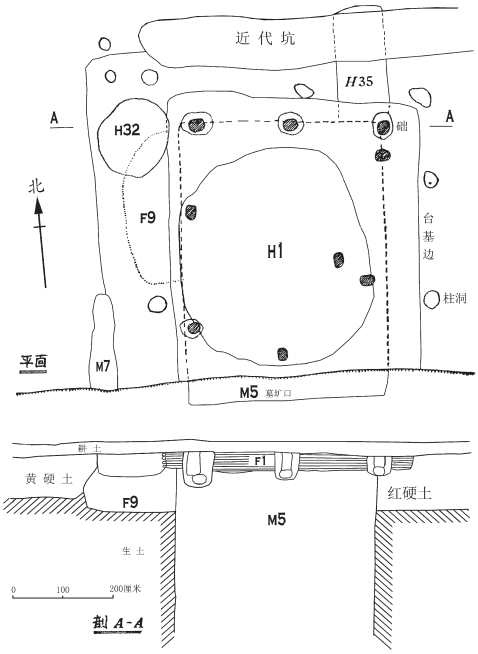


図 1-21 河南省安陽市小屯 5 号墓（婦好墓）
墓上建築遺址平・断面図（1/150）

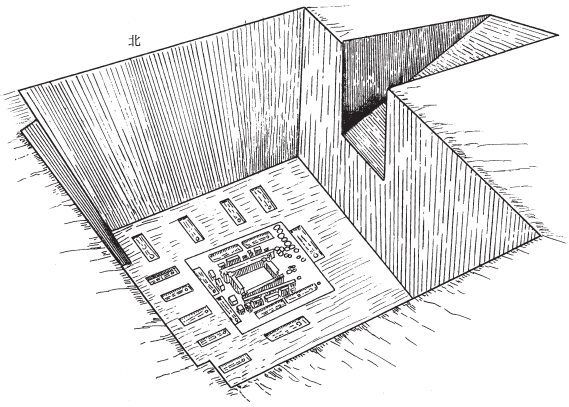


図 1-22 河南省固始侯古堆 M1 概念図

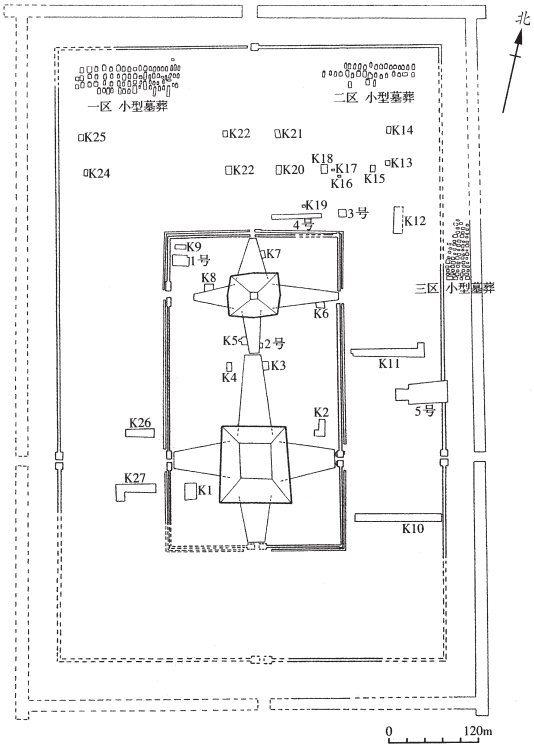


図 1-23 陝西省咸陽市周陵鎮秦王陵園遺迹分布図
(1/10,000)

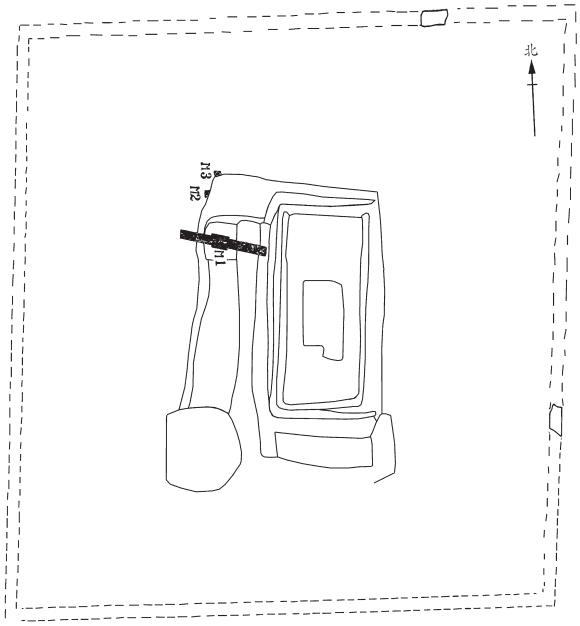


図 1-25 河北省邯鄲市陳三陵村三号陵平面布局図

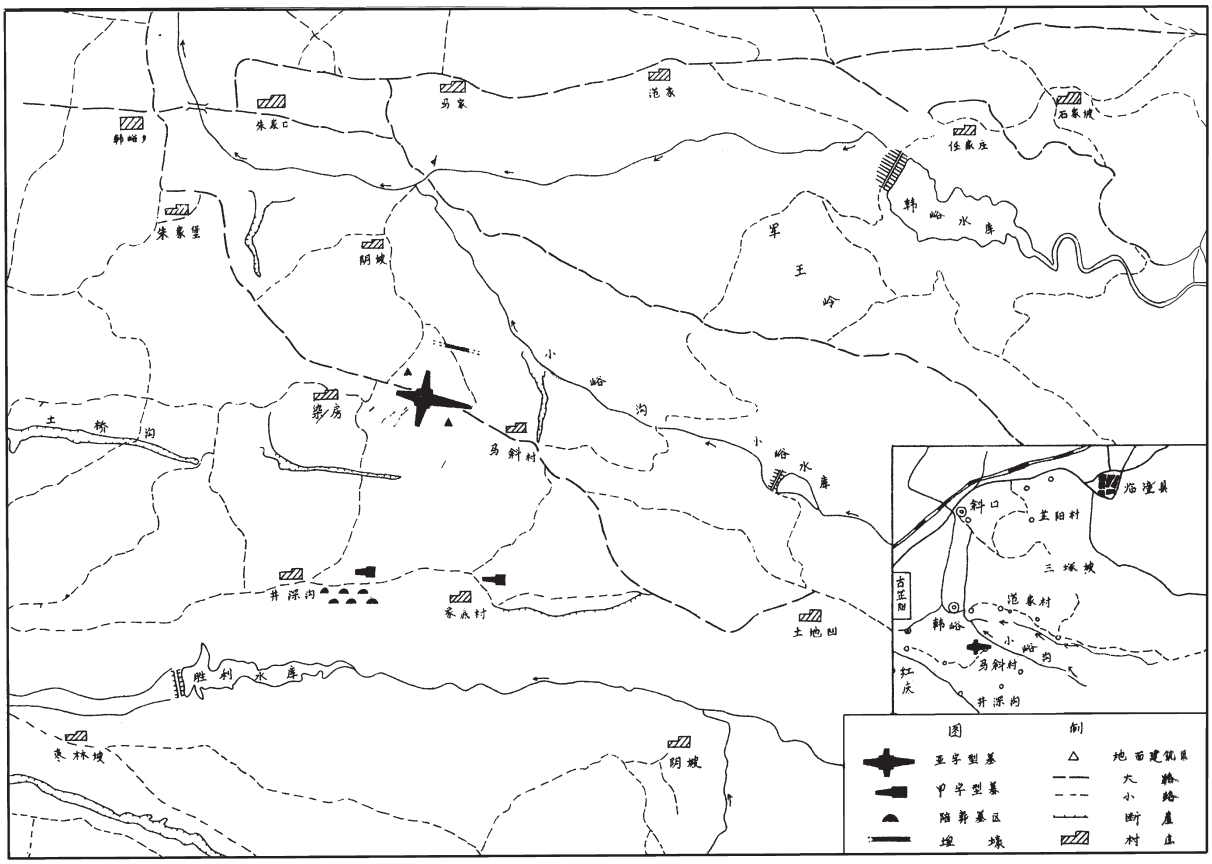


図 1-24 陝西省臨潼芷陽秦東陵第四号陵園布局概念図

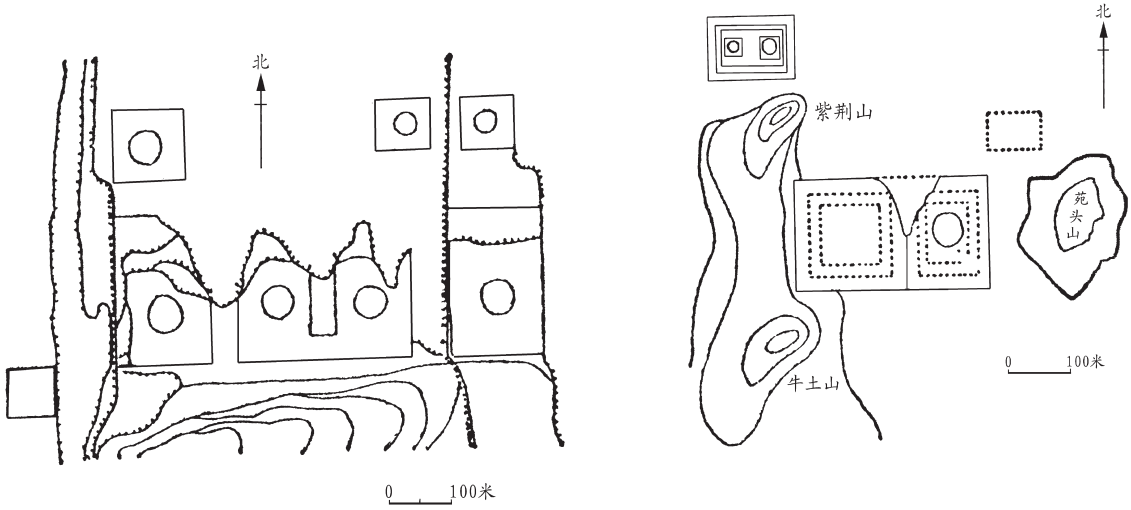


図 1-26 山東省臨淄斉“四王塚”、“二王塚”分布概念図（1/12,000）

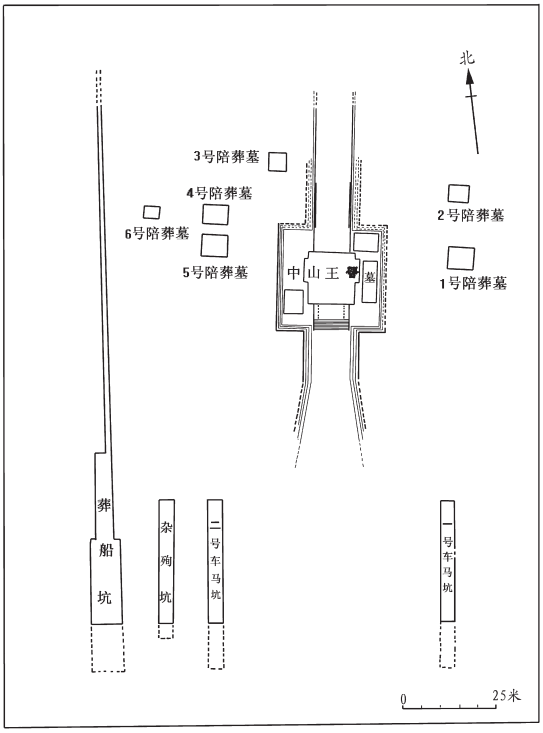


図 1-27 河北省平山中山国王 M1 平面図（1/2,000）

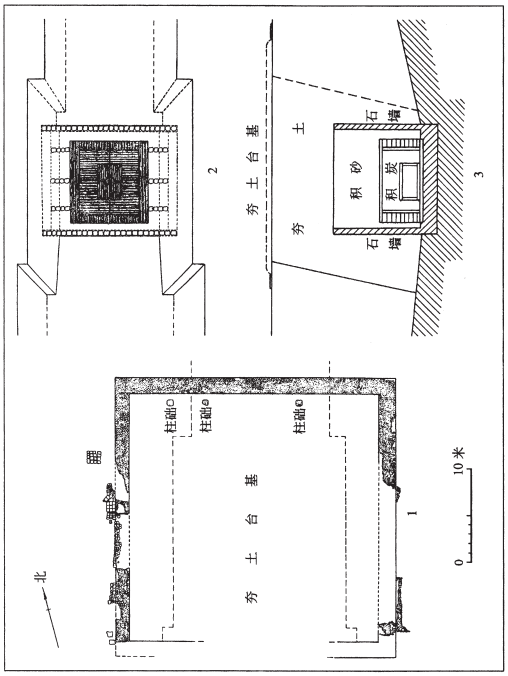


図 1-28 河南省輝県固囲村 M2 平・断面図（1/800）

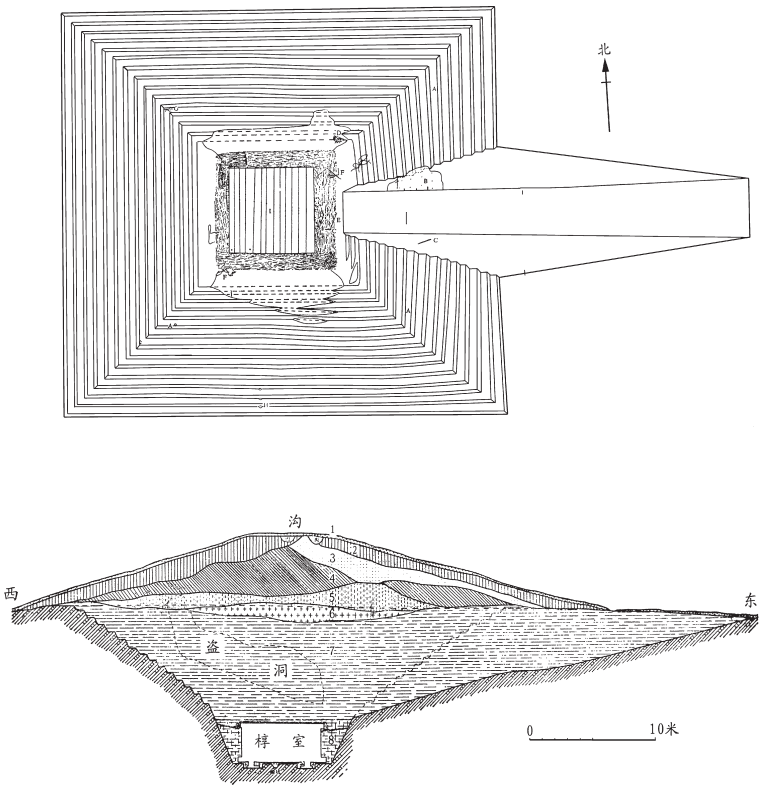


図 1-29 湖北省荊門包山 M2 平・断面図（1/600）

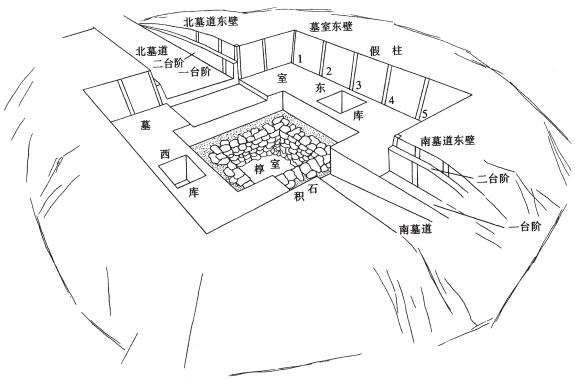


図 1-30 河北省平山中山国王 M6 透視概念図

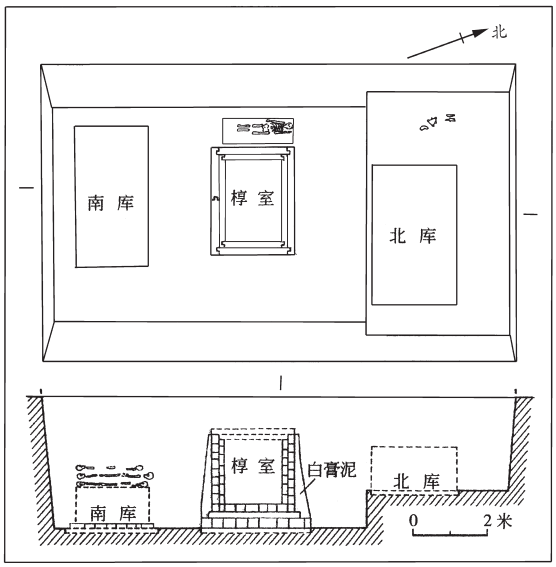


図 1-31 山東省沂水県劉家店子 M1 平・断面図（1/200）

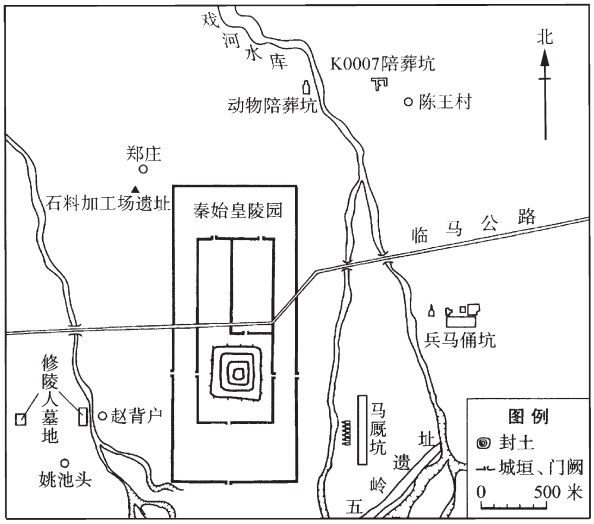


图 2-1　秦始皇陵陵区遗迹分布图（1/6,000）

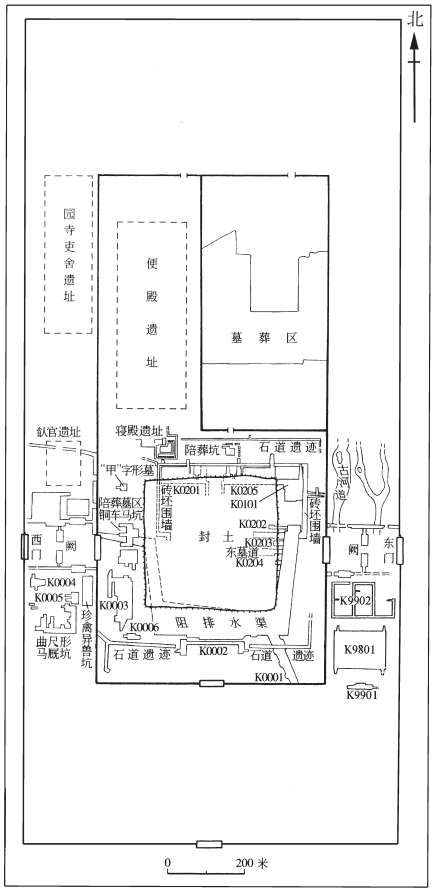


图 2-1　秦始皇陵陵園遺址平面図（1/2,000）

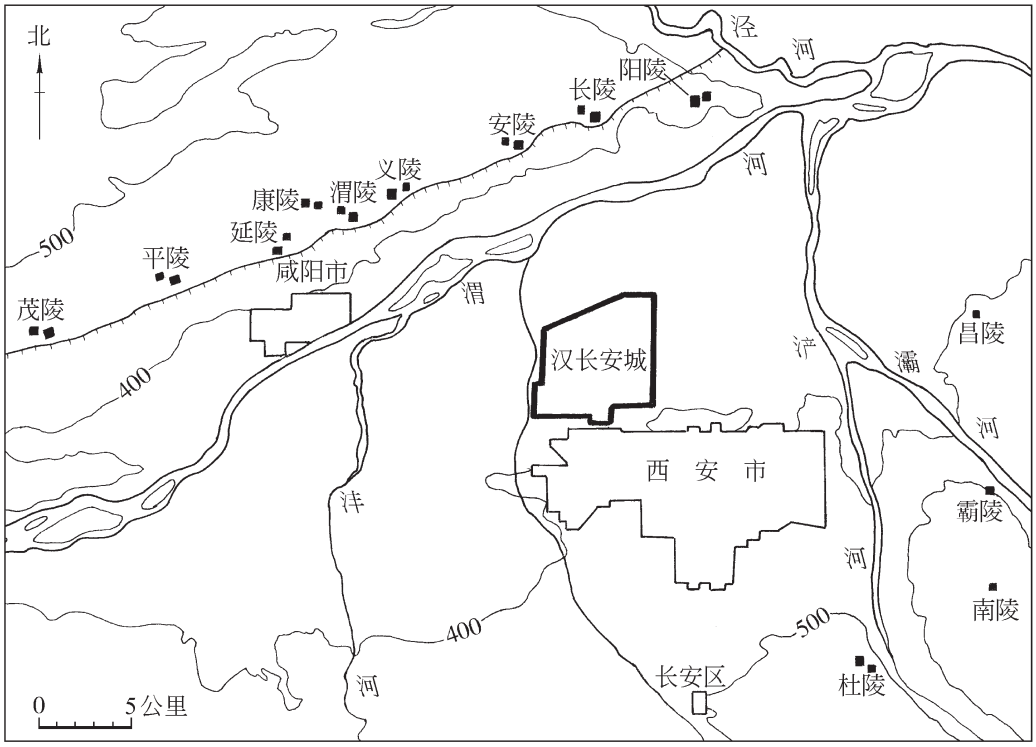


图 2-3　西漢帝陵分布図（1/4,0000）

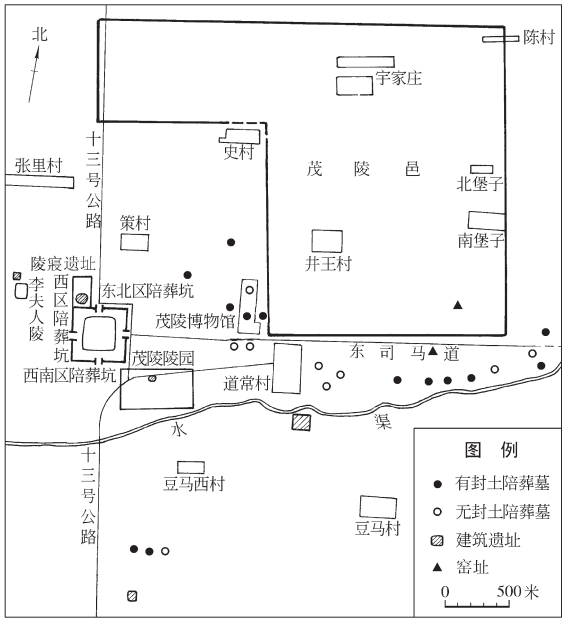


图 2-4 西漢武帝茂陵陵区遺迹分布図（1/6,000）

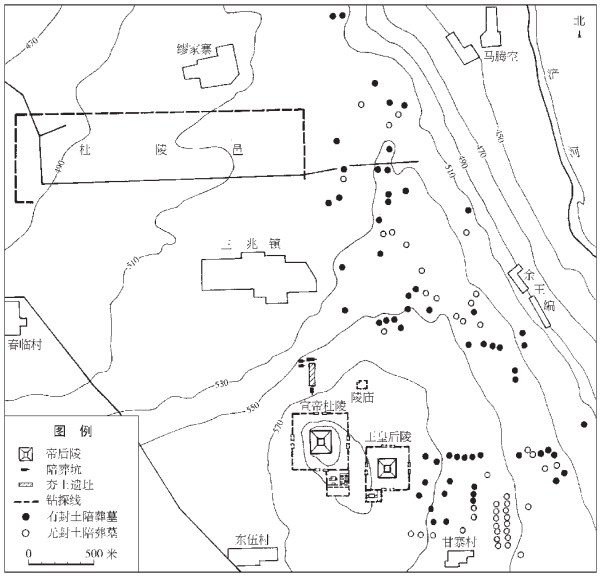


図 2-5 西漢宣帝杜陵陵区遺迹分布図（1/6,000）

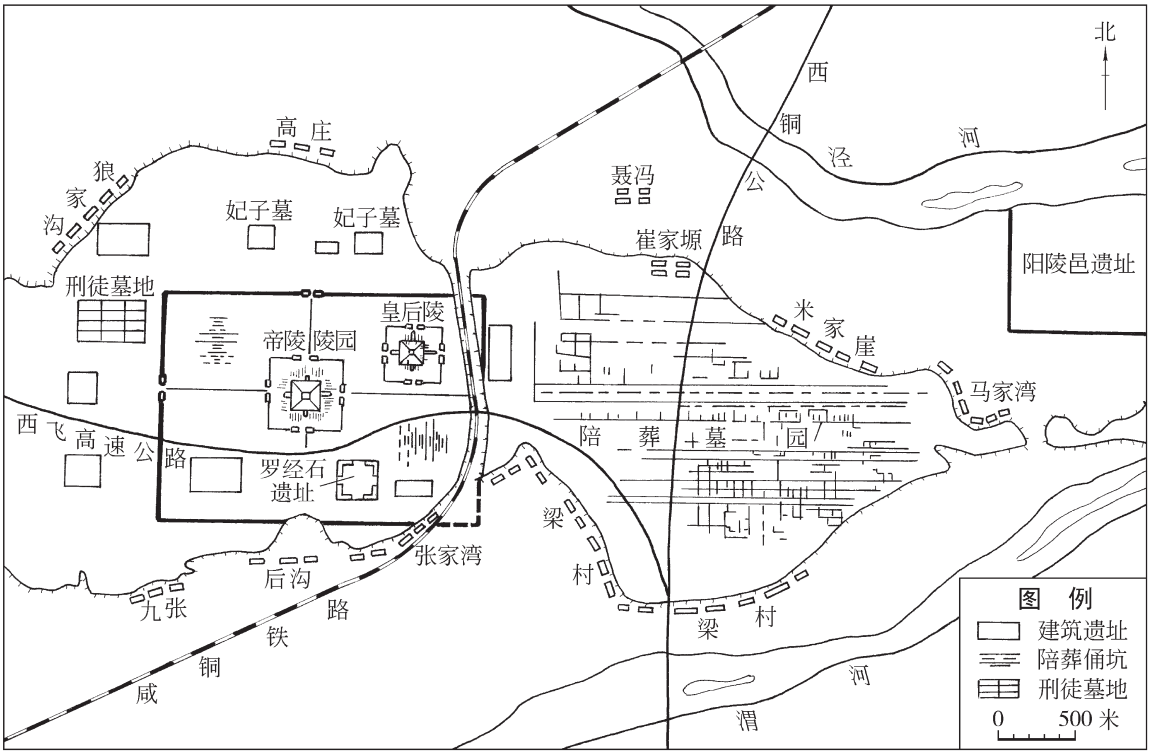


図 2-6 西漢景帝陽陵陵区遺迹分布図（1/5,000）

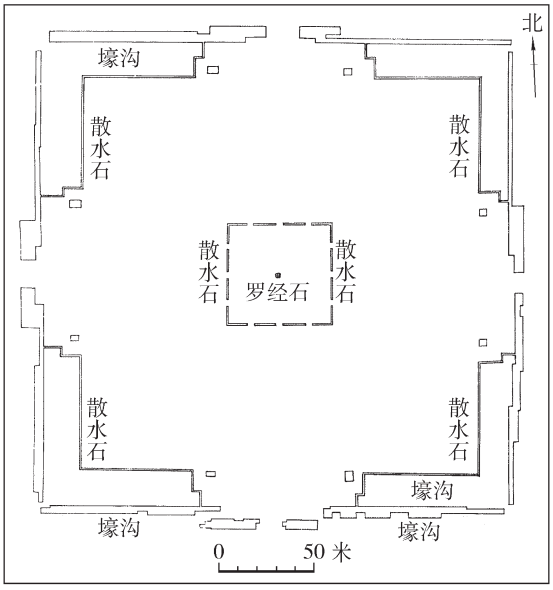


图 2-7 漢景帝陽陵羅経石遺址平面図（1/4,000）

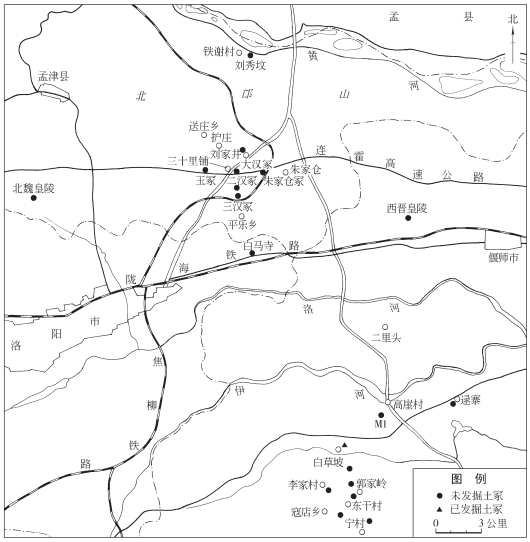


图 2-8　東漢帝陵分布図（1/5,000）

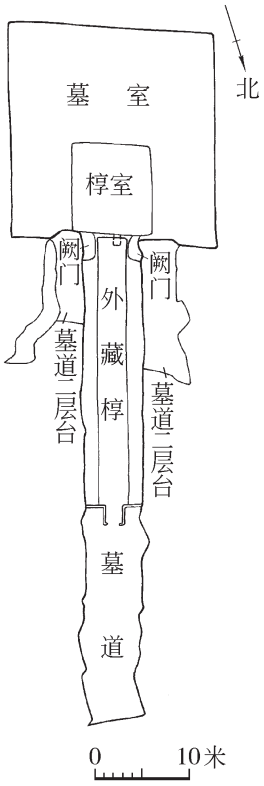


图 2-9 山東省長清双乳山 1 号墓平面図（1/800）

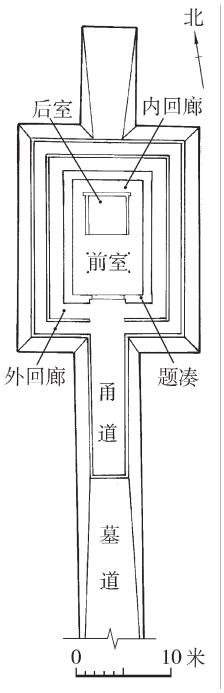


図 2-10 北京市大葆台 1 号墓平面図（1/800）

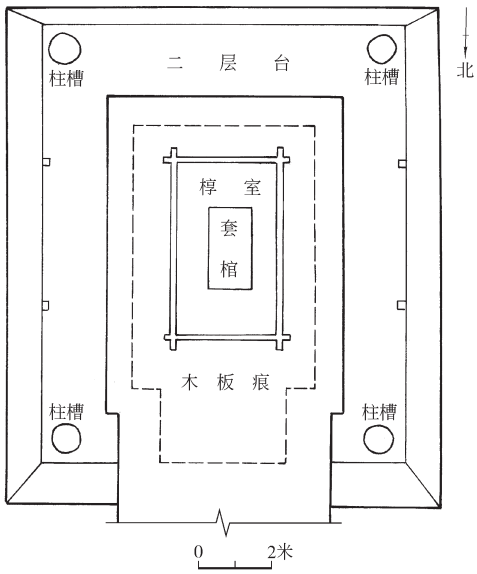


図 2-11　河北省石家庄市小沿村漢墓平面図（1/200）

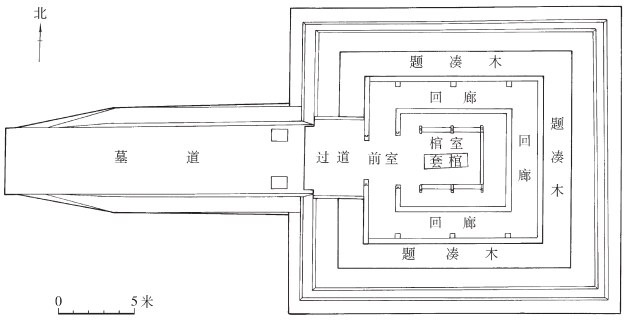


図 2-12　湖南省長沙市象鼻嘴 1 号墓平面図（1/500）

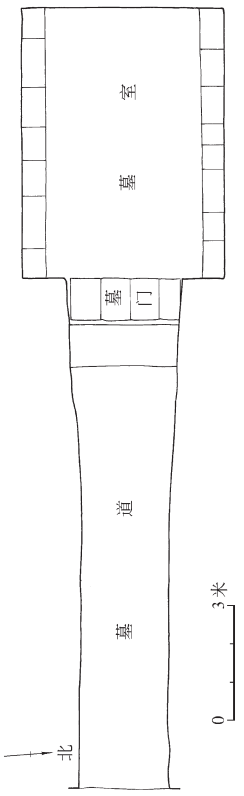


図 2-13　河南省永城窑山 2 号墓平面図（1/200）

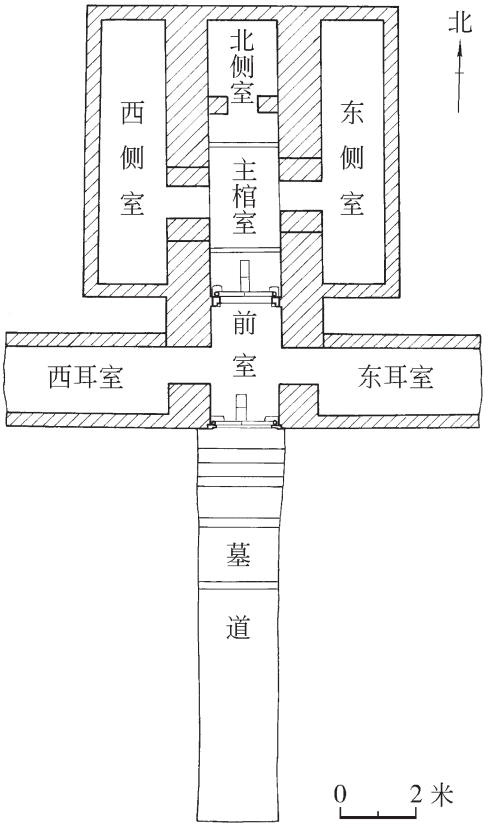


図 2-14　広東省広州市象崗山漢墓平面図（1/200）

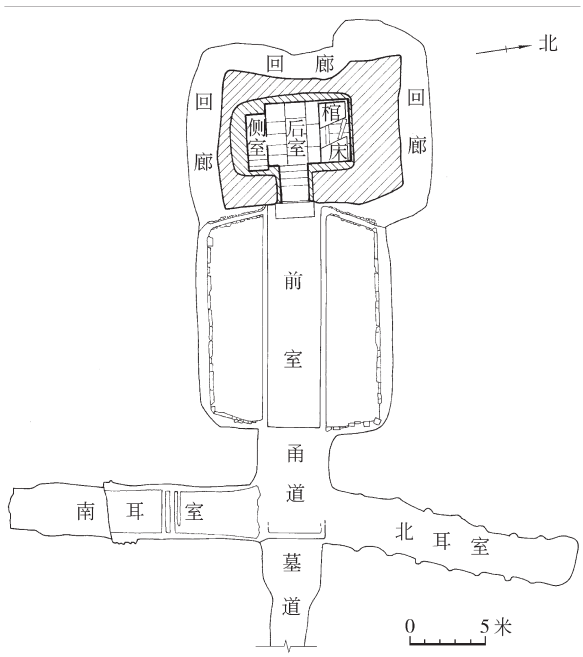


図 2-15　河北省満城陵山 1 号墓平面図（1/500）

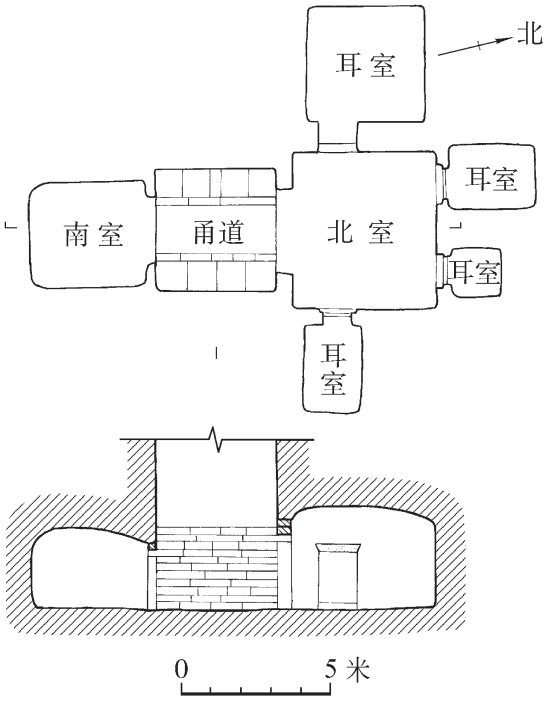


図 2-16　山東省昌楽東圏 1 号墓平・断面図（1/250）

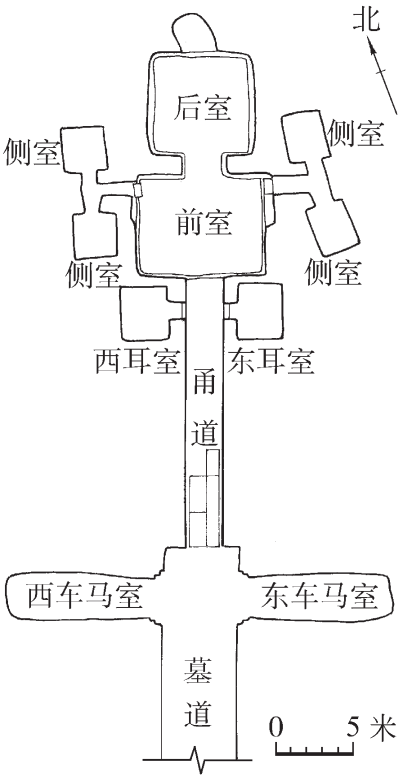


図 2-17　山東省曲阜九龍山 3 号墓平面図（1/500）

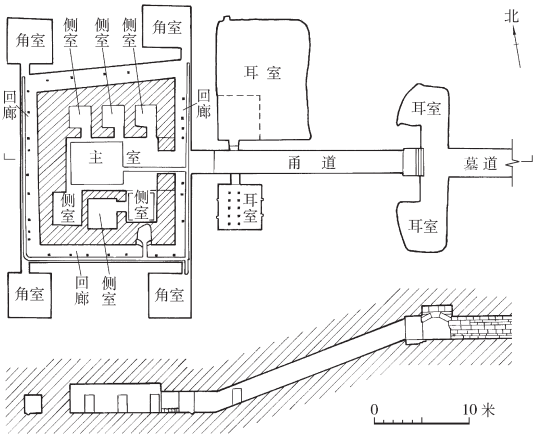


図 2-18　河南省永城保安山 1 号墓平・断面図（1/800）

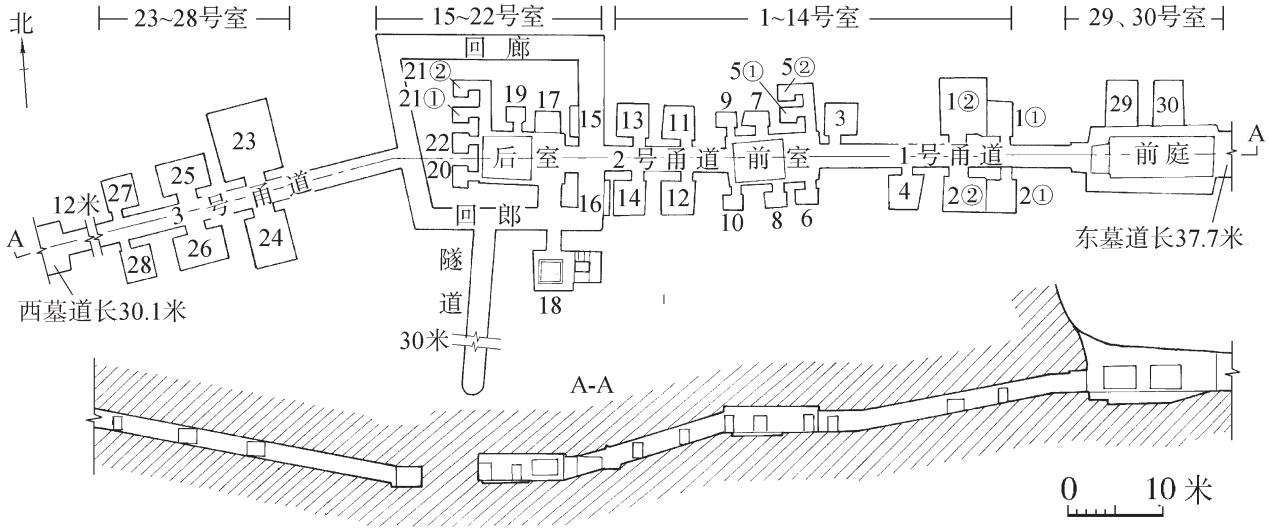


図 2-19　河南省永城保安山 2 号墓平・断面図（1/800）

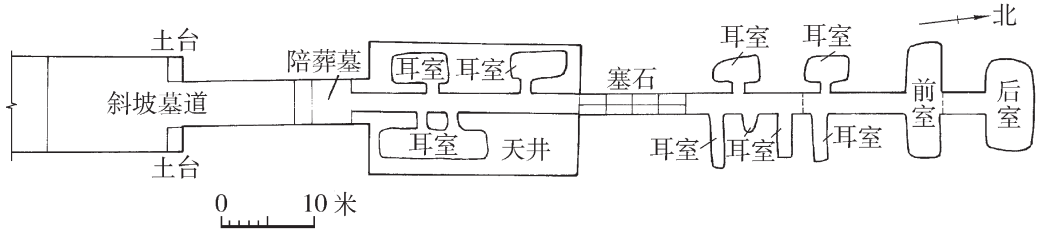


図 2-20　江蘇省徐州市獅子山漢墓平面図（1/800）

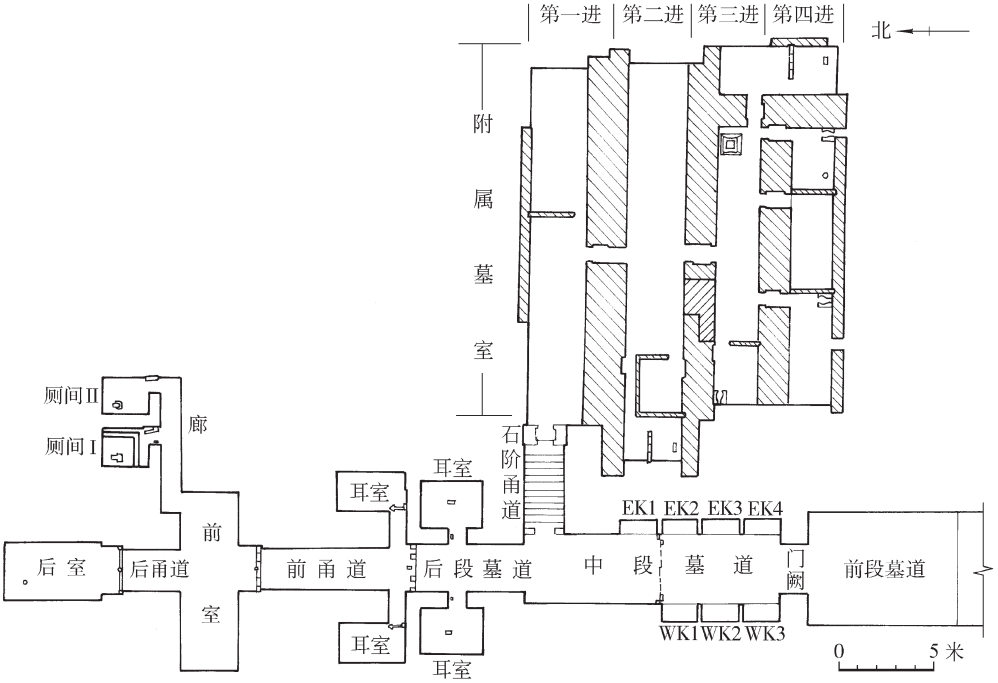


图 2-21　山東省曲阜九龍山 3 号墓平面図（1/400）

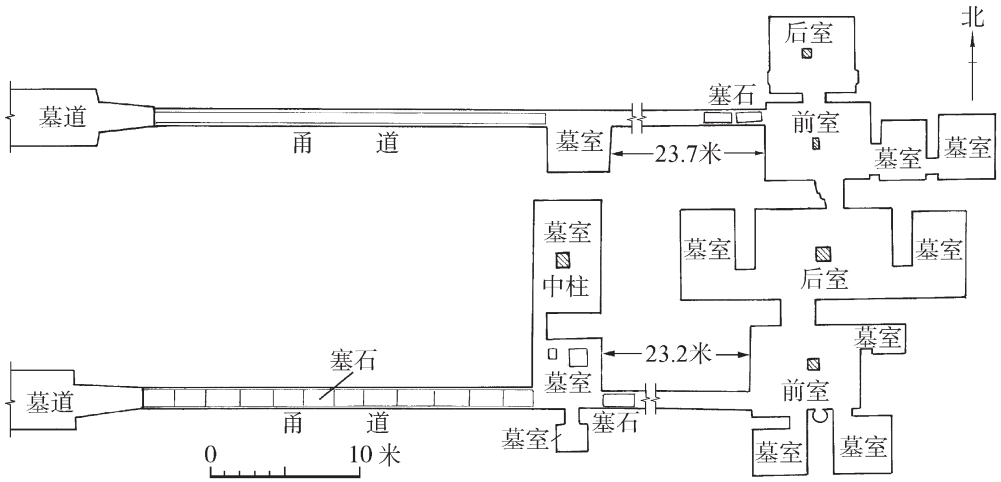


图 2-22　江蘇省徐州市亀山 2 号漢墓平面図（1/500）

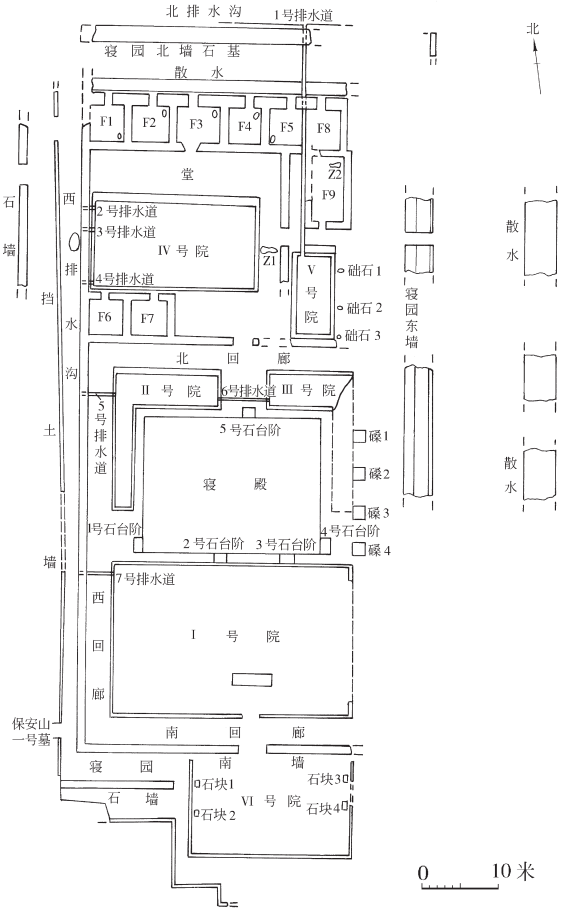


図 2-23　河南省永城保安山梁孝王寝園遺址平面図（1/1000）

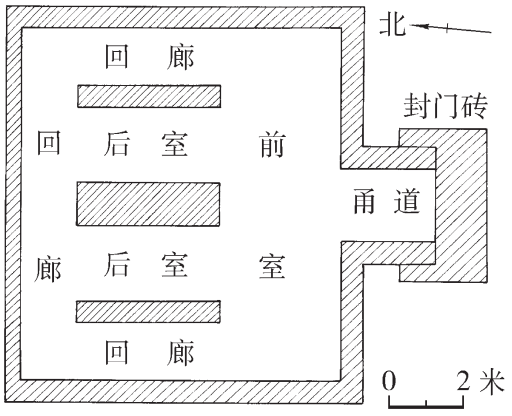


図 2-24　江蘇省邗江甘泉 2 号墓平面図（1/200）

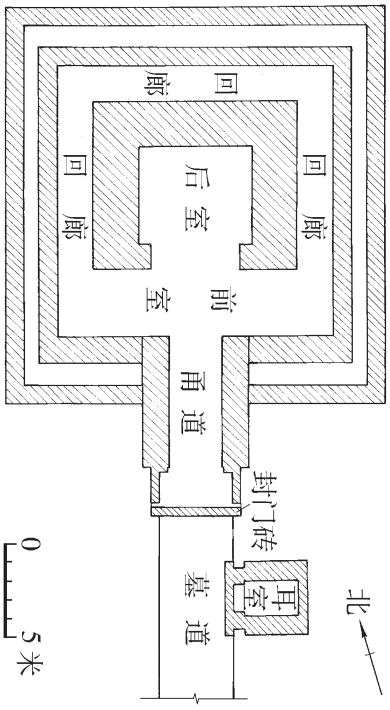


図 2-25　河北省定県北庄漢墓平面図（1/400）

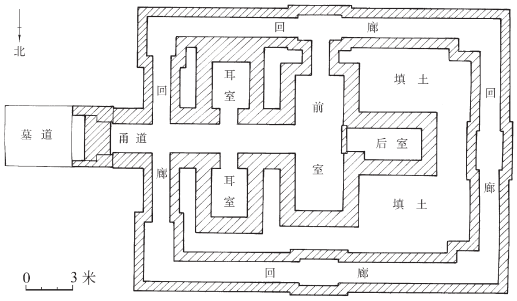


図 2-26　河南省淮陽北関 1 号墓平面図（1/500）

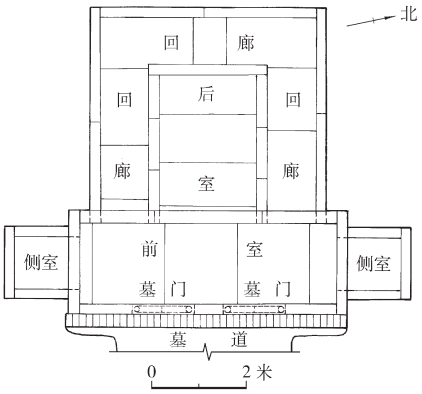


図 2-27　山東省済寧市普育小学漢墓平面図（1/1500）

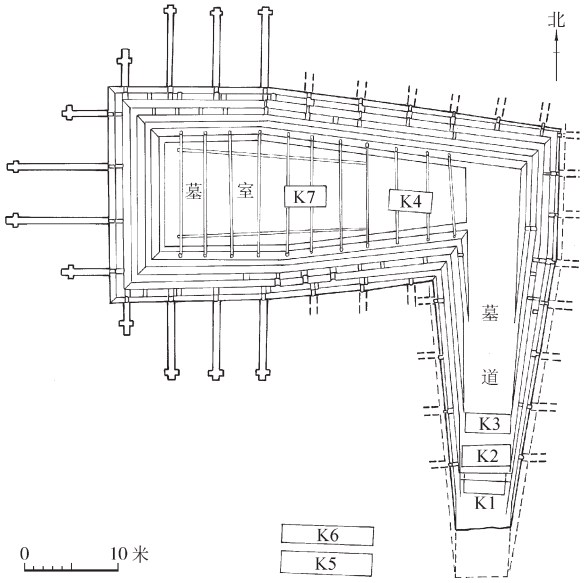


図 2-28　西省咸陽市楊家湾 4 号墓平面図（1/800）

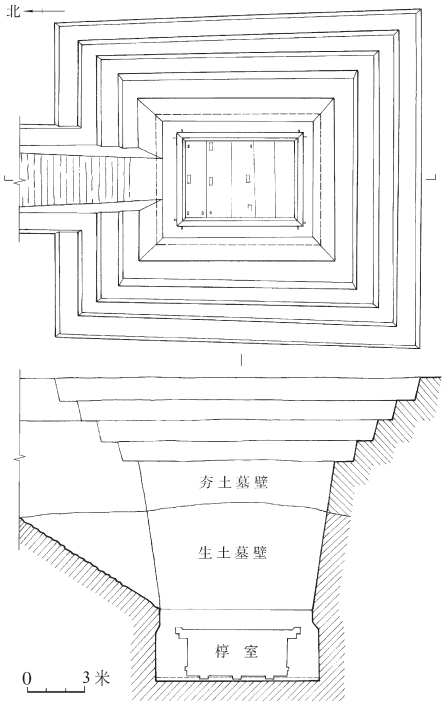


図 2-29　湖南省長沙市馬王堆 1 号墓平、断面図（1/400）

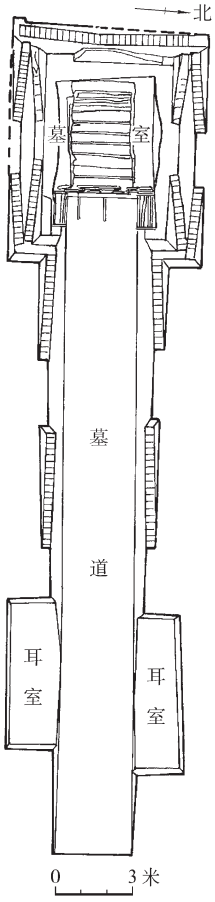


図 2-30　湖南省沅陵虎溪山 1 号墓平面図（1/300）

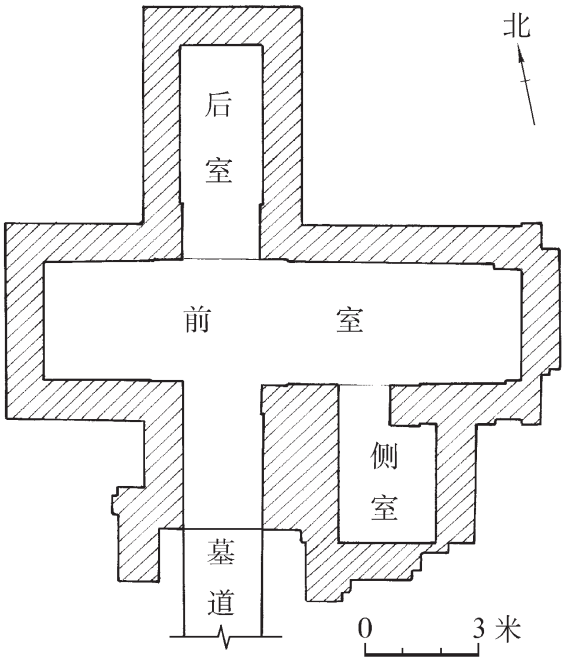


図 2-31　河南省洛陽市白馬寺漢墓平面図（1/200）

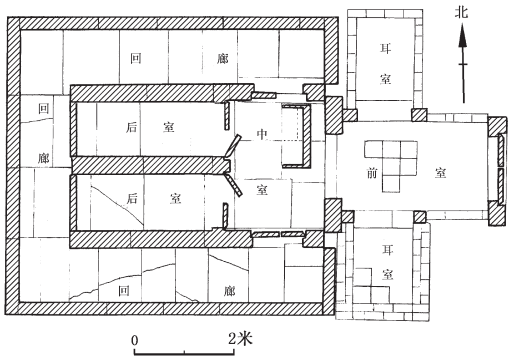


図 2-32　河南省唐河新店漢墓平面図（1/150）

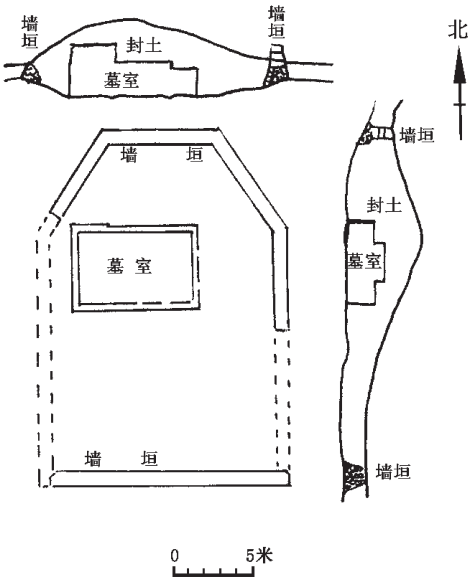


図 2-33　江蘇省邳県青龍山漢墓墓室、墳丘与墓園
平・断面図（1/50）

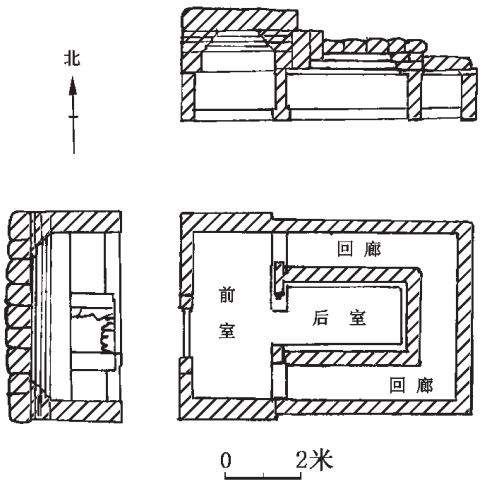


図 2-34　江蘇省邳県青龍山漢墓平断面図（1/20）

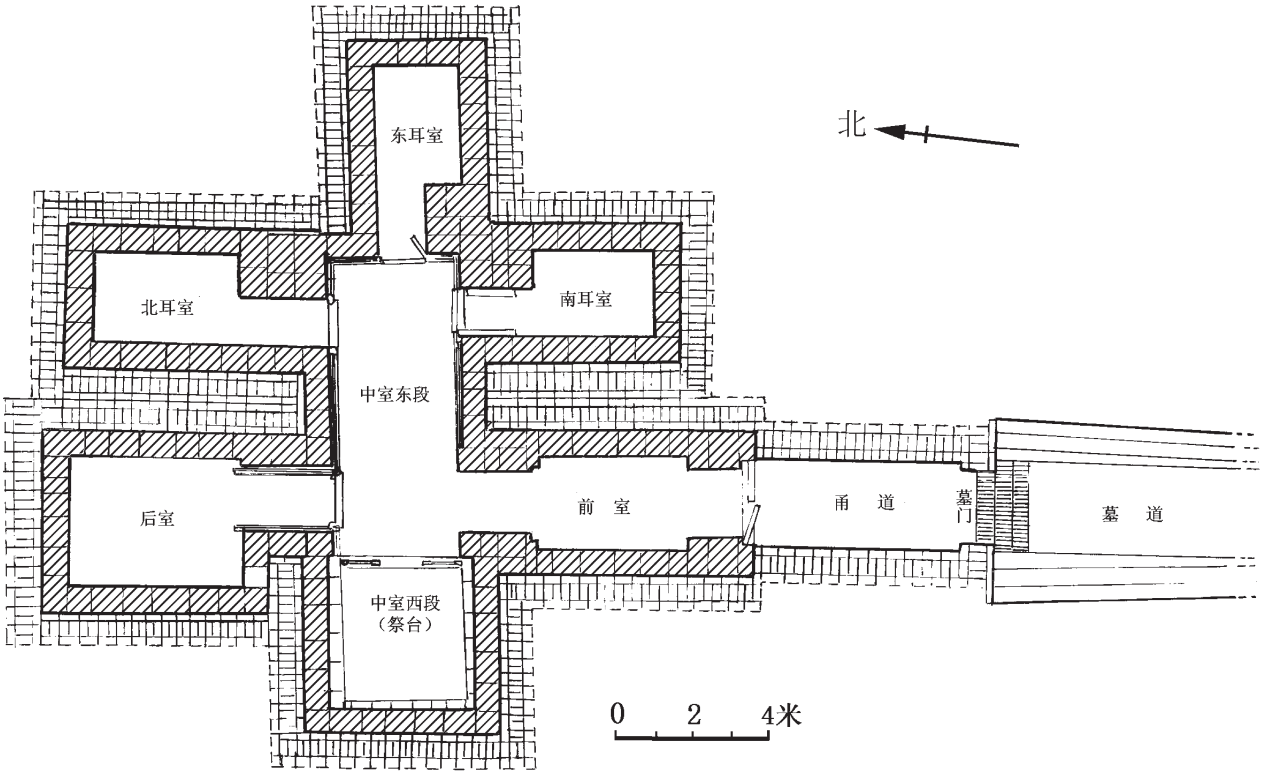


图 2-35　河南省密県打虎亭 1 号漢墓平面図（1/200）

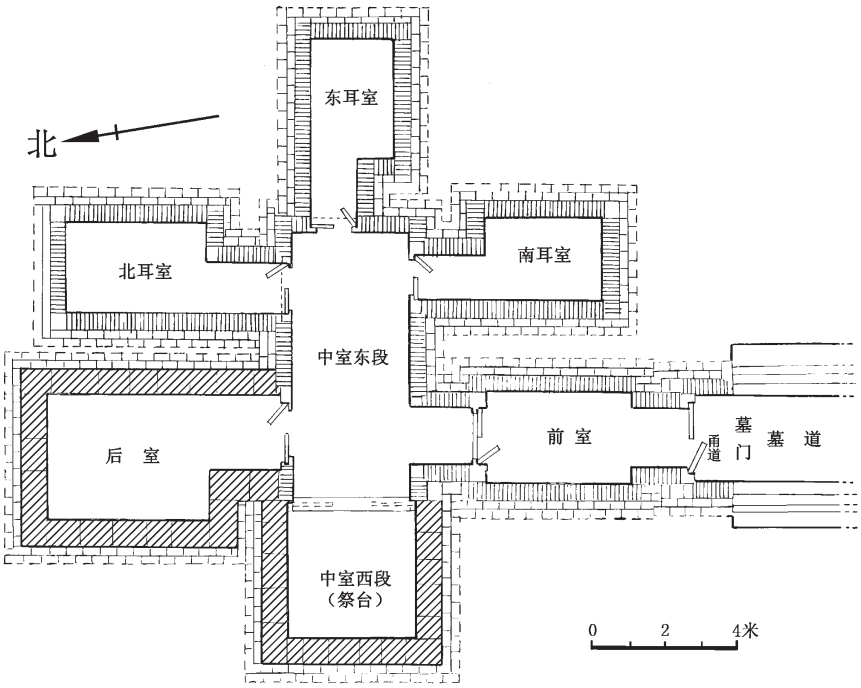


图 2-36　河南省密県打虎亭 2 号漢墓平面図（1/200）

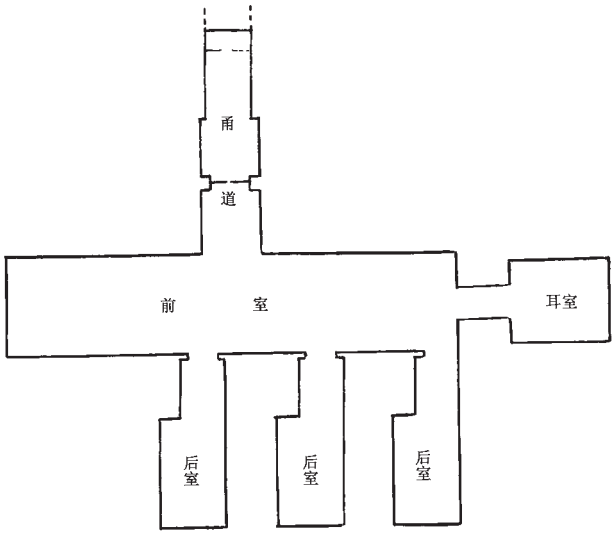


図 2-37　河南省滎陽市萇村漢墓平面概念図

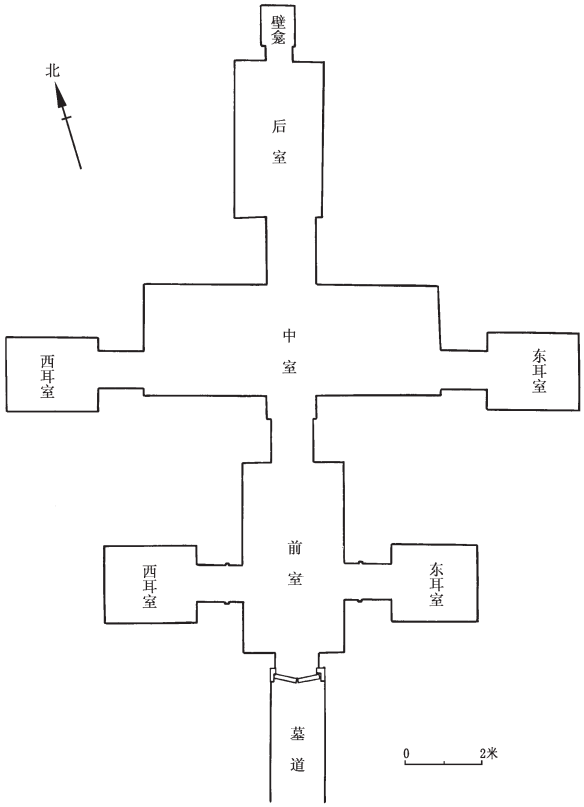


図 2-38　河北省望都 1 号漢墓平面図（1/200）

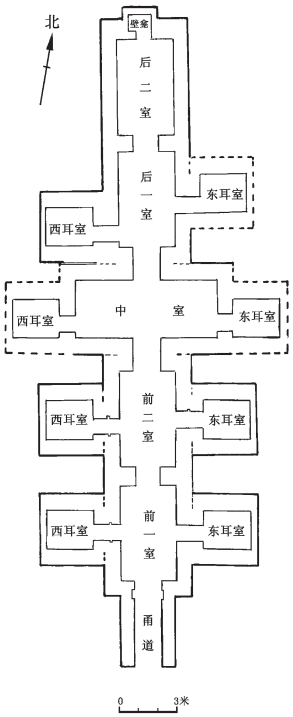


図 2-39　河北省望都 2 号漢墓平面図（1/400）

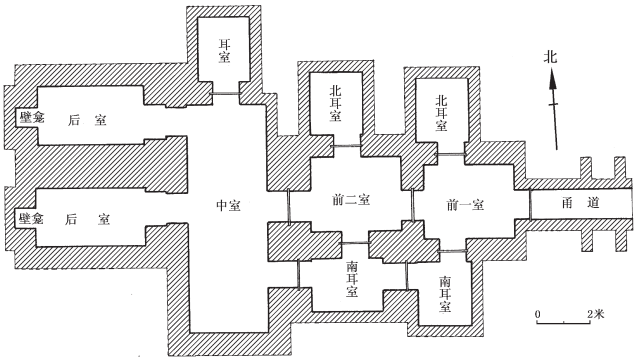


図 2-40　河北省安平漢墓平面図（1/300）

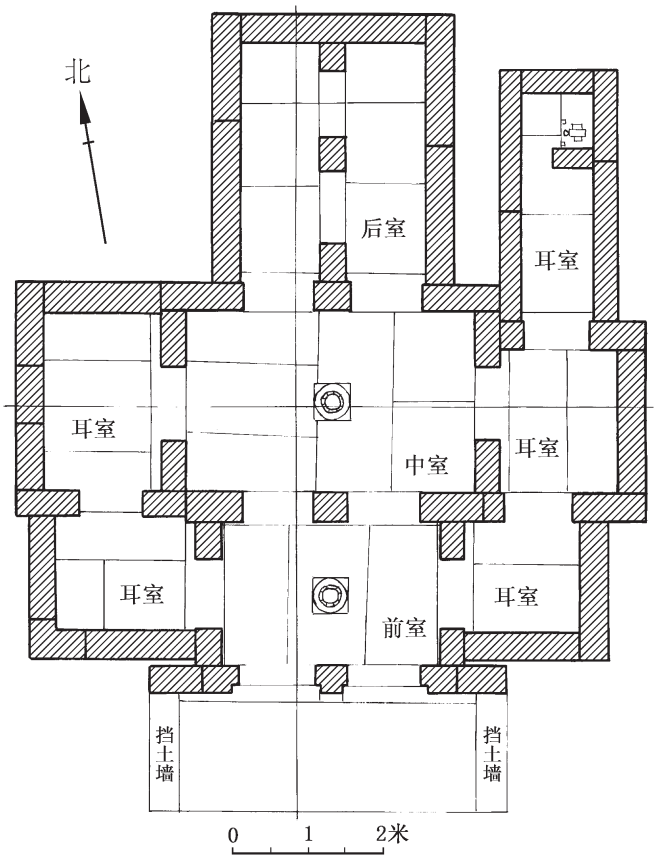


図 2-41　山東省沂南漢墓平面図（1/100）

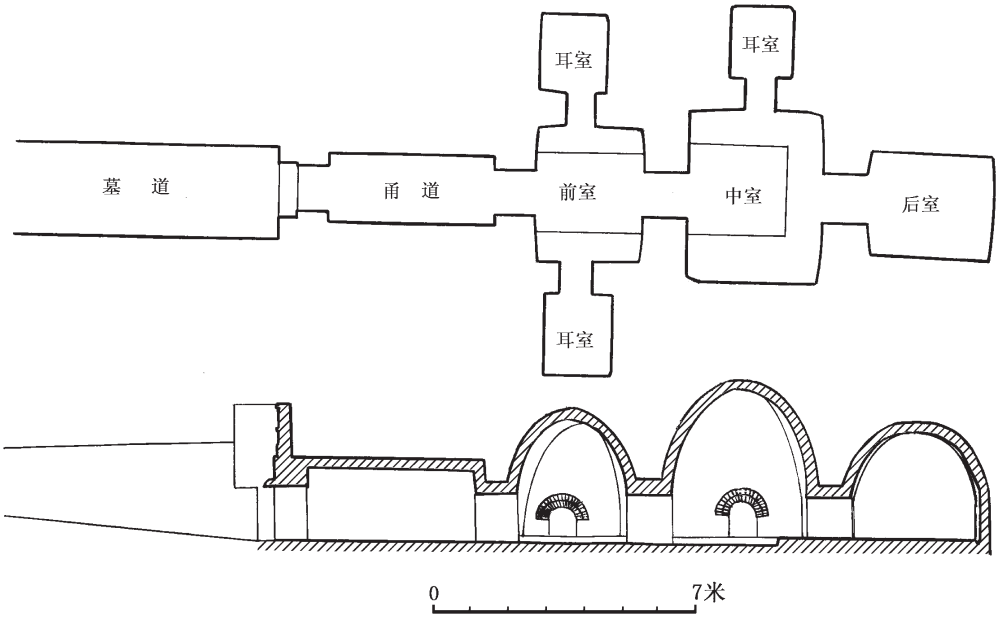


図 2-42　甘粛省武威市雷台漢墓平、断面図（1/200）

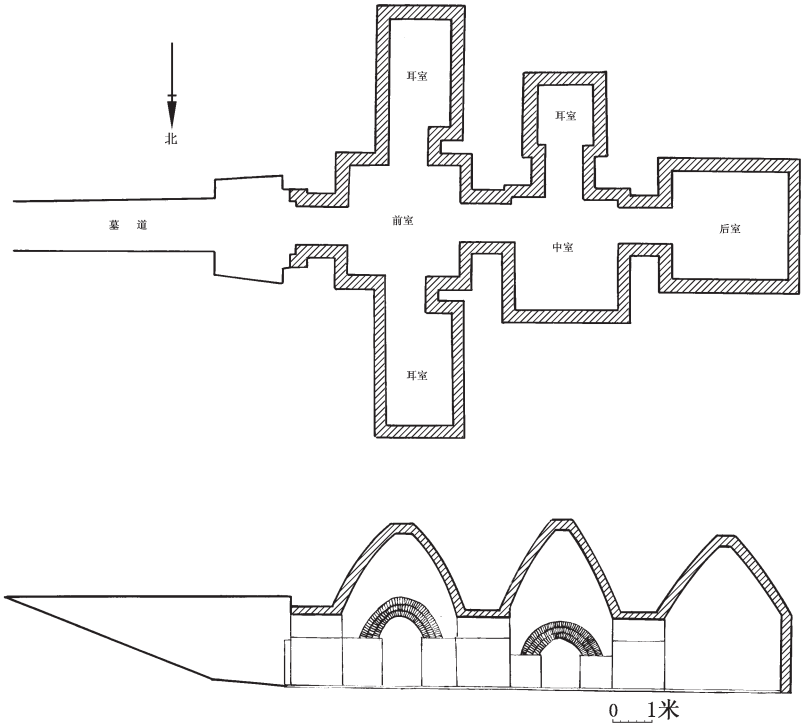
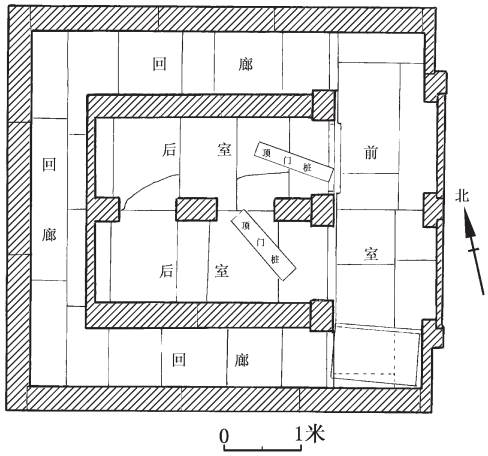


図 2-43　内蒙古和林格爾漢墓平面図（1/200）



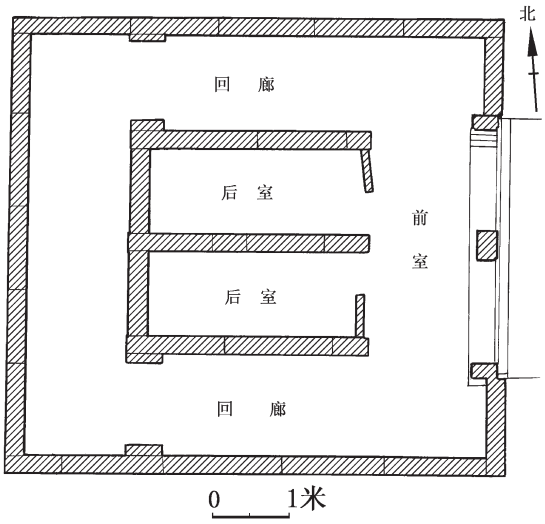


図 2-44　河南省唐河鍼織庵漢墓平面図（1/100）

図 2-45　河南省南陽市楊官寺漢墓平面図（1/100）

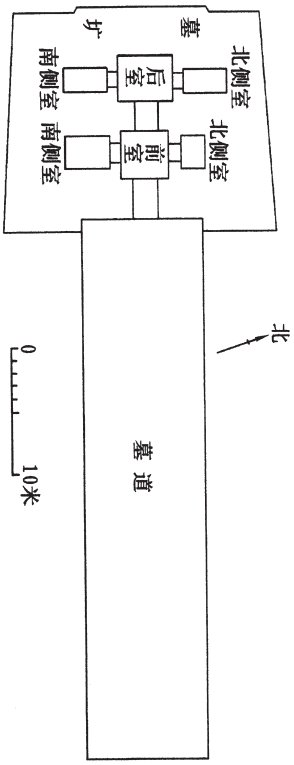


図 3-1 河南省安陽市西高穴 2 号墓平面図（1/600）

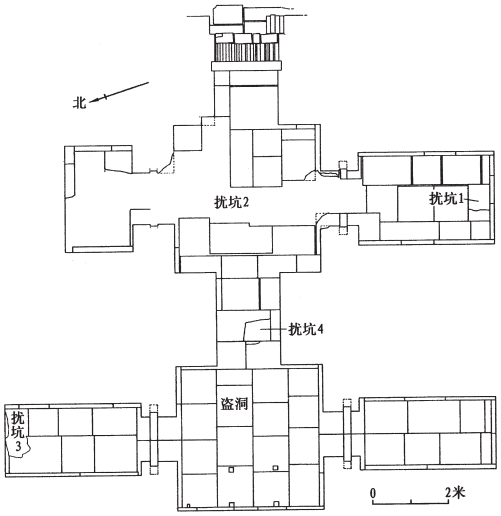


図 3-2 河南省安陽市西高穴 2 号墓室平面図（1/200）

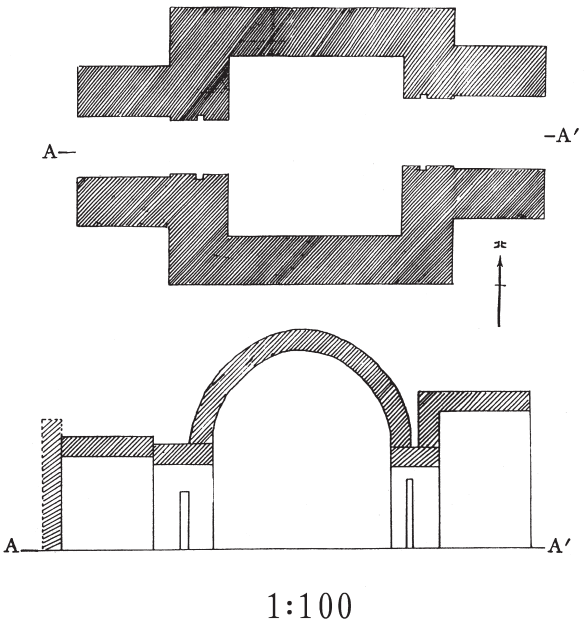


図 3-3 山東省東阿魚山曹魏墓平・断面図

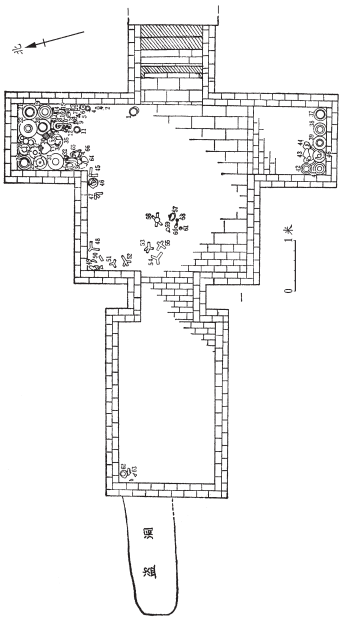


図 3-4 河南省洛陽市澗西曹魏墓平面図（1/150）

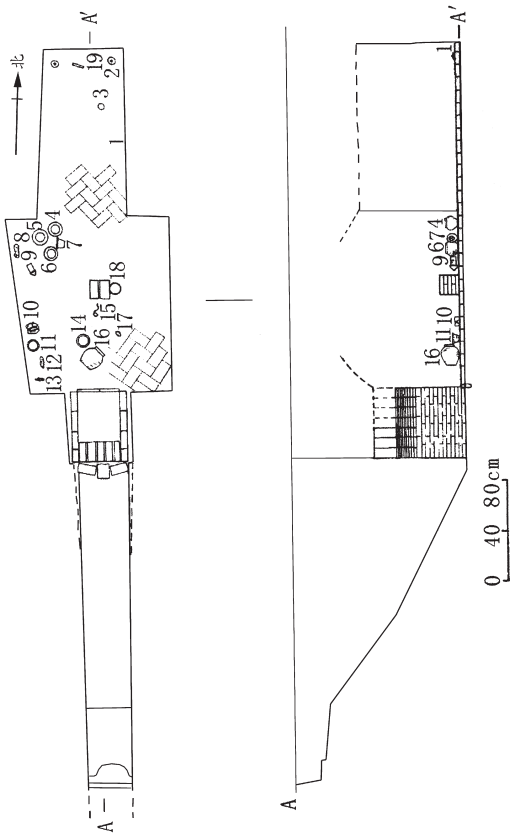


図 3-5 陝西省西安市郭杜 13 号墓平・断面図（1/60）

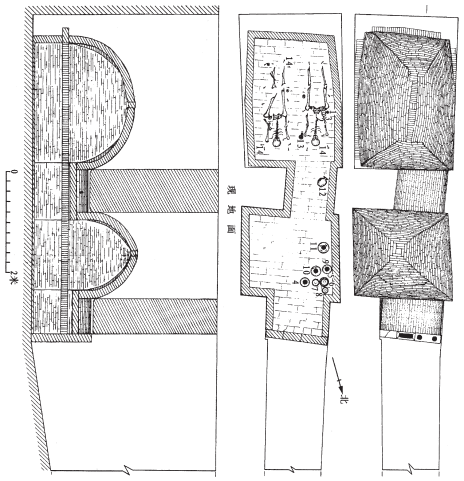


図 3-6 河南省新郷市 1 号墓平・断面図（1/150）

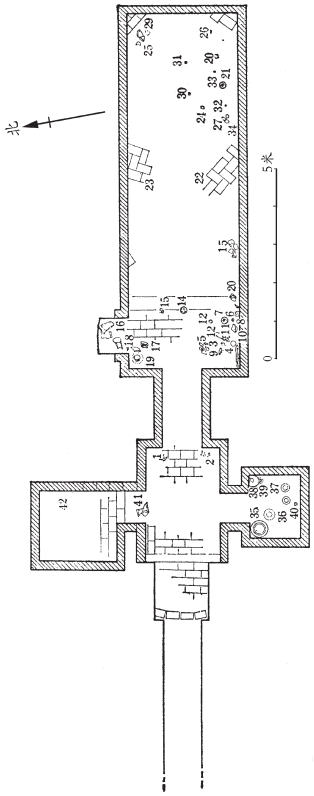


図 3-7 河南省偃師市杏園村 6 号墓平面図（1/200）

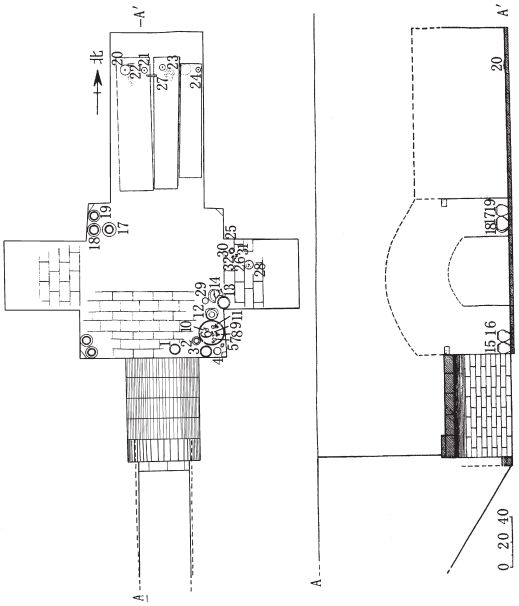


図 3-8 陝西省西安市郭杜 14 号墓平・断面図（1/60）

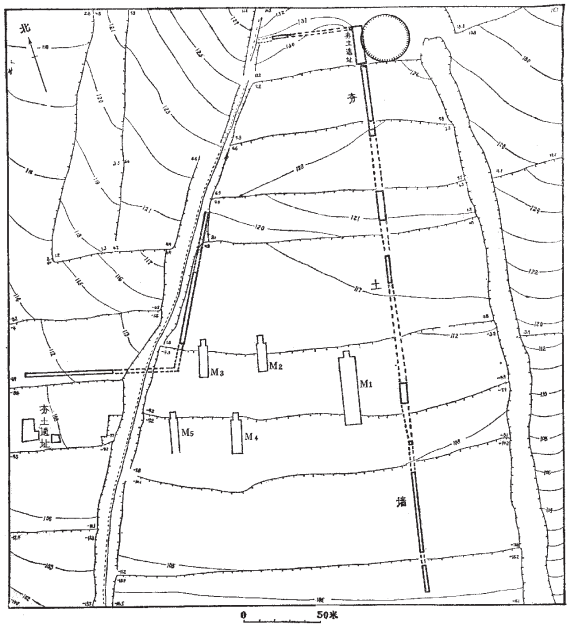


図 3-9 西晋文帝崇陽陵布局図（1/5,000）

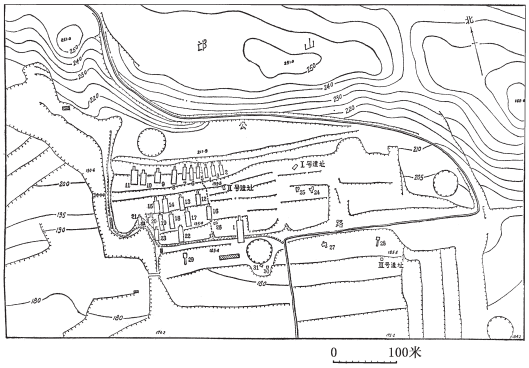


図 3-10 西晋武帝峻陽陵布局図（1/12,000）

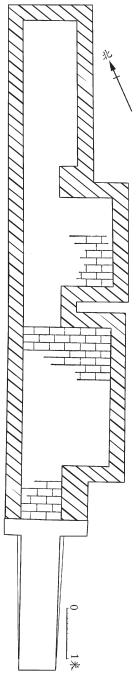


図 3-11 北京市順義県 M3 平面図（1/150）

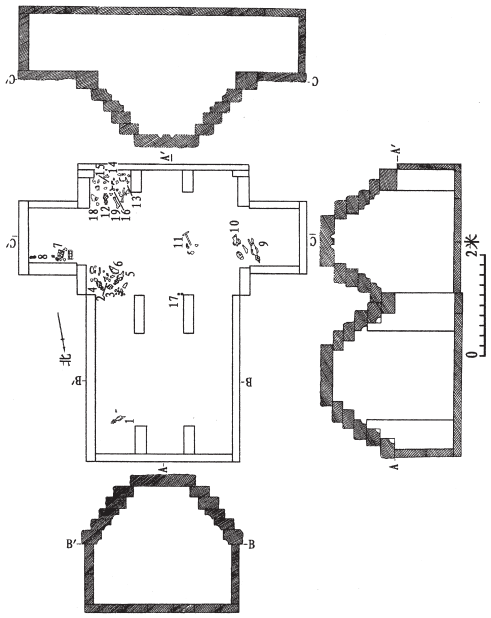


図 3-12 山東省滕州市元康九年墓平・断面図（1/150）

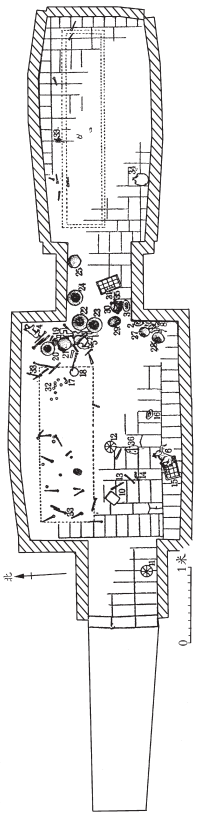


図 3-13 河南省鄭州市晋墓平面図（1/100）

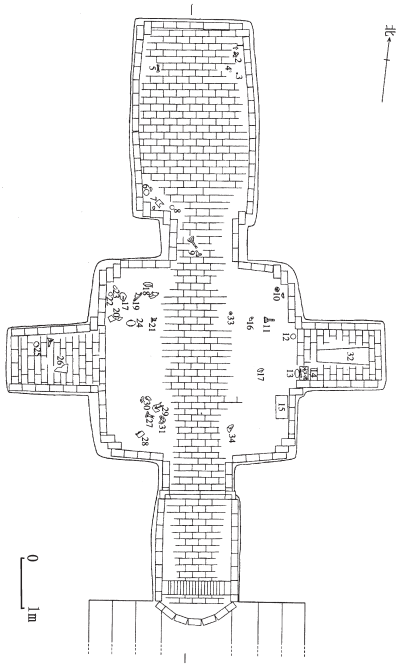


図 3-14 洛陽市 HM719 平面図（1/150）

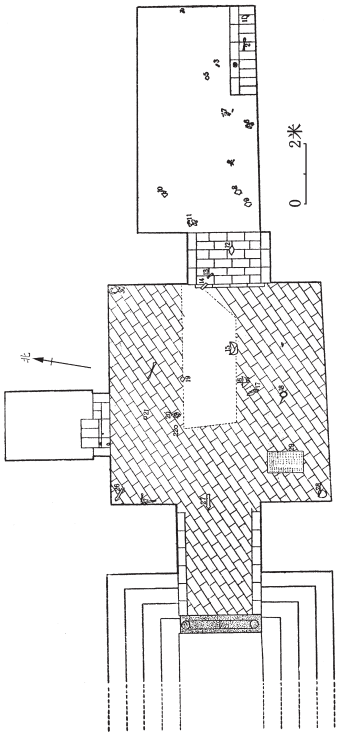


図 3-15 洛陽市永寧二年墓平面図（1/250）

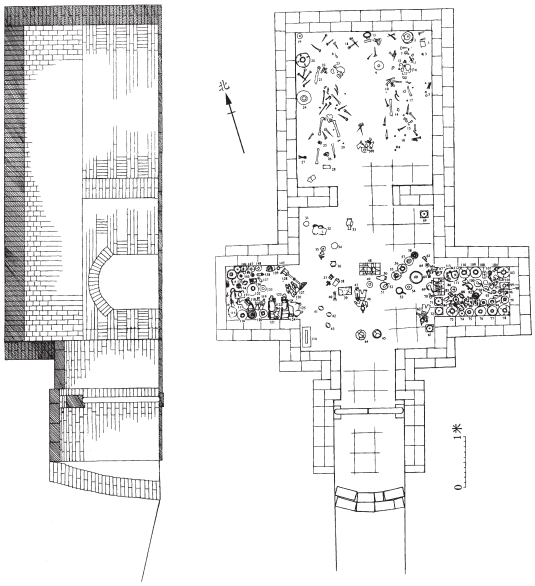


図 3-16 山東省鄒城市永康二年劉宝墓平・断面図（1/150）

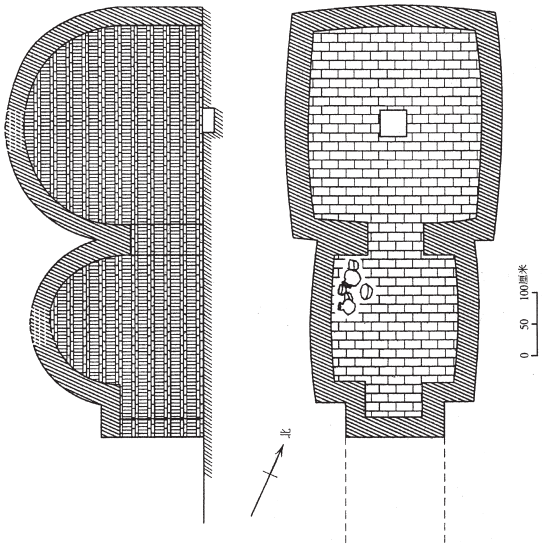


図 3-17 山東省臨朐咸寧三年墓平・断面図（1/120）

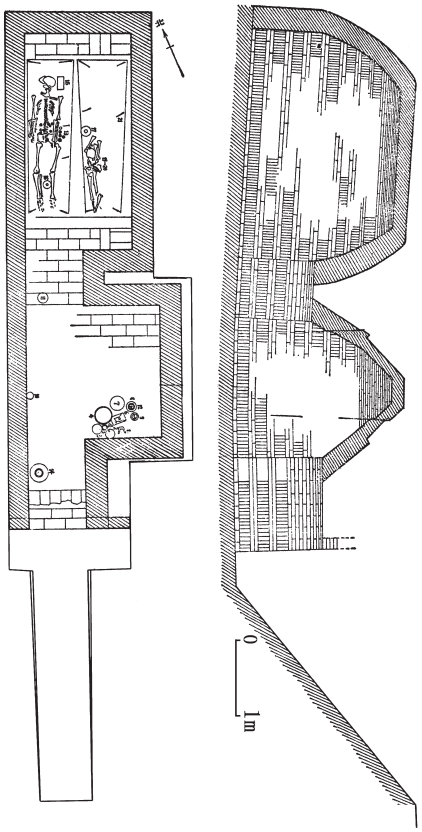


図 3-18 北京市順義県 M2 平・断面図（1/100）

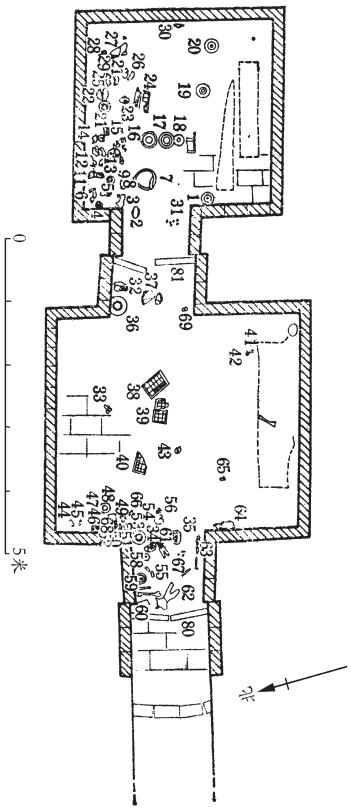


図 3-19 河南省偃師県杏園村 34 号墓平面図（1/120）

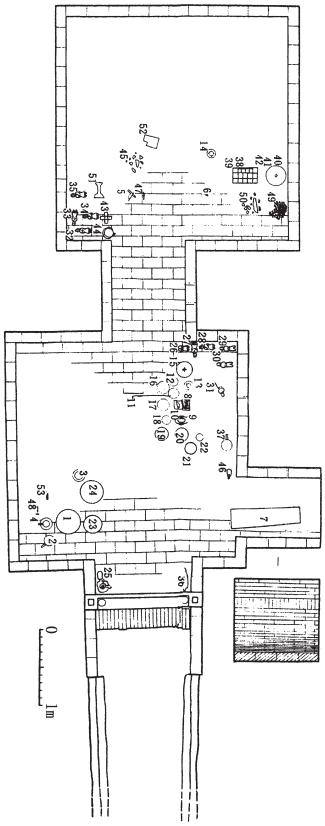


図 3-20 洛陽市谷水 FM4 平面図（1/100）

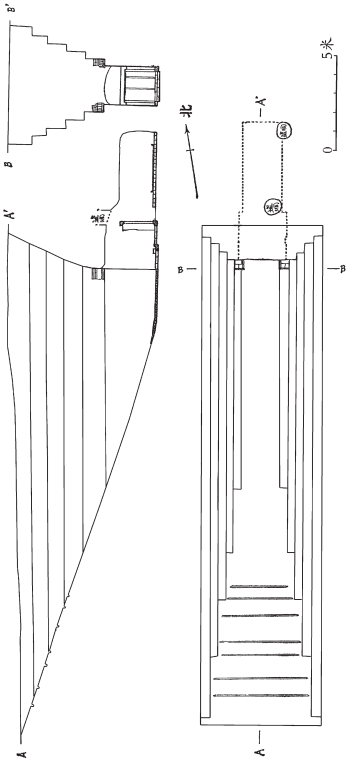


図 3-21　西晋文帝崇陽陵 M4 平・断面図（1/400）

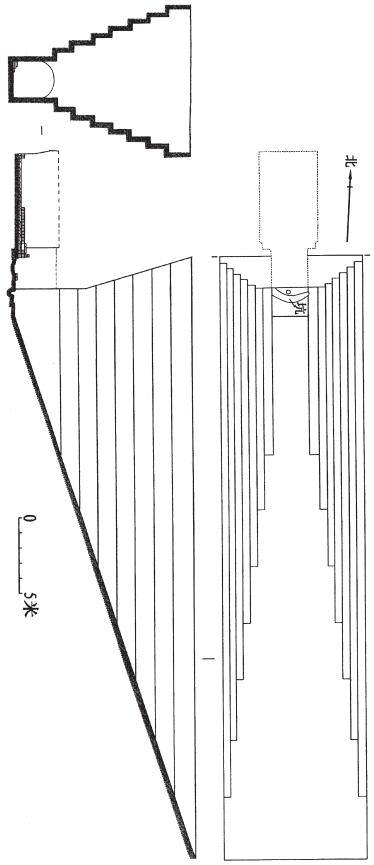


図 3-22　河南省偃師県首陽山 02YXM1 平・断面図（1/500）

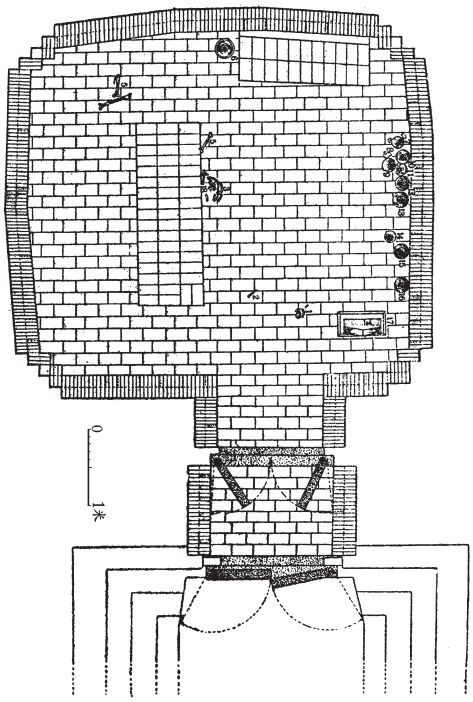


図 3-23　河南省洛陽市元康九年徐美人墓平面図（1/100）

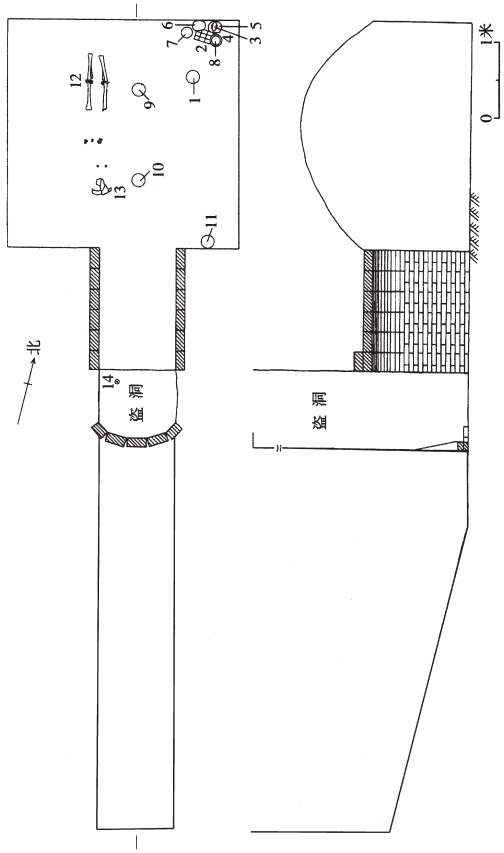


図 3-24　河南省洛陽市厚載門街 CM3032 平・断面図（1/100）

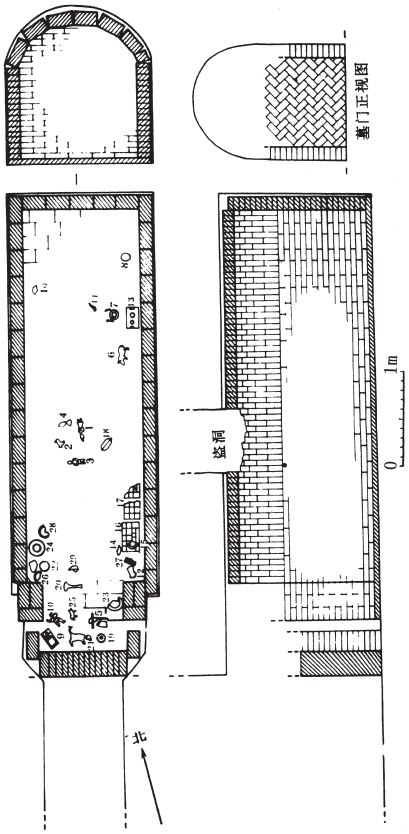


図 3-25 河南省洛陽市孟津三十里鋪 M117 平・断面図（1/80）

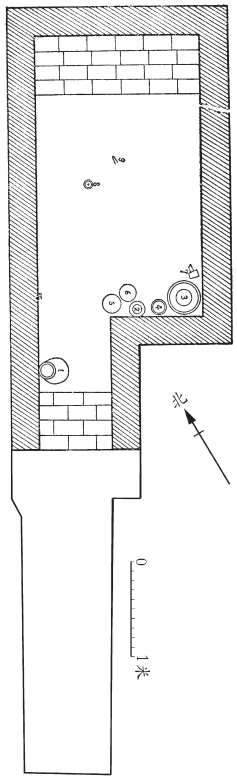


図 3-26 北京市順義県 M7 平面図（1/80）

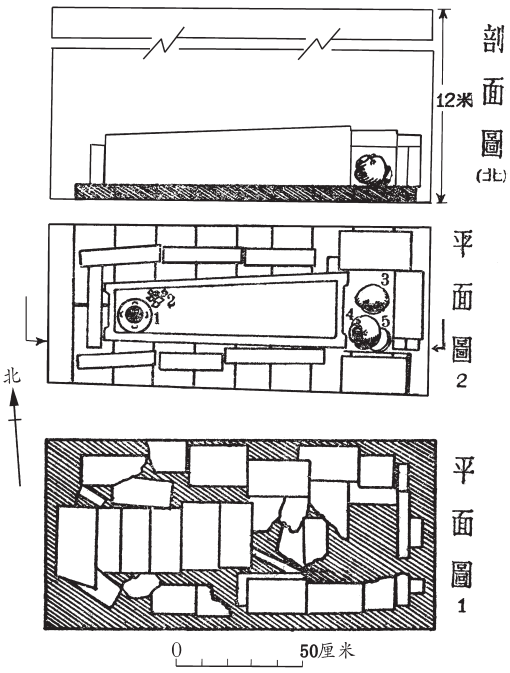


図 3-27 河南省洛陽市 M51 平・断面図（1/30）

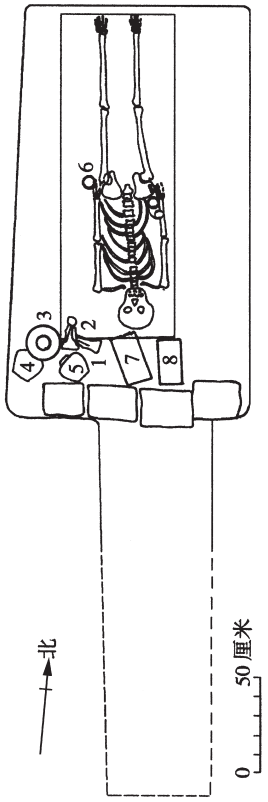


図 3-28 河南省洛陽市蘇華芝墓平面図（1/30）

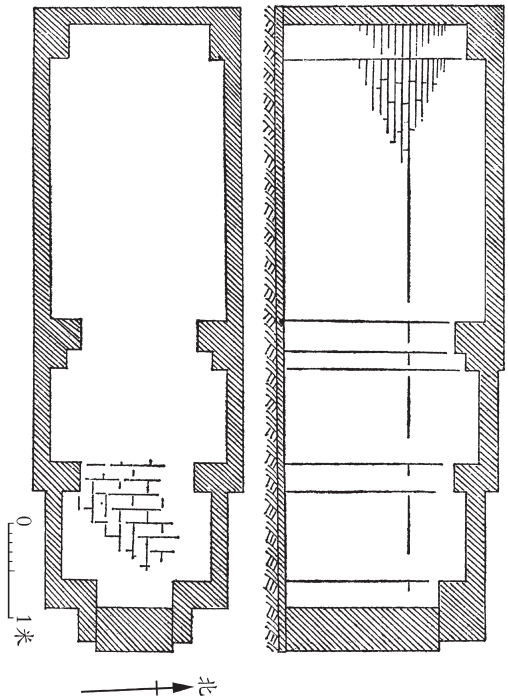


図 3-29 江西省靖安虎山 M1 平・断面図（1/80）

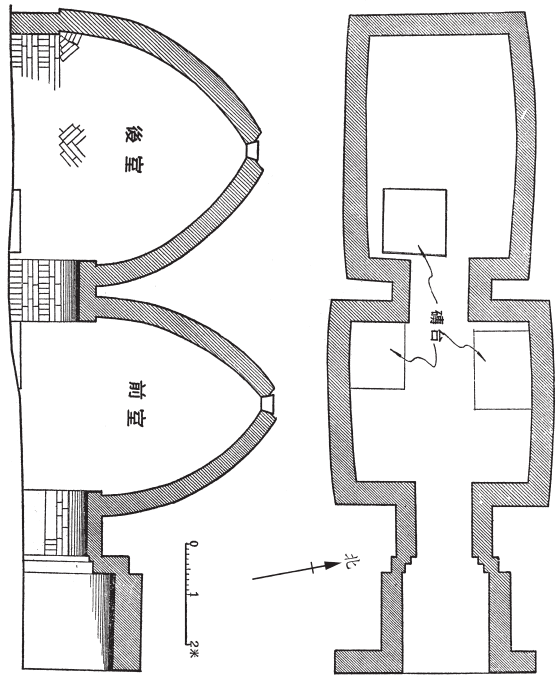


図 3-30 江蘇省宜興 1 号墓平・断面図（1/150）

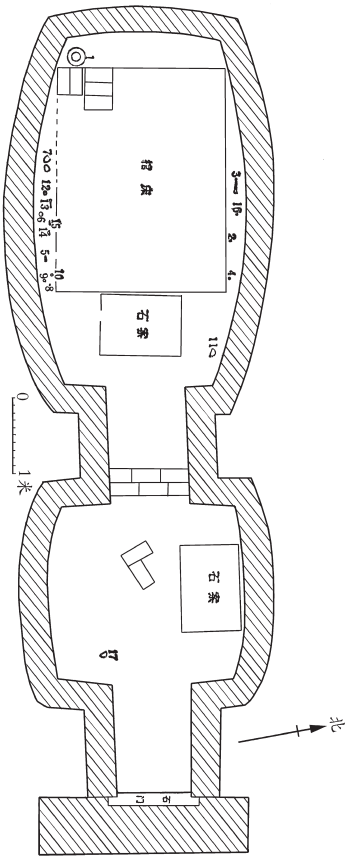


図 3-31 江蘇省宜興 4 号墓平面図（1/100）

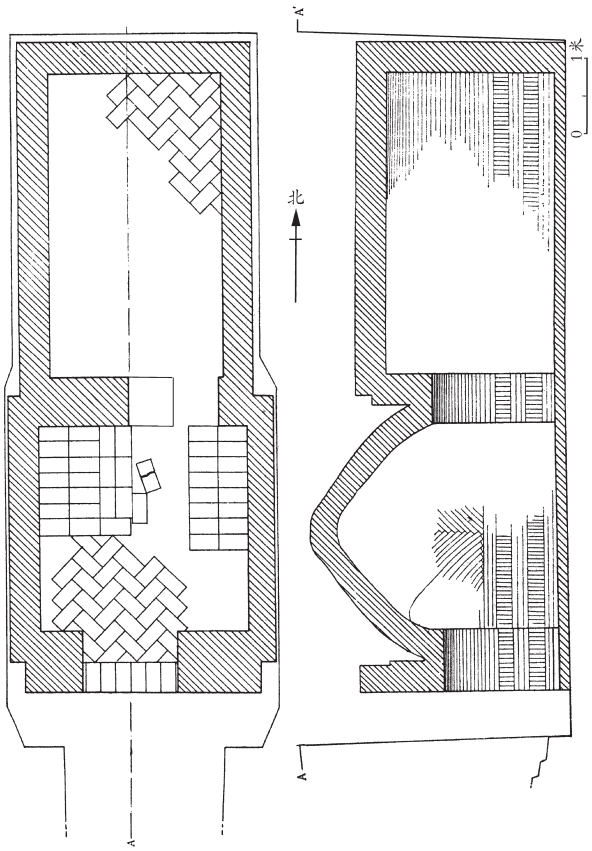


図 3-32 安徽省馬鞍山市東呉朱然墓平・断面図（1/100）

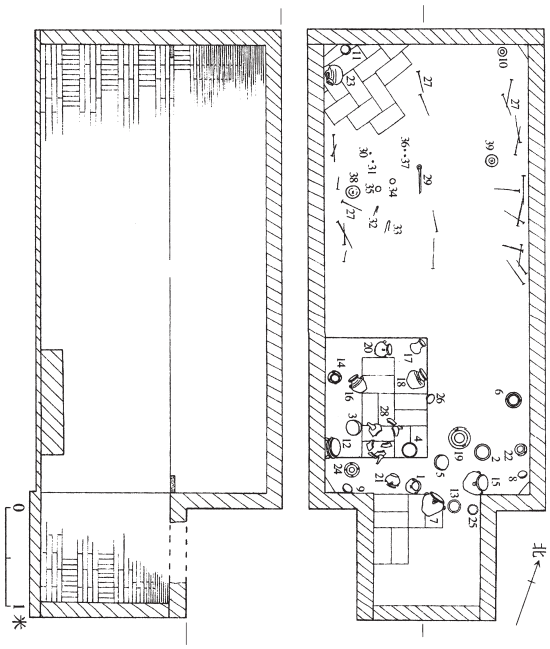


図 3-33 江蘇省南京市江寧上湖 M1 平・断面図（1/80）

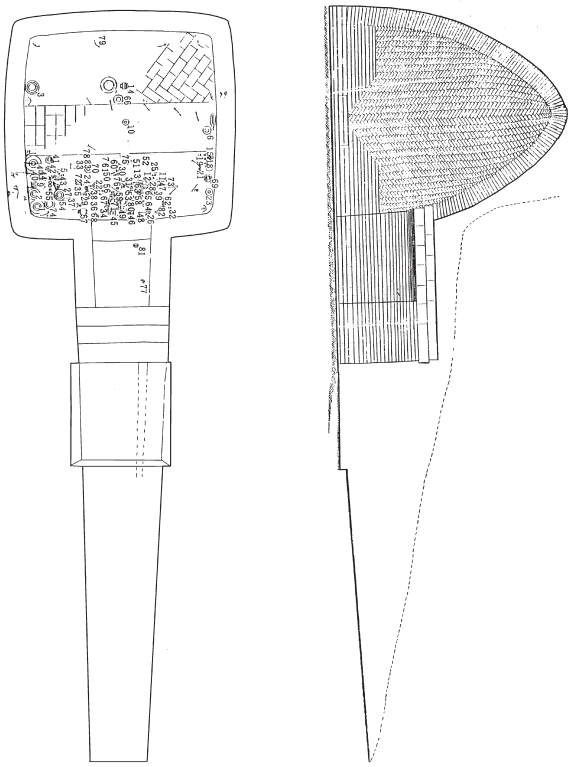


図 3-34 湖南省安郷県西晋劉弘墓平・断面図

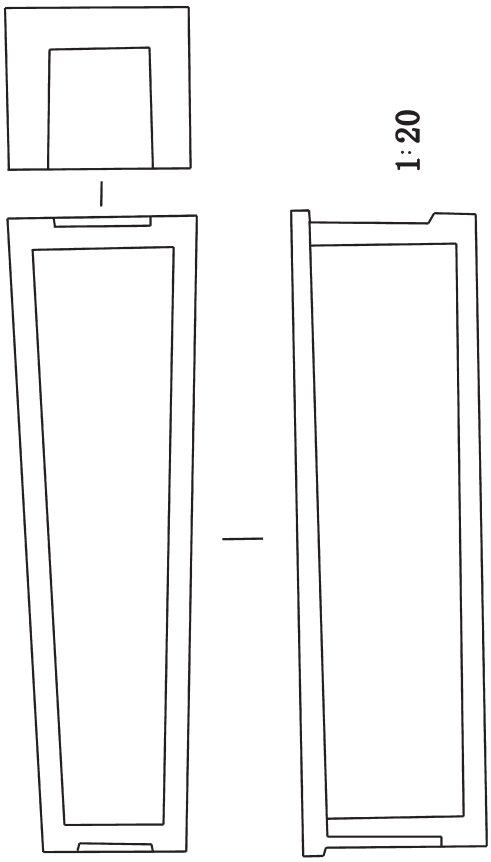


図 3-35 河南省洛陽市谷水 FM4 出土陶棺平・断面図

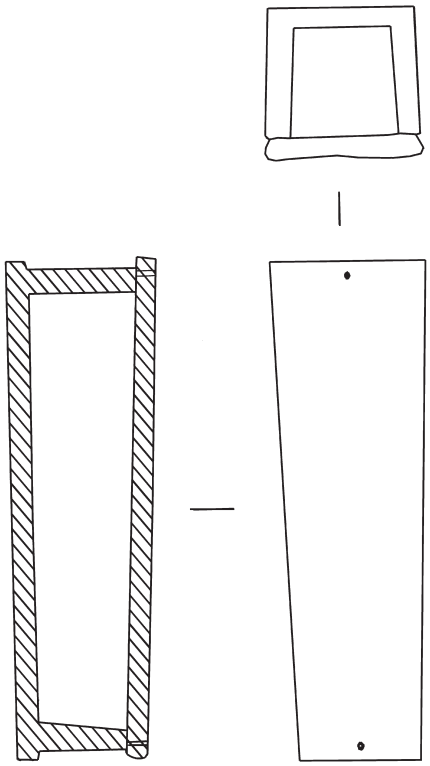


図 3-36 河南省洛陽市華山路 CM2348 出土陶棺平・断面図

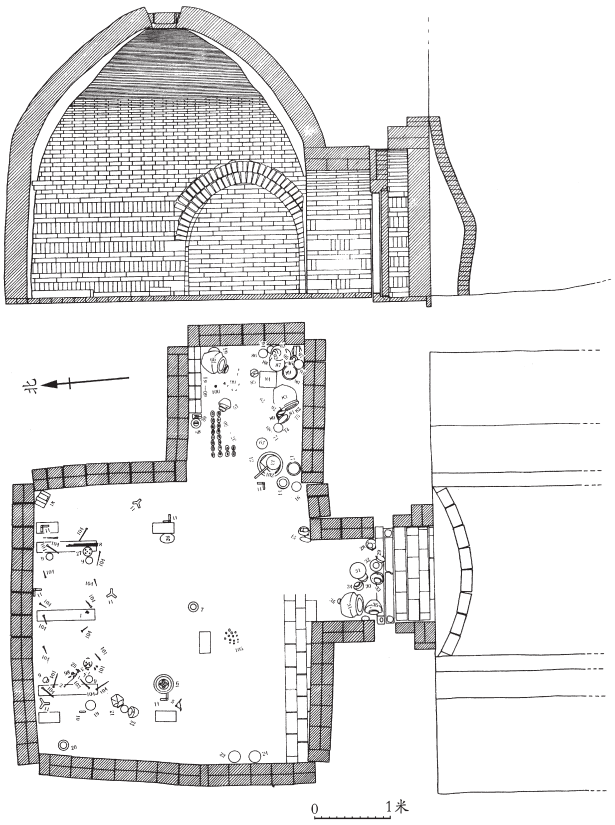


図 3-37 河南省新安 C12M262 帷帳銅構件分布平面図（1/100）

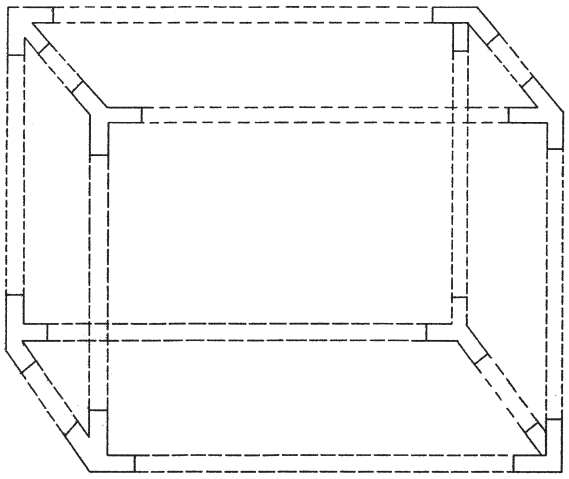


図 3-38 河南省新安 C12M262 出土銅帷帳架復原概念図

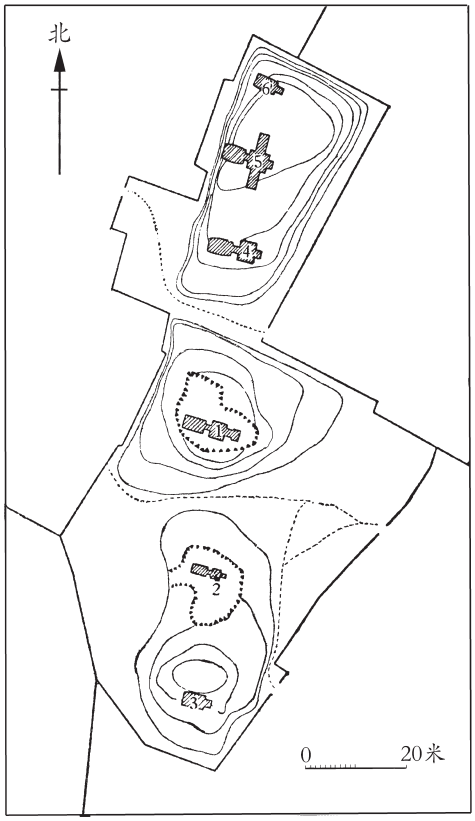


図 3-39 江蘇省宜興晋墓（M1 ～ M6）分布図（1/1,500）

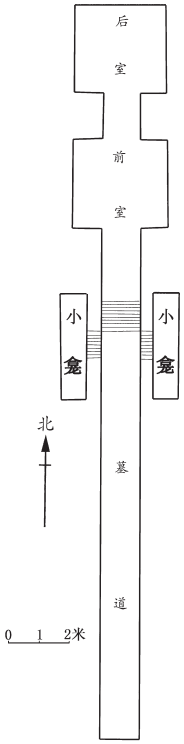


図 4-1 陝西省西安市南郊草庵坡墓平面図（1/250）

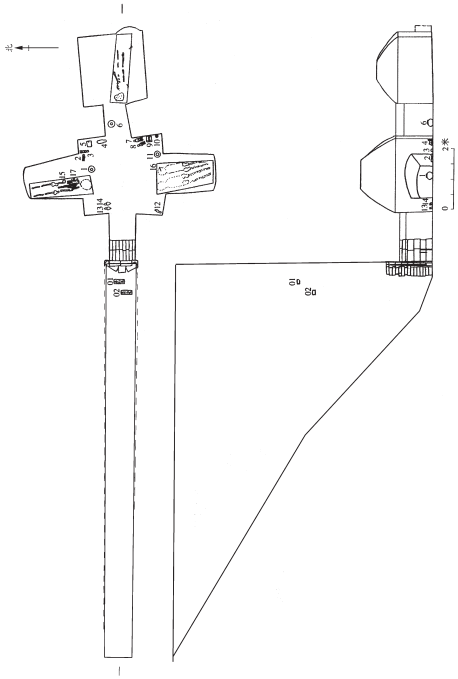


図 4-2 陝西省咸陽市中鉄七局三処 M1 平・断面図（1/250）

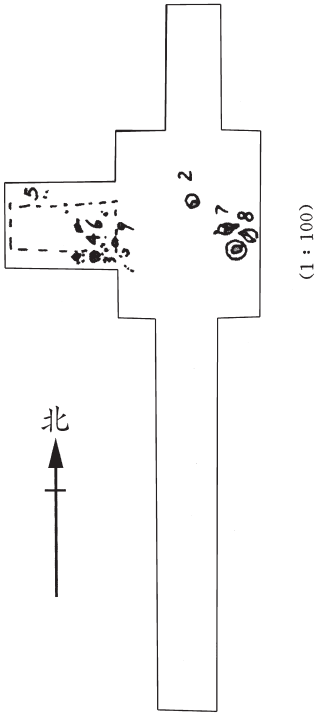


図 4-3 陝西省西安市瓦胡同 M7 平面図

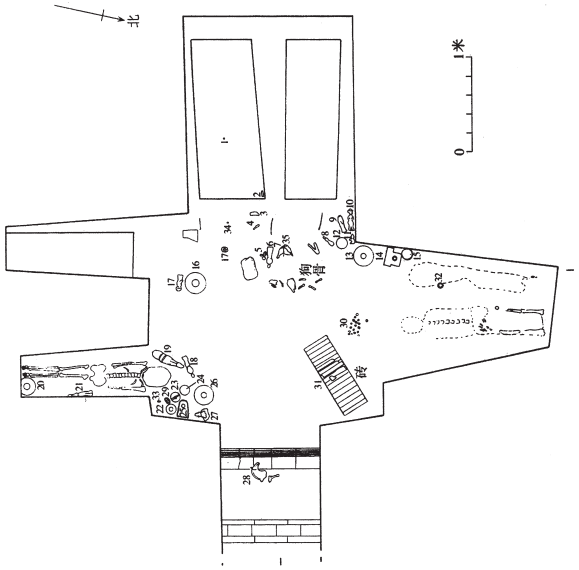


図 4-4 陝西省咸陽市師院 M5 平面図（1/80）

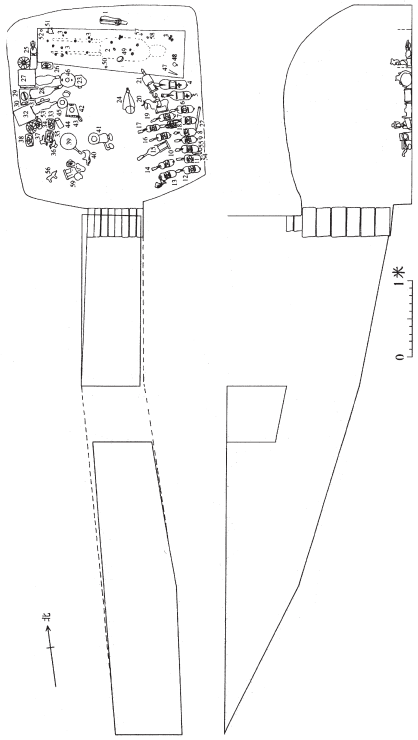


図 4-5 陝西省咸陽市平陵 M1 平・断面図（1/100）

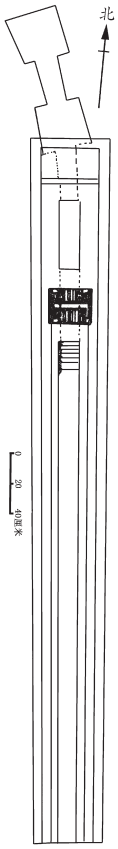


図 4-6 陝西省西安市韋曲 M1 平面図（1/50）

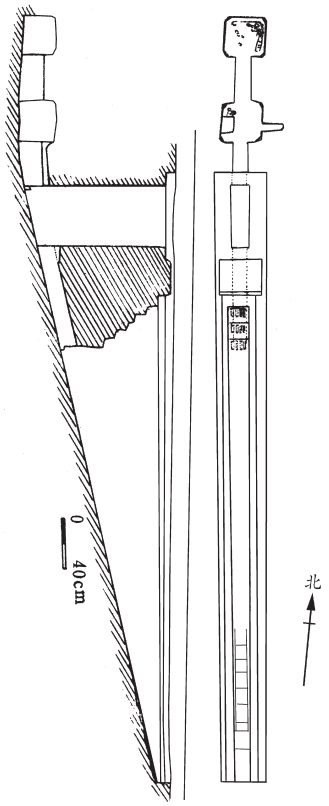


図 4-7 陝西省西安市韋曲 M2 平・断面図（1/60）

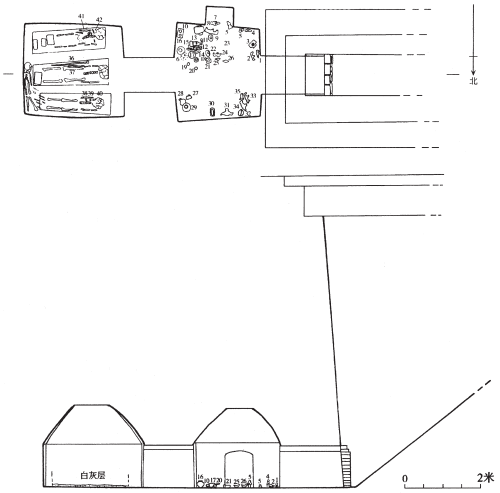
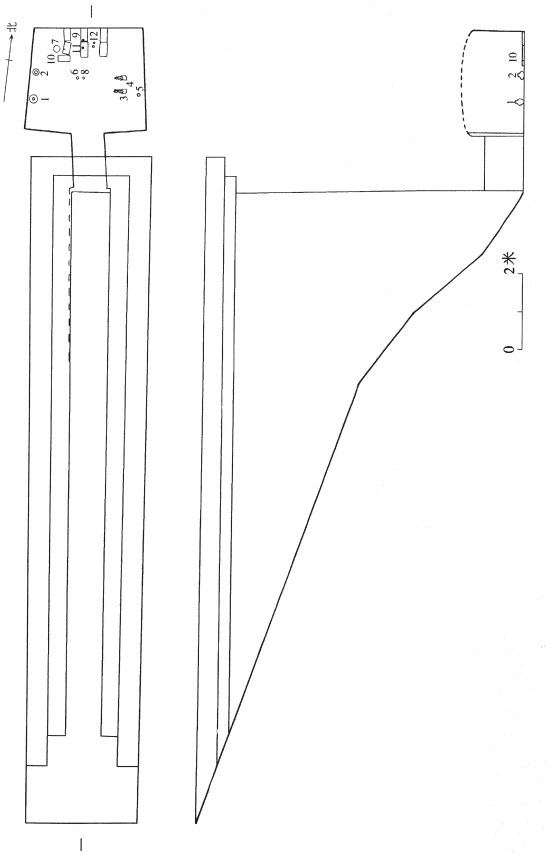


図 4-8 陝西省咸陽市中鉄七局三処 M3 平・断面図（1/200）



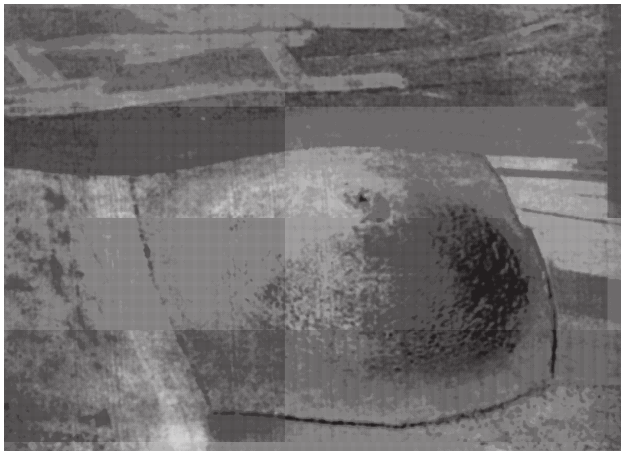
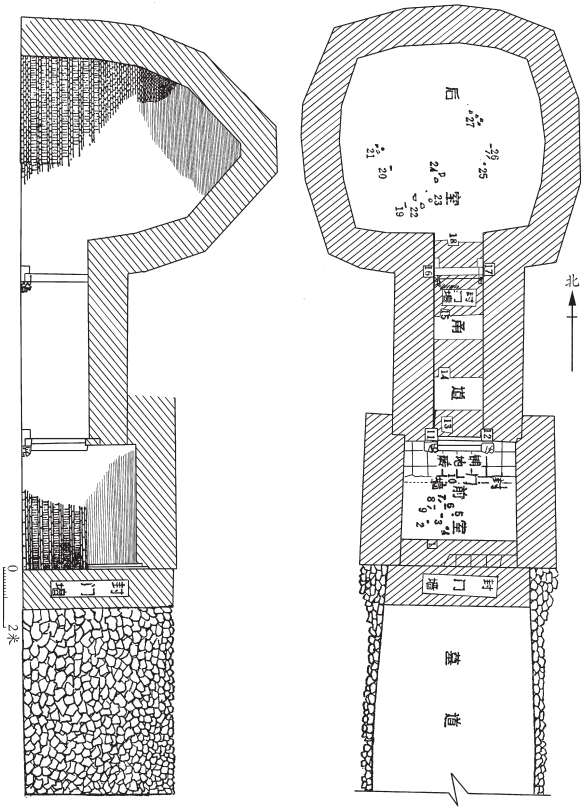


図 4-9 陝西省咸陽市文林小区 M49 平・断面図（1/200）

図 4-10 山西省大同市北魏永固陵墳丘（従東向西）



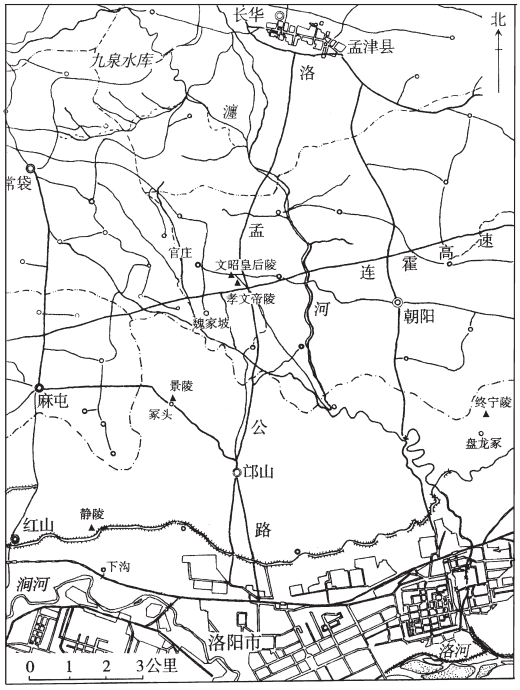


図 4-11 山山西省大同市北魏永固陵墓葬平・断面図（1/250）

図 4-12 河南省洛陽市北魏帝陵分布図（1/200,000）

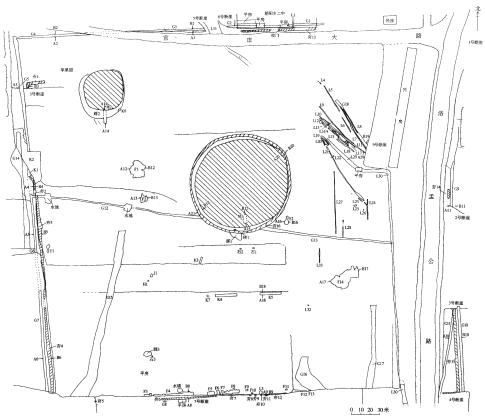


図 4-13 河南省洛陽市北魏孝文帝長陵陵園平面図
（1/8,000）

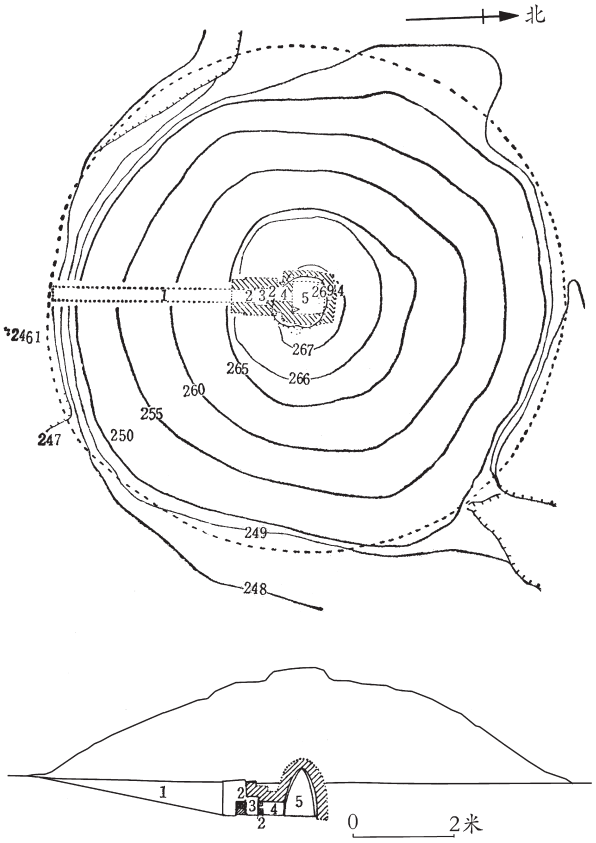


図 4-14 河南省洛陽市北魏宣武帝景陵墳丘与墓葬
平・断面図（1/150）

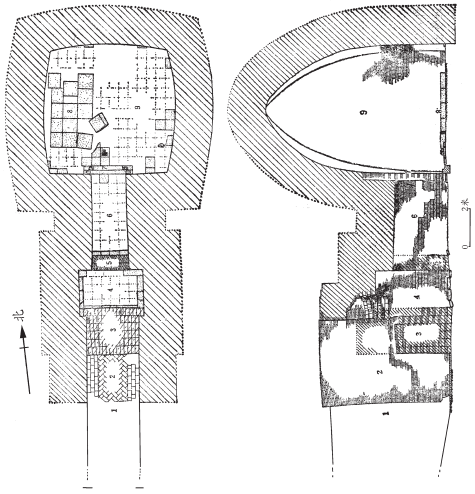


図 4-15 河南省洛陽市北魏宣武帝景陵墓葬平・断面図
（1/400）

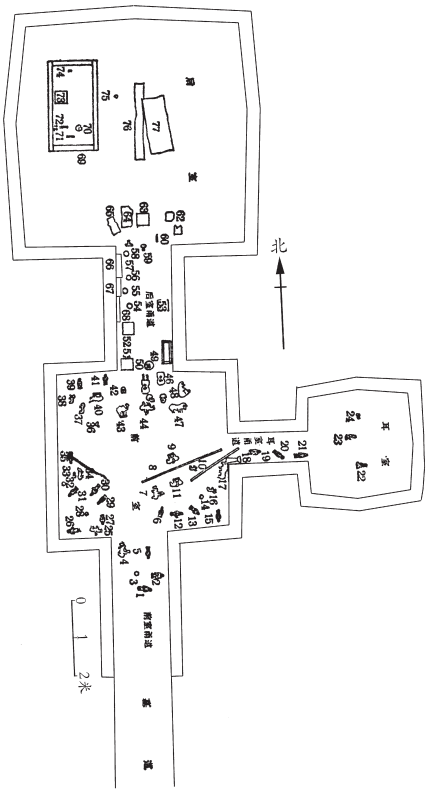


図 4-16 山西省大同市石家寨司馬金龍墓平面概念図
（1/200）

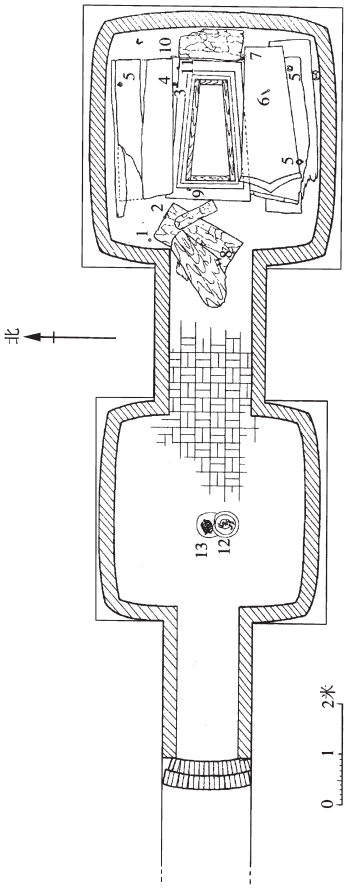


図 4-17 山西省大同市湖東 1 号墓平面図（1/150）

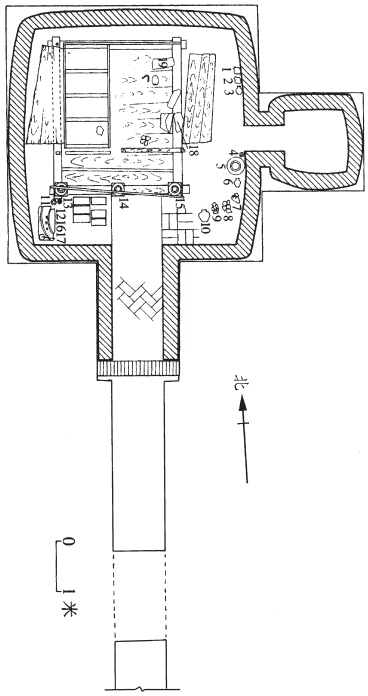


図 4-18 山西省大同市七里村 M1 平面図（1/150）

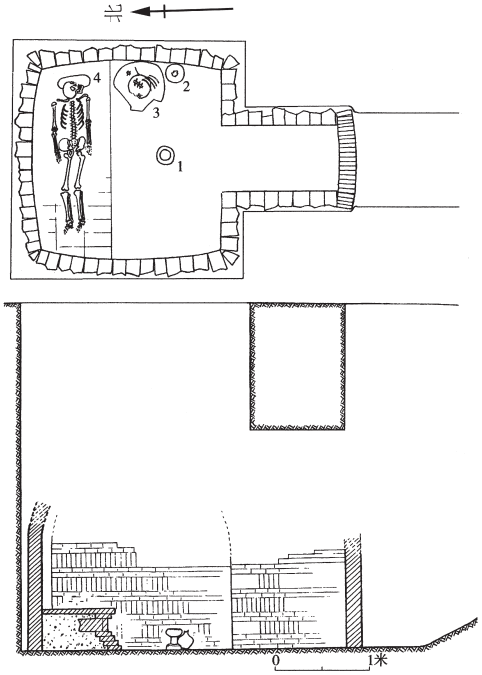


図 4-19 山西省大同市迎賓大道 M78 平・断面図（1/80）

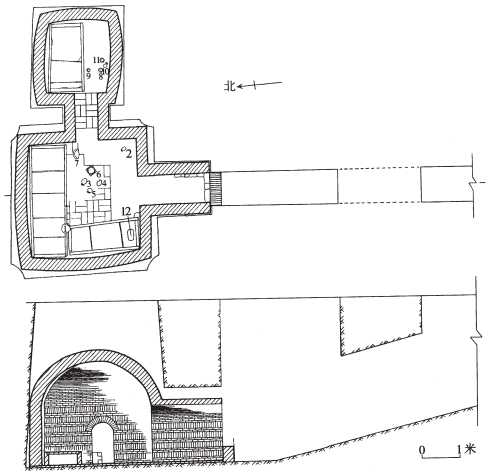


図 4-20 山西省大同市七里村 M14 平・断面図（1/200）

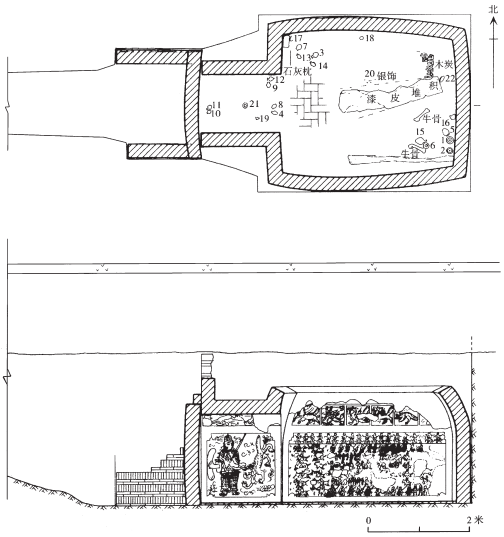


図 4-21　山西省大同市沙岭 M7 平・断面図（1/150）

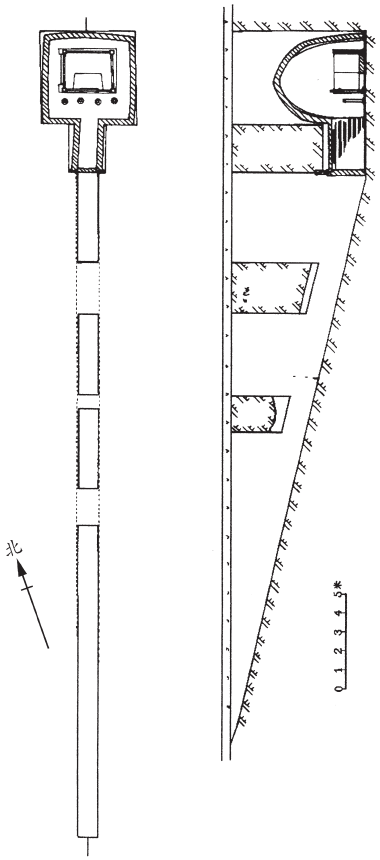


図 4-22　山西省大同市宋紹祖墓平・断面図（1/400）

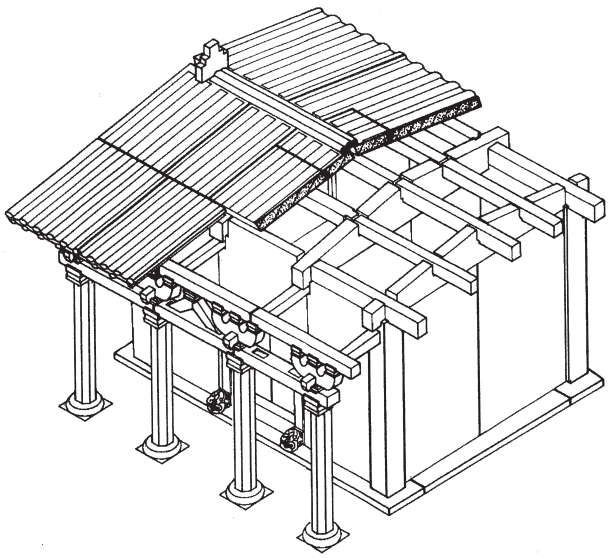


図 4-23　山西省大同市宋紹祖墓石椁結構透視図

図 4-24　山西省大同市宋紹祖墓石椁内的石尸床

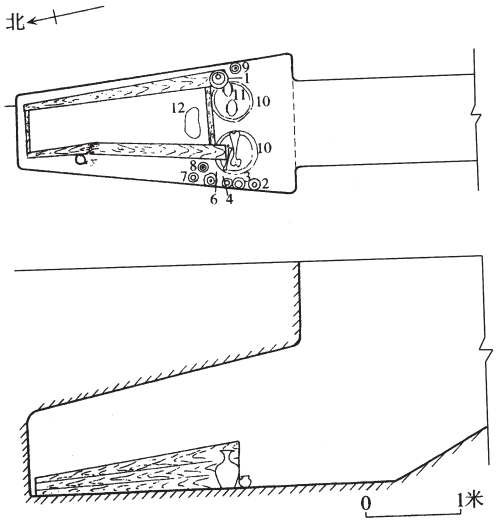


図 4-25 山西省大同市七里村 M28 平・断面図（1/80）

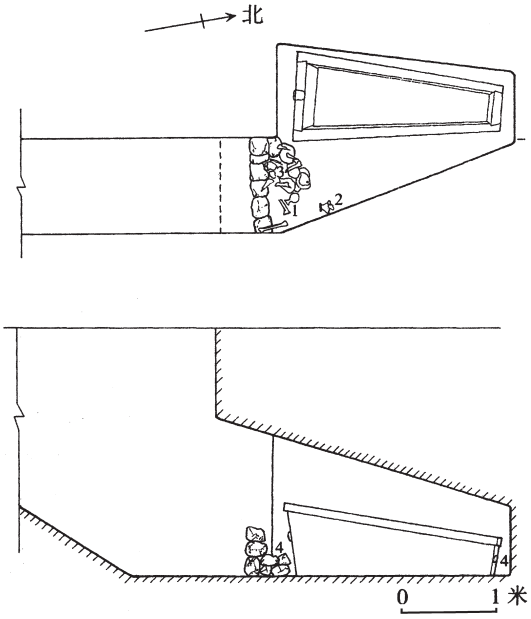


図 4-26 山西省大同市七里村 M30 平・断面図（1/80）

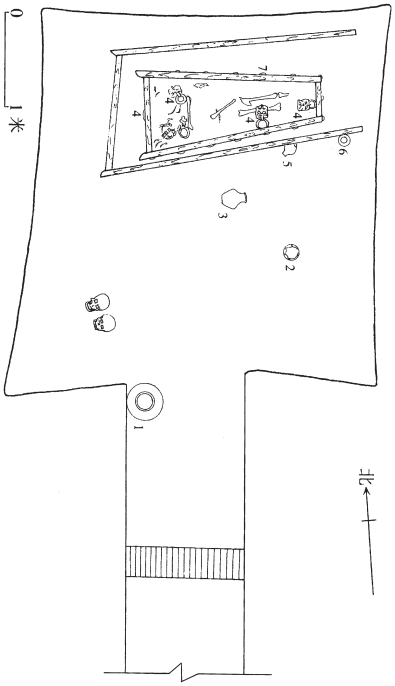


図 4-27 山西省大同市七里村 M25 平面図（1/80）

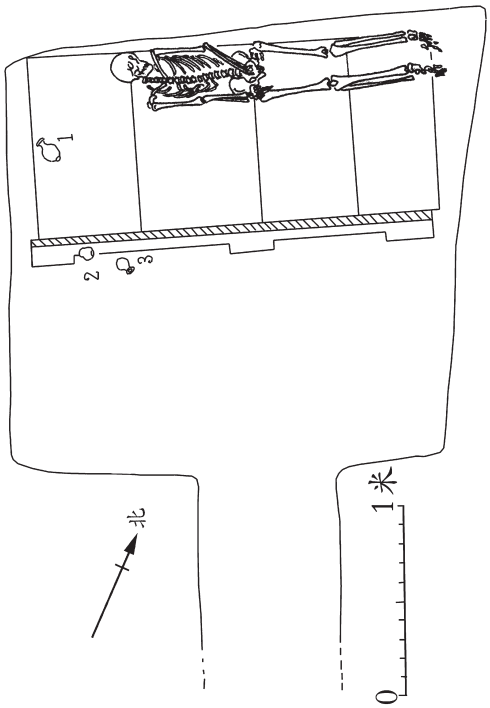


図 4-28 山西省大同市電焊器材庵 M112 平面図（1/40）

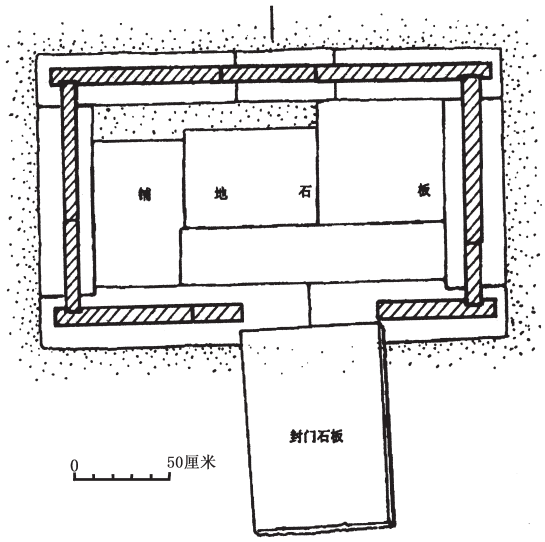


図 4-29 山西省大同市南郊智家堡石椁壁画墓平面図（1/40）

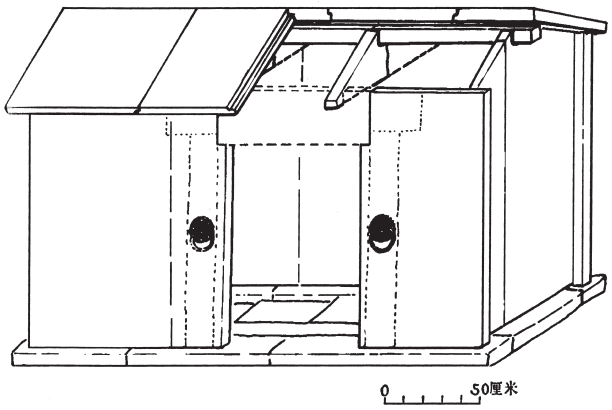


図 4-30 山西省大同市南郊智家堡石椁壁画墓石椁結構概念図（1/40）

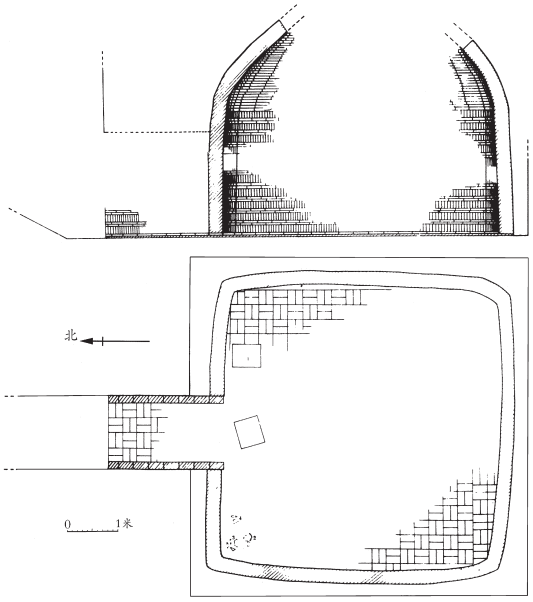


図 4-31 河南省洛陽市北魏陽平王元冏墓平・断面図（1/150）

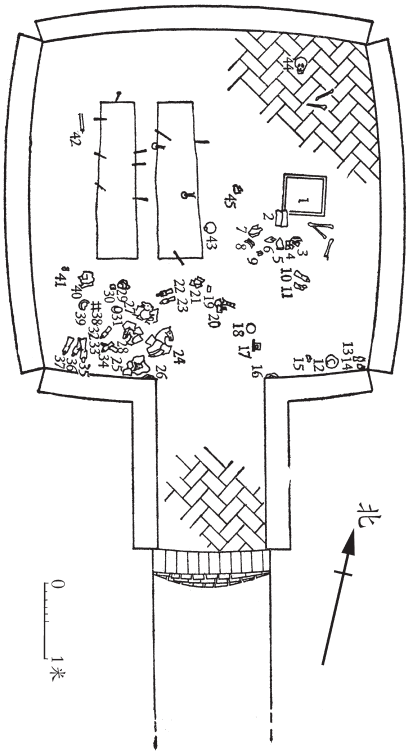


図 4-32 河南省偃師県北魏洛州刺史元睿墓平面図（1/100）

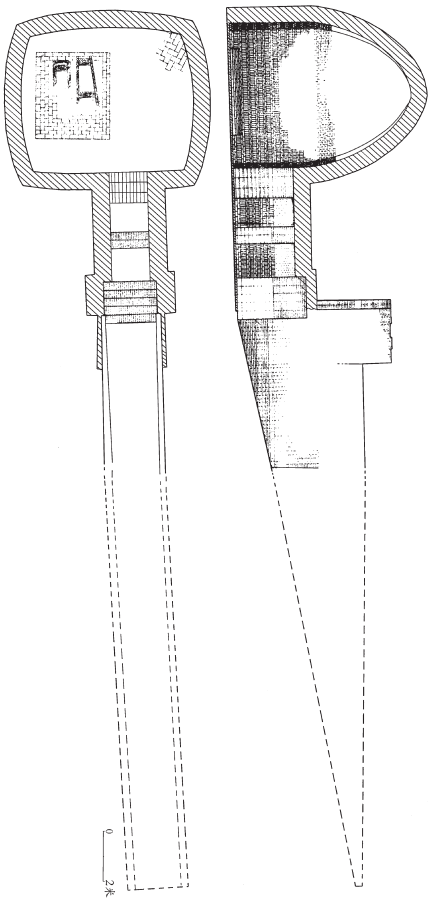


図 4-33　山西省大同市北魏元淑墓平・断面図（1/300）

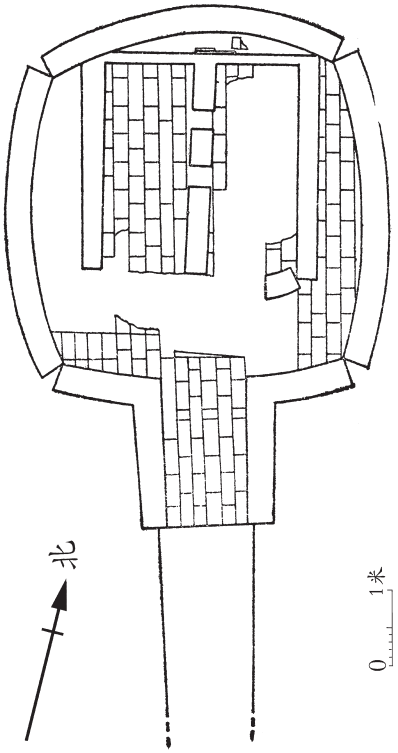


図 4-34　河南省偃師県南蔡庄 89YNLTM4 平面図（1/100）

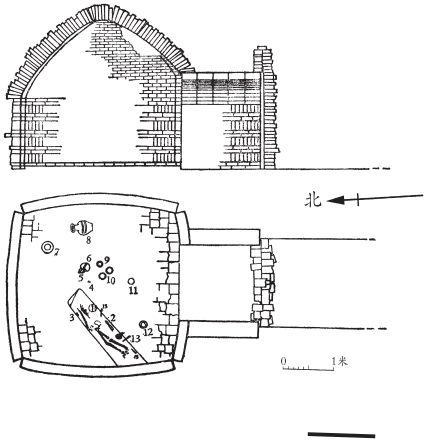


図 4-35　河南省偃師県杏園村 YD Ⅱ M926 平・断面図（1/150）

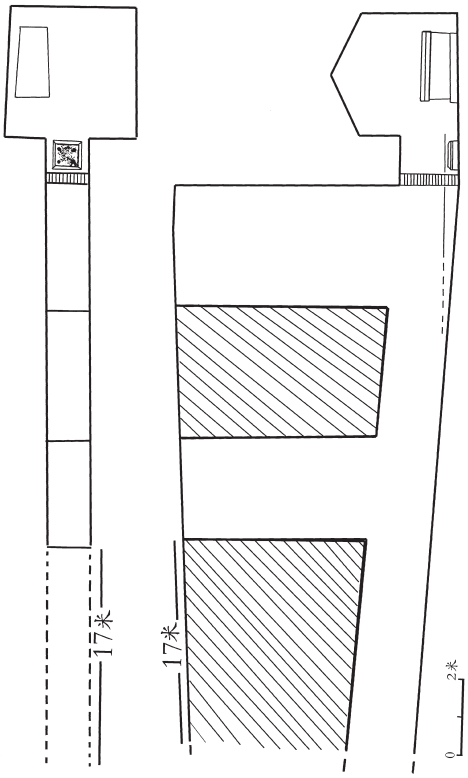


図 4-36　河南省洛陽市北魏南平王元暐墓平・断面図（1/200）

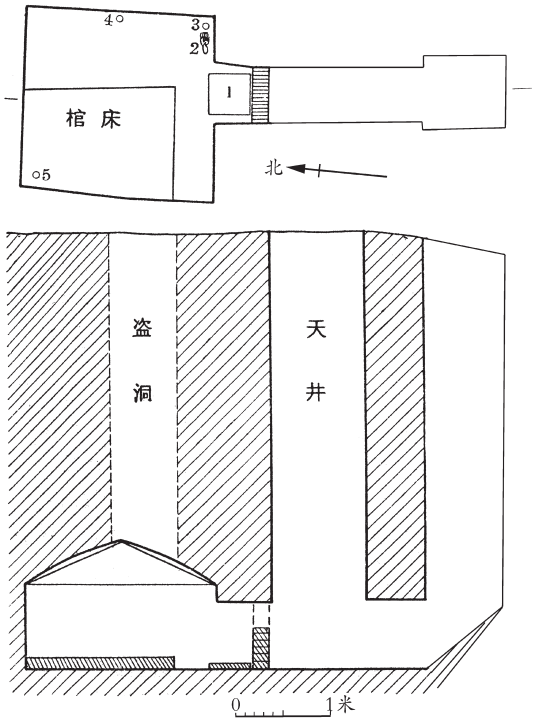


図 4-37 河南省洛陽市北魏常山王元邵墓平･断面図(1/80)

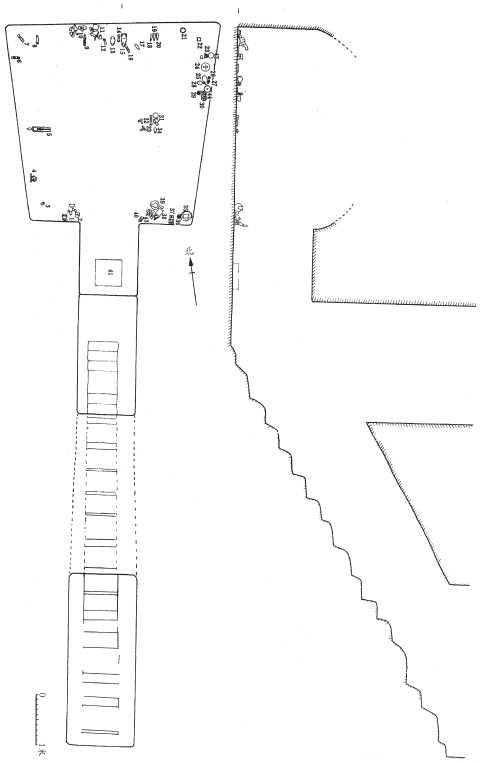


図 4-38 河南省洛陽市北魏河間太守郭定興墓平・断面図 (1/150)

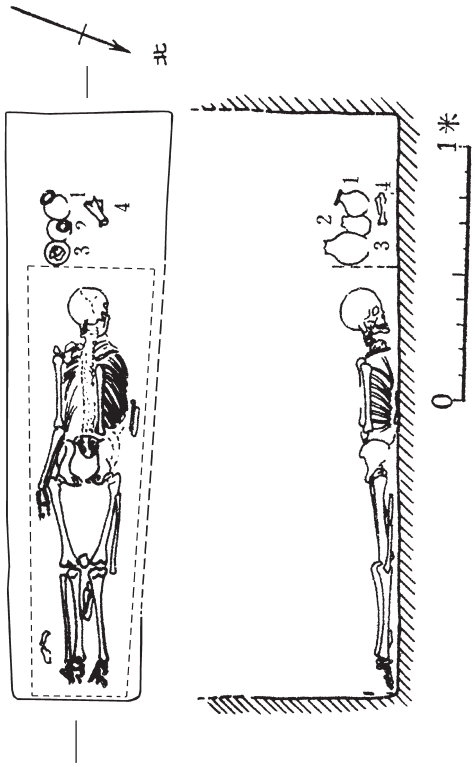


図 4-39 山西省大同市南郊電焊器材庵 M235 平・断面図 (1/30)

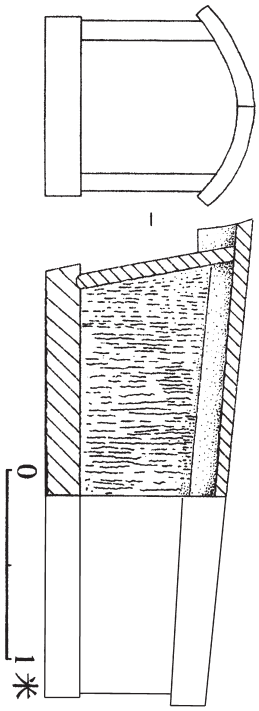


図 4-40 河南省偃師県前杜楼北魏墓出土石棺 正・側断面図 (1/40)

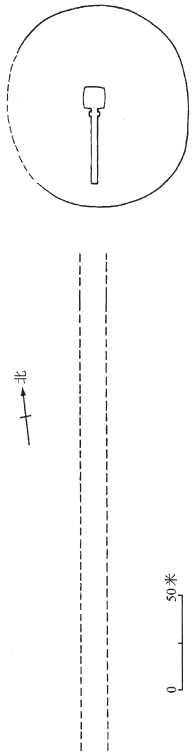


図 4-41 河北省臨漳湾漳 M106 墳丘・神道平面概念図（1/4,000）

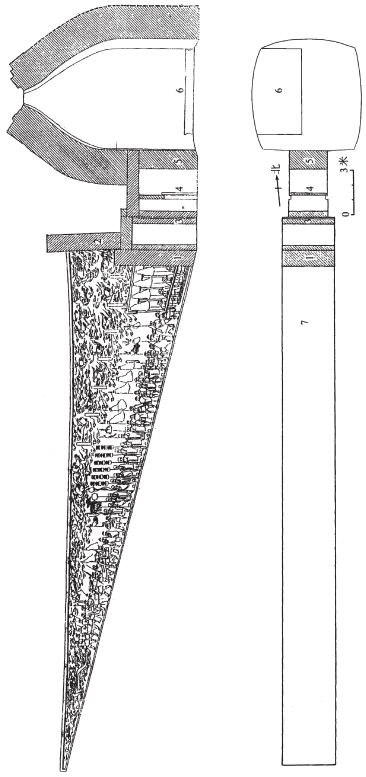


図 4-42 河北省臨漳湾漳 M106 平・断面概念図（1/500）

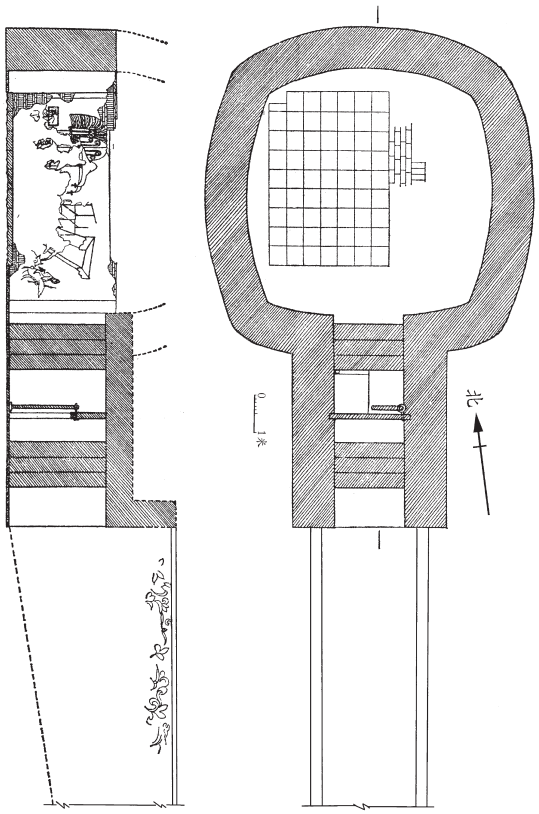


図 4-43 河北省磁県北斉高潤墓平・断面図（1/200）

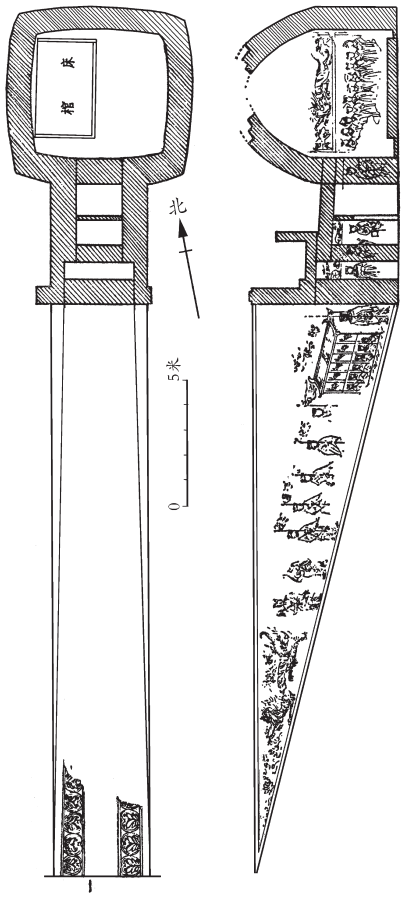


図 4-44 河北省磁県東魏茹茹公主墓平・断面概念図（1/300）

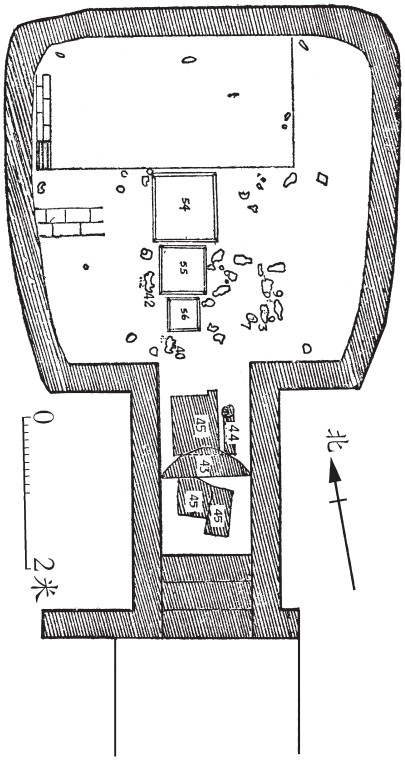


図 4-46 河南省安陽市北斉范粋墓平面図（1/60）

図 4-45 河北省磁県北斉堯峻墓平面図（1/100）

図 4-48 河南省安陽市固岸墓地Ⅱ区 M57 囲屏石榻

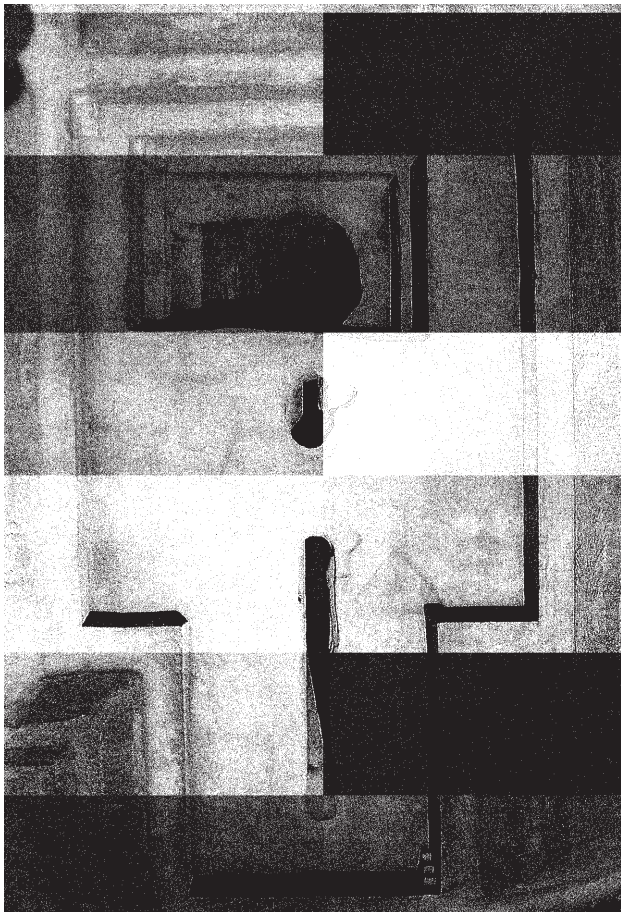


図 4-47 河北省磁県東魏元祜墓俯瞰写真

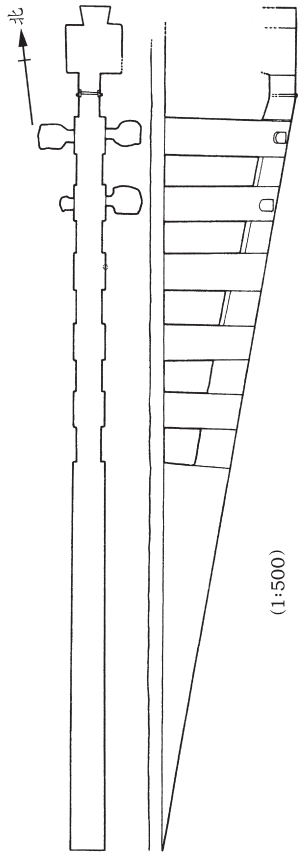


図 4-49 陝西省咸陽市北周武帝孝陵平・断面図

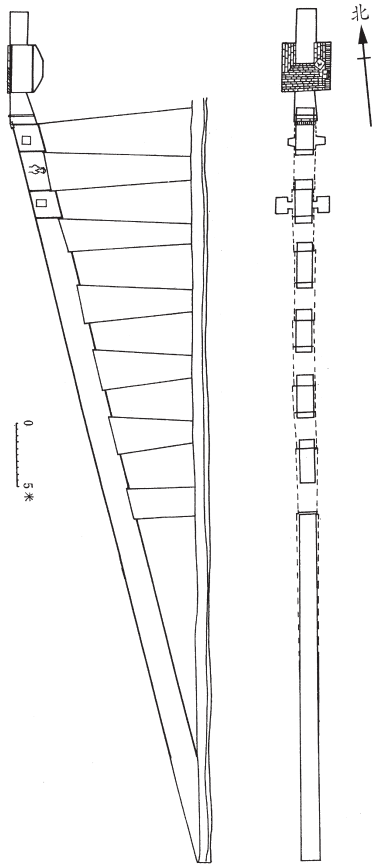


図 4-50 陝西省咸陽市北周叱羅協墓平・断面図（1/600）

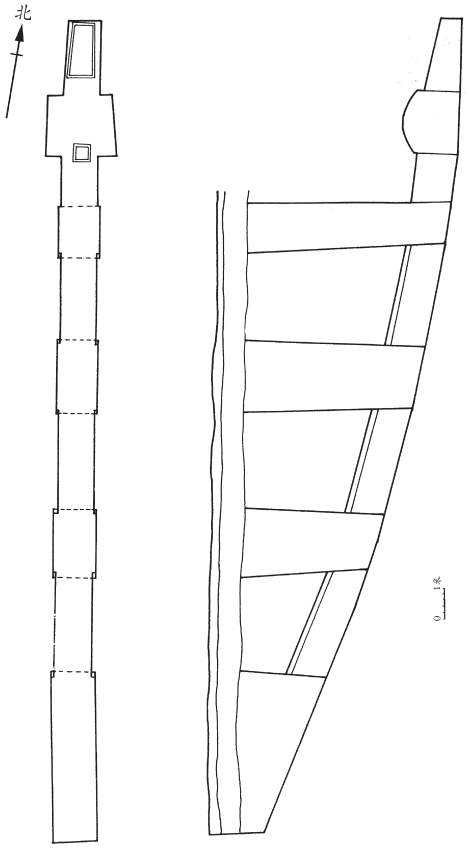


図 4-51 陝西省咸陽市北周若干云墓平・断面図（1/250）

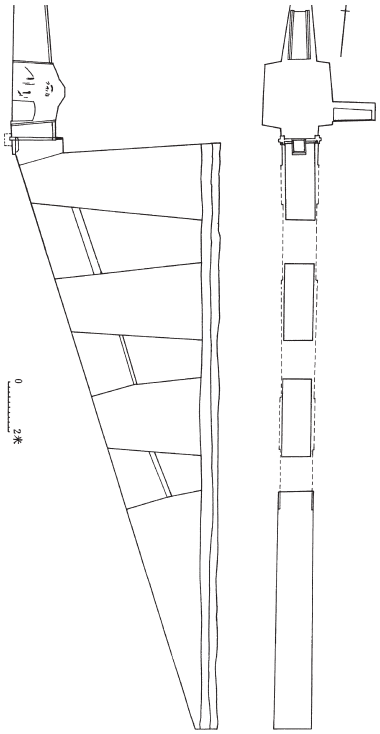


図 4-52 陝西省咸陽市北周独孤蔵墓平・断面図（1/300）

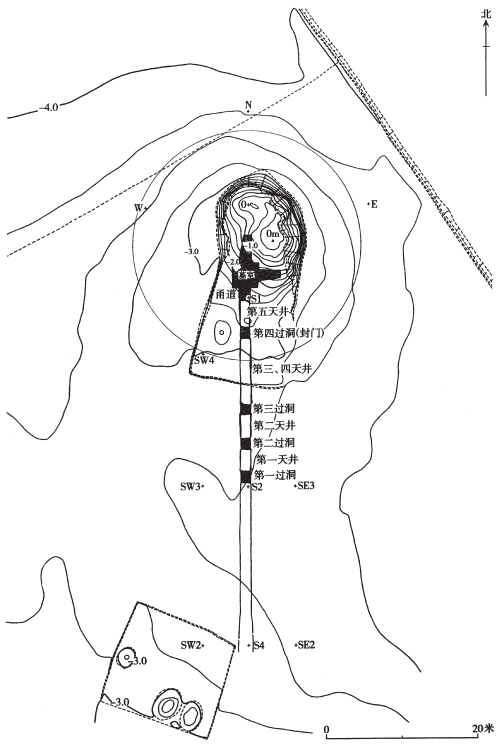


図 4-53 寧夏固原北周田弘墓墳丘・墓葬平面図（1/1,000）

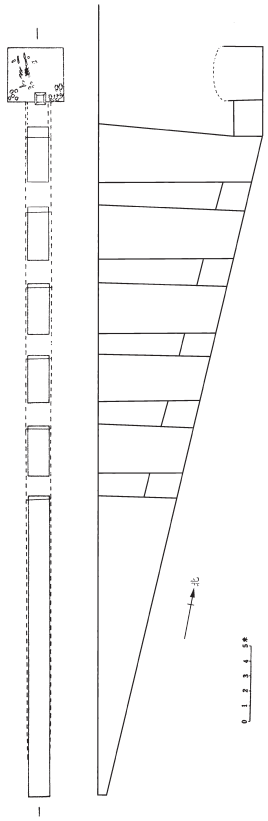


図 4-54 陝西省咸陽市北周宇文俭墓平・断面図（1/500）

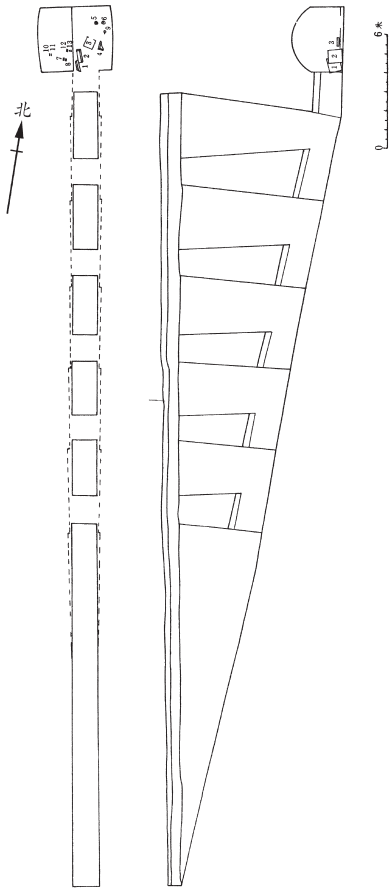


図 4-55 陝西省咸陽市北周尉遲運墓平・断面図（1/400）

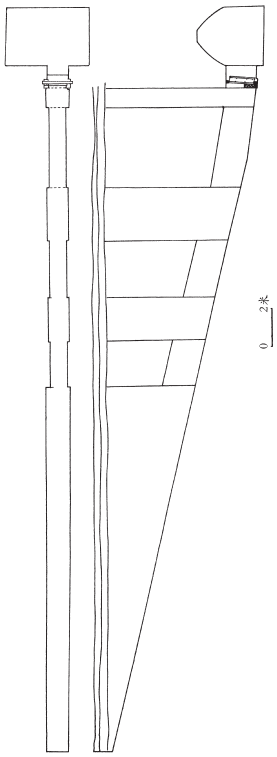


図 4-56 陝西省咸陽市北周王徳衡墓平・断面図（1/400）

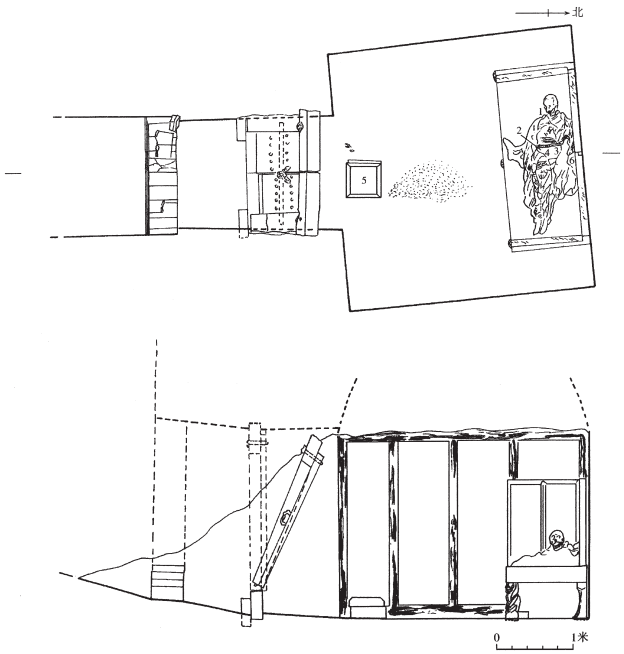


図 4-57 陝西省西安市北郊北周康業墓平･断面図（1/100）

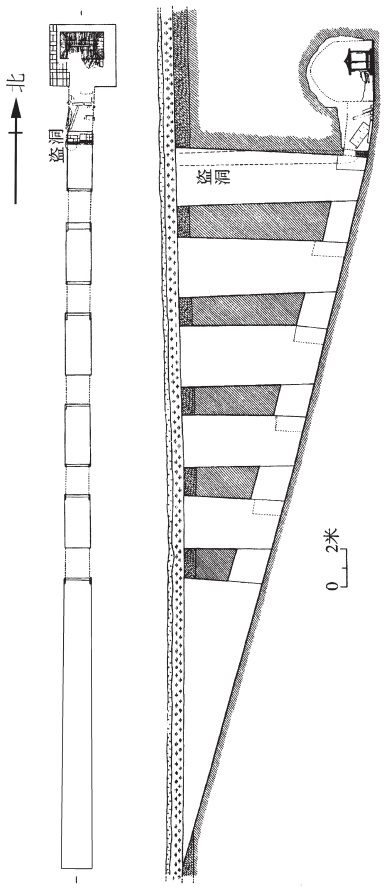


図 4-58 陝西省西安市北郊北周史君墓平・断面図（1/400）

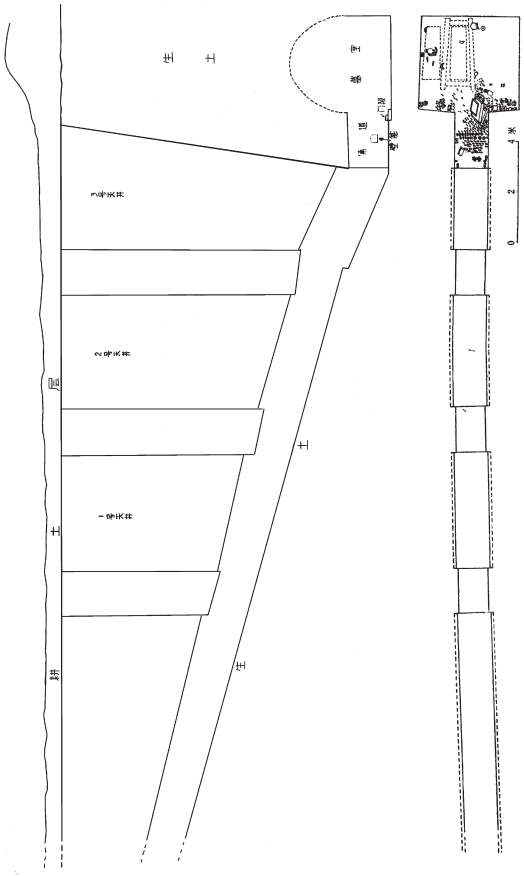


図 4-59 寧夏固原北周李賢墓平・断面図（1/300）

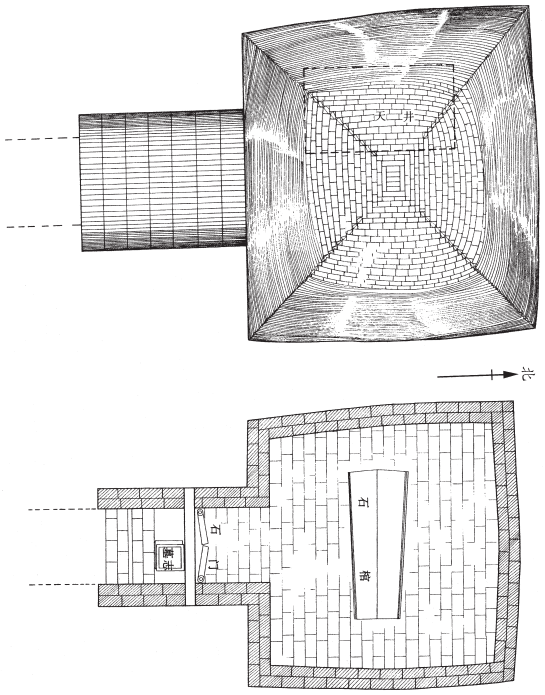


図 4-60 陝西省西安市北郊北周李誕墓平面図

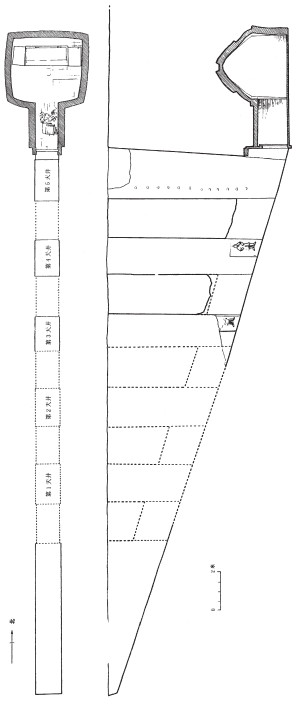


図 4-61 陝西省西安市北郊北周安伽墓平・断面図（1/400）

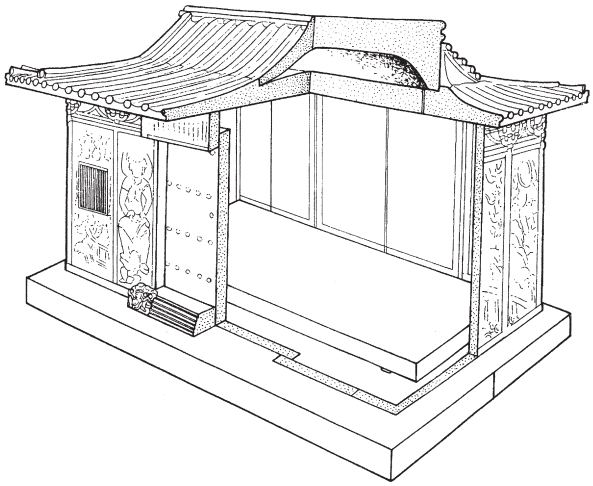


図 4-62 陝西省西安市北郊北周史君墓石椁・石榻透視概念図

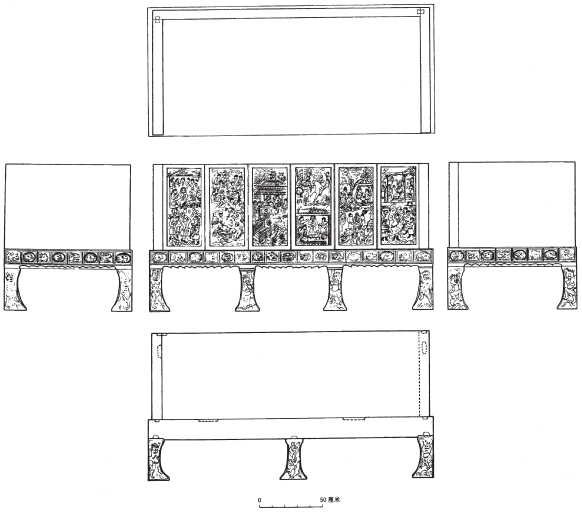


図 4-63 陝西省西安市北郊北周安伽墓囲屏石榻（1/60）

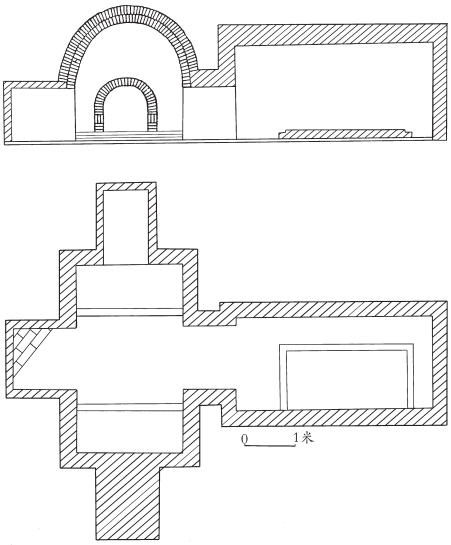


図 4-64 湖北鄂城孫呉孫将軍墓平・断面図（1/150）

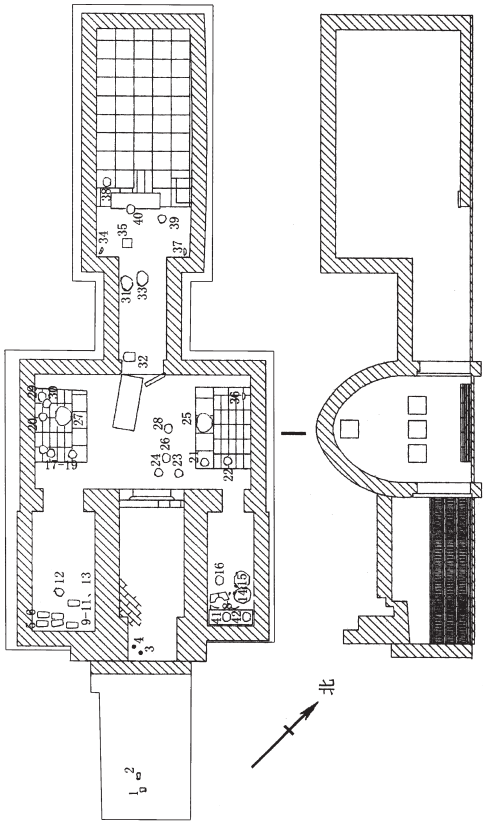


図 4-65 安徽省馬鞍山市宋山孫呉墓平・断面図

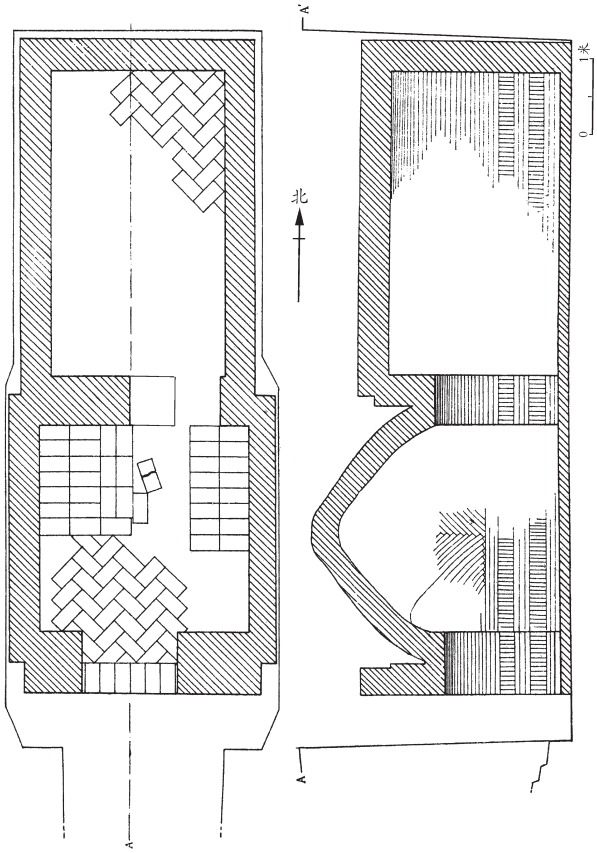


図 4-66 安徽省馬鞍山市孫呉朱然墓平・断面図（1/100）

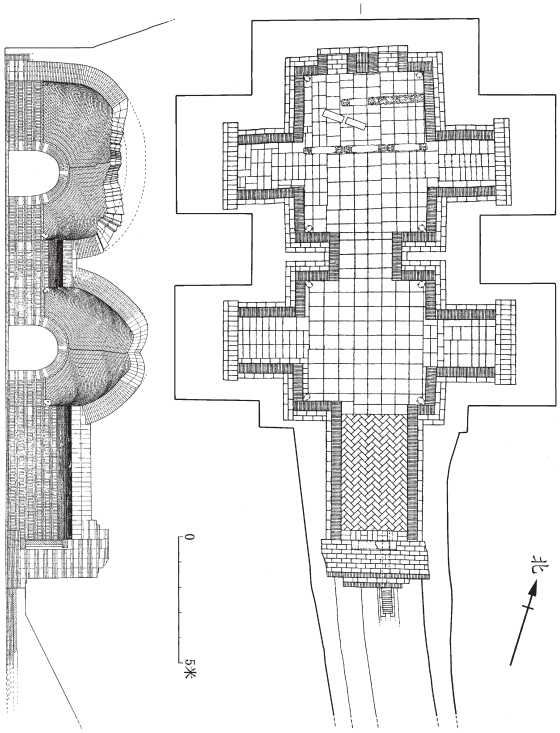


図 4-67 江蘇省南京市江寧上坊孫呉 M1 平・断面図（1/300）

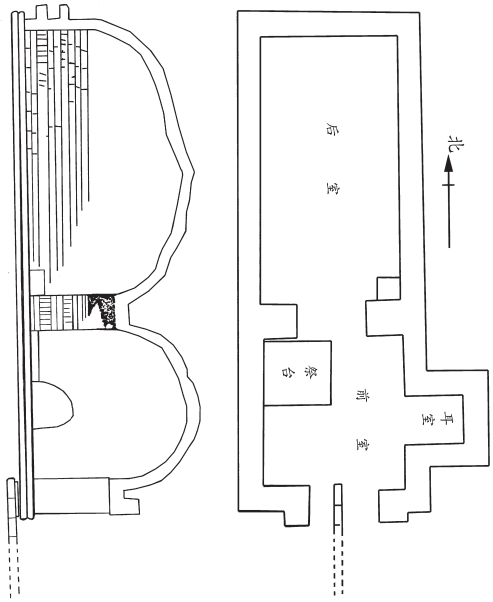


図 4-68 江蘇省南京市清凉山孫呉墓平・断面図

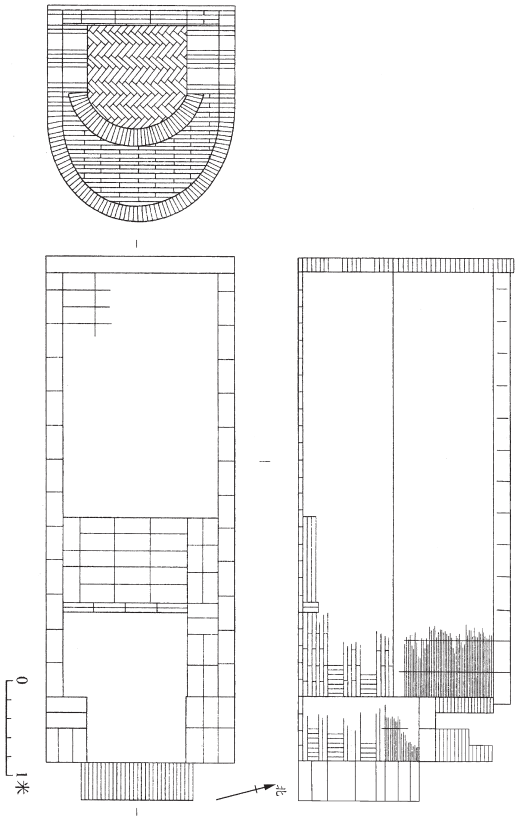


図 4-69 江蘇省南京市大光路薛秋墓平・断面図（1/80）

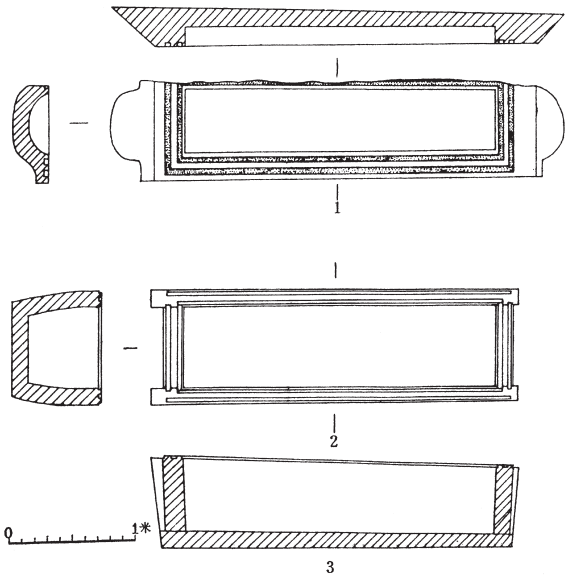


図 4-70 安徽省馬鞍山市孫呉朱然墓一号木棺結構概念図（1/60）

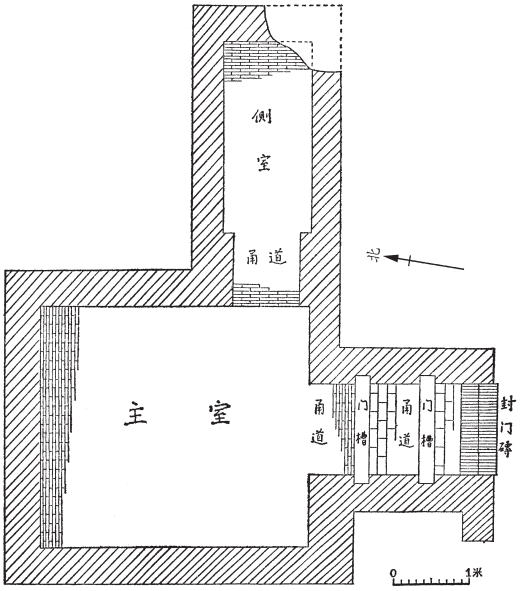


図 4-71 江蘇省南京市大学北園東晋墓平面図（1/100）

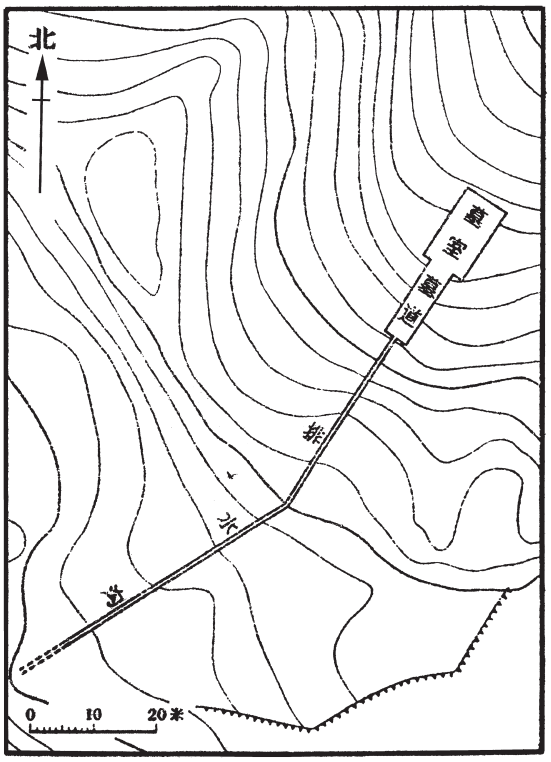


図 4-72 江蘇省南京市富貴山東晋墓地形与平面概念図（1/1,200）

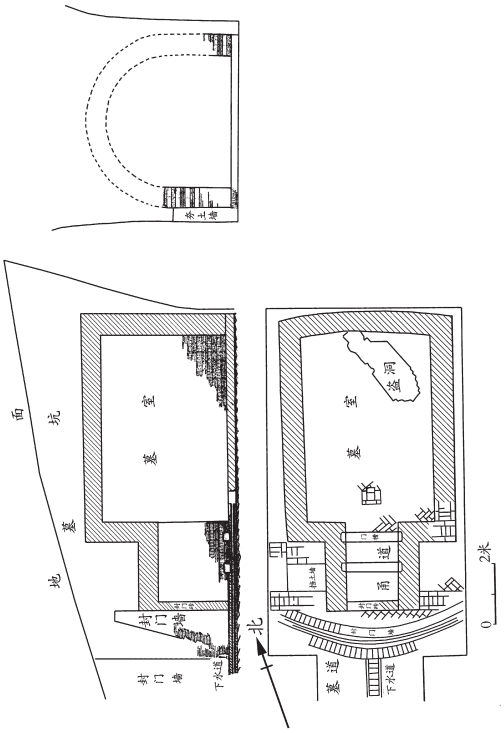


図 4-73 江蘇省南京市富貴山東晋墓平・断面図（1/250）

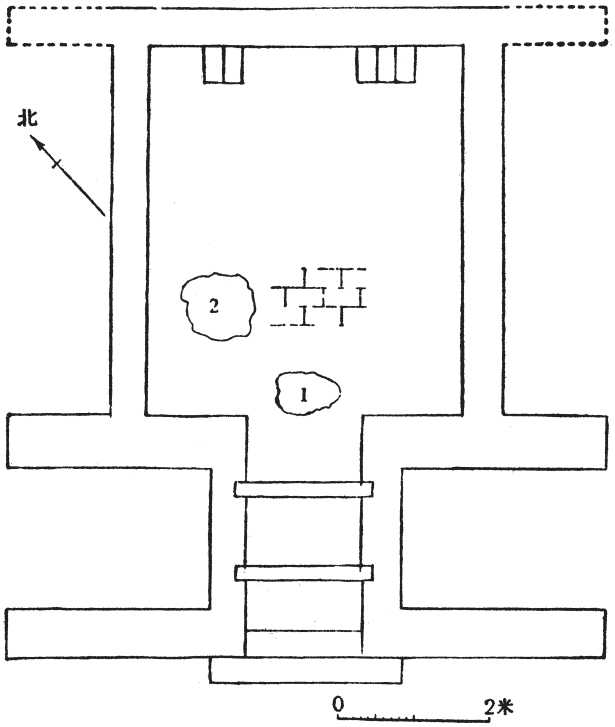


図 4-74 江蘇省南京市北郊汽輸電機庵東晋墓平面図（1/100）

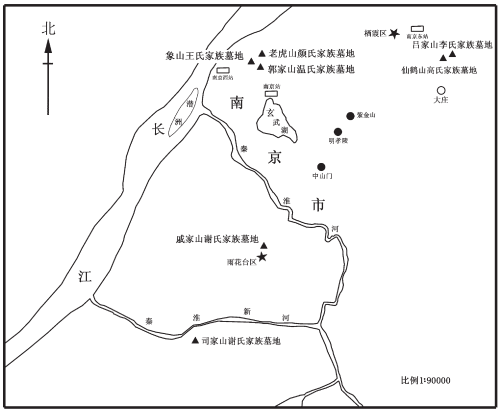


図 4-75 江蘇省南京市東晋世家大族墓地分布概念図

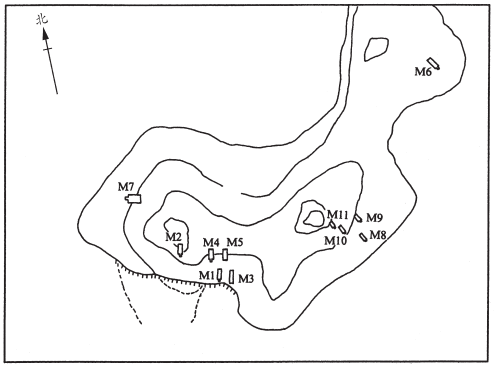


図 4-76 江蘇省南京市東晋象山王氏家族墓分布概念図

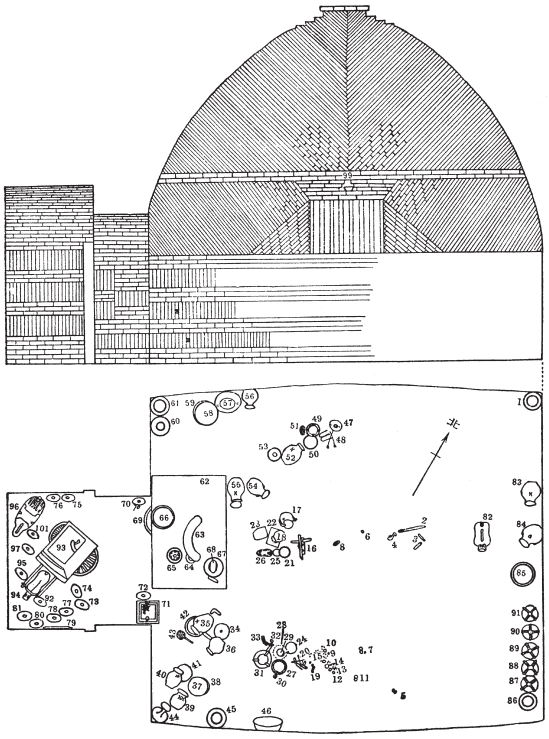


図 4-77 江蘇省南京市東晋象山 M7 平・断面図

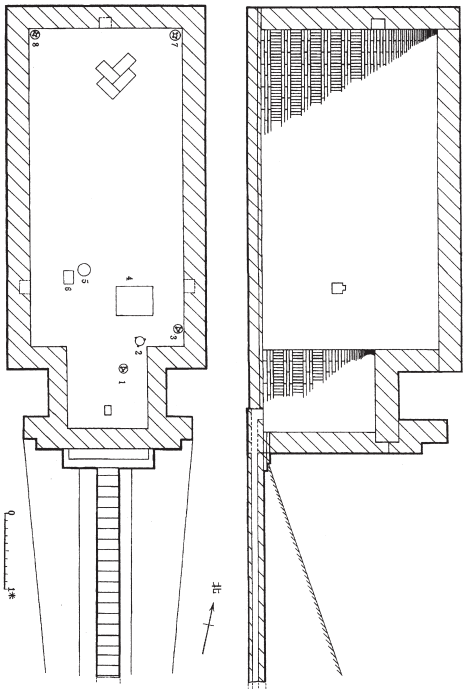


図 4-78 江蘇省南京市東晋象山 M10 平・断面図
(1/100)

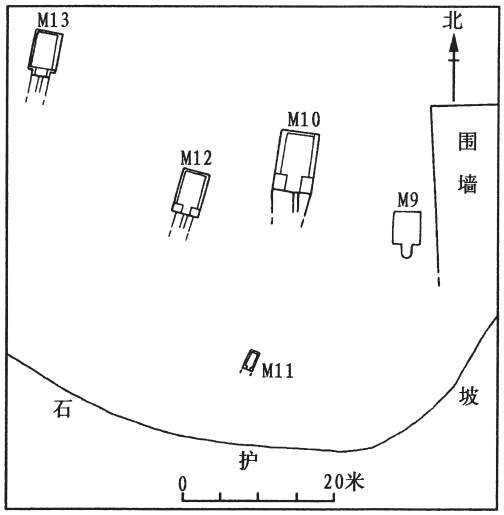


図 4-79 江蘇省南京市東晋郭家山温氏家族墓分布概念図
(1/1,000)

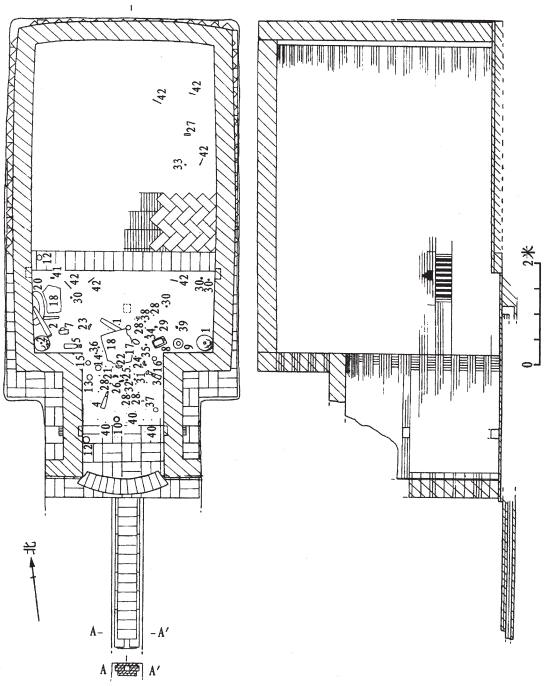


図 4-80 江蘇省南京市東晋郭家山 M13 平・断面図
(1/150)

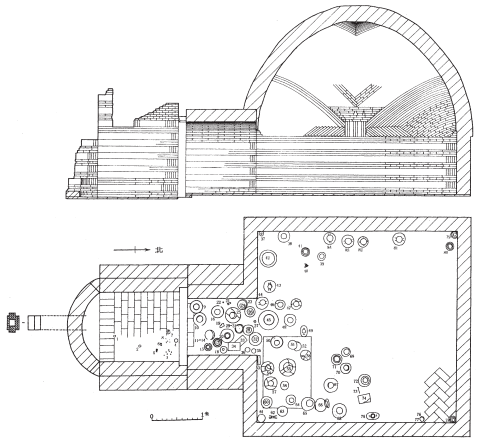


図 4-81 江蘇省南京市東晋郭家山 M9 平・断面図
（1/150）

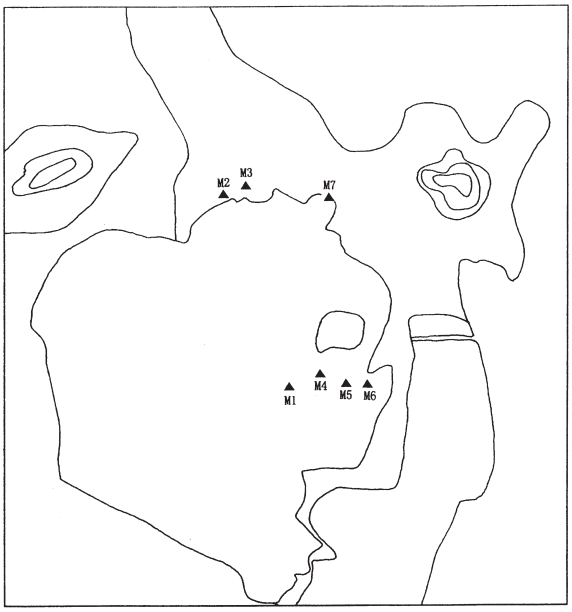


図 4-82 江蘇省南京市東晋司家山謝氏家族墓分布概念図

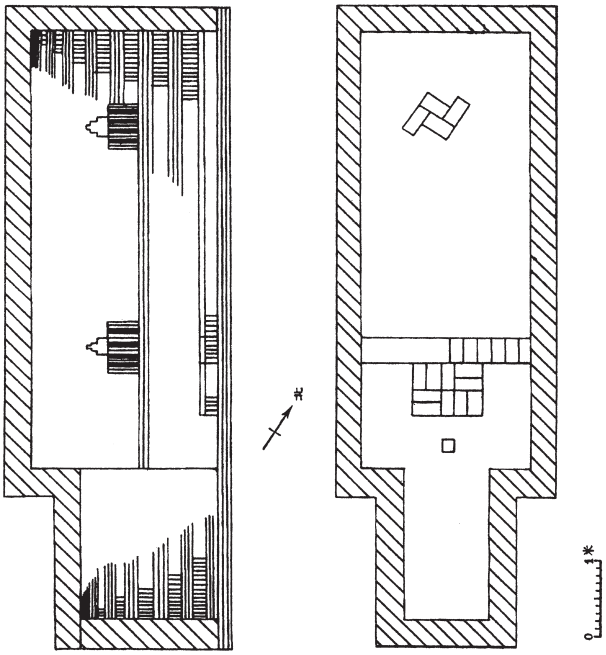


図 4-83 江蘇省南京市東晋司家山 M4 平・断面図
（1/100）

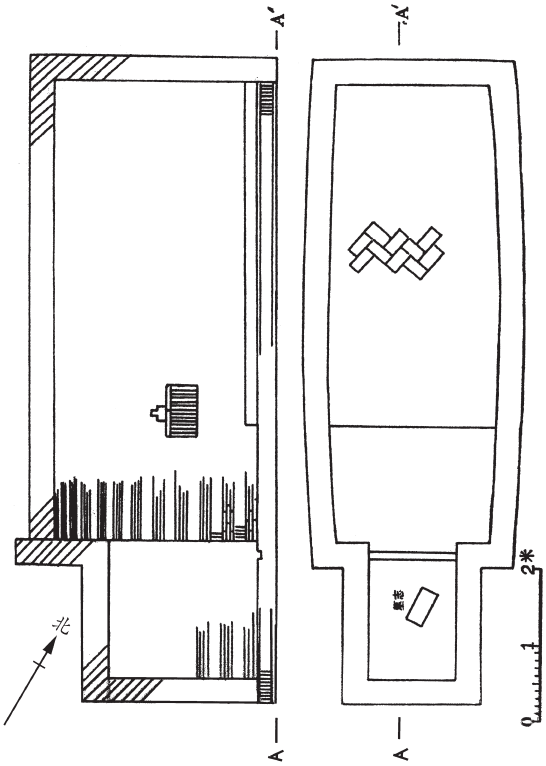


図 4-84 江蘇省南京市東晋司家山 M5 平・断面図
（1/100）

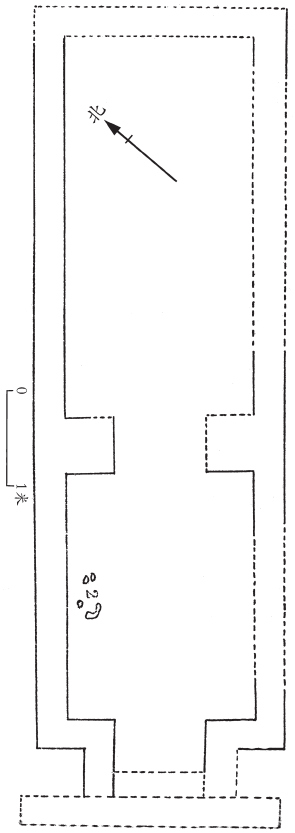


図 4-85 江蘇省南京市東晋戚家山 3 号墓平面概念図
(1/80)

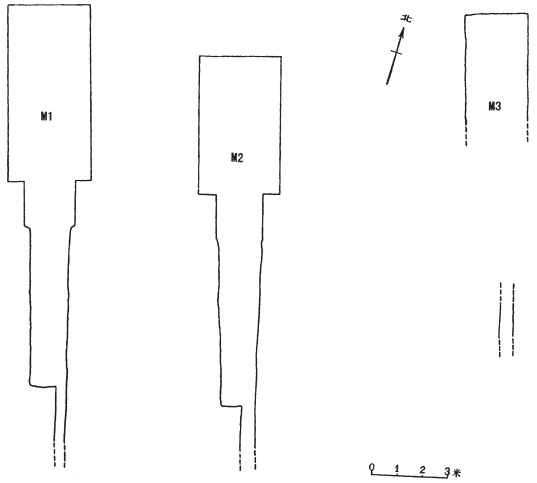


図 4-86 江蘇省南京市東晋呂家山李氏家族墓分布図
(1/300)

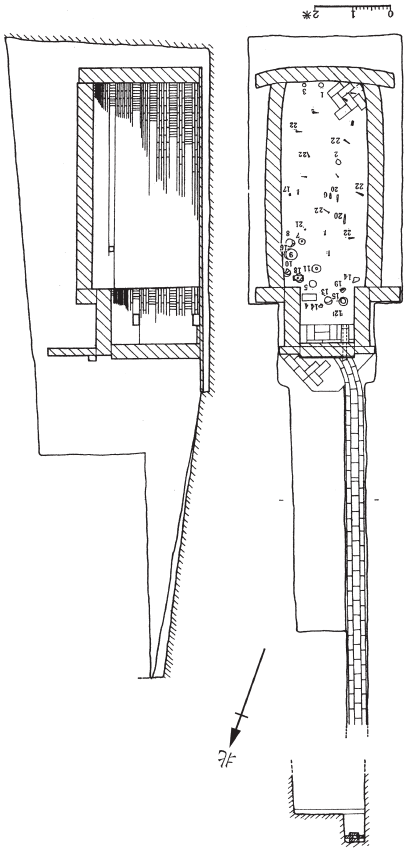


図 4-87 江蘇省南京市東晋呂家山 M1 平・断面図
(1/200)

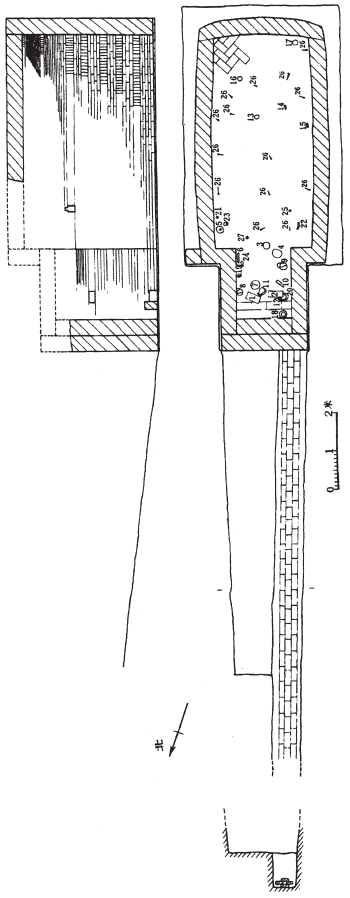


図 4-88 江蘇省南京市東晋呂家山 M2 平・断面図
(1/200)

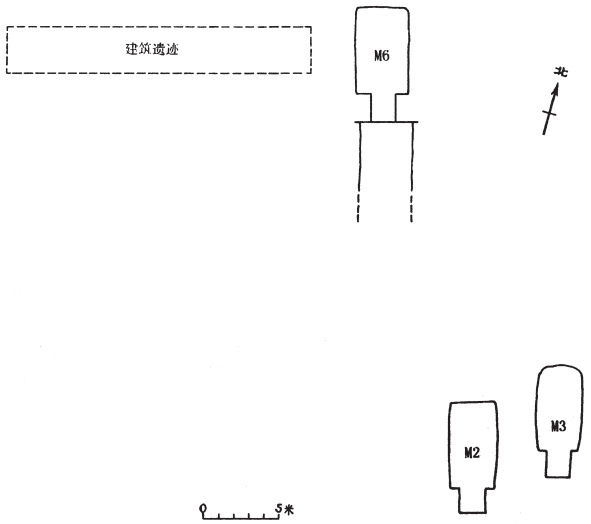


図 4-89 江蘇省南京市東晋仙鶴山高氏家族墓分布概念図（1/500）

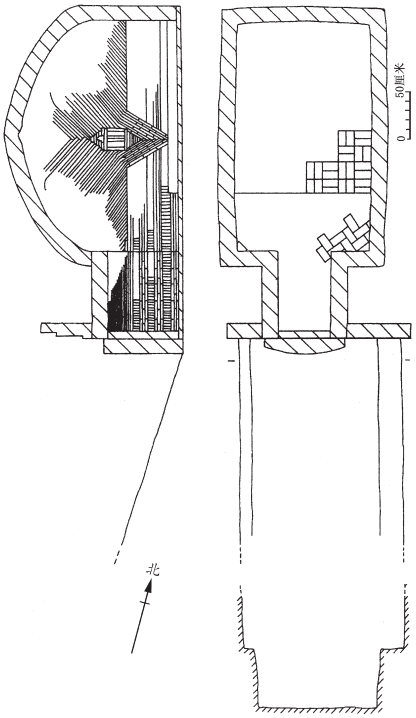


図 4-90 江蘇省南京市東晋仙鶴山 M6 平・断面図（1/80）

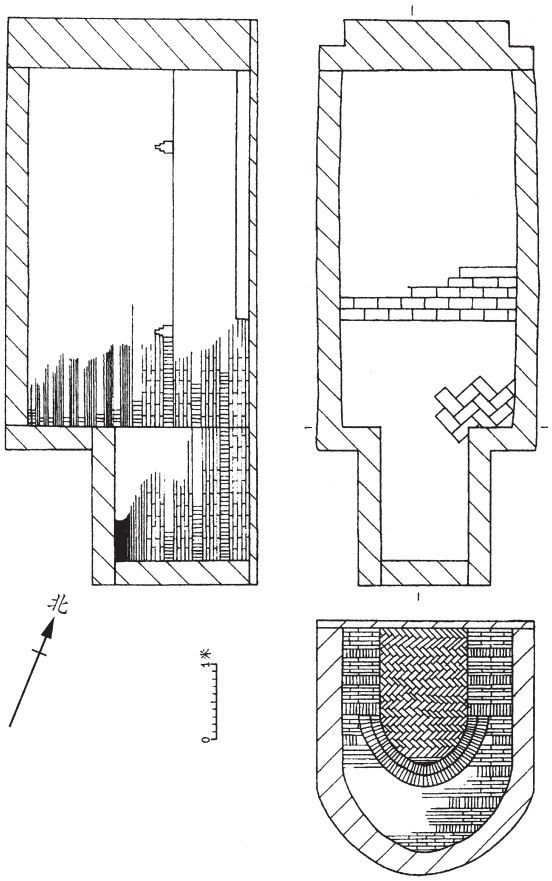


図 4-91 江蘇省南京市東晋仙鶴山 M2 平・断面図（1/100）

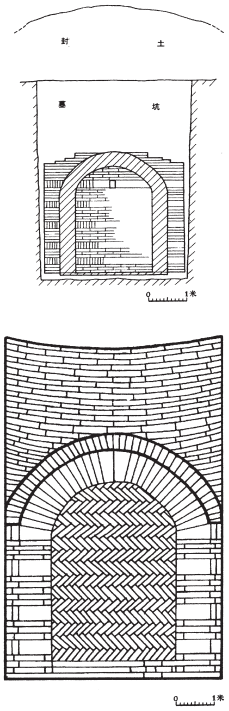


図 4-92 江蘇省南京市東晋呂家山 M1 墳丘、墓坑断面図（1/200）

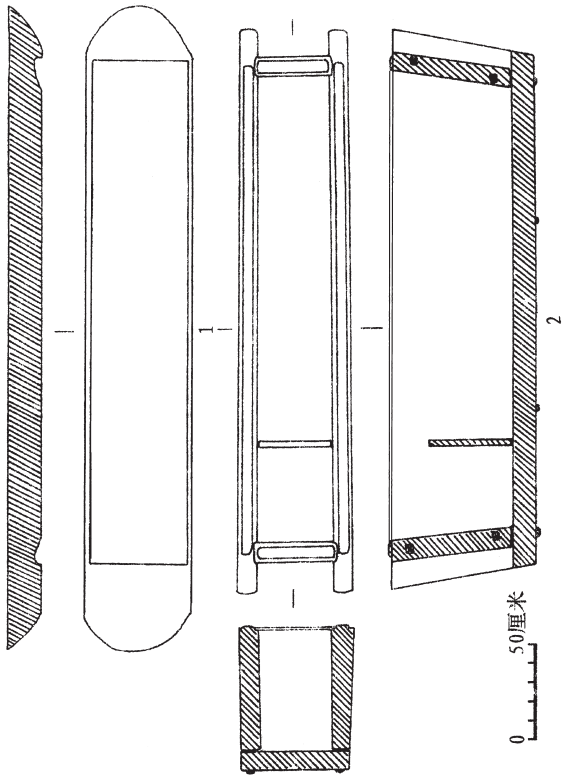


図 4-93 江蘇省江寧県下坊村東晋墓出土木棺平・断面図（1/40）

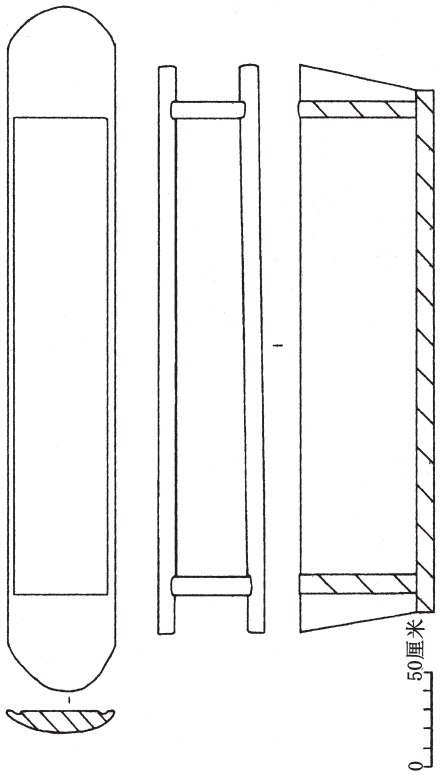


図 4-94 江蘇省南京市東晋仙鶴山 M2 出土木棺復原概念図（1/40）

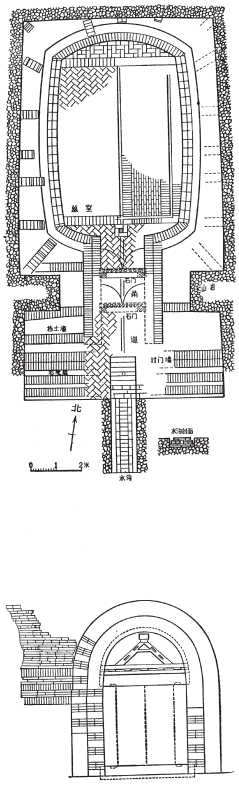


図 4-95 江蘇省丹陽胡橋仙鶴坳南朝墓平・立面図（1/300）

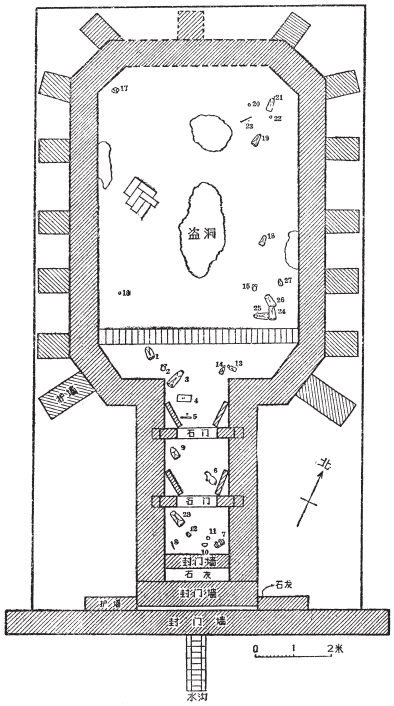


図 4-96 江蘇省丹陽胡橋呉家村南朝墓平面図（1/200）

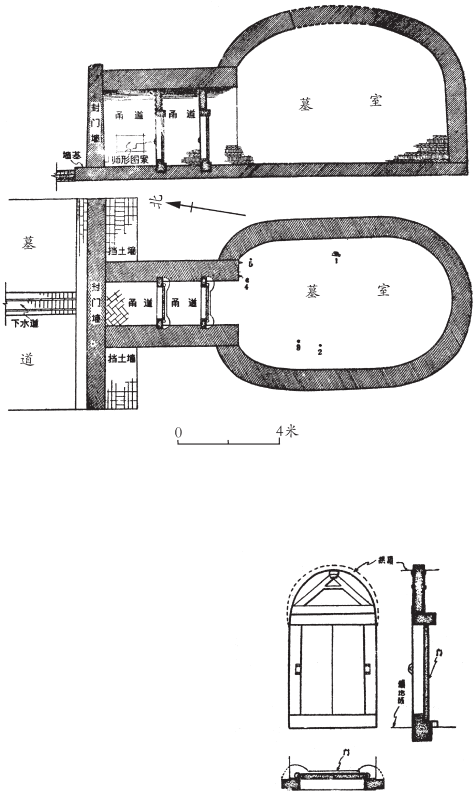


図 4-97 江蘇省南京市西善橋油坊村罐子山南朝墓平・断面図（1/300）

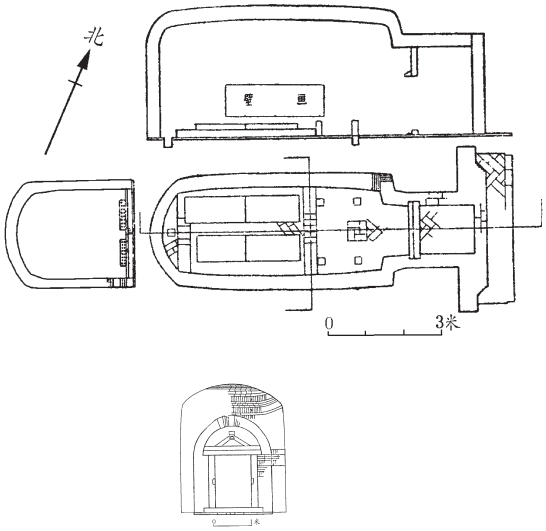


図 4-98 江蘇省南京市西善橋宮山南朝墓平・断面図（1/200）

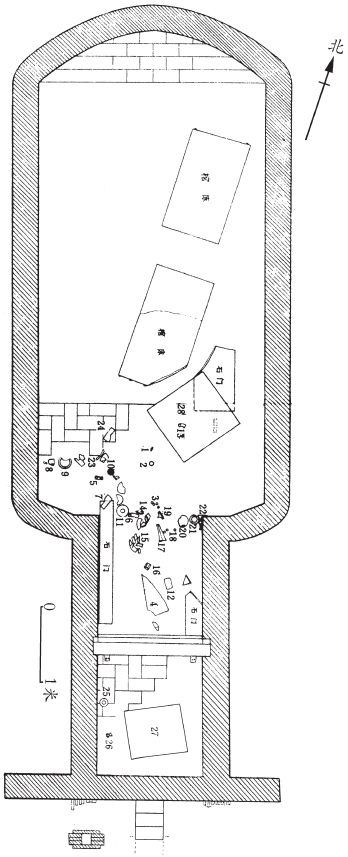


図 4-99 江蘇省南京市梁桂陽王蕭象墓平面図（1/100）

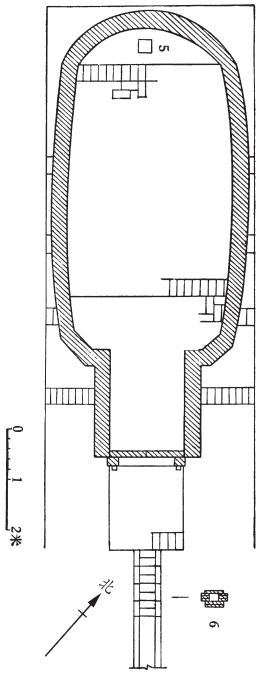


図 4-100 江蘇省南京市梁安成王蕭秀墓平面図（1/150）

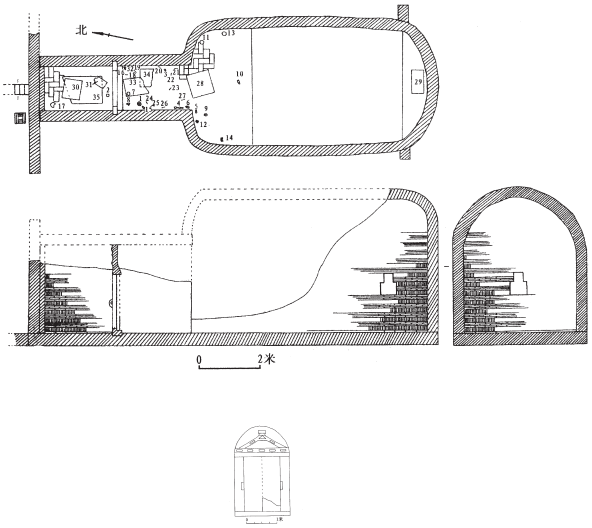


図 4-101 江蘇省南京市梁臨川王蕭宏墓平・断面図
(1/250)

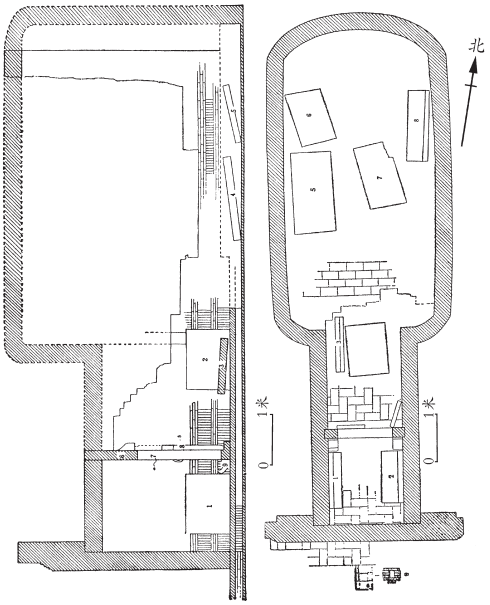


図 4-102 江蘇省南京市梁南平王蕭偉墓平・断面図
(1/150)

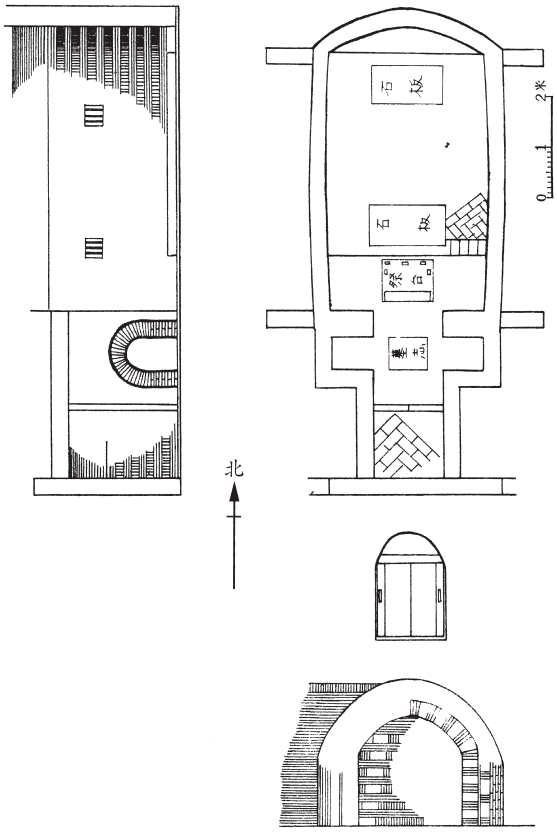


図 4-103 江蘇省南京市陳義陽郡公黄法墓平・断面図
(1/150)

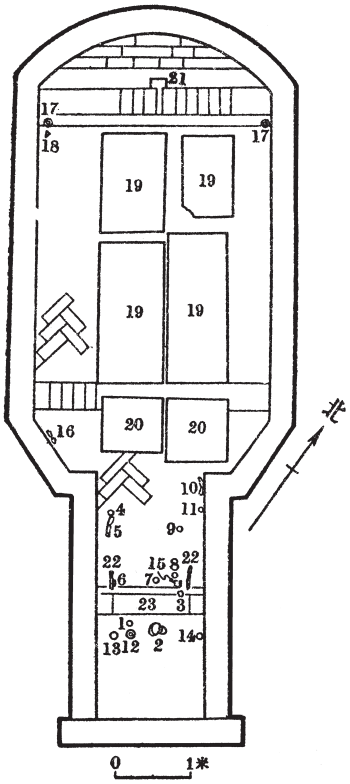


図 4-104 江蘇省南京市蔡家塘 1 号墓平面図 (1/100)

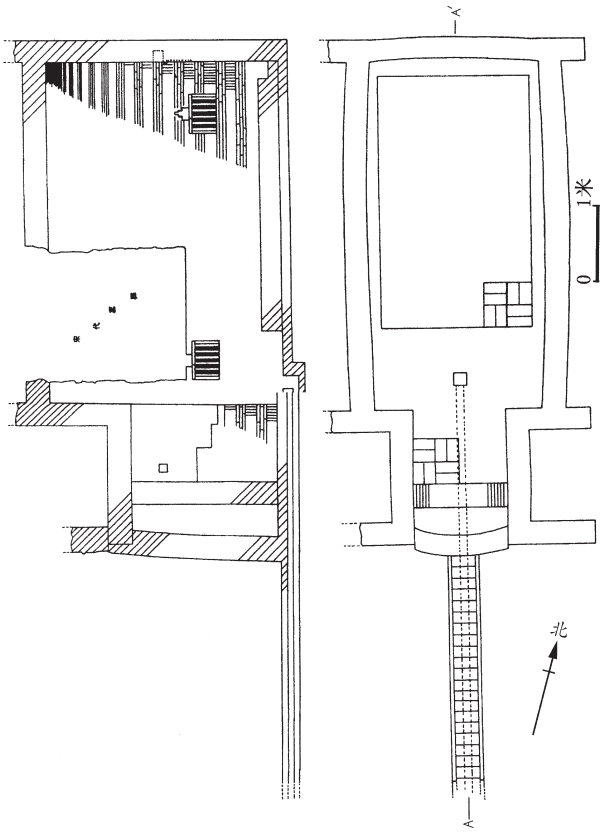


図 4-105 江蘇省南京市宋海陵太守謝琉墓平・断面図 (1/100)

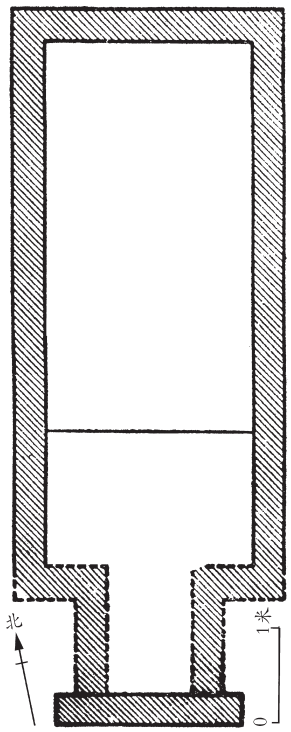


図 4-106 江蘇省南京市宋武原県令明曇憘墓平面図 (1/80)

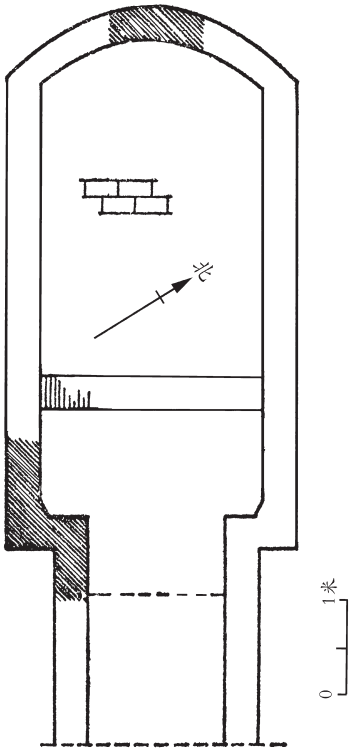


図 4-107 江蘇省南京市燕子磯梁輔国将軍墓平面図(1/80)

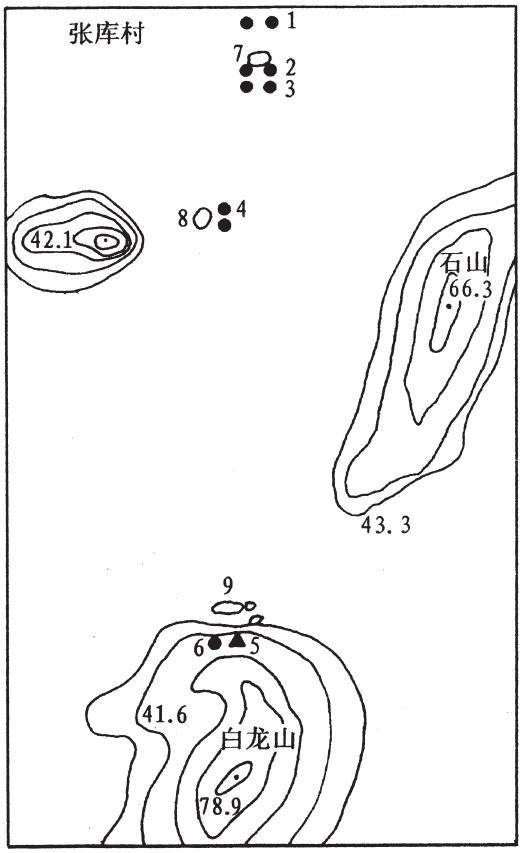


図 4-108 江蘇省南京市梁臨川王蕭宏墓地形図

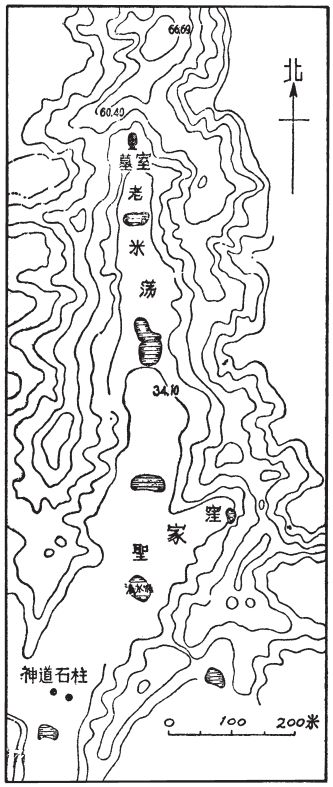


図 4-109 江蘇省南京市梁南平王蕭偉墓地形図
(1/12,000)

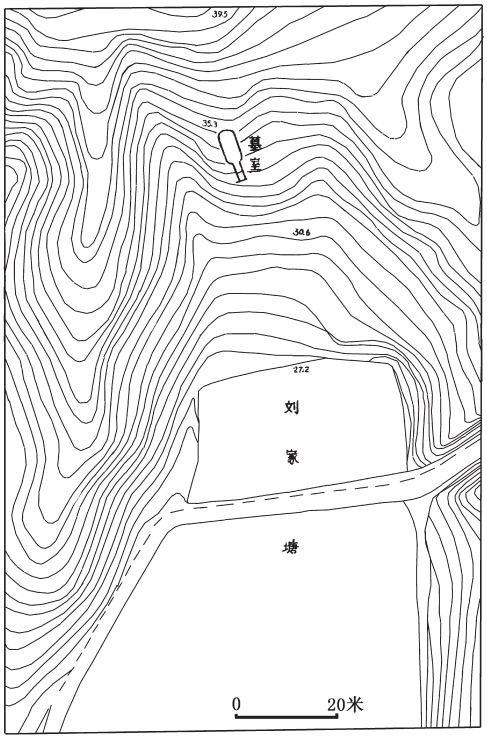


図 4-110 江蘇省南京市梁桂陽王蕭象墓地形図
(1/1,500)

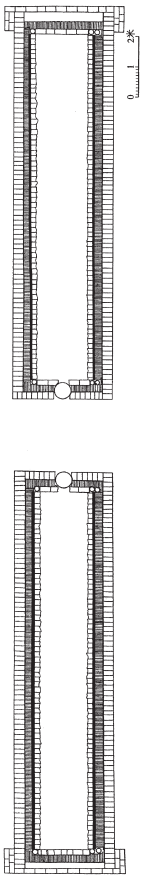


図 4-111 江蘇省南京市梁南平王蕭偉墓阙平面
復原概念図 (1 /250)

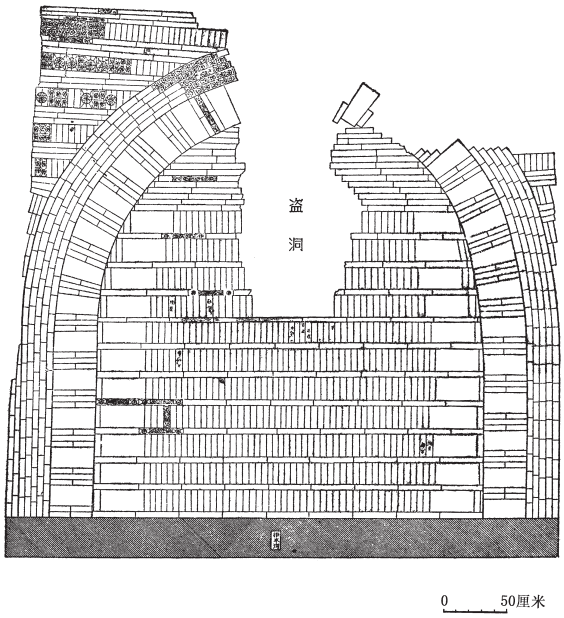


図 4-112 江蘇省南京市梁南平王蕭偉墓封門墻 (1/60)

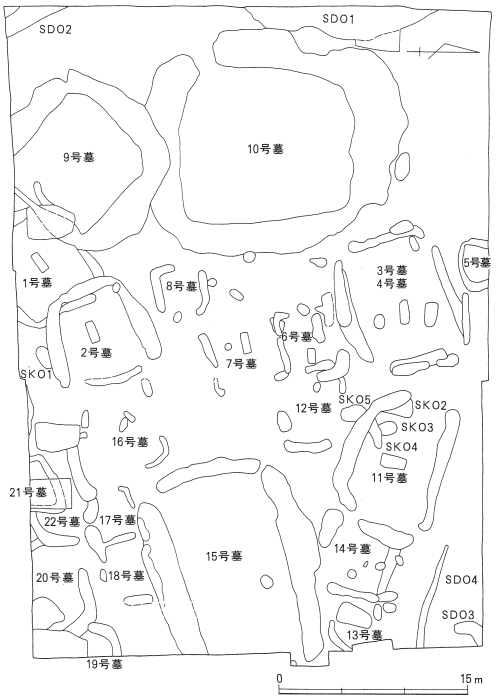


図 5- 1　兵庫県東武庫遺跡

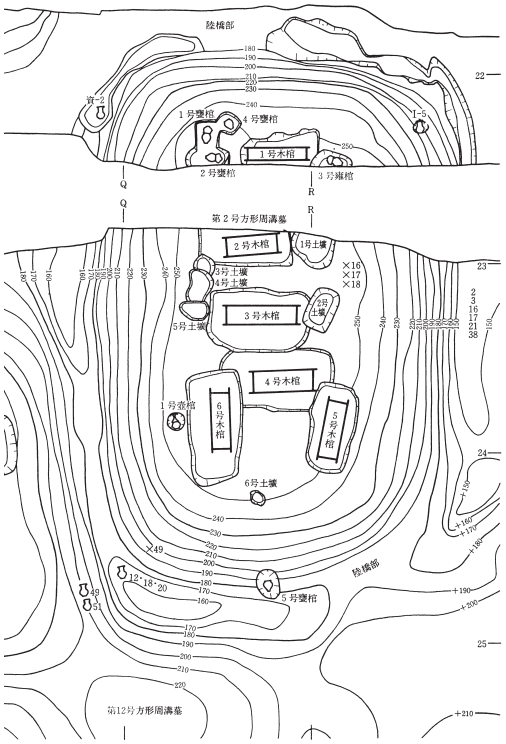


図 5-2　大阪府瓜生堂２号方形周溝墓

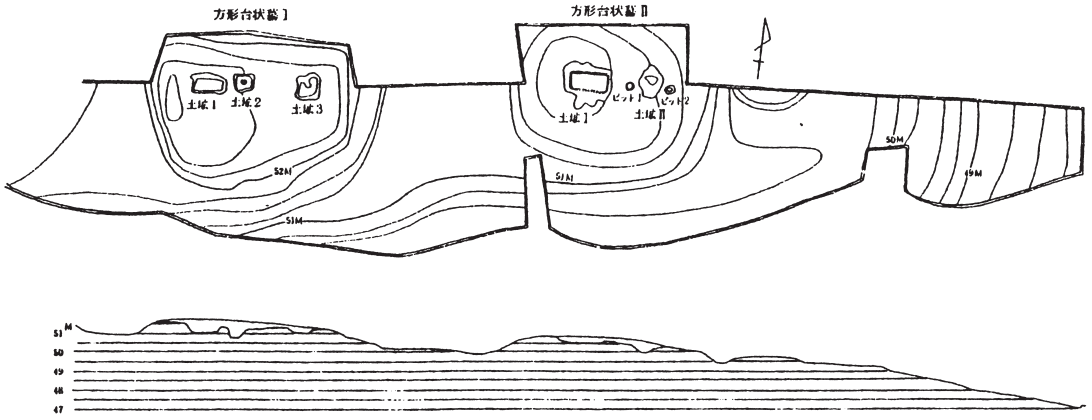


図 5-3　京都府七尾遺跡

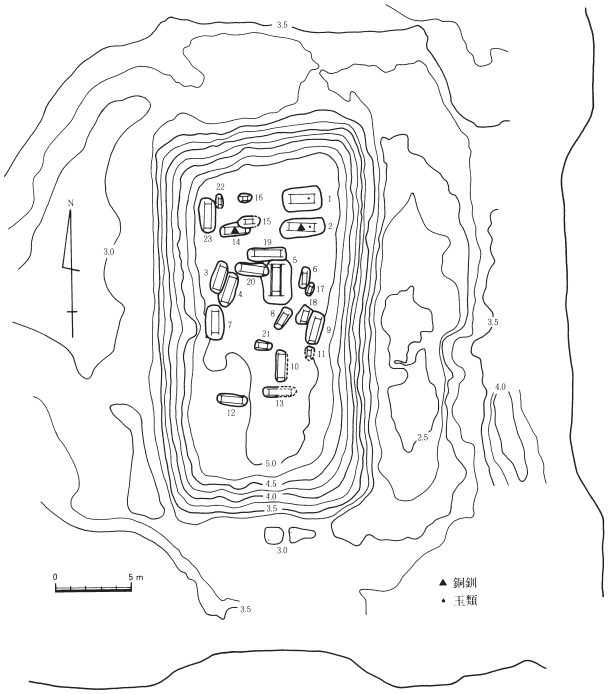


図 5-4　大阪府加美Ｙ１方形周溝墓平面図（1/500）

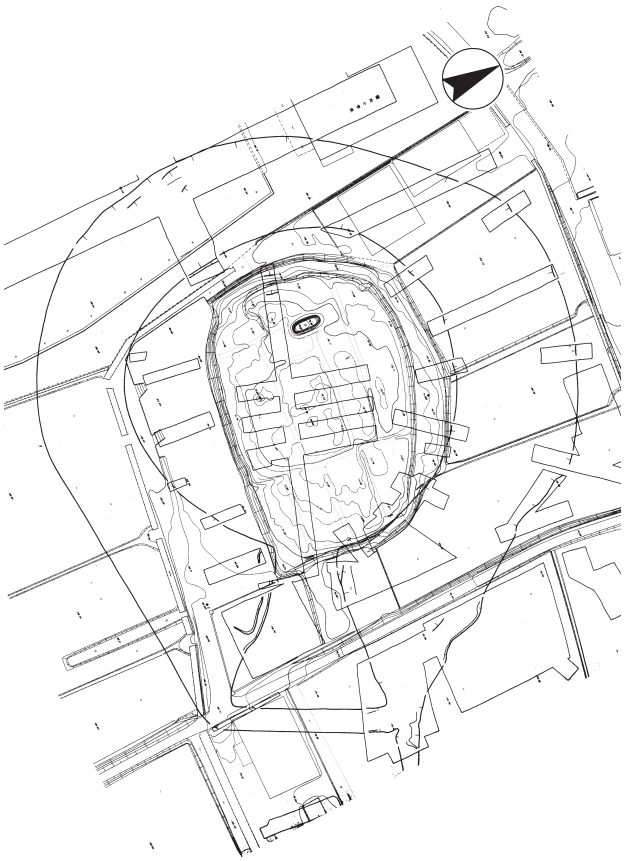


図 5-5　奈良県纒向石塚墳丘墓平面図（1/1,500）

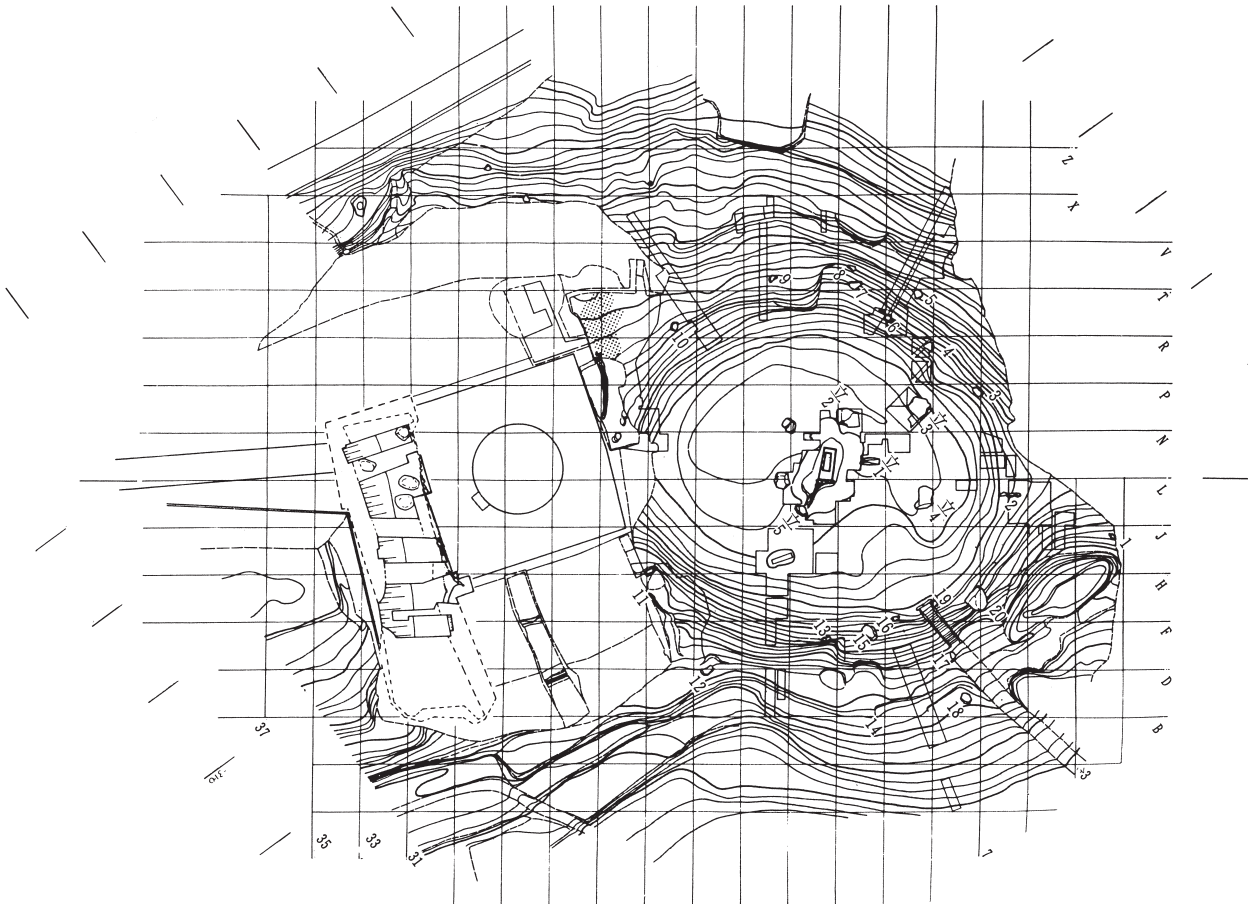


図 5-6　岡山県楯築墳丘墓平面図（1/800）

図 5-7　島根県西谷３号墳平面図（1/800）

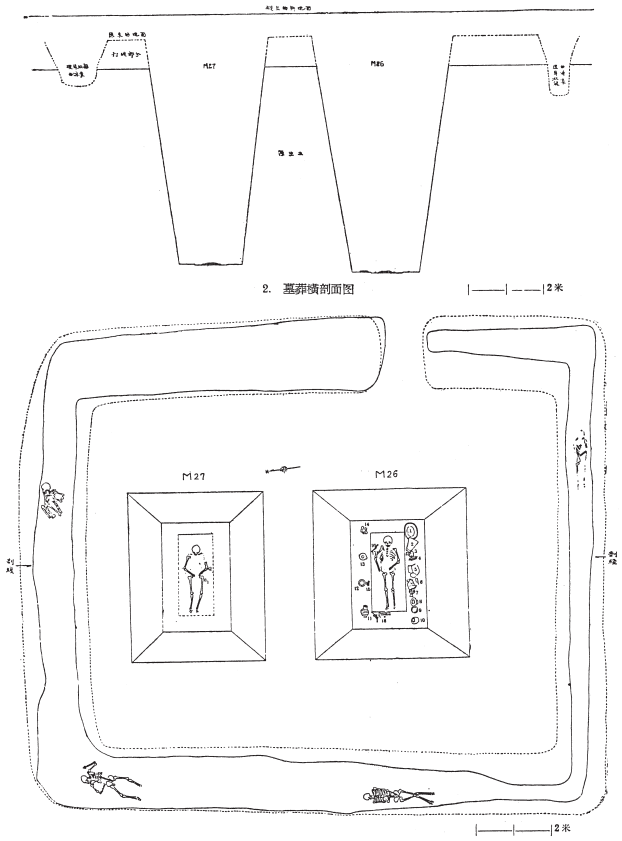


図 5-8

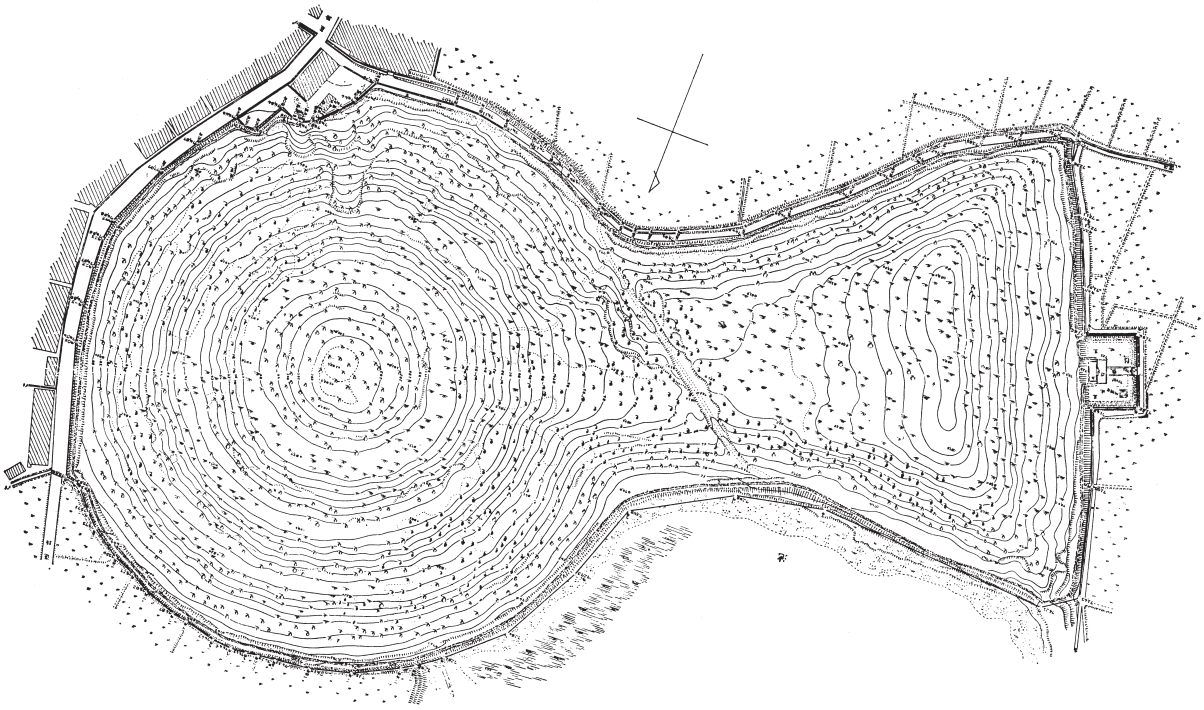


図 5-9　奈良県箸墓古墳平面図（1/2,000）

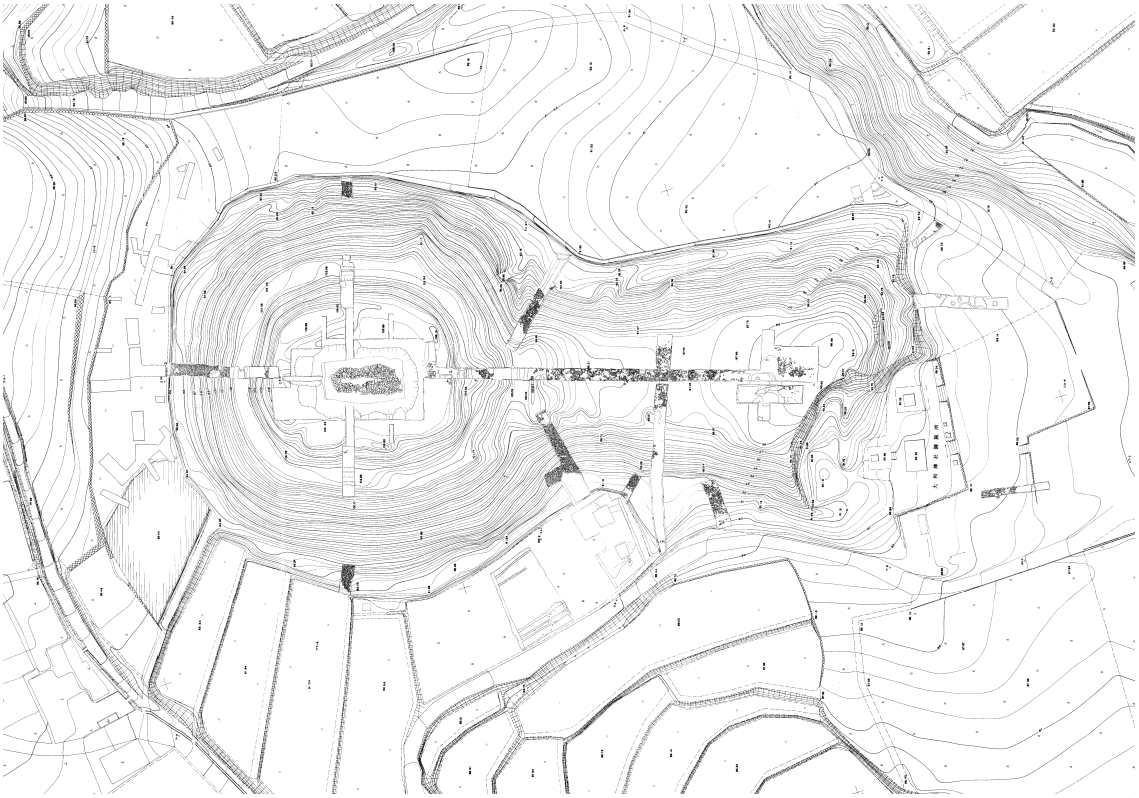


図 5-10　奈良県中山大塚古墳平面図（1/1,200）

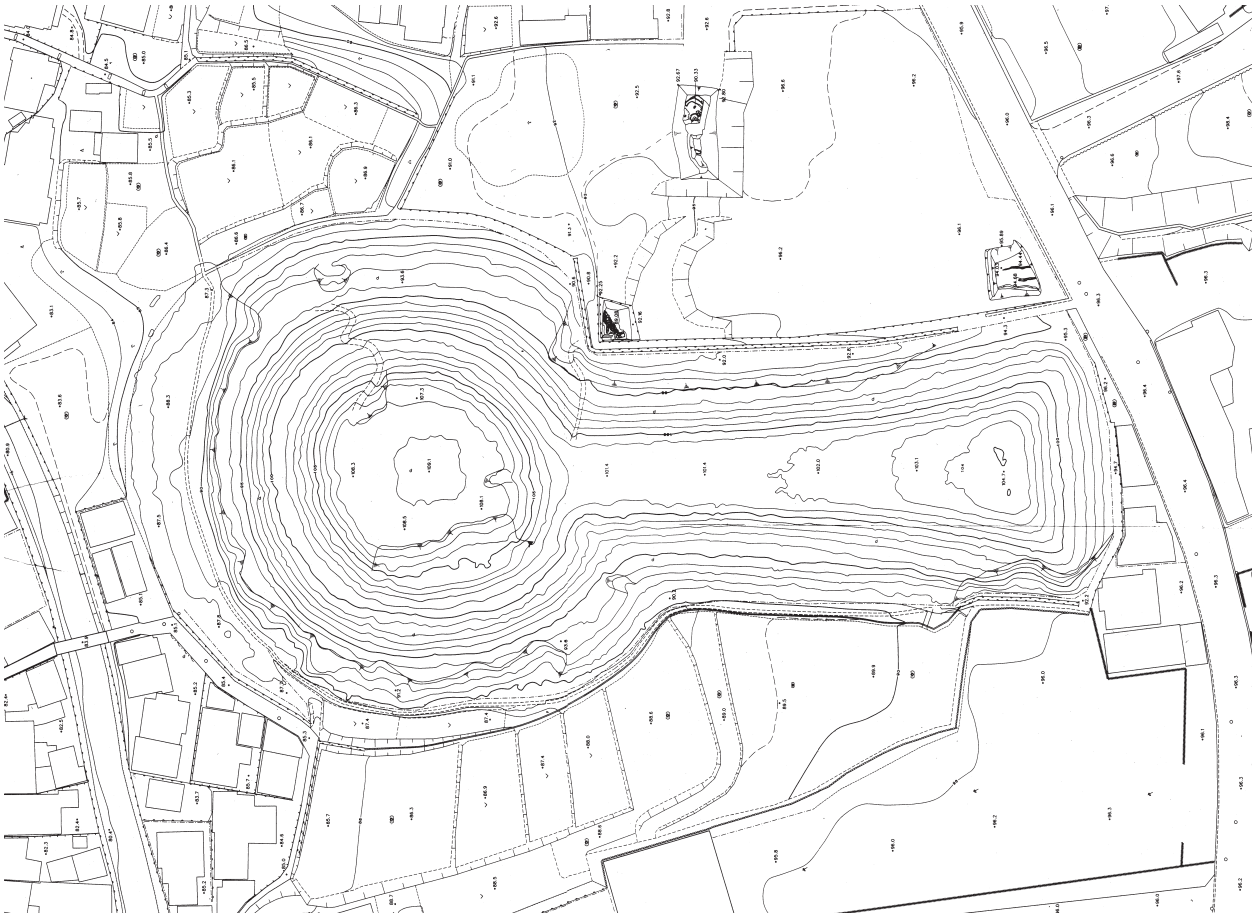


図 5-11　奈良県桜井茶臼山古墳平面図（1/1,500）

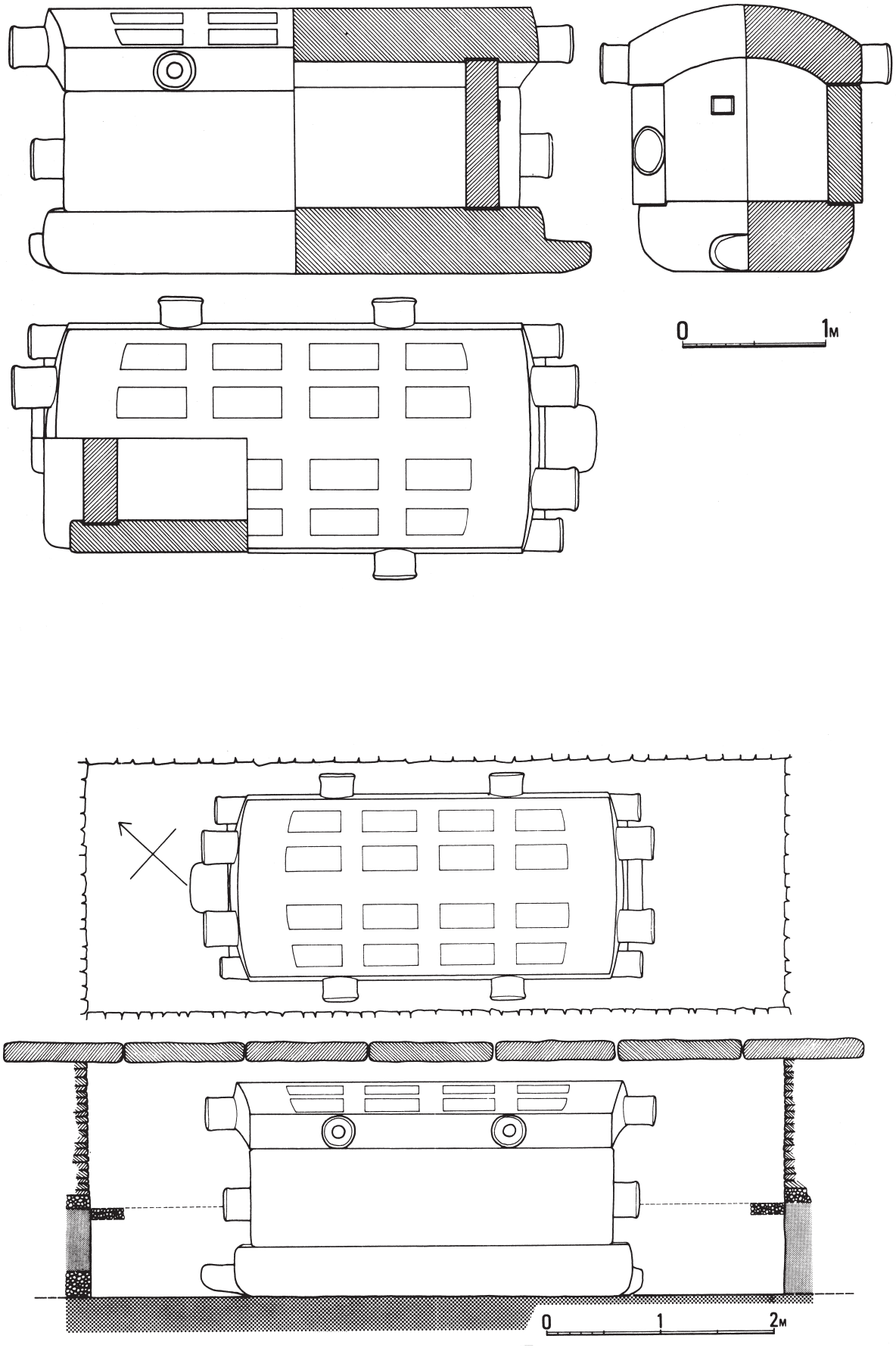


図 5-12　大阪府津堂城山古墳平面図（1/00）

図 5-13　大阪府誉田御廟山古墳平面図（1/6,000）

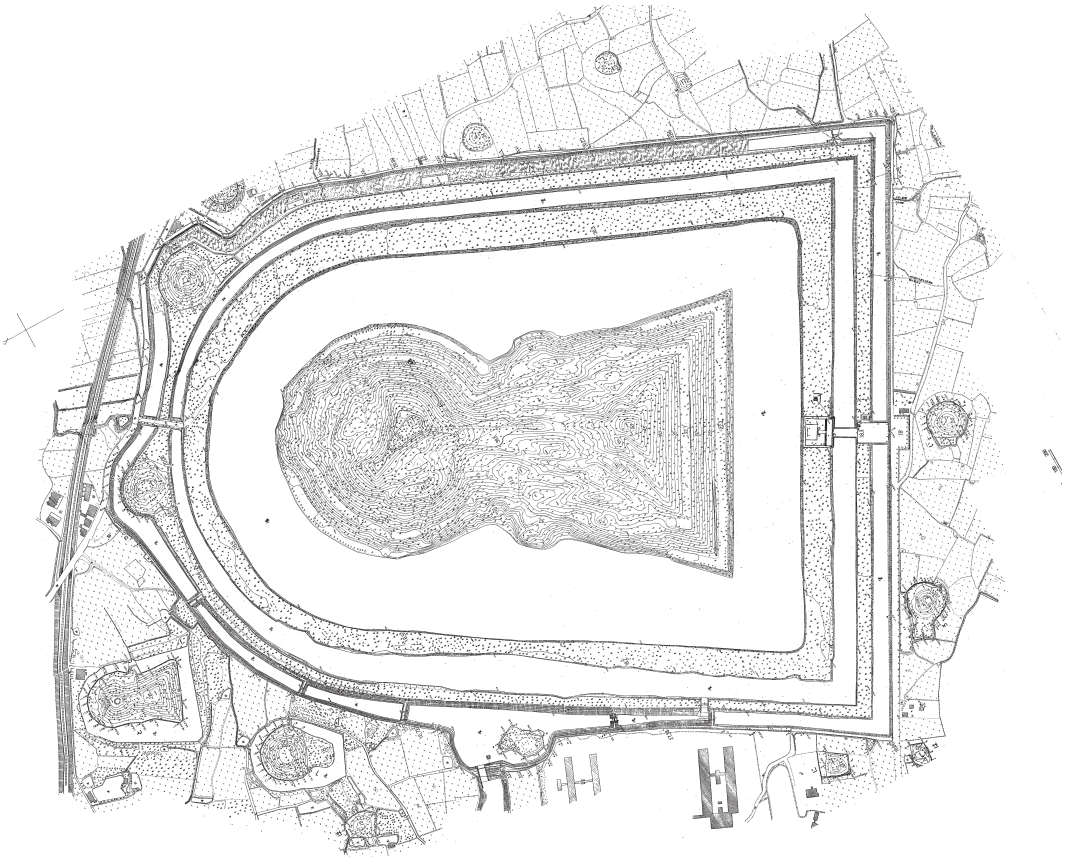


図 5-14　大阪府大山古墳平面図（1/8,000）

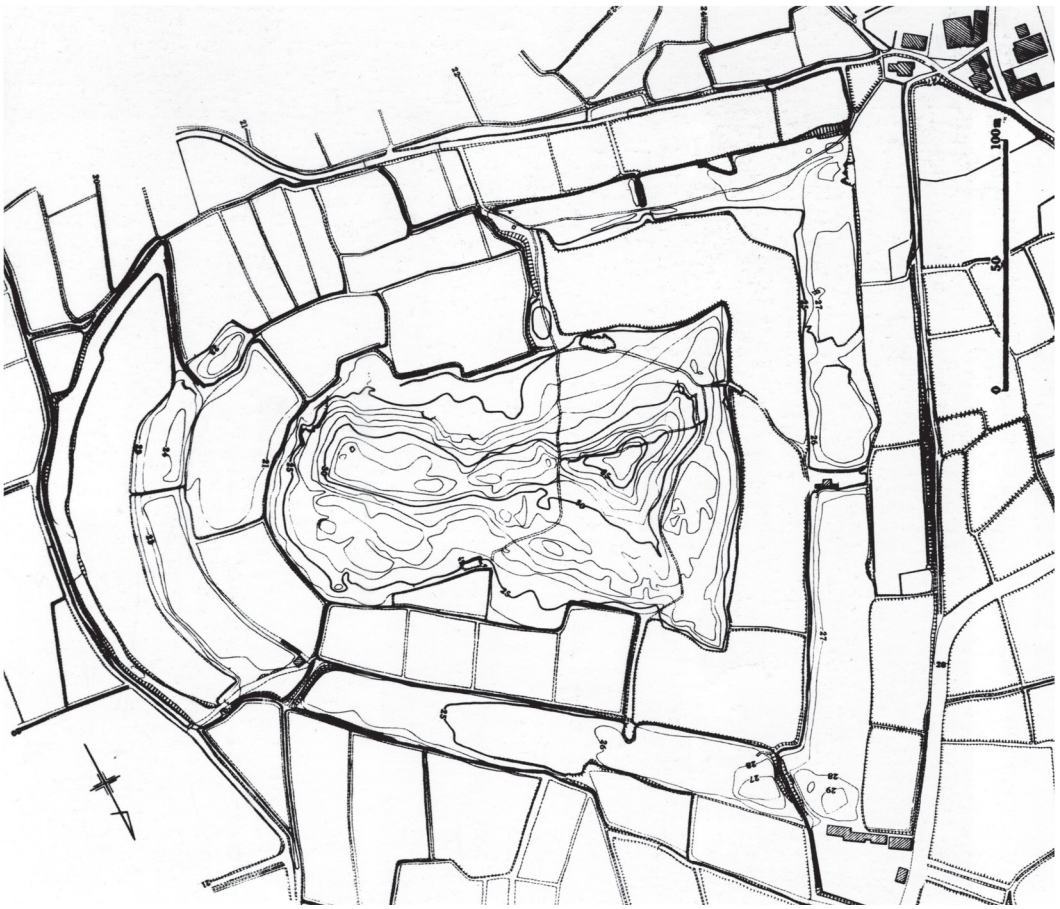


図 5-15　大阪府今城塚古墳平面図（1/3,000）

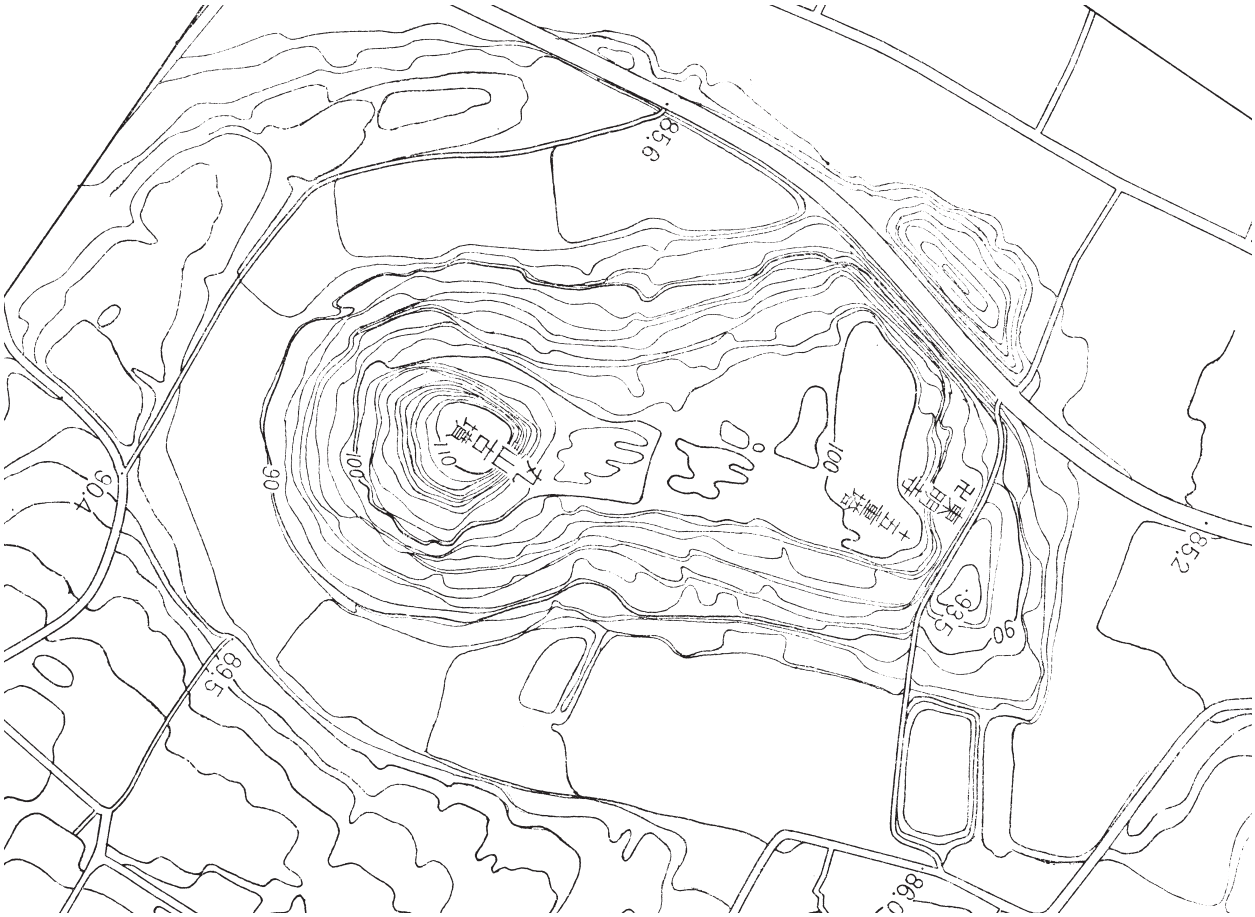


図 5-16　奈良県見瀬丸山古墳平面図（1/3,000）

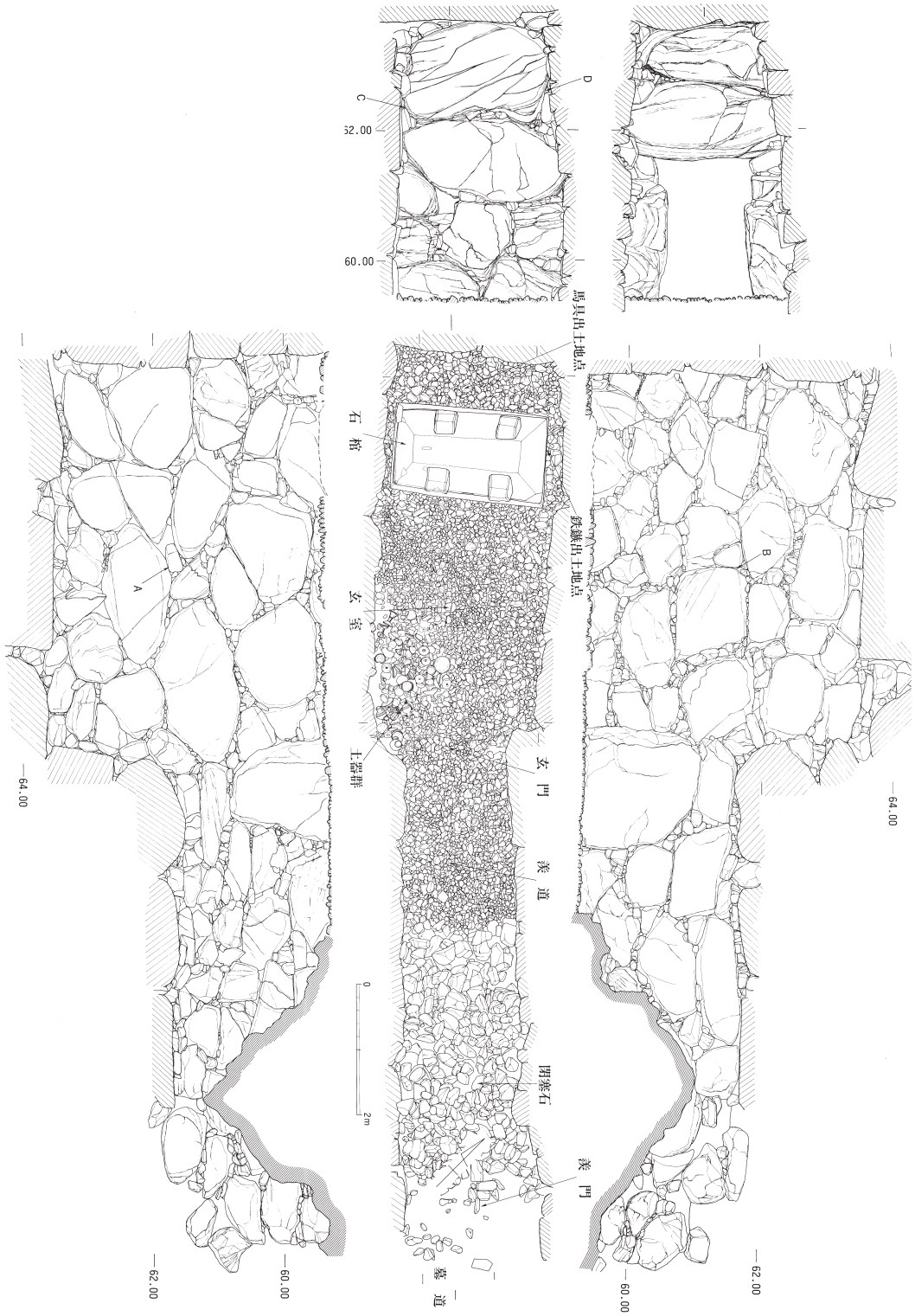


図 5-17　奈良県藤ノ木古墳石室展開図（1/100）